

佛教大系刊行會編纂

佛教大系

倶舍論頌疏第一

佛教大系刊行會藏版

目次

凡例

一 本書は。倶舍論頌疏廿九卷中大雲寺沙門圓暉述を本文とし。倶舍論釋頌疏義鈔六册京兆西明寺沙門慧暉述。及倶舍頌疏記十二册富春沙門遁麟記の末釋を會合せり。蓋し。倶舍論頌疏の末釋として。恐らく右二本の右に出づるものなきを以て此を採るのみ。

一 末釋の中。倶舍論釋頌疏義鈔を暉鈔。倶舍頌疏記を麟記なる略名を用ゐたり。

一 本書は。倶舍論頌疏の本文を三號活字とし。慧暉鈔等の末釋を五號活字とす。

一 本文の丁數は現行流布の寶永版冠註本に依り。末釋は單行版本に依る

一 本書に附せる讀假名は専ら時代の趨勢に鑑み。偏に讀者の便を謀り。本會の特有の編輯法。卽ち原著書の儘にして而も國譯せる如き方式に依れり。

一 本書使用の假名は。紙面の美觀を保持し。且つ徒らに紙幅の增大せんことを慮り。特に細書の活字を新鑄し。猶且つ本書特有の略字を用ゐたり。例せば

ト云フを ト云に　ゴトキを 如に　トキを 𪜊に
タマフを 玉に　トモを 𪜈に　ナリを 𬼀に
シテを 〆に　コトを ヿに

作るが如し

一 本書の校訂にありては曹洞宗大學藏版本を底本とし。此れに加ふるに古寫本數種を參照し遺漏なからしめんとし。末釋にありては殊

に細心の注意を以て。古寫本との校合に力め。文義に通じ易からしめんとせるも。未だ猶完からざる點勘なしとせず。自ら深く慚謝して措く能はざる所以なりとす。

京都六條一念精舍會心處にて

舟橋水哉識

大正七年七月一日

俱舍論頌疏解題

一　頌疏の製作

俱舍論頌疏は圓暉の著なり。圓暉は唐朝の人。傳明ならず。晉州の刺史賈曾の囑と。大聖善寺懷遠律師の勸誘とに依て製作せられたる事は。圓暉の自序に委しく記されたり。著成るの日賈曾亦序を寄す。其は頌疏の卷首に載せられたるが如し。元來俱舍論は世親菩薩の著なり。世親或は天親ともいひ。龍樹と共に印度に於ける二聖なりき。數多き著書の中に。俱舍論は說一切有部の敎義を批判的に記載したるもの也。初め俱舍論頌を製し。後此に長行を加へ。且つ破我品をも加へて。俱舍論といへる大部の著書となれり。筆力雄健。論議明確。最も趣味多き書の一として知らる。支那に在ては眞諦三藏先づ此を譯して二十二卷とし。次いで玄奘三藏此を改譯して三十卷とせり。外に西藏譯あり。されど行文平易ならず。閱卷に非常の努力を要するを以て。入門書の出づるを求むるの聲あり。圓暉此機に應じて本書を製す。亦妥當の企劃と謂つべきなり。所以ある哉。本書一度出でて忽ち宇內に流行し。諸種の註釋相繼ぎ。寧ろ本論研究を凌駕するに至れり。

頌疏は俱舍論の文句の註釋に非ずして。俱舍論の頌に簡單なる註釋を加へたるもの也。其の文たる甚だ平易にして親切に過ぐる觀あり。從つて重複の嫌あるを免れず。されど入門の書としては。先づ要を得たるものと謂ふ可きなり。若し更に忌憚なく此書を評せば。世親の眞意が本書に於て顯れざるを遺憾とす。世親は有部の敎理を其儘相承するものに非ず。世親の理長爲宗は本論に在て顯然たり。頌疏は主に此點

を示さずして。却て有部の教理を啓蒙的に示すに力めたり。されば倶舍論を骨ぬきにしたるが如き觀あるは。圓暉の爲めに深く之を惜むべきなり。

倶舍論は九品に分たれたるも。頌は八品に分ち。破我品を除く。曰く界。根。世間。業。隨眠。賢聖。智。定是なり。五言の頌にして六百行あり。序として七言三行の頌。又結として七言四行の頌あり。是れ卽ち倶舍論頌の本文なり。圓暉は此に註釋を加へたるを以て書名を頌疏と稱す。內容に至つては此處に詳記するの要なしと雖も。其の大要を言はば。界根二品は一切諸法論と因果論とにして。世間品以下三品は輪廻論。賢聖品以下は解脫論なり。又界根二品は總論にして世間品以下は各論なり。要するに有部に於ける轉迷開悟論を記載したるものと見ば可ならん。

頌疏の書名一定せず。冠註本及び寬永版は倶舍論頌釋疏。慶長版は倶舍論頌疏。古寫本の中には倶舍論頌疏又は單に倶舍頌疏とするもあれど。倶舍論頌疏とするを穩當と思はるるを以て。今は此名を用ひたり。又普通書名の下は卷第一。卷第二等とすれど。慶長版は此を論本第一。論本第二等とせり。古寫本も多く論本第一の文字を用ひ。慧暉の倶舍論釋頌疏義鈔。遁麟倶舍頌疏記も亦此の如し。今は此に從ふ。

二　頌疏の本文

刊行されたる頌疏の本文は。予の知れる範圍に於ては單行本五版。藏經本一版。合せて六版あり。本書は其第七版なるべし。藏經本は其新なるものにして。卍字續藏經中に編纂せらる。最も單行本の中。初の三版は本文のみ。後の二版は冠註を附す。冠註本は鳳譚の編著にして寶永五年に刊行せらる。明治二十三年曹洞宗大學藏版として再び此を刊行せり。かくて冠註本は二版となれり。單行本三版の中普通に流行

せるは。寛永七年に開版せられたるもの也。他の二版は。一は慶長版にして。他は元和頃の版なり。何れも木活版にして。現今珍書の一に數へらる。元和版と稱するは奥なきを以て。正確なる年代を證しがたきも。文字の形式より見て慶長に及ばず。又寛永に下らず。元和頃と判定したるもの也。此は多分叡山にて開版せられたるものにして。多く天台宗の古寺にて發見せらる。近くは粟田口の青蓮院此を珍藏す。次に慶長版は慶長十六年京都一條清和院にて刊行されたるもの。寛永版及び冠註本に比して往往文字の異同あり。刊本の頌疏としては恐らく此を最古とするものの如し。

次に古寫本として傳へらるるものは。果して其完本あるや否やを知らず。零本ながら名古屋市大須眞福寺には鎌倉室町諸時代のものを珍藏せり。又奈良東大寺圖書館にも數卷あり。其中頌疏卷第一の奥には大治元年七月十六日未時書了と記せり。此は頌疏古寫本中にて可なり古きものといふべし。其他奈良地方及び天台眞言の諸寺にて往往此を珍藏するあり。

終に頌疏の一部分のみを開版せるものを記さんに。此に三あり。其一は世間品首注考正五卷。神光の著にして。冠註を附せり。元祿十年開版。其二は略箋六卷。興福寺清慶の著にして。序と世間品とに冠註を附したるもの也。同じく元祿十年開版。其三は世間品科注五卷十冊。野山秀翁の著。寛文十二年開版。此は本文の間に註を挿入せるを以て純粹の本文とはなしがたき點あれど。本文を讀まする爲に出版されたるものなれば。今特に此處に之を記す事となしぬ。外に頌疏破我品二卷一冊。正保二年開版。此は頌疏に破我品なきより。後世補作されたるものか。著者不明。恐くは支那の書にはあらざるべし。卍字續藏經中に編纂されたるを以て。此には二版ある事となれり。

三頌疏の註釋

慧暉述。

一。義鈔六卷。

慧暉は唐朝の人。傳明ならず。次の麟記に比して量に於て短けれど。寧ろ簡潔に記されたる觀あり。現行本は慶安四年に開版せらる。古寫本としては東大寺圖書館に未完本四冊あり英憲の藏本なり。論本第十五の奥に。建暦元二年三月二十日午剋許書寫之了。執筆。隆俊とあり。中本奥には。慶長十六年實英加點の文字あり。但し元の字は衍歟。佛教大學圖書館には青蓮院本六冊あり。正保二年の寫なるも。上末奥には。寫本云。元和五曆己未十一月十五夜。於南都東大寺北林院書寫之了。三井勸學院法印實雄とありて。元和本を寫得したる者なり。私所持の刊本。上末奥に。元和五曆己未十一月十五夜。於南都東大寺北林院書寫之了。右筆。奥州二本松杉田光恩寺十禪房呑海。俗年三十九形見云云。右筆。今は勸學院。號法印實雄云云と朱書するより見れば。元和本の筆者は呑海にして。實雄は正保本の筆者らしく見ゆ。されば佛教大學本の中に實雄の文字なくして單に十禪房と記せるもあり。又私所持の刊本上本奥に。元和五季己未十月廿一日當秀運法印圓寂日遂寫功了。右筆奥州二本松之住侶。十禪房呑海。生年三十八歲。於南都東大寺北林院書之。寫本前英憲。今清冷院實英之御本なりとあるより見れば。元和本の原本は前記の實英加點本。卽英憲本なることを知る。又刊本奥には。此本者南都。於東大寺大喜院塔中以清凉院本校合幷點加畢とあれば。此も實英本を用ひたるものにして。何れも同系統なりし事は。偶然とはいへ頗る奇なり。

二。記二十九卷十二冊。　遁麟述。

遁麟は唐朝の人。傳明ならず。現行本には開版年月を記さざれど。暉鈔と相前後して出版されたるものの如し。古寫本の現存するや否やを知らず。私所持の刊本は。廣隆本長傳。古寫本を以て挍合したるもの。元祿年間の複寫本なれば。何れ古寫本も現存するならん。麟記に關するものにしては著者不明の翼考一卷あり。外に廣益書籍目錄には首書遁麟十二卷を載すも。果して現存するや否やを知らず。

三。序記一卷。　　　　　　　　　　　　　　　　　　法　盈　述。

法盈も暉。麟二師と同時代の人なり。道空の跋には。一說に圓暉の弟子とあるも。果して眞なるや否やを知らず。本書は單に序に註釋を施したるもの也。元祿十六年開版。

支那の著書として現存するものは。僅に以上三部あるのみ。新書籍目錄には虛受の序鈔一卷を載せたり。されど現存するや否や明ならず。

四。正文一卷。　　　　　　　　　　　　　　　　　　源　信　述。

叡山の源信僧都。頌疏の誤りを正したるもの。慶安四年開版。靑蓮院には康治二年の古寫本あり。最近大日本佛敎全書中に編入せられたり。

五。私九卷。　　　　　　　　　　　　　　　　　　　慧　範　述。

慧範は水戶六藏寺の學僧にして。六波羅の慧範とは同名異人なり。明應年間の著作。何れ全部ありしものの如きも。現存するもの確に九卷あり。其中世間品五卷は心車鈔として萬治三年開版せられ。賢聖品私四卷は聖護院は傳へらる。

六。愚聞記　三十二卷二十冊。　　　　　　　　　　　尊契述兼能及び宥尊編

尊契に三井寺の學僧として名あり。尊契の講義を聞きて座下に衆能之を記し。後宥尊の編纂したるもの故に本文中に宥尊私云の文字あり。慶安四年開版。刊本には勸談愚聞記とありて。著者及び編者の名を記さず。他に二箇の刊本あり。何れも慶安版以前のものにして。而も木活版なり。其一は寛永二年の開版にして衆能の直筆本を以て刊行すと記せり。他は刊行年月を記さずと雖も。同じく寛永頃に開版せられたるもの也。何れも十三冊り。

七。北林鈔二十八卷。　尊實述。

尊實も三井寺の學僧として名あり。刊本には尊實御談とあり。此も尊實の講義を誰人か書き付けたもの也。定珍の記と稱するもの。其れ或は然らん歟。承應二年開版刊本は卷一餘及び卷四の二卷を缺く。外に世間品五卷のみ開版せるあり。刊行年月を記さず。或は承應以前なるか。私所持の刊行本には。慶安五年於紀陽金剛峰寺求之と記せり。

八。科一卷。　慧晃述。

慧晃は雙丘法金剛院の學僧にして。枳橘易土集の著者なり。元祿五年開版。

九。條箇二卷一冊。　長傳述。

太秦廣隆寺の學僧なり。貞享元年開版。

一〇。序補註一卷。　顯慧述。

顯慧は淨土宗西山派の人。序に註釋を施したるもの。元祿九年頃開版。

一一。序纂註二卷一冊。　實養述。

陸州の人。元祿十年開版。

一二。序新鈔一卷。　鳳潭述。
元祿十六年開版。冠註の卷首と同本なり。
前記の略箋等二三の書は此處に再記する事を省略す。書籍目錄に依れば。他に十部許りあれど。現存するや否やを知らず。已上は註釋の刊本を記したるもの也。寫本に至ては數多あり。　一一此を記載するを得ずと雖も。今其主なるもの十餘部のみを擧げん哉。
一三。禪談鈔一卷。　圓元述。
三井續燈記に依るに、本書は五卷ありと。今其一卷のみを存す。眞宗大谷大學に珍藏せり。
一四。大雲鈔五卷。　秉範述。
秉範は三井寺の學僧なり。今世間品鈔のみを靑蓮院に珍藏せり。
一五。聞書四卷。　增忠述。
增忠は明應頃の人。賢聖品の講義なり。坂本西敎寺に珍藏せり。
一六。鈔三十二卷。　英憲述。
東大寺の學僧として名あり。蓋し寫本として存するものの中の白眉たるべし。東大寺及び佛敎大學に珍藏するものは何れも勝れたる古寫本なり。坂本西敎寺にもあり。
一七。私六卷。　長善述。
智積院の學僧なり。序及び世間品を講述せるもの也。序の講述は一名緣起題額序と稱し。世間品の講述は直談鈔と稱せらる。東京帝國大學には正保四年寫の直談鈔を珍藏し。私所持のものは慶安四年寫の緣

起題額序と世間品私四巻なり。

一八。科文一卷。 光宥述。

野山の學僧なり。

一九。講輯一卷三冊。 道空述。

五智山の學僧なり。

二〇。講贅二卷。 基辨述。

藥師寺の學僧なり。

二一。講資十六卷。 慧林述。

但し尾缺く。

二二。鑽仰九卷。 深勵述。

眞宗大谷派の人。香月院と號す。

二三。講要三卷。 著者不明。

已上其主なるものを擧げたり。されど倶舍論の註釋に比して甚だ僅少なるを免れず。倶舍の研究に從事せんと欲する者は。宜しく進んで倶舍本論を精讀せられん事を望む。其は頌疏に依て倶舍の要領を得るものに非ざるを以て也。

阿毘達磨俱舍論略釋記

正議大夫持節諸軍使晉州刺史賈曾撰

昔釋迦去代過九百年。天親菩薩纂論千部。弘宣蓋遠。發起良多。至於標揭義門訓剖名相。文約事廣。詞微理明。則此對法藏論尤稱工也。雖源出婆沙本詮論藏。若能究根界之旨。窮世聖之源。辯因果於眞俗。祛執滯於人我。乃十二部經思已過半。八萬法門由而可知。豈唯但趣小乘專攻說有而已。大唐三藏玄奘法師。躬得梵本再譯眞文。其徒大乘光法師。親承密誨初傳正釋。既盡善矣。又何加焉。然論岐則說繁。義富則辭黷。學徒始習難以兼功。有圓暉上人者。慧炬熾然。戒珠融朗。後來之美先達所印。幼好斯文長而獨得。嘗因暇日見爲討論。余時迫俗塵倦於周覽。乃求略釋先辯頌文。良願不違欣然默受。舊德聞已深相激讚。居諸未幾删削遽成。以簡則易知。有功則可久。雖允

在家之請乃爲有學之資。賢人之業其不泯矣。上人自陳作意已題別序。以余本緣所起欲重宣揚。嘉旨再三故疏此記。俾夫後身廣慧遙證通方。過去衆賢永慚偏識云爾。

倶舍論頌疏

中大雲寺沙門圓暉述

義鈔六卷　京兆西明寺沙門慧暉述

記二十九卷　富春沙門遁麟述

【暉鈔】闕之

【暉鈔】卷上本右初　倶舍論釋頌疏義鈔卷上本

京兆西明寺沙門慧暉述

對法藏者。衆論之宏綱。諸經之樞要。六足八蘊。尋而可知。九部三科。因而得解。大唐三藏再譯眞宗。重加刊政。門人光法師親傳深妙之辭。密受立破之旨。創造文疏。義頗煩多。涇渭混流。玉石相雜。後學之輩。將何所歸。有寶法師者。道亞生知。才當間出。再爲剖拆。妙無以加。然此頌疏多依光釋。簡易之功。懸諸日月。取捨之理。或有異同。今造鈔文良在於此。略寶公新疏。採政理微言。對會兩家彌縫其闕。余雖不敏。志願讚揚。又見近來著鈔者衆。並廣引發智婆沙以爲訓釋。文繁義略。難可依憑。棄本尋彼。適足自亂。失疏之意。迷後學心。今之鈔文頗亦不取。通才博義。幸垂悉焉云爾。

【麟記】闕之。

倶舍論頌疏　論本第一

中大雲寺沙門圓暉述

粤獨天下之幽者、其惟赫日乎。鼓萬物而成者、其惟飄風乎。匡大敎而濟時者、其惟菩薩乎。爰有大士厥號世親。弘道於五天。製論於千部。光我師之正躅、解外道之邪紛。功無得而詳也。千部之內。倶舍論是其一焉。斯乃包括六足、呑納八蘊。義雖諸部宗、唯以正。故得西域學徒號爲聰明論也。至如七支無表之說作傳律之丹青。三科蘊界之談與弘經爲潤色。光光佛日寔在茲焉。（冠註論本第一七右）

【麟記】論本第一 初右　　倶舍頌疏記　論本第一　　富春沙門遁麟述

將釋序文。大分爲二。初至寔在茲焉。明菩薩出世。論興之益。二有正議大夫已下。明道俗興請製疏之由。前文有二。初總歎千部。次別彰此論。初言粤者。語辭也。卽發語之端。言赫者。盛貌也。顯明之極。言飄風者。南風也。故詩言。飄風自南吹彼棘心。又爾雅云。南謂飄風。東謂谷風。西謂泰風。北謂涼風。與詩同也。言匡大敎而濟時者。匡正也。持也。謂菩薩匡持佛敎以濟於時機也。此上義者由日有破闇之能。風有成物之用。菩薩有濟世之德故。取之爲類也。言爰者。韋元切。於也。

爲也。厥者。其也。世親者。梵云筏蘇盤豆。筏蘇此云世盤豆此云親謂印度有天。俗號世親。以世人親近供養故。故以名焉。菩薩父母從彼乞求。因生菩薩。從所生處以立其名。若言天親應言提婆盤豆。既不名提婆。明知天親者謬矣。又西域記云。筏蘇畔度。唐言世親舊云婆藪盤豆譯言天親者訛也。言弘道五天者。謂弘揚導引五印度境也。故西域記云。舊云身毒天竺等。今從正音宜云印度。印度此云月。月有千名。此名一稱。謂諸衆生輪迴不息。無明長夜無有間晨。其猶白日既隱霄燭斯繼。雖有星光之照。豈如朗月之明。良以其土聖賢繼軌導凡御物。如月照臨。由是謂之印度。五印度境周九萬餘里。三邊大海。北背雪山。北廣南狹。形如半月。劃野區分七十餘國。時特暑熱。地多泉濕。言製論千部者。案西域記云。菩薩初習小乘作小乘論。後因禮覲無著。無著乃命弟子迎候。至伽藍中。止戶牖外。夜分之後聞誦十地經。內覩光明感悟追悔。乃從無著諮受大乘。於是研精覃思製大乘論。凡百餘部。並盛宣行。有言。製大小乘論各五百部。應撿正文。言光我師之正躅者。書云。高步曰躅。即光顯大師之敎跡也。言解外道之邪紛者。即由製論。能解外道異執之紛諍也。已上總嘆千部。自下別彰此論。言包括六足者。謂由此論包藏六足論之文義也。六足之名疏下自述。言八蘊者。婆沙云。謂雜結智業種根定見也。謂於佛說諸論道之中。安立章門。標擧略頌。造別納息。判總蘊名。言雜蘊者。謂集種種異相論道判爲雜蘊。結蘊集結論道判爲結蘊。集智論道判爲智蘊。集業論道判爲業蘊。集大種論道判爲大種蘊。根定見等准說可知。言義雖諸部宗唯以正者。論主情無偏黨。學該異部。凡厥正義咸以遵崇。故下論云。如無有過應許爲宗。言七支無表至丹青者。至如業品廣明無表備顯戒宗。光飾傳律之者。有若丹青圖於畫矣。言三科蘊界至潤色者。又界品中備陳三科之義。究盡法相根源。

復爲弘經者之潤色也。

有正議大夫晉州刺史賈曾。惟公特稟異氣別授精靈。文蓋雲間聲雄日下。器宇冲邈容止清間蓋縉紳龜鏡之士也。公前任禮部侍郎。省司多暇歸心正法。乃相命談義。遂請造略釋。有大聖善寺懷遠律師者。清以戒珠涼以風儀。既勤勤於法門。亦孜孜以勸誘。志存兼濟。故有請焉在。（冠註論本第一右八）

【暉鈔】　闕之

【麟記】論本第一右三　自下請製述文分二。初明道俗與請。次疏主自陳述作意。前文復二。初俗請。次僧請。言特稟異氣者。謂挺生之人。別稟清爽之氣。異於常流也。言文蓋雲間聲雄日下者。晉書云。陸雲字士龍。吳群人也。荀鳴鶴潁川人也。時士龍在司空張華家坐。鳴鶴後至坐上。諸賓素聞鶴名皆爲之起。鳴鶴曰。清風至飛塵颺。士龍曰。衆鳥集鳳凰翔。既而座定。荀陸二人叙溫涼。陸曰。雲間陸士龍。荀曰。日下荀鳴鶴。時人謂之佳對。今言賈曾文高於士龍聲雄於鳴鶴也。言器宇冲邈者。冲和也。深也。邈遠也。言縉紳龜鏡之士者。按王肅注家語云。縉插笏也。紳大帶也。縉有從扌。今此從糸。斯乃朝士之服也。龜鏡者。龜之靈也知先兆之吉凶。鏡之明也鑒物像之好醜。言其佩縉紳之服。類龜鏡之明故也。次僧請。言孜孜以勸誘者。孜孜急貌也。故書云。孜孜不怠也。謂常勸誘學人進業。非謂勸誘疏

主造疏。言志存兼濟者。謂欲利他故。以申勸請。故易云。窮則獨善一身。達則兼濟天下。

圓暉多幸。遭茲像化。咀以眞詮狎以蘭室。喜朝聞於夕殞荷嚴命以斯臨。課以庸虚聊爲頌釋。刪其枝葉採以精華。文於廣本有繁略叙闕節。義於經律有要必盡根源。頌則再牒而方釋。論乃有引而具注。木石以銷。質而不文也。冀味道君子義學精人。披之而不惑。尋之而易悟。其猶執鸞鏡而鑒像。持龍泉以斷物。蓋述之志矣。愚見不敏何必當乎。庶通鑑之士詳而正焉。（冠註論本第一左八）

【暉鈔】　已上闕之。

【麟記】論本第一左三　自下疏主陳述作意。言咀以眞詮者。咀慈呂反嚼也。即談咀眞教也。言狎以蘭室者。謂與賈曾懷遠等良友相狎。如狎芝蘭之室。故莊子云。與惡人交。如遊鮑肆。久而益臭。與善人交。如遊蘭室。久而益香。言喜朝聞於夕殞者。書云。朝聞道夕死可矣。然此意者。既咀眞詮。復狎蘭室。貴聞正道。雖夕死而何恨哉。言刪其枝葉至盡根源者。謂枝葉繁詞則略而不述。若精華要典必究盡根源。言頌則再牒而方釋者。謂初章首且總標擧。次至長文方別牒釋。故爲再也。言木石以銷質不文者。謂直指木石。以銷其義。而不事於文華也。故書云。大文則史。大質則野。

文質彬彬然後君子。言執鸞鏡而鑒像者。如鏡能鑒衆像。此疏顯義亦然。言鸞鏡者。昔有人見雙鸞舞。持來獻王。在路一死。至王不舞。乃問智臣。智臣曰。鸞得雙方舞。因鏡照之。見影成雙。鸞卽便舞。因爲名焉。言持龍泉以斷物者。龍泉卽寶劍之名也。故吳越春秋云。楚王召風湖子而告之曰。寡人聞吳有干將。越有歐治。寡人欲因子請此二人作劍可乎。風湖子乃往見二子作之。一曰龍泉。二曰太阿。今此剖割義理。如劍之斷物也。或言。慧斷煩惱如劍之斷物也。非此中意。言愚見不敏者。書云。參不敏。何足以知之。不敏由不達也。今此謙言。愚情見解不能明達。亦何能當於理哉。

將啓論端六門分別。第一明論緣起。二釋論宗旨。三明藏所攝。四翻譯不同。五略解品題。六廣釋文義。初明論緣起者有二。一明本緣起。二明別造意。(冠註論本第一右十)

【暉鈔】卷上本初左　六門次第者。初明論緣起。徵世親造論之意作斷惑發慧之緣。一百年外三百年內。卽有二十部小乘。此論既明小乘。宗歸何部。所以第二明論宗旨。二十部小乘各自有三藏。互不相信。此論有部三藏中何藏攝。故第三明藏攝。教法至此八百餘年。此論翻譯在何時代。故第四明譯論時年。第五釋題對法藏名。第六分文釋義。

【麟記】論本第一左四　次解六門義。然此六門非無由藉。所以先明論緣起者。將欲釋義。莫知論

敎之所興。故須第一明論緣起。緣起雖知未詳宗部。故次第二明論宗旨。雖達宗未曉藏敎。故次第三明藏所攝。雖明所攝須知一論兩時翻譯。故次第四明翻譯所由。宗源既知方可解釋。解釋之來先須辯識題目。故有第五略解品題。門目已明次當開闡。故有第六廣釋文義。前門又二。初門雖顯本起之由。又須明其造論之意。故分二門也。

本緣起者。自迦葉遁形於鷄足。末田乞池於龍宮。雖大義少乖而微言尚有。洎乎尊者鞠多道不繼於三聖。摩訶提婆亂眞言於五緣。一部分宗。諍興於摩揭提國。五百羅漢飛來於迦濕彌羅。一切有宗興茲國矣。

（冠註論本第一右十一）

【暉鈔】卷上本左初　初本緣起有四。一五師相傳。卽七日之外一百年内也。二二部分宗。一百年外三百年内。三再結集擧意。四百年初事。四此論得之因由。九百年外事。准此小乘四階成佛。第三階中。准觀佛經。佛四月八日生及成道。阿含經意。二月八日生及成道。良以受歲時日不同。西方卽以建子爲正。此國先時亦建子爲正。今卽建寅爲正。若建子數之卽四月八日。若建寅數之卽二月八日。由翻譯人擧西方日月不定。所以有二月八日四月八日別。准善見論及悲華經並云。三十五成道。四十年住世。八十入涅槃。菩提留支頌云。八年作嬰兒。七年作童子。四年學五明。十年受五欲。八十入涅槃。捨第五分壽。婆沙一說捨第三分壽。廣如下釋。佛涅槃時相廣如智度論及集法經說。佛於倶尸那城入涅槃。迦葉不在

會。後知佛入滅欲結集三藏。先於一堂畫如來八相成道。及置藥糟。然後引闍王巡。乃至最後見佛入滅處。悶絕而死。乃至却蘇。方與闍王至入滅處。迦葉禮棺。如來現足表以法付迦葉。又准般泥洹經說。比丘請佛。住世一劫。若過一劫。佛告諸比丘。莫作是說。當知未來正法付大迦葉。以正與汝等作歸依處。乃至六欲諸天禮迦葉足。令建立佛法。得千無學石室內結集。爲上座部。石室外衆多凡聖爲大衆部。佛滅度後七日外卽有二部之名。卽由迦葉等五人住持一味不分。闍王先有期啓。若入滅時願使我見。迦葉厭世。以法付阿難。辭王入滅。王夢屋梁折。王覺。守門人告。卽往竹園。問阿難迦葉所在。於是闍王共阿難卽往鷄足山。種種供養了。欲以香薪焚燒。阿難具告迦葉先有願等。迦葉入鷄足山。一願入山了。三峰掩閉。二闍王阿難來山峰卽開。三留此身至彌勒下生。然後入滅。阿難後見比丘錯誦法句。若人生百歲。不見水老涸。不如生一日而得覩見之。阿難正第二句。云不知生滅法。正第四句云而得解了之。後見准前誦。觀世間無人能正。便卽辭王。王夢見傘蓋莖折。阿難北至恒河水。南北上下四方俱請。便於恒水之中化爲金地。其時雪山有五百仙人來投阿難求度。於中二人。一名末田底迦。舊云末田地。此云金地。以化水爲金地得度。一名尚那和修。此云胎衣。付此兩人方入滅也。北印度境本是龍池。如來有記。我滅後一百年內有末田底迦。廣行我法。末田見佛懸記。卽於彼國一仙入定。光明殊異。龍王出問。仁者有何所要。乃至展身遍滿池中。唯西北角方周百里。留爲龍池。餘並爲寺。於此處行佛法也。尊者阿難以法付屬尚那和修。而告之曰。世尊昔遊摩突羅國。顧命我言。此國當有長者。名鞠多。第三子於佛法有力。後第三子名鄔波鞠多。方便勸化得無學果。以法付此鞠多。鞠多後度夫妻二人。雙得無學。折一四寸籌。籌滿石室。石

室方周六丈。度人既多。世人號爲無相好佛。後有天魔所嬈。乃至令現如來之身。鞠多不覺作禮。有五百弟子。緣在商那與己無緣。唯有吾師乃能化度。便至心念商那。商那以神力從罽賓國來坐鞠多床。五百人卽告本師。師云。若非吾師誰敢坐吾床。商那以手指空。空中有五百道香乳。皆是定相。一一爲說名目。方得道果。疏云大義少乖。卽阿難見比丘錯誦法句。鞠多卽第五師。不繼於三聖。卽迦葉阿難商那和修。除末田底迦。以偏方化。又與商那一時付法。故言三聖。摩訶云大。提婆云天。摩伽陀國東南之上有末土羅國。商主有子名大天。商主遠行。子遂染母。後父還家。恐惡事彰。共母殺父。將母投波吒釐城。還屬摩伽陀國。遂逢本國供養無學。恐傳醜事。又方便殺此無學。母後有私。又殺其母。既造三逆。心遂恐怖入鷄園寺。逢僧誦經偈。云。若人造重罪修善必滅除。彼能照世間。如明出雲翳。心甚歡喜便求出家。其僧不委其根性卽度。出家未久誦持十二分敎。出入王宮無不歸仰。因此卽有五事不同。告諸門人。我是羅漢。一曰。不正思惟夢失不淨。令弟子洗衣。白言。我聞無學諸漏已盡。彼卽告言。漏有二種。一者煩惱。無學已無。二者不淨。無學猶有。二欲令弟子歡喜。矯設記別。弟子得四沙門果。弟子白言。師記別我等得二三果。應自有證知。如何我等都不自知。彼答言。無知有二。一染汙無知。汝今已斷。二不染無知。汝今未斷。三又白師言。我聞聖者已斷疑惑。我於諦實猶有疑心。彼卽告言。疑有其二。一煩惱性疑。汝已斷之。二處非處疑。無學猶有。四云。弟子披讀經典。羅漢有慧眼。於自解脫能自證知。彼卽告言。有阿羅漢不能自知但由他人。如舍利弗目連。若未記彼自不知。況不由他人而能自了。五大天於夜思惟。惑亂聖敎。憂惱所逼。不覺唱言苦哉。弟子卽問。答云。我呼聖道以爲苦哉。集上五事乃作

頌云。餘所誘無知猶預他令入。道因聲故起。是名眞佛教。寺中布薩大天誦戒。既昇座已。先誦五事。以告餘人。聖衆翻改第四句云。是名非佛教。准宗輪論。于時四衆一夜不和。一龍象衆。一威德勢巨當。二懦悷難調。恃國王大臣之力陵侮聖衆。卽大天之流。二邊鄙衆。心遊理外名邊。無德可稱名鄙。卽大天之門人。三多聞衆。妙達幽微廣閑三藏。四大德衆。契理通神道高無上。卽是聖衆。因此四衆共議。大天五事不同。鬪諍紛然。至明不息。城中士庶就寺和衆。衆皆不從。時無憂王自往和衆。各執己頌。孰是孰非。王言。我等今者當寄何朋。大天曰。王若欲滅諍依多人語。卽行黑白二籌。邪徒者衆多附大天。王遂依多。事畢還宮。爾時鷄園諍猶未息。時諸賢聖知衆乖違便捨鷄園欲往他處。諸臣聞已遂速白王。王聞嗔彼。勅令引至殑伽河邊。載以破船中流墜溺。卽驗斯輩是聖是凡。欲沒溺時各起神通。猶如鴈行。陵空而去。未得通者亦被接將。作種種形同捨鷄園。悉皆飛向西北之上迦濕彌羅。王見悔過。就彼造寺數百餘所。卽以所變之形以立名號。於後大天出遊城邑。有占相者私竊記之。今此釋子却後七日定當命終。弟子聞之卽具告師。大天曰。自吾知久矣。卽遣弟子遍告士庶。我七日外定取涅槃。王等聞無不傷歎。至七日滿彼遂命終。共辨香薪而焚葬之。種種方計火不能燒。有占相者謂衆人曰。此鄙下人。不消勝物。宜以狗糞灑之。便用其言。火便遂發。須臾焚蕩便成灰燼。暴風卒起飄散無遺。此卽大天乖諍之由。廣如婆沙九十九說。諍興摩竭提國者。亦云摩伽陀國。四違陀中說。此云無毒害。舊云置甘露處。就義亦得。此卽諸天及阿索洛。往昔之時。愛着心重爲毒所害壽命短促。梵王念之以龍爲繩。以山爲鑽。鑽於乳海。于時衆生業力海變成乳。得甘露置在此國。除諸毒害因得長壽。故以立名。

【麟記】論本第一五右　解前門中大分爲三。初至興茲國已來。總明一切有宗本興之處。二從佛涅槃已
下至不令散出。別明婆沙論起源由。三然世親尊者已下。正顯此論因起。前門又二。初至徵言尚在。明
上聖宣持未有乖諍眞教猶一。二洎乎尊者已下。顯次聖弘化情見殊途致分異部。初言迦葉遁形於
雞足者。梵云迦葉波陀。唐云飲光。上古有仙。身光熾盛。飲蔽餘輝。飲光尊者卽彼之種族。從姓得名。遁謂
隱遁。按付法傳第一云。迦葉入願智三昧。觀所集法藏無闕少已。便作是念。我年朽邁不可依怙。恒
爲諸苦之所惱害。誰有智者當樂此身。我今宜可入般涅槃。便辭闍王。遂入雞足。於草敷上加趺而
坐。作願言。我今此身着佛所與糞掃之衣。自持己鉢久住不壞。乃經五十七俱胝。六十百千歲。慈氏
如來出現於世時。施作佛事。使諸弟子皆見我身而生厭惡。復作是念。阿闍世王若不見我。沸血必
當從面出命不濟。若使彼王與阿難來山。當爲開令其得入。若還去者。當復還合。便捨
命行。應時大地六種震動。釋提桓因共諸天衆。以曼陀羅華天諸末香供養。阿闍世王於睡臥中夢屋
梁折。表法棟梁折也　尋便驚覺心生惶怖。門人告皇云云。王聞悲歎良久。卽往竹林園禮問阿難。既知
所詣。俱向鷄足。王既到已山自開闢。迦葉在中。全身曼陀羅華以覆其上。王既見已發聲號哭。乃至
欲以香木而闍毘之。阿難報言。尊者以定持身待於彌勒。不可得燒。彌勒出時。當將徒衆九十六
億。至此山中見於迦葉。時彌勒衆皆作是念。釋迦如來弟子身形卑陋。若此彼佛亦當與彼無異。於
是迦葉踊身虛空。作十八變。變爲大形充滿世界。時彌勒佛卽就迦葉取僧伽梨。是時大衆見其神力
除憍慢心。成阿羅漢。王供養已還歸本國。時鷄足山還合如初。廣如彼傳。問。迦葉爲入涅槃。爲
入滅定。答。准諸經論。多言入涅槃。不見入滅定。問。若入涅槃。云何留身。得待彌勒能有

變化。答。是留化身。若准此論願力所持云云。然章但敍迦葉末田。意取鷄足龍宮。爲文故爾。若准末五師傳持次第。迦葉付法於阿難。阿難付商那和修及末田地。二聖緣廣。疏既不明。今亦不敍。言末田乞池於龍宮者。梵云末田底迦。此云金地。西域記云。昔佛世尊自鄔馱那國。降惡神已還中國。乘空當此國上。告阿難曰。我涅槃後有末田底迦阿羅漢者。當於此地建國安人弘揚佛法。如來寂滅之後第五十年。阿難弟子末田底迦。聞佛懸記心自慶悅。便來至此。於大山嶺宴坐林中。現大神變。龍見深信。請資所欲。阿羅漢曰。願於此池惠以容膝。龍王於是縮水奉施。羅漢神通廣身。龍王縱力縮水。池空水盡。龍翻乞池。末田乃於西北爲留一池。周百餘里。自餘支屬別居小池。龍王曰。池已總施。願恒受供。末田曰。我今不久無餘涅槃。詎雖欲受請其可得乎。龍王重請五百羅漢常受我供。乃至法盡。法盡之後還取此國以爲居池。末田底迦從其所請。時既得池。運大神力立五百伽藍。於諸異國買鬻賤人以充役使。以供僧衆。末田底迦入寂滅後。彼諸賤人自立君長。隣境諸國鄙其賤種莫與交親。謂之訖利多。唐言買得 今時泉水已多流溢。即迦濕彌羅國是。此云買名國。舊云罽賓訛也。居北印度之境也。周七千餘里。四境負山。山極嶮峻。雖有門徑而復隘狹。自古隣敵無能攻伐。國大城都西臨大河。南北十二三里。東西四五里。宜稼穡。多花菓。出龍種馬及鬱金香火珠藥草。氣序寒勁。多雪少風。服毛褐衣白氎。土俗輕薄。人性懦弱。好學多聞。邪正兼信。伽藍百餘所。僧徒五千人。言雖大義少乖而微言尚在者。謂此時見解雖復深淺不同。而未分成異部。故曰微言尚在。故家語云。夫子既沒而微言絕。七十二士喪而大義乖。即斯意也。有云。佛記未來初分二部。謂界外萬人結集爲大衆部。界內迦葉等五百人結集爲上座部。教分兩部名大義少乖。情見不異名微言在。此解不順章意。次第二乖諍分

部者。初明毱多道劣。次明提婆諍興。言毱多至三聖者。梵名優婆毱多。或名鄔波鞠多。唐言近護。或名近藏。育王經第四云。佛在摩突羅國。告阿難言。我百年後。此國當有鞠多長者之子。名優婆鞠多。教授禪法。弟子之中最爲第一。雖無相好。化度如我。我涅槃後大作佛事。又付法傳云。如是化度無量衆生。悉皆獲得阿羅漢果。其得果者。人下一籌。籌長四寸。滿一石室。室高丈六。縱廣亦爾。准西域記。夫妻倶得第四果者方下一籌。於是名稱滿閻浮提。世皆號爲無相好佛。化縁已訖。便自思惟。涅槃時至宜應滅度。告諸大衆。却後七日我當涅槃。爾時即集十萬羅漢及諸學人。淨持戒者不可稱數。諸優婆塞無量百千。尊者於是飛昇虛空現十八變。入於涅槃。以室中籌而用耶旬。十萬羅漢亦入涅槃。人天悲泣。各將舍利起塔供養云云。問。既弘化如是。云何言道不繼三聖耶。答。此有二解。一云。雖所化生無量。而自道德不及前聖。即如和修問定不識。及詣羅漢尼房傾油等事。二云。先聖所化弟子情無異執。教不分部。毱多有五百弟子。各執異見不能楷准。遂分五典。故爲道劣。然詳章意欲述教興之由故。以第二解爲勝。問。五師傳持毱多以前總有四聖。今何言三。答。取捨不同略爲三解。一云。准付法傳。迦葉付法阿難。阿難付商那和修及末田地。和修付毱多。以末田地在外國流通。又毱多不從之受法故。除末田地。二云。章既擧末田地。故取末田地除商那和修。三云。二聖既是同時弘化。合之爲一。評曰。三釋倶通。且依前解。言摩訶提婆至迦濕彌羅者。摩訶云大。提婆云天。大天本是末土羅國商人之子。因造三逆深生憂悔。欲求滅罪遂乃出家。出家未久便能誦持三藏。王聞數請入宮供養。便與王妃私通。然彼復稱我是羅漢。後於寺中夢失不淨。而令弟子浣所汙衣。弟子白言。師煩惱盡。何容斯事。彼言。漏有二種。一者煩惱。羅漢已無。二者不淨。羅漢猶有。煩惱雖盡。豈

無便利涕唾等耶。然我之漏失爲魔嬈故。汝不應恠。此意說。身中不淨如有涕唾。爲魔嬈故。卽便漏失。眞諦云。此是魔女欲毀我故。而以不淨汙我衣也。此是第一緣。五緣皆自作經。又欲令弟子親附。次第記得第四沙門果。弟子問言。阿羅漢等應有證智。如何我等都不自知。彼云。羅漢亦有無知。無知有兩。一者染汙。羅漢已無。二者不染汙。羅漢猶有。第二緣也 弟子復言。曾聞聖者已斷疑惑。四諦三寶我猶懷疑何也。彼云。疑惑有兩。一者隨眠疑。羅漢已無。二者是處非處疑。羅漢猶有。述曰。稱理名是處。不稱理名非處。於此二事不決名處非處疑。如下十力言處非處力。義同也。此第三之緣也。弟子又言。我是羅漢應自知證悟。如何但由師記。彼言。羅漢有由他度。如舍利目連通慧第一。佛若未記彼不自知。況汝鈍根。不由他度而自能了。第四緣也 然彼大天雖造衆罪。末斷善根。後於夜中自懷重罪。當於何處受諸劇苦。憂惱所逼高聲唱言。苦哉苦哉。弟子尋白師言。所作已辦。何乃唱苦。彼遂告言。我呼聖道。謂諸聖道若不至誠稱苦名。命終不現起。第五緣也。立五緣。皆自作經也。後鷄園寺於布薩時。大天昇座。集前五緣而作頌言。無學漏失因魔引。無知疑惑由他度。聖道不起假聲呼。是謂如來眞佛敎。若准宗輪論。五言爲偈。意亦同此。不述也。爾時衆中有學無學。多聞持戒。修靜慮者。聞彼所說。翻彼所言。三句同前。改第四之句云。是汝狂言非佛敎。於是竟夜鬪諍紛紜。乃至終朝。城中士庶國王自來和諍僻。用律文行籌。滅諍憑多人語。時賢聖衆中耆德雖多而僧數少。大天朋內耆德雖少而人衆多。遂以大天爲是。聖衆爲非。於是聖衆便捨雞園。欲詣他處。王聞嘖責欲驗是非。遣送恒河載以破船。將以墜溺時。諸聖衆既逼命難。咸運神通。并攝同見未得通者。凌虛履空。如飛鴈王西北而去。往迦濕彌羅山谷栖止。於是便分二部。一上座部卽聖衆也。二大衆部卽大天衆。又西域記云。時無憂王聞而悔懼。躬來謝過請還本國。彼諸羅漢確不從命。

無憂王爲諸羅漢建立五百伽藍。總以此國持施衆僧。言摩揭陀國者。此云無毒害謂王治化。無其楚毒捶打之害。舊名致甘露處。即往昔諸天及阿素羅。愛著心重爲毒所害壽命短促。梵王矜之以龍爲繩。以山爲鑽。鑽於乳海。後得甘露致於此中。服得長壽。除其毒害。故以名焉。于時衆生以福力故海變成乳也

已上一切有宗本與處竟。

佛涅槃後四百年初。健駄羅國有王名迦膩吒吒一作色迦。其王敬信尊重佛經。味道忘疲傳燈是務。有日請僧入宮供養。王因問道僧說莫同。王甚怪焉。問脇尊者曰。佛教同源理無異趣。諸德宣唱奚有異乎。尊者答曰。自五夢不祥雙林現滅。百有餘載諸部聿興。雖復萬途津梁一揆。是故大聖喩折金杖。況以爭衣。爭衣則衣終不破。斫金則金體無殊。是故依之修行無不皆成聖果。王聞此語因爲問曰。諸部立範孰最善耶。我欲修行願尊者說。尊者答曰。諸部懿典莫越有宗。王欲修行宜遵此矣。王曰。向承嘉旨示以有宗。此部三藏今應結集。須召有德共詳議之。於是萬里星馳四方雲集。英賢畢萃凡聖極衆。既多煩亂不可總集。爲遂簡凡僧唯留聖衆。聖衆尙繁。簡去有學唯留無

學。無學復多不可總集。於無學內。定滿六通智圓四辯。內閑三藏外達五明。方堪結集。故以簡留。所簡聖衆四百九十有九。王曰。此國暑濕不堪結集。應往王舍城中迦葉結集之處。不亦宜乎。脇尊者曰。王舍城中多諸外道酬答。無暇。何功造論。迦濕彌羅國林木鬱茂泉石清閑。聖賢所居靈仙遊止。復山有四面。城唯一門。極堅固矣。可結集矣。於是國王及諸聖衆。自彼而至迦濕彌羅。到彼國已。緣少一人未滿五百。欲召世友。然世友識雖明敏未成無學。衆欲不取。世友顧聖衆曰。我見羅漢視之如唾。久捨不取。汝何尊此而棄我乎。我欲證之須臾便獲。遂於僧衆便立誓言。我擲縷至空。縷下至地。願我便證阿羅漢果。縷未下空。諸天接住語世友曰。大士方期佛果次補彌勒。三界特尊四生攸賴。一何爲此小緣而欲捨斯大事。於是聖衆聞此空言。頂禮世友推爲上座。於是五百聖衆。初集十萬頌釋素怛纜藏。次造十萬頌釋毘奈耶藏。後造十萬頌釋阿毘達磨藏。卽大毘婆沙是也。

世友商確。馬鳴採翰。備釋三藏。懸諸千古。法雲重布於遐方。佛日再暉於沙界。傳燈之盛。斯之謂焉。五百羅漢既結集已。刻石立誓。唯聽自國不許外方。勅藥叉神守護城門不令散出。（冠註論本第一左十二）

【暉鈔】卷上本右七　犍馱羅國。是北天之境。天親本國。如意論師爲和上。共外道論義言火煙。王及外道笑曰。合言煙火。不聽分疏嚙舌而終。天親更與論議。以雪前耻。直爲當時無濫義者。迦膩吒迦者。此云淨金色王。脇尊者。八十出家被年少笑。由自願言。若不得無學果。通閑三藏。斷三界惑。得六神通。具八解脫。以脇不至席。經三年即得道果。通閑三藏等。時人敬仰其德。號曰脇尊者。聿輿者。聿始也。述也。五夢者。摩耶經下卷。佛涅槃夜。摩耶即於天上得五惡夢。一夢見須彌山崩四海水渴。二夢見有諸羅刹手執利刀競挑一切衆生之眼。時有黑風吹諸羅刹歸於雪山。三夢見欲色諸天急失寶冠。自絕瓔珞。不安本座。四夢見如意珠王在高幢上。恒雨珍寶。周給一切。有四毒龍。口中吐火。吹倒高幢。吸如意珠。猛疾惡風吹沒深淵。五夢見有五獅子。從空而來嚙摩耶乳。入於右脇。身心疼痛如被刀劍。見此夢已。阿那律來告如來涅槃矣。五明者。一因明。考定正邪研覈眞僞。二內明。究暢五乘因果妙理。三醫方明。禁咒閑邪藥石針艾。四工巧明。伎術機關陰陽曆數。五聲明。釋詁訓字詮目流別。

【麟記】論本第一右十一　自下別明婆沙論興。就中有二。初明結集之緣。二於是五百聖衆已下正顯製論。前中又二。初至共評議之王僧問答。與請之由。二於是已下聖凡競集簡人選處。言犍馱邏國王請

僧等者。案西域記云。王風遠被。殊俗内附。機務餘暇每習佛經。日請一僧入宮說法。而諸異義部執不同。王聞深疑無以去惑。時脇尊者曰。如來去世年月逾邈。弟子部執師資異論。各據見聞共爲矛楯。時王聞已甚自感傷。謂尊者曰。猥以餘福幸遵前緒。去聖雖遠猶爲有幸。敢忘庸鄙紹繼法教。隨其部執具釋三藏。尊者曰。大王宿殖善本。多資福祐。留情佛法是所願也。犍馱邏國北印度境。舊曰乾陀羅國訛也東西千餘里。南北八百餘里。東臨信度河。國大都城號布路沙布邏周八十餘里。多甘蔗出石蜜。氣序溫暑略無寒雪。人性怯弱。好習典藝。多敬異道。自古作論師有那羅延天。無着。世親。法救。如意。脇尊者等本生處也。伽藍千餘所。天祠百數。言脇尊者。梵言波栗濕縛。唐云脇尊者初爲梵志師也。年垂八十捨家入道。城中少年便謂之曰。愚夫老朽一何淺智。夫出家者有二業焉。一則習定。二乃誦經。而今衰耄無所進取。濫迹淸流徒知飽食。時尊者聞譏議因謝時人而立誓言。我若不通三藏理。不斷三界惑得六神通具八解脫。終不以脇而至於席。自爾之後經行宴坐住立思惟。晝則研習理教。夜乃靜慮凝神。經歷三年學通三藏。斷三界惑。得三明智。時人敬仰其德因號脇尊者焉。言五夢不祥者。摩耶經云。一夢須彌山崩。四海水渴。二夢有諸羅刹手執利刀。競挑一切衆生之眼。三夢欲色界諸天。忽失寶冠脫瓔珞不安本座。身無光明猶如聚墨。四夢如意珠王在高幢上。恒雨珍寶周給一切。有四毒龍口吐猛火吹倒彼幢吸如意珠。猛疾惡風吹沒深淵。五夢有五獅子從空中下嚙摩耶乳。入於右脇。身心疼痛如被刀劍。此五惡夢表佛涅槃。言雙林現滅者。謂佛於雙林之間現入涅槃。非眞實滅也。言聿興者。餘律反。修也。述也。始也。今從始義也。言津梁者。謂佛教法濟度苦海以爲橋梁。其如河梁之類。揆者。度也。准也。蓋雖諸部異義不同。然其濟度

之義一也。言喩折金杖者。經曰。王夢分金杖分爲五段。表佛教法分成五部。撿大集經 又准四分
律。拘睒彌國比丘鬪諍分衆二部。來至舍衞。阿難到佛請問施法。佛令等施云。俱是僧。如破金杖
並爲金用。此經不及前 言況以爭衣者。況比也。卽此下文迦葉佛父訖栗枳王十夢中一夢也。彼云。王夢
見一衣堅而且廣。有十八人競分挽之。衣終不破。此表釋迦遺法弟子。分佛正法成十八部。雖有
異執而眞法尚在。言立範者。謂軌範也。言懿美也。言此部三藏今應結集者。謂結集當部。非
同佛滅之時總結集也。已上問答爲結集之由竟。自下簡選處。就中初簡人。次選處。言萬里星馳
者。西域記云。王乃宣令遠近召集聖哲。於是四方臻湊萬里星馳。英賢畢萃。集也 咸七日中四事供養。
言遂簡凡僧等者。准傳總四度簡人。初既欲討議恐其喧雜。王乃具懷白諸僧曰。證果者住具
縛者還。如此尚衆。又重宣令。無學人住有學人還。猶繁多。又重下令。具三明修六通者住。自餘
各還。然尚繁多。又下令云。其內窮三藏外達五明者住。自餘者各還。言定滿六通智圓四辨者。
以六通依定故。擧定以取通。四辨由智故。標智以言辯。卽是備六通名滿。具四辨名圓。故西
域記。名修六通者修卽滿義。准此非三滿中得滅盡定名定滿。亦非得無生智名智滿。六通四辨之
義如下自明。故不煩釋。言五明者。一者聲明。釋詁訓字詮目流別。二工巧明。伎術機關陰陽曆數。
三醫方明。禁咒閑邪藥石針艾。四因明。考定正邪研竅眞僞。五內明。究暢五乘因果妙理。言迦葉結集
之處者。卽迦葉結集石室之處也。言山有四面城唯一門者。案西域記云。此國四周山固。藥叉守衞。
土地膏腴物產豐盛。賢聖之所集往。靈仙之所遊止。衆議斯在。僉曰允諧。其王是時與諸羅漢自彼
而至。建立伽藍作婆沙論。言欲召世友者。時尊者在戶外納衣。諸羅漢謂世友曰。結使未除諍議

乖謬。爾宜遠迹、勿居此也。世友曰。諸賢於法無疑、代佛施化。方集大議、欲製正論。我雖不敏
粗達微言。三藏玄文。五明至理。頗亦研得其趣矣。章云、識雖明敏、即此義也。諸羅漢曰。不可
以容。是汝宜屏居疾證無學、以而會此。時未晚也。世友曰。我顧無學、其猶涕唾。志求佛果、不趍小
徑。乃至擲縷、凡當得果等。時諸羅漢重訶之曰。增上慢人斯謂也。無學果者諸佛所讃。宜可速
證、以決衆疑。於是世友即擲縷向空。乃至謂曰。如何於此欲證小果。今章言、爲此小緣等者。謂云
何爲結集之小緣、而妨成佛之大事也。攸所也賴。落蓋反。福也。頂禮世友爲上座者。西域記云。見是事已
謝咎推德、而爲上座。凡有疑議、咸取定焉。自下正明結集。即大毘婆沙是者。總三十萬頌。凡六百六十
萬言。今婆沙論是也。毘婆沙者。毘名爲廣。或名爲勝。或名爲異。婆沙云說。謂彼論中分別義說。
說義勝故、名爲勝說。五百羅漢各以異議解釋發智、名爲異說。具斯三義、故存梵音。世友商確者。
謂商量確定也。馬鳴採翰者。執筆寫詞也。懸諸千古者。即冠絕前代千古之時也。言刻石立誓等。西域
記云。迦膩色迦王遂以赤銅爲鍱。鏤寫論文。石函盛封、建窣堵婆。藏於其中間。命藥叉神固衞其國。
不令異學持此論出。欲求習學者、就中受業。

然世親尊者。舊習有宗。後學經部。將爲當理。於有宗義、懷取捨心。欲
定是非。恐畏彼師情懷忌憚、潛名重往。時經四載。屢以自宗頻破
他部。時有羅漢被詰莫通。即衆賢師悟入是也。悟入怪異、遂入定觀。

知是世親私告之曰。此部衆中未離欲者。知長老破必相致害。長老可速歸還本國。于時世親至本國已講毘婆沙。若一日講便造一偈。攝一日中所講之義。刻赤銅葉書寫此偈。如是次第成六百頌。攝大婆沙其義周盡。標頌香象擊鼓宣令云。誰能破者。吾當謝之。竟無一人能破斯偈。將此偈頌使人齎往迦濕彌羅。時彼國王及諸僧衆聞皆歡喜。嚴幢幡蓋出境來迎。標頌香象。至國尋讀謂弘己宗。悟入知非。告衆人曰。此頌非是專弘我宗。頌置傳說之言似相調耳。如其不信。請釋即知。於是國王及諸僧衆發使往請。奉百斤金以申敬請。論主受請爲釋本文。凡八千頌。寄往。果如悟入所言。此是第一明本緣起也。（冠註論本第一右十五）

【暉鈔】卷上本八右　恐畏彼師情懷忌憚者。論主畏他羅漢。情懷忌憚。或畏彼羅漢情懷忌憚論主。亦得之也。

【麟記】論本第一左十五　自下段第三正明此論。文分爲二。初至無人破斯偈明本造論之因。次將此偈頌寄往已下。顯製論由致。前文又二。初至還歸本國。論主潜德徵究有宗。次于時世親已下。明講毘

婆沙遂製倶舍。初言世親舊習有宗。案西域記。尊者本是犍馱邏國人。乃於一切有部中出家受業。博聞强識。達研學機。備通三藏。案世親本傳云是丈夫國人。於有宗義懷取捨心者。如執三世有。形色等實論主爲捨。命根等許爲實有名取。言後學經部將爲理者。卽十八部中經量部也。故下文云。經部所說不違故。言屢以自宗頻破他部者。卽將經部之義破有部也。言卽衆賢師悟入是者。梵云塞犍陀羅。唐言悟入。卽衆賢尊者之本師也。言未離欲。無不復嗔忿懷彼我。故言未離欲。言本國講毘婆沙者。卽世親尊者誦得本出。非執文出。以勅藥叉神守護故。言成六百頌者。唯約正宗爲言。爲兼序及流通總有六百七頌。破我一品仍未在數。言頌置傳說之言似相調者。如下言傳說是明闇等斯例甚多。意顯薩婆多宗自相傳說無正經文可爲憑信。西域記云。時世親尊者。是犍馱羅國脇尊者室東房製倶舍論。人而敬之。封以記焉。

第二明造論意者。大意有三。一爲衆生斷煩惱故。二欲令智者慧解深故。三弘持正法令久住故。斷煩惱者。欲令衆生出三有故。有情沈淪由惑未滅。欲求出離須斷惑緣。斷惑正因所謂淨慧。論正詮慧。論主因之故製斯論。故下文云。何因說彼阿毘達磨。擧頌答曰。由惑世間飄有海。因此傳佛說對法。故知造論爲斷煩惱。第二生慧解者。斯論乃四含幽鍵。六足玄關。法相川源。義門江海。文淸淸兮

玉潤。理明明兮月花。啓學人之味心發智者之明慧。故下文云。我於方隅已略說。爲開智者慧毒門。如身少破著少毒藥。須臾毒氣遍滿身中。此論亦然。開少慧門。諸有智人能深悟入。如似毒門名慧毒門。聰明論名因茲起也。第三弘持正法者。自靑蓮罷笑。白毫掩色。邪徒紛紜。正法陵遲。兩衆三德之談。米齋六句之說。殘我華苑汩我清流。論主方欲掃彼邪雲光斯佛日。製論之意其在茲乎。故下文云。上來所說種種法門。皆爲弘持世尊教法。（冠註論本第一右十六）

【暉鈔】卷上本右八　須斷惑緣者。惑卽是潤生之緣。欲出三界先斷潤生惑緣。斷惑正因卽淨慧。已上疏立淨慧斷惑道理。論正詮慧下卽生天親造論。依論發淨慧。有人釋。喚論教作斷惑緣者恐非。論正詮慧下方是生起論教。請細詳之。四含者。長中雜增一。此論是諸經論之開鍵。自靑蓮罷笑者。佛有二智。一根本智。亦名正體智。無分別智。睡夢覺智。二者後得智。亦名達俗智。覺有情智。蓮華開智。如世蓮華開蓮子卽現。後得智開施設萬法。自佛涅槃更不說法。故名罷笑。笑者開也。江楚人釋。佛目如靑蓮華。佛欲說法。眼先微笑此釋非也。白毫掩色者。佛欲說法先放白毫光。佛涅槃後更不放光。名掩色也。二智不同。皆是斷所知障得。故唯識云。由斷續生煩惱障故證眞解脫。由斷

礙解所知障故得大菩提。雨衆三德之談者。成劫之中有外道出世。梵云劫比羅。此云黃赤色。以頭髮眉面。色皆黃赤故。時人號爲黃赤色仙人。古云迦毘羅仙人訛也。其後弟子十八部中上首者名筏里沙。此名爲雨。雨際生故。其雨徒黨名爲雨衆。梵云僧佉奢薩怛羅。此云數論。謂以智數數度諸法。從數起論。論能生數。故名數論。造論者及學人名數論師。造二十五諦論。亦名金七十論。即是數論也。論有二十五諦。一者我以思爲體。欲受外境三德便變。二自性。古云冥性。未成大等名自性。得成大等名勝性。勝異舊故。自性別名即三德。梵云薩埵刺闍答摩。薩埵此云有情。及勇健義。今取勇健義。次刺闍此云微。亦云塵坌。取塵義。復答摩此云闇。鈍闇。自性正名勇塵闇。言三德者如論。古名染麤黑。今名黃赤黑。舊名喜憂闇。亦名貪嗔癡。舊云樂苦捨。由此三德是生死因。神我本性解脫。我思勝境三德即變。我爲境纏縛不得解脫。後厭境修道。我不思境。自性不變。我離境縛。即得解脫也。外道前觀八萬劫不知號爲冥性。如我之臣佐。爲我變二十三諦也。三從自性生大。我思外境。三德體大故。四從大生覺。八萬劫內有所覺知故。八萬劫前不覺爲冥性也。五從覺生五唯量。即色聲香味觸。即是能造。六從五唯量生五大。即所造法。七從五大生十一根。眼耳鼻舌身大小道兩手足語具心平等根即內心也。二十三諦者皆是轉變無常。色能造火。火還赤。色能成眼。眼能見色。聲能造空。空有聲聲成耳根。耳根能聞聲。香能造地。地多香故。地成鼻。鼻能取香故。味造水水多味。水能成舌。舌能嘗味。觸能造風。風多觸故。風能成身。身能覺觸。五塵共生五大。五大共成五作業根。業根者則肉舌手足。大道小道。及心平等根也。我若受用外境。即從前生後。我若不受用。即從後却入冥性。四句分別。一有能變他。即冥諦。二有從他變。即十一根。三有

能變他亦從他變。即覺五唯量五大。四不能變他不從他變。即神我是。造二十五諦論了。恐身死不傳。即問自在天長生法。彼今此洲頻陀山下食餘甘果。其果未熟。即青色。熟即赤白色。初食即酸苦。食了得水即甘。若食此果即得久住。心不決定。更往問之。即今化作大石。方圓如一張床。依告門人曰。有人問汝二十五諦。答不得者。即書問石上。後至天親弟子陳那菩薩即問。汝執我爲作者爲受者。答言受者。又問。爲常爲無常。即欲言常不答受境。若言無常我義不成。答言常比量故。破云。汝我義是有法。應無常宗法。因云以受外境故。同喩云如受蘊。經數日答不得。石即流汗。作聲震吼。自然破散。故論云。陳那創標三分。吼石鳴山也。米齋六句之說者。成劫之末有外道出。名吠世史迦奢薩怛羅。舊云衞世師。此云勝論。造六句論。諸論中勝。或勝前數論。或勝人造六句論。故名勝論。亦名嗢路迦。此云鵂鶹。舊云憂樓迦訛也。謂身形醜惡驚他產婦死。因此晝藏夜出。有人夜設食。人即須藏無人供養。即碓碾場糠中求取米齋食之。因此亦號蹇拏僕。此云食米齋仙人。舊云蹇拏陀訛也。造六句論。一梵云陀羅標。此云主諦。即實句義。以九法爲體。地水火風空時方我及意是常。世界成即聚不增。壞即散爲極微不減。與二十四法爲所依。二梵云求那。此云依諦。是德句義。以二十四法爲體。頌曰。色味香觸與數量。一異合離彼此覺。苦樂欲嗔勤。勇重。液潤行法及非聲。此則配前九句法。如六句論說。三梵云羯摩。此云作諦。是業句義。五法爲體。取捨屈伸行。離實德外別有五法。令實德作業。四梵云三摩若。此云總相諦。是大有句。十句論名同。此論名總同句義。即前實德業不能自有。由別有一大有有之。五毘尸沙。此云別相諦。是同異句。七十句論名俱分別句。離實德業外有別自性。人與人同。由別有同法令同。人與畜異。別有異法令異。實德業

三各有總別之同異也。六三摩夜。此云無障礙諦。是和合句義。能令實等不相離成。此論如父母和合能生其子。地水和合能生萬物。造六句論成。要得一人傳受須具七德。一生中國。二上種姓。三寂滅因。四身相圓。五聰明辨捷。六性行柔和。七具大慈心。後劫滅位。波羅底斯國有波羅門。名摩納婆。此云儒童。儒童有子。名般遮尸棄。此云五頂。頭有五角。髮有五旋。七德雖具根熟稍遲。爲染妻妃卒難化導。後因遊戲與妻競華。由此相厭。卽却念言。往日仙人在於何處。仙人得通應時而至。迎至住處爲說六句論。後末代十八部中上首名戰達末底。此云惠月。造十句論。開同異句爲二。更加有能無能倶分三句也。泊者。卽水流蕩貌。正法上邪法生也。

【麟記】論本第一左十六　第二明造論意者。就中分二。初至弘持世尊敎法。別明造論之意。二又三藏敎興已下。通明三藏敎興。三又依婆沙已下。重明造論。初言三有者。卽三界也。言由惑未滅者。下文云。離隨眠業無感有能。業由隨眠方得生長。故三有輪迴正由惑也。言須斷惑緣者。業是感果之因。惑是潤業之緣。今但斷惑故名惑緣。惑卽是緣。言斷惑正因者。明能持戒之因道。淨慧是能斷惑之正因故。言四含幽鍵等者。一長阿含多說長偈。二中阿含多說中偈。三增一阿含。謂一法爲始。於一上增一。至多故也。四雜阿含此翻爲雜。有言種種說也。鍵者鑰也。以鑰固關也。說文關下牡也。方言關東謂之鍵。關西謂之闔。謂關鍵是門戶之要。今此論能顯四含六足幽玄之義如彼之關鍵矣。言法相川源者。源是衆流之根本。此論是法相之宗源也。義門江海者顯義無窮。如江海之流注也。言文淸淸兮玉潤者。謂文潤如玉。理明明如月花美也。言啓學人之味心者。謂開學法人味劣之心也。言下文云我於方隅者。卽破我品末之頌也。言靑蓮能笑者。謂如來目淨修廣如靑蓮華。色常希夷。若微笑。今入涅槃故曰能

笑。言白毫掩色者。毫長毛也。如來眉間有白毫相。今入涅槃毫光不現故曰掩光。觀佛三昧經云。太子生時毫舒長五尺。樹下長一丈四尺五寸。成道已長一丈五尺。外有十楞。現中外倶空放之。圓卷如秋滿月分明皎淨色映阿雪圍如三寸。言邪徒紛糺者。卽外道邪宗紛紜糺亂也。言雨衆三德之談者。梵云伐理沙此云雨。是雨際生故。又云。此外道弟子多如雨際時雨。故曰雨衆也。又梵云僧佉奢薩怛羅此云數論。就法彰名。謂從數起論論能生數。故名數論。此外道立二十五諦。今言三德者。略擧一德。且彼所計有眞常之我。思爲體性。但是受者而非作者。餘二十四是我所受用。一自性卽三德。以薩埵剌闍答摩爲體。此翻云苦樂捨。亦名爲貪嗔癡苦貪樂。亦名憂喜捨。捨爲闇義同。亦名黃赤黑。亦名勇塵闇也。此三如我之臣佐。我若欲得受用境時。卽爲我變。未變之時各住自性。故名自性。二從自性生大。謂我思量欲得受用諸境界時。三法卽知動轉。其體大故名之爲大。四從大生我執。謂緣我故名我執。五從我執生五唯量。謂色聲香味觸。足前爲九。六從五唯量生五大。謂地水火風空。足前爲十四。七從五大生十一根。謂眼耳鼻舌身意手足大小便處語具。謂肉舌也 足前爲二十五諦。彼宗所執諸法是常。如轉變金成鐶釧等。金色不改鐶等相異。若我欲得受用境時。從自性生大。乃至生十一根。若我不欲受用境時從十一根却入五大。從大却入五唯量。從五唯量却入我執。從此却入大。從大却入自性。今三德卽自性也。約有轉變之能。名德約自性。言米齋六句之說者。梵云蹇拏僕。此云食米齋仙人。昔云蹇拏陀訛也。謂此外道身形醜陋。晝則隱伏山林。夜則來人間乞食。因驚孕婦令墮胎之後便不乞食。乃於擣舂之所拾碎米而食之。因以名焉。又名蘊露迦。此名鵂鶹外道。昔名憂婁佉者訛也。蓋如鵂鶹鳥之夜出。又名吠世史迦。此云勝。昔云衛世。或云鞞世。皆訛略也。造論勝故。或勝人造。故名勝論。門人爲五頂以

頭有五峰故。因以爲名也。說六句義。一實。謂地水火風空時方我意九法有實性故。二德。謂色香等二十一法也。三業。謂取捨屈申行等之業用也。四大有。能有一切法也。五同異。同謂總同。異謂別異。六和合。謂和合性。言殘我花苑者。卽此邪徒毀如來正法之花苑也。言汨我淸流者。于筆反。又古沒反。水流也。本以正法淸淨如水之淸流。今被外道說於邪法以汨亂正法之淸流也。言下文云皆爲弘持敎法者。卽下流通之文也。

又三藏敎興。皆有四意。故婆沙云。說素怛纜藏。依力等流。一爲衆生得增上心學論道故。二爲衆生種種雜說故。三令衆生種善根故。四爲衆生未入正法令入正法故。說毘奈耶藏。依悲等流。一爲衆生得增上戒學論道故。二爲衆生說諸學處故。三爲衆生已種善根者令相續成就故。四令已入正法者受持正法故。說阿毘達磨藏。依無畏等流。一爲衆生得增上慧學論道故。二爲分別諸法自相共相故。三爲已成就者令得正解脫故。四爲已受持學處者通達諸法眞實相故。（冠註論本第一右十八）

【暉鈔】卷上本十二左　學論道故者。一云。論是言論。道是道理。三藏所詮義與能詮名爲所依。言論之道。依主釋。二云。道者道路。卽所依義。言論卽是修行者智所遊履處。言論卽是道路。持業釋也。力等流者。

力者不可屆伏。所出經教亦不可屆伏。流者流類。等卽是流。或等者是引流義同前。經從十力引生。自相共相者。卽色聲是自相。無常等是共相。

【麟記】論本第一右十九　自下總明三藏興意。於中各有總顯所依及別述四意。言說素怛纜藏依力等流者。力謂十力。等謂齊等。流謂流類。卽依十力等流之心說於經法。故曰依力等流。又解。以力無屆伏義佛說經法。理趣深遠超越時情。一切異道莫之能屆。如彼十力名力等流。故正理云。經有相違但可通釋。不可不信。言得增上心學論道者。心卽是定。以經詮定故。增上卽增勝義。唯是佛法外道所無故名增上。問。定是心所何以名心。答。所依卽心。所依王名心無失。或約總聚但名爲心。故下文云。心一境性名之爲定。言論道者能詮教也。謂以言論道理成於教故而令衆生得此之教得論道。言種種雜說者。謂經中若事若理對機便說故名雜說。如涅槃經多明佛性之理。般若經明眞空之理。放牛等經多明事也。言令種善根者。如聞佛說法生信等五根種解脫分善故。言未入正法令入者。如外道異生等。未値佛時但受邪法。遇佛說經便入正法。言毘奈耶藏依悲等流者。悲謂大悲。以戒律中多說微細威儀。及陳繁雜等語。悉是大悲之心故也。言得增上戒者。顯所詮旨。論道者。謂能詮教。言學處者。謂離殺等是學所依故名學處。謂與比丘爲所學之處也。言令相續成就者。有云。相續是身。謂令身成就善根故。今解不爾。前說經令未種善根者種之。今更說律。令相續不斷而成就故。非約身說。言受持正法者。既以依經入於正法。當依戒律防護身口令不退等。名受持正法。言說論依無畏等流者。如來有四無畏。然其論中廣明法相究盡根源。異道邪論莫能傾動得無畏。故知彼等流。或以無畏心之所說故名依無畏。言自相共相等者。相狀也。如色法以變礙爲

相。受以領納為相。卽此諸相互不相通名為自相。今分別此等義。故名分別自共相等。三已成就令得正解脫者。謂前說律儀。但令成就善根。然未能令得正解脫。後陳論教方得解脫。或經云。戒淨有智慧。便得第一道。故知無智慧不得解脫。又無漏慧得正解脫。非如外道計無想天等諸邪解脫。故言正。言為通達諸法眞實相者。謂五蘊等諸法眞實體相。皆由論教分別。令其學人通達也。

又依婆沙有七意造論。一為饒益他故。為令有情於佛聖教無倒受持便得悟入甚深法性。譬如有人為饒益他。於黑闇處燃大明燈。令有目者見種種色。二為破無明闇故。如燈破闇能發光明。造論亦爾。破無明闇發智慧明。三為顯無我像故。譬如鏡面極善磨瑩種種相現。論亦如是分別法相令無我像分明顯現。四為度生死河故。如牢船筏百千衆生依之無畏度至彼岸。論亦如是。佛及有情依之無畏到涅槃岸。五為照契經等故。如人執炬則見衆色而無迷亂。論亦如是。照契經等義而無迷亂故。六為觀察善等諸法故。如別寶人識金剛等寶。論亦如是分別善等諸法故。七為顯諸大論師不傾動故。如妙高山踞金輪上一切猛風不能傾動。諸大論師亦復如是。輕毀邪論

不能摧伏故。（冠註論本第一左十八）

【暉鈔】卷上本十三右　有目者卽有慧人。將論分別諸法。如有目人於暗室得燈見衆色。無我像者。卽三法印。三藏敎與此三印合。卽是正法。一諸行無常。卽有爲。如五蘊論。擧初攝後。二涅槃寂靜。卽無爲。如涅槃論。卽擧後攝初。三一切法無我。卽通有爲無爲。如此所擧最寬通攝餘二也。

【麟記】論本第一左二十　自下重明論敎中。前之二義別者。初義顯佛敎無倒受持。後義專爲破無明闇。雖同喩燈二義全別。言顯無我像者。然正法中本實無我。外道邪計妄生我執。無我之像隱而不彰。今說法相分別色等。求其我體都不可得。無我之像方復顯了。言像卽相也。故經云。無我相等。佛及有情依之無畏者。論詮慧。佛淨慧而得證果。有情亦然。佛是已證。衆生當證。故總擧之。分別善等諸法者。謂分別善不善無記法也。已上釋初門竟。

第二明論宗旨者。自敎迹區分部成十八。所立宗旨固非一家。如一說部。大衆部。鷄胤部。說出世部。此四奉宗一切諸法無非是假。但有言說。若經部宗立一切法少分實有多分是假。（冠註論本第一左十九）

【暉鈔】卷上本十三右　敎迹區分部成十八者。七日之外卽有二部之名。由五人住持不分。一百年外。因前大衆四破。後上七破。前九後十一。大天五事乖諍分成二部。一大衆部。卽石室外結集衆多凡聖學無學

之門人。二上座部。卽石室內結集千無學之門人。一百年外二百年內。大衆部中由聖少凡多乖諍先起。分成九部。一立義不同分出三部。一一說部。世出世法皆無實體。但有假名。名一說部從所立爲名。文殊問經及眞諦名執一語言部。二說出世部。世間法從煩惱顚倒生。故無實體。假有。出世間法非顚倒生。故是實有。文殊名可稱讚部。眞諦名出世說部。隨順梵言此倒說也。此二部從所立爲名。三鷄胤部。上古有仙染鷄生子。是婆羅門中仙人之種。眞諦名灰山住部。本音及義皆無此說。唯弘對法不弘經律。以是諸佛方便敎故。既乖本旨故別住。二又大衆部出一。名多聞部。博學多聞從德立名。佛在世時。雪山有一仙人。被樹皮衣投大衆部出家。唯見弘淺義此人更誦餘義。有弘不弘過本所聞。分二部也。三大衆部又出一名說假部。世出世法皆有少假。所立爲名。眞諦名分別。文殊問經無此名也。四大衆部。二百年滿。有一師出名大天。居制多山。山多有制多。重議大天五事。有可不可。分出三部。山西住者名西山住部。山北住者名北山住部。大天在北山居。後名制多山部。上座部二百年內一味和合。本弘經爲首。律論爲末。至三百年初。迦多衍尼子此部出家。弘論藏爲首。經律爲末。既乖本旨。分出二部。一名一切有部。亦名說因。所立法皆有因由。二名雪山。卽本上座部。見學論者多移入雪山約處爲名。二有部出一。名犢子部。上古有仙染犢生子。自後仙種皆名犢子。涅槃經說。佛在之日有一外道厥名犢子。歸佛出家。自後門人不絕。乃至分部。從遠立名。三犢子出四部。一法上部。有法出衆人之上。所立爲名。二賢胄部。賢者部主名。胄者苗裔之目。是賢阿羅漢之苗裔。三正量部。摧破邪定名量。量無邪謬名正。卽定無邪名正量部。四密林山部。山有林藪。部主居此。此四部本共誦舍利弗阿毘達磨。文義少者。後各自造論取經義添。既互相乖遂成四部。四又

有部出一。名化地部。國王出家弘宣佛法却化本地。因此立名。文殊名正地部也。五化地部出一部。名法藏。亦名法密。密藏義同。有五法藏。經律論菩薩咒含容。如藏名法藏。六又三百年末有部出一。名飲光。上古有仙身有金色。能飲日月之光。今此部主是彼之苗裔。七四百年初有部出一。名經量。以經爲量從所立爲名。二十部各執不同。如宗輪疏述。疏云部成十八者據末說。兼本二部即成二十。

【麟記】論本第一二十右　自下明宗旨者。謂是宗部之旨。非所詮之旨也。於此文中大分爲二。一總列宗計。二詳判教旨。前中又二。初總叙異計與宗。次就宗中明所計別。初言教迹區分部成十八部者。區謂區別。分謂分殊。且約支條說有十八。若兼根本乃二十部。分部之緣已如上辯。今對此文粗述名數。且初一破但爲上座大衆二部。後從大衆復更乖諍分出八部。且於第二百年流出三部。一一說部。此部執世出世法皆無實體同一假名。二說出世部。謂執世法從顚倒生。出世之法別有別體。三雞胤部。上古有仙。染雞生子。部主是此之族。次復二百年後出一部名多聞部。廣學三藏深悟佛言從德爲名。名多聞部。次出一部名爲說假部。慈恩法師云。此部說世出世法皆通假名。爲以眞實。故不同一說及出世部。二百年滿更重詳五事。因茲諍分爲三部。一制多山部。制多翻爲靈廟。佛於一世初生成道轉法輪般涅槃四處。皆有靈廟供養。此即一處。山有制多。人依山住。從山立名。二西山住部。三北山住部。此並居制多山西及北也。已上八部。若兼本成九部。其上座部爾許時來一味和合。後至三百年初有少乖諍。分爲兩部。一說一切有部。亦名說因部。一切有有二。一者有爲三世實有。二者無爲離世實有。從所立法以彰部名。二雪轉部。此上座部。微弱不住如似雪風飄流靡措。從喩爲名。亦雪山部。從處立稱。亦名上座。從遠所襲以彰部名。次三百年從一切有部分出一部。名犢子部。上古有仙。居山靜處。欲染母牛因而有子。自後仙種皆稱犢子部。從遠所襲以彰名。次從犢

子部分出四部。一法上部。部主之號。有法可上。或復有法出衆人上。並名法上。從人法立稱也。二賢胄部。賢是部主。胄是苗裔之義。是賢羅漢之苗裔故也。三正量部。權衡刊定名之爲量。量無邪謬目之爲正。此部所立甚深法義於定無邪。目稱正量。四密林山部。近山林藪欝繁密。從處爲名也。次說一切有部復分一部。名化地部。部主曾作國王化霑地上。故曰化地。捨國出家弘宣佛法。從本爲名故也。次從化地部流出法藏部或法密部。部主之義名。藏之與密義意大同。此師含容正法如藏。從人立號也。至三百年末從一切有部出飲光部。梵云迦葉波。唐云飲光。婆羅門姓。上古有仙。身有金光。障弊餘光。故名飲光。部主是彼胤。又此部主身有金光。能飲餘光。從自立名。名飲光部也。至四百年初從一切有部出一部。名經量部。此部唯依經爲宗。不依律論。即經部師依所立彰部名。上座部本末別說成十一部。今除本取末即十部。兼大衆部所流八部。故成十八部也。自下別明所計。就中有三。初明四宗所計唯假。二經部宗計通假實。三薩婆多唯實非假。言此四宗至但有言說者。謂四部所崇奉之宗唯假非實也。今詳若一說部全假可然。出世部即許出世之法則有實體。故知言四並假未爲盡理。又言大衆部即本末通論。非十八部數也。眞諦云。大衆部住央掘多羅國在王舍城地。此部弘華嚴。涅槃。勝鬘。維摩。金光明等經。鷄胤部不弘經律。言經與律是方便教。佛自有處破經律。故唯弘對法。坐禪斷惑。言經部所立少分實者。如言過未是假。唯現在實。及三科法蘊處並假。唯界是實。又不相應等是假立也。

若薩婆多宗一切有法爲所奉宗。計有不同總有四說。一類。二相。三位。四待。言類者。尊者法救作如是說。由類不同三世有異。謂從未來至現在時。捨未來類得現在類。若從現在流至過去。捨現在類得過去類。

但類不同。非體有異。如破金器作餘物時。形雖有殊。金色無異。言相者。尊者妙音說。相不同三世有異。謂法在過去正與過去相合。而不名爲離現未相。以過去相顯。但名過去也。現在正與現在相合。而不名爲離過未相。未來正與未來相合。而不名爲離過現相。隨顯得名准過去說。言位者。尊者世友說。位不同三世有異。未作用位名爲未來。正作用位名爲現在。作用謝位名爲過去。至位位中作異異說。如運一籌置在一位名一。置百位名百。置千位名千。歷位有別籌體無異。言待者。尊者覺天說。待不同三世有異。待謂觀待。前觀於後名爲過去。後觀於前名爲未來。觀待前後名爲現在。如一女人名女名母。觀母名女。觀女名母。（冠註論本第一十九左）

【暉鈔】卷上本十五左　名母名女者。女人是一。觀望不同得母女二名。法體是一。前後觀望不同。成三世說也。

【麟記】論本第一二十三右　言薩婆多宗者。此翻一切有。章中且約三世計有。理實彼計無爲不相應等皆有實體。就此計中先總叙四說。次論主評。言法救者。梵云達磨怛羅。唐言法救。謂以法救人故。言由類

不同者。類謂種類。卽三世法體雖是一。而三世遷流種類殊分成過未等。喩如金器將椀作盞。約形改變隨類立名。理實金體曾無有異。法體亦然。過未雖殊體無異也。謂時無別體。依法而立。是故諸法體皆無異也。言妙音者。梵云瞿沙。唐言能鳴西域敷演宣令法號瞿沙。謂彼尊者久流生死。今得聖智。對昔況然。故號能鳴。或能宣唱故號能鳴。言說相不同者。相謂狀。非生等四相。舊云。此師說。不相應中別有一類世相不同三世有異。諸有爲法一一有三。若法謝在過去。與過去相合名過去。與現未相合名現未等。又言過去不離現未等相者。以有爲法皆有三相。隨在何世一顯二隱。一正顯者名爲正合。餘二雖隱而體非無。亦名不離彼相。又解。相有用時名之爲合。相雖無用而隨於法其體非無。故言不離。故論立喩云。如人正染一妻室時。於餘妃嬪不名離染。過去既然。現未亦爾。並約時顯說名異故。言世友者。梵云伐蘇密多羅。唐言世友印度天祠之名。以彼菩薩父母初生恐爲鬼神之所嬈惱故。取彼名冀免惱害。言約位不同者。位卽分位。此意者法體恒有。以有作用未作用等時位不同分三位別。言至位位中作異異說者。謂未來至現在位。現在入過去位。以位非一故名位位。至現在位名現在。入過去位名過去。體不改變故名異異。籌喩可知。言覺天者。梵云部陀提婆。唐言覺天謂以佛爲天。立此號也。言觀待者。卽相望也。以過去望現在等是前。餘比可知。

論主評云。法救執法有轉變故。應置數論外道朋中。以數論宗執法有轉變故也。妙音所立世相雜亂。三世皆有三世相故。覺天所立世還

雜亂。一世法中應有三世。謂過去世有多刹那。前後刹那應名去來中名現在。未來現在類亦應然。故此四中第三世友立世最善。依經部宗過未無體唯現世有（冠註論本第一二十左）

【暉鈔】卷上本十五左　法救如外道捨冥性得大。大體卽冥性。如二十四諦轉變無常也。三世皆有三世相故者。一世法中卽有三世。且如過去正與過去相合。喚作過去。不名離現未。相旣不離現未。爲是過去。爲是現未世。過去有法。應名現未法。因云以不離現未相故。同喩如現未。現未二世准此破之。一世法中應有三世者。過未通多時。卽是三世義成。現在唯一念。如何得有三世。答。現在雖一念。由觀前後不同。前經三念三念皆現在攝。破云。現在亦應有三世。

【麟記】論本第一二十四左　自下論主評斷。言法救執法轉變者。謂將未來類成現在類。如椀盞器等形轉變故。言應置外道數論明中者。以數論外道執三德轉變成二十五諦。今此執法義同彼。故置斯朋。言三世皆有三世相者。且妙音云。過去相合名過去。又言不離現未相。現未又言不離過去等。卽是過去世亦名現在未來。現在未來亦名過去等。爲何者定是過去及現未等。故成雜亂。破覺天言過去世有多刹那者。且如今日正此今時。橫望已前總名過去。故過去世有多刹那。是則前後相望自成三世。言未來現在類亦應然者。同過去世有雜亂過。今詳乍觀可爾。理則頗殊。謂未來諸法旣雜亂居。不分前後。何有前後相望等別。又現在世唯一刹那。豈同過去有雜亂失。解云。未來雖復未分前後而有多念。容有前後。故同過去。現在雖復一刹那與過去別。然望前後雜亂是同。謂將現在望未來是

前。應名過去。望過去是後。應名未來。望前後復名現在。是則雖有一念之法。望前後得三世名。如一人女人名女母故。現未上世類同過去。理亦無失。言世友立世最善者。下隨眠品云。第三約作用立世最爲善。准彼經部有破。今且四說之中自爲善耳。言經部過去未來無體者。謂彼許法本無今有。有已還無故。下云。法得自體頃名一剎那。故知唯現是實。

今詳。世親著論宗旨有其兩種。一者顯宗。卽一切有。故下文云。迦濕彌羅議理成。我多依彼釋對法。既言依彼釋對法藏。故知此論有部爲宗。二者密宗。所謂經部。故下文云。經部所說不違理故。此一部論多將經部破薩婆多。故知世親密意所許經部爲宗。此上不同第一明宗旨竟。（冠註論本第一二十右）

【麟記】論本第一二十五左　自下判教旨中。言顯宗者。顯卽彰顯。謂因講婆沙造此論故。故顯依有部。言密宗者。密謂隱密。雖依有宗造論。然自密意遵崇經部。故曰密宗。故下文云。毘婆沙說我所崇故。經部所說不違理故。由此一論有顯密之異二部宗焉。

第三明藏所攝者。藏有三種。一素怛覽藏。此翻爲線。或名爲經。正詮於定。二毘奈耶藏。此稱調伏。正詮於戒。三阿毘達磨藏。此言對法。正

詮於慧。於此三中此論卽是阿毘達磨藏攝。問。爲唯一藏攝。亦通餘二。答。順正理第一云。諸有素怛覽及毘奈耶所有窮理問答。皆是此中阿毘達磨藏攝。（冠註論本第一二十左）

【暉鈔】卷上本十六右　線者。以貫穿攝持義。經藏詮定。婆沙說。隨所明三學之處卽三藏收。據疏文。餘二藏問答處是此論藏收。此論說定及戒卽還是彼經律二藏攝。問。既明三學。何以獨名論等。答。一以正詮慧。二以多分明慧。以少從多題論名也。

【麟記】論本第一二十五左　第三。藏攝文二。初正明相攝。二問答料簡。初中各先翻敎名。次明所詮旨趣。四分言素怛纜藏者。昔云修多羅。或言修妬路等並訛也。言線等。正翻敎名。詮於定者明所詮旨。四分律云。譬如有華散置案上。風吹則散。何以故。不以線貫穿故。今以線有貫華之能。敎有能貫義之用故。類之於線。約喩彰名。或名經者。一如布絹等經。有能詮之用。與線義同故。無性論云。貫穿縫綴。故名爲經。又雜心云。經有五義。一涌泉。二繩墨。三結鬘。四線。五井索。或依俗訓法訓常。常則百王之所不易法。乃可軌可模。故曰經也。言正詮於定者。經雖明戒慧。然兼非正。故言正詮於定。下二藏准說可知。言毘奈耶者。昔云毘那或鼻應並訛也。此稱調伏者。謂調治六根制三業故。論云。言調伏者意顯律儀。由此能令根調伏故。又言毘尼此稱爲滅。更有多名。繁而不述。言阿毘達磨者。昔云阿毘曇等皆訛也。此云對法。如下當釋。此三皆蘊積聚蓄故名爲藏。自下問答者。准其問意。經律二兼詮慧。故問論且通餘二攝不。若准正理答文。以餘二

藏中有問答等在此攝。即顯非餘二收。尋章可見。

第四明翻譯不同者。此論翻譯總有兩時。初即陳朝後居唐代。陳朝三藏眞諦法師。有於嶺南譯成二十二卷。大唐三藏永徽年中於慈恩寺譯成三十卷。翻譯不同非無所以。由前譯主未善方言。致使論文義在差舛。至如無爲是因果前譯言非。現法無非得昔翻云有。大唐三藏音善兩方。譯義無差綴文不謬。由使懷疑之客得白玉於青山。佇決之賓獲玄珠於赤水。由是此論譯有兩時。（冠註論本第一二右）

【暉鈔】卷上本十六右　懷疑之客及佇決之賓。皆是先大德也。得白玉於青山者。藍田人卞和。少有賢德。政故於荊山得璧玉方尺。三獻楚。初照王。次荊王。後平王。第三獻納之。方唐三藏得論以望先德。獲玄珠於赤水者。莊子天地篇云。皇帝遊於赤水之北。登乎崑崙之丘。南望還歸遺其玄珠。注曰赤是南方之色。心是南方之藏。水性流動位在北方。況迷心緣境。闇似北方。言赤水北方也。崑崙丘即身。玄乃深遠之目。珠乃珍貴之寶。今欲反本還源。祈眞訪道。是以南望還歸。南方即求眞之處。得道之方也。使智索之而不得。索求也。絕慮。不可以求得也。使離婁索之而不得。非色。不可以明取也。使喫詬索之而不得。契詬言辯也。離言。不可以辯索也。乃使象罔象罔得之。象罔無心也。以無心而得也。皇帝曰。

異哉象罔。乃可以得之乎。玄珠況此方先德得三藏決疑如象罔得珠也。

【麟記】論本第一 二十六左　釋第四門。陳朝三藏眞諦法師。於嶺南制止寺譯論者。案譯經圖記云。沙門波羅末陀。此云眞諦西印度優禪尼國人。景行證明。器宇清肅。以梁武帝泰清二年。於寶雲殿奉勅譯經。總一十一部。謂金光明等。後至衡譯起信論訖。値侯景作亂。乃泛海西歸遇風所飄。遂至廣州。陳時永定元年始譯此論也。言前譯主未善方言者。謂眞諦長自西國近遊東夏。未能善達此方言詞也。言義有差舛者。謂差錯舛謬也。卽如無爲已下自指其差舛之義也。言無爲是因果前譯言非。謂無爲於法不障是能作因。爲道所證是離繫果。然不從六因生故名無因。不能取果故名爲無果。由是昔人不辯有無是非之異。遂云無爲非因果。非卽非其自體。無卽乃是無他。但得言無不得言非也。言現法無非得昔翻爲有者。夫言得非得法。非得者非其法體。法若起至現在必須有得。今言現法有非得者。理極相違故並爲謬。此言無非得者。謂無法俱非得。非無前後非得。如下明非得門。現在之法有法前法後非得故。言大唐三藏音善兩方者。三藏俗姓陳氏。潁川人也。自幼出家。依長捷法師爲學徒。以南北異見紛糺。良自歎息。以貞觀三年始發長安將遊西域。至十九年自西而還。所翻經論凡六百五十七部。此論卽永徽三年再譯也。然其三藏妙達五明善困異語。今唐梵雙辯故曰兩方。言譯義無差綴文不謬者。謂不同前譯言無爲非因果等之差謬也。有云。不言無爲非因果等。爲譯義無差。不言不善方言。名綴文不謬者。既無典據未可依憑。言由使懷疑之客得白玉於青山者。珠生江海。玉出昆山。又玉出荊山。而卞和得之。謂前譯論既誤。學者懷疑。今遇新論決斷舊疑。猶於青山得白玉矣。佇決之賓獲玄珠於赤水者。莊子云。軒轅黃帝遊于赤水之北。登乎崑崙

之岳。而南望還歸。遺其玄珠。初使智索之而不得。言用智不可以得眞。次使離婁索之而不得。離婁能百步視秋毫也。次使喫詬索之而不得。喫詬聽明失眞諦遠。後使象罔。象罔得之。皇帝曰。異哉象罔。乃可以得之乎。此寄明得眞之所由明得眞者非用心也。象罔自然。卽得眞矣。今章意者。謂前懷疑之侶常希啓決。今果正義。亦如赤水得玄珠也。

第五略釋品題者。阿毘此云對。達磨此云法。倶舍此云藏。謂無漏慧名之爲對。對有二義。一者對向。謂對向涅槃。二者對觀。謂對觀四諦。法有二種。一勝義法謂是涅槃。二法相法通四聖諦。釋法名者。一則軌生物解。二乃能持自性。故名爲法。言對法者。謂無漏慧名之爲對。四諦涅槃名之爲法。此無漏慧名對法者。法之對故名爲對法。是依主釋。依光法師。對與法倶通能所。下文當釋。藏有二義。一者包含。二者所依。言包含者猶如篋篋。此論包含發智論等諸勝義言故名爲藏。發智論等名爲對法。倶舍名藏。而非對法。然今此論名對法藏者。對法之藏故名對法藏。依主釋也。言所依者。正理釋云。藏或所依。猶如刀藏。引彼義言造此論故。以對法藏名對法藏。光法師釋云。鞘

名刀藏。刀所依故。言刀名藏取鞘藏名。以有藏故名爲刀藏。彼發智等是此所依。所以然者。謂引彼義言造此論故。彼發智等名爲對法。此論所依故亦卽是藏。今俱舍論名對法藏者。全取本論對法藏名。有對法藏故名對法藏。是有財釋。寶法師云。藏或所依猶如刀藏。此正理文但釋藏義。未辨有財。正理下文。以對法藏故名對法藏。此文方釋有財。光法師說刀名藏。作有財釋謬之甚矣。釋對法藏中。無持業釋者。謂世親論主不欲自取其功推能於本故也。（冠註論本第一二十三左）

【暉鈔】卷上本十六左　略釋品題者。先總釋對法藏三字。次謂無漏慧下別釋三字。別釋分四。一謂無漏慧下別釋對字。二法有二種下別釋法字。三言對法者下卽通釋對法兩字。四藏有二義下釋對法藏三字。問。四諦中有滅諦。滅諦卽是涅槃。無漏慧對觀四諦時。卽是對向涅槃。何須對觀之外別說對向。答。前三果四向所證無爲卽得名擇滅無爲及離繫。不得名涅槃。以煩惱未盡故。第四果人所證無爲亦得名擇滅無爲及涅槃也。從苦法忍已去乃至第九金剛無間已來。前三果四向雖觀滅諦皆名對觀。無心趣向故。第九解脫道一時起八十九箇能得。得八十九品無爲。名有餘無餘涅槃。卽是對向。或可苦法忍已去起無漏慧。望證有餘涅槃邊卽對觀。望證無餘涅槃邊卽對向。無餘

有餘雖異。同以無爲爲體。同一時證顯處有別。得有二名。正理論文。藏或所依。猶如刀藏。此二句釋所依名藏。或顯第二說。引彼義言造此論故。釋本論與此末論爲所依因由。以對法藏下。顯全取本論對法藏名作有財釋。本論所詮無漏慧四諦涅槃名對法。與此論爲所依本論亦名藏。對法卽藏。此論有彼本論對法藏義。全取本論名。光法師喚刀作藏。卽法合中。似此論名對法本論名藏。今此論名對法藏。取本論藏一字成一分有財。而於正理第一及第二句作有財釋非也。但釋藏義。卽是正理論初二句。下文方作有財。卽第五六句。

【麟記】論本第一 二十八右 解品題中有二。初翻名。次釋義。翻名如章。就釋義中。初解對法。次釋藏名。就中文三。初單釋對。次但解法。後雙明對法。前中復二。初辯名體。次釋對義。對向涅槃者。謂乘無漏聖道之因。感趣涅槃圓極之果。因果相對故名對向。言對觀者。謂淨慧之心觀察四諦之法。故名對觀。此二別者。初卽因果相望名對。後卽心境相對名對。雖觀向不同。對義一也。次釋法中又二。初指法體。次釋法名。言勝義謂涅槃者。以涅槃是善是常故名爲勝。有實體故稱義。勝卽是義名勝義法。卽簡虛空非擇滅等是常而非是善。餘有爲善善而非常故。言是善是常獨名勝義法也。二法相者。相狀也。性也。望他緣邊名狀。望自體邊名爲性。今緣苦集滅道四法相狀可得名法相法。所以復言通四聖諦者。前勝義法唯是涅槃不通餘諦。今法相法非唯涅槃。亦兼餘諦故言通也。言聖諦者。諦謂審實無倒之義。如經言。月可令熱。日可令冷。如來說苦實是苦法。不可令樂。故名爲諦。又唯聖人見不謬。故但名聖諦。凡夫苦謂爲樂。不淨計淨。以顚倒故不名凡諦。釋法中言軌生物解者。軌謂軌則。如其色法令生色解。或說無常等法令生無常等解。名生

物解。新云。軌則法者謂七衆律儀等法皆令生解故。又云。非此所明。言能持自性者。且約色法變礙爲性。能持此性名爲色法。餘法例爾。言法之對者。應名法對。今言對法者。爲順此方言故。就今章中是依主釋。若准餘宗對彼法故名爲對法。如有財者名爲有財。是有財釋。與此不同。言俱通能所者。下釋者。即下對頌正釋名文解。言包含者。此能包含發智等故。可知。言勝義言者。謂彼義理文言並此所包含也。言所依者。一如章引正理釋。然正理文具有兩段。初言藏或所依。至引彼義言造此論故。解本論藏義。次言以對法藏等釋此論得名。初藏字是標。或者顯第二義。以由用也。既藏是所依。是即名有本論。然今此論又名藏者。謂用本論藏名目於此論。故亦名藏。是有財釋。以喩如金剛云。言光法師說刀名藏謬者。非謂說刀名藏是謬。蓋是誤用正理論文故耳。所以然者。如前所引正理有兩段文。初說刀等言但解藏義。次以對法藏下方辯有財釋。今光乃於初釋藏文便作有財。不依次文故成謬也。又言正理下文者。即前所引次文是下。非謂遠指餘下文也。言無持業釋至推功歸本者。解云。且依主有財皆顯引彼義言依本論造非自穿鑿。若持業釋者。便言對法即藏。總無顯得依本論義持將。謂論主自造成自取功。此乃舊意。理有持業謙言無。若依新解。謂理無持業。非謂有而不取。所以然者。由後代造論皆取本論堅實之義。及引彼義言造此論故。所有文義皆依本論。非自穿鑿。若言有而不取者不得意也。此第五門應言略解題名。次第六門方釋品名。故知言解品題者有失也。問。若俱舍名藏。三藏應總名俱舍。何但此論獨得此名。答。理如所難。今以此論具包含或言賢實。所依二義。偏目藏論。餘經論等闕此義故。從餘受稱。

第六廣釋文義者。就中有二。一別釋品名。二依文正解。就別釋品
名復分爲二。一正釋品名。二明品前後。言正釋品名者。族義。持義。
性義名界。此品廣明故名分別。問。此品亦明蘊處。何故以界標名。
答。此品廣以二十二門分別十八界故以界標名。蘊處不爾故不標
也。二明品先後者。此頌上下總有八品。一界品。二根品。三世間品。四業
品。五隨眠品。六賢聖品。七智品。八定品。破我一品無別正頌。故此不
論。初二品總明有漏無漏。後六品別明有漏無漏。總是其本所以先說。
依總釋別所以後說。就總明中。初界品明諸法體。根品明諸法用。體
是其本所以先說。依體起用故次明根。就別明六品中。初三品別明
有漏。後三品別明無漏。有漏可厭所以先說。厭已令欣無漏所以後
說。就別明有漏中。世品明果。業品明因。隨眠品明緣。果麤易厭所
以先明。果不孤起必藉於因故次明業。因不孤起必待於緣所以後
明隨眠。就別明無漏中。賢聖品明果。智品明因。定品明緣。果相易欣

所以先說。果必藉因故次明智。智必待緣故後明定。（冠註論本第一二十六右）

【暉鈔】卷上本十八右　族義名界。下破不正。持及性義是正。問。何故論主不以二十二門分別十二處及五蘊名處品蘊品。但分別十八界名界品。答。且五蘊名體皆狹。名即五蘊。體不攝三無爲。故名體皆狹。十二處雖攝無爲名即狹。十八界二事俱寬。故以二十二門分別。五蘊十二處准十八界寬思。五蘊十二處亦有二十二門易知。前八品頌明事。後破我品明無我理。從淺至深。或先事後理。故後明破我品。或可前八品明自宗義。後破我品明外道。先內後外。界品根品總明不妨別相。後六品別明不妨總相。界品明體不妨有用。根品明用不妨有體。前三品別明有漏不妨有無漏。後三品別明無漏不妨有有漏。世品明果不妨有因及緣。業品明因不妨有果及緣。隨眠品明緣不妨有果及因。後三品准此知。今此科文。一據正明科。如界品雖有用是傍明。二據多分科。界品雖少分明用不就少分及傍明科言有用。問。別明有漏果中。即有有情及器。別明無漏中。何故無無漏器。答。以聖人無別器不離三界住也。

【麟記】論本第一三十左　釋第六門。且解題名。分別界品者。就中初辯名。次釋妨。初言界者有三義。一族義者。族謂種族。謂十八界根境不同各有種族。如崔盧等姓。二持義者。持謂任持。十八界色聲等法。各自任持不相雜亂。猶如城邑任持所有有情非情也。三姓義者。謂體性也。以十八界一一類中各有自體性故。以此三義名之爲界。品者類也。別也。以諸品類各別故。釋妨者。問詞如章。言二十二門分別十八界者。即下諸門分別以有見無見等二十二門分別也。言蘊處不爾者。謂蘊

唯有爲。處局根境。界中具顯六根境識。若具依蘊處界三門明見等者。文多繁廣。若就蘊處類釋於界。義即難知。若將見等就界分別類釋蘊處。義便易解。故就界門分別見等。然今章中同於新解。但約二十二門分別界故。故標品號。若依舊疏更有二釋。一云。界者性也。性之言體。此品明諸法體。以界標名。蘊處非體故不別說。二云。界則名義俱廣。謂名有十八。義攝無爲。故標界品。處雖義廣而名即狹。蘊乃名義俱狹故不標目。云云。次明品前後者。此但約八品以明次第。此除破我品。言無別正頌者。謂彼但是引經中頌證成無我。非本講婆沙之時自造頌也。新云。此一部論總有九品。前之八品述自宗義釋本頌文。所以先明。後之一品造釋時加破外執故。所以後說。言初二品總明漏無漏者。且如界品總明諸法。如標宗言有漏無漏等。根品明二十二根。信等五根通漏無漏。未知等三一向無漏。餘可准知。言初界品明諸法體者。體是本義。由是正理名本事品。又對法論明蘊處界名本事分故。根品明諸法用者。根是勝用差別故。故正理名差別品。釋六品中。章約厭欣以明次第。如四諦中先明苦集後明滅道。又解。有漏無始時起。是故先明。無漏新生。是故後說。言業品明因隨眠明緣者。業親能感果。如種芽等名因。惑但通潤。如水土等名緣。新云。業與惑俱是其因。然業是近有差別因。在惑先說。隨眠是遠無差別因故後說。又惑爲業因故在最後釋。以厭果斷因故。果先因後。言賢聖品明果者。謂明諸聖賢證果階位故。智品明因等者。證果必由智故。故智是因。定但通資故是緣也。新云。賢聖是果。如有漏中有情世間。聖無別器故唯說人。不同有漏兼擧器果。智定是因。就中定是因。智是果故先明智。又上所明皆據正釋及多分說。文便明義非無交雜。

從此第二依文正解者。將釋此頌。略爲三分。一序分。二正宗。三流通。夫聖人造論必有由致故初明序分。序分既訖當有所陳。故次明正宗。宗義已彰。勸物修學。故後有流通。初三行頌是序分。次有六百行頌是正宗。後四行頌是流通分。就序分中文分兩段。初有四句頌正明序分。後有八句隨難別解。且初正明序分四句者。頌曰。

諸一切種諸冥滅　拔衆生出生死泥
敬禮如是如理師　對法藏論我當說

釋曰。此之四句正明序分。就此序分復分兩段。一歸敬序。二發起序。卽前三句是歸敬序。第四句是發起序。就前三句初兩句明佛三德。第三句指德歸敬。初諸字明所歸敬。次十三字明佛三德。諸者。謂諸佛故論云。諸言所表謂佛世尊。（冠註論本第一二十左）

【暉鈔】卷上本十八左　依此方安法師。先科爲三分。序分卽論教起之由。正宗卽明無漏慧之益。後流通勸持流末代。西方親光於佛地論亦科爲三分。名卽別。義卽同。一敎起因緣分。二聖教所說分。三

依教奉行分。有流通無序分如二十唯識。有序分無流通如婆沙。有流通亦有序分如此論等。序分流通二皆無如發智論也。破我品在論末。明卽流通分攝。初諸字表德所成人。次十三字明人所成三德。先有人。後有德也。後十三字中先智德。後斷德者。一以智德不共。斷德是共故。先明智德。或智德有爲。斷德無爲。先有有爲後有無爲。故先明智。後明斷德。又智是因。斷是果也。要有前二方有第三恩德。初諸字古人三解。一云。諸者三世諸佛論云。諸言所表謂佛世尊。又云欲顯自師其體尊高超諸聖衆。正理顯宗意皆同此。又天親造論欲傳聖教。先歸敬世尊也。二云。諸者攝取外道。外道自言。我師亦具三德。天親何不歸敬。論主標諸字。具三德者卽歸敬。三云。謂順母兒論師造論。於首皆題諸字。彼意云。謂根淺衆生佛權作彼形。引入正法。亦具三德。破後二說云。佛有三身。後之二釋是佛化身。但歸化身。是定攝眞佛。何以却令論主歸事外道及一切有情。故知後二非也。

【麟記】論本第一二十二左　依文釋中總分三者。汎明諸論。正宗定有。序及流通有無不定。或有流通無序分。如二十唯識。或有序分而無流通。如毘婆沙論。或二俱有。如此論等。或二俱無。如發智論等。今此論初三行及四頌釋時加。是序及流通中六百頌是根本造故是正宗。此約八品以明。若約九品明者。舊有三說。一云。除序至破我品已善說前名爲正宗。破我品末是流通。謂此論釋經諸法無我故。故破我品亦是正宗。二云。從定品末兼破我品總名流通。以乘流通分起問而剰明破我。爲在流通後故亦名流通。三云。破我品中自有三分可知。言一歸敬序。二發起序者。歸敬謂歸依諸佛。發起謂發起正宗。然二序有無不定。或有歸敬而無發起。或有發起而無歸敬。此論具有二序。

所以先歸敬者。論云。今欲造論。爲顯自師其體尊高超諸聖衆故。先讚德方申敬禮。又顯宗云。以讚禮言滅諸惡障標嘉瑞故。然讚禮意有三。一敎本佛說故。傳佛敎故先敬佛。二先讚世尊有勝德故。欲明佛敎眞實不虛。三讚大師以標吉祥。福力護念滅除惡障。離諸魔事。惡障有三。一師障。二弟子障。三論障。思可知之也。言初諸字明所歸敬等者。新云。初之一字表德所成人。次十三字明人所成德。就十三字中。上句六字顯智斷二德。下之一句述其恩德。就六字中。初之三字顯其智德。次之一字述其斷德。後之兩字雙明二德。卽是二種冥滅義也。初言諸者。表諸佛。蒼頡篇云。諸非一也。聲類云。諸總也。法華云。諸求三乘人。諸言所表三乘人也。此論言諸。諸言所表具德人之也。顯一切佛悉具三德咸歸敬故。非局釋迦。又唯世尊不通餘聖。無三德故。然此諸字起自西方母兒論師。凡欲造論皆置諸言。論主將爲當理。故亦言諸。古有多釋。非正不叙。

後十三字中。前有六字明自利德。後七字明利他德。一切種諸冥滅者。自利德也。冥有二種。一者一切種冥。二者諸冥。一切種冥名不染無知。諸冥是染汚無知。此二無知能覆實義及障眞見故說爲冥。外境名實義。內心名眞見。一切種者。不染無知種類無邊名一切種。障一切法不能悟解。是不染無知。故種類多也。不染無知。劣慧爲體。三性門中善無記攝。體非煩惱故名不染。於境不悟稱曰無知。無知卽不染名不染無知。持

業釋也。亦名習氣。數習煩惱所成氣分。習之氣故名爲習氣。唯佛永斷。二乘猶有。故論云。聲聞獨覺雖滅諸冥。以染無知畢竟斷故。非一切種。所以者何。由於佛法極遠時處及諸義類無邊差別。不染無知。由未斷故。解云。佛法者佛所知法。即極遠時等是也。八萬劫外名極遠時。三千界外名極遠處也。諸冥者是染汚無知。諸謂諸境。即四諦修道五部境也。五部非一故名諸境。冥者即是見修所斷一切煩惱。以此煩惱覆障諸境故說爲冥。染汚無知無明爲體。煩惱不淨名爲染汚。於境不悟故曰無知。無知即染汚名染汚無知。持業釋也。（冠註論本第一 二十八左）

【暉鈔】卷上本 十九左　二無知俱能覆實義等者。此二無知俱能障實義。及障內心眞見解也。問。諸與一切種皆是二無知所緣境。此所緣境何寬何狹。答。諸即五部。不攝虛空非擇滅。非四諦攝。染汙無知不緣虛空非擇滅爲境。一切種即一切法。不染無知皆能爲障。故知諸冥即狹。一切種即寬。今此二無知就所迷境明者。以相隱難知故。就所迷辯。問。虛空非擇滅何故非五部攝。答。苦集修有漏。道諦有爲。滅諦所證。虛空非擇滅非所證滅諦不攝。是無爲餘三諦不攝。劣慧爲體者。古人引婆沙十一師同破。皆非正義。今引正理論二十八。意云。即於味等不勤求解劣慧及異相法俱由此劣慧。

又不求解與異相俱為同類因。引生後念更劣不懃求解慧。如是展轉因果相連。無始時來習已成性。即名無知。後煩惱盡位。由此不懃求慧。即於味等不能了知名無知。一云。或諸有情有煩惱位。所有無染心及相續。由諸煩惱間雜所薰。有能順生煩惱氣分。諸無染心及彼眷屬似彼行相差別而生。由數習力相繼而起故。離過身心仍名有習氣。即於味等不能了知。金剛道時。若佛即全斷。若二乘即分斷。此二說中。前說即不懃求慧異相為因引生。後說即前後煩惱與無染心間起薰成。此疏亦名習氣。即第二說是也。正理抄主釋前文言。及相續即身兼通色身。今師釋。相續即是無記心心所前後相續也。善無記攝者。無記心心所勢力微劣受煩惱薰。古人許通善者。如無色無學。善心現前即無無記心心所。唯有善心心所。既不能了味勢等境。故知善心亦是不染無知。取無色者。無色唯有異熟無記唯俱得故。欲色有餘三無記通三得故。舉無色顯處說。寶云。無學若以有漏善心不知味等境。即證不染無知通善。無學無漏定心現前亦不知味等境。不染無知亦通無漏。又唯識論極香臭物終不相薰。如何不染無知通善性也。無學起善心時。不知味等不名佛者。無學未闕所依身。佛即已闕所依身。又佛不生。無學即生。所以起善心。不知味等境不名佛也。問。無記攝者。正理論五無記中通幾。答。通五無記。異熟自性性味鈍故。威儀者。如大迦葉過去五百生。曾為舞人。見畢陵伽佛前彈琴。忽然起舞等。工巧者。畢陵伽欲度恒河。呼河神為婢子。早斷水。我過河等。通果者。如目連現通取藕根。賓頭盧取鉢等。前來所引皆是五無記習氣也。極遠時等者。等取餘九境。正理頌曰。味勢熟德時處數量同異。釋云。味即如無學不識赤鹽。勢即如磁石吸鐵。琥珀吸芥等。熟即如孔雀輪百千色毛不知何異熟感。德即道德。十力四無畏等。時處如疏釋。數即下文五

十二外不知餘八。量即不能觀衆生根量。同即如千頭牛乳一處。異即如水乳一處。二乘皆不能分別。皆由不染無知爲障故。無明爲體者。由無明是主。與一切煩惱相應。論舉無明兼顯餘惑。問。二無知何別。答。三乘同斷即染。二乘不斷即不染。又由此染汙無知立愚智殊。有染名愚。無染名智。又由不染智不及愚。愚者如凡夫善通三藏不妨名愚。智者如無學不識赤鹽等。

【麟記】論本第一 三十四右 言一切種冥名不染無知者。以一切境種類無邊。雖非染心亦不能了故。是不染無知也。言諸冥是染汚無知者。謂五部之境煩惱所迷故。是染汚無知。言此二無知至故說爲冥者。釋冥義也。爾雅云。冥闇昧也。說文冥幽也。謂二無知俱能覆實義。並能障眞見。論云及舊更有二釋。一云。染汚無知覆實義。不染無知障眞見。二云。不染無知覆實義。染汚無知障眞見。二說並非。如新廣破。言外境名實義內心稱眞見者。此同舊解。如染汚無知。於四諦涅槃被煩惱障之所迷覆。名覆外境之實義。由不了實義故。起種種惑名障內心之眞見。如不染無知。由煩惱習氣。味勢熟等及內外典籍等不能了知。名覆外境之實義。由此習氣起種種愚。名障內心之眞見。此意以境屬外且言外境心屬於內且言內心。理實心境俱通內外也。若依新解。不分內外。謂境通內六根故。心通緣外六境故。彼云。此二無知能覆諸境自共相等。及一切種味勢熟等眞實義故。能障諸境自共相等。及一切種味勢熟等眞實見。故說爲冥也。如闇能覆人杌等實義及障眞見。故說爲闇。此意者但不許內外之言。以外境不攝內境及內心之言濫故。亦許實義是境眞見是心也。詳其舊解。言外境內心。言雖少濫義亦無失。言不染無知種類無邊者釋名也。種謂種類。是品之異名。以不染無知緣一切法品類皆盡故言一切。於一一境味。諸法滋味或苦等味。勢損益等勢。熟法成熟也。處近遠等處。時近遠等時。同相似。異差別等法種類無邊皆不能了名一切種。不同諸冥所迷之境但唯

五部。不言一切故但言諸。言不染無知劣慧爲體者出體也。諸說不同略十一家。今但述正義。餘並
不叙。不染無知以未成佛來所有一切有漏無染劣慧爲體。故正理論云。是故即於味勢熟等不勤
求解慧與異相法俱爲因。引生後同類慧。此慧於解又不勤求爲因。引生不勤求解慧。如是展轉
無始時來。因果相仍。習以成性故。即於彼味等境中數習於解無堪能智。此所引劣慧名不染無知。
即此俱生心心所法總名習氣。理定應爾。言善無記攝者。三性分別也。謂同舊解。通善及無記二性
所攝。彼云。既言不染。明非不善有覆無記。若通於善。無色無學恒成就故可不名佛。若唯無
記無色無學異熟生心不現在前。不成就故應名爲佛。以此而言。故亦通善。新云。不染無知唯無
記性。通前難云。佛與二乘有差別者。但論生與不生。不約成不成別。無色羅漢善心現前。雖不成
就不染無知與佛是同。然佛不生。羅漢猶生。故不名佛。然此無記體通四種。異熟生心現在不疑。
所以通威儀工巧等者。如二乘神足越坑。迦葉起舞等。是威儀習氣。畢陵伽呼河神爲小婢子等。是
工巧無記。通變化者。有似貪嗔等。謂賓頭盧爲旋檀鉢現通變化。雖無貪心似有貪也。又諸化人現貪嗔等。皆是通果無記心。言
亦名習氣者。辯異名也。故正理云。此不染無知即說名習氣。習謂數習。氣謂氣分。有諸煩惱及劣慧
數習氣分故名習氣。習之氣故依主釋也。又解。即習名氣。有煩惱所習氣。名持業釋。或名不勤求解
慧。或名無堪能知。或名劣無知。如正理說。或名邪行相智。如婆沙說。諸說名異而體皆同。言唯
佛永斷二乘猶有者遮餘聖。佛表世尊。永斷表畢竟不生。二乘雖亦分斷不染無知。未能了知無邊類
法。故言猶有。言聲聞獨覺至非一切種者。擧劣顯勝也。麟喩獨覺不動羅漢。以不退智。染汚無知畢
竟不生。與佛是同。不染無知猶未盡故。與佛有異故曰也。言所以者何。徵云。倶解脫聖是利根

者。戒定二障悉已永斷。如何說非一切種智耶。言由於佛法極遠時處等者。答也。且佛法有二。一佛功德法。即十力等。二佛教法。於佛功德法。由障未盡不能證得。於佛教法。無知覆故不能眞解。今疏但言佛所知法。應非初法。言及諸義類者。謂味勢熟等種種義類也。言八萬劫外及三千界外者。謂二乘宿住智通不能觀知八萬劫前。死生智通不能觀知八萬劫後。天眼天耳神境智通不能見聞往三千界外。故極遠時處並不能知。由有無知所覆障故。釋諸冥中具有釋名出體等。如章。然此唯迷五部。以染心不緣虛空非擇滅二無爲故。不言一切。非種類衆多故。復不言種。故但言諸。言無明爲體者。舊云。所以不言餘煩惱者。無明通與諸惑相應。若說無明亦顯餘惑。此二無知差別相者。正理有三釋。一云。謂由此故立愚智殊。如是名爲染無知相。若由此故。或有境中智不及愚。是第二相。述曰。愚謂異生。智謂聖者。斷名聖。不斷名凡。此由染無知立愚智別。或有境中羅漢不識赤鹽。異生善通三藏。是名於境智不及愚也。第二云。又若斷已。佛與二乘皆無差別。是第一相。若有斷已。佛與二乘有差別。是第二相。述曰。染汙無知三乘斷故無差別不染無知唯佛永斷故有差別。第三云。若於事中自共相愚。是名第一染無知相。若於諸法味勢熟等不如實知。是第二相。解釋如前。

頌言滅者。滅有二滅。一擇滅。二非擇滅。一切種冥滅是非擇滅。由佛世尊。斷一切種冥證不生法故名非擇滅。此言證者。是不染無知勝緣闕位得非擇滅名爲證也。由斷此冥獲一切智。能知一切種類法故

智德圓滿。諸冥滅者卽是擇滅。由佛世尊斷煩惱冥證不生法名爲擇滅。斷德圓滿故。頌滅字通二滅也。智德是佛身中智慧爲體。斷德是佛所證擇滅爲體。滅名爲斷。由斷顯故。（冠註論本第一三十右）

【暉鈔】卷上本二十二右　勝緣闕位者。有二釋。一云。未來有三類依身。一類五蘊法唯與二無知爲所依身。一類五蘊法唯與不染無知爲所依身。一類五蘊法與一切智爲所依身。若至第九無間道時。與染不染無知所依身正現在。第九解脫卽染不染所依身及一切智所依身。合同時入現在世。由一切智依身勝先入現在世。二無知所依身闕現在世不得生。所依身既不生。能依染不染無知亦不生。緣闕所依身。能依二無知得非擇滅。二云。現在五蘊容與未來三類法爲依。卽二無知唯不染無知及一切智。至第九無間道已來。卽二無知。刹那刹那入現在世依此身。至第九解脫道。一切智力勝起來依此身。未來二無知闕現在所依身不得生名勝緣闕也。若第九解脫道取二乘果。卽唯不染無知入現在世。問。染汙法於上忍位不行。卽得非擇滅。不染何故至金剛喩定。答。不染據闕緣故至第九無間道也。智德以佛身中十智爲體。斷德卽擇滅爲體者。如何此論二十七斷圓德具四法。答。如四緣立九遍知。卽不以四緣總爲九遍知體。四緣立斷圓德不以四緣總斷德體。今言擇滅對體論也。

【麟記】論本第一三十七左　言滅有二者。下明斷二無知得二滅也。雖染無知通於二滅。然於此中論得

擇滅也。不染無知。雖逅一滅。然此中論得非擇滅。言由佛世尊斷一切種冥者。謂佛世尊得永對治。如實覺故。於一切種類不染無知。證非擇滅不生法。故稱爲滅。問。此於何位永斷無知。答。菩薩三無數劫隨位漸斷。至金剛喩定方總斷盡。若二乘等雖有分斷而非斷盡。應知。此中所言斷者。畢竟不生。得非擇滅。名之爲斷。非據擇滅名爲斷也。言勝緣闕位得非擇滅者。釋前證言。非謂道證。但緣闕名爲證也。言勝緣者。謂未成佛果已前所依之身。與其無知爲所依故。名爲勝緣。至金剛喩定三十四心斷煩惱盡具一切智。卽是種智所依之身。不染無知所依止身永不復生名勝緣闕。雖從五停心觀。一座得大菩提。爾時卽永斷不行。然得非擇滅名。要至金剛喩定。如現觀邊世俗智。斷永不生。至二類智邊。方得非擇滅。由於爾時闕勝緣故。又此無知具二種斷。一緣縛斷。二不生斷。隨彼彼地斷第九品染汙無知時得緣縛斷。謂於彼位得畢竟不生時名不生斷。此中言斷是第二斷。言一切種智。約知一切種類之法。從境立名。言智德圓滿者。顯菩提也。故正理云。一切種冥。皆永斷滅。故智德圓滿。卽是佛一切智。若兼眷屬通五蘊性。言斷煩惱冥令證不生者。佛證金剛喩定時。斷煩惱盡證其擇滅。名不生法。言斷德圓滿者。正理云。諸境界中冥。亦永斷滅。故斷德圓滿。言滅名爲斷者。意云。滅謂涅槃。體不生滅。今言斷者。由斷煩惱之所顯故。故得斷名。問。二乘亦斷煩惱盡。何不名斷德。答。二乘雖復惑盡以有習氣而非圓滿故不名德。

拔衆生出生死泥者。嘆利他德也。一切衆生於生死泥淪沒無救。世尊哀愍。隨授所應正法教手。拔濟令出。此是恩德。大悲爲體。言衆生

者。有衆多生死故也。言泥者。有漏業煩惱異熟果爲體。煩惱如水。業異熟如土。由此相參成生死泥。敬禮如是如理師者。指德歸敬。稽首接足故稱敬禮。諸有具前自他利德故云如是。卽如是者指前三德也。如理師者顯利他德。益物爲勝故別標敬。由佛世尊能方便說如理正教拔濟衆生名如理師。上來歸敬序竟。對法藏論我當說者。是發起序。爲發起論端故也。教誡學徒故稱爲論。教是教授。令人修善。誡是誡勗。令人斷惡。斷惡修善故名教誡。其對法藏隣次當辨。我當說者。五蘊假者目之爲我。當說之言簡已正說。（冠註論本第一三十一左）

【暉鈔】卷上本二十三右　拔衆生者。衆生有情不別。以法具六界成故。此論言衆生不言有情者。以破外道執衆生外別執有有情。若言有情卽順彼我執。此論言衆生也。古人舊釋。爲衆生濫外非情故。改爲有情者恐非。如何此論言衆生。故知非。有宗佛有三身。戒等五蘊爲法身。王宮生爲報身。隨形六道爲化身。由欣涅槃心持攝律儀戒。得法身。厭生死心持攝善法戒。卽得報身。度衆生心持饒益有情戒。卽得化身也。世尊以正法爲手。衆生卽以信心爲手也。以法應根不失時名如理師也。三德卽佛德。不論法僧。與三寶義別。古人一釋同此。第二亦歸法。法卽三德中斷德。

不歸僧。論主一阿僧祇劫滿以過僧故。第三亦歸僧。恩德所救中亦有僧。後二釋非也。梵云伽他。舊云偈訛。譯伽爲偈。略去他字。今翻爲頌也。

【麟記】論本第一 三十八左 言於生死泥淪沒無救者。出悲境也。廣雅云。淪沒也。沒溺也。淪涂也。謂三界五趣是生死處。業雜愛水。其類於泥。處之卽沉溺。出之則難。可九十五種不能出離故。世尊哀愍者。大聖悲愍也。隨授所應正法敎手者。巧便智也。謂隨三乘機授以敎法。必當機宜故曰所應也。拔濟令出者。悲事成也。顯宗云。諸有成就巧智大悲。授如應言拔濟令出。彼論巧便智卽是大悲。或可恩德。以善巧智及大悲爲體。若幷眷屬通五蘊性。言有衆多生死者。舊云。夫生必死。言生可攝死。故言衆生死未必生。故不言衆死。新云。衆生者卽有情異名。西方無有兩名。梵云薩埵。此云有情 梵云社伽。上聲。此云衆生。卽有情體一名異。有人云。若名衆生卽兼無情。所以但言有情者誤也。大乘同性經云。佛告楞伽王。衆生者衆緣和合。地水火風空識如蘆束更轉相依。故言衆生。准此經文。說其有情名衆生者。爲破別有一物爲有情體。理實名異體同。准此亦非新翻其爲有情。以此論新翻名衆生故也。言稽首接足者。稽之言至。首言謂頭。以頭至足。屈己之尊接佛之卑。表敬之極。然禮通三業。故攝論云。我以身口意頂禮世尊足。今此菩薩敬禮。雖偏說身必具三業。頌讚是語業。稽首是身業。起二是意業。言如理師者。謂如實無倒敎授衆生令行善法。誡勗衆生令不造惡。名如理師。誓勅曰誡。自勵曰勗。婆沙云。言無倒者。倒有三種。一法倒。二人倒。三時倒。法倒則識機不識法。如知此人多貪爲說慈悲觀。人倒識法不識機。如知不淨觀能治多貪。不識機故敎多瞋者。時倒雖識機法而說失時。或根未熟而說。或根已熟不說逆時。逆時卽無智慧。過時

即無慈悲。如來說法離此三倒。故名如理。又此論云。不由威力與願神通。名如理師。此簡凡小也。不由威力簡輪王。以輪王威力化人令行十善。不由與願。簡父母。祈天神彼但有願而不能救。不由神通。簡獨覺。現神通教化暫令生信。不能說法令出生死。此等皆非如理師也。不能拔於衆生出生死泥也。簡正已說。謂簡已說及正說。故言當說。

從此第二隨難別解。此復分三。一釋對法。二釋藏。三明說意說人。且初第一釋對法者。頌曰。

淨慧隨行名對法　及能得此諸慧論

釋曰。淨慧隨行名對法者。明勝義對法也。淨慧者謂無漏慧。離縛名淨。簡擇稱慧。淨慧眷屬名曰隨行。慧相應心及受想等諸心所法四相及得道共無表。此等諸法是慧眷屬。隨慧行故名曰隨行。如是淨慧及與隨行通攝五蘊。名爲勝義阿毘達磨。此五蘊中言色蘊者道共戒也。受想蘊者隨行中受想心所也。行蘊者除受想外諸餘心所四相及得也。識蘊者慧相應心也。言勝義者無漏名勝。實體稱義。勝即是義名爲勝義。勝義即對法名勝義對法。持業釋也。及能得此諸慧論者此明世俗對

法。頌文諸字通在兩處。一則諸慧。二則諸論。慧論非一故名爲諸。此諸慧論是有漏法名爲世俗。此者無漏淨慧也。由彼諸慧諸論方能得此無漏淨慧。名能得此也。非但淨慧隨行名爲對法。及能得此諸慧論亦名對法故云及也。言諸慧者慧有四種。一者生得慧。生便得故。二者聞慧。聞教成故。三者思慧。因思起故。四者修慧。從定生故。故定名爲修熏修於心令成功德無過於定故獨名修。言諸論者謂六足論等。一舍利子造集異門足論。二大目犍連造法蘊足論。三迦多演那造施設足論。已上三論佛在世造。佛涅槃後一百年中。提婆設磨造識身足論。至三百年初尊者世友造品類足論。又造界身足論。至三百年末迦多演尼子造發智論。前六足論義門稍少。發智一論法門最廣。後代論師說六爲足發智爲身。後代論師多宗發智。大毘婆沙依之而造。無漏淨慧是眞對法。有漏慧論非眞對法。言對法者謂爲無漏作資糧故亦名對法。故論云此諸慧論是彼資糧故。亦得名阿毘達磨。言資糧者先因

論敎次有生得。從生得後方有聞慧。從聞慧後次起思慧。從思慧後始生修慧。從修慧後起無漏慧。故諸慧論是淨慧資糧也。（冠註論本第一 三十三右）

【暉鈔】卷上本 二十四右　對法者。論下所詮義。無漏慧名對。四諦涅槃名法。舉所詮義立能詮論名。勝義者。無漏慧有體名義。能斷惑得不生名勝。勝即是義。問。慧忍智見四名同體。如何頌中名淨慧。不言餘三。答。盡無生智非見。智非忍。忍非智。慧通四位。從寬立號名淨慧。不言餘三。問。此隨行與下隨轉何別。答。正理論云。何名隨行。謂心隨轉法。既將隨轉釋隨行。此二不別。若不別者。下俱有因中。心爲能轉。心所通能所。慧既不是心王。如何名能轉。答。下俱有因。舉心王爲能轉。即餘心所爲所轉。此舉慧爲能轉。即心王及餘心所爲所轉。問。得是隨行否。答。非是隨行。以下文云此法俱得。或在法前。或在法後。以不定非俱有因。既非隨轉。亦非隨行。此取得是光法師義。應非。問。下文心王爲能轉不爲所轉。此慧爲能。亦爲所轉否。答。慧通能所。非如心王但能轉。言及能者。無漏慧是眞對法者。有漏慧論非眞對法。今據有漏慧資無漏慧。所以言及能。及能者相連帶。如世第一法親生無漏慧。餘聞思修及論敎展轉遠因說。一一萬二千。略八千。二六千。三一萬八千。四七千。五六千。六六千。略七百。身論二萬五千。後代有一萬八千又一萬六千。梵云伐蘇密怛羅。此云世友。舊云和須密多訛也。上七論中。唐三藏施設一論未譯。餘並譯了也。先因論敎次有生得者。纔生即得。性自天然。如生得善。大乘法爾種子。性自仁賢。不假修成。如何疏言先因論敎次有生得。此約修行位次說。以先有論敎。然後發能緣心披讀。即是生得慧。

亦順婆沙。生得慧能受持三藏聖教。方生聞慧等。亦順前文學論道故。亦順下文五位法之次第。有人妄釋。生得有二。一者纔生即得。前文生便得故。二者聞教後生得。先因論教。次有生得。是作此釋者甚乖其理。亦違上下論文也。

【麟記】論本第一四十右　言離縛名淨者。謂離於相應所緣二縛也。簡擇稱慧者。謂慧簡擇四聖諦法故曰慧。問。何故不說相應俱有等。偏說慧耶。解云。唯慧一種具三現觀。推求名見。慮境名緣。成辨名事。故獨標名。餘心心所唯有緣事二種。無見現觀。餘俱有法唯有事現觀。無見緣二。故不標也。或慧能斷惑。强故獨標慧。問。何故不言淨忍智見而言慧耶。解云。有忍非智。如下八忍是。有智非忍。如盡無生智。慧具攝三。名寬故獨立慧。慧相應心及受想等者。釋隨行也。此中以慧爲對法故。心王亦是隨行。下俱有因如王臣義故。所以心王爲轉。心所爲隨。受等雖與慧同時。此由慧力持起境故。亦是隨行。四相及得者。此同舊解。通取於得。彼云。隨行有二義。一俱有因故名隨行。二相隨順故名隨行。此既取得。乃同後義。若依新解。不取得爲隨行。以正理出眷屬對法體中不言得故。若除得總有一百五十四法。通大地十大善地十尋伺心王欣厭隨一及七支無表爲三十一。慧既爲首。除慧一法取餘三十。其上各有四相成百二十。並本三十合百五十。復兼慧上四相成一百五十四法也。有云。若望本法親近相隨順者。慧上隨相亦名隨行。以近慧故。餘法隨相望慧疎遠故非隨行。准此即成一百五十八法爲隨行也。若取得及四相。總成一百六十三法。又此且約初禪以說。中間已上又除尋等。如應當知。道共無表色者。以是無漏故不通定共。故唯道共。言無漏名勝義者。此依舊釋。以無漏名勝義。有漏稱世俗。新云。此無漏慧是眞對法。故名勝義。有漏

慧論實非對法。旨能與彼作資糧故。假名對法。故名世俗。所以知是假實之異名者。舊倶舍云。若假名阿毘達磨者。謂能得此諸智及論。故知世俗卽是假名云云。言生得者。謂生便自有。不由他敎故。詳其生得有二種別。一者生便得。二者因尋敎生。此言生得是初義。下言先因論敎次有生得者是第二相。故不相違。然今章中唯約自性不論眷屬。若兼眷屬者。修慧通五蘊性。思聞生得但通四蘊。無隨轉色故。言舍利子造集異門足論者。舍利唐言百舌鳥。子是唐言。如常所辯。此論有一萬二千頌。略本八千頌。二大目乾連造法蘊足論者。目連此云採菽氏。大是唐言。此論有六千頌也。迦多演那造施設足論。迦多此云剪剃。演云種。那是男聲。婆羅門中第一姓也。此論有一萬八千頌也。提婆設摩。此云天寂。論有七千頌。界身足論。廣本六千頌。略本七百頌。迦多演尼子。翻名如前。但尼是女聲。從母性爲異。此剪剃種西方貴族。所以然者。依婆羅門法。七歲已上在家學問。十五已上受婆羅門法遊方學問。至年四十恐家嗣斷絕歸娶妻室。至年五十入山修道。昔劫初時有婆羅門。生二子已入山修道。二子後時入山省覲父。父鬚髮蓬亂。遂卽剃之。形容端正。諸仙見已皆欲請剃。弟性慈愍。來卽爲剃。兄心傲慢。非我父者我不能爲。諸仙嗔忿呪兄願弟言。乃至劫末是汝種族常大富貴。兄呪願言。乃至劫末是汝種族常大貧賤。剪剃自活。故今印度現有二類。其弟種族極大富貴不爲剪剃之事。其兄種族極大貧窮剪剃自活。今從本生名剪剃種。論本有二萬五千頌。後代頌者廣略不同。一本八萬八千頌。一本一萬六千頌。此本卽唐三藏所翻。

釋此法名者。能持自性故名爲法。且如色法變礙爲性。能持此性故名色法。略擧此一餘法例然。法有二種。一勝義法。二法相法。勝義法

者謂是涅槃。是善是常。故名爲勝。有實體故復名爲義。即勝名義。即勝義名法。故名勝義法。持業釋也。二法相法者通四聖諦。相者性也。狀也。望自體邊名性。望他緣邊名相。此四諦法是法相故。故名法相法。法相即法。持業釋也。對有二義。一則對向。謂無漏慧對向涅槃。二則對觀。謂無漏慧對觀四諦。前言對向以因對果。因即淨慧。果即涅槃。後言對觀以心對境。心即淨慧。境即四諦。無漏淨慧但是其對。是能對故。而非是法。非所對故。言對法者是法之對故。依主釋也。光法師云。能對對勝且與對名。理實而言亦名爲法。持自性故。所對法勝且立法名。理實而言亦名爲對。是所對故。由此對法俱通能所。總有六種。一自性對法。謂淨慧也。二隨行對法。謂淨慧眷屬也。三方便對法。謂有漏四慧也。四資糧對法。謂論教也。五境界對法。謂四諦也。六果對法。謂涅槃也。前四能對名對法。後二所對名對法也。此能所對各有三釋。且能對法有三釋者。一能對名對。所對名法。法之對故名爲

對法。依主釋也。二能對非對法。所對名對法。能對名對法者。有對法故名爲對法。有財釋也。三能對名對。是能對故。亦名爲法。持自性故對卽是法名爲對法。持業釋也。所對法中亦有三釋。准能對說。依寶法師。唯說能對名爲對法。釋對法名唯依主釋也。此解甚佳。妙符論也。

（冠註論本第一 三十五左）

【暉鈔】卷上本 二十五左　是善是常者。是善卽簡空非擇滅。雖是常非善性。是常卽簡一切有爲。雖善非是常。常善相對四句分別可知。擇滅具二義。有體名義。實卽是義。持業釋也。望自體邊者如色望自體性變礙邊名性。望能緣心取長短等邊卽名相。光法師意。能對慧望能緣義邊名對。持自性卽法。所對法望持自性卽法。望與慧作所緣。却對慧邊卽對。約此義亦立四對法。問。與慧同時心心所及得四相。同緣四諦。如何說慧名自性。餘心所等卽名隨行。答。下文慧於見緣事三現觀有用。諸心心所無見一義。四相得無表無見緣二義。慧通三義。得名自性。或慧能斷惑。餘心所等無此能。故不立自性也。顯宗第一云。復以何緣無漏慧名對法。由此現觀諸法相已不重迷故。問。慧能簡擇四諦名自性。受等領納四諦境應名自性。答。受雖有領納不能簡擇。由慧力方能簡擇。餘心所等由慧力持於見道有用。故不名自性。太法師立五對法。此疏六中除果一。光破太云。名雖有多。攝義不盡。自立四種。合此疏前二爲一。合第三第四爲一。今寶法師立二除

光法師後二。後二但是慧所緣境。今論明能緣慧。古人何以取所緣境亦名對。若取境名對者。論藏詮慧學。慧所緣境亦名對。律藏詮戒學。應殺盜等境戒所妨境。亦應名戒學。經藏詮定學。定所緣定境色亦應名定學。又如眼名能見。色即所見。慧所緣境名對。眼所見色境亦應名能見。以此理知。四諦涅槃非是對。但是法。所以疏主云歎寶法師。唯取能對名對。此釋甚佳也。

【麟記】論本第一 四十二左　能持自性故名爲法者。如前解。法具有二義。今略舉自體不變義。故曰能持。謂一切法各守自體故。言即勝名義即勝義名法者。上釋勝義二字。下釋勝義法三字。並持業釋。言望他緣邊名相者。謂觀諦爲十六行相等。舊云。若據法相亦通虛空及非擇滅。以此二種非諦攝故。非與無漏慧爲境故。此中別不說。由此但言通四聖諦。言以因對果者。趣向名因。所證名果。望法相法唯有對觀。望勝義法具有對觀及對向。言六種對法者。前五是古人義。第六是舊加。新云。古師兼取境界爲一失。有人又加涅槃爲二失。言第三方便第四資糧者。謂四慧爲無漏之加行。故是方便。論教遠能轉生無漏。故是資糧。然舊解云。始從一種乃至增加有十五種對法。非要不敘。言所對法中亦有三釋者。一所對名對。能對名法。對之法故。是依主釋。二所對非對法。能對名對法。今所對名對法者。有對法故。是有財釋。三所對名對。是所對故。亦名爲法。持自性故。對即是法持業釋也。言此解甚佳妙符論者。謂頌中但言淨慧隨行名對法等。故知唯約能對名爲對法。不通所對。故但爲依主。即妙扶論也。因此義便略明六釋。西方釋名多依六種。言六者何。一依主釋。謂此依彼。如臣依王。或云依士。名異義同。二有財釋。如人有財。亦名多財。如有財者。名異義同。此有二相。一全取他名。如此論全取本論名故。二者分有財。如涅槃名有離有彼離故。三持業釋。謂一法體雙持兩業。業謂業

用。或云同依。兩用同依一體。名異義同。四相違釋。謂一法體彼此各據互不相屬。如明闇等。五隣近釋。體非是彼。近彼得名。如四念住以慧爲體。今言念住。慧隣念故。如近村邑得村邑名。六帶數釋。如言五蘊六識等體。然諸法中。若二言已上。乃成六釋。若單一名。便非六釋。以無離合相故。

從此第二釋藏名。論云。已釋對法。何謂此論名對法藏。頌曰。

攝彼勝義依彼故　此立對法俱舍名。

釋曰。上句釋藏。下句釋名。攝彼勝義依彼故者。以二義釋藏也。一攝彼勝義故。二依彼故。攝彼勝義者。包含名藏。謂此俱舍攝彼對法發智論等諸勝義言故名爲藏。對法之藏名對法藏。依主釋也。依彼者所依名藏。謂此俱舍依彼對法發智論等。從彼引生。彼是所依。故名爲藏。發智論等是對法藏。今此俱舍有對法藏故名對法藏。有財釋也此立對法俱舍名者。結成也。（冠註論本第一三十七左）

【暉鈔】卷上本二十六左　攝彼勝義者。本論所詮無漏慧及四諦涅槃名對法。此論含藏此論名藏也。依彼者。本論無漏慧四諦涅槃名對法。此末論依彼本論造。與此論作所依名藏。對法即藏三字皆在

本論。有本論義。全取本論對法藏名也。

【麟記】論本第一四十四右　言包含者。釋含藏義。准正理云。西方藏有二義。一堅實義。二所依義。言堅實者。猶如樹心名爲樹藏。是出生義。後將此藏造餘物。時亦名爲藏。本對法中諸堅實義名藏。後將勝義來造此論。亦名爲藏。今隱本論藏義但擧對法之名成依主。然今章中但有包含無堅實義。寳法師准正理唯堅實無包含。所以然者。雖同是釋勝義之文其意各別。彼取所攝之勝義故唯堅實。此取能攝之言敎故曰包含。二說雖殊不相違背。有人破包含唯取堅實。今不同彼。

從此第三明說意說人。論云。何因說彼阿毘達磨。問說意也　誰復先說阿毘達磨。問說人也。頌曰。

若離擇法定無餘　能滅諸惑勝方便
由惑世間漂有海　因此傳佛說對法

釋曰。從若離擇法乃至第四句因此說對法者明說論意也。傳佛說對法者明說論人也。故第四句說對法三字通兩處也。擇法者。慧也。慧能滅惑爲勝方便。若離於慧定無有餘能滅諸惑勝方便也。由煩惱惑

令有情世間漂在三有生死海中。故說對法。以對法中詮慧故也。論雖明戒定兼非正也。傳佛說對法者。然佛世尊處處散說阿毘達磨。迦多演尼子等結集安置。猶如大德法救所集無常品等。鄔陀南頌。已上論文也。鄔陀南者此言集施。或云集散。集所說義散施有情名鄔陀南。言法救者以法救人故也。法救大德佛說無常義集爲無常頌。乃至無我義集爲無我頌。上來明序分竟。（冠註論本第一三十八左）

【暉鈔】卷上本七十三右　然佛世尊處處散說者。論主云。論藏是佛說。散在經中。論主結集在一處。言論主造。傳佛者。表己不說。量云。此論是有法。定是佛說是宗法。因云。餘人結集故。同喩云如無常頌也。迦多衍尼子者。迦多衍此云剪剃種。西方貴族。依婆羅門法。七歲已上在家學問。十五已上四十已下遊方。四十歸家娶妻。繼嗣家族。有一仙人。養二子已。五十已上却入山修道。二子長大入山尋父。見父鬚髮蓬亂。以刀剃除。顏容端正。諸仙見已皆欲剃除。弟性慈敏。來者皆剃。兄性傲慢。若非我父不剃。諸仙嗔怒。咒彼弟言。乃至劫末。是汝眷屬常大富貴。咒彼兄言。乃至劫末。是汝種族。剪剃自活。西方現有二種。弟不作剃頭事。仙人咒力使之然也。那是男聲。尼是女聲。男生者名那子。女生者名尼子。鄔陀南此云自說。即十二分敎中第五自說經。毘婆沙者。毘之言勝。或云廣及異。婆沙云說。說義勝故。說義廣故。說義異故。含此三義。故存梵本也。

【麟記】論本第一四十四左　言若離於慧定無有餘能滅諸惑者。此通伏難。伏難意者。說餘二藏亦能利物。何要說論方能益物。答云。若離於慧定無有能斷惑證滅。戒定二種於其斷惑但有助能無正功用。由此故不說經律二藏。言令有情世間者簡器世間也。言傳佛說對法者。此意云。法本佛說。由上因緣諸聖弟子乃傳世尊所說對法。故名傳說。此傳說言非表不信。與餘不同。言然佛世尊處處散說者。亦通伏難。伏難意云。若佛說者。何故乃言迦多演尼子造等。婆沙有二說。一云。佛說。由迦多演尼子受持演說。名稱屬彼。二云。佛經中散說。由迦多演採集安布名稱歸彼。此論同第二說也。演尼子等造發智等。等取舍利子目連等造六足論等。言猶如大德法救者引例證成。然此尊者佛涅槃後三百年出。鄔陀南者。此云自說。即十二分教中無問自說經也。若言嗢陀南方言集施。此言集施等疏主誤也。

從此已下明論正宗。就中有二。一總標綱要。二別釋體性。且初標綱要者。論云。何法名爲彼所簡擇。因此傳佛說對法耶。頌曰。

有漏無漏法　除道餘有爲　於彼漏隨增　故說名有漏
無漏謂道諦　及三種無爲　謂虛空二滅　此中空無礙
擇滅謂離繫　隨繫事各別　畢竟礙當生　別得非擇滅

釋曰。初一句總標。後十一句別釋。就別釋中。前三句別釋有漏法。後

八句別釋無漏法。有漏無漏者。標也。謂一切法不過二種。一者有漏。二者無漏。除道餘有爲者。明有漏體也。除道者除道諦也。諦有四種。苦集滅道。苦集道三是有爲法。道雖有爲是無漏法。今明有漏故除道也。餘有爲者即苦集諦。道諦外故稱之爲餘。故餘有爲即苦集諦。於彼漏隨增者。解有漏義。於彼者彼前苦集。漏謂煩惱。泄過無窮。煩惱名漏。諸漏於彼苦集諦中等隨順增長故。苦集諦名爲有漏。有彼漏故。故論云。諸漏於中等隨增故。漏於苦集相應法中所緣法中。互相隨順互相增長。相望力齊故名等。又論云。緣滅道諦諸漏雖生。而不隨增故非有漏。不隨增義隨眠品中自當廣釋。故說名有漏者結也。（冠註論本第一 三十九左）

【暉鈔】卷上本 二十七左　總標綱要者。綱者綱系。要者要略。此三行頌總標一品大意。根界二品總明有漏無漏。初句標此二品言有漏無漏法。世品下三品別明有漏法。次三句標此三品別明有漏法。後兩行別明無漏法。標後三品。問。空非擇滅既非四諦攝。如何亦在此頌明。答。因明有漏無漏法次空非擇滅是無漏法。因便。境增者但非有情稱可自情即是明也。問。若取心增境名漏。滅道亦心增。應是有漏。答。取境增心。心境互相順名漏。舊云。有流無流法與今有漏何別。答。漏義

寛。一流義名漏。二住亦名漏。卽久住生死。漏具二義。流無住義。又釋。久住生死及反本還源。正趣向涅槃亦是流義。流義通染淨。漏義局染故爲有漏。問。煩惱令久住生死。卽名漏者。業亦令有情久住生死。應名漏。答。業無煩惱潤。不感三有。無學雖有無量故業。無煩惱潤。不能感果故。業不得漏名。經部釋。不與漏爲依無漏。與漏爲依卽有漏。無學色身外非情等。皆不與漏爲依皆名無漏。若爾外糞等人不貪着。不與漏爲依。應名無漏。答。人雖不貪。畜等還生貪。

問。苦集二諦。苦有十惑。集下七惑。各有九品。集下九品繫苦諦。苦諦下九品繫集諦。又修道有九品。被下八品繫。乃至下品亦被上八品繫。如苦知已生斷苦下十惑。諦猶被集下七惑九品繫。如何苦下得擇滅。修道下下品道生斷上上品惑。上上品惑被下下品繫。如何斷上上品惑得無爲。答。光太二師釋云。五部各五縛。一相應縛。如心心所與煩惱相應。所緣分四。一自部自品。卽苦諦上品貪縛上品瞋。二自部他品。卽苦諦上貪縛下瞋。三他部自品。卽集下上貪縛苦下上品瞋。四他部他品。卽集下上貪縛苦諦下下瞋。兼相應縛爲五。修道或有五。准前說之。見道煩惱及同時心心所具五縛。得四相有四。除相應一。修道煩惱及同時染心所有五縛。得四相及一切三性色兼善無記心心所具四。除相應一。若見道苦法智忍生斷苦下煩惱。斷前三强縛。離有集下二劣縛未斷。以劣故不能障。若下得無爲。見道下惑同時得四相斷二强。除相應一也。修道下下品道生斷上上品惑。卽斷相應及自部自品二强。餘三劣不能障上上品惑。得無爲。若得四相一切色及無記四蘊除相應一。但斷自部自品一强縛也。太法師意。准前分五縛。自部卽近。他部卽遠。不能障也。二人意同。如修道有貪瞋癡慢。上貪縛餘三惑。斷貪了餘三惑上得無爲也。破二古人云。如修道下下品貪縛下品瞋。

有何別因說強及近。餘上品貪縛下下品瞋。即名劣及遠。若彼救云。下貪縛下瞋力等者。即不合言強及近。以下品望上品劣故。又若救云。以上強品望縛下品力不等名劣。下貪縛下瞋力等名強及近者。應上品貪縛下瞋。下瞋應隨能縛貪名上品。又下貪縁下瞋力勝者。即不合言同品。自語相違。豈有上品貪縁上品瞋即勝。縁下瞋即劣。又下三品合為一品上貪縁時。此能縁貪為上為中為下。古人斷上品貪瞋上得無為。不成自性斷。未至第九品即得無為。不成縁縛斷也。今師釋云。斷有三種。一自性斷。一切見修煩惱染法及同時心心所得四相。隨當品能對治道生時煩惱上得即斷自性。是可斷故。二縁縛斷。若縁他身五蘊煩惱。及自身三性色。有漏善無記四蘊皆縁縛斷。九品能縛惑得斷處即自性斷。至第九品所縁法得解脫邊即縁縛斷。修道前八品即唯自性。第九品望煩惱斷即自性。所縁法得解脫即縁縛斷。三不生斷。如利根聖人於見道煩惱至上忍即不生。及修道九品不出觀斷即不生斷也。麟角菩薩人七方便即不生。獨覺鈍根聖人當品不生也。問。佛七方便二無知即不生。何故論言金剛心時方斷不染無知。答。論言於金剛心斷者。據闕所依身及得斷說也。問。今師何以得知立二斷。答。正理第六及此論隨眠品云。自身煩惱由得斷故。縁他身染及一切色不染四蘊。由自身中所有煩惱究竟斷故。此上即自性斷也。何縁諸地有漏善法唯最後道能斷非餘。以體是善不可令斷。至第九品善法得解脫。此文是縁縛斷也。問。得四相及心心所體非是染。如何是自性斷。答。與煩惱同一聚皆成染。皆自性斷也。古人問言。若立自性煩惱斷處得無為。非所縁上得無為者。如何此論。隨繫事各別。即是所繫上得無為。又婆沙三十一云。諸有漏法。無始煩惱繫縛不得解脫。若斷煩惱有漏法便得解脫。如人離繩說人解脫。又此

論下文。應知從所緣可令諸惑斷。准此三文。卽所緣上得無爲。如何言非所緣上得無爲。答。通第一云。此出擇滅數量。色法一一極微。心心所一一刹那。皆有煩惱繫縛。今斷一一極微。刹那上煩惱皆得無爲。又破正量部許一切法共得一無爲。又此論文簡無漏法非所繫也。通第二云。此破外道執外境爲眞欲體。要斷外境方得解脫。爲破此執。斷能緣貪心。卽所緣自得解脫。如人斷繩自得解脫。通第三云。心增境故與境相應。但斷緣心境得解脫。非是遮自性斷也。問。七十五法。幾自性斷。幾所緣斷。答。作四句。第一句唯自性。卽大煩惱六大不善二小煩惱十不定貪瞋慢疑。第二句唯所緣。十色全無表除道共及四相得一分。餘九不相應全。第三句通二。心王大地十尋伺悔眠得四相。取有漏染邊卽自性斷。善無記與染爲境邊卽所緣。第四句取道共無表及三無爲及餘無漏法可知。

【麟記】論本第一 四十五右　自下正宗有六百頌。於中界品有四十四頌。初二十五頌總明漏無漏法。後十九頌諸門分別。就二十五頌中。前三頌開一切法爲漏無漏。次二十二頌開爲五蘊十二處等。宗是主義。所尊所崇所立之義。初言總標綱要者。舊有三解。一云。此三行頌標前八品。名總標綱要。初一句總明有漏無漏法。標界根二品。次三句別明有漏法標世業隨眠三品。後兩行頌別明無漏法。標賢聖智定三品。前之序分及此總標。以文少故。寄在界品中明。第二云。此頌但標界根二品。此三行頌通明漏無漏法故。第三云。此頌唯標界品。於界品中初標頌故。然今章中同第三說。言漏者。謂諸煩惱於六根門泄過無窮。名漏。此有二義。一住義名漏。令諸有情留住生死。二流義名漏。令諸有情流轉生死。又鞞婆沙云。煩惱留住卽定。行卽不定。由如水漏穿破堤塘。傍流漂蕩卽損

苗稼。喩煩惱漏穿破六根之堤塘。漂蕩善法之苗稼。言隨順增長者。於苦集境隨住增長故。此約增惑釋有漏義。非約生惑即名有漏。言漏於苦集相應法中者。謂貪等煩惱於受想等心心所相應法中也。所緣法中者。謂於苦集所緣中也。言互相隨順者。謂煩惱順心。心順煩惱。如水與乳。此相應法中相隨順也。煩惱境順。境順煩惱。所緣法中相隨順也。言互者。二類之中各自相互。非謂二類相望爲互。言互相增長者。煩惱染心令成染汙。心順煩惱相續增多。又境順能緣令惑增長。煩惱增境令漏過成。其力均平故名爲等。此同舊初解。若新但云諸漏於彼苦集法中平等隨增故名爲等。詳此釋應理。以論但言諸漏於中等隨增故。不顯互相隨順之義。然舊第二亦爲此釋。不測疏主何以辯之。此二隨增相者。正理論云。先軌範師作如是說。如城邑側有雜穢聚。糞水土等之所共成。於此聚中。由糞過失令水土等亦成不淨。由水土力令糞轉增。更互相依皆甚可惡。如是煩惱相應聚中由煩惱力染心心所。煩惱由彼勢力轉增。更互相依成雜穢汙。此聚相續漸增。亦令隨行生等成染惱故。此顯相應隨增也。如猪犬等居雜穢聚生極耽樂。眠戲其中糞穢所塗。轉增不淨。復由猪等穢聚漸增。如是所緣自地有漏。由煩惱力有漏義成。彼復有能順煩惱力。令其三品次第漸增。此釋所緣隨增。自地簡他地。他地不隨增。故境如猪。煩惱如糞。相應如水土等。言緣滅道至不隨增者。釋伏難也。難云。身見等漏緣四諦生。何緣滅道便非有漏。答意如章。然佛涅槃後五百年中。炎羅國法勝論師造阿毘曇心論云。若生諸煩惱。是聖說有漏。至六百年。達摩多羅造集阿毘曇心論。以生名濫故。改云若增諸煩惱。是聖說有漏。今論主依彼正義故亦言增。由是滅道雖生而不增故非有漏。言不隨增義隨眠品釋者。彼云。無漏上境煩惱雖緣。猶如炎石足不隨住。又正理云。如清淨人誤墮穢聚。雖

觸糞穢。而非所增。人亦無能增彼穢聚。如是無漏異界地法。雖有亦彼煩惱所緣。而彼相望互無增義。此緣無漏異地隨眠。但由相應有隨增理。准此相應即寛所緣便狹。若是所緣隨增必相應隨增。自有相應隨增而無所緣隨增。又雖苦集漏境互增。但取增漏名爲有漏。不取增境名有漏也。以此正釋。境名有漏。故苦集能生亦能增漏。如沃壤田。能生苗稼。亦令增盛。名爲有苗。滅道雖生。如鹹鹵田。雖能生苗。不能增盛。名曰無苗。然此義要。故且叙之。已上總明有漏義竟也。

無漏謂道諦及三種無爲者。別釋無漏也。道諦者有爲無漏也。三種無爲者無爲無漏也。謂虛空二滅者列三無爲也。二滅者擇滅非擇滅也。此中空無礙者釋虛空體。此中者於略所說三無爲中。虛空但以無礙爲性。由無障故色於中行。（冠註論本第一 四十一右）

【暉鈔】卷上本 三十二右　於略所說三無爲中者。先列三名。後牒釋。先釋虛空。後釋餘二。名於略。或餘部立九無爲。大乘立六無爲。此論說三名略也。問。心心所亦無礙。應是虛空。答。論云。但以無礙爲性。心所各有別體。受領納。想取像等。虛空但用無礙。更無別體也。色於中行者。顯虛空體是無礙。若空體是礙。即無明闇色行。不說虛空於礙法中行者。以礙法即空故不說也。由有虛空故得有空界色。有空界色得有四大能造及所造色。由所造色得生心心所法。若無虛空即無空界色。乃至心心所不得生也。礙法即空者色法空也。問。空界色無礙應是虛空。答。空界色雖非能礙是所礙。彼他舍等礙即不生也。問。無表非能所礙。應是虛空。答。無表體雖不是礙。從礙生

故非虛空也。

【麟記】論本第一四十七左　言無漏至及三種無爲者。此四類法總是無漏。故論云。此虛空等名無漏法。所以者何。諸漏於中不隨增故。解云。若滅道諦違彼漏故。緣而不隨增。若虛空非擇滅不緣不增。故此二類同名無漏也。言於略所說三無爲者。新云。列名未釋名之爲略。舊云。若隨事別體乃衆多。今總標三。故言略說。言虛空但以無礙爲性者。出虛空體也。無礙之言簡於色法。但以之言簡心心所及不相應二種無爲。此等諸法雖無礙同於虛空。然有別體。非是但以無礙爲性故。舊云。但以無礙爲性者。雖標總稱卽受別名。如色處等。言色於中行者。釋虛空相也。正理論云。虛空容受色等有爲故。新云。色是礙法於空中行。顯空無礙。於礙法中不得行故。無礙之法於空中行。不顯無礙。於礙法中亦得行故。雖言無礙。而不可說虛空體相在此在彼。無方所故。如眼識等。問。若以不礙名虛空。空界色性亦不礙他。應名虛空。答。空界色性雖非能礙。而是所礙。被餘色障而開避故。其體不生。今此虛空非其能障。亦非所障。故曰虛空。世言虛空。於空界色說虛空聲。實非虛空。問。何故但言色於中行。不說住等。答。理實住等亦依虛空。據顯說行。或行謂生。色於中生也。

擇滅謂離繫者。出擇滅體。擇滅以離繫爲性。繫者縛也。縛有二種。一相應縛。二所緣縛。然此二縛隨眠品明。此略不釋。斷此二縛證得無爲。名爲擇滅。擇者慧也。由慧簡擇四聖諦故。滅者涅槃不生。名滅。

擇力所得滅名爲擇滅。如牛所駕車名曰牛車。略去中言故作是說。隨繫事各別者。明擇滅數量。謂擇滅隨所繫事體各別故。且如三界九地。地地有九品煩惱。九九八十一品。斷一品惑證一品擇滅。乃至斷八十一品證得八十一品擇滅故體各別也。又論云。依何義說滅無同類。問也。擇滅體多應有同類。經依何義說擇滅無同類耶。依滅自無同類因義。亦不與他。故作是說。非無同類。答也。依滅自無同類因義者。顯擇滅不從同類因生也。亦不與他者。擇滅亦不與他作同類因也。故作是說者。經依無同類因義故作是說滅無同類也。非無同類者。顯擇滅有多體同類也。（冠註論本第一四十一左）

【暉鈔】卷上本三十二左　經部三諦無處即是滅諦。更無別體。有部斷煩惱盡離煩惱繫。即是離繫爲性也。無爲理體同三乘證有淺深。如三獸渡河。涅槃經說無爲是不共者。就上得說。三乘聖道證各自有得也。

【麟記】論本第一四十八左　言擇滅以離繫爲性者。謂由離縛證得涅槃。離繫所顯。舉離繫名出擇滅體。言相應縛者。謂煩惱與心心所相應染縛心心所也。言所緣縛者。謂能緣惑縛所緣境也。下當廣述。言斷此二縛者。斷亦有二。一自性斷。謂對治道斷一一品煩惱自性。斷已不行名自性斷。二緣縛斷。謂能緣九品惑盡所縛離繫名緣縛斷。斷已容有現在前故。如下自明。言擇慧者釋名也。决斷

名智。推求名覓。擇法名慧。以八忍智等各別簡擇四聖諦故名爲擇也。言擇力所得滅者。由慧簡擇四諦之理。斷於煩惱證得此滅。從其能證名爲擇滅。擇之滅故名爲擇滅。此是法說。言如牛所駕車者。約喩以顯。言略去中言者。喩中略去所駕二字。擇滅略去力所得三字。並是中間言也。言隨繫事各別者。簡餘部也。如正量部計一切有漏同一擇滅。婆沙或說。唯內法有。經部有說。擇滅無體。爲對諸宗故言隨繫事各別也。事謂體事。隨繫之言簡無漏法。以無漏法無擇故。又論中返立云。若不爾者。於證見苦所斷煩惱滅時。應證一切所斷煩惱滅。若如是者。修餘對治則爲無用。若爾依何義說滅無同類。答。依滅自無同類因義。亦不與他。故作是說。非無同類。解云。謂不從同類因生。亦不與他作同類因。故言無同類。非無衆多之體類也。然今章中約能繫惑以明數量。故言八十一品。此同婆沙餘師之義。又云。如有漏法一一極微。一一剎那。各別法上有一擇滅。故諸論云。隨所繫事量擇滅亦爾。准此就所繫事以明數量。與章不同。

畢竟礙當生別得非擇滅者。釋非擇滅。言當生者當來生法。此當生法緣會則生。緣闕不生。於不生時得非擇滅。此非擇滅礙當生法令永不起名畢竟礙。言別得者。謂非擇滅有實體性。緣闕位中起別得得。故非擇滅得不因擇。但由緣闕。名非擇滅。論云。如眼與意專一色時。餘色聲香味觸等謝。緣彼境界五識身等住未來世畢竟不生。由彼

不能縁過去境。縁不具故得非擇滅。解云。如眼與意識。專一色時。所餘不見聞等色聲香味觸。落謝過去也。於專一色時合有一類五識縁彼已謝五境。縁正專一色故餘五識不得起。此未起五識畢竟不生。謂五境已謝故。五識唯縁現在。不合縁過去境故。未來五識得非擇滅。言觸等等取法界中有與能縁同時爲所縁境。謂他心智所縁心所也。五識等等取意識中亦有縁同時境。謂他心智也。以他心智唯縁現在。縁心不縁心所。縁心所不縁心。正縁心時縁心所他心智得非擇滅。正縁心所時縁心他心智得非擇滅。此約同時合縁者説也。亦論云。於法得滅應作四句。或於諸法唯得擇滅。謂諸有漏過現生法。以有漏故唯得擇滅。以過現生法故不得非擇滅。或於諸法唯得非擇滅。謂不生法無漏有爲。以不生故得非擇滅。以無漏故不得擇滅。或於諸法倶得二滅。謂彼不生諸有漏法。以不生故得非擇滅。以有漏故亦得擇滅。或於諸法不得二滅。謂諸無漏過現生法。以無漏故不得擇滅。以過現生故亦不得非擇滅。（冠註論本第一四十二左）

【暉鈔】卷上本三十右　問。前文即言礙當生法令永不起。後文即言但由闕縁。豈不相違。答。光法師引正理顯宗論云。由二縁得非擇滅。一非擇滅有力礙當生法。二由有爲法闕縁不生。方得

非擇滅也。寶法師云。但之一字能遮餘緣。又准婆沙。既言無爲無用。擇滅隨道判性。非擇滅隨命根衆同分判性。虛空無爲卽無記性攝。既言無用。不得言礙生法也。又有爲法未闕緣時未得非擇滅。如何言能礙。若闕緣了方得非擇滅。卽有爲法闕緣自不生。如何言能礙。前文言礙當生法令永不起者。據得非擇滅了。闕緣不生法。畢竟不生。據生與不生相違名礙生法也。問。擇滅非擇滅誰多誰少。答。擇滅如有漏苦集二諦。非擇滅如有爲苦集道三諦。問。非擇滅爲共不共。答。通共不共。若自身五蘊闕緣得卽不共。若兩人共物闕緣不生。卽通自他共得也。問。因見道力煩惱不生。得擇滅。擇滅卽道果。由慧斷煩惱三惡趣果不生。得非擇滅。非擇滅如何非果。答。本起見道卽爲擇滅。擇滅是道果。不爲非擇滅。非擇滅非道果也。問。擇滅非擇滅何寬何狹。答。擇滅世寬通三世。得體狹。唯有漏上得。非擇滅世狹。唯未來世。得體寬。通有漏無漏上。得四句分別。思而可知。不就虛空作句數。以無能得得故也。如眼與意專一色時者。有二說。一云。眼卽眼識。意卽意識。有緣一色意識。有緣二色。乃至有緣二十色。意識者今取緣一色者。二云。眼卽眼根。意卽眼識。以意名說。若爾前說卽有六識並生過。答。眼識與意識體同。以二名說。故亦無過。所以六識十二處中總名爲意。若不爾現在亦無十八界。此說爲正。六根亦二說。一說緣二十色識所依根各別。順前二說中後說。眼卽眼根。意卽眼識。第二二十色能緣識所依根同。順前二說中前說。眼卽眼識。意卽緣一色意識也。取此後說作闕緣者。未來有二十色。與二十能緣識互相繫屬定。聲八。味六。香四。觸十一。及他心智境四十六。心所及心王共有九十六境。與九十六能緣識相繫屬定。合同一刹那生。於中緣青色眼識生。餘九十五識卽不生。九十五境入過去。能緣九十五智及識。在

未來闕緣不生。得非擇滅。餘准此釋。若就九十六所依根各別。卽九十所依根在未來闕緣不生亦得非擇滅。餘五根至現在但無識託。不得非擇滅。若在現在及過去卽是生法。卽不得非擇滅也。

【麟記】論本第一 四十九左 言此非擇滅礙當生法者。此同舊解。彼云。此非擇滅謂有法體而能永礙未來法生。此法本欲礙生法不生。若法不生便卽起得逮與行者。故名得滅。問。法不生時但由闕緣。何關此滅。答。顯宗云。非唯緣闕便永不生。後遇同類緣彼復應生故。謂若先緣闕彼法可不生。後遇同類緣。何障令不起。解云。彼論意非唯緣闕令法不生。此法不生亦由滅故也。新云。准論說。既言但由闕緣。卽是更無餘力。又破云。後若遇緣還生。前不名闕。又云。無爲無用。何有力能鎭法不起云云。然此二說難可偏依。有傳。羅什法師存於舊解。今詳。新云無爲無用。理且可然。論文、但字未必證成唯一緣義。然此但言。爲對前滅由擇力得。此不由擇。是故且言但由闕緣。何妨當生更有餘緣共證。如言無尋唯伺。豈無受等所餘心所。然舊言起得逮與行者。有太過失。應言法永不生得非擇滅。不應言非擇滅有力起得逮與行者。舊又云。且約得偏說不生。據此體實通三世有爲。故婆沙云。非擇滅如有爲數量。過現是有爲攝故。若言無者此既不生。應無此滅。又云。外非情共有法上非擇滅卽共得。以是有情共業感故。若內有情不生法上卽各別得。以別業故。言起別得得者。此有二釋。一云。異前擇滅別自起得。名爲別得。二云。緣闕位中證非一品。別別而得名爲別得。如前擇滅隨繫事別。後釋爲勝。言如眼與意等者。指事明也。眼謂眼根。意謂意識。前後相續專一色時。言眼已攝眼識。以見色時必有識故。此謂一分意識取色之時。餘識等法得非擇滅。或卽眼識以意名說。以十二處中亦名意故。然依此宗六識不俱起。

五識唯緣現故。約此以辯非擇滅也。言所餘不見聞等謝者。如專一青色時。同時黄赤等色及餘四境謝滅故。能緣彼境之五識永不復起。以六識不俱。被緣青識障故。現不得起。第二念頌境以落謝故永不生也。言有與能緣同時爲所緣境等。謂意識能緣三世。若通論法界。雖不要與能緣同時別有一分要與能緣同時。方爲其境故言有與。由是五境必與能緣同時故。論文中具舉五境。法境不要同時。不得盡舉法境。但置等言以攝。言意識中亦有緣同時境者。通論意識能緣三世。別有一分亦緣現在。同前五識。故言亦有。然非盡爾。故亦言等。言約同時合緣者說者。謂約同時應定被緣。今不緣故得非擇滅。名之爲合。非謂並緣二境名合。又此中義皆是舉所緣境。顯於能緣識得非擇滅。非謂言境得非擇滅。總標已竟。

從此第二別釋諸法體。於中有二。一辨諸法異名。二明諸法體。就辨異名中分二。一明有爲異名。二明有漏異名。且初明有爲異名者。論云。前言除道餘有爲法是名有漏。何謂有爲。頌曰。

又諸有爲法　謂色等五蘊　亦世路言依　有離有事等

釋曰。又諸有爲法謂色等五蘊者。標有爲法也。爲者作也。此有爲法衆緣造作故名爲。有彼爲故名爲有爲。問。過現衆緣造作故可說名有爲。未來既未造。如何名有爲。答。是彼過現造作類故。故名有爲。如

乳如薪。飲兒乳時可名爲乳。未飲名乳飲流類故。正燒名薪。未燒名薪燒流類故。色等者等取受想行識。名爲五蘊。亦世路言依有離有事等者。正辨異名。亦世路者。世謂三世。路卽是法。世所依故。謂過去法是世已行。現在法是世正行。未來法是世當行。故有爲法是三世路。世之路故名爲世路。依主釋也。又解。此有爲法可破壞故名之爲世。無常所依故名爲路。世卽是路名爲世路。是持業釋也。故論云。或爲無常所呑食故。解云。有爲被無常遷。無常是能呑食也。言謂言語。以聲爲體。此言所依卽名俱義。言俱義者取有爲義。此所詮義與能詮名俱墮三世。故名俱義。無爲雖義不墮三世。不名俱義。非言依也。有離者。離謂永離。卽是涅槃。一切有爲有彼離故名爲有離。如有財者名爲有財。有事者。事是因義。有爲有因故名爲有事。頌文等者等取有果。有爲有果。無爲無果。是故有爲名爲有果。如是等類是有爲法差別衆名。（冠註論本第一四十五左）

【暉鈔】卷上本 三十四左　諸者。前已列有爲名。卽除道餘有爲。今更出體。故言又諸也。衆緣造作者。破外道執梵王等一因生法。言衆緣造作也。色等五蘊者。簡戒等五蘊。戒等五蘊攝有爲法不盡。色等五蘊攝七十二法盡也。小乘時無別體。約五蘊實法上立。謂有爲法經三世行。與三世爲路也。無常者。或說一相卽無常。或說二相卽生滅。或說三相四相可知。以聲爲體者。約名等所依說。據實說。聲卽是取名。與聲各別體。問。何故但說名不說句。答。名召法體。句卽非。又有無不定。以一字名等卽無句。不通不說。若然者文卽是字。更通一字卽有文。何故不說文。答。文不能召法體。今取能召故不說也。有離者。有爲法於五趣生死不能出離。涅槃名離能捨有爲。有爲法有彼涅槃可捨離。故名有離也。問。無漏道亦能捨有漏。如何道諦却是所捨。答。道如船筏。至涅槃岸亦須捨。卽經云。法尙應捨。何況非法也。問。若無漏能捨有漏者。下重空何以有漏捨無漏。答。爲著無漏空故。以有漏空遣前執著也。問。離繫有漏法上有。如何無漏有爲有離。答。若據顯擇滅卽有漏有無漏無。今據至無餘涅槃岸。卽有漏無漏皆可捨。有事者。事是因義。有爲因生。若經部事者體義。有爲有體。無爲無體。三諦無處卽滅諦也。

【麟記】論本第一 五十一左　自下別釋。然於此中。皆是從略至廣。從總至別。可以思知。言謂色等五蘊者。正理云。爲簡無爲戒等五蘊。是故復言色等五蘊。又言。老病死等災。橫差別隱積損伏。故名爲蘊。此說有爲有多過患隱伏其中。遇緣便起。如賊隱山。言衆緣造作者。謂無少法一緣所生。咸是衆緣共所作故。卽是衆緣共所生義。言造作類故者。類言亦顯不生諸法。言未飲名乳者。卽說乳房亦說名乳。又言。或據曾當有造作義。如琴瑟等名爲有聲。釋世路中。前解世是能行。

法是所行。故依主釋。後是持業。新云。前釋三世即路。名為世路。是持業釋。又云。諸有為法行世路故。名為世路。即是有世路故名為世路。是有財釋。後釋無常所吞食故。眞諦云。行行不息。能盡萬里之路。無常是世。有為是路。與世作路故名為世路。即世之路。是依主釋。言無為雖義不墮三世者。謂無為體義與有為同。故言雖義。然無為之名自墮三世。體不遷流與前即異。故非名俱。此中約能詮之名所詮之義俱行三世以釋言依。以與名言為所依故。言離是涅槃者。正理論云。諸趣輪廻沈溺生死。涅槃永捨。故名為離。是息諸趣恒流轉義。一切有為皆同船筏。是故聖道亦應捨離。諸有為法至涅槃時皆可捨故。事是因義者。正理云。事謂所依。或是所住。即是因義。果依於因。從因生故。如子依母。或果住因。如人住床。是因為果所映蔽故。依經部師。事是體義。有為有體。無為無體。故知有事唯攝有為。論主意朋經部。故論云。毘婆沙師傳說如是。

其次第二明有漏異名者。頌曰。

有漏名取蘊　亦說為有諍　及苦集世間　見處三有等

釋曰。有漏名取蘊者。煩惱名取。能執取生死故也。蘊從取生。故名取蘊。從因為名。如草糠火。火從草糠生。名草糠火。或蘊屬取。故名取蘊。從屬為名。如帝王臣。臣屬帝王。名帝王臣。或蘊生取。故名取蘊。

從果爲名。如華果樹樹生華菓故名華菓樹。言有諍者。煩惱名諍。觸動善品損害自他故名爲諍。此有漏法諍隨增。故名爲有諍。有彼諍故。猶如前說有彼漏故名爲有漏。苦者苦諦。三界有漏違聖心故總名爲苦。非是苦受逼迫之苦。以彼苦受唯欲界故。集者。集諦。有漏諸法招集苦故名之爲集。世間者。是可毀壞義。有漏諸法有二種壞。一四相壞。二對治壞。故名世間。無漏道諦雖四相壞。闕第二對治壞故不名世間。亦名見處者。見謂五見。身見。邊見。邪見。見取。戒禁取云。此有漏法見所住處。故名見處。名三有者。欲有色有無色有。諸有漏法有三種義得名三有。一三有因。因即集諦。二三有依。依即苦諦。三是三有攝。具此三義故名三有。等者等取有染。如是等類是有漏法差別衆名。（冠註論本第一四十七左）

【暉鈔】卷上本三十六右　初釋即四取爲因。當蘊爲果。第三釋據現蘊能生四取。從取果爲名也。見處者。問。五見前有諍中通說十惑。何故別擧五見名見處。答。貪等自相惑。緣順不緣違等。五見

是遍緣惑。順違皆緣。過重更立名見處。如煩惱濁外別立見濁。亦准釋。獨頭無明雖遍緣。以相應癡不遍故不別舉。疑雖遍緣。以因果中疑有卽正。疑無卽邪。通緣邪正不堅執故。過輕故不重說也。三有等等取有染有取有覆塵垢等也。

【麟記】論本第一五十三右　言蘊屬取者。雜心云。蘊爲惑所使。如因貪瞋有殺等事。言煩惱名諍者。汎論其諍。總有三種。一煩惱諍。二言諍。謂因言論以生諍故。三蘊諍。蘊死二魔諍生死故。今此有諍是煩惱諍。言損害自他者。如經言。一念之惡能開五不善門。一損壞善品。二從惡生惡。三聖人所呵。四退失道果。五死墮地獄。言違聖心故總名爲苦者。謂有漏苦果流轉無常理皆是苦。凡夫不覺。聖者乃知。是故但言違於聖心。如下頌言。如以一睫毛置掌人不覺。若置眼精上爲損及不安。愚夫如手掌不覺行苦睫。智者如眼精緣極生厭怖。又正理云。五取蘊者是諸逼迫所依處故。自性麤重不安穩故。名之爲苦。言非是苦受之苦者。苦且有三。一苦苦。唯欲界。二壞苦。通色界。三行苦。通三界。今三界有漏總名苦者約行苦說。故非苦受。言四相壞者。謂有爲法爲生住滅等之所遷變故。二對治壞故者。謂有漏法爲能治道所對治故。正理云。如世尊說。性可毀壞故名世間。若爾道諦應是世間。不爾。有漏具二故名世間。道諦闕一故非世間。以無漏無過可對治故。又四相壞簡異無爲。對治壞簡異聖道。言亦名見處者。論云。見住其中隨增眠故。言三有者。卽三界之異名。言三有因者。謂有漏蘊與三有爲因也。言三有依者。謂有漏蘊與三有爲所依也。言等取有染者。此准正理向外等取有染。若此論向內等卽但等上諸類。如是等類等者總結也。

從此第二正明體性。就中有三。一總辨體性。二別釋名義。三諸門分別。就總辨體中分三。一正出體。二明總攝。三顯開合。就第一正出體中分三。一明色蘊。二明三蘊。三明識蘊。就明色蘊中分二。一正立蘊。二立處界。就立蘊中分二。一開章。二別釋。且初開章者。論云。前言色等五蘊謂有爲法。色蘊者何。頌曰。

色者唯五根　五境及無表

釋曰。五根眼耳鼻舌身。五境色聲香味觸。及無表色。此十一種名爲色蘊。（冠註論本第一四十九右）

【暉鈔】卷上本三十六右　色者唯五根者。經部立四大及根境爲十四。尊者覺天不立所造色。百法更立法處色等。今遮彼說言唯五根等也。

【麟記】論本第一五十四右　此十一種名爲色蘊者。如經部不立無表。覺天不立所造色。大乘於法處中更立多色。此宗唯依十一色量立色蘊名。

從此已下依章別釋。就此有三。一釋五根。二釋五境。三釋無表。且初釋五根者。頌曰。

彼識依淨色　名眼等五根

釋曰。彼者。彼前眼等五根也。識者。即眼耳鼻舌身識也。眼識等五依止眼等五根。從依得名。名眼識等。頌言彼識。彼能依識。故名彼識。依淨色者。彼識所依五種淨色。名眼等五根。眼等五根體淸淨。故如珠寶光。故名淨色。（冠註論本第一四十九左）

【暉鈔】卷上本三十六左　彼所依識者。彼五根能依識。名彼識。或更一說。彼色等境能緣識名彼識也。依淨色者。一五識依五根。五根無記。二五識依色。言淨色簡意識。意識所依。一通三性。非是淨。二非色也。體淸淨者。意明根見聞等。雖餘扶根四塵體亦是色。以光明有隔。五根光明無隔也。如瑠璃等。

【麟記】論本第一五十四右　頌言彼識依淨色者。舊解云。若但言彼識依色。不言淨者。扶根四境亦能爲依。復通名色。應名眼等。若但言彼識淨色。不言依者。淸池明鏡亦是淨色。應名眼等。若但言彼識不言所依淨色者。眼等五識應名眼等。若具足說識依淨色三。方無有失。言前者。指前開章中五根也。即是彼眼識所依之淨色。名爲眼根。耳等亦爾。論中具有兩說。今章但引第二正說。然初說云。彼謂彼前色等五境。識即色聲香味觸識。彼識所依五種淨色。如其次第應知。即是眼等五根。論主評取根識爲正。故論云。如是便順品類足論。如彼論說。云何眼根。識所依淨色。

爲性。如是廣說。正理亦同。言五種淨色者。論云。如世尊說。苾芻當知。眼謂內處。四大所造淨色爲性。如是廣說。正理難云。若爾淨色相無差別故應不成五。不爾。功能有差別故。如何得知。不共境識所依定故。乃至廣說。准有部宗。五根以淨色爲體。大衆部以肉團爲體。覺天以四大爲體。

次下第二釋五境者。頌曰。

色二或二十　聲唯有八種　味六香四種　觸十一爲性

釋曰。色二或二十者。色有二種。一顯。二形。或二十者。開爲二十。顯色十二。形色有八。故成二十。顯色十二者。青黃赤白影光明闇雲煙塵霧。形色八者。長短方圓高下正不正。日焰名光。月星火藥諸焰名明。障光明生。於中餘色可見名影。翻此爲闇。謂形平等名之爲正。形不平等名爲不正。餘色易了。故今不釋。（冠註論本第一五十右）

【暉鈔】卷上本三十六左　六境次第先香後味。頌中卽先味後香者。正理釋頌云。若釋頌依境次第。謂六根次第生。今先味後香。顯六根起無先後。境緣卽先生也。顯色者。根本顯色但有四種。謂青黃赤白。餘八是此四色差別。影闇青色攝。光明雲煙塵霧通四色攝。若依四色立八色者。八

色應是假有。隨其義別立餘八色。如青色爲烟。烟末散爲塵等。亦是實有。更有紅碧紫綠等。卽是青等四色深淺不同。淺青爲碧。薄赤爲紅。青黃合爲綠。赤黑合爲紫等。問。不立空一顯色。答。婆沙正義。空一顯色卽是空界色一分攝。空界色卽是明暗色爲體。空一顯色卽明色攝。隨四洲上。北赤。東白。西紅。南青故。不立空一顯色也。障光明生有二說。一云。如柱東邊障光西邊發影。一說障光之處卽能發影也。形色八者。經部大乘更無別體。積聚顯色多少不同。相形待立長短等有別。有宗別有形色極微聚成形色。正理論云。離顯色之外別有形微。一說八種形色極微各別有體。各自聚成長短等八。如圓色。天生圓極微成。長短等色由二緣成。待緣卽金石等待人火等成。二不待緣自成。如鹽性方。散置水中煎成鹽還方。餘准此釋。一說八種形色極微卽一。由安布不同成八色。中凸名高。中凹名下。不立麤細者麤卽短收。細卽長攝。古人云。長短據橫。高下約竪。此釋非也。若離顯色無別形色者。應作意取顯卽便取長等。既不許然。故知二體各別也。光法師釋云。形長見短者。不見短時應無長等。卽應無形色。餘准此破。又釋云。可量名長。不可量名短者。七極微卽有分量。眼不見七極微。應不見長短。又世間不說可量名長等。若救云。眼見名可量者。滿空顯色眼見。應名長短等。若更救云。衆微聚集名可量者。香等三色。衆多極微聚集應名可量。既不許然。故知顯色體別也。正理三十四問云。鏡中像水中月。爲實色收。爲假色攝。答。經部假色。以面不入鏡中故。由鏡明爍自眼光入鏡。反見自面色。有宗卽實色攝。以三因故。一眼所見故。二眼識所緣故。三色處攝。同喩如有顯色。下谷中響准此假實也。問。既不入鏡。鏡不至面。如何是實色。答。生色因緣有多種。像色以鏡及面

爲緣生。如火鏡日照出火。月愛珠月照出水。水火豈非實有也。問。此二十色中何色攝。答。婆沙二說。一云。二十外別有像色攝。二云。即本質收。如青色像反本青色攝。餘准此釋也。問。本質是色像亦色。本質是礙像應礙。答。不可爲例。如長形色發影。影應隨本形色攝。影既顯色收。不隨本質形色收也。

【麟記】論本第一 五十五右　釋五境頌中說味在香前者。舊云。印度造論皆依聲明。若先香後味即犯聲。若先味後香即不犯聲。今依本翻故。味先香後。准正理越次說者。顯彼根境識生無定故。謂彼五識起時不定次第。言二色有二種者。總相且二。顯謂相狀。形謂分量。顯有十二者。青黃赤白四是根本。影光等八是四差別。故論云。顯色有四。青黃赤白。餘顯是此四色差別。舊云。光是黃攝。日初出時見赤色者餘物映故。或光是赤攝。或光是黃赤色攝。闇是青色攝。明通青黃赤白攝。以皆有明故。雲烟塵霧皆通青黃赤白色攝。月星火藥諸焰名明者。類知寶珠電等焰亦明攝。言於中餘色可見名影者。謂於障光之影中。猶可見餘物名餘色。非謂言影爲餘色也。言翻此爲闇者。亦即影中不見餘物名暗。非不見影爲闇。此謂於障光中色有輕重。輕者名影。重者名闇。上依章釋。其不釋者更略辯之。初顯色者。龍氣名雲。因火名烟。末散名塵。地水氣騰謂之爲霧。青黃等四本色可知。亦有碧紅紫綠等異。皆是淺深不同。更不別立。謂淺青名碧。薄赤名紅。青黃名綠。赤黑合紫。次形色者。於面齊平名爲正色。於面參差名不正色。一面多生名爲長色。一面少生名爲短色。四面齊等名爲方色。於一切處周遍而生名爲圓色。中凸名高。押凹名下。言一面多生者。謂六面之中一面也。理實六面之中兩面多生。恐難解故。故言一面。如

竹笋等。一面少者。翻上可知。長即是細。短即是麤。故八色中不立麤細。此長等色復有二類。一外緣成。如金石等。待匠等成長短等故。二種性異。如鹽性方。縱散成水。後還方故。解云。已北有顆鹽。方而有角。越瓜自長。瓜蔞性短。胡桃高下。櫻桃自圓。豆角性邪。如是等物種類差別。如針雖對瓜蔞是短。而是長色。瓜蔞雖對棗等是長。而是短色云云。又論云。有餘師說。空一顯色第二十一。依婆沙正義。空一顯色即是空界色一分。明暗所攝無別體性。此異師說。空一顯色非是明闇。別立此色。故二十一。又二十色各有像色。或是本攝。或非本攝。

聲唯有八種者。一有執受大種爲因有情名可意聲。二有執受大種爲因有情名不可意聲。三有執受大種爲因非有情名可意聲。四有執受大種爲因非有情名不可意聲。五無執受大種爲因有情名可意聲。六無執受大種爲因有情名不可意聲。七無執受大種爲因非有情名可意聲。八無執受大種爲因非有情名不可意聲。有情身中所發音聲名有執受。謂言手等也。就中語業名有情名。能詮表故。拍手等聲名非有情名。不能詮表故。風林河等所發音聲名無執受大種爲因。無執受中有情名者謂化人語聲。此化人身雖無執受。能詮表故稱有情名。餘義易知。（冠

註論本第一（五十一右）　有情身中所發音聲等者。此通釋前四對聲。就中語業下卽別釋初二聲。拍手等
下別釋第三四聲。風林河等下通釋後四對聲。無執受中有情名者。下別釋第五六聲也。化人語聲
名有情者。入阿毘達磨約能化本人說。呼召似有情。若然者簫笛等有屈曲。約人說應名有情名
聲。答。一化人相似有情。二以化人親化心發。三呼召似有情。約此三因是有情也。聲及香可意
不可意望情欲說也。問。既有可意不可意。如何無處中聲。答。處中卽不可意收。准此可意狹。不
可意寬也。將有執受對有情成四句。將有執受對可意。將有情對可意皆有四句。思可知。色中不
說可意及有執受。依聲中卽說者。聲性難知。而要約因辯。色麤可見故不說執受等。色二十。聲
八。香四。味六。觸十一。諸法多少種種差別不同。不可一例也。

【麟記】論本第一（五十六左）　言八種聲者。章中依入阿毘達磨及婆沙不正義。說八種聲。新云。正理此論
兩又並皆不同。然依此論。八種聲者。論云。謂有執受或無執受大種爲因。及有情名非情名差
別爲四。此復各有可意不可意差別成八。（解云。詳此論文。一有執受。二無執受。三有情名。四
無情名。更將可意不可意各配上四。故成八種。不將有情無情配執受無執受。連數爲八。故新云。
於執受大種爲因聲中有是有情名非有情名。於非執受大種爲因聲。唯是非情名耳。今章中非執
受中亦通有情名。如化人語者。新云。此聲無業。亦無有得。如離口業聲不名爲業。既知此
殊亦依章釋。）言大種爲因者。謂一切聲皆因四大相擊發故。言有情名可意聲者。語出好聲。如
歌讚等。言有情名不可意者。語出惡聲。如罵詈等。第三謂手等出好聲。第四手等出惡聲。第五化人出

善聲。第六化人出惡聲。第七非情出好聲。如簫笛等。第八非情出惡聲。如風林等。此等但言可意不可意不言處中聲者。除可意外皆是不可意。故攝聲盡。以違意處中皆是不可意故。准此亦應說有可意不可意色等。然由聲性難知故。就因等辯其差別。色是易知故不說也。言拍手等者。釋執受因也。以其手等所發音聲。然此手有心心所執爲所依受痛癢等。名有執受。等取發語等聲皆有執受。論云。有說。雜心論師也 聲通執受及無執受大種爲因。如手鼓合所生聲。此即昔云因俱聲是。論主破云。如不許一顯色極微二四大造。聲亦應爾。

味六者。苦酢鹹辛甘淡別故。香四種者。好香惡香等香不等香有差別故。沉檀等名好香。葱薤等名惡香。好惡香中增益依身名爲等香。損減依身名不等香。無增損者名好惡香。故好惡香中各分出等不等香故成四香。（冠註論本第一五十二左）

【暉鈔】　闕之

【麟記】論本第一五十七左　言味六者。正理云。味謂所噉是可嘗義。雜集論說和合味等。不離此六。然此諸法差別種種不同。不可一例。由此五境差別不等。色有二十。聲八。味六。香四。觸十一也。言香者。所馥名香。五事論云。諸悅意者說名好香。不悅意者說名惡香。言等不等者。正理有二說。初云。增益名等。損減名不等。次云。微弱名不等。增盛名等。又論云。本論中說。香有三種。好香惡香及平等香。

觸十一者。一地。二水。三火。四風。五輕。六重。七滑。八澁。九飢。十渴。十一冷。堅名地。濕名水。煖名火。動名風。可稱名重。翻此名輕。柔軟名滑。麤强名澁。食欲名飢。煖欲名冷。飲欲名渴。冷飢渴三、是心所欲。非正目觸。因有三觸發此三欲。故冷飢渴是觸家果。而非是觸。今言觸者從果爲名。故論云。此皆於因立果名故。如有頌曰。諸佛出現樂。演說正法樂。僧衆和合樂。同修勇進樂。解云。佛出現等實非是樂。能生樂故從果爲名。觸亦如是。）（冠註論本第一五十三右）

【暉鈔】卷上本三十九左　輕重不簡多少。但牽秤下即重。不牽秤即輕也。問。滑澁二相對二種皆立觸。冷煖亦相對。如何不立煖。答。煖四大中火收。若然者冷應四大中水攝。不應立冷。答。火以煖爲性。水以濕爲性。不以冷爲性。故別立冷也。問。四大一類。如何所造觸得有七類不同。答。有二說。一云。四大七類不同。所造得七類果。二云。約四大偏造。水大增即滑。風增澁。火風增輕。如人死無火風即重。地水增重。水風增即冷。風增即飢。風動身故飢。火增即渴。觸既二釋不同。准此色聲香味皆有二釋也。問。飢渴二觸即是所造身中。何處大種造。答。一說。腹邊大造。腹空即飢渴。一云。遍身大造。飢渴即邊身生苦也。問。飢渴二觸既是所造。爲是異熟。爲是長養。爲是等流四大種造。西方師說。非異熟大造。食水可斷飢渴故。有說通異熟。

如地獄身異熟還可斷。異熟大通善惡二業感果。貧富有別也。食欲名飢等者。冷飢渴三是心所欲之異名。所以疏云飲欲名渴。飲欲即是渴。如可秤名重。可秤即是重。此三欲是果。由近身有三觸塵觸身。然後發此三欲。此三觸因相雜難知。就果立名。喚此三觸因爲冷飢渴。全取果名也。問。五塵於色界具幾種。答。顯色十二中有九。無影暗煥。形八中無高下不正。聲八中有四。有第一三五七聲。無餘四聲。香味全無。觸十一中有八無飢渴。段食性故無澁觸。有冷觸以有風故也。問。准施設論。北洲衣重一兩。六欲天中四王衣半兩。三十三天衣一銖。六銖爲一分。夜摩半銖。都史一銖四分之一。樂變化天一銖八分之一。他化衣一銖十二分之一。皆是可秤有重。色界天衣即不可秤。無重觸。色界如何有重觸。色界一一衣即不可秤。衆衣聚集即可秤。或宮殿等可秤故有重觸。問。上來言身觸外境。爲相觸著不。答。有二說。一古薩婆多師云。不相觸著。若二極微分相觸。即二極微一邊不相觸。即有方分。非是細分。若二遍體相入。即色無礙過。以此理推。相近住假立觸名。極微實不相觸。若爾極微不相觸應風吹散。答。四大中以水界攝持故不分散。若不相觸以手觸花花色即壞。如何言不相觸。答。由手煥氣觸花引花中火大盛花色界即壞也。二新薩婆多師釋。正理論云。色香味觸許相觸。以性異故如世夫妻。色與色性同不相觸。如世父子。秘法不傳。香等准此釋。

【麟記】論本第一（五十八右）　言觸者。舊云。雖根對境實不相觸。無間生時根是識依。假說能觸。觸非識依。不說彼觸能觸身根。但名所觸。又觸與身根極相隣近故得名觸。香味二種雖亦至根。非如彼境。故不名觸。言可稱名重者。謂能牽可稱也。言翻此者即不可稱。及有上昇如烟焰等。

皆名爲輕。釋冷飢渴文有其三。一釋果名。二結歸因稱。三引例證成。言冷飢渴三是心所欲者。以言食欲名飢等故。冷飢渴名是心所欲。謂數由身中有觸力令欲煖。有觸力令欲食。有觸力令欲飲。所令之欲名冷飢渴。即是因其能令之觸。今能令之觸相隱難知。取彼所令果以名因體故名冷渴飢。故正理云。由此身中有觸差別逼切其身。令飲食欲。是飢渴因故名飢渴等。今言觸者。觸准義應云觸非冷飢渴。今言冷飢渴者是從果爲名。若言冷飢渴非觸。今言觸者。濫從因受稱。言中少倒義理亦通。有人解云。此冷飢渴體即是觸。由身中有飢等觸故。所以令飲食。飲食即心所法。今釋飢等。乃言食欲名飢者。謂於因中立果名故。有存此釋。與婆沙同。諸佛出世能生樂果者。樂謂涅槃。三界輪廻皆止息故名樂也。由佛出世能說教法證得涅槃果。與樂爲因。從果名樂。下之三句准此而知。此即道果名樂。非即樂受。問。澁滑輕重各相對立。何故對冷不說煖耶。答。煖是火。故不別說。若爾冷應水攝。何故別說。答。水濕爲性。不應攝冷。又婆沙云。有餘師說。水火增故滑。地風增故澁。火風增故輕。地水增故重。水風增故冷。風增故飢。謂風增故擊動食消。引飢觸生便發食欲。火增故渴。謂火煎迫飲消。引渴觸生便發飲欲。又正理說。悶不離滑。力即是澁重。劣在輕輭。輕性中攝。故不別說。由此十一攝觸皆盡。

從此第三明無表色。於中有二。一正明無表。二明能造大種。且初第一正明無表者。頌曰。

亂心無心等　隨流淨不淨　大種所造性　由此說無表

釋曰。亂心無心等者。明無表位。亂心者。此善無表。餘惡無記心名爲亂心。亂善無表故。善心名不亂心。同善性故。此惡無表。餘善無記心名亂心。亂惡無表故。惡心名不亂心。同惡性故。故善惡心通亂不亂。無記心唯名亂。無無記無表故。故論云。亂心者謂此餘心。無心者謂無想定滅盡定。等言顯示不亂有心。謂亂心等等取不亂心。無心等等取有心。亂不亂心散位一對。無心有心定位一對。故頌等字義通兩處。隨流者明無表相。隨謂隨順。性相似故。流謂流轉。相續起故。故論云。相似相續說名隨流。相似名隨。相續名流。淨不淨者出無表體。無表唯善惡。不通無記性。名淨不淨。大種所造性者簡法也。爲簡諸得。諸得者雖復通四位。行相似相續。濫無表相。然得非是大種所造。簡諸得故。是故復言大種所造。謂無表色大種所造故。造者因義。因有五因。一生因。二依因。三立。四持。五養。此後當說。由此說無表者

結成。由此者由此上三句得立。無表名說者顯此是師宗言。無表雖以色業爲性同有表業。然非表示令他了知故名無表。（冠註論本第一五十四右）

【暉鈔】卷上本四十一左　無表位者。無表在此四位行。別解脫無表通四位轉。定道無表唯有心定位轉。不律儀無表在亂不亂心兩位轉。今言四位據通相說。此善無表者。善無表在善心中轉名此。餘惡無記心名餘。是善心餘也。亂善無表故。是釋惡無記心。望善無表名亂心也。下惡無表在善無記心轉准此釋。故善惡心通亂不亂者。善無表在善心。善心名不亂。惡無表在善心轉善心名亂心。惡無表在惡心名不亂心。善無表在惡心。惡心名亂。無記即與善惡無表爲依處。一向名亂。無無記無表在無記心中轉故。無記心不名不亂心也。無想果雖即是無心位。無善無表於中轉故此不言之。問。頌中何故標亂心等不亂心。無心等有心。不標不亂心等。亂心有心等無心耶。答。善無表依善心生。在亂心無心位轉。性不同。希奇殊特。故頌標之。善無表在餘不亂及有心位轉性同故。頌不標不亂及有心。惡無表准釋也。正理破云。無心即無心位。亂心等即等取不亂心。亂心言通攝有心定成三。兼前無心即成四心。無心下等言更等何法。無心下應除等字。或可無心等等取有心。除無心外餘三心皆是有心攝。亂心等三字應成無用。正理取前義。改此頌爲亂心等無心也。安慧救云。亂心不亂心散位一對。無心有心定位一對。定散有別論主兩處置等字也。正理論初念無表初生無前念。臨命終無表無後念。與何相似相續。應除此二念無表。俱舍師救

云。四句分別。初念與第二念等相似相續。臨命終與次前念相似相續。中間無表通前後相似相續。設有初念無表入現在即捨者。亦是彼流類也。無表上能得、得亦隨無表通四位轉。亦前後相似相續。非四大造。不名無表也。問。表色四大造即能表示心。無表四大造應能表示心。答。言無表雖以色業下答此問。即爲不表示心名無表。定道無表長養大造。自餘一切色業等流大造。

【麟記】論本第一五十九右　言故善惡皆通亂不亂者。謂此二類各有無表。自望爲不亂。望他即名亂。又此亂名皆約心說。以明無表通在此諸心中故。言無無記無表者。明無記心但名亂不名不亂。以無同類無表爲所對故。故無記心但名爲亂。無記不發無表。如下當辯。言此餘心者。如指善無表爲此。即惡無記爲餘心。或對惡無表爲此。即善無記爲餘心。言無心者謂無想定及滅盡定者。問。何不言無想果耶。答。彼無無表故不言也。故正理云。雖更有餘無心果位。而無表色非所隨故。故無心言不攝於彼等。言顯示不亂有心者。頌中以二等字通於兩用。一等取不亂心。二等取有心。正理彈云。又謂等言通無心者此言無用。前已攝故。亂心等言。已攝一切餘有心位。第二等言復何所攝。經主應思。或謂後等攝不亂心前無用者。此不應然。無容攝故。何容後等攝不亂心。遮言。理於相似處起。乘無起等理不及餘。故非全攝。安慧菩薩救云。衆賢論師不得世親阿闍梨意。輒彈等字。亂不亂心散位一對。無心有心定位一對。亂心等等取不亂心。散自相似。無心等等取有心。定自相似故。此等言通於兩處顯頌巧言。又彈云。又定所發亂無心位。不隨流故。應非無表。救云。四位之言隨應而說。非言無表皆遍四位。如定共無表有心位行。不善無表亂不亂心位行。若散善無表通四位行。汝立無心亦爲一位。定共無表豈得行耶。言性相似

者。舊云。謂與表業及心相似故。或前後相似。新云。無表體性相似相續唯善不善。非似表及心也。言相續者。正理彈云。非初刹那可名相似相續。勿有太過之失。是故初念無表不入所說相中。俱舍師救云。相續者。或以前續後。如初念無表。或以後續前。如後念無表。或續前續後。如中間無表。故初及後皆名相續。設有無表唯一刹那。相續類故。亦名相續。言淨不淨者。必假強表方能發故。不通無記。舊云。為遮餘計無記無表故。辯其性唯善不善。言善簡淨中無記。言不善簡不淨中有覆無記。言造是因義者。為簡覺天等。彼言。造是成義。施設義。謂成所造故。施設造色故。言顯此是師宗言者。謂顯是婆沙宗說。正理云。說者顯此是餘師言。經主不信也。言雖以色業至同有表業者。謂色性雖與表同。業用與表全異。欲釋無表先辯其表。表者表示於他令知內心是善是惡。其猶合掌殺縛等形。故成論云。譬如潛淵魚鼓波而自表。今言無表。謂無此相故名無表。

此下第二明能造大種。於中有二。一實四大種。二假四大種。且初第一明實四大種者。論云。前言無表大種所造。大種者何。頌曰。

大種謂四界　即地水火風
能成持等業　堅濕煖動性

釋曰。大種謂四界者標也。三義釋大。一體寬廣故。謂四大種遍所造色其體寬廣。二增盛聚中形相大故。謂大地大山地增盛。大江大海水

增盛。炎爐猛焰火增盛。黑風團風風增盛。三能起種種大事用故。如地能持世界。火能壞初禪。水能壞二禪。風能壞三禪。一義釋種。與所造色爲所依故。故名爲種。大卽是種。故名大種。能持自性故名爲界。卽地水火風。者舉數。能成持等業者成用。地能成持用。等者等取水能成攝用。火能成熟用。風能成長用。堅濕煖動性者出體。地堅。水濕。火煖。風動。（冠註論本第一五十五左）

【暉鈔】卷上本四十三右　色法一一極微皆有四大名體寬廣也。形相大故者。大地大山卽所造色。大地大山既地增。卽知能造四大中地大亦增。水火風准此釋。婆沙一百三十一有二不同。一說四大用增。如一丼水和一丼酢嘗。但覺醋味不覺水味。明知一丼酢用增。此說同此論大山大地能造大中地大用增。二云。水酢二丼雖等。酢體還增。增酢徵故。正理論取此釋也。大種者。大卽簡虛空。雖遍一切不能生種。種子能生不遍非大。四大具二義名大種也。與所造色爲所依故者。由四大故方有色身等。有水攝故不散。有火故煖。由風有出入息。由地故堅實。故知一極微色卽具四大不相離。問云何得知恒不相離。答。婆沙一百四十一云。自性作業一切聚中皆可得故。且堅聚中地界可得。若無水界金銀等物應不可銷。又水若無彼應散。若無火界者石等相擊應無火生。又火若無彼應腐敗。若無風界應不動搖。於濕聚中水相可得。若無地界水至極寒位應不成氷。

又地若無船等應沒。若無火界應無煖時。若無風界應不動搖。於煖聚中火相可得。若無地界燈焔等應不能持物。若無水界焔應分散。風界若無應不動搖。於動聚中風相可得。風若無地應不持物。若無水界應無冷風。又應分散。若無火界應無煖風。四大不增減者。闕即造色不足。多即有餘也。問。四大造色爲在內。爲在外。答。婆沙一百二十七。一說四大在下。所造色在上。一說四大在外。所造色即中。若在外者。四大虛疎斷身應見孔隙。如斷藕有孔。答。四大無見有對色。眼不可見。又四大自性即色。更不須餘物造方名色也。

【麟記】論本第一 六十一右　言四大種遍所造色者。一切色聚中有堅等性故。二形相大者約假四大說。能起種種大事用者。其內四界爲有情本。外能成壞故。與所造色爲所依者。問。大種爲在何處。婆沙云。有說。在下爲因。所依法應爾故。有說。相雜而住。大種在外。造色在中。又正理云。何故名種。云何名大。種種造色差別生時。彼彼品類差別能起。是故言種。大德說曰。虛空雖大而非種。不能生故。餘有爲法雖能爲種。而體非大。相不遍故。唯此獨名大種。問。何故大種唯四。毘婆沙師咸作是說。減即無能。增便無用。故唯有四。如床座四足。言地能成持用者。謂地能持物。由堅力故。水能攝物。由濕性故。火能成熟。令物不壞故。風能成長者。論云。長謂增盛。或復流引。（增盛如種生芽。此據上下。流引如油停水。此即據傍。風業稍隱。故別解也。）言風動者。論云。由此能引大種造色。令其相續生至餘方。如吹燈光。故名爲動。

從此下第二明假四大種者。論云。云何地等地等界別。頌曰。

地謂顯形色　隨世想立名　水火亦復然　風卽界亦爾

釋曰。地謂顯形色者。釋假地也。地謂顯形色。色處爲體。謂靑等地依形色立。此非實地。實地是堅。唯身根得非眼根見。於顯形色假立地名。是色處攝。眼所見也。隨世想立名者釋立假所由。謂諸世間相示地者。以顯形色而相指示。佛隨世間想立此假地名。水火亦復然者釋假水火。此假水火用顯形色以之爲體。例同假地名亦復然。風卽界亦爾者釋假風。風卽界者。此一師釋。無有假風。風卽是界。界者體也。體卽是動。世間於動立風名。故立動爲風。卽是實風。故無假風。言亦爾者此一師釋。許有假風。如前假地水火依顯形色立。風亦如此。依顯形色故言亦然。如世間說黑風團風。黑卽是顯。團卽是形。此用顯形表示風故。（冠註論本第一 五十六左）

【暉鈔】卷上本 四十四右　假四大者。於所造中說四大能造名假。云何地等者。云何假地大中無餘三大。水中無餘三大。火風准此釋。地等卽等取水火風。地等界別。界卽體。云何眞四大體同聚。假四大

卽四體各別也。世間人於所造顯形色。喚大地爲地。江海等爲水。不見餘三。佛隨轉門說爲地等也。問。假四大二一皆通色香味觸。如何說色爲假四大。不說餘三爲假四大。答。一世間於色處起四大覺。二以色是離中知可指彼此。佛隨衆生說色爲假四大。餘三衆人不喚爲四大。三合中知不可指示此彼故。不說聲非恒有。亦不說也。

【麟記】論本第一六十一左　言云何地等地等界別者。謂對假顯實。云何假地等與實地等界差別也。言以顯形色而相指示者。謂世間不知地等四塵境共成。亦不知有堅等四界。但據顯形而云地等。問。假地等中有香等因。何但言形顯爲體。答。地等雖有四境合成。世立假地相。於色處起。如觀四大。唯觀於色不觀香等。以色離境可示在此彼處故。聲非恒有。三境合中知故論不說。言風卽界者。世間亦有知動是風。亦有於黑團等色謂風。由此於風有兩師解。

問。始自眼根終于無表。世尊何故說爲色耶。答。論有兩釋。第一釋云。可變壞故名爲色蘊。變者顯剎那無常。壞者顯衆同分無常也。**誰能變壞。**問也。謂**手觸故卽便變壞。廣說乃至。蚊虻等觸。此變壞者卽是可惱壞義。**答前問也。下文引證。**故大德法救集義品中作如是說。趣求諸欲人常起於希望。諸欲若不遂惱壞如箭中。**此頌是釋迦菩薩爲多求王說也。此王性貪。欲採海寶。魔變爲臣來白於王。我能採寶。遂與王期。及至期日魔不爲來。其王憂苦如箭在身。佛爲

彼王說此頌矣。今引意證色可惱壞也。**又論云。有說。變礙故名爲色。**第二師釋色義也。變謂變壞。礙謂質礙也。**若爾極微應不名色。無變礙故。**難第二釋也。由一極微不是積集故無變礙也。**此難不然。無一極微各處而住。衆微聚集變礙義成。**答也。現在無一極微各處獨住也。以五識依緣必應積集也。依謂五根。緣謂五境。依緣極微既必積集變礙義成矣。**過去未來應不名色。**難也。現在極微聚可得名爲色。過未衆微散。應不名爲色矣。**此亦曾當有變礙故。及彼類故。如所燒薪。**答也。過去曾變礙。未來生法當變礙故。故名爲色。及彼類者謂未來不生法。此不生法雖非當變礙。是變礙類故亦名爲色。猶如火薪也。**諸無表色應不名色。**難也。根境積極微成。變礙可名色。無表非極微。無變礙故應非色。**有說。表色有變礙故。無表隨彼亦受色名。如樹動時影必隨動。**解云。釋無表難。總有三師。此是第一雜心師釋也。影從樹上起。樹動影必動。無表從表生。表色無表色也。**此釋不然。無變礙故。又表滅時無表應滅。如樹滅時影必隨滅。**解云。此是論主破雜心師釋也。汝本以變礙釋色。無表無變礙如何成色。故云此釋不然。無變礙故。又破喻云。影從樹上起。樹滅影亦滅。無表依表生。表滅無表滅。然表滅時無表不滅。滅既不等。色豈同乎。又正理論破云。隨心轉戒不從表生。應當非色也。

有釋。所依大種有變礙故。無表業亦名爲色。此是第二有宗釋無表難也。若爾所依有變礙故。眼識等五應亦名色。解云。此是論主破有宗也。無表依大種。隨大種名爲色。眼識等依五根。隨根識名爲色也。此難不齊。無表依止大種轉時。如影依樹光依珠寶。眼識等五依眼等根則不如是。唯能爲作助生緣故。解云。此文有宗古師救也。彼言。論主將五識依五根難無表色。此難不齊也。謂無表依大種。大種親因。如影依樹樹爲親因。光依珠寶珠寶爲親因。良由大種望無表色具生等五因故名親依。由是親依故大種名色。無表亦名色也。眼等五根爲增上緣助生五識。但是疎依而非親依故。眼識等不隨五根名爲色也。此影依樹光依珠寶言。且非符順毘婆沙宗。彼宗影等顯色極微各自依止四大種故。解云。此是論主破古師解言有違宗失也。汝宗影之與光各自有大種以爲親依。今言影依樹光依珠寶豈非違宗失乎。設許影光依止樹寶。而無表色不同彼依。彼許所依大種雖滅而無表色不隨滅故。解云。此文是論主縱破古師。故言設許也。樹寶若滅影光必滅。大種若滅無表不滅。故言無表色不同彼依也。依既不同。爲喩不成也。復有別釋彼所難言。眼識等五所依不定。或有變礙。謂眼等五根。或無變礙。謂無間滅意。無表所依則不

如是。故前所難定爲不齊。變礙名色理得成就。解云。此是第三論主爲正釋也。無表依大種但是變礙依。不同五識通有二依。故無表依大種得名色也。上來正明色蘊。（冠註論本第一五十八右）

【暉鈔】卷上本四十四左　若刹那無常。卽色及餘一切有爲法皆刹那無常應皆是色。以第二衆同分無常。心心所不相應雖刹那無常分段衆同分攝也。婆沙三十四說。昔有王。貪悋財物苦虐百姓。群臣共下立弟爲王。兄於外處編履自活。後弟思兄問左右。左右具告。弟分一分與兄。後更與半國。卽欲却取弟國位。遣人殺弟。天帝釋觀見化爲婆羅門。髮賓皓白手執錫杖。來白王言。我海外國安穩富樂多諸人民。遣我請王。王聞此語歡悅不已。却後七日我來迎王。七日之外不來。王如箭在身中。佛爲王說。法救大德集爲頌。證色爲惱壞義也。變壞者。合前刹那一期無常爲變壞。以五識依緣積集者。准有部無獨住極微。少有七。四面上下六方及心爲七。一一極微各四大造。一四大有二十八微。能造所造計有一千三百七十九極微同聚。況五識依緣更多。故變礙義成也。座主云。如一微四塵成。且一色塵有四大。一大七塵。四七二十八。一塵又四七二十八。都有一百九十六是能造。所造一色成一百九十七。又一塵有七。計成一千三百七十九。五識親從等無間意引生。五根爲疎依。不可五識不隨意根名心。却隨疎依名色。無表依四大。卽隨親依名色也。准下四大造無表。三釋第一爲正。初念四大造初念無表。又能懸造未來衆多無表。初念無表與大俱時滅。第二念等無表續續生不絕也。第三釋無表唯依四大。不同五識託二緣生。依色卽五根。依心卽意。意識唯依心。不可五識依五根邊卽色。依意

根邊即心。又五識與第六識爲心流類。前依五色根五識是有法。應定名心宗法。因云。以依意根生故。同喩如依意根五識及意也。正理救前四大滅時無表不滅。及影依樹等違宗失。喩云影依樹者。約疎依說。影樹各自有四大爲親依。今言影依樹者是疎依。影所造色依樹所造色。影四大依樹四大。樹四大滅影四大隨滅。樹色滅影即滅。還如第二念無表依現在身四大。四大滅無表即隨滅。第三念已去准此。樹影各自親依四大。四大滅樹影即滅。如初念無表親依初念四大。四大滅無表即隨滅。如何論主言樹滅影即滅。四大滅無表不滅也。

【麟記】論本第一六十二右　言始自眼根終于無表者。上釋根境。眼根爲初無表爲後。皆是色蘊。釋色既竟須識色名。故今問起。言衆同分無常者。謂一期命終也。又變者顯示細無常。壞者顯示麤無常。新云。此中變即是壞。如說變礙一也。言謂手等觸者。問。五根四境既非可觸。如何名壞。答。雖非手觸。然與彼觸同聚生故。若觸觸時彼便壞故。又正理云。乃至可轉易故名爲變壞。言集義品中者。謂如前說。謂佛說無常義集爲無常頌。乃至說無我義亦然。故名集義品。頌末中字。或去聲或平聲呼也。若從去聲。謂如箭中於身。若平聲如箭在身中。諸家多從去。今章意從平。多求王緣廣說應撿婆沙三十四也。言無一極微各處而住者。正理有兩說。一說同此。一說云。亦有獨住極微。然能變礙而不發識。五識依緣必積集故。如立極微。雖無方分亦無觸對。而許極微有礙有對有障用故。應知變礙義亦如是。言及彼類者通伏難也。不生之微雖永無礙。是彼類故。亦得色名。如樹滅時影必隨滅者。章云。是論主破。新云。是論主述婆沙破也。正理不許此破云。有不定過。如父工匠種等滅時。子堂芽等不隨滅故。故彼自將隨心轉色破雜心師。如章所引。注言無表依

大種是親者。謂由大種造得無表故。故是親依。五根望五識但是助緣。非親造故名疎緣也。言彼宗影光各自有大種故。樹實還是助生增上緣。將類眼根。義應相似。正理又云。變礙解色。依少分類以立總名。非無差別。不應爲難。如牛孔雀地眠地叫。牛名地眠。孔雀名地叫。非一切時恒眠恒叫也。又如世說。急食急行名之爲馬。而非一切急食急行。雖無彼德而似彼故。言彼許所依大種至不隨滅者。謂第三羯磨竟時。發得形俱無表。一發續現故言不隨滅也。雖初念無表亦與大種俱滅。今約第二念等多分而說。一變礙依者。謂所依五根體是變礙色故。二無間滅意者。謂一切識生皆依過去意故。又雖五識依止五根。而意識不依五根。而意識不依五根故。不應六識自性一法種類亦色非色。無有無表不依色故。故不同彼。

從此大文第二正立處界者。頌曰。

此中根與境　許卽十處界

釋曰。此色蘊中五根五境。於處門中立爲十處。於界門中立爲十界。上來二段不同。總是明色蘊竟。（冠註論本第一 六十一右）

【暉鈔】卷上本 四十六左　色蘊通十一色。今唯取十。故言此中。經部界卽實。蘊處卽假。將假蘊體爲假處。我卽許。將爲實界體我卽不許。我有部三科皆實。將色蘊卽爲十處及十界。自許也。

【麟記】論本第一 六十三左　言許卽十處界者。謂婆沙許。卽根境爲十處界。然經部師處假界實。不可卽

以處爲界體。於彼有異故言許。卽表非共信也。

其次第二明受等三蘊者。頌曰。

受領納隨觸　想取像爲體　四餘名行蘊　如是受等三
及無表無爲　名法處法界

釋曰。受領納隨觸者。釋受蘊也。受能領納隨順觸因故名爲受。此隨觸言爲顯因義。因卽是觸。能生受故。觸順於受故名爲隨。受能領納隨順觸因名領納隨觸。問。何故受能領觸。答。受從觸生行相似觸。領似觸邊說受能領。如世間說子能領父。子之媚好皆似於父故名爲領。餘心所法唯領前境不能領觸。名境界受。唯受一箇偏能領觸名自性受。又解。此隨觸聲爲顯前境。隨順觸境故名隨觸。受能領納。餘心所法雖俱領境。唯受偏强。以自性是受。故獨得受名。如有十人同一處坐。一人是賊。傍忽有一人叫喚呼賊。十人雖復俱聞賊聲。實是賊者領則偏强。心心所法雖同領境。實是受者領。亦偏

强故獨名受。此有三種。謂苦樂捨。想取像爲體者明想蘊。想能執取苦樂怨親男女等像故名想蘊。四餘名行蘊者明行蘊也。四者謂色受想識。除四蘊外諸餘心所有四十四。及十四不相應。此五十八法是四蘊餘。總名行蘊。造作遷流二義名行。據此義邊色等五蘊俱合名行。謂由行故攝法多故偏得行名。如是受等三及無表無爲名法處法界者立處界門。受等三者等取想行名三也。并無表成四。及三種無爲成七。此等七法十二處中名爲法處。十八界中名爲法界。（冠註論本第一六十一左）

【暉鈔】卷上本四十六左　行相似觸者。古人意。如無記心心所起緣前境。且有心王一心所十。除受餘九心所兼心王成十。緣前境同聚中有觸。觸對前違境生得苦觸。此同時受領此觸之行相名受。餘十心心所領前境名境界受也。第二說如無記心心所同領前境。有十大地心王一。於中受强。如有十人即十大地法。同一處坐即同緣一境。忽有一人叫喚呼賊即喻心王取總相。十心所同有領納勝劣有別。故想等不名受也。前二說不同。十心所同有領納勝劣有別。若作此釋。即十心所同合名受。何得分十。分明論文名自性。餘心所如何名受。今解云。十

心所中九箇與心王緣前境。想即取像。思即造作。各別作用不名受名想等。同時受即領同時觸。故受一箇獨得受名。又准此論第十。如何觸爲受所領。不言受領境。又唯識破此論受領同時觸也。故知彼釋不順此論也。像者。物之相狀。心心所中想取前物像時。心王等皆有物像現。心王取總色聲等。心所取別相。即違順等也。

【麟記】論本第一（六十四右）　釋受蘊中有兩解。初約領觸。次約領境。隨順觸因四字。並目觸不目受。也。尋章可見。雖觸與受同時而生。然要因觸而生其受。同時因果宗所許故。如影與身俱時而有。言行相似觸者。如因苦觸生苦受。樂等亦爾。又正理云。隨觸而生。領納可愛及不可愛俱相違觸名爲受蘊。領納即是能受用義。准此以領觸爲受。不取領境爲受。章第二解乃是舊解。彼有兩釋。初釋如章。第二又云。諸心心所雖復同緣皆執受境。想等諸法從別立名。受無別名。雖標總稱即受別名。如色處等。彼斷前解爲勝。新並不許。但約領觸名受不約領境。言自性受者。受有二種。一執取受。謂一切心所皆執取前境。皆名執取受。二自性受。謂受能領納自所隨觸取觸勢分。名領納觸。是自性受。言隨順觸境者。謂境能隨順觸。即順觸之境也。前解隨觸觸體即隨。此解隨觸隨言目境。言此有三種者列數也。略而有三。廣乃有六。謂六識相應受故。言男女等像者。或諸法自相共相此想能取故名取像。如緣青時。想能封疆盡界。皆是青故。黃等亦爾。此所取像餘心所等不能取故。不名爲想。約別起用從餘受名。此亦成六。如前受說。言偏得行名者。謂餘四蘊從別受稱名受蘊等。此行雖標總稱即受別名。如色處等故。故雜心云。五陰雖是行而一受行名。

從此已下第三明識蘊。於中有二。一明識蘊。二釋妨。且初第一明識蘊者。頌曰。

識謂各了別　此即名意處　及七界應知　六識轉爲意

釋曰。識謂各了別者。明識蘊也。了別名識。此有六種。了別不同。故名爲各。謂初眼識了色。乃至意識了法。此即名意處及七界者。立處界門。此識蘊於十二處中。即名意處。於十八界門。名七心界。於六識外。更加意界名七心界。應知六識轉爲意者。明有意界。應知六識轉謝過去。能與後識爲所依邊。名爲意界。故知六識居現在世名識。在過去名意。（冠註論本第一六十三右）

【暉鈔】卷上本四十七左　問。行相行解二種何別。答。行解即心於境印可解。行相心心所緣青境作青解名行。心上帶青相名相。行相行解二皆屬心心所。通三性也。與後識爲所依邊者。現在六識入過去爲意。與後現在六識爲依故。意者所依義。問。無學最後念心。更無後識依此最後念心。不成所依義。應不名意界。答。六識入過去所依義即成。自是無學闕餘緣識不得生。如種子收得種義即成。後不生者。即是闕水土等緣芽不生。種義已成也。

【麟記】論本第一（六十五右）　次明識蘊。問。何故受等三蘊合辯。識蘊別明。答。法有三別。一色。二心。三心所。色心類別故別明色心。心所中受想等三同是心所故共明之。識是心王故復別說。言各了別者。謂了不共境不同名爲各別。問。五識不共了。可說名爲各。意識通能緣。如何亦名各。答。五識對自境故得名爲各。意識對別法亦得名爲各。又論云。各各了別彼彼境界。總取境相。故名爲識。解云。境有二義。一總相。謂色聲等。二者別相。謂違順等。於自境處總取像相不別取像印持等故名總。非是總別相中取總相也。正理云。唯取青等非謂青等（非謂青等。簡於勝解云非青等故也。）亦非可意不可意（簡觸受所取境也）非男女等。非人杌等（隨其所應簡心心所也）如彼眼識於其自境唯取總相。如是餘識隨應當知。言六識轉謝爲意者。謂現識與後識依即名爲意。意者所依義也。言轉者謝也。或謂變也。

次下釋妨。於中有二。一別立意界妨。二十八界不成妨。且初第一別立意界妨者。論云。若爾六識即是意界。異此說何復爲意界。頌曰。

由即六識身　無間滅爲意

釋曰。身者體也。此六識身初謝過去名無間滅。謂於中間無間隔故。即此六識無間滅已爲後識依即名意界。意者所依義故。過去識得名爲意。由與現識爲所依故。（冠註論本第一六十五左）

【暉鈔】卷上本二十八右　無間滅已者。簡四相中滅相滅。此取生滅滅。表入過去方成意界。六識中一一入過去皆成所依。並名意界也。

【麟記】論本第一六十五左　卽爲意界者。論云。謂如此子卽名餘父。又如此果卽名餘種。故知體一所望異名。舊云。據顯說在過去論體。實通三世。從他生邊名識。能生他邊名意。喩如上。又云。等無間緣作用所顯故未來無。意界據體故未來有。故十八界皆通三世。又云。現在一念六識不並。義分根識。極多只可十三。如何有十八耶。答。此據現在多念相續。或據現在一念多人故言十八。若據一人一念。極多十三。少則不定。

從此第二十八界不成妨者。難前問起。論云。若爾實界應唯十二。或應十七。六識與意更相攝故。何緣得立十八界耶。頌曰。

成第六依故　十八界應知

釋曰。成第六依故者。立意界所由也。眼等五識各有別依。謂眼等五根。第六意識無別所依。爲成此依故立意界。十八界應知者。結成十八界也。既立意界。由此六識各有所依成十八界。所依能依境界各六依成十八界。所依六者謂眼等六根。能依六者謂眼等六識。境界六

者謂色等六境。（冠註論本第一六十四左）

【暉鈔】卷上本四十八右 無別所依者。五識依五根。五根各別所依。意即通與六識爲依。即是通依。與意識爲所依即各別所依也。身有三義。一體。二聚。三所依。今六識名身取體義也。

【麟記】論本第一六十六右 言六識與意更相攝者。謂若攝六識爲意則但十二。若將意界離爲六識。意即六識攝。無別意體。則應十七界。何有十八耶。爲成此依故立意界者。論云。若爾無學後心應非意界。此無間滅後識不生非意界故。不爾。此已住意性故。闕餘緣故後識不生故。

從此第二明總攝者。頌曰。

總攝一切法　由一蘊處界　攝自性非餘　以離他性故

釋曰。總攝一切法由一蘊處界者。正明相攝。攝一切法由一色蘊。由一意處。由一法界。所以者何。且一切法不過五位。一色。二心。三心所。四心不相應。五無爲法。一切色法一色蘊攝盡。一切心法一意處攝盡。一切心所及不相應幷無爲法一法界攝盡。故擧此三攝法總盡。攝自性非餘以離他性故者。明攝分齊。前言攝者唯攝自性不攝他性。故云非餘。法與他性恒相離故故不相攝。自性攝者色唯攝色。心唯攝心。

且如眼處眼界及苦集諦是色蘊攝。同色性故。不攝意處意界。及滅諦等。非色性故。（冠註論本第一 六十五左）

【暉鈔】卷上本（四十八右）　小乘五位法約心境次第。先有境方有心心所緣。所以第一色。次心等也。若三科別攝者。五蘊中色蘊攝十一色。受想攝一。識攝心王。行攝四十四心所及十四不相應。十二處五根境攝十色。意處攝心王。法處攝六十四。十八界五根境攝十色。七心界攝心王。法界攝六十四法也。問。無表如何五蘊中即色蘊收。處界即法處法界攝耶。答。以是色故。五蘊門即色蘊收。以無表意識緣。處界門中法處法界攝。若爾前五境意識亦能緣。應法處法界攝。答。五境通六識緣。以體變礙不在法處法界攝。無表唯意識緣。所以唯法處法界攝也。及苦集諦者。此舉色蘊望三科四諦辯攝不攝。十二處中眼處。十八界中眼界。及苦集諦通色。雖亦通心心所。且據色論。如道諦言非色。於中有少分無表是色。且言非色。故苦集諦中色是色蘊攝。此上疏意。依論文舉一眼根。攝二科四諦辯攝不攝。意各別也。問。過去未來通多念。即有十八界。現在一念。六識不並生。又落過去方名意界。現在如何有意界。答。據現在多念相續言有十八界。或可據多人共說言現在十八界。或現在意識即有五識及意。以體不別故。以十二處六識及意根總名意處。頌言六識轉爲意。據顯處說。故現在具十八界也。

【麟記】論本第一（六十六右）　舉此三攝法總盡者。問。何故三科各舉其一。答。此中皆是舉少攝多。如色蘊名是總故。若舉色蘊攝一切色盡。若舉色處色界。便唯攝一攝色不盡故。於色法偏舉

色蘊。意處攝七心故。擧意處攝心總盡。雖然識蘊亦遍攝心。已於色門擧色蘊竟。故於心門但擧意處。然雖法界法處寬狹是同。欲總遍三科故擧法界。及苦集諦是色蘊攝者。且約眼處等苦集是色蘊。非謂一切苦集皆色蘊攝。以苦集通一切有漏故。及滅諦等者。等取道諦。道雖通色法。今論眼根故亦不攝。又婆沙云。諸法自性攝自性時。非如以手取食指捻衣等。然彼各各執持自體令不散壞。故名爲攝。又此中攝爲勝義說。唯攝自性。若約世俗亦攝餘法。如四攝事。四攝事者。謂布施愛語利行同事。由此四種攝徒衆令不散故。

從此大文第三明數開合。於中有二。一明數合。二明數開。且初第一明數合者。論云。眼耳鼻三處各有二。何緣界體非二十一。頌曰。

類境識同故　雖二一界體一

釋曰。類同者同眼自性故。境同者同以色爲境故。識同者同與眼識爲所依故。由此眼界雖二立一。耳鼻亦應如是分別。（冠註論本第一六十六左）

【暉鈔】卷上本十九右　眼耳鼻三性同以無見有對色爲體。二同以色聲香爲境故。三同與了色等識爲所依故。雖二處生。處界門立爲一也。正理論。若謂發識端嚴即大安一眼即得。何要二眼。彼自釋云。因緣法爾如此。如蛇二舌共命鳥二頭。業力使然也。

【麟記】　闕之

其次第二明數開者。論云。若爾何緣生依二處。頌曰。

然爲令端嚴　眼等各生二

釋曰。然爲令端嚴者。論有二解。第一師解。爲所依身相端嚴故。界體雖一而兩處生。若眼耳根處唯生一。鼻無二穴身不端嚴。此釋不然。論主破云。若本來爾誰言醜陋。又猫鵄等有何端嚴。第二正解。爲所發識明了端嚴。現見世間閉一目等了別色等便不分明。是故三根各生二處。（冠註論本第一六十六左）

【暉鈔】　闕之

【麟記】論本第一六十七右　言身不端嚴者。婆沙問云。何故眼耳鼻各有二處。而舌身唯一耶。答。諸色根處爲莊嚴身。若有二舌是鄙陋事。世便嗤笑。云何此人而有二舌。如似毒蛇。若有二身如兩指並。第二正解。爲發識明了者。若爾舌身何不須二。答。舌身形大發識用足。故不須二。正理亦云。現見世間於諸作用增上圓滿亦說端嚴。若眼等根各闕一處。見聞臭用皆不明了。若具二者明了用生。新云。若爲發識明了。但大即得。何用二處。故依正理解云。此待因緣差別如此。因緣有障或不二生。猶如身根頭頂腹背手足等處。安布差別種類如是。不應疑難。

從此大文第二別釋名義。於中有六。一釋三法名。二教起因。三蘊廢立。四名次第。五名廢立。六攝異名。初第一釋三法名者。論云。已說諸蘊及處界攝。當說其義。此蘊處界別義云何。頌曰。

聚生門種族　是蘊處界義

釋曰。初句釋義。次句結成。聚謂積聚。即是蘊義。故經言。諸所有色。若過去若未來若現在。若內若外。若麤若細。若劣若勝。若近若遠。如是一切略爲一聚。說名色蘊。此經意者義有五門。第一三世門。謂無常已滅名過去。若未已生名未來。已生未謝名現在。第二內外門。自身名內。所餘他身非情名外。或約十二處辨。眼等五根名內。色等五境名外。第三麤細門。色有三種。一有見有對。謂色境也。二無見有對。謂眼等五根聲香味觸也。三無見無對。謂無表色也。此三色中有對名麤。無對名細。或相待立。如無見有對色望有見有對色名細。望無見無對色名麤。第四劣勝門。染汚名劣。不染名勝。色十一中眼等五根香味觸八是無

記性。色聲兩種通三性。無表唯善惡。於三性中善無記名不染。惡名染汚也。第五遠近門。去來名遠。現在名近。如色蘊中有此五門。乃至識蘊亦有五門。應知亦然。唯麤細一門與色蘊有別。謂眼等五識相應四蘊依五根名麤。第六意識相應四蘊唯依意根名細。或約地辨。謂九地中下地名麤。上地名細。生門者。是處義也。謂六根六境是心心所生長門處。由六識生必託根境方能起故。論云。是能生長彼作用義。依薩婆多宗。法體先有。不可言生。但生其用耳。言種族者是界義。論有兩釋。一解族者謂種族也。是生本義。謂十八界爲同類因各生自類等流果故。是法生本。如一山中有多銅鐵金銀等族說名多界。如是一身或一相續有十八類諸法種族名十八界。解云。金銀等族是金銀等鑛。言一身者一有情身。一相續者一法相續。此一身一相續合前喩中如一山中也。問。若爾無爲應不名界。謂無爲法非同類因。不成生本故。答。心心所法生之本故。謂心心所緣無爲法生。雖不爲因而得爲境。是心心所生之本

故。有說。界聲表種類義。謂十八法種類自性各別不同。名十八界。此師解意。族謂族類。謂十八法各各別也。如崔盧等姓各各不同。薩婆多宗三科俱實。若依經部蘊處是假。唯界是實。若依論主唯蘊是假。餘二並實。（冠註論本第一 六十七右）

【暉鈔】卷上本 四十九左　梵云塞乾陀。此云蘊。是聚義。若言聚梵云揭羅陀。古譯言陰。陰謂陰覆。字應從單。或云。陰陽能生萬物。應梵云鉢羅婆陀。譯爲陰。此應錯譯。法華翻爲五衆。若言衆者。卽梵云僧伽。皆非正義也。略爲一聚者。能詮名及體皆容可略爲一聚。無爲名卽可略。體卽不可略。故非蘊攝也。無常已滅者。已滅卽表入過去。取生滅滅。簡現在滅相滅也。梵云阿野怛那。唐言處。舊云入。入卽梵云鉢羅吠舍。入者滅義。不得生義。若云處卽生滅二義皆得。是心生處。亦是滅處。問。有部一切法三世皆有。如何言生。是能生長彼作用義。下答也。現在十八界爲同類因。卽是種族生後等流果。此釋不正。若救云無爲爲境生心心所。卽與前處義不別。佛不應說三科法也。後說種類義者。族謂族類。卽取種類義。卽十八類法種類各別自性也。論主說界是實者。界是性也。十八界一一極微心心所。刹那刹那皆有自性名實。三宗同許。經部處假者。處者生心心所處。一一極微不能生心心所。衆多聚集方能生心。既多聚集。故處假有。論主及有部言處實者。一一極微皆有生心心所之用故。一一極微皆實有。如多絲方繫象。一一絲皆有繫象之力也。蘊論主

經部假有者。蘊者聚義。既多聚集故是假有。有部實有者。取蘊之義。蘊是實。聚是假。依蘊辯聚。若世尊說聚亦實者。順外道執蘊爲我。聚既實者亦應是我。今言聚假顯非是我也。一一極微心心所。一一刹那皆名蘊。是實有也。若不然者。如遊觀心一念無漏心。第二念有漏等。如第一念無漏即有刹那心心所等。應非是蘊也。問。既一一極微色。一一刹那心皆蘊。何故世尊於多法立蘊。答。若色一一極微。心法一一刹那皆立蘊者。即皆有煩惱緣。煩惱既多衆生怯退。由此世尊故不別說爲蘊也。

【麟記】論本第一六十七左　言聚義釋蘊者。梵云塞健陀。唐言蘊也舊譯名陰。陰是覆義。若言陰梵本應言鉢羅婆他。近代諸師競爲異釋。或言。淡聚名淡陰。此釋不然。醫方說淡飲不言淡陰故。論中更有二解。一云。蘊者能荷果重擔義是蘊義。由此世間說肩名蘊。物所聚故。有說。可分段義是蘊義。故世有言。汝三蘊還我當與汝。此不正義。若過去若未來等者。此爲遮止外道所說。謂佛在世有出家外道。名爲杖髻。撥無過未。爲遮彼意故。世尊說。謂所有色若過去若未來。乃至廣說。言略爲一聚者。謂是略名非略其體。以三世色不可略爲一聚。但總略名一聚也。故婆沙云。過去未來諸色雖不可略聚其體。而略聚其名。乃至識蘊應知亦爾。雜心云。亦名略非體略也。若爾無爲亦應名蘊。諸無爲可略聚故。解云。諸有爲法有作用故有略聚義。雖體有時不可略聚者。而略聚其名立色蘊等。諸無爲法無作用故無略聚義。雖可略聚其名。而不可立爲蘊。言無常已滅名過去者。謂正滅是現在故。言已滅名過去。簡異擇滅非擇滅。是故復言無常已滅。言自身名內者。自身成就者名內。不成就及他身非情並名爲外。言善無記名不染惡名染污者。此言有

過。謂無記中含染汚故。應言善無覆名不染。惡有覆名染。若依集異門足論。約不善有覆有漏善色無漏善色。如其次第觀待前劣後勝。言五識相應四蘊至名麤者。此由所依五根麤故。能依四蘊亦麤。第六准知。九地麤細隨應一一地中望上望下皆容麤細。然欲界唯麤有頂唯細。中間七地具麤細。言處者。梵云阿野怛那。唐言處也 昔翻爲入者。此亦不然。若言其入。梵本應云鉢羅吠舍。舊經亦有譯爲處者。如空無邊處等及阿練若處。並與今同。是心心所生長門處者。依訓釋詞此處義也。若言入者。唯滅沒義無出生義。言界者。梵云駄都。唐云界也。有譯言持。偏據一義。然非盡理。此有兩釋。初約因以釋。次約差別以釋。言一法相續者。此是總目一身名一法。非約十八之中一分法也。以合前喩一山中故。舊又解云。一身者一有情身。一相續者一期相續。又云。一身謂一期身。一相續謂一有情相續。以相續是身異名。故知是總舉也。言心心所法生之本故者。正理難云。若爾處界義應相濫。俱心心所生本義故。由此別釋種族義。如鑛金雄黃等。展轉相望體類不同故名種族。如是眼等展轉相望體類不同故名種族。若爾意界六識無別體類。應非別界。此難不然。所依能依體類別故。有說。安立時分異故。復有說者。六是意前。意非六前。故知有異。准正理取此論後解。言三科俱實。且蘊實者。蘊雖積集。然一極微即是蘊相。可積集故。故蘊亦實。故正理云。又一極微三世等攝。以慧分析略爲一聚。蘊雖即聚而實義成。餘法亦然。故蘊非假。又於一一別起法中。亦說蘊相。如說俱生受名受蘊。經部及論主言蘊假者。以蘊是聚義故。故論破云。若言聚義是蘊義者。蘊應假。有多實積聚共所成故。如聚如我。(解云。此論主立比量破有部實云。色等五蘊定是假爲宗。多實成爲因。如聚我爲喩。聚謂穀等聚。雖多

實成就。聚是假。我謂五蘊假我也。）又論云。經言。如是一切略爲一聚。說名蘊故。故蘊定假。經部言。處亦假者。謂處是能生義。根境必積集方能生長。故亦假有。論主許處實者。多積集中一一極微有用故。若不爾者。根境相助共生識等。應非別處。是則應無十二處別。界是體性及生本義。同許是實。以一一微皆是實性故。准上所說。論主言蘊是假違婆沙。許處是實不同經部。以理爲量。不執一宗。隨何勝者釋爲己立。

從此第二明教起因。論云。何故世尊於所知境由蘊等門作三種說。

頌曰。

愚根樂三故　說蘊處界三

釋曰。所化有情有三品故。世尊爲說蘊等三門。愚有三者。或愚心所總執爲我。爲說五蘊。以五蘊中一蘊是色。一蘊是心。分心所法爲受想行三蘊故。說五蘊能破彼執。或唯愚色總執爲我。爲說十二處。以十二處中十處是色。唯意法非色故。說處門能破彼執。或愚色心總執爲我。爲說十八界。以十八界廣說色心。十界是色。餘八是心故。說界門能破彼執。根亦三者。謂上中下根。上根聰利說略便解。

爲開五蘊。中根稍遲説處方解。下根最鈍要須廣説。故爲談界。樂亦三者。爲樂略中及廣文故。如其次第説蘊等三。（冠註論本第一七十右）

【暉鈔】卷上本五十一右　問。何故但愚色心二法。不執不相應爲我耶。答。色心用強。生執強故説之。不相應生執劣故不説也。或外道不知有不相應法。故不愚執也。或可下根少説即蘊。中根説處。上根性利説十八界。執我須一常遍自在。色心既不一。亦無常義及遍自在義。色心一一極微。心心一一刹那推我。皆不可得也。

【麟記】論本第一七十右　言愚有三者。愚謂迷愚。不了法相。以無明及身邊見爲體。論云。傳説有情愚有三種。以佛意難知故云傳説。正理論云。善逝意趣雖極難知。據理推尋似應如是。言十處是色者。應言十處全一處少分是色。以法處中攝無表故。言十界是色者。亦應言十全一少分。言餘八是心者。理實七界全是心。法界一分是心。所以不相應等非心法。故今言八者約總相説。又雖法界心所非心。且對餘類總名爲心。理亦無失。上來咸是於諸法中總執我法故。廣分別我執便已。故説三科各能破執。以愚所迷不過三故。言根有三者。此約領解有遲速。或復記受有難易。以三分根者。下根略説蘊。中根爲説處。上根已談界。根謂根機。以信等五根爲體。言樂者正理云。樂謂勝解。抄云。樂謂希求。以勝解及信欲爲體。

從此第三明蘊廢立。就中有二。一正明蘊廢立。二明蘊不攝無爲。

且初正明廢立者。論云。何緣世尊說餘心所總置行蘊。分別受想爲二蘊耶。心所有四十六。唯除受想餘四十四入行蘊攝。名餘心所。頌曰。

諍根生死因　及次第因故　於諸心所法　受想別爲蘊

釋曰。初之兩句正擧三因。後之兩句結成別蘊。言三因者。第一諍根因。諍根有二。謂著諸欲及著諸見。此二受想如其次第爲最勝因。味受力故貪著諸欲。倒想力故貪著諸見。解云。諸欲者是五妙境也。諸見者是身見等五也。諸欲貪及諸見體是煩惱。煩惱名諍。即諍名根。受想二法與諍根爲因。諍根之因依主釋也。第二生死因者。由貪著受起倒想故生死輪廻。故受與想爲生死因。生死之因依主釋也。第三明次第因者。隣次當辯。由上三因於心所法應知別立受想爲蘊。（冠註論本第一七右）

【暉鈔】卷上本五十一右　癈立者。癈四十四心所不立蘊名。立受想二法爲蘊名。後頌癈無爲不立蘊。立七十二法名蘊。含此二心。味受力故者。由受有貪味五境。因此生五鈍使名貪著諸欲也。由

倒想分別生五利使也。五鈍使五利使名諍根。受想爲因生此二類煩惱。名諍根因也。

【麟記】論本第一左七十　言味受力故貪著諸欲者。謂在家人因樂受故起貪之諍。言倒想力故貪著諸見者。出家人由倒想故能生見諍。言次第因隣次當說者。即次章辯五蘊次第中明之。

從此第二明無爲非蘊者。論云。何故無爲說在處界非蘊攝耶。頌曰。

蘊不攝無爲　義不相應故

釋曰。初句正標。次句釋成。義不相應者。論有三解。第一解云。三無爲法與色等義不相應故。謂體非色。乃至非識。無爲體非色。與色義不相應。乃至體非識。與識義不相應故非蘊攝。問。無爲既非五蘊。何不立爲第六蘊耶。答。亦不可說爲第六蘊。彼與蘊義不相應故。聚義是蘊。無爲非聚義。義不相應不可立蘊。第二解云。又言取蘊。爲顯染依。染淨二依蘊言所顯。無爲於此二義都無。義不相應故不立蘊。取蘊有漏故顯染依。無漏五蘊便是淨依故。但言蘊便通染淨。第三解

云。有説。如瓶破非瓶。如是蘊息應非蘊。解云。謂瓶破非瓶。不是瓶攝。蘊息是無爲。無爲非蘊攝。此第三釋論主破云。彼於處界例應成失。解云。此意者。蘊息是無爲。無爲非蘊攝。處界息處是無爲。亦可無爲非處界。故將處界爲例。彼第三解成過失也。（冠註論本第一七十二右）

【暉鈔】卷上本五十一左　論ノ三説中一説。無爲體非色。無爲無變礙。乃至非識。即不能了別也。第二云。取蘊與染煩惱作所依。戒等五蘊與無漏淨法作所依。色等五蘊與染法爲所依。色等諸法色等五蘊攝。戒等與淨爲所依。戒等諸法戒等五蘊攝。無爲不與染爲所依。不在色等五蘊攝也。第三云。瓶破不在瓶類攝。有漏五蘊息滅後得無爲。無爲不在五蘊攝。正理破論主將處界難云。向言蘊息。爲取聚義息。爲取體息。若體息者。有漏法體滅盡方始名息。即違一切有宗三世皆有實體。若取聚義息。無爲無聚。無爲蘊義息。無爲爲境生第六識有處義。有體邊有界義。即處界義不息。如何論主忽作斯破也。

【麟記】論本第一七十一右　第一解無爲非蘊攝中。初約與色法等義不相應故。次問已下與蘊義不相應故。言無爲非聚義者。論云。如前具説。謂無爲法非如色等有過去等品類差別。可略一聚名無爲蘊。又正理抄云。有爲有因果相及義。成鈎鏁故可名聚。無爲不爾。故非聚攝。言取蘊爲顯染依者。煩惱名取。今言取蘊者。顯蘊有漏煩惱所依。言染淨二依蘊言所顯者。若不言取但言

其蘊。通顯染淨二種依也。言無爲於此二義都無者。謂無能顯染依及淨依爲二義也。非謂染淨爲二。言蘊息是無爲者。新云。古師言息。息謂斷息。滅所顯故名爲息。一切有漏有二種息。謂斷及非擇滅息。滅息兼顯虛空。有爲無漏唯有非擇滅息。論主以處界爲例者。若言蘊息滅故顯無爲。則非蘊攝者。十一處全一處少分十七界全一界少分息滅顯三無爲。亦應無爲非處界攝。正理救云。乃至全於蘊門衆生計我。入無餘位諸蘊隨息。處界不然。非全生故。若於是處蘊相都無名爲蘊息。三無爲上聚義都無。可言蘊息。非生門族義於義於彼亦無。故不應例。彼解意者。息是無義。謂斷義。謂無爲中無有蘊義故。言蘊息。即顯論主謬取古意謂息爲斷也。

從此第四明名次第者。就中分二。第一蘊次第。第二處界次第。且初第一蘊次第者。論云。如是已說諸蘊廢立。當說次第頌曰。

隨麤染器等　界別次第立

釋曰。此之兩句總有四義。一隨麤次第。二隨染次第。三隨器等次第。四隨界別次第。且隨麤次第者。色有對故諸蘊中麤。謂五蘊中色蘊有對。餘四無對。故色最麤。先說色也。無色中麤唯受行相。故世說我手等痛言。無色者受等四蘊。於中最麤唯受行相。何以得知。故舉喩言手等也。言痛即在苦受。不言手等想。明知受麤於想。故先說受。待二想麤。男女等想易了知故。解云。待

者對也。二二者行識二蘊也。想對此二即麤。故言待二想麤。次說想蘊也。行麤過識。貪瞋等行易了知故。此貪瞋等是行蘊攝。既易了知明知行蘊麤於識蘊。識最爲細。總取境相難分別故。解云。境有二相。一者總相。謂色聲等。二者別相。謂違順等。心所取別。識取總相。故難分別。最爲細也。第二隨染次第者。或從無始生死已來。男女於色更相愛樂。此由耽著樂受味故。耽受復因倒想生故。此倒想生。由業煩惱（煩惱是行蘊攝）故。如是煩惱依識而生。由此隨染立蘊次第。第三隨器等次第者。器等者等取飲食助味廚人食者也。夫欲請客先求食器。既得其器次求米麵以爲飲食。米麵已辨次求鹽酢以爲助味。便付廚人使令調合。飲食既辨進客令食。色蘊如器。如世間器飲食所依。色亦如是。受所依故。受類飲食。如世間食有損有益。受亦如是。樂受益人。苦受便損。想同助味。如世鹽醋助生食味。想亦如是。起怨想時生苦受味。起親想時生樂受味。行似廚人。由行蘊中有業

煩惱能感異熟。如世厨人造得飲食。識喩食者。受果報故。故隨器等立蘊次第。第四隨界別次第者。於欲界中有諸妙欲。色相顯了。先說色蘊。於色界中有勝喜等。受相顯了。次說受蘊。三無爲中取空等相。想相顯了。次說想蘊。第一有中思最爲勝。行相顯了。解云。第一有中非想地也。謂思是業。行蘊所攝。由非想業能感有頂八萬劫果。故思最勝。行相顯了。次說行蘊。此前四蘊識住其中。故後說識。謂識住色中。識住受中。識住想中。識住行中。四是所住。識是能住。故識後說。由如世間田種次第。先田後種。田喩四蘊。識喩其種。由上四義立蘊次第故。故此五蘊無增減失。又論云。即由如是諸次第因離行別立受想二蘊。謂受與想於諸行中相麤生染類食同助二界中强。故別立蘊。

前次第因隣次當辯是此文也。相麤者受想麤門。生染者是受想生染門。類食是受也。同助是想也。此是受想器等門。二界中强者。受色界强。想無色强。是受想界次第門故。次第因含此四門也。（冠註論本第一七十二左）

【暉鈔】卷上本五十一右　隨染次第。爲起染之次第。色爲因方起愛染。愛染生由欣樂受。受因倒想

生等也。

【麟記】論本第一 十七 一左　言無色中麤者。謂除色外名爲無色。非無色界名也。言隨染次第者。此中成是先果後因。以爲次第。故色在前識居其後。言如是煩惱依識而生者。此中但說煩惱依識生。故後說識。舊云。此行及前色受想三皆能染汚於識。故後說識。問云。行蘊有惑可能染識。色受想三如何染識。答。色受想三雖性非惑。而能爲緣生染汚識。或色爲緣生染汚識。受想與惑相應能染汚識。說名染識。言先求食器者。正理抄云。如欲迎賓先求寶器。以難得故。言有勝喜等者。等等取勝樂也。言三無色者。除有頂也。言離行別立受想二蘊者。受想二種是心所法。本是行中。由相麤等四義故。離行蘊外別立爲蘊。言前次第因至是此文者。前蘊廢立門總有三因。二因彼已明說。第三因云隣次當辯正是此文。應知。次第之言具顯隨麤等四義非一故。論言卽由如是諸次第因。

其次第二明處界次第者。論云。處界門中應先辯說六根次第。由斯境識次第可知。頌曰。

前五境唯現　四境唯所造　餘用遠速明　或隨處次第

釋曰。前三句約境明次第。第四句約處明次第。前五境唯現者。前五根境。謂六根中眼等前五唯取現境。是故先說。第六意根取境不定。意

境有四。三世無爲。於此四中或時取一。或二三四。是故後說。四境唯所造者。初句前字流至此中應言前四境也。謂五根中前四根境唯是所造。是故先說。身境不定。是故後說。謂身取觸。觸有十一。四是能造。地水火風。七是所造。滑澁等。身根有時或取大種。或取所造。或二俱取。故不定也。餘用遠速明者。餘謂前四眼耳鼻舌。身意外故名之爲餘。此四根中先說眼耳取遠境故。鼻舌不爾。是故後說。於眼耳中眼用遠故在耳先說。遠見山河不聞聲故。又眼用速。先遠見人撞擊鐘鼓後聞聲故。鼻舌二根用俱非遠。先說鼻者謂由兩義。一速。二明。一速者。如對香美諸飲食時。鼻先臭香。舌後嘗味。二明者。鼻能取味中之細香。舌不能取香中之細味也。或隨處次第者。處是六根所依之處。隨所依處有上下故辯根次第。謂眼所依最居其上。其次耳鼻舌。身多居下。意無方所。有即依止諸根生者故最後說。解云。謂六識身總名爲意。眼等五識依五根生。非第六識故言有即依止

諸根生者。（冠註論本第一 七十五左）

【暉鈔】卷上本 五十二右 三世及無爲四境。一一別緣爲四句。二二合緣爲三句。三三合緣爲二句。四法合緣爲一句。都十句也。或取大種者。四中相順者卽一念中合取。不相順者卽不俱時取也。或取所造者。如七所造輕重滑澁相違卽不俱時取。如輕滑相順卽俱時取。或二俱取者。能造所造相順者卽俱時取。如能造煖與所造滑等相順卽俱時取。能造煖與所造冷等卽不俱時取。餘准此釋。身多居下者。從頂至足皆是身根。望前四根依處。身根多分在餘四根下。少分在四根上。以少從多言身居第五也。意無方處者。對上五根言無方所也。有卽依止諸根生者。此釋意根在第六。所以非第六識。以不依五色根故。前五識依五色根。五識名意。說在第六。意識是前五識之流類。同前五識名意在第六。取前五識依五根。名有卽依五根生也。或隨處次第者。問。若耳鼻舌三處有高下者。如何根品說此三根橫布如冠花鬘處無高下。答。根品據無見有對色根體無高下。此句約扶根四塵所依處說有高下也。婆沙更有一說。約六根中分麤者先說。細者後說也。

【麟記】論本第一 七十二左 言由斯境識次第可知者。但辯六根次第。境識對根次自立故。然此頌中總約五義以明次第。一唯取現境故先說。二唯取所造故先說。三唯取離境故先說。四遠速故先說。五上下次第故先說。初總將五根對意。次將四根對身。從後向前。言身境不定是故後說者。正理云。境決定者用無雜亂。其相分明。所以前說。境不定者用有雜亂。相不分明所以後說。言身意外者。謂上已明身意竟。四根未辯。今將明之。故對身意以言餘也。然於四中。眼耳二種同

離中知。雙在前明。鼻舌二根同合中知。並在後說。然又四中先辯眼耳。次辯鼻舌。與上二節少不相似。隨文便故可以思知。言鼻能取味中之細香者。謂舌但嘗味。鼻亦聞香。但嗅香時舌不知味。言眼最居上者。此隨所依處有上下。若據根體即無上下故。下論云。此初三根橫作行度。處無高下。如冠花鬘。言身多居下者。謂亦少分居上故。言非第六識者。謂第六識不依五根生故。言非第六識。然由意根攬六識成。有唯依意。有依諸根生。非全皆爾故言有也。雖無色界唯依意根。通三界論故作是說。又婆沙云。復次隨順麤細次第法故。謂內六處眼處最麤。是故前說。乃至意最細後說。

從此第五明名廢立者。論云。何緣十處皆色蘊攝。唯於一處立色處名。又十二處體皆是法。唯於一種立法處名。頌曰。

為差別最勝　攝多增上法　故一處名色　一名為法處

釋曰。為差別三字通下兩句。且初為差別故一處名色者。境有境性種種差別名差別也。謂色等五境為境性。是境界故。眼等五根名有境性。有境界故。於此十處若總名色。即無如此境有境性種種差別。為差別故建立為十。唯一名色。又眼等九各有別名。唯此色處

而無別名。爲眼等九名所簡別。雖標總稱即受別名。言最勝者。明色處得通名也。於十處中色處最勝。故立通名。色有三義。名爲最勝。一者有對故。二有見故。三諸世間同說爲色故。眼等九處唯有有對一義無餘兩義。不名最勝。又爲差別故一名爲法處者釋法處也。若總言法即無差別。謂差別故立一法處。如色應知。攝多增上法者。此明法處得立通名。一攝多法。有六十四法。名爲多法。心所有四十六。不相應有十四。無爲有三。及無表色。此等諸法法處攝故。二攝增上法。增上法者所謂涅槃。唯法處攝。由此兩義獨名爲法。（冠註論本第一七十七右）

【暉鈔】卷上本五十三右　廢立者。廢即廢餘九不名色。十一處不名法。立即色境得色名。法境得法名也。種種差別者。色聲等別。眼耳等殊名種種差別。下十二處種種差別准此釋也。

【麟記】論本第一七十二左　言雖標總稱即受別名者。謂以色名遍十故是總稱。以爲餘九之所簡別即成別名。如多主馬同群各別有印。一主無印。以無印別有印者。今此亦爾。即此無名別有名者故。言雖標總稱即受別名。即是色處受別名非謂餘九處別名者也。言色處得通名者。前爲差別。且明十種不總爲一名。乃有色聲等異。此明色處偏受通名所由故二義別。言一有對者。手等觸時即便變壞故。二

有見者。可示此彼差別故。又上所明不論無表者以少故。法處得名一同色處。又論云。有餘師說。色處中有二十種。色最麤顯故。肉天慧三根境故。獨立色名。法處中有諸法名故。諸法智故。獨立法名。

從此第六明攝異名。於中有三。一略攝法蘊。二明類攝餘蘊等。三別明六界等。就第一略攝法蘊復分兩種。一攝法蘊。二明法蘊量。且初第一攝法蘊者。論云。諸契經中有餘種種蘊及處界名相可得。爲即此攝爲離彼耶。經中種種蘊及處界者。蘊者謂八萬法蘊。於戒等五蘊名種種蘊。處者謂十徧處。八勝處。五解脫處。無想天處。非想天處名種種處。界者謂六十二界。地等六界名種種界。彼經中蘊爲即此論五蘊所攝。彼經中處爲即此論十二處攝。彼經中界爲即此論十八界攝。爲離彼蘊處界耶。彼皆此攝。如應當知。此論文總答前問。彼經中蘊處界皆此論中蘊處界攝。如其所應當知。下文當辯。且辨攝餘諸蘊名相。頌曰。

牟尼說法蘊　數有八十千
彼體語或名　此色行蘊攝

釋曰。論有兩釋。諸說佛教語爲體者。彼說法蘊皆色蘊攝。語是音聲故色蘊攝。諸說佛教名爲體者。彼說法蘊皆行蘊攝。名是不相應行

故行蘊攝。（冠註論本第一七十八右）

【暉鈔】卷上本五十三右　名相可得名。名即能詮名。相即法體性也。五解脫者。一聞佛等說法得解脫即聞慧。二因自讀誦解脫即生得慧。三爲他說法得解脫思慧。四靜慮思惟得解脫思慧。五善取定相得解脫即修慧。皆慧爲體。即法處攝也。婆沙一百二十六評家以語業爲體。語即是聲。佛意說法本欲令他聞聲。有說。名者約聲上用說。語業中有表無表。今取表不取無表。聲通三性。故佛有善心及語工巧。兼發語通果心。故聲通三性也。

【麟記】論本第一七十四右　經中蘊處等餘皆有釋。唯五解脫處不辯。故今釋之。言五解脫者。一聞佛說法得解脫。二因自讀誦得解脫。三爲他說法得解脫。四靜慮思惟得解脫。五善取定相得解脫。解脫謂涅槃。因此五種得解脫故名解脫處。故正理云。於五法中隨得一種即便解義。解義故生喜。生喜故身安。身安故受樂。受樂故心定。心定故見如實。見如實故能盡諸漏。盡諸漏故得涅槃。前五種是解脫資糧名解脫處。頌數有八十千者。舊云。西方數法多以十百爲因。乘成多數。百千已上以百因之。未滿百千以十乘之。故目八萬爲八十千。今詳八十千者是舉大數若具足言乃八十四千也。言諸說佛教語爲體者。語謂語業。即爲教體。而言次第行列安布連合名句文身等者。是佛教用非佛教體。言諸說佛教名爲體者。謂名句文爲教體也。而言語表等者。是展轉因。如世子孫展轉生法。謂語起各各能顯義。評云。如是說者語業爲體。佛意說法他所聞故。又問。何故佛教唯語業非無表耶。答。生他正解故名佛教。他正解生但由表業。非無表故。案上二說各有所歸。西方

具傳兩釋。若據以教合機。非聲無以可聽。若據以詮求旨。非名無以表彰。故知所對不同。各有進遲。少一便闕。具乃無虧。

從此第二明法蘊量。論云。此諸法蘊其量云何。頌曰。

有言諸法蘊　量如彼論說　或隨蘊等言　如實行對治

釋曰。初兩句頌約文定量。第三句約義定量。第四句約行定量。論云。有諸師言。八萬法蘊一一量等法蘊足論。謂彼一一有六千頌。如對法中法蘊足論說。或隨蘊等言者。是第二師約所詮義以爲其量。或者顯第二解也。隨蘊等者。蘊者謂五蘊。等等取十二處。十八界。十二因緣。四諦。四食。四靜慮。四無量。四無色。八解脱。八勝處。十徧處。三十七覺品。六神通。一無諍定。一願智。四無礙解等。一一教門名一法蘊。如實行對治者。是第三解。就行定量。是婆沙中正義家釋。故云如實。行謂貪瞋癡等八萬行別。對治者是不淨觀等能對治門。所對治貪等有八萬故。能對治教亦有八萬。言八萬者。謂貪瞋等十種隨眠。此十隨眠一一皆以九

隨眠爲方便。足成一百。此有前分一百後分一百。合成二百。置本一百就前分一百一一皆以九隨眠爲方便成一千。後分一百亦以九隨眠爲方便復成一千。兼本一百成二千一百。已起有二千一百。未起有二千一百。足滿四千二百。約多貪多瞋多癡著我思覺此之五人一一有四千二百。合成二萬一千。更就三毒等分四人以配一一有二萬一千。遂成八萬四千。如彼所說八萬法蘊皆此五中一蘊所攝。若聲爲體是色蘊所攝。若名爲體是行蘊攝。（冠註論本第一 七十九右）

【暉鈔】卷上本 五十三左 准悲華經。聲聞有八萬法藏。獨覺九萬法藏。菩薩十億法藏。又無量義經云。聲聞八萬四千。獨覺九萬。菩薩十萬。彼經文隨機說法不同。如華嚴經隨根說四諦不同。有無量名目也。

【麟記】論本第一 七十五右 言一一量等法蘊足論者。此解意。謂佛說有八萬部法蘊。然一一部皆六千頌。如六足中法蘊足論數量。此約能詮文句定量。言或隨蘊等言者。謂其所說五蘊十二處等之言卽爲法蘊之量。言一一教門者。問。既言約義定量。而復言教門者何。答。舉其教門顯所詮義。謂隨所詮蘊等一一差別數有八萬。能詮法蘊其義亦然。言第三就行定量者。舊名就用定量。言如實者。

如道理判也。言八萬者。舊云。是眞諦法師數也。新云。撿眞諦俱舍疏無文。若依賢劫經。始從光輝度。謂託胎時 終至馱都度。分舍利時 總三百五十度。各有六婆羅蜜。乘成二千一百。對四大六衰各有二千一百。成二萬一千。貪嗔癡等分各有二萬一千。乘成八萬四千。然上八萬法蘊但就聲聞說。若論緣覺等其數更多。菩薩藏經無量義經等。聲聞八萬。緣覺九萬。菩薩十億。

從此大文第二類攝餘蘊等。論云。如是餘處諸蘊處界類亦應然。餘處者餘經處也。餘經所明諸蘊處界。皆此論中蘊處界攝。故言類亦應然也。頌曰。

如是餘蘊等　各隨其所應　攝在前說中　應審觀自相

釋曰。初句標經。次兩句明論攝經。下一句勸觀。如是餘蘊等者。標經所說。如是餘經所明蘊等等取處界。蘊謂戒等五蘊。處謂十徧處等。界謂六十二界等。各隨其所應攝在前說中者。明論攝經。謂經所明蘊處界三各隨所應攝在此論前所說中。謂此論五蘊攝經五蘊。此論十二處攝經十遍處等。此論十八界攝經六十二界。故言各隨其所應也。應審觀自相者。觀知攝相。相者性也。應審觀彼一一自相。夫言攝者唯攝自相。色唯攝色。心唯攝心。名自相也。經中五蘊謂戒定慧

解脫解脫知見也。彼中戒蘊此色蘊攝。戒是道共無表色也。彼餘四蘊是行蘊攝。解脫蘊以勝解爲體。解脫知見蘊取盡無生智爲體。此之四蘊是心所法故行蘊攝。又諸經說十遍處等。前八遍處無貪性故。十二處中是法處攝。若兼助伴五蘊性故。卽此意處法處所攝。此中色蘊取定共無表色也。色等四蘊是法處攝。識蘊是意處攝。攝八勝處應知亦爾。空識二遍處。空無邊等四無色處。四蘊性故卽此意處法處所攝。復有二處謂無想有情天處及非想非非想處。初處卽此十處所攝。無香味故。後處卽此意法處攝。四蘊性故。又多界經說界差別有六十二界。隨其所應當知皆此十八界攝。如有頌曰

界有六十二　十八界爲初　三六一四種

三六一十八加一四成二十二界。足前十八界成四十。六三後二二一。六三十八。二二成四。合二十二。足前成六十二。三六者一六謂地水火風空識界。二六謂苦樂憂喜捨無明界。三六謂欲恚害無恚無害無欲也。一四種者謂受想行識也。六三者一三欲界

色界無色界。二三色界無色界滅界。三三過去界現在界未來界。四三善界不善界無記界。五三劣界處中界妙界。六三學界無學界非學非無學界也。後二三一者 一二有漏界無漏界。二二有爲界無爲界也。（冠註論本第一 八十右）

【暉鈔】卷上本 五十三左 解脫蘊以勝解爲體者。第九解脫道盡無生智相應勝解。最初於境印持自在名解脫也。盡無生智能觀解脫事。故名知見蘊。與前慧蘊別者。盡無生智緣苦集二諦生。緣滅道二諦生即解脫知見蘊。以緣滅道解脫事故也。婆沙一百三十七問。世尊於無想天及有頂天何故多說爲處。答。外道執爲解脫。佛爲破彼計說爲受生處也。問。何故世尊說有六十二界。答。爲異外道六十二見故也。法蘊足論第十多界品頌曰。界有六十二。十八界爲初。三六一四種。六三二後二二一。十八界如論十八界自名。攝入此論十八界也。六前四能造觸。即十八界攝。空界以明暗色爲體。即色界攝。識界以心法爲體。七心界攝。二六者。前五大地受。後無明大煩惱地癡。法界攝。三六欲界即大地欲。恚即不定嗔。害即小煩惱中害。無欲無恚無害即大善地二根及不害。皆是心所法界攝也。一四者。前三心所法法界攝。後一心法七心界攝。一三者。欲界即十八界攝。色界十四界攝。無色界後三界攝。二三者。色界即欲色界皆名有色。即十色界攝。無色一切心心所不相應。即七心界法界攝。滅即擇滅。法界攝。三三者。世無別體。約五蘊法上立。通十八界攝。四三者。不善即不善有覆無記法爲體。七心法界色聲界攝。善界即前十界善邊攝。無記通十八界攝。五三同前。四三釋之。六三者。學無學以無漏五蘊爲體。即意界意識及法界攝。非學非無學即一切有漏及三無爲爲

體。通十八界攝也。後二二者。有漏通十八界攝。無漏後三界攝。有爲通十八界攝。無爲法界攝也。
【麟記】論本第一七十五左　言經中五蘊者。謂無漏五蘊。故婆沙云。無漏身語律儀名無學戒蘊。無學三摩
地爲無學定蘊。云何無學慧蘊。答。無學正見智。云何解脫蘊。答。無學作意相應心。已勝解今勝解
當勝解。謂盡無生無學正見相應勝解於境自在立勝解名。非謂離繫。云何知見蘊。答。盡無生智
名解脫知見蘊。問。何故此智名解脫知見蘊。答。解脫身中猶有此故。最能審決解脫事故。言前
八遍處無貪性者。謂觀能造地水火風及彼所造青黃赤白。於此八上令貪不起。以無貪是心所法
故法處攝。言取定共色者。以有漏故不通道共。故唯定共。言攝八勝處者。前八勝處。謂內有色想觀
外色少及多。次內無色想觀外色少及多爲四。次觀青等四色爲四。此等亦以無貪爲性。故與遍處是
同。言初處卽十處攝者。謂無想天是色界。卽六根四境爲十。十二處中但除香味。無想有情聲恒成
就。故得有聲。問。彼既無想何有意處。答。正受無想異熟果時。雖無有心。初生後死必有心故。
故亦有意。言後處者。卽非想處也。攝相可知。婆沙問云。世尊何故於無想天有頂天多說爲處。答。
有諸外道。執此二處以爲解脫。佛爲遮彼說爲生處。前列經中五解脫處章不明攝。今唯識論
云。五解脫處慧爲性故。此法處攝。若兼助伴卽此聲意法處所攝。可知。言多界經者。阿含經中亦
列六十二界。名多界經。此依法蘊足論多界品。出六十二界。攝入十八界。有此頌文。初十八界如
自名攝。第一六者。地水等四觸界攝。空界以影光明闇爲體。色界攝。識界以有漏識爲體。七心界
攝。第二六者。苦樂等五以受爲性。無明以癡爲性。是心所法皆法界攝。第三六者。欲以貪爲性。
恚以嗔爲性。害以害爲性。無欲以無貪爲性。無恚以無嗔爲性。無害以不害爲性。此六是心所

法皆法界攝。准新舊疏第二六在第三第三六在第二也。一四種者。受想行法界攝。識七心界攝。六三中第一三者。欲界十八界攝。色界十四界攝。除香味及二識。無色界意法意識界攝。第二三色界者通欲色二界。以皆有色故。總名色界。十八界攝。無色後三界攝。滅界以擇滅非擇滅爲性。唯法界攝。第三三。三世法五蘊性故。十八界攝。第四三。善界以一切善法爲性。不善以諸不善爲性。此二七心界色聲法界攝。無記界以一切無記法爲性。十八界攝。第五三。劣界以不善有覆無記爲性。七心界色聲法界攝。處中以有漏善及無覆無記法爲性。十八界攝。妙界以無漏善爲性。後三界攝。准太疏列第五在第四也。第六三。學界以學無漏五蘊爲性。無學界以無學無漏五蘊爲性。此二後三界攝。非學非無學以有漏五蘊及三無爲爲性。十八界攝。第一二者。有漏界以有漏五蘊爲性。十八界攝。無漏界謂無漏五蘊及三無爲爲性。後三界攝。第二二者。有爲界以五蘊爲性。十八界攝。無爲界以三無爲爲性。法界攝。

從此第三別明六界。論云。地水火風四界已說。空識二界未說其相。爲卽虛空名爲空界。爲一切識爲識界耶。問也。不爾。答也。云何。徵也。頌曰。

空界謂竅隙　傳說是明闇
識界有漏識　有情生所依

釋曰。空界謂竅隙者。正明空界非虛空也。唯取門窻及口鼻等內外竅隙名爲空界。傳說是明闇者。出空界體。應知此體不離晝夜。晝以明

爲體。夜以闇爲體。依經部宗空界是假。薩婆多師空界是實。明闇爲體。論主意朋經部。故曰傳說。識界有漏識者。正明識界非無漏識也。有情生所依者。明無漏識非識界所以也。由許六界是諸有情生所依故。若無漏法破壞三有。非生所依。故無漏識非識界也。

（冠註論本第一 八十三右）

【暉鈔】卷上本 五十五右　空界理實通光影。舉明攝光。舉暗攝影也。經部空體一無別也。有漏識界。一能持現在。二能續後有。無漏識但能持現在生。不能續後有。不名識界也。問。二無心位無識界。無色界無前五界。如何說六界能持生。答。今約總相說六界能持生。不說一切皆有六界。二無心位即前五界持生。無色界即識界能持生也。問。無爲無用。不說持生可然。一切有漏是苦集諦皆能持生。如何不說。答。前五界體即色。識體即心。色心兩法諸部共有。論主說之。經部覺天不立心所不相應。是假故不說也。問。二十色。何故明暗爲空界。觸十一唯說四大不說餘者。答。四大及空界。初生至命終皆有用持生說之。餘七觸及長等有無不定故不說也。婆沙七十五問。何故世尊十八界中少分說爲六界。答。愚少說六界。愚多說有十八界。又爲利根說六界。鈍根說十八界。又爲樂略說六界。樂廣說十八界。又十八界有二類。一色法。二心法。六界攝色心總盡也。

倶舍論釋頌疏義鈔卷上本終

【麟記】論本第一 七十八イ 問爲卽虛空名爲空界至識界者。問意爲卽虛空無爲名爲空界。爲一切有漏無漏識爲識界耶。言竅隙者。廣雅云。竅孔也。隙裂也。說文云。竅空也。隙壁際孔也。言傳說是明闇者。理實具通光影明闇。光明爲一對。明輕光重。偏言明者舉輕以顯重。影闇爲一對。影輕闇重。偏言闇者舉重以顯輕。此卽影略互顯。然正理云。傳說。是明闇者偏說二重。言經部宗空界是假者。正理云。彼上座及餘一切譬喩部師咸說。空界不離虛空。然彼虛空體非實有。故知虛空界體亦非實。論主許之。正理廣立虛空有體。乃至謂能容受一切光明。以果顯因有實體相。虛空無者應無光明。又論云。卽此說名隣阿伽色。傳說。阿伽謂積集色。極能爲礙故名阿伽。此空界色與彼相隣。是故說名隣阿伽色。此述本論空界色異名。伽翻爲礙。阿通二義。或名爲極。或名爲無。此是極義。謂空界色隣此極礙之色也。又云。有說。阿伽卽空界色。此中無礙故名阿伽。卽阿伽色餘礙相隣。是故說名隣阿伽色。此第二約餘礙色與此空界是相隣也。由含兩義故存本名。言許六界是有情本者。謂地水火風空識二界。從續生心至命終心。恒時持生故。諸無漏法卽不如是。又正理云。如是六界於有情生。生養長因差別轉故。是生所依。生謂識界。續生因故。養謂大種。生依止故。長謂空界。容受生故。有義。色法中強偏說四大。所攝所造。無色中強心法爲勝。所攝餘法。

倶舍頌疏記第一 迺下

倶舍論頌疏　論本第一終

倶舍論頌疏　論本第二

中大雲寺沙門圓暉述

分別界品第一之二

從此第三諸門分別。總有二十二門。分別十八界。此有三門。論云。於前所說十八界中幾有見無見。幾有對無對。幾善幾不善幾無記。頌曰。

一有見謂色　十有色有對　此除色聲八　無記餘三種

釋曰。一有見謂色者。十八界中一界有見。所謂色界。由顯形色在此在彼差別不同。遂能示現此彼言說。言說名見。有彼言說故。故名有見。亦解。見謂眼根。觀照色故。色有眼見名爲有見。（冠註論本第二右初）

【暉鈔】卷上末右初　倶舍論釋頌疏義鈔卷上末　京兆西明寺沙門　慧暉述

論本第二　前說喚色上能詮名是見。所詮有彼能詮名名有見。不正也。

【麟記】論本第二右初　倶舍頌疏記　論本第二　富春沙門遁麟述

言有見者。梵云婆(此云有)尼陀羅舍那(此云見)。見含三義。一照義。二示義。三喩義。論中但擧示現一義。婆沙正理具顯三義。今此章中但有示照二義。初是示現義。言說名見。次是觀照義。眼根名見。言眼根照色者。抄云。謂眼根舒光照物。照物令現故名見色。色俱令起名爲有見。如伴共行名爲有伴。有說。此色於鏡等中有像可現爲有見。可示如彼如此等故。不可說聲有谷響等應成有見。不俱生故。自餘十七界無上說義。名爲無見。

十有色有對者。五根五境稱之爲十。體是色故名爲有色。此十色界極微所成。更相障礙故名有對。論云。如手礙手。如石礙石。或二相礙。手石名二應知。有對總有三種。一障礙有對。二境界有對。三所緣有對。對是礙義。礙有二種。一障礙礙。二拘礙礙。障礙礙者謂障礙有對。十色爲體。障礙即有對。持業釋也。拘礙礙者謂地界所緣二種有對。境界有對體者。論云。謂十二界(六根六識)法界一分。於法界中唯取心所。故云一分。諸有境法於色等境。前十二界及法界一分能取境故名諸有境法。於色等境者即所取境也。此十二界爲境所拘名爲有對。境界之有對依主釋也。所緣有對體者謂七心界全。六識及意界法界一分。心所是也言所緣者色等六境也。言有對者七心

界法界一分也。此七心界法界名所緣有對者。爲所緣境之所拘礙名爲有對。所緣之有對依主釋也。論引施設足論證。境界有對作四句分別。故施設足論作如是說。此中於水有礙非陸。如魚等眼。於陸有礙非水。從多分說。如人等眼。有於俱礙。如畢舍遮。（唐云食血肉鬼）室獸摩羅。及捕魚人。蝦蟆等眼。（此畢舍遮等於水陸俱能見色。故通俱礙耳。）有俱非礙。謂除前相。論云。境界所緣復有何別。（問也）若於彼法此有功能。即說彼爲此法境界。心心所法執彼而起。彼於心等名爲所緣。解云。（答也）彼法者色等六境也。此有功能者。此六根六識於彼色等有見聞等功能也。准此論文。功能所託名爲境界。如眼能見色。識能了色。喚色爲境界。以眼識於色有功能故也。心心所法其性劣弱。執境方生。猶如羸人非杖不起。故色等境識所攀附。名爲所緣也。（已上注也）准此論文境界所緣二義全別。且如一色被眼所見名爲境界。眼爲有功能於色故也。即此一色能引識起名爲所緣。爲與識爲力故也。由此道理礙

取境義邊名境界有對。故境界有對通六根六識。以根及識能取境故。礙緣境義邊名所緣有對。故所緣有對唯心心所。以心心所仗境起故。亦光法師云。礙體義邊名所緣有對。礙用義邊名境界有對。更有多釋煩而不敘。亦論云。云何眼等於自境界及自所緣轉時說名有礙。問礙義也。云何眼根眼識等於自境界轉時說名有礙。問境界有對也。云何眼識等於自所緣轉時說名有礙。問所緣有對也。言自簡他。如眼見色耳聞聲也。越彼依餘此不轉故。解云。答也。越彼色等於餘聲等此眼等不轉故名為礙也。或復礙者是和合義。謂眼等法於自境界及自所緣和合轉故。解云。是約和合義以釋礙也。問。若法境界有對亦障礙有對耶。答。應作四句。謂七心界法界一分諸相應法四十六心所名諸相應法是第一句。能取境故名境界有對。非極微成非障礙有對。色等五境是第二句。極微成故名障礙有對。不能取境非境界有對。眼等五根是第三句。極微成故名障礙有對。能取境故亦名境界有對。法界一分非相應法是第四句。於法界中除心所外餘得非得等名非相應法也。非極微

成故非障礙有對。不能取境故非境界有對。問。若法境界有對亦所緣有對耶。答。應順後句。謂所緣有對必是境界有對。以心心所緣境起時必取境故。自有境界有對而非所緣有對。謂眼等五根。以眼等根能取境故名境界有對。不緣境故非所緣有對。依經部宗中大德鳩摩羅多作如是說。鳩摩羅多此云豪童也。 是處心欲生他礙令不起。應知是有對。無對此相違。此頌意者。如有色處其心欲生。被他聲礙心遂不起。心不起時名爲有對。心正生時即名無對。不同有宗於心生位說名有對。論主意朋鳩摩羅多釋故。論云此是所許。（冠註論本第二初左）

【暉鈔】卷上末初左　問。色體不是見。有眼見故名有見。亦應識體不是色。有彼色故名有色。答。乘言便故言有色。乘上句有見言有色也。初障礙有對。即約體相礙名有對。後二有對。即根識被境拘名有對也。畢舍遮舊云毘舍闍。唐言食血肉鬼。室獸即傍生類。形如壁宮。大者長一百尺。少者長二丈也。如魚眼於陸不見色名無礙。於水見色名有礙。故知取見色聞聲時名有對。下諸句准此釋。境界有對即根識於境有見聞等用。所緣有對即境於心心所有能牽識起用。又境界有對即於境能取別相。所緣有對於境上取總相以總相緣也。礙體義邊。所緣有對心心所被

境礙取總相之用。不得取別相用。境界礙根及心心所別相之用。如彼同分眼根等不取境。不名境界有對。故知約用名境界有對。且據一相釋。非為正義。古人更三釋。文繁不述。境界有對寬通六根心心所。所緣有對狹唯心心所。問若法境界有對即前句。亦所緣有對即後句。今答先順問中後句。名順後句。順前句答准此釋。境界通五根及心心所是寬。不通五境是狹。障礙通五根及境寬。不通心心所狹也。經部祖師造喩鬘論。中有此頌。即由無對心方得生。能見色等。若耳不聞時名有對也。

【麟記】論本第二右初　言極微所成更相障礙者。如東微礙西微令不至東。西礙東亦爾。故論云自於他處被礙不生。如手礙手。此約極微體相障礙。又解曰。此根境是極微成。即顯根境更相障礙。此約所成根境相礙。言有對總有三者。因明障礙有對便明餘二有對。然頌言有對色者。但約障礙有對非餘二也。故論結云。應知此中唯就障礙有對而說。是故但言十有色有對。由此義准說餘無對。釋三有對總為三門。一標章。二列數。三牒釋。初二如章可知。對是礙義。下牒釋。拘礙中自為三段。一擧數。二釋名體。三差別。言法界一分者。法界有四類法。一心所。二不相應。三無表色。四無為法。唯取心所故言一分。言於色等境者。謂上諸法各對自境。等即等取聲等五境也。釋名應言。此眼識等於色等境有功能故名為境。所拘名為有對。故境界有對。言境界之有對者。謂擧所取之境界目能取之有對。故依主釋。次釋所緣有對。亦是擧所緣之境辯能緣有對。所緣有對不通五根。如次當辯。次辯差別者。先明境差別。次對所緣辯異。次對障礙。後重辯境界所緣。尋章可解。言如人等眼者。謂捕魚人等水中見物。多分於陸說礙。言畢舍遮者。昔云毘舍闍。亦云辟舍柘鬼。

卽餓鬼中勝者也。室獸摩羅是傍生類。形如壁宮。有云。形如床大。舊經律中或作失取摩羅。或失守摩羅。梵音轉耳。譯云殺子魚也。善見律云。鰐魚也。有四足。似魚鼈齒至利。有禽鹿入水齧腰卽斷。廣州有之。小者長二丈。大者乃至長百尺。准論約晝夜更有四句。故論云。有於夜有礙非晝。如諸蝙蝠鵂鶹等眼。有於晝有礙非夜。從多分說。如人等。有俱礙。如狗野干猫狸等眼。有俱非礙。謂除前相。次辯差別。言此功能者。正理云。如人於彼有勝功能。便說彼爲我之境界。(述曰。謂有境法。於自境上有見聞等遊履功能名爲境界。)心心所法執境而起名爲所緣。(此釋所緣也。然此五根名境界有對。心心所所緣有對。相則易知。卽心心所中境界所緣二差別者。執境而起心心所同名爲所緣。取像印持功能差別心心所異名爲境界。越彼於餘此不轉。故通名有對。是謂差別。)言礙體用者。彼云。如彼同分眼。體雖恒有無見色能。不名境界。以此准知。境界約用。所緣據體。解云。心心所法要有所緣體方得起。若無所緣現卽無體。故知約體。彼同分眼雖有體而無用。不名有對。故知約用也。更有多釋者。舊更有三釋。一云。境界有對。此約有能。非要起用。如彼同分眼。所緣有對執境方起至現。謂起彼取果用。有緣卽起。無緣不起。故名有對。第二云。礙取境用名爲境界。礙取果用名爲所緣。三云。礙取境用名爲境界。礙緣境用名爲所緣。言自簡他者。十八界中隨所取者卽名爲自。言越彼色等於餘聲等眼不轉者。如眼正見色時。傍復有聲。欲越色境而取於聲。卽此眼識不轉也。轉之言起。謂識不於聲上起也。既不能取他。明知唯爲自境所拘礙也。或轉謂不移於聲境也。有約了青色識不於黃色境明其拘礙礙。大意亦同。和合者。舊云。眼等於自境轉時。於餘聲等而不得起。此和合言還是拘

礙。准此釋與前無別。次境界對障礙差別互有寬狹。得為四句。可知。言應順後句者。謂問中境界居前。所緣是後。今即順所緣答。云故名順後。亦名稱後句答。由境界是寬通六根故。所緣是狹不通色根也。以寬問狹故。故順後答。若是所緣必是境界。不得言若是境界必所緣也。以五根是境界非所緣故。既是順後亦顯違前。若將所緣問境界者。即是以狹問寬。順前句答。答詞同前。但由問有前後故。答成其順前順後。所緣障礙體不相關。所以不對作句。言豪童者。諸童子中最為上故。是經部祖師。造喻鬘癡鬘論。中有此頌也。

此除色聲八無記餘三種者。三性分別門。此十色中除色聲二所餘八種是無記性。無記二字義屬上句。餘謂色聲。是通三性。言三性者。一善。二不善。三無記。若法可讚置白品中名為善性。若法可毀置黑品中名為不善性。非可讚毀名為無記。亦解不能記異熟果故名無記。眼等八種不可記為善不善性。是無記攝。若色聲二從善心力等起身語表攝。是名為善性。從不善心力等起身語表攝。名為不善。從無記心等起身語表攝。名為無記。及不從心所等起總名無記。言色聲二者。身表是色。語表是聲。言等起者心王心所等能引起。由色聲二非自

性善惡。約能發心判成善惡。心若是善。所發身語亦名爲善。心若不善。所發身語亦名不善。所以身語名等起善。（冠註論本第二四左）

【暉鈔】卷上末右二　破後說云。不能招果即名無記者。無漏不招果。應無記攝也。六識意界與貪等相應即不善。與無貪等相應即善。餘一切並無記也。法界中無貪等五自性善。餘大地大善地尋伺睡眠惡作無表擇滅無爲得四相二定皆是相應善。或等起善攝。貪等五自性不善。大地大煩惱六小惑十得四相無表相應不善。或等起不善也。空非擇滅即自性無記。大地十大煩惱六不定八有通無覆無記。有通有覆無記也。不從心起者。聲八中即是後六對聲。色二十中顯色十二也。身語二表本心親引生即隨心判三性。身語所依四大本心不親引生即一向無記性也。如名等三。本心發聲不發名等。名等無記性也。問。如聲上四大名身等。不從心親引生。以依聲生。即無記者。聲上得四相亦不從心親引生。依他聲生。如何隨聲通三性。答。名等四大望聲無力。非倶有因。不隨聲說三性。四相望聲有力。倶有因故。得親依本法生。又望本法有力。隨聲說三性。

【麟記】論本第二四右　言無記二字屬上者。以頌中無記字。在下令屬上。應言八無記也。言餘謂色聲者不然。若唯明十色。可言謂色聲。通辯十八界。何局在此二。故論云。其餘十界通善等三。謂七心界與無貪等相應名善。貪等相應名不善。餘名無記。法界若是無貪等性相應等起擇滅名善。若貪等相應等起名不善。餘名無記。次方辯色聲。今此章中全是疎略。良由疏主承前十有色及餘色聲等言唯於十色辯。故成此誤。言無記者。記謂決定分明說義。前二品相狀可分明

記。故名無記。第二解無記。論主破云。若爾無漏應唯無記。言眼至善等者。依前義釋。言等起善者。如良藥汁所引生乳。等起不善。如毒藥汁所引生乳。廣辯此相如業品中。

從此第四三界分別門。論云。已說善等。十八界中幾欲界繫。幾色界繫。幾無色界繫。頌曰。

欲界繫十八　色界繫十四　無色繫後三
除香味二識

釋曰。欲界所繫具足十八。色界所繫唯十四種。除香味境及鼻舌識。除香味者段食性故。色界無段食故無香味。除鼻舌識無所緣故。鼻識緣香。舌識緣味。既無香味故無鼻舌識。無色所繫唯後三種。所謂意界意識界法界。眼等五根色等五境此十是色。無色離色故無此十。無此十故五識亦無。故論云。依緣無故五識亦無。五根爲依五境爲緣。故唯後三無色界繫。（冠註論本第二左五）

【暉鈔】卷上末右三　問。香味段食性。色界無段食。香味即無。觸亦段食性。色界應無觸。答。色界有觸非是段食性。有能造色及所造衣等。香味離段食無用。故色界無也。問。香味離食無別用。

色界無者。鼻舌無境取。應無二根體。若爲嚴身有二根者。但有扶根依處即得。何要根體。答。色界無男女根體。扶根依處亦無。要有根體身有扶根依處也。問。色界女男二根以無用。離體無別依處。鼻舌有嚴身用。何妨離體有依處。又胎內定死者六根無用。何要須起。答。胎內諸根有因無用。女男色界因用皆無。香味同此。鼻舌二根有因無用。有無不同理在於此。由六根有愛發勝業爲因。由得上定愛內身故有六根。愛男女根依婬欲。婬欲色界無無二根也。

【麟記】論本第一左四　言欲界所繫者。繫謂繫屬。即被縛義。言色界無段食者。要離段食貪方生彼。故如下釋言。略說段食所引貪名之爲欲。既此是欲色界無。又雜心云。彼無段食性。以身微妙故。論云。若爾觸界於彼應無。如香味境段食性故。答云。香味離食無別受用。觸有別用持根衣等。故觸非無。若爾鼻舌彼應非有。如香味境彼無用故。不爾。二根於彼有用。謂起言說及莊嚴身。故於色界唯十四種理得成立。言無色離色者。論云。要離色欲於彼得生。故無色中無十色界。

從此第五有漏無漏分別門。論云。已說界繫。十八界中幾有漏。幾無漏。

頌曰。

意法意識通　所餘唯有漏

釋曰。意法意識通者。通有漏無漏二也。謂意及意識。道諦攝者名爲

無漏。餘名有漏。法界若是道諦無爲名爲無漏。餘名有漏。法界有無漏心所法名道諦也。餘十五界唯是有漏。道諦無爲所不攝故。（冠註論本第二左六）

【暉鈔】卷上末左三　法界道諦攝者。即大地十大善十及尋伺四相得無表色通無漏。餘法皆有漏。

【麟記】論本第二右五　言道諦攝名無漏者。道諦之言通其三道。漏不增故名爲無漏。餘名有漏者。餘意及識漏隨增故名爲有漏。言道諦無爲者。道諦有爲法也。無爲謂三無爲。擇滅漏緣而不增。虛空非擇滅漏不緣故名無漏。非果法故染不緣也。言餘十五界唯有漏者。謂五根五境五識漏隨增故。唯此宗佛十五界亦唯有漏。以佛自身雖無煩惱而爲他人緣於佛起故亦有漏。若餘部師佛身非漏依故不名有漏。

從此第六有尋有伺門。於中有二。一正分別。二釋妨難。且正分別者。

論云。十八界中幾有尋有伺。幾無尋唯伺。幾無尋無伺。頌曰。

五識唯尋伺　後三三餘無

釋曰。眼等五識有尋有伺。由與尋伺恒共相應。謂眼等五識有二種因故與尋伺恒相應也。一行相麤。二外門轉。由此二因故。眼等識與尋伺俱其義決定。故說唯言。（冠註論本第二右七）

【暉鈔】卷上末左三　五識唯尋伺者。疏以二義共釋五識有尋伺。正理破此二因云。現見欲界內門細意識恒與尋伺相應。此破行相麤因。二定已上外門轉意識應有尋伺。此破外門轉因也。自釋云。以五識與尋伺同所依地。唯欲界初定有恒共相應。言唯尋伺也。安慧救云。欲界內門意識。雖無外門轉。有行相麤故有尋伺。二定已上意識。雖有外門轉。無行相麤故無尋伺也。寶法師釋此論二因云。以行相麤釋五識唯尋伺以外門轉釋五識行相麤。第六意識行相不麤。以通內門轉故也。

【麟記】論本第二左五　言幾尋伺者。舊云。尋伺相似。於一心中或二俱起。或唯有一。故此偏明。憍慢雖亦相似亦唯有一。非二俱起。慚愧雖亦相似亦二俱起。非唯有一。愛敬亦然。故此不明。於此頌中有其三類。一唯爲尋伺。二通三品。三恒無尋伺。初後二類相顯易知。中三品稍將難曉故。下隨疏更復指陳。言行相麤者。謂五識依五根取五境。行相麤顯。若爾內門意識應非行相麤。解云。五識望意識名麤。意識望上地名麤。又解。通望上地並名爲麤。且依前釋。言外門轉者。謂緣外色聲等境故。正理彈云。經主釋言。以行相麤外門轉故。此因非理。現見意識內門轉時。亦常與彼共相應故。上地外門意識亦無尋伺。應作是釋。五識唯於尋伺所隨地中有故。非於欲界初靜慮中心心所法。除尋與伺。而有不與尋伺相應。何用外門爲因簡別。俱舍師救云。行相麤是通因。外門轉是別因。五識具二。內門意識雖無外門轉。而有行相麤故尋伺。上地外門意識雖有外門轉。而無行相麤故無尋伺。及餘相應皆通三品。

後三三餘無者。後三謂意法意識。根境識中各居後故。重言三者。明

此三界皆通三品。三品名三。言三品者。一有尋有伺品。二無尋唯伺品。三無尋無伺品。故論云。此後三界皆通三品。意界意識界及相應法界。除尋與伺。法界中有四十六心所法。名相應法界。於四十六心所中除却尋伺取餘四十四心所。謂尋伺二種不通三品。故除之也。今此文中意明通三品也。若在欲界初靜慮中有尋有伺。若在靜慮中間無尋唯伺。第二靜慮已上諸地乃至有頂無尋無伺。明意界意識界及四十四相應法界在諸地中通三品也。又論云。法界所攝非相應法靜慮中間伺亦如是。法界中有十四不相應及三無爲兼無表色名非相應法。此非相應法中及靜慮中間伺同前第三無尋無伺品。故言亦如是。謂非相應法不與尋伺相應故名無尋無伺。其中間禪伺地法中無尋故。不與尋相應故名無尋也。伺無第二伺共相應故名無伺也。又論云。尋一切時無尋唯伺。無第二尋故。但伺相應故。尋同前第二品名無尋唯伺。無兩尋同一時起故無第二尋也。由尋無第二尋故。尋不與尋相應故尋名無尋。尋得與伺相應尋名唯伺。請細讀看之也。又論云。伺在欲界初靜慮中三品不收應名何等。此問意。伺非三品收者。伺不與伺相應故不可言有尋有伺品。伺得與尋相應故不可言第二無尋唯伺品及第三無尋無伺品。既非三品。應名何等。此應名曰無伺唯尋。無第二伺故。但

與尋相應故。此文答前問也。伺無第二伺共相應故名爲無伺。與尋相應故名唯尋也。由此故言有尋有伺地有四品法。由此者由有第四無伺唯尋品也。有尋有伺地者欲界初禪是也。一有尋有伺。謂除尋伺餘相應法。餘相應法者餘四十四心所法也。二無尋唯伺。謂即是尋。三無尋無伺。謂即一切非相應法。非相應法者。法界中有十四不相應三無爲法及無表色也。四無伺唯尋。謂即是伺。言餘無者。餘十色界無尋無伺。常與尋伺不相應故。（冠註論本第二左七）

【暉鈔】卷上末右四　此後三界皆通三品下。明後三界歷諸地通三品釋頌後三界通三也。從法界所攝非相應法下。別明法界中除尋伺餘不相應無爲無表色諸法不通三品也。伺在欲界初定攝前明法界中六十三法了。唯尋未明。此前三品不攝。何品收也。心心所一念無二受等俱時生。尋伺一時亦無二體同時起。故云無第二尋等。正理破云。設有第二豈得相應。彼自釋云。謂自體不與自體共相應也。由此故言下。再結前義。明後三界中約法別論。在欲界初定各成四品也。

【麟記】論本第一左六　次又論云下。約唯法界非相應及尋伺等通局。所以然者。此章門初列三品名。問。十八界法上既除尋伺。唯言意識及相應法通三品。其非相應及前所除尋伺等爲在何品。故更問之。由此所明法無不盡。言取餘四十四心所者。問。嗔忿等既不通上地。何故言四十四通三品耶。答。雖嗔忿等不通上地。非此所明。此中但明尋伺法故。且對尋伺總言四十四。其餘通

局如下俱生中辯。此章中言四十四心所。故有此濫。論但言餘相應法。即是隨有者。便此無妨。言意明通三品者。以釋頌後三界通三品故云意明也。言有尋有伺者。此謂相應有非俱有有。由此四相不名有尋伺故。言法界所攝至亦如是者。且法界中總有四類法。一餘相應法。二非相應法。三尋。四伺。上明餘相應法竟。今此明餘類也。然伺有二種。一中間禪伺。二欲界初禪。其中間禪伺當體及非相應法。同前約地中第三品。若欲界初禪伺與前不同。如下建立。言尋一切時無尋者。此明尋也。謂若尋起恒無第二。然無少時而有第二。故言一切時也。言無第二尋故者。釋上無尋。但伺相應故者。釋上唯伺。無第二者。爲遮同時有第二不遮異時有第二也。又尋自體不可相應。故知唯伺。又此唯言。且遮尋。故言唯伺。非不亦與受等相應。言伺在欲界至名何等者。此明欲界初禪伺也。謂法界四類中。餘相應非相應尋及中間禪伺。隨其所應建立三品。如前已辯。而此欲界初禪中伺爲名何品。故曰三品不收應名何等。建立如章。然初品名爲有尋有伺者。蓋是餘四十四心所有尋伺。即彼四十四心所立爲初品。而此伺體實非初。非唯初品不收。第二第三亦復不標。故須與問更別建立。言由此至有四品法者。據約法界自有四品法。然四品皆初標品名。謂字已下指其法體。言餘四十四心所者。問。何不言意識二界。獨言心所耶。答。雖意及識亦爲初品。此約法界明故但言心所。以論言謂除尋伺餘相應法故。然此四品與餘次第不同。順地作法故。俱句在初。一單在第二。俱非句第三。一單句在第四者。以地中無別無伺唯尋品故。此單句在第四。問。所以頌文但說前三不言第四者。顯宗云。然法少故頌不別說。唯約一句故云少也。

從此第二釋妨難論。問起云。若五識身有尋有伺。如何得說無分別耶。

頌曰。

說五無分別　由計度隨念　以意地散慧　意諸念爲體

釋曰。上兩句釋難。下兩句出體。傳說分別略有三種。一自性分別。二計度分別。三隨念分別。由五識身雖有自性而無餘二。論云。如一足馬名爲無足。是故經中說無分別。自性分別者體唯是尋。後心所中自當辯釋。以意地散慧者。出計度分別體。散謂非定。簡定中慧。意識相應。簡五識心。故第六識相應散慧名爲計度分別。意諸念爲體者。出隨念分別體。若定若散意識相應諸念名爲隨念分別。念通定散。故名爲諸。（冠註論本第二九右）

【暉鈔】卷上末左　推求行相名分別。慧及念有簡擇記持。得名分別。自性者。唯尋伺。體能尋求。即是分別也。問。想能取像。受能領納。勝解能印持。如何非分別。答。遮惡取善名分別。受想不能遮惡取善。勝解未決斷位未能印持。故不名分別也。問。五識起有慧念。如何非分別。答。以五識微劣。同時雖有慧念。不名二分別也。

【麟記】論本第二右八 言無餘二至無分別者。論說喩云。如一足馬名爲無足。自性分別唯是尋者。正理云。夫分別者推求行相。故說尋爲自性分別。簡擇明記行相順尋。故分別名亦通慧念。言簡定中慧者。婆沙云。定中亦有慧。而非推度分別。若推度時便出定故。又正理云。定中不能計度境故。非定中者。能於所緣如是如是計度而轉。故於此中簡定取散。言隨念分別者。或憶念分別曾所見事。或於現像而能起念。於定散皆能記持。故正理云。明記所緣用均等故。

此下第七有所緣無所緣門。第八有執受無執受門。論問起云。十八界中幾有所緣。幾無所緣。幾有執受。幾無執受。頌曰。

七心法界半　有所緣餘無　前八界及聲　無執受餘二

釋曰。初兩句者答第七問。下兩句者答第八問。七心者。六識意界也。法界半者。於法界中有四品法。今唯心所法。取非全故名爲半也。此七心界及法界半爲有所緣。緣謂攀緣。心心所法名爲能緣。境名所緣。有彼所緣名有所緣。餘無者。餘謂十色界及法界所攝非相應法。不能緣境名無所緣。（冠註論本第二右十）

【暉鈔】 闕之

【麟記】論本第二左八　言有彼所緣者。正理云。如人有子。所緣所行及與境界名義差別。言非相應法者。非相應言亦攝無表及三無爲。倶是不相應。以不能取境故。

前八界及聲無執受者。前謂取前七心界及法界全。此八及聲總成九界。名無執受。餘二者。餘謂所餘。謂眼等五根色香味觸。此之九界各通二義。一有執受。二無執受。有眼等五根住現在世名有執受。過去未來名無執受。色香味觸住現在世與五根不相離者名有執受。若在現在不與相合。及在身外。并過去未來法名無執受。解云。色香味觸總有三類。名無執受。一不與根合。謂髮毛等。二在身外。謂非情中地水等。三過去未來者也。論云。有執受者心心所法共所執持。攝爲依處名有執受。損益展轉更相隨故。由眼等五根彼心心所攝爲所依處。若扶根四境攝爲依處故。眼等九界有心心所執受故。有彼執受名有執受。由執受故眼等與心損益相隨。心有喜樂身亦益也。心若苦惱身亦損也。（冠註論本第二左十）

【暉鈔】卷上末左四　問。若心心所攝作依處名有執受者。二無心位五根四境無心心所攝爲依處。如何名有執受。又現在六識不並生。意識生時五識不起。不攝五根以爲依處。如何論言心心所攝爲依處名有執受。答。一以五根四境不相離。二是彼有執受流類。三以根體與命等常在識生

卽能爲依。卽是識闕餘緣自不生也。

【麟記】論本第二左八　言此八及聲者。謂乘前有所緣界。聲非有所緣法。故復言及。眼等五根唯現在世有心心所執爲依處名有執受。去來者名無執受。問。現在五根。若入無心。或起意識卽無執受。或五識間起非識依者亦無執受。如何說言現在五根名有執受。答。現在五根識不依時。執受類故亦名執受。問。去來五根亦執受類應名執受。答。現在五根容有發識。名有執受。去來五根無容發識。亦無執受。言若扶根四境者。謂扶五根色香味觸之四境也。言攝爲依處者。謂色等四境若不離根。雖非所依而是心等之所親附故。依與所理名依處。詳此所依及依親疎有異。言損益展轉更相隨者。注中所釋。約身隨心。但約一邊未成展轉。准義更辯。心亦隨身方成展轉。謂依處。若得好食等益心亦益。得惡食等損心等亦損。由此九界名有執受。正理又云。有餘師說。若諸有情執爲自體。一切處時方便防護茅灰火刺霜雹等緣。是己身攝名有執受。

從此大文第九大種所造門。第十積集非積集門。論問起云。十八界中幾大種性。幾所造性。幾可積集性。幾非可積集性。頌曰。

觸界中有二　餘九色所造　法一分亦然　十色可積集

釋曰。上三句答第九問。下一句答第十門。觸界中有二者。觸謂身所覺。觸通二種。一謂大種。地水火風。二所造。滑澁等七。餘九色所造者。餘謂

所餘眼等五根色等四境唯除觸也。此九色界唯所造性。法一分亦然者。法界一分無表業色同前九界亦唯所造故言亦然。法界中有四法。一相應法。二不相應法。三無表色。四無爲法。今唯取無表故言一分也。十色可積集者。五根五境名爲十色。極微所成名可積集。義准餘八非可積集。非極微故。（冠註論本第二十一右）

【暉鈔】　闕之

【麟記】論本第二左　言滑澁等七者。如已辯理應更言餘七心界法一分倶非二種。疏文略故唯明色法。以前問中有言十八界故。言義准餘八非可積集者。謂七心法界爲八。

從此已下第十一能斫所斫門。第十二能燒所燒門。第十三能稱所稱門。論問起云。十八界中幾能斫。幾所斫。幾能燒。幾所燒。幾能稱。幾所稱。頌曰。

謂唯外四界　能斫及所斫　亦所燒能稱　能燒所稱諍

釋曰。上兩句者。色香味觸名外四界。此即名爲能斫所斫。四塵成斧名爲能斫。四塵成薪等名爲所斫也。問。何法名斫。答。薪等色聚相

逼續生。斧等分隔令各續起。此法名斫。亦所燒能稱者。如外四塵名能斫所斫。所燒能稱其體亦然也。能燒所稱諍者。諍謂諍論。能燒所稱兩解不同。名爲諍論。謂或有說。能燒所稱體亦如前。唯外四界或復有說。唯有火界可名能燒。所稱唯重。重者所造觸中重觸也。（冠註論本第二十二右）

【暉鈔】卷上末五右　令各相續起者。即是由斧等分隔兩段。各自四相遷。名各續起也。問。五根是無見有對色。以淨妙故非能斫。若支分相離身即無。根等非所斫者。如地獄身分成千段皆有身根不。若無不應受苦。同非情故。若有身根體即應是所斫。答。業力使然。不同於人。地獄定有身根。以下文壽煖識三互相依持必有身根。以段段皆受苦故。又地獄化生若無命根。即不令得有體。骨存既有命根任持。身根決定有。又地獄壽量定數無殺。如十業道中地獄無殺盜等五業道也。雖身分相離。中間必有身根相連。如斷藕中間有絲相連。如蛇等兩段皆行動者。由風勢力所持。若便兩段各自活等。即有餘有情依託此受生也。

【麟記】論本第二九左　言四塵爲能所斫者。婆沙一師唯說堅性名爲能斫。四處爲所斫。與此不同。言薪等相逼續生者。謂色聚極微不相觸。然由相逼剎那續生。言斧等分隔薪等令各續生。令別義邊故名爲斫。非令法此等滅。又論云。身等色根不名所斫。非可全斷令成二故。非身根等

可成二分支分離身則無根故。身根等亦非能斫。以淨妙故。如珠寶光。問。地獄斫身。或斷蛇等令成多分。多分各別行。是即支分離身有根。答。地獄現相見成多分。理實諸分皆有身根。斷蛇等身有餘勢動。解云。身爲多分而諸分相內皆有身根。諸分中間連續。如斫杜仲及藕根莖。若相離者身根即無。而斷蛇由猶動。風力所轉。非有身根也。言燒至四界者。亦不通身等色根。以淨妙故。而燒身盡。時根亦盡者。由彼扶根四境無故。根亦隨無。非能燒根也。聲界六義恒非。不相續也。兩解不同者。舊云。前約世俗不相離說。故言四界。後約勝義克體。唯火能燒。所稱唯重。理並無違。雖復火性俱遍能所。據事用勝說爲能燒。事用劣者說爲所燒。

從此第十四五類分別門。論問起云。十八界中幾異熟生。幾所長養。幾等流性。幾有實事。幾一剎那。頌曰。

內五有熟養　聲無異熟生　八無礙等流　亦異熟生性
餘三實唯法　剎那唯後三

釋曰。內五有熟養者。眼等五根唯通二類。有異熟生及所長養。業所感得名異熟生。於現在世因飲食等長小令大養瘦令肥名所長養。眼等五根體非無爲不名有實。又非苦忍初心不名一剎那。問。眼等五根

同類因生有等流性。何故不言通等流耶。答。五類明義。體各不同。
互不相攝。若眼等五根異熟生攝不盡者方立長養攝。若此二類攝不
盡者方立等流。今此二類攝根總盡。其眼等五根離二類外更無
別有眼等根性故不立等流。雖眼等內亦有等流。離異熟性及所長養
無別性故。所以不說。異熟生義論有四解。一云。異熟因所生名異熟
生。如牛所駕車名言牛車。略去中言故作如是說。此解異熟或屬
因或屬果。若屬因者。異熟即因名異熟因。持業釋也。若屬果者。異熟
之因名異熟因。依主釋也。若言異熟生唯依主釋。謂異熟因所生名異
熟生。略去因所二字但言異熟生。如言牛車略去所駕二字也。第二
解云。或所造業至得果時變而能熟故名異熟。果從彼生名異熟生。
謂所造業未至得果起取果用。至得果時起與果用。此與果用與前
取果用異故名之爲變。變即是異。是能熟故名異熟。異即是熟故
名異熟。持業釋也。果從彼生名異熟生。異熟之生依主釋也。此解意

異熟在因生屬果也。第三解云。彼所得果與因別類而是所熟故名異熟。此解意。果是無記。因是善惡。故言與因別類。名之爲異。復是所熟。異熟卽生持業釋也。第四解云。或於因上假立果名。此解意。果名異熟同第三解。因非異熟。而今因名異熟者。此於因上立果名故。因名異熟。有異熟故是有財釋也。果從異熟因生名異熟生。異熟之生依主釋也。所長養者。且能長養有其四種。一則飲食。二者資助。如塗洗也。三睡眠。四等持。此四勝緣資益五根長小令大養瘦令肥名所長養。能長養通三性。所長養唯無記。今五類門取所長養也。聲無異熟生者。聲有二類。一則等流。二所長養。無異熟生者。夫異熟色任運而起。聲隨欲轉有間斷故無異熟生。八無礙等流亦異熟生性者。七心法界無積集故名八無礙。此有等流異熟生性。若從同類遍行因生名等流性。從異熟因所引生者名異熟生。非積集故無所長養。餘三者。餘謂餘四。色香味觸。此四是前眼等五根及八無礙外名之爲餘。此之餘四通三類也。有異熟生。有所長養。有等流性。實

唯法者。無爲名實。非四相遷。體堅實故。此法界攝故。唯法界獨名有實。刹那唯後三者。意法意識名爲後三。唯此三界有一刹那。謂見道初心苦法忍品唯有此一刹那心。究竟不從同類因生。非等流故。名一刹那。餘有爲法無非等流。苦忍相應心名意界意識界也。望後名意。望前名意識也。受等俱起法名爲法界。（冠註論本第二右十三）

【暉鈔】卷上末左五　異熟通因果。今取果不取因。長養通能所。今取所長養不取能。等流亦二。一異熟長養攝不取。二非異熟長養攝。即威儀等此取。實事有二。一有體名實。即一切有爲法不取。二不被四相遷名實。此取。刹那亦二。一生滅刹那不取。二不從同類因生初一刹那此取也。夫異熟生處必有長養。有長養處即未必定有異熟。如阿那律天眼等先無也。因即善惡。果即無記。因望果性不同名異。是能熟故名熟。異熟屬因。若屬果。准此釋生之一字即定屬果也。第二釋取果與果前後兩位力用不同。業初造時與臨感果時力不同名異。正理論更有一釋。離因而熟。因滅多時果方生也。能長養通三性者。四緣中前二自性無記。第三第四三性。論言能長養通三性。約四緣共說也。因養得長名長養。長養依異熟立。外非情無異熟。亦無長養。心心所雖有異熟無形質。無長少令大故無長養。若就別義亦有資益。聲無異熟生者。聲是有法。應無異熟宗法。因云。一以隨欲轉故。同喩云。如聖道。二以有間斷故。同喩云如電光。故非異熟。若非異熟施設論說

當云何通。善修梵行離麤惡語得大士梵音聲相。論以二義釋之。一云。且造業爲第一轉。從業感得異熟大種爲第二轉。從異熟大種相擊發得聲。聲爲第三轉。以聲不親從業生隔異熟大種故。論言非異熟。二云。以屬第五轉。從異熟大種後發得長養大種爲第三轉。從長養四大後發等流大種爲第四轉。方得發聲。聲爲第五轉。隔中間三轉不親從業生。故非異熟也。法界中除大地十大善十及尋伺四相得道共無表餘皆非刹那也。望後名意者此通現在有意根難。望與後念意識爲所依即名意。望前名識者。望依過去意生即名識。問。未來世苦法忍爲有次第住。爲無次第住。有次第者。未來依次第住。即未來世有同類因。過去次第者如九品苦法忍。令下下品定先生。忽闕緣不生。下中品先生即取下下爲因也。如何言不從同類因生。答。未來世無次第住。今初生一念苦法忍已前更未有無漏法入現在世爲同類因。名究竟不從同類因生也。問。未來有利鈍二無漏道。利道已生。鈍道決定不生。此未來鈍道五類何類攝。答。等流攝。五類攝一切法盡也。問。如上品苦法忍現行下品苦法忍決定不生。未來下苦法忍如何無刹那。答。具二義立刹那。一非等流生。二現行。未來闕一義故未來下苦法忍非刹那也。

【麟記】論本第二十　五類者。即此中列異熟生等五種類法攝十八界。言業所感得者。即胎中初得五根酬先業果。是異熟性。乃至命終已來相續不斷。言長養眼等者。但因現在長小令大。不酬往業。常能護持異熟之根。然其五根通此二類。體相各別。言體非無爲不名實者。實有二種。一堅實。二體實。今謂非無爲堅實之實。若約實體名實則通十八界。不得云非實。言不名一刹那者。泛明刹那亦有二相。一刹那故名刹那。二不從同類遍行因生非等流故名刹那。第二刹那唯初無漏。今

此眼等既唯有漏故不通彼。非謂不通前刹那義。言五類明義至不同者。於五類中非餘四類。名爲異熟。如是乃至非餘四類爲刹那。此即展轉相望體各不同。非互相攝。二類攝不盡方立等流者。泛明等流有二。一從同類遍行因生等流。二非異熟長養所攝。然復同類遍行因生者名等流。今二類外方立者。是第二者等流非初等流。言離二類外更無別有眼等根性者。無眼等而非二類所攝。故名無別性。雖眼等內亦有至無別性者。通伏難也。難云。眼等既說同類因生。豈非等流耶。通云。約通相眼等實從同類因生。亦是等流。今顯異門廢總論別故。言離異熟等無別性故。所以不說。言四釋者。泰法師云。初一是總。下三是別。今章不分總別之異。然准舊解與泰釋同。新云。但釋異熟生之所以。不說因名異熟所以也。初異熟之名不定者。以論但言異熟生故。即自釋言異熟因所生。而不知異熟因果故不定也。若言生者四釋並屬果也。言取果用及與果用者。能爲彼種取當果故名爲取果。果將生時因與其力令果得起名爲與果。此之二用俱目於因。名之爲變。謂果將生。其業果變異。如穀種子芽欲生時狀變異也。或與果力用異前取果名之爲異。異熟生三字並屬果也。第四注言同第二解者。既果名異熟。應言同第三解。以第二解非果名異熟故。舊但云同前解而不言第二三也。有言。此由作有財釋。並是因名異熟。故言同第二解者。不順文意。思之可知。又此中若但云異熟是有財釋。若言異熟生還是依主釋。釋所長養名者。謂所長所養故名長養。又釋。因養而長故名長養。今由此緣所益眼等體增。眼等增時說名長養。能長養通三性者。前二唯無記。睡眠通三性。等持唯善。泛論等持亦通三性。以是大地法故。今此取定故應唯善。雖有此殊。然約總相說通三性。問。異熟長養如何相依。答。異

熟色無異熟生離所長養。故須長養護持異熟。長養色勝有離異熟。如天眼耳。修得眼耳故。婆
沙云。如人重人墻重墻。長養防護異熟亦爾。此論亦云。譬如外郭防護內城。此若有異熟必有長養。
有長養而無異熟。如阿那律修得天眼肉眼便亡故也。問。外非情物通長養不。答。新云。長養對異熟。故無長養。長
養以防異熟故。言異熟色任運而起者。謂受得之後體常相續無有間斷。異心法故。復言聲隨欲轉
者。謂隨意樂欲而聲變異。論云。若爾不應施設足論說。善修遠離麤惡語故。感得大士梵音聲
相。於論有二答。初云。聲屬第三轉故。雖由彼生而非異熟。謂從彼業生諸大種。從諸大種
緣擊發聲。此解意業爲第一轉。大種爲第二轉。聲爲第三轉。所感大種是異熟。聲非異熟也。有說。聲屬第五轉故。由
彼生而非異熟。此師加長養及等流大種。方乃生聲。故屬第五也。論主破云。若爾身受從業所生大種生。故應非
異熟。若受如聲便違正理。論主存聲通異熟。故以身爲難。並曰。受從大種生。身受通異熟。聲從大種生。何不得異熟。正破前師。
亦兼破後。有善惡身受非是異熟。今取異熟者難聲。故亦無失也。若依此宗。聲非異熟。但通二類。若從同類因生是
等流性。因湯藥等而資長者是長養性。亦不相攝應更辯。體非無爲故不通有實。非初無漏。不
通剎那。言亦異熟生者。前五根中言是二類便非等流。今以無礙是等流亦通異熟故言亦也。言
等流者。前後同等名等。流類相似名流。或果續因名流。同類遍行共得此果。異熟生亦有同類。爲顯
別相癈總論別。但名異熟。異熟不攝方等流。無所長養者。若據長用亦通非色。此約體說故
無長養。色香等通異熟者。色若有情數者有異熟生及所長養。若三性業俱唯有等流性。香味觸三有
情數者有異熟長養。無記業俱有者是等流性。一切外境皆是等流。解云。異熟長養色等者。即扶根四塵。隨彼二
類。性亦同彼故。此色等四非實非剎那可知。言初心苦法忍品者。初心之言顯示現忍。兼攝同聚。後

置品言。究竟不從同類因者。釋唯現忍名一剎那也。自餘無漏苦忍未現前時無同類因。苦忍生後卽有。現忍永無此因故名究竟。故正理云。此說正現行亦非等流者。餘有爲法無非等流。望後名意望前名識者。釋伏難也。前旣說言無間滅爲意。意在過去。何故。現忍亦名意耶。故今說云望後名意等。以意是所依義故。

從此下第十五得成就門。依薩婆多宗。若得至生相名得。若得至現在名成就。成就時不名得。得時不名成就。言生相者在未來世也。論云。如是已說異熟生等。今應思擇。若有眼界先不成就今得成就亦眼識耶。若眼識界先不成就今得成就亦眼界耶。如是等問今應略答。頌曰。

眼與眼識界　獨俱得非等

釋曰。眼與眼識四句分別。獨俱得非等者。獨是兩單句也。俱得者是俱句也。非者俱非句也。等者明成就不成就四句也。且獨中第一單句。謂得眼不得識。謂生欲界漸得眼根。漸得眼言意顯胎卵濕生。若是化生根頓得故。夫論眼根是異熟無記。唯法俱得故。約漸得但名

得眼。眼識通三性。有前後倶得。先中有位已起眼識。今此漸得眼根。是受生已後識前成就故。故不名得。及無色沒生二三四靜慮時。生二三四靜慮中有初起。唯有眼根而無眼識。眼識未起故。故不名得也。第二單句得識不得眼。謂已生二三四靜慮地眼識現起。現之言正。起之言生。識在生相名爲現起。此所起識在生相位正在未來爾時名得。其眼根在現在名成就不名得也。第三倶句者根識倶得。謂無色沒生欲界及梵世時。欲界梵世中有初心根識倶有。爾時名得。第四倶非句者謂除前相。頌言等者等取成就四句。第一句者成就眼根不成就眼識。謂生二三四靜慮地眼識不起。第二句者成就眼識不成就眼根。謂生欲界未得眼根。及得已失。謂生欲界必成就識。地法成故。未得眼根者謂初受胎時也。及得已失者謂是生後盲人也。既無眼根故不成就。第三句者謂生欲界得眼不失。及生梵世若生二三四靜慮正見色時根識倶成就也。第四句者謂除前相。（冠註論本第二十六）

【暉鈔】卷上末左七　今得成就者。生相名得。現在名成就。取法上能得得爲句數。下取法體。今現未二世合舉言今得成就也。

【麟記】論本第二右十四　得成就者。然此得名具含通別二相。言通相者。得與成就俱名爲得。如言得謂獲成就。若別相者。得與成就現未有殊。今此言生相名得。至現名成就者。約別相說。謂生相時此得創起故名得。至現在世已得故不名爲得。但名成就。章初二問者。初問得眼爲得識不。次問得眼識爲得根不。言受生已後者。六處初開位是也。雖有生盲及漸捨眼等。欲界沒還生欲界等名得眼不得識。及無色沒者。無色中先無眼故。生二三四靜慮者。彼地無眼識故。簡異初禪及欲界也。及從彼沒生下地時。謂正住死位中有至生相。爾時但名得識。眼先成故不名得眼。第三俱句者。謂梵世欲界地法有眼識故。初得眼根識亦得之也。此初得眼者謂中有眼也。俱非句者。謂現在正觀色時。及從欲界死生無色時。二俱不得。成就四句第一句言眼識不起者。謂地法無識。而復未起下地識。靜慮地中必有眼故。第三句中生欲界言。顯定成識。得眼不失復顯成根。生梵世者。顯眼及識必定成就。生上三定。顯定成眼。正見色言。復顯成識。第四句者。生無色界。及從彼沒中有初心等。章釋等字但等成就。若准論文。更等餘義。故論云。如是眼界與色界得成就等。如理應思。爲攝如是所未說義。是故頌中總後言等。又此論中但明眼等三界。若准婆沙。具顯十八。耳等五三各互相望皆應思擇。是故頌中故後言等。

從此第十六內外門。論云。十八界中幾內幾外。頌曰。

內十二眼等　色等六爲外

釋曰。內有十二。六根六識。此十二界心所依故。所依親近。說名爲內。色等六境爲心所緣。所緣疏遠。說名爲外。（冠註論本第二左十八）

【暉鈔】卷上末左七　此十二界心所依故者。問。過去意根現在六識依。名內。現在六識無心依。應非內。答。意體不離六識體。六識亦名內。若不然。卽現在無十八界也。問。心王心所倶時生。心所法界攝。名外者。心所依心王。心所名爲外。心王依心所。心王應名外。答。心王通與三性爲所依。性常定。名內。心所與心王爲所依。性不定。若善心王不善無記心所不能爲所依。以心所所依不定名外。十大地與心王所依性雖定。四十六心所三十六箇不定。朋類壞故亦名外也。

【麟記】論本第二右十五　言內外者。論云。我依名內。外謂此餘。難云。我體既無。內外何有。答。我執依止故。假說心爲我。故經頌云。由善調伏我。智者得生天。又云。應善調伏心。心調能引樂。故但於心假說爲我。

從此第十七同分彼同分門。論云。十八界中幾同分。幾彼同分。頌曰。

法同分餘二　作不作自業

釋曰。法同分者。法謂法界。此法界中唯有同分無彼同分。泛論六境

名同分者。與能緣識定爲所緣。定有二義。一如色等五境。與識定爲所緣。名之爲定。謂五識名定。緣境不雜故。今此五境得名定者。與五識定爲所緣故。五識緣時說名同分。雖被意識緣。以非定故。故非同分。第二法境名定。體卽是定。唯意境緣。是決定故。定被意識緣。所以望意識名同分。論云。無一法界不於其中已正當生無邊意界。故此法界恒名同分。（無邊意識是無我觀。緣境無邊故。已正當生者過去已生現在正生。未來當生。）餘一者。謂餘十七界皆有同分及彼同分。若作自業名爲同分。不作自業名彼同分。作自業者業謂業用。如六根六識約能取境名自業用。若不能取境名不作自業。色等五境約爲境名作自業不爲境名不作自業。此中眼根於有見色已見正見當見名同分眼。如是廣說。乃至意根各於自業境應說自業用。彼同分眼但有四種。謂不見色已滅正滅當滅及不生法。如眼有四乃至身界亦有四種。准眼應知。意彼同分唯有一種。謂不生法。意生必同分故。唯不生名彼

同分也。色界爲眼已正當見名同分色。彼同分色但有四種。謂非眼見已滅正滅當滅及不生法。如色既爾乃至觸境應知亦然。同分亦三。彼同分四也。眼等六識同分有三。已生正生當生故。彼同分一。唯不生法故。如意界說。問。何故名同分彼同分耶。答。此有三解。第一解云。根境識三更相交涉故名爲分。同有交涉分故名同分。第二解云。或復分者是已作用。作自業者名已作業。同有作用分故名同分。第三解云。或復分者是所生觸。三和生觸。同有生觸故名同分。彼同分者。論云。由非同分與彼同分種類分同。名彼同分。解云。如不見色眼名非同分。此非同分與彼見色眼種類分同。名彼同分。言種類分同者。同眼自性故。互相引起故。又相繫屬故。（冠註論本第二十九右）

【暉鈔】卷上末右八　六境名同分者。五識緣五境不雜。五識名定。五境不得名定。以通與意識爲所緣境故。五識唯緣自境。五識名定。今喚五境名不定。約能緣五識名定。五識緣時名同分也。問。五境亦被意識緣。五境望意名同分。答。雖被意識緣下答。雖五境被意根及識緣。五境不名同

分者。以非自根及識縁故。意根及識縁五境六根五識等時。意根及識得名同分者。以是意根及識一用故名同分。五識六根雖被意根及識縁不名同分者。以六根及識約能取境。方名同分。不約爲境名同分也。雖五根亦能取境今此言識者。擧能依識兼取所依根。此雖字下釋前與能縁識文也。問。意根及識不縁法境時。意根及識即名彼同分。法界不被意根及識縁。法界應通彼同分。答。無一法界下答。無我觀以俗智爲體。同時有心王大地大善地尋伺得四相。同時爲能縁。如五識縁五境。現在縁者即縁。五境入過去即畢竟不縁。意識縁法。雖五識起時意識不縁法法入過去。後念無我觀起。三世法悉能縁。以入過去法亦被無我觀縁故。法界名同分。若能縁意識念念令生。五識起時意識不生。即畢竟不得生。意識通有彼同分。無我觀性第一念爲能縁不爲所縁。第二念即却能縁前念無我觀。第二念無我觀第一念已縁了。且據無我觀顯處作法。散意識自能縁三世也。謂不見色者。耳識起時。眼識不縁色境名不見色。餘聲等准此。或可如二十色。與二十能縁識相繫屬定自色識起。餘十九皆名不見色。聲等准此釋也。如大海下色及須彌山中心色。一切眼恒不見。恒名彼同分。問。豈非天眼境。答。一以無益故不見。二非一切時天眼起故。又無佛時不見故名彼同分也。此中眼根於有見色下。明六根同分彼同分。色界爲眼已正當見下。明六境同分彼同分。眼等六識同分有三下。明六識同分彼同分也。更相交渉者。根爲所依識即能依。色爲境。三法和合名交渉也。已作用者。各作自用與前第一別者。前即約三法相順見色。此即已作用也。互相引起者。同分引彼同分。彼同分引同分。又相繫屬者。彼同分眼雖不見色。根境識還相繫屬也。

【麟記】論本第二十五右　釋同分中。文分爲二。初約十八界辯差別。後釋同分名義。初文又二。初別明法界唯有同分。次通明十七具二種。初文又二。初正明法境。次從解同分義。依此科分尋章可解。緣境不雜者。如眼識但可取色。不取聲等。餘識亦然。名爲不雜。言雖被意識至非定者。釋伏難。難云。五識緣五境。卽說名同分。意亦緣五境。五境望意應同分。故答云。雖被意識緣。以非定故非同分。言非定者。謂意通能緣五。境是共故非定也。法境唯意識緣者。正理云。且如法界。與彼意識爲定所緣。是不共故。此總名境同分。言緣境無邊者。謂觀一切法皆無我。故無所不遍。若無常觀唯通有爲不通無爲。故不言無常觀也。餘觀更狹。故並不言。次明十七界中有二。初總解所因。次別約界辯。言餘二者。問。如無我觀觀一切法。則十七界應恒同分。何故言通二耶。答。六根六識不約爲境名同分。五境非定故非同分。故言非自業。故婆沙云。餘十七界不依意識卽爲同分及彼同分。但體各別根境相對。如眼對色色對眼。乃至。觸對身身對觸等。若唯緣十七。意卽名同分。以意通了一切法故。依自作用立。然此中先辯六根。次明五境。後明六識。就中各先辯同分。後彼同分。言於有見色。簡其聲等唯攝通處。言廣說者。以餘五根相類眼說。故皆三種。所以同辯。次說彼同分中。五根爲一類辯。意根自別明者。謂五根是色法。設不取境。亦自能起故有已滅等。成四種。意根是心法。起時必取境。無有已滅等三種。於彼同分類不同。故故別明。言彼同分眼但有四種者。以西方諸師說有五種。謂不生法復開爲二。一有識屬。二無識屬。今婆沙師不同彼說。故言但有四種。言不見色已滅等者。謂擧不見色眼根已滅等。非謂色境已滅正滅等也。耳鼻舌身准眼而說。意生必同分者。謂心法必託境生。故無已滅等。但有

不生一也。言不生法者。謂是意根不生。非法境不生也。次辯五境色等。言已正當見者。謂皆有曾當爲境之義故名同分。所以唯三無不生一。彼同分約不爲眼見。故通不生法。乃至觸者。法境前已明。故但類說餘四。次六識。言如意界說者。以是心法起必緣境。所以同分有已正當等三。彼同分識唯一不生同前意界。次下釋名。更相交涉者。准正理云。即是展轉相隨順義。又准彼論。交涉是總句。下二是別句。同眼自性者。謂眼雖有見色不見色異。而眼等體是同。故正理云。云何與彼種類分同。謂此與彼同見等相。同處同界等故。解云。同能見義。同是眼處。同是眼界故。言互相引起者。由見色不見色眼。互爲同類因互爲等流果。言相繫屬者。互雖有見不見色殊。同屬眼故。婆沙具明。意同上說。文廣不叙。

從此第十八三斷門。論云。十八界中幾見所斷。幾修所斷。幾非所斷。

頌曰。

十五唯修斷　後三界通三
不染非六生　色定非見斷

釋曰。十五界者。五根五識及與五境唯修斷。後三界通三者。意法意識通三種斷。若意界意識界與八十八隨眠相應。及俱有法并隨行得皆見所斷。苦諦有十煩惱。集滅各七。道諦有八。除身見邊見戒禁取也。除

身邊見。四諦合成三十二。上界除瞋有二十八。謂四諦下各除瞋故成二十八。上二界各有二十八。合成五十六。兼欲界三十二成八十八。此等隨眠是分別惑。迷理起故。纔見諦時彼皆斷。故名見所斷。見謂見諦。見是能斷。惑是所斷。見之所斷名見所斷。依主釋也。倶有法者謂與見惑相應心所兼四相是也。此意等三除見斷外諸餘有漏皆修所斷。通無漏故名非所斷。不染非六生色定非見斷者。此通外難。謂經部宗許異生性及招惡趣身語業等是見所斷。謂得見道。彼異生等永不復生。既與見道極相違。故應見所斷。爲答此難故有斯頌。雖爾此法定非見斷。略說非見斷總有三種。一不染。法善無記也。二非六生。謂五識也。不從第六意生名非六生也。三者色法。此三種法定非見斷。非迷諦理親發起。故謂不染。非六生非迷諦理。色法非見惑親發也。然異生性是不染汚無記性攝。身語惡業是色法故。故此二種非見所斷。（冠註論本第二二十一左）

【暉鈔】卷上末十右　十五修斷者。五根五境及善無記心王爲所緣境。修惑爲能緣。是所緣縛。染五識與貪等相應。是相應縛。與染爲境是所緣縛。此能緣惑是修道除。名修斷也。法界通三斷者。法界中不定貪嗔疑慢大煩惱癡及大地法染慧爲五見。此十是見惑。餘大地九大煩惱五尋伺睡眠大不善地二四相得。此等與前見惑相應等即見斷也。通修斷者十大地尋伺睡眠惡作取染。大煩惱五大不善二小惑十。與貪等爲相應縛。大地十大善十尋伺睡眠惡作取善無記有漏邊。十四不相應無表取別解脫定共不律儀無表。此等諸法與貪等爲所緣。是所緣縛名修斷也。非斷即取大地大善地尋伺四相得道共無表無漏邊及無爲爲非斷也。經部許。異生性身語業及惡趣果與初苦法忍相違。是見斷也。問云。不染非六生色定非見斷者。染汚及第六生非色法應總見斷。答。即言不染等非見斷。不說染等皆見斷也。異生等三即由闕所依身緣即不生。不是見道親斷也。

【麟記】論本第二十七左　三斷門。前二是斷可名斷。第三非斷名斷。總名三斷。言十五界至唯修斷者。若五根及香味觸不染汚性。又是色法。緣縛斷故。色聲二修所斷。心親發起故。又是色法。緣縛斷故。若五識界若無記者是不染汚。緣縛斷故。是染汚者迷事起故皆修斷。無見斷相故不通見斷。非無漏故不通非斷。言及俱有法并隨行得者。舊云。俱有有二。若心所俱有。則與隨眠同迷理故亦是見斷。若四相爲俱有。并隨行得。是彼見惑親發起故皆見所斷。無修斷相不通修。非無漏故不通非斷。又得非俱有故。故言隨行得。新云。並隨行得者。謂是隨眠上得。並隨行心心所上得。非是說得爲隨行也。諸餘有漏等。若無色善無覆無記是不染汚。緣縛斷。若四煩惱及彼相應迷事起故。四相及得是彼修惑親發起故。若善染無表是修斷心親發起故。又是色法。緣縛斷故。皆修所

斷。非餘二斷。可知。言通無漏故名非斷者。謂一切無漏非繫縛故。皆非所斷。今意等三界若是無漏卽名非斷。許異生不復生者。謂許聖道非得爲異生性故。故得見道異生性不生。以得法捨故。招惡趣業者。經說。預流得盡惡趣。名不墮法。又說。我生已盡那落迦故。故知招惡趣業及異生性。咸與見道極相違故。言非迷諦理者。夫迷理惑意相應。既非意俱。故非迷理。言異生性是不染汙者。出非見斷所以也。夫見斷法是自性斷。必染汙性。此既非染。明非見斷。問。此異生性見道已無。既非見斷。當言何斷。答。非見斷。正於見道得永不生。至於修道位離縛之時。是緣縛。問。云何證知此唯無記。答。已離欲者猶成就故。證非染汙。斷善根者猶成就故。證非善性。故唯無記。

從此第十九是見非見門。於中有二。一正明。二傍論。且初正明者。

論云。十八界中幾是見。幾非見。頌曰。

眼法界一分　八種說名見　五識俱生慧　非見不度故
眼見色同分　非彼能依識　傳說不能觀　被障諸色故

釋曰。眼全是見。觀照色故。法界一分八種名見。謂身見等五染汙見。六世間正見。謂意識相應善有漏慧也。七有學正見。謂有學身中諸無漏見。八無學正見。謂無學身中諸無漏見。此八是慧。推度境故皆

名爲見。法界所攝名一分也。問。何故世間正見唯意識相應。答。頌言五識俱生慧非見不度故。以無分別故。不能決度。是故非見。後四句頌破識見家。謂尊者法救許眼識見。尊者世友説眼根見。故論云。若爾眼根不能決度。云何名見。識見家難也。以能明了觀照諸色故亦名見。眼見家答也。若眼見者餘識行時亦應名見。此難意。依此宗六識不並起故。餘識行眼便無識。許眼見者何故非見。非一切眼皆能現見。眼見家答也。誰能現見。徵也。謂同分眼與識合位能見非餘。釋第五句頌。若爾則應彼能依識見色非眼。識見家難。不爾。眼識定非能見。釋第六句頌。所以者何。徵也。傳説不能觀被障諸色故。眼根有對於障外色理不合見。若識見者識無對故壁等不礙應見障色。此是眼見家答。釋第七第八句頌也。依經部宗。説眼根見。假而非實。故論云。經部諸師作如是説。如何共聚摣掣虛空。眼色等緣生於眼識。此等於見孰爲能所。但順世情假興言説。眼名能見。識名能了。智者於中不應封着。（冠註論本第二二十三左）

【暉鈔】卷上末左十　一正見通學等三位。顯凡學無學三位有別。顯漸次修生故分雲三種。問。八見緣境何別。答。五染汚見如夜有雲涉路。正見如夜無雲。有學見如晝有雲。無學見如晝無雲。前後勝劣有別。所發慧見境有異也。婆沙正義世友眼根見。法救眼識見。妙音眼識相應慧見。經部同時心心所和合見。犢子部心心所同時我見。此破識見。餘准此破也。問。若爾者。能決度名見。眼根見色不能決度。應不名見也。經部難云。若言根是色不見障外。如瑠璃水精雲母等。是色障眼根。眼根如何隔雲母等能見。彼自答云。由雲母等光明無隔故。眼識能見。壁等光明有隔。眼識不能見也。

【麟記】論本第二左十八　眼法界一分名見者。十八界中唯此名見。餘皆非見。身見等五者。等取邊見邪見見取戒禁取。此五如隨眠品釋。應知。此中有二相。一觀照。二推度。初是眼見之時。亦不舒光至境。不同燈日。亦非影現。不同水鏡。雖五色根體皆清淨起用各別。眼對色時非如鉗之取物。但起觀照色用故名見。不同耳等。言推度者。婆沙云。四事故名見。一徹觀故。二推度故。三堅執故。四深入故。然八種見相別者。正理云。譬如夜分無月等明。雲霧晦暝。而遊嶮阻。所見色像無非顛倒。五染汙見觀法亦爾。譬如晝分雲翳上昇掩蔽日輪。而遊平坦所見色像漸增明淨。有學正見觀法亦爾。譬如晝分烈日舒光雲霧廓清。而遊平坦所見色像最極明淨。無學正見觀法亦爾。乃至非所緣境有淨不淨。由自覺慧垢障有無故。謂所緣有淨不淨。言應識見色非眼者。既待有識則見。無識則不見。明知識見非眼見也。言不能觀障色者。引現量證。論云。現見壁等所障諸色。則不能觀。識見家難云。如頗胝迦瑠璃雲母水等處。云何得見。是故不由眼有對故。於被障色無

見功能。若爾識何不見障色。答云。若於是處光明無隔。於被障色眼識亦生。若於是處功能有隔。於被障色眼識不生。識既不生。故不能見。經言能識法者。非意能識。謂就所依說能依業。如世間說床座言聲。經部諸師說者。舊云。上來諍見兩說不同。今經部師傍觀得失俱破兩家。經部師言。見用本無。如何浪執。或說眼見。或說識見。猶如共聚揸掣空。言封著者。封執也。論云。如世尊說。方域言詞。不應堅執。世俗名相。不應固求。然毘婆沙宗說。眼能見。乃至意能了。

從此第二傍論。於中有七。一兩眼見先後。二六根六境離合。三根境量大小。四六識依世攝。五眼等得依名。六識隨根立稱。七依地同異別。且初第一兩眼見先後者。論云。於見色時為一眼見。為二眼見。此無定准。頌曰。

或二眼俱時　見色分明故

釋曰。阿毘達磨諸大論師皆咸言。或時二眼俱見。以開二眼見色分明。閉一目時不分明故。故知有時二眼見色。又開一眼觸一眼時。便於現前見二月等。閉一觸一此事即無。是故或時二眼俱見。非所依別識成二分。住無方所故。不同礙色也。（冠註論本第二二十五右）

【暉鈔】卷上末左十一　犢子部二眼識所隔遠左右二眼不俱時見。由二眼速疾轉言俱時也。婆沙破云。如僮竪喫杖二足處隔。如何一時覺痛。二眼處遠何妨俱時見也。此論云。二眼見卽分明。一眼卽不分明。故知二眼俱見也。若不二眼俱時見。如何明昧有別也。又開一下。論主自釋。既開二眼觸一眼時。卽見二月等。不觸眼見本月。觸眼見新月。若許二眼俱見。卽開觸一見二月。彼犢子救。亦是二眼不俱見。反難云。既不俱時。閉一觸一亦應見二月。既閉觸一。不見二月故。故卽由二眼俱時見也。光法師釋。彼觸眼由根動轉引意識見二月也。

【麟記】論本第二右二十　言兩眼見先後。以犢子部計兩眼前後互見。非同時見。時處隔越故速疾轉。故謂言同時。有部等宗二眼見。然難彼云。若言互見不許俱時。如身兩手應不許俱時覺觸。覺觸既俱。明知眼見亦無前後。二釋之中前是古師。又開已下。論主自釋。開一眼觸一眼見二月者。如觀月時。以手觸一眼名爲觸一。不被觸者名開一。然此兩眼同見一月。由根移動見處不同。由此意識謂爲二月。卽是好眼見本月。觸眼見第二月。閉一觸一此事卽無者。謂却閉好眼留其觸眼。則不見第二月也。然障不被觸眼。第一月無第二月在。若障被觸眼。第二月無第一月在。非所依別識成二分者。舊云。眼設百千生一識。況唯有二。

從此第二六根境離合。論云。若此宗說眼見耳聞乃至意了。彼所取境。根正取時爲至不至。頌曰。

眼耳意根境　　不至三相違

釋曰。眼耳意根取不至境。謂眼能見遠處諸色。眼中藥等則不能觀。謂耳能聞遠處聲。響逼耳根者則不能聞。意無色故不可名至。故此三根取不至境。三相違者二謂鼻舌身。此三取至境故與上相違也。

（冠註論本第二二十五左）

【暉鈔】卷上末十二右　勝論外道六根皆取至境。遠色聲入眼耳中方能見聞。破云。若六根皆至境即應自見眼中藥等。既不自見藥等。故知眼耳意取不至境也。三根取至境者。據正理論。亦取不至。三根淨妙非所觸故。以有部極微不相觸。若根境相至即極微相觸。假設一極微分爲四分。鼻能隔三分取香。舌隔二分取味。身隔一分取觸。據相近說取至境也。眼耳二離中知。即無先後。次三合中知。鼻根遠勿論。舌身二根誰先起。由本作意取其何者。此二境中強即冷熱先起身識。若二境均先起舌識。又若新境即得味。舊境先得觸也。

【麟記】論本第二二十左　眼中藥等即不能觀者。西方人多着眼藥。故指此明。論云。若眼耳唯能取至境。則修定者應不修生天眼耳根。又難云。若眼能見不至色者。何故不能普見一切遠有障色。論反答云。如何磁石吸不至鐵。非吸一切不至鐵耶。耳能聞遠聲者。有執。耳根通至不至。自耳中聲亦能聞故。正理亦云。有說。聲相續來入耳故。通云。手纔執鈴聲頓息故。故知聲不觸質。不可說至。又聞耳中聲者。非如香等隣鼻等根。雖在耳中仍非至境。由語逼耳字句難知。故欲

審時遮其苦逼。故耳唯取非至境。舊云。自耳中聲極相近猶隔一微已上。若逼耳根卽云不能聞。意根者謂不能取俱有相應法故。又無色故。故取非至。論云。如何知鼻唯取至香。由斷息時不嗅香故。然諸極微不相觸。約無間生故名爲至。解云三根去境遠近不同。約無間生故並名至也。若依勝論外道。六根皆取至境。

從此第三根境量大小者。頌曰。

應知鼻等三　唯取等量境

釋曰。鼻等者。等取舌身。此三唯能取等量境。言等量者。如根微量境微亦然。相稱合生鼻等識故。眼耳取境大小不定。謂眼有時見小如見毛端。有時見大如見山等。有時取等如見蒲桃。耳不定者取蚊虻雲琴聲大小等別。雲聲是雷。依雲起故。西方呼雷爲雲聲也。意無質礙。不可辨其形量差別。（冠註論本第二二十六右）

【暉鈔】卷上末十二　等量者。如鼻等根有一百極微。卽能取一百極微香境。若香等境大。卽前念先取半。後念取半。由根速疾發識。謂言同時。若境少。卽根半發識取境名等量也。然五色根中前四。許全發識及半發識。身根半發識。不許全發識。如地獄身。全發識卽便散壞。故知人中身根不全發識也。若前四根以有身根爲所依。設全發識亦不散身根。更無色根爲所依也。

問。五根安布其量云何。答。且扶根四塵。眼如蒲桃顆。耳如卷樺皮。鼻如雙爪甲。舌如偃月刀。身根從頂足遍身住。如身量。前約根體依處說。眼根體如蒲桃等重累而住。一說在扶根上傍布。如香荾花。上有清徹膜覆故不散。以根體淨妙清徹膜覆故能見色。餘四根准此說也。

【麟記】論本第二二十右　一一量門。論問起云。又眼等爲於自境唯取等量。速疾轉故。如旋火輪。見大山等。爲於自境通取等不等量耶。此中應辯。了知六根體相。然可辯其取境大小。故論云。云何眼等諸根極微安布差別。眼根極微在眼星上傍布而住。如香荾華。清徹膜覆令無分散。有說。重累如丸而住。體清徹故。如顚胝迦不相障礙。耳根極微居耳穴內旋環而住。如卷樺皮。鼻根極微居鼻頞內背上面下。如雙爪甲。此初三根橫作行度。處無高下。如冠華鬘。舌根極微布在舌上。形如半月。傳說。舌中如毛端量非爲舌根極微所遍。身根極微遍住身分。如身形量。女根極微形如鼓顙。男根極微形如指鞘。男女二根因便明之。次辯取境。言等量者。謂與根量非減非增。名之爲等。非是要與爪甲量等。謂取少多皆名等故。謂少境還用少根。然要取境不過爪甲量也。如見蒲桃者。由眼量如蒲桃故見蒲桃爲等。新云。此亦說所依之根與境大小等。非是要如蒲桃果也。如半蒲桃果眼取蒲桃境。亦名取大。蚊子聲小。雲聲是大。琴聲是等。正理云。耳根亦取蚊雲琴聲小大等量。呼雷爲雲者。從質判也。

從此第四六識依世攝者。論云。如前所說識有六種。謂眼識界乃至意識界。爲如五識唯緣現在。意識通緣三世非世。如是諸識依亦爾耶。

不爾。云何。頌曰。

後依唯過去　五識依或倶

釋曰。後依唯過去者。後是第六識。於六識中最居後故。此第六識唯依過去無間滅意。五識依或倶者。或表不定。眼等五識所依有二。一者過去。謂無間意。二者現在。眼等五根。識與五根同現在故名之爲倶。或言表此亦依過去。故五識依名或倶也。問。如是眼識所依性者即是眼識等無間緣耶。設是眼識等無間緣復是眼識所依性耶。答。應作四句。第一句者倶生眼根。眼根是眼識所依性非等無間緣。等無間緣唯心心所。眼根是色。故非此緣。第二句者謂無間滅心所法界。無間滅言意表過去。過去心所與現在眼識爲等無間緣。非心王故非是眼識所依性也。第三句者謂過去意根。無間滅意與現在眼識爲所依性。是心法故。復是眼識等無間緣。第四句者謂除前相所說法。如眼既爾。乃至身識應知亦然。問。若是意識所依性者復是意識等無間緣耶。若是意識

等無間緣。復是意識所依性耶。答。順前句答。謂是意識所依性者定
是意識等無間緣。意識所依即是意根故。故通倶句也。有是意識等無
間緣非與意識爲所依性。謂無間滅心所法界。非心王故不是所依。依
大毘婆沙。答問法不過四種。以狹問寬順前句答。以寬問狹順後句
答。互有寬狹應作四句。若無寬狹答曰如是。且如今問若意識所
依亦等無間緣。此是以狹問寬。謂意識所依唯心王故是狹。等無間緣
通心王心所。是寬。順前句答者。順前問答。謂若是意識所依性者定
是等無間緣也。以寬問狹順後句答者。謂即改前問。云若意識等無
間緣復是意識所依性耶。此既即是以寬問狹。謂意識等無間緣是
寬。通心王心所故。若所依性即狹。唯心王故。應作順後句答。謂若意
識所依性者必是等無間緣。順後句故。若將眼識所依性與等無間緣
爲問。此即互有寬狹。謂眼識所依通色。通心是寬。不通心所是狹。
若等無間緣通心心所是寬。不通色是狹。（冠註論本第二十七右）

【暉鈔】　闕之。

【麟記】論本第二 二十二右　言如是諸識依亦爾者。謂將六識縁境問所依也。六識縁境有惟現在及通三世等別。六識所依爲同所縁有此別不。言非世者無爲也。第六唯依過去者。以無同時意根爲所依故。唯依過去。五識各有同時色根。故通現在。問眼識所依性與眼識等無間縁爲四句者。以眼識所依性通眼及意。等無間又通意根。義相關涉。故爲問起。由此互有寬狹得爲四句。如次明之。眼識所依性者。謂倶生眼根爲識所依也。等無間縁唯心心所者。謂心所等有力能引後念起。由次第生開避處故名等無間。然諸色法或少或多不等生故非等無間。非心王故非眼識所依。攝勢用增上猶如王臣之理故不通心所。第四句者。如色等五境。兼法界無爲不相應等。倶非二義也。若意識所依性卽不通色根。故不成四句。卽前念意識爲後念依名所依性。復開避引後識生。是無間縁。故通倶句。問。若言意識所依性必無間縁者。羅漢後心豈非是意識依而非等無間縁。答。此中擧作所依性以爲問答。故非擧得所依相。羅漢後心但得依相。名爲意界。更無有識。非作所依。是倶非句。又解。此中擧果以問依。不説羅漢後心。

從此第五眼等得依名。論云。何縁識起倶託二縁。得所依名在根非境。以根境爲二縁頌曰。

隨根變識異　故眼等名依

釋曰。隨根變者。識隨根變。根若轉變。識亦異故。謂根若益其識卽明。根若有損。識便昧故。非境有變令識有異。以識隨根不隨境故。依名唯在眼等非餘。言眼等者眼等六界也。（冠註論本第二九右）

【暉鈔】卷上末十三右　俱託二緣者。世友說。根見非識。六緣發識。根境空明作意等無間意。若耳根五緣聞聲。六中除明。鼻舌身意四緣能齅香嘗味。六中除空明也。此中但說根境不說餘者。空明等以不定故不說。如夜行類不要明。水中見物。及隔雲母瑠璃見物不要空。作意等無間六識通緣不說也。以識隨根者。問。如意識依意根。隨意根有明昧者。豈不現見身有損時卽意識不明。卽是意識隨身根變。如何言隨意根變。答。由風等病損身根。同時身識有苦受相應。入過去名亂意根。後念意識依此亂意根生。卽是隨意根變也。問。如前念意根有漏。第二念苦法智忍生意識卽無漏。如何有漏意根與無漏意識爲所依。答。但說明昧隨所依。非據一切。如五根無記與三性五識爲所依。有漏意根亦與無漏意識爲所依也。

【麟記】論本第二二十右　言得所依名在根非境者。問。何故根獨得所依名。境不得所依名也。

從此第六識隨根受稱者。論云。何緣色等正是所識。而名眼識乃至意識。不名色識乃至法識。頌曰。

彼及不共因　故隨根說識

釋曰。彼者。彼前所説眼等名依也。及不共因者。眼等五根與眼等識爲不共因。謂眼唯與自身眼識爲所依性名不共因。若色便通自他眼識。及通自他意識所取是共因也。如眼既爾乃至身觸應知亦然。眼等五根由上二義。一者所依勝。二者不共因故。識得名隨根非境。然依論文唯依五根明不共因。五境明共因。不就意法明者。謂意能生五識非是不共因也。法唯意識緣。却名不共因也。雖意非不共因。而是意識所依性故。故隨所依名爲意識。法雖是不共因。非所依故不名法識。今此五根由所依勝及不共因。境無此義。是故五識從根受稱。喩如鼓聲及麥芽等。鼓聲因手及鼓。但名鼓聲不名手聲者。鼓有二義。一所依勝。聲依鼓變故。二不共因。但生鼓聲故。手闕二義。不名手聲。鼓喩根也。聲喩識也。手喩境也。況法可知。但名麥芽不名水等芽者。麥有二義。准鼓説之。（冠註論本第二十九左）

【暉鈔】卷上末十三左　准正理論。手鼓各自四大相擊自發聲。由鼓聲大手聲少。但聞鼓聲不聞手

聲。

【麟記】論本第二三十右　言不名色識乃至法識者。問。何故但名眼識不名色識。但名耳識不名聲識。乃至第六但名意識不名法識耶。此與前門異者。前門明眼等獨名所依。色等非所依。此門辯但名眼等識不名色等識。故二門別。彼前所說者。此答意取前所說眼是所依義。及取此門不共因義。總合二故名眼識等。言眼唯與自身眼識乃至。依性者。自身眼識簡他身眼識。以眼非他人眼識所依故。又唯自眼識依不通自意識依。若色便通四種識。一自眼識。二他眼識。三自意識。四他意識。故名爲共。如觀月等。言一者依勝者。卽前門說隨根變識異。所依根勝也。故識得名隨根非境者結上。但名眼識等不名色識等。卻名不共因者。前五根中。卽依名不共。境名共。今此第六根名爲共。境名不共。與前位倒故云卻也。言雖意非不共因者。通伏難也。難云。五根不共因故。隨根說識。法境不共因。應名爲法識。是故遮云。雖意共因。法境是不共。但隨所依性以受識名。不約共不共而立名也。不同五根其依二義。故不就意明不共因。又正理云。意境是不共故應名法識。此難非理。通別法名共非遍故。解云。若通名法。卽色等五境亦是法也。意識便與眼等識共。及自他識共。若別名法。攝意復不盡。通法意識不能攝故。故但從根以立識稱也。又法界唯有不共一義。無所依義故。喻如鼓聲等者。此但與五根相當。與意不等也。言但生鼓聲者。不生鐘等聲故。言手缺二義者。一聲不隨手變。非所依勝。二手通生一切聲。故非不共因。言麥有二義者。一芽隨麥變。二但生自果。由此水土亦生芽以勢。故非隨水土變。及能通潤。是共因故。不名水土芽也。

從此第七依地同異別。頌曰。

眼不下於身　色識非上眼　色於識一切
二於身亦然　如眼耳亦然　次三皆自地
身識自下地　意不定應知

釋曰。欲釋此頌。且要先知身眼色三皆通五地。謂在欲界及四靜慮。眼識唯在欲界初禪。眼不下於身者。眼根望身或等或上。終不居下。且欲界眼見欲界色。此即眼與身等。等同地故言等。身在欲界獲四禪眼。是即眼在身上。決定無有身居上地起下地眼。以生上地自在勝眼故。不須起下地劣眼。故眼於身終不居下。色識非上眼者。色識望眼等下非上。等謂同地。如欲界眼見欲界色。色識與眼俱同地也。若以二禪眼見初禪色。色識屬初定。眼屬第二禪。此即色識望眼俱下地也。上地色細下眼不能見上色故。故色非眼上也。上識不依下地眼故。故識非眼上也。由此理故色識非眼上。色於識一切者。色望於識通

等上下。故言一切。如欲界識了欲界色此即色望識等也。初禪眼識了欲界色此即色望識下也。獲二禪天眼借初禪眼識了二地色此即色望識上也。二於身亦然者。二一者謂色識。此二望身遍等上下。如色於識故言亦然。如身生欲界起欲界眼識了欲色時。此即色識望身同地等也。身在欲界發上天眼。起初禪識了初禪色。此即色識望身上也。身生二禪借初禪識了下地色。此即色識望身下也。上所引義是略舉一隅。非偏盡舉。智者應知。如眼耳亦然者。釋耳根也。翻前頌云耳不下於識。聲識非上耳。聲於識一切。二於身亦然。此言識者耳識也。次三皆自地者。次三者謂鼻舌身三。眼耳次。故名爲次三。謂鼻根鼻識香身四種。舌根舌識味身四種。身根身識觸三種。此等相望總皆自地。謂此三種取至境故。鼻舌兩識唯欲界故。唯身識一望於身觸通自下地。與前少別。故頌曰身識自下地者。自者生欲界初禪也。謂欲界初禪身識望於身觸。皆同地故名爲自也。下者生上三定借初

禪識覺上地觸。此即身識望於身觸在下地也。意不定應知者。應知意界四事不定。謂意有時與身識法四皆同地。有時上下。於遊等至及受生時隨其而應或同或異。如後定品當廣分別。已上七段總是傍論竟。次辯正論。（冠註論本第二左三十）

【暉鈔】卷上末左十三　問。上地眼根細能見下地麤色者。上地身根細應能覺下地麤觸。答。眼是離中知。能見下地麤色。身根是合中知。故不覺下地麤觸也。於遊等至等者。或同即身生初定入初定觀初定法境。四皆同地名同。或異者。如身在欲界入初定觀欲界法。第一念即身意法在欲界。意識屬初定。第二念等已後身法二屬欲界。意根意識屬初定也。若觀初定法。即初念意識法屬初定。身意根屬欲界。若第二念等已去亦起初定心。即身屬欲界。意法及識三屬初定也。若第二念起二定等。即身屬欲界。意根屬初定。意識屬二定。法通三地皆得。餘准此說。從上地入下地心亦准此釋。及受生時者。或同者起異地心無命終理。如身在欲界死却生欲界。四皆同地。或異者。若身在欲界死生初定。即意根屬欲界。身意識及法屬初定。從上生下。准此釋也。

【麟記】論本第二左二十四　言眼識唯在欲界初禪者。二禪以上地法微細無尋無伺。無三識也。由此相望或有上下。然於眼界。初將眼望身。次將色識望眼。次色識自相望。後將色識以望身。總有四節。上識不依下地眼者。自有下識依上眼。如二禪已上借初禪識。終無上識依於下根。上所引義是略一隅

者。人皆於此多不得意。或有解云。頌文唯約眼識色身四類相望辯其上下。未廣分別自餘根境故。言略擧。此釋不然。自餘根境縱是未明。豈對眼根預言其所以。頌文次即自明餘根境故。今釋略者。唯於眼身色識四類之中。自論廣略。所以知者。如向所論。但約身生欲界。及生二禪借初禪識等。以辯上下。不巨細明。若依論文。具約生四靜慮等。廣辯其相。且初約生欲界。次約依初禪眼見欲界色見初禪色。次約依二禪眼見欲界色見初禪色見二禪色。及依三四禪眼見下地色見自地色。已上並是身生欲界。次約身生初禪以自地色。如是依三四禪見自地色。見下地色。如理應思。若約身生二三四禪以自他地眼見自他地色。如理應思。廣相既然。章不盡擧故。復言未辯餘根名爲略者誤之甚矣。翻前頌者。即改前明眼之頌也。但須改眼爲耳。改色爲聲。餘文一同。言身識觸三自地者。且約身根對觸。不得將識對身觸爲自地。又身即根。更無別相故。但言三。不同鼻等與身根別約成四種。言三種取至境者。即鼻舌身。觸者。謂身識望身根及觸境。借初禪識者。以上地無身識故。言遊等至及受生時者。遊等至如下定品明。順逆等遊八等至。從下向上。或從上至下。受生時或從此死生色究竟。或復彼死生於中下。意皆不定。

從此第二十十八界中誰六識內幾識所識門。第二十一幾常幾無常門。第二十二幾根幾非根門。頌曰。

五外二所識　常法界無爲　法一分是根　並內界十二

釋曰。五外二所識者。色等五境名爲五外。此外五境二識所識。一爲五識所識。二爲意識所識。除此五界餘十三界義准應知唯意識識。非五五識根所緣境故。常法界無爲者。唯有法界一分是常。謂無爲法。義准無常法餘餘界。言法餘者除無爲外所餘法界也。言餘界者餘十七界全也。（冠註論本第二三十右）

【暉鈔】　闕之。

【麟記】論本第二二十五左　言餘十三界至唯意識識者。卽六根六識及法界並非五識識也。言法界一分是常者。謂法界有四類。今唯無爲是常。故言一分。所餘法者。心所不相應無表色等三類法也。

論云。又經中說二十二根。謂眼根耳根鼻根舌根身根意根。女根男根。命根。樂根苦根喜根憂根捨根。信根勤根念根定根慧根。未知當知根已知根具知根。已上依經列數。阿毘達磨諸大論師。皆越經中六處次第。於命根後方說意根。有所緣故。解云。經依六處次第於眼等五根後卽說意根也。論依無所緣門有所緣門次第。於命根後方說意根。謂命根等

前八無所緣門。意等十四是有所緣門也。法一分是根者。於法界中一分是根。謂命根。樂等五受根。信等五根。此十一根是法界攝。後三無漏根一分。亦法界攝。由三無漏以九根爲體。所謂意喜樂捨信等五根。此九根中唯意根一非法界攝。所餘八根是法界攝。故三無漏根中取一分名法界攝也。幷內界十二者。眼等五界及七心界名爲十二。非直法界一分爲根。並內界十二爲根體也。且眼等五界攝眼等五根也。七心界攝意根也。意界意識界此二攝後三無漏根中一分也。言一分者三無漏根九根爲體。於九根中唯攝意根。故言一分。女根男根即是身根一分所攝。如後當辨。義准所餘色等五界法界一分皆體非根。（冠註論本第二三十二左）

【暉鈔】　闕之

【麟記】論本第二二十六右　言命等前八者。謂眼等五男女二及命根爲八。非心法故無所緣。意等十四是心法故故。是有所緣。言色等五界。即五境。及法界一分。謂想思觸欲不相應諸無爲。皆體非根者。但是法體而無增上義。故不名爲根。已上界品竟。

倶舍論頌疏　論本第二十一終

中大雲寺沙門圓暉述

分別根品第二之一

分別根品者。勝用增上故名爲根。此品廣明故名分別。所以界品後次明根品者。界品明諸法體。根品明諸法用。依體起用故次明根。釋此品頌文分三段。一明二十二根。二明俱生諸法。三明六因四緣。就第一明二十二根中復分爲五。一釋根義。二明根廢立。三明根體。四辯諸門。五雜分別。初釋根義者。就中有二。一述薩婆多宗。二述異部。且初述薩婆多宗者。論云。如是因界已列諸根。即於此中根是何義。問根義也。最勝自在光顯是故名根。由此總成根增上義。答根義也。根體勝故名爲最勝。根用勝故名爲自在。根體用雙勝名爲光顯。由有最勝自在光顯名爲增上。將增上義以釋根也。此增上義誰望於誰。誰謂二十二根望誰增上。頌曰。

傳說五於四　　四根於二種

五八、染淨中　各別爲增上

釋曰。傳說五於四者。眼等五根各於四事能爲增上。一莊嚴身。二導養身。三生識等。四不共事。且眼耳根莊嚴身者。謂若盲聾身醜陋故。導養身者。眼見耳聞避險難故。生識等者。發眼耳二識及相應心所。等者等取心所也。不共事者。謂眼能見色。耳能聞聲。用各別故。鼻舌身根莊嚴身者。如眼耳說。導養身者。謂鼻臭香。舌嘗味。身覺觸。香味觸三是段食性。能受用故。生識等者。謂發三識及相應故。不共事者。謂臭嘗覺香味觸。三用各別故。四根於二種者。女男命意此於二事能爲增上。且女男根二增上者。一有情異。二分別異。有情異者。由此二根令諸有情女男類別。分別異者。由此二根形相言音乳房等別。男形大。女形小。男言雄。女言細。男乳房小。女乳房大。命根二者。一能續過去衆同分。二能持現在衆同分。意根二者。一能續後有。二自在隨行。言後有者是生有也。由中有位起愛恚心便續生有。論引經云。時健達縛於二心中隨

一現行。謂或愛倶。或恚倶等。健達縛此云尋香。中有名也。男中有於母起愛於父起恚。女中有於父起愛於母起瞋也。自在隨行者。經云。心能導世間。自在義也。心能遍攝受。隨行義也如是心一法。皆自在隨行。五八染淨中者。五謂樂等五受。八謂信等五三無漏根。於染淨中如次增上。樂等五受染增上者。貪等隨眠所隨增故。謂喜樂受順貪也。憂苦受順瞋也。捨受順癡也。信等八根淨增上者。謂淸淨法隨生長故。（冠註論本第三右初）

【暉鈔】卷上末右十五　論本第三　根品疏分三。一釋名。二來意。三分文解釋。體通三世寬。用唯現在狹。後明根也。由體用雙勝卽是光顯。光顯卽是增上。今卽將增上義以釋根名也。問。受有領納。想有取像。邪見能斷善。涅槃於諸法中最勝。應立爲根。答。諸法中。此二十二根極增上故。如獅子王獅子中勝。劫初人身皆同。二根生後方有差別。勇怯等名有情異。衣服等名分別異也。持衆同分者。如無色界。起無漏心及自地善染時。無異熟無記心。若無命根。更說何法名無色界生。由此命根方施設諸根。名受無色界生也。能續過去衆同分者。能續望前。能持據現。體是命根。續者相續。如第一念命終第二念來趣。命根卽起能持現在五蘊。由現在命根持五蘊。能續得過去五蘊衆同分也。導者引。引五蘊有情世間。意能遍緣一切境名遍攝受。行有勢用名爲自在隨境而轉名曰隨行。頌初置傳說言者。論主意取後段識見師義。四義中導養身不共事是能依識非所依根。論主破此兩

義頌首言傳說。正理論云。初傳說言顯樂後說也。識見師。眞諦云。是經部師也。問。根於識有增上用立爲根者。境於識亦有增上用。應立爲根。答。一以是識通因。如眼與了二十色識爲通因。色境卽二十各別。能發自識有增上用立根者。彼同分眼等不能發識。體應非根。經部却問云。豈不斯過。汝亦有部。前文四義中有生識等。答。有部云。我無此失。雖不發識無生識等義。有嚴身等。用四義共釋。隨有其一卽得也。

【麟記】論本第三初右

倶舍頌疏記　論本第三

冨春沙門　遁麟述

分別根品。此論名根品。雜心名行品。正理名差別品。行卽勝用義。差別卽作用義。又雜心總合根世二品名行品。與此不同。然此品中具明三類法。一明二十二根。二明倶生諸法。三明六因四緣。以根在初故。又根用勝故。但標根號。言最勝自在光顯名根者。西方聲明師造字有字界字緣。最勝自在是字界。光顯是字緣。由此總成根增上義。故正理云。此增上義界義顯成。界謂伊是上聲地。或謂忍地。界名含兩義　最勝自在是伊地義。照灼明了是忍地義。熾盛光顯是字緣。將字緣助其伊地忍地二字界名最勝自在照灼明了之義。轉名增上。增上卽是根義。今此論取最勝自在是伊地界義。光顯是字緣。助伊地最勝自在之義。無熾盛義字緣助忍地界義也。梵云因姪唎焰。此譯爲根。此意總顯二十二根於諸法中作用增上。問。諸法相望各各皆有增上用。應並立根。答。此極增上。別說爲根。如師子王及村邑長。於獸於村極增上故。根亦如是。頌言。傳說者。正理云。初傳說言顯示論主不樂婆沙師說也。釋五根中。問。所以前明眼耳。次明鼻舌等者何。答。以鼻舌等三取香味等境是段食性

故別說也。言發三識及相應法者。卽鼻等根各自發識及受想等相應心所。有情異者。謂劫初有情由二根生。令諸有情男女類別。分別異者。進止言音乳房髮等安布差別。有說。勇怯有差別故名有情異。衣服莊嚴有差別故名分別異。有說。此女男根於染淨法亦有增上。由本性損壞扇搋二形等人無不律儀雜染法故。亦無律儀得果離繫清淨法。言命根能續過去衆同分者。謂前衆同分謝時。由後命根續也。言能持現在衆同分者。謂任持現在衆同分。是卽望前名續。望現名持。言後有者。謂當有也。言尋香者。謂中有以香爲食故。健達縛。卽昔言乾闥婆是也。言心能導世間者。謂心於二種世間有自在力。能引導故。二種世間皆由業感。心能遍攝受者。心緣二世間境。能遍攝受。隨境而行也。下二句結上二義也。言信等八根者。卽信進念定慧及三無漏根。由此八根一切清淨之法皆隨生長故。

從此第二敘異說者。頌曰。

了自境增上　總立於六根　從身立二根　女男性增上
於同住雜染　清淨增上故　應知命五受　信等立爲根
未當知已知　具知根亦爾　於得後後道　涅槃等增上

釋曰。了自境增上者。謂六識身能了境故。眼等六根能發六識。於了自境有增上用。故眼等六總立爲根。從身立二根者。女男二根於女男性中有增上故。女身形類音聲作業志樂差別名爲女性。作業者縫衣

等也。志樂者樂脂粉也。男身形類音聲作業志樂差別名爲男性。作業者書寫等業也。志樂者樂弓馬也。二性差別由男女根。故說女男根於二性增上。於同住雜染清淨增上故者。取下兩句釋此二句。應知命根於衆同分住有增上用。應知五受於雜染法有增上用。故經云。於樂受貪隨增。於苦受瞋隨增。於捨受癡隨增。應知信等於清淨法有增上用。由信等五令於煖頂位伏諸煩惱。引聖道故。言應知者勸許一一各能爲根。三無漏根於得後後道涅槃等有增上用。言亦爾者類顯一一各能爲根。謂未知當知根於得已知根道有增上用。未知根是見道。已知根是修道。見道引修道故。於已知根增上也。已知根於得具知根道有增上用。謂已知根是修道。具知根是無學道。謂從修道引無學道故。已知根於具知根有增上用也。具知根於得涅槃有增上用。由具知根心得解脫。心若解脫方證涅槃。故於涅槃有增上用。故論云。非心未解脫能得涅槃故。頌曰。後後者。已知根是未知根後。具知根是已知

根後。故言後後。等言復顯更有異說。有說。未知當知根於見所斷煩惱滅中有增上用。已知根於修所斷煩惱滅中有增上用。具知根於現法樂住有增上用。由此具知根能領受解脫身中喜樂事業故。（冠註論本第三左三）

【暉鈔】卷上末十六右　由具知根。在第九解脫道相應九根名具知根。能起得得八十九品無爲。名得涅槃也。

【麟記】論本第三左　第二敍異說者。上來所明是婆沙宗說。從此是曇無德部。即經部也以五識能了。方能避險難受段食等。非由眼根。故此師但不許眼見等。立識能了。了自境識由眼發。故立眼爲根。餘義大同。問。眼等於識有增上。立眼爲根者。色亦於識有增上。應立爲根。解云。根有二義。一與了青等衆多色識爲通依故。二識隨根有明昧故。境闕二義。一青色唯與了青色識爲所緣。不與了黃色等識爲所緣故。二色有變壞識不隨故。故不立根。言從身立二根者。論云。女男根體不離身根。由此二根有增上用。此處少異餘處身根故。從身根別立爲二。正理彈云。此亦未越前門中義。前說二命於有情異及分別異有增上故。言取下二句釋上二句者。謂應知命五受等下二句。釋此上同住等二句也。言五受根於雜染有增上用不異前師。信等八根與前有別。前師八根總於淨法有增上用。今師乃唯信等五根望於淨法。三無漏根於後後道等明增上也。言於煗頂位伏諸煩惱者。以此位中修諸觀行雖未正斷。而能令惑不起現行。故名爲伏。言未知於見所斷惑有增上

者。由見道中能斷身見等諸迷理惑也。言已知根於修斷惑者。謂修道斷貪等諸迷事惑也。言具知根於現法樂者。謂無學果於現身中遊諸靜慮受現法樂故。

從此大文第二明根廢立。於中有二。一述自宗。二叙異說。且初述自宗者。將明問起。論云。若增上故立爲根者。無明等性應立爲根。無明等因於行等果各各別有增上用故。此約自宗爲難。十二因緣互相引發有增上用。應立爲根。又語具等應立爲根。語具手足大小便處於語執行棄樂事中如其次第有增上故。解云。此約外道數論宗爲難。彼宗立五根。語具是肉舌。於語有增上用。手於執有增上用。足於行步有增上用。大便處於棄穢有增上用。小便處起婬樂有增上用。應立爲根。如是等事不應立根。由所許根有如是相。頌曰。

心所依此別　此住此雜染
此資糧此淨　由此量立根

釋曰。心所依者。謂眼等六根此內六處是有情本也。此別者。此六根相

差別由女男根也。此住者。復由命根此六根一期住也。此雜染者。此六根成雜染由五受根也。此資糧者。此六根能與無漏淨法作資糧由信等五也。此淨者。此六根成無漏淨由後三根也。由此立根事皆究竟。是故不應許無明等及語具等亦立爲根。彼無此中增上用故。（冠註論本第三左五）

【暉鈔】卷上末十六右　廢立者。廢卽廢無明語具等。立卽立二十二根。或依七十五法辯。亦得廢餘六十二法不立爲根。不與心爲所依等故。立卽立十三法爲二十二根也。破五作業根者。語具。如眼不要學卽能見色。語卽要學方成。又尋伺能發語。應立此爲根。手足不定。鳥卽嘴持物不要手。蛇腹行不要足。又手足卽是身根。伸屈不同身根攝也。大便如空中有物落。應立空根。又正理論有餘棄風應立風根。女男根卽無見有對色。根體受樂。不由四塵色受樂也。又無明等以心不定故。如行從無明生却能生識等。以爲根不定不立根也。六處有情本者。外六境卽非情。雖扶根四塵是內身攝。依六根立故六根是本也。此淨者。有二。一無漏名淨。卽意根。二離煩惱縛名淨。卽通六根。雜染資量准此應釋。又解。此三唯是意根也。問。受與五鈍使爲因。卽立根。想與五見爲因。何故不立想爲根。答。正理論云。煩惱中愛生六處。爲受生本。故立受與彼爲根。若起煩惱卽無明勝。若受生卽愛勝。愛勝由二義。一能生六處。二能持六處。不立想爲根。又解。善想正

慧映奪。染想顚倒映奪。非增上故不立爲根。餘法隨應准此應釋也。

【麟記】論本第三左三　一述自宗者。新云。論主爲曇無德部建立根相。准此由對後異說故名自宗。非對外道以佛法爲自宗也。言將明問起者。將欲明其義先興問端也。數論爲難者。彼宗立二十五諦。今約五作業根爲難。彼所立根皆應廣破。夫論根者。量常限定。汝言肉舌以語爲增上。小兒有舌。何爲不語。要待習學方能語耶。如眼能見色。纔生卽見。故知根者量須限定。手於執有增上者。口亦銜物應立爲根。足於行者。小兒有足。何爲不行。又蛇無足。何爲能行。此但手足異處異想差別生時名執行等。大便棄穢。謂自穢墮。如空中物非棄有用。又從風力所引出。故小便於婬者。小兒未婬。不有處。此卽男女根起樂事故。又諸喉齒眼瞼支節應立爲根。於能呑嚼開閉屈申有力用故。故無定量不應立根。言由五受根令六根成雜染者。謂苦樂憂喜捨令生貪嗔癡等。新云。一與煩惱相應故成雜染唯意根。二被煩惱縛故名雜染卽通六根。言此六根成無漏淨者。舊云。差別及住皆攝六根。雜染資糧及淨唯在於意。新云。此有二種。若體成無漏唯是意根。若離自煩惱縛名淨卽通六根。

從此已下第二叙異說。是識見宗。論云。復有餘師別說根相。頌曰。

或流轉所依　及生住受用　建立前十四　還滅後亦然

釋曰。或言顯此是餘師意。約流轉還滅立二十二根。言流轉者以識

爲體。於生死中流轉故也。流轉有四。一流轉所依。謂眼等六根。二流轉生。由女男根。從彼生故。三流轉住。謂由命根。依彼住故。四流轉受用。由五受根能領納故。上來約四義立前十四根。思可知也。言還滅者生死止息。名爲還滅。取涅槃得爲還滅體。還滅位中同前四義立後八根。一還滅所依。謂信等五根。一切善法生之本故。二還滅生。由未知當知根。正定聚中此初生故。三還滅得住。由已知根。令涅槃得相續起故。四還滅得受用。由具知根。受用現法樂住故。又論結云。根量由此無減無增。即由此緣經立次第。　由此者此流轉還滅也。二十二根更不可增減。

(冠註論本第三七右)

【暉鈔】卷上末十七右　以識爲體者。由第六識於五趣中捨前趣取後趣。流轉不斷。由識也。流轉生者。即胎卵生。除濕化生。以不受胎故也。還滅生者。滅即涅槃不生。取上能得得有生故。由信等五四加行位有用。與無爲上得爲所依方得生也。三道皆名正定聚。苦諦下得最初生。由未知當知根。此無爲上得方得生也。由已知根斷修惑。令無爲上得續續生住也。由具知根故再得無爲上得。方能起四禪法。現身受用名受現法樂。即由此緣經立次第者。由六根同與流轉體爲所依故。經中身

根後第六說意也。

【麟記】論本第三左四、　言女男根從彼生者。約欲界胎卵等生說。然此有不定過。亦有不從男女根生。應非根量。言依彼住者。卽六根依命根而住也。言還滅者。生死止息六處畢竟斷滅故。本由煩惱生死輪迴。今斷妄歸眞故言還滅。婆沙云。流轉者。謂更受生。還滅者。謂趣涅槃。言同前四義者。一所依。二生。三得住。四受用。言信等五爲所依者。謂信等五根爲涅槃得之所依也。故正理云。生死止息是還滅義。此得所依謂信等五。以是一切善根生長最勝因故。言正定聚中最初生者。謂得聖道名正定聚。未知當知在見道。見道苦忍最在其初。故言最初生也。言令涅槃得相續起者。謂已知根在修道中。常持此得令相續起也。言受現法樂者。謂具知根在無學道中。惑盡解滿方受樂故。言由此無滅無增者。但二十二根更無增減。非語具等及無明等。已如前破。言卽由此緣經立次第者。謂由流轉還滅各四義之理。經中立根次第。先說六處。次說男女。次說命並五受。次說信等及三無漏根。不言論說者。以論師意根於命根後說故。不順此流轉等次第說也。其次第者如前已辯。

從此大文第三明根體。於中眼等六根女男二根。此之八根界品已說。命根及信等五根此六下文當辯。唯有樂等五受三無漏根更無轉辯處。故今應釋。頌曰。

身不悅名苦　　即此悅名樂　　及三定心悅

餘處此名喜　心不悅名憂　中捨二無別
見修無學道　依九立三根

釋曰。身不悅名苦者。身謂身受。即五識相應受也。身謂所依。受依身起。名爲身受。身之受故依主釋也。言不悅者。是損惱義。於身受內能損惱者名爲苦根。即此悅名樂者。即前身受名爲即此。悅者於身受中能攝益者名爲樂根。及三定心悅者。心謂第六意識。此第三定心相應受能攝益者亦名樂根。謂第三禪五識無故無身受樂。唯心悅名樂也。餘處此名喜者。除第三禪於下三地名爲餘處。下三地者欲界初二禪也。此者此第六識心也。謂此心悅於下三地名爲喜根。第三靜慮心悅安靜離喜貪故唯名樂根。下三地中心悅麤動有喜貪故唯名喜根。心不悅名憂者。意識相應能損惱受。是心不悅此名憂根。中捨二無別者。中謂非悅非不悅。即是不苦不樂受。此處中受名爲捨根。二者謂身心二也。身即五識。心是意識。捨在身心同無分別任運而生。故雖通二立一

捨根。又論云。在心苦樂多分別生。在身不然。隨境力故。阿羅漢等亦如是生。故此立根身心各別。解云。在心苦樂者意地受也。苦樂在心。分別起故苦名爲憂。樂名爲喜。樂受在第三禪即無分別。爲簡此故故言多分別生也。苦樂二受在五識身無分別故名爲不然。謂五識身隨境力故名無分別。阿羅漢等擧聖同凡。故此苦樂在五識身名苦名樂。在第六識名喜名憂也。（冠註論本第三左七）

【暉鈔】卷上末十七左　身謂所依。所依即五識。與受爲所依也。前五識中容有一捨。第六識中容有一捨。同無分別合立一捨根也。動湧名喜。因分別生。寂靜名樂。隨勝境生。第三定心悅合名喜。以寂靜與五識同無分別名樂也。

【麟記】論本第三左五　言八根界品已說者。謂彼品明眼等六根及男女根竟。疏略不辯。論文具明。言命及信等下文辯者。命根下不相應中明。信等心所中辯。言五識相應名身受者。泛明身總三義。一相續義。二體義。三積聚義。若言六識身身即體義。若言身受身即是色聚。色聚名身。由此五根總名爲身。以對心故。受依身故名身受也。如世間品疏自當辯。言第三靜慮離喜貪等者。謂三定雖是心悅。而相安靜。但名爲樂。不名爲喜。以喜相動湧如水濤波。又如貧人得寶一旦失之還生憂惱。初二禪定遍觸身心生於喜受味著於喜名爲喜貪。第三禪中離此貪故。但名爲樂。又第三禪

無五識故。唯心名樂。問。三定極悅心。與樂相應。地獄極不悅心。與苦相應。答。極悅無分別。可與樂相應。極損有分別。不與苦相應。言捨者。捨有二種。一捨受捨。卽受蘊攝。二捨沉悼捨。卽行蘊攝。今此言捨是捨受。非行捨也。言在身不然隨境力者。謂不由內心分別而起。但由前境界力生苦樂等。言羅漢等者。等取前三果人。擧聖同凡者。謂聖人內無分別。亦隨境界之力生於苦樂。況諸凡夫而得無苦。

見修無學道依九立三根者。九謂意喜樂捨信等五根。若在見道依此九根立未知當知根。若在修道依此九根立已知根。在無學道亦依此九立具知根。論云。如是三名因何而立。謂在見道有未曾知當知行轉故。說彼名未知當知。解云。見道有十五心。謂八忍七智。此十五心於四諦境有未曾知當知行相轉。如苦法忍與疑得俱生未知苦諦名未曾知。後至智位必當知故名爲當知。如苦忍既爾。諸餘七忍亦復如是。故忍總名未知當知。中間七智雖能正知。良由知諦未遍中間起故。亦名未知當知。故說彼有見道行者名未知當知也。又論云。若在修道無未曾知。但爲斷除餘隨眠故。卽於彼境復數了知。是故說彼名爲

已知。解云。從道類智已去乃至金剛喩定總名修道。若在修道上下八諦總已知竟。無未曾知。但爲斷除迷事煩惱貪瞋癡慢四隨眠故。於四諦境數起智知名爲已知。是故說彼有修道行者名爲已知。已知而知故。又論云。在無學道知已已知。故名爲知。此釋知也。謂盡智無生智作知已已知之解故名爲知也。有此知者名爲具知。此初約成釋具義也。有此者成就義也。或習此知已成性者名爲具知。此第二約習釋具也。謂得盡智無生智故。如實自知。我遍知苦。不復遍知。乃至廣說。釋知體也。謂盡無生是具知體。如實自知。我徧知苦是盡智行相。不復徧知是無生智行相。我已斷集是盡智。不復更斷是無生智。我已證滅是盡智。不復更證是無生智。我已修道是盡智。不復更修是無生智。含此義故。故言乃至廣說也。彼所有根名爲未知當知根等。解云。此釋名也。彼者彼未知當知等行者。彼屬人也。根屬法也。彼未知當知等行者人身中有此根故名未知當知等根。未知當知之根名未知當知根等。依主釋也。上來所明第三根體竟。（冠註論本第三九左）

【暉鈔】卷上末十八右　八智名知。知四諦境。有決斷故。八忍非知。未成決斷故。彼修行者正起忍時。作未知苦諦行解名未知。至後念智位。必當知苦諦名當知。合名未知當知。七智正知四諦理。不合名未知。由在八忍中間起。同八忍名未知也。見道以知四諦了。今修道重起無漏慧。知四諦境。知彼已知境故名已知也。問。修道觀諦。一謂斷惑。二謂現法樂住。三謂練根。此文何故但說斷煩惱不說餘二。答。練根恐惑退。現法樂住亦是斷惑之義。卽勝進道攝。但說斷惑卽攝餘二也。或習此知已成性者。以常習二智。名具成自在性。或再釋前知已已知卽盡智。或習此盡智成利根無生智性也。未知當知已知具知曰三道中人根。卽因三道中相應九根能斷惑也。

【麟記】論本第三右六　言依九立三根者。於五受內除憂及苦。以欲界散地無無漏故。憂離欲捨故不通無漏。苦唯五識亦不通無漏。故並除也。言苦法忍與疑得俱者。謂於此時惑體不起。但與惑得俱時。以忍是無間道正斷此得。猶如駈賊尚與賊俱。至智位時方得解脫。問。此忍豈不與餘惑得俱。何獨說疑得耶。答。實亦與餘貪等得俱。而以疑名偏違見道。故但標疑。言有未曾知當知行轉者。轉之言起。起之言生。謂有當知行生起也。言七智中間起者。且上下界通論總有八諦。一諦有一智。都有八智。除道類智知諦周遍。前之七智皆知諦未遍。中間起也。且如苦法智。欲界苦諦雖復已知。其餘七諦尚未曾知。此約八諦總說。不約當諦自論。至苦類忍位亦有七諦未知當知。至苦類智有六諦未知。如是乃至道類忍位色無色道諦未知當知故。十五心總名未知當知根。至道類智知類周遍方知已知。言斷除迷事煩惱者。謂見惑迷理。修惑迷事。今但斷修故言迷事。事謂境事。問。修道位中亦練根。及受現法樂等。因何但言爲斷煩惱。答。練根恐煩惱退。受現法樂亦是

斷惑之勝進道。故但斷惑義卽攝餘。由斯論師唯說斷惑。言已知而知者。卽前已知今復更知名已知而知。婆沙問云。第十六心應如前七智。何故獨說名已知根。非正知而知故。答。此從多分說。謂初刹那雖與七智相似。後諸刹那皆與彼異。故從多分說名已知根。言作知已已知之解者。謂修道中由有煩惱。於四諦理未能作知已已知之解。無學道中由無惑故。能於諦境作知已已知之解也。言約成釋具者。謂約人成就此知。故名爲具。問。若爾前之二根應亦名具。解云。若約成義實亦是同。然知義別故名有異。章中前釋雙約盡無生二智。新云。此是鈍根人。但得盡智。與章不同。第二約習盡釋具者。謂習前知已成其性名之爲具。新云。此是利根人得無生智。又云。有能習者名之爲具知。具知家之根名爲具知根。言是依主釋者。此以未知等根名屬人。故依主釋。正理以名目法。卽持業釋。各據一義。並不相違。又正理云。如是根名雖二十二。而諸根體但有十七。女男二根身根攝故。三無漏根九根攝故。

從此大文第四諸門分別。於中有六。一有漏無漏門。二是異熟非異熟門。三有異熟無異熟門。四三性門。五界繫門。六三斷門。且初第一有漏無漏門者。論云。此二十二根中幾有漏幾無漏。頌曰。

唯無漏後三　有色命憂苦
當知唯有漏　通二餘九根

釋曰。唯無漏後三者。謂未知當知已知具知根。此之三根最居後故名爲後三。體唯無漏。有色命憂苦當知唯有漏者。言有色者謂七色根。眼等五根及女根男根。此之七根是色蘊攝名爲有色。七有色根及命憂苦一向有漏。通二餘九根者。通有漏無漏二門。謂意喜樂捨。信等五根。此九皆通有漏無漏。（冠註論本第三左十一）

【暉鈔】卷上末左十八　意等九根與三無漏根爲體即無漏。四加行位起者即有漏也。

【麟記】論本第三右八　言有色命唯有漏者。漏有二種。一與自煩惱俱名漏。二爲他所緣名有漏。一切異生及有學聖具有二種。無學及佛唯有一種。但生他漏。自無漏也。言信等五通漏無漏者。若化地部分別論師信等五根唯是無漏。以經說言若全無信等五根。我說彼住外異生品故。又云。聖有凡無。故論主通云。彼依無漏根不依有漏根說。故通二種。

從此第二是異熟非異熟門者。論云。如是已說有漏無漏。二十二根中幾是異熟幾非異熟。頌曰。

命唯是異熟　憂及後八非　色意餘四受　一一皆通二

釋曰。命唯是異熟者。唯一命根定是異熟。業所招故。憂及後八非者。憂根及後信等八根是非異熟。憂通善惡。信等八根唯是善性。是有記故。故非異熟。色意餘四受一一皆通二者。色謂七色。及意根。餘四受。除憂。此十二根一一皆是通是異熟非異熟門。謂七色根業所招者。即是異熟。若長養者便非異熟。意及四受業所招者即是異熟。若善惡性又無記中威儀工巧及通果者非是異熟。故十二根通二門也。（冠註論本第三右十二）

【暉鈔】卷上末左十八　如本論說。無學果與世間有緣。觀自命盡作法延命。須具六緣。一人勝。謂阿羅漢。簡前三果。二解脫勝。謂成就神通。顯俱解脫。簡慧解脫也。三修習勝。謂心自在。簡時解脫取不動性。四福田勝。謂於僧衆若於別人。以衣鉢等物布施。簡餘物。四人成僧。餘人即慈定等。五依止勝。謂施已發願入邊際定。簡餘所非依止勝也。六轉業勝。謂從定起已心念口言。我諸能感富異熟業。願皆轉招壽異熟果。由定願力則轉富業得五年或十年壽果。更有一說。由定願力引得過去非命死餘命令生壽。此則與願不同過。願云。轉富業作壽異熟果也。有說。由現在布施招得命。准捨壽亦布施。布施不令促得命。故知非也。問。此所得命長豈是異熟。答。但是由定施等力轉富業作壽果。亦是異熟。富果亦是過去滿業招故。亦不是多業引一生過。如色是礙。定力令無礙。不可說色是無礙。此亦如是。由定施力轉富作壽。不可說非異熟也。無學若命未盡。與世無

緣。准上六緣作法。卽轉壽果作富果也。留捨壽唯人三洲。不時解脫得邊際定者。定自在故。世尊留三月者。謂顯於死得自在故。若滅三月卽利生不究竟故。婆沙一百二十云。一說世尊壽一百二十。以行因時多。又身量與人不等故。與人壽長短有別。捨第三分壽。一說一百歲。行因雖多與人等故。捨第五分壽也。問。命行壽行何別。答。准下文。命根體卽壽。故知壽卽命。一說過去業感得卽壽行。現世處得命行也。言留多壽行者。一剎那命。卽不可留。無常性故也。問。命與同分皆是引果。何故但說延命不說延同分。答。相樂欲因名同分。能持煖識因名命。前文釋。命根能令衆同分住不說延同分也。

【麟記】論本第三左八　命唯是異熟者。問。過去業招可是異熟。現身延壽誰之異熟。其延壽命者。論云。謂羅漢成就神通。得心自在。若於衆僧或於別人。隨所布施。施已卽入邊際靜慮。願言。諸有能感富異熟業。願皆轉招壽異熟果。時彼能感富異熟業。則皆轉招壽異熟果。此所果誰異熟耶。依有部宗。此有多釋。新云。正解云。謂前生中有多感富果業。未曾用者。由今布施入定發願不思議力。轉此令感富果之業。令招壽果。亦是異熟。卽是富業之異熟果。若依論主。謂是定中所引大種住時勢分。非是異熟。憂通善惡故非異熟者。若爾喜等亦通善惡。應非異熟。應言憂唯善惡故非異熟。今言通者。謂望善惡二種自名通也。非謂同喜通無記故。又離欲無憂。異熟不爾。故非異熟。又論云。眼等八根若在善趣是善異熟。若在惡趣是惡異熟。八根謂七色及命根。

從此第三有異熟無異熟門。論云。如是已說是異熟等二十二根中幾

有異熟幾無異熟。頌曰。

憂定有異熟　前八後三無　意餘受信等　一一皆通二

釋曰。憂定有異熟者。憂根當知定有異熟。依唯越義頌說定聲。唯者謂顯憂根唯有異熟也。越者具二義故。越根次第先說憂根也。言二義者。一憂非無記。强思起故。二非無漏。唯散地故。由此越次第先說憂根定有異熟。前八後三無者。前八謂眼等前八根。後三者三無漏根。此十一根定無異熟。謂眼等八無記性故。最後三根是無漏故。不能招果故無異熟。意餘受信等一一皆通二者。意根所餘四受（除憂）信等五根。此之十根一一皆通有異熟無異熟二也。謂意樂喜捨若善惡性及有漏者即有異熟。若無記性及無漏者便無異熟。苦根若善惡性即有異熟。若無記性便無異熟。信等五根若有漏者名有異熟。若無漏者即無異熟。故此十通二類也。（冠註論本第三十三右）

【暉鈔】卷上末二十右　有部釋。憂非異熟者。離欲捨故。異熟不然也。色意等一一通二者。眼等七色及命。

若人天即善異熟。若惡趣即不善異熟。意根善惡趣皆通二異熟也。喜樂捨五趣皆是善異熟。苦五趣皆是不善異熟。於善趣中二形者。唯女男根依處不善業招也。

【麟記】論本第三右九　有異熟門者。謂約能有當來異熟之果名有。前門約體是異熟等。故二門別。依唯越義頌說定聲者。謂依唯義越義。所以頌中言定有也。言無漏無異熟者。無漏無惑所潤。及壞三有。故無異熟。四受除憂者。憂定有異熟。前已明竟。苦根唯有漏但言善惡即有異熟。信等五唯善性但言若有漏。不同簡無記。

從此第四三性門。論云。如是已說有異熟等。二十二根中幾善幾不善幾無記。頌曰。

唯善後八根　憂通善不善　意餘受三種　前八唯無記

釋曰。唯善後八根者。謂信等八名後八根。唯是善性。憂通善不善者。憂非無記。强思起故通善惡性。意餘受三種者。意根餘四受（除憂）此五通三性。前八唯無記者。眼等前八唯無記性。眼等五根及男女命名八根也。（冠註論本第三右十四）

【輝鈔】卷上末二十右　問。念慧定三皆是大地法。並通三性。何故論言唯善。答。取少分善性邊立根。

不取染無記。故言善性也。憂非無記者。婆沙一百四十四云。且非有覆無記。欲界身邊二見有覆性。是歡行轉。憂是戚行轉。行相不同。不相應故非有覆也。非威儀工巧者。憂分別轉。威儀等任運轉故。如憂言我不如佛及馬勝比丘等威儀。正分別時非威儀等。若起威儀等時分別已息。非通果者。通果定發。憂離欲捨故非異熟無記。

【麟記】論本第三右　問。信等八根最居其後。今所以前明者。答。以前門中後明信等。今承前便故在前明。故論云。次雖居後乘前故先說。憂通善不善者。若憂修善不遂是善事不成。此憂名善。若憂作惡不遂。是不善憂。戚行轉故非有覆無記。分別起故非無覆無記。故唯善惡。

從此第五界繫門。論云。如是已說善不善等二十二根中幾欲界繫幾色界繫幾無色界繫。頌曰。

欲色無色界　如次除後三　兼女男憂苦　並餘色喜樂

釋曰。初句標三界也。如次除後三者。如次者已下諸義配上初句。故言如次也。除後三者明欲界繫。於欲界中有十九根。除後三無漏根。由彼三根是不繫故。兼女男憂苦者明色界繫。於色界中如前所除後三根外。兼除女男憂苦四根。餘十五根是色界繫。除女男者離婬欲故。又女

男根身醜陋故。經說色界名為男者。有男相故。非謂有根。無苦根者身淨妙故。非苦依也 又彼無有不善事故。非苦境也 無憂根者有奢摩多潤相續故。相續者是身。非憂依也。又彼無有惱害事故。非憂境也 並餘色喜樂者明無色繫。無色界中如色界中除後三根及女男憂苦外。并更除餘色及喜樂根。言餘色者眼等五根。男女根外名之為餘。除此已外所餘八根無色界繫。謂信等五及命意捨。（冠註論本第三左十四）

【暉鈔】卷上末左二十　無女男者。離婬欲故。色界無香味境。應無鼻舌根。再釋云。又女男根身醜陋故。佛象王藏相豈成醜陋耶。正理自釋。前說為善色界有鼻舌二根愛。得有二根體。色界離女男二根愛。故無二根體也。問。既無二根。如何經說無處無容女身為梵。有處有容男身為梵。無根如何色界名男。答。有男相故卽名男。非謂有根也。無苦者。色界無五識與苦為所依故。無能依苦。若爾初定有三識。初定應有苦。再釋云。苦從違境生。無不善事為苦境。雖有三識故無苦也。

【麟說】論本第三左九　已下諸義配上初句者。謂初句標擧三界。今已除後三第一句配上欲界。第二句配色界。第三句配無色界。女男根身醜陋者。釋伏難。以鼻舌根彼雖無用然非醜陋。為莊嚴身彼界亦有。女男不爾。故彼界無。經說色界名為男者。如契經言。有處有容男身為梵。無處無容女身為梵。解云。謂有處有容有男身為梵。無有處所謂女身為梵。梵卽淨天也。有男相者。謂相狀身貌男身所有彼皆有之。但

無男根。又正理云。離欲猛利似男用故。身淨妙者。新云。無等流苦。解云。謂若身相麤澁多時苦受。今既淨妙故不生苦。約現身生。非前業感故。非異熟故也。無不善事者。無異熟苦。謂上無違境諸不善。非如地獄等有諸違境諸不善事有異熟苦。若經部宗。苦樂隨身。至第四禪。憂喜隨心。乃至有頂。彼宗意說。有身卽有苦樂。有心卽有憂苦。

從此第六。三斷門。論云。如是已說欲界繫等。二十二根中幾見所斷幾修所斷幾非所斷。頌曰。

意三受通三　憂見修所斷　九唯修所斷　五修非三非

釋曰。意三受通三者。意及三受通三種斷。言三受者謂喜樂捨。此上四根若有漏者通見修斷。若無漏者唯非所斷。憂見修所斷者。憂根與迷理惑相應是見所斷。諸餘有漏是修所斷。非無漏故不通非所斷。九唯修所斷者。九謂七色命苦。唯修所斷。七色命根是無記性不染汚故。苦根與五識相應非第六識生。前言不染非六生色定非見斷。故此九根非見所斷。非無漏故不通非所斷。五修非三非者。五謂信等五根。通修非二斷。若有漏者是修所斷。若無漏者是非所斷。不染汚故不通見

斷。三無漏根唯非所斷。非無漏法是所斷故。已上是第四諸門分別竟。

（冠註論本第三十五左）

【暉鈔】卷上末二十右　意及三受有漏者通見修斷者。此四根有漏者通三性。善無記與煩惱為所緣境。名所緣縛。若染者卽與修惑相應轉。是修道除。名修斷。若與見惑相應起名相應縛。見道斷也。憂有漏通善惡二性。善卽與修惑為境。惡卽相應起也。七色命與修惑作所緣境。苦根通三性。善無記與修惑為所緣縛。染性卽與修惑作所緣相應縛也。信等五唯與修惑為所緣境。此能緣惑是修道除。名修斷也。

【麟記】論本第三十右　七色根者。卽眼等五男女二。是色蘊攝故。信等五根若有漏是修所斷者。謂有漏信等雖非自性斷。而是緣縛斷故是修斷攝。言非無漏法是所斷者。謂若有漏卽有過。可斷名為所斷。無漏無過故非所斷也。正理云。豈不聖道亦所斷耶。如契經言。聖道如船筏等。解云。此非見修所斷名非所斷。入無餘涅槃界位捨故名斷。故不相違。

從此第五明雜分別。於中有六。一受生得異熟門。二約死位滅根多少門。三得果用根多少門。四成就諸根定量門。五成根極少門。六成根極多門。今初第一受生得異熟門者。論云。已說諸門義類差別。何界初得幾異熟根。頌曰。

欲胎卵濕生　初得二異熟
化生六七八　色六上唯命

釋曰。欲胎卵濕生初得二異熟者。欲謂欲界。胎卵濕生除化生也。此之三生初受生位唯得身命二異熟根。由此三生根漸起故不得餘根。化生六七八者。化生初位得六七八根。言得六根者眼耳鼻舌身命。謂劫初時無形化生。故有六根。得七根者如諸天等六根如上加男女一。得八根者謂惡趣中容有二形化生者是也。六根如上加男女二根。色六上唯命者。色謂色界。初得六根。如欲界中無形者說。上唯命者。上謂無色。勝下二界名之爲上。一則定勝。無色因也。二者生勝。無色果也。初得一根。謂唯命也。（冠註論本第三十六左）

【暉鈔】卷上末二十左　初生不得意捨者。以染汙故。今明得異熟也。初生無餘四受。以死生唯捨受不得信等。以結生心唯染汙故。結生有漏心故。無三無漏根。餘色根第五位末後方得也。化生不得意捨等同前釋也。

【麟記】論本第三十左　受生得異熟門者。正理問云。所以須此門者。爲遮無染心能續生故。解云。大衆部許無染心受生。如菩薩三時正知。或經部計異熟心受生。爲遮彼故立此門。唯得身命二異熟者。約受生位但得此二。以眼等四及女男根六處位中方乃得故。意捨二根雖然現有。續生之時必染汙故。故非異熟。復異熟意無法前得。爾時未名成就故。憂根復非異熟生故。信等諸根又非異熟。初受生時復無苦樂喜等根故。雖亦成就然非異熟。此亦不說。意捨二根成而亦現。尚非所說。況苦等九但成非現。理在絕言。化生六七八者。化生初位通中生二有。二形化生唯在生有。不通中有。以中有身女男定故。如欲界無形者。謂眼耳鼻舌身命。以色化生必具根故。無女男根故。如欲界無形之者。言勝下二界者。謂無色無處所。非在二界之上。今但由因果勝下二界。故名爲上。定勝者。謂此定能感非想八萬劫果。勝下界定。果勝者。卽得八萬劫長遠之果。勝於下也。

從此已下第二死位滅根多少者。論云。說異熟根最初得已。何界死位幾根後滅。頌曰。

正死滅諸根　無色三色八
欲頓十八九　漸四善增五

釋曰。正死滅諸根者。此之一句流入下三句。皆並言之。無色三色八者。無色界中將命終位滅根有三。謂命意捨。色八者。色界命終滅根有八。

謂命意捨眼等五根。論云。一切化生必具諸根而生死故。釋前義也。欲頓十九八者。欲界頓死十九八根於最後滅。滅十根者謂二形人頓命終時眼等五根女男命意捨於最後滅。滅九根者謂一形者頓死於前十中除女男一。滅八根者謂無形人頓死於前十根除女男二。以無形故。漸四善增五者。漸謂漸死。欲界漸死將命終時唯滅四根。謂身命意捨。善增五者。善謂善心。於善心死更增五根。謂信等五。前頓漸死滅三根等依染汚無記心命終者說。若善心死於前諸位更增信等。故前三根增至八根。前滅八根增至十三。前滅九根加至十四。前滅十根增至十五。漸死四根增至九根。謂三界善心死皆有信等五也。（冠註論本第三十七左）

【暉鈔】卷上末二十左　命終心通三性。今此先明染無記心死說無信等五。下二界准此釋說。色界命終不說喜樂者。死生唯捨受。色界無女男根。染無記心死無信等五也。漸死四者。從上死無眼等四。從下死即無女男二也。

【麟記】論本第三十一右　滅根多少門。所以先明無色界者。以前門中無色在後。今乘前便故先明之。

色界滅根有八者。死生位中唯是捨受無喜樂等。又是化生必具眼等故成八也。應知此中於命終位所有諸心滅入過去即名爲捨。非論後位成與不成。頓死之人如被害等。眼等諸根皆頓捨故。正命終時唯捨受故無喜樂等。漸四者。謂漸死人眼等諸根皆在先滅。於正死位但滅四根。

從此已下第三明得果用根多少者。論云。分別根中一切根法皆應思擇。二十二根中幾能證得何沙門果。頌曰。

九得邊二果　七八九中二
十一阿羅漢　依一容有說

釋曰。九得邊二果者。邊謂預流阿羅漢果。居初後故名之爲邊。此邊二果九根證得。初預流果九根得者。謂意及捨信等五根未知當知已知爲九。其預流果依未至定故唯捨受。論云。未知當知根在無間道。已知根在解脫道。此二相資得最初果。如其次第於離繫得能爲引因依因性故。解云。未知當知在無間道者。第十五心道類忍是也。已知根在解脫道者。第十六心道類智是也。其無間道爲同類因引離繫得名爲引因。

其解脫道與離繫得俱時而生。持離繫得名爲依因。離繫得者無爲上得也。阿羅漢果九根得者。謂意根信等五根已知根具知根爲八。喜樂捨中隨取其一故成九也。以阿羅漢通九地證。其九地者未至中間四本靜慮及三無色。除有頂也。若依未至中間第四靜慮及三無色證者唯捨受也。依初二禪喜受證也。依第三禪樂受證也。故於三受隨取其一。又論云。已知根在無間道。具知根在解脫道。此二相資得最後果。如其次第於離繫得能爲引因依因性故。解云。已知根在無間道者金剛喩定是也。具知根在解脫道者盡智是也。斷有頂惑第九無間道名金剛喩定。第九解脫道名爲盡智。其無間道爲同類因引離繫得名爲引因。其解脫道爲能作因持離繫得名爲依因。七八九中二者。謂中間二果即一來不還果也。此中一果或七根或八根或九根證得。且一來果七根得者。謂世間道依次第證。由七根得。謂意及捨信等五根。唯依未至證一來果故。唯取捨不通餘受。依出世道由八根得。七根如前。加已知根爲八。

若一來果倍離欲貪超越證者。如預流果由九根證得。先凡夫位斷六品貪名倍離欲。今入見道至道類智超越預流直證第二名超越證。上來明者是一來果七八九得。宜善知之。其不還果七根得者。用世間道依次第證。由七根得。謂意及捨信等五根。八根得者有二種八。且初八者依出世道。七根如上。加已知爲八。第二八者用世間道依次第證。謂意喜捨信等五根。故論云。又次第證不還果者。若於第九解脫道中入根本地依世間道由八根得。彼無間道捨受相應。解脫道中復有喜受。此二相資得第三果。於離繫得二因如前。解云。若超越證者必無依未至定從第九解脫道中得入根本。以超越者先得根本更不願求。故不入也。次第證者未曾得根本故。於未至定第九解脫若願入者得入根本也。無間道中捨受者未至地中捨也。解脫道中喜受者初禪根本喜也。由無間道斷下地惑。欣上地故解脫道中得入根本也。九根得者有二種九。且初九得者謂超越證。故論云。全離欲貪超越證者由九根

得。如前超越得一來果。先凡夫位斷九品惑名全離欲。今入見道至道類智超前二果直證第三名超越證。總說雖然而有差別。謂此依地有差別故。樂喜捨中可隨取一。前果超越唯一捨根。已上論文 解云。總說雖然者。謂總說九。數同一來也。而有差別者。根中受名即有差別不同一來也。謂此依地有差別故者釋上差別名也。謂此不還果依六地證。故地有差別。若依未至中間第四禪證唯用捨受。依初二禪用喜受證。依第三禪用樂受證。故於三受可隨取一。即是根名有差別也。第二九者依次第證不還果者。用出世間道。若於第九解脫道中入根本地由九根得。謂意喜捨信等五根已知根也。彼無間道捨受相應。解脫道中復有喜受故有二受。出世間道故加已知根。故論云。依出世道由九根得。八根如前。加已知根第九。無間解脫此俱有故。八根如前者同前依世間道中八根數。加已知爲九也。無間解脫此俱有故者此已知根在無間解脫二道俱有故須加之也。據上所明。頌言七八九者。應知有二種七。謂一來不還各一七也。有三種八。謂一來果中有

一種八。不還果中有二種八也。有三種九。一來中一九。不還中二九也。十一阿羅漢者。引本論爲難也。故論云。豈不根本阿毘達磨問由幾根得阿羅漢答十一根。云何乃言由九根得。十一根者意喜樂捨信等五根已知具知也。依一容有說者。通前難也。依一身中容有十一根。故本論說。理實有九。故說九根。故論云。實得第四但由九根。而本論言十一根者。依一身中容有故說。謂容有一補特伽羅從無學位數數退已。由喜樂捨隨一現前。後復證得阿羅漢果。由斯本論說十一根。然無一時三受俱起。是故今說定由九根。已上論文。解云。阿羅漢果通九地證。故有喜樂捨三受證也。又依薩婆多宗許阿羅漢數數有退故。於一身許有三受證阿羅漢。然當證時唯有一受故說九根。各據一義不相違也。論云。於不還果中何不如是說。此難意者。謂第三果許數數退通六地許。容於一身有三受證。何不本論說十一根。以無樂根證不還果而於後時得有退義。亦無退已由樂後(論作復字)得。答前難也。解云。若樂根證必定不退。若是退者必無後時

由樂根證。故知樂受證者必無喜捨。喜捨證者必無樂受故。故於一身必無容有三受證得不還果義。故不可說十一根也。又論云。非先離欲超越證第三。而於後時得有退義。此離欲果二道所得極堅牢故。解云。此文釋樂根證不退所以也。由此樂根在第三禪。次第證者唯得初禪故。樂根證必是超越。謂凡夫位斷三禪惑後時容依第三禪起見道證不還果。故知超越得起樂根。此超越人畢竟不退。以二道所得故。一先凡夫位斷欲惑盡。世道所得也。二今入見道。聖道所得也。次第證人唯一道得。故可退矣。此上義隱。論有要處。故具錄之。（冠註論本第三十八右）

【暉鈔】卷上末二十一左　得果者。不取練根。八十九品無爲分作四沙門果體。八十九品無間道爲能證智。八十九解脫道是有爲果體。證此八十九品無爲時。此八十九能證智與二十二根中幾根相應。共證此八十九品無爲作四沙門果也。如初果以八品無爲爲體。第十六心八品無爲上。有八箇得一時生屬身。得彼八品無爲。即說此人名得初果。此第十五第十六心與幾根相應。共證此八品無爲爲初果。後三果准此說。依未至地起見道故與捨受相應。意及信等即是同時心王心所也。無爲上得與

無間道同是有爲無漏。無間道引彼得生。與彼爲同類因也。此二相資者。無間道斷惑如驅賊。解脫道證滅如閉戶。互相有力名相資也。爲能作因者。卽有力能作因。不障得生卽能作因。能持無爲得卽有力也。凡夫人斷惑不分見修。合束爲九品。斷三品後入見道名分離欲。斷六品後入見道名倍離欲。斷九品名全離欲也。婆沙一百四十八。問。第九解脫道誰入根本。誰不入耶。答。欣多入。厭多不入。有說。爲求根本定離染入。爲求解脫離染不入。有說。利根入。鈍根不入。三釋皆通。無評家也。本論約無學果三度退三度證得。各用一根證。三度合說言十一根。以無樂根證不還果而於後時得有退義。此文釋。若樂根證。卽是凡位斷二定已下惑盡。後依第三定入見道。超證證第三果。緣先不取前二果直取第三。同得初果決定不退。若退者退作何果。未得初二果。此文且擧樂根超越人。喜捨證者亦定不退。義准超越第二果人亦定不退。以初得故也。亦無退已已下。卽明次第得第三果許有退。退作前二果。再得第三。卽用未至地捨根得。無有由喜樂根再得也。初果唯無漏道得。依未至定。第二果依未至通有漏無漏道。第三通六地證通有漏無漏道。第四果通九地唯無漏道證。四句分別者。第一句道雜地不雜。第二果。第二句地雜道不雜。卽第四果。第三句地道俱雜。卽第三果。第四句地道俱不雜。卽初果也。非先離欲已下。再釋超越第三果人。此三通一切處時等皆定成也。此明成根定。餘皆唯不定所以也。

【麟記】論本第三十一左　得果用根多少者。正理云。雖沙門果非根亦得。此辯根故但問諸根。問。二十二根中何故但言九根得果。答。此中皆據定心相應於果有力用者方說。如五根及命等非親生果。故此不論。非謂有漏故不取。以世道證果是有漏故。若言意雖通無漏。是有情主故取者。喜

捨非主。何以取之。故知唯約力用說。其初果依未至者。謂未離欲染不得根本。但依未至。未至定中唯捨受故。無間道爲同類因引離繫得者。謂無間道與離繫得同無漏性。名爲同類。在得前起。能引得生。復名引因。其離繫得是無間道等流士用果。故名果。舊云。雖沙門果亦通餘有爲解脫。今問幾能證得何沙門果故。且以離繫得答。其解脫道至名爲依因者。依者持也。謂持此得起故。與得爲所依道。非得前起。不名同類因。正理云。雖解脫道於沙門果非同類因。而是相應俱有因故名得彼果。亦無有失。以沙門果體更互相依而得生故。展轉相望爲士用果。誰復能遮。解云。此既言是相應俱有因。明知亦取有爲解脫爲其果體。以離繫得非相應俱有因故也。以阿羅漢通九地證者。謂九地中皆有無漏道故。然此無漏九地與有漏九地不同。此除欲界有頂取未至中間。有漏九地除未至中間取欲界有頂。所以可知。若依未至乃至唯捨受者。此等諸地無喜樂故唯有捨受。謂皆隨當地有喜樂等。證果之時隨應而說。金剛喩定及盡智等名義如下所明。無間道爲同類因者。如初果說。解脫道爲能作因者。謂有力能作也。所以非餘因者。以與得同時故非同類因。得非心法故非相應因。非定俱故非俱有因。無漏法故非異熟因。非染汚故非遍行因。由是但爲能作因也。前初果解脫道望得亦同此說。世間道證一來果者。謂有漏道欣上厭下六行斷惑證也。以超越證者要是有漏道故。言世間道依次第證者。問。初後二果何爲唯無漏證。中間二果便通有漏耶。答。初果必從見道證。見道唯無漏故。其第四果要離有頂。唯無漏道能離彼故。故彼二果唯無漏證。中間二果次第證者非從見道及斷有頂故。通有漏道證。唯依未至證一來者。此但斷欲六品隨眠。未至離欲。未得根本。故依未至但得捨根。若依出世道加已知根者。是修道故名已知根。倍離欲貪者。謂此煩惱麤細差殊。總分九品。上上

品上中上下乃至下下品等。今九品中但斷六品。猶有三品。故名爲倍。雖知總斷十種隨眠。而欲貪強但言離貪。卽顯餘惑。問。所以至道類智超越預流直證第二者何。答。本由六品隨眠障第二果。今既先時已斷六品至道類智。便超預流直證第二。此證第二由九根者。未知當知根在無間道。已知根在解脫道。此二相資得第二果。如其次第二因。如前。次不還果七根。如一來說。八根。初八如一來說。第二八。言二因如前者。謂於離繫得引因依因。同於前說。第九解脫願入根本者。婆沙問云。離欲染第九解脫。誰入靜慮。誰不入耶。有說。欣多者入。厭多者不入。有說。爲求靜慮而離染者入。爲求解脫而離染者不入。有說。利根者入。鈍根者不入。三說無評家。准此唯約次第人樂入不樂入等。若超越者先曾已得根本靜慮。若意樂根本卽先依根本地。若意樂未至卽先依未至。由此無間解脫必同一地。不還依六地證者。謂不還有先離欲惑及離四禪染。皆容證得。故於六地隨起無漏。理皆無遮。若約二果未離欲。不得通依六地。但用捨根。不得隨用喜樂。故差別也。無間解脫俱有故須加者。若爾前未知等一道中有。應不須加。解云。此中但言此根二道俱有。不遮一道有者。亦得加也。應知二種七者。尋前可解。引本論爲難者。卽發智本論第十文也。補特伽羅者。此云數取趣。謂數取諸趣也。或云無生。卽目無學。今此意者總目其人。爲數取趣。依薩婆多宗羅漢許有退者。以化地部初果有退。羅漢無退。今當宗中羅漢有退。初果無退。如下當辯。樂受證者必無喜捨者。謂此證人依第三禪方得樂受。此是超越必無退故。故無更用喜捨根義。喜捨證者必無樂受者。以樂在第三禪故。夫次第證人。無間道中必依未至捨受相應。解脫道中或入初禪根本喜受相應證不還果。必無能得三禪樂受證。設令退已後重證。重證時還須依未至地重斷欲惑。亦

不得依第三禪樂。故喜捨證必無樂受。凡夫位斷第三禪惑者。謂要離下染方得上地根本故。言凡位已斷第三。理實但斷第二禪染。亦得三禪根本。今言斷第三者。文勢相乘便故爾也。言二道所得者。理實前世道斷惑。今聖道證果。良由先時斷惑證今果故。故言二道得也。問。超越用喜捨證者亦許不退。如何偏說樂無退耶。答。雖超越人喜捨證者亦無有退。其次第者卽有退義。以不定故不說也。樂根決定無退故偏說樂。此上所明超越不還無退。羅漢無超越證。故容數退。

從此第四成就諸根定量門。論云。今應思擇成就何根彼諸根中幾定成就。頌曰。

成就命意捨　各定成就三　若成就樂身
各定成就四　成眼等及喜　各定成五根
若成就苦根　彼定成就七　若成女男憂
信等各成八　二無漏十一　初無漏十三

釋曰。成就命意捨各定成就三者。此據三根必定成就。謂成命時必有意捨。若成意捨必有命根。不可闕也。若成就樂身各定成就四者。謂成就樂根時必有命意捨也。若成身根時亦必有命意捨。故言各也。成樂

不成身者。謂聖者生無色界。無色界中成就下三禪無漏樂根也。成就身不成樂者。謂異生生第四禪彼無樂根。下三禪樂根彼已斷也。既是凡夫不可成就下無漏樂故。不成樂根而成身根也。成樂不成喜者。謂異生生第三定也。成眼等及喜各定成五根者。眼等等取耳鼻舌。若成眼根必成就五。謂身命意捨兼眼根。如眼既爾耳鼻舌三各成五根准眼說之。喜根成五根者。謂命意捨樂喜根。又論云。第二靜慮地生未得第三靜慮。捨下未得上。當成何樂根。此文意者難前喜根必成就樂。第二靜慮自地無樂而有喜根。初禪有三識樂。今已捨竟。第三禪意地樂今復未修得。故言捨下未得上當成何樂根也。當言成就第三靜慮染汚樂根。餘未得故。答也。未斷第三禪染汚必成就也。餘未得者餘樂未得也。若成就苦根彼定成就七者。彼者彼苦根定成就七根也。謂身命意喜樂捨苦根。夫成苦根必是欲界故。此七種不可闕也。於四受內除憂根者離欲捨故。若成女男憂信等各成八者。謂成女根必成就八。七根如苦。更加女根。男根亦八。七根如苦。更加男根。憂根亦八。

七根如苦。更加憂根。若成信等各成八者。謂命意捨信等五根。二無漏十一者。謂已知具知二無漏根各十一根也。已知根十一根者謂命意喜樂捨信等五根及已知根。具知十一者前十一根中除已知根加具知根。初無漏十三者。謂未知當知初無漏根必成就十三根。言十三者謂身命意喜樂捨苦信等五根及未知當知根。此加身苦者若成未知當知根必在欲界故定有身苦也。（冠註論本第三二十五右）

【暉鈔】卷上末二十三左　成就諸根定量門意者。二十二根中成眼根時。同時便成就幾箇根。餘准此說。不成信等五即約斷善人。不成就三無漏根即凡夫。不成眼等前四即從上命終。不成男女即從下命終說。又生色界不成女男根。又前七色根生無色亦不成就。不成憂苦根離欲。捨喜即生三定。不成樂即生四定。餘下文皆准此說。苦根成七。無眼等四約從上命終說。無女男根約從下命終說也。三無漏根不成眼等四及女男根。約厭生死心勝。從上死入聖即無眼等四。從下死入聖即無男女也。婆沙一百五十云。傳說。深心厭生死勝。臨命終得入聖。上下死不定故。無眼等四及女男二。正理所言無有無形得聖法者。此據本性損壞二黃門無形者說也。二無漏十一。無身苦者約第三第四果生無色界說也。

【麟記】論本第三二十五左　成就諸根定量門者。若成此根定有彼根。即說成就。若於三界隨一有闕者。

即不說成。故名定量。如言成命必有意捨。於三界內更無闕處。又定成者。通凡及聖決定成
者。非約一人。思之可解。三根定成者。以此三根通於九地一切有情皆定成故。除此三外餘十九
根有成不成。眼耳鼻舌四根。生無色界定不成就。若生欲界未得已失亦不成就。身根唯有。生無色界
定不成就。女男二根。生上二界定不成就。若生欲界未得已失亦不成就。樂根異生生第四定及無色
界定不成就。喜根異生生三四定及無色界定不成就。苦根若生色無色界定不成就。憂根離欲貪
者定不成就。信等五根善根斷者定不成就。初無漏根一切異生及已住果定不成就。次無漏根一切
異生見道無學定不成就。後無漏根一切異生及有學位定不成就。於非遮位。應知如前所說諸根
皆定成就。成下第三禪無漏樂者。謂無漏之樂不墮界繫。故九地中皆通成就。唯聖者成。非諸異生成
就無漏法故。下第三禪樂彼已斷者。謂生上地。下地善染等法皆捨離故。故不成也。此釋身樂不互相成。
成眼必成五者。以成眼根必有身根故。上言成身必不成眼者。謂或有身而無眼故。問。何不眼
耳互說相成。答。以眼耳等有無不定。非互相成。餘未得者。應言善及無覆無記未得也。夫成苦根必
是欲界者。謂生上界無苦根故。已如前說。除憂根者離欲捨故者。在欲界有苦無憂。若成信等各成
八者。謂無色異生有信等八。而無身等七色根。故亦無四受。是異生故不成三無漏根。憂與女男不
互成者。離欲女男無憂根故。有憂根者容無形故。已知根成十一者。謂那含生無色界。即不成七色
憂苦。三無漏根又不並成。除其二種故。無眼等十一。但有命等十一根也。無漏喜樂異地相成。故定
有之。具知亦爾。若成未知根定成十三者。以見道必依欲界故。故有身苦。已離欲者容入見道。非定
成憂。無眼等四。容入見道。以不定成故。亦非成就。問。於見道中女男二根隨合成一不。若不

成者何得入聖。答。漸捨命者容有不成就得入聖故。以非定成故。正理云。漸命終位。傳說。深厭生死能入見道。漸捨命故。無男女根亦容入聖。古德念法師云。於見道中男女二根雖定成一。成男不成女。成女不成男。以不定故不說。諸家破云。若爾男女互無。數終十四。因何論文但說十三。若言男女互無故不說十四者即是西方師義。迦濕彌羅師云。此中說數不說根也。解云謂約根數而說。不約男女根名而說。若爾何故言無根不得入聖。答。此約本性所無及生後除去者。以表性不定故。不得入聖。不同漸捨命者深厭生死故能入聖。

從此第五成根極少門者。論云。諸極少者成就幾根。頌曰。

極少八無善　成受身命意
愚生無色界　成善命意捨

釋曰。極少八無善者。謂闡提人名爲無善。彼若極少成就八根。謂五受身命意也。愚生無色界成善命意捨者。愚謂異生。未見諦故。彼若極少成就八根。謂信等五命意捨三。（冠註論本第三二十七右）

【暉鈔】卷上末二十四右　斷善人。准下文。唯三洲男女。此言無善成八無男女等根者。准得聖從上命終。無眼等四。從下死無男女根也。

【麟記】論本第三十七左　極少門者。總有二類。一斷善人。二生無色界。且初人以斷善故。無信等五及三無漏。眼等四根及女男二。此等六根以不定故。故但成八。成五受者。以斷善人必在欲界故有五受。在欲界中必有身故。問。斷善女男。何故二根不隨成一。答。雖初斷善必是女男。斷善之後即容無故。又漸捨命容前捨故。故不說也。愚生無色但成八根者。以是異生無三無漏。無色界故無七色根及四受等。成善者。信等五根一向善故。所以頌文總名爲善。

從此第六成根極多門者。論云。諸極多者成就幾根。頌曰。

極多成十九　二形除三淨
聖者未離欲　除二淨一形

釋曰。極多成十九者。標也。二形除三淨者。釋也。此明異生成根十九。謂二形人必非聖者。故無三淨也。言三淨者三無漏根也。除此三外餘十九根容皆俱有。聖者未離欲除二淨一形者。此明未離欲聖者極多亦成十九根也。謂初二果及不還向名未離欲聖也。除二淨一形者明所除根。若住見道除已知具知二淨。若住修道除未知具知二淨。除一形者女男根中隨除一種。以諸聖者無二形故。故欲界聖除此三淨外餘

十九根容皆具有也。（冠註論本第三二十七左）

【暉鈔】　闕之

【麟記】論本第三右十八　成極多門。亦有二類。一凡。二聖。凡謂二形。但除無漏三根餘十九皆容具有者。謂二形者必是欲界。眼等四根約得不失。既有二形。必不斷善有信等五。不離欲故定成五受。身命意等亦必定成。故有十九。第二類中言未離欲者無樂。以離欲者無憂根故。除二無漏者。三根不俱故。

俱舍論頌疏　論本第三　終

俱舍論頌疏　論本第四

中大雲寺沙門圓暉述

分別根品第二之二

從此大文第二明俱生諸法。於中有二。一正明俱起。二廣辯差別。就初正明俱起中。一明色法俱生。二明四品同起。且初明色法俱生者論問起云。今應思擇。一切有為如相不同生亦各異。為有諸法決定俱生。此總問也。有定俱生。總答。謂一切法略有五品。一色。二心。三心所。

四不相應行。五無爲法。無爲無生。此中不說。此總標諸法。意取俱生。簡無爲也。
今先辯色決定俱生。別明色也。頌曰。

欲微聚無聲　無根有八事　有身根九事　十事有餘根

釋曰。欲微聚無聲無根有八事者。欲謂欲界。微是細義。非極微也。色聚極微細立微聚名。爲顯更無細於此者。此在欲界無聲無根八事俱生隨一不減。言八事者謂四大種色香味觸。有身根九事者。有身根聚九事俱生。八事如前。身爲第九。十事有餘根者。眼耳鼻舌名有餘根。此眼耳鼻舌各十事俱生。且如眼根必有身根。此上必有地水火風色香味觸故成十也。如眼既然。耳鼻舌三十事亦爾。故論云。眼耳鼻舌必不離身。展轉相望處各別故。此上兩句顯必有身。下兩句明四根各別不可眼上加耳等也。於前諸聚若有聲生。如次數增九十十一。謂前八上加聲成九。前九上加聲成十。前十上加聲成十一。又論云。以有聲處不離根生。謂有執受大種因起。以根上有聲義隱故此文別指也。（冠註論本第四初右）

【暉鈔】卷上末二十五右　論本第四　正理論。問。何緣作此俱生法及下因緣論耶。答。爲破邪宗顯正理故。謂或有執。行自然生及一因生等。顯此諸行託俱有等諸因緣生。所以造此俱生法因緣論也。如相不同生亦各異者。相卽體相。五位法體不同。生時亦有別也。准正理論。釋此頌欲微聚無聲。欲卽欲界。微卽極微。聚卽七極微成聚也。此論言七極微。是色同時兼有香味觸各七。四七二十八極微。是所造攝。一一極微各有能造四大。計卽有衆多極微。今言八事者。約類同說八事。理實有衆多法也。婆沙九十云。聲界云何。若用造身根四大造聲。卽有因少果多過。若別起大造。此大相擊更復生聲。此聲復大造。若更別起大造。又復生聲卽有無窮過。評曰。應作是說。生欲色界身中有衆多四大相擊發聲者。有不發聲者。准此文。不是四大造聲。但是發聲處卽定有八事。有八事處不定有聲。此論八事卽婆沙中約四大不相擊不生聲說。若言有聲卽據發聲者說。婆沙言聲恒成就者。約一切人共說。此論八事無聲。卽約一身不發四大說也。頌中言欲微。不約色界明者。色界無香味。就欲界多處明。色界准欲界說。八事。約外非情色說。有身九事。卽約內有情色身說也。四根各別者。四根依身根處各別。不可眼上加耳等成十一也。以根上有聲義隱者。外非情發聲。相顯可知。內七色根如何有聲。爲通此難謂有執受大種發聲也。或此文舉內身有聲顯外非情。准內可知也。

【麟記】論本第四右初　俱舍頌疏記　論本第四

冨春沙門遁麟述

大文第二明俱生中總有二十七頌。正理云。何緣思擇諸法俱生。爲破邪宗顯正理故。謂或有執。

諸行無因自然而起。或復有執。由一因故諸行得生。或復有執。由自性等不平等因而生諸行。爲對此執故作此論。解云。不平等因者。則薩埵等三德共生於果。因有勝劣不同。名不平等也。言如相不同生亦各異等者。如法體相既有不同。其釋法生時亦各有異。於此諸法爲定俱生耶。微聚者。章釋意。顯聚小名爲微聚。即八九事等以成小聚。聚謂假聚。假依於實。實有多少不等。故約假聚以辯實事。此釋微即是聚名爲微聚。又正理云。色之極少更無分故立微聚名。如一剎那名時極少。更不可析爲半剎那。如是衆微展轉和合定不離者說爲微聚。準彼論釋。微是極微。聚即微之所聚。故名爲極微聚。新云。二釋之中後釋爲善。今詳此論意同前說。以論釋云色聚極細立微聚名。爲顯更無細於此故。然舊亦云。此論與正理別。言欲微者。謂簡色界。以色界中無香味亦無八事也。所以言無聲無根者。以聲不定故。外山河等即無根故。問。準本論等說。身恒有聲。何故此中言聲不定。答。諸論通約一身言聲恒有。此論聲非遍故言無聲。由此但言八事俱起。言八事者。且一色聚必具四大爲能造。及所造色香味觸。故成八也。此說總相。若細論者。如一色微自有七微共聚。及成方分。方分已去能與異類共成一聚。極少不減一百四十微。謂所造色香味觸一一各具能造四大。四四便成十六大種。併所造四總成二十。如是一一各七微成。謂對向六方有六。中間復一成七也。總計一百四十微也。今約體類同故。但言八耳。準此四大恒不相離。若爾堅濕煗動。云何隨一可得。餘體非無。如覺針鋒與籌合觸。如嘗鹽味與麨合味。解云。籌與針合。但覺針不覺籌。鹽與麨合。不覺麨味。今此亦爾。隨相顯者即可得故耳。故婆沙問云。云何知此四大種恒不相離。答。自相作業一切聚中皆可得故。謂堅聚中地界自相現可得故。有義極成。於此聚中若無水界。金銀錫等應不可銷。又水若無彼

應分散。若無火界。石等相擊火不應生。又火若無。無能成熟。彼應腐敗。若無風界應無動搖。又若無風應無增長。於濕聚中水界自相現可得故。有義極成。於此聚中若無地界。至嚴寒位應不成氷。又地若無。船等應沒。若無火界應無暖時。又火若無。彼應腐敗。若無風界應不動搖。又風若無。應無增長。於暖聚中火界自相現可得故。有義極成。於此聚中若無地界。燈燭等焰應不迴。又地若無。不應持物。若無水界應不生流。又水若無。焰不應聚。若無風界應不動搖。又若無風應無增長。於動聚中風界自相現可得故。有義極成。於此聚中若無地界。觸墻等障應不折迴。又地若無。應不持物。若無水界應無冷風。又水若無。彼應分散。若無火界應無暖風。又火若無。彼應腐敗。已上論文。依經部師。於一聚中餘有種子。未有體相。根上有聲義隱者。且眼等根雖皆有聲。非如外境可打擊顯故。所以復有聲者。以四大相擊必有聲也。故婆沙云。四大相擊無時無聲。言有執受大種因起者。謂根上聲必是有執受大種爲因也。已上明欲界訖。論云。前說色界香味並無。故彼無聲。有六七八。有聲有七八九。此可准知。故不別說。

從此第二明四品同起者。論云。如是已辯色定俱生。餘定俱生今次當辯。頌曰。

心心所必俱　　諸行相或得

釋曰。心心所必俱者。心與心所必定俱生。隨闕一時餘則不起。諸行相

或得者。諸行即是一切有爲。此即有四種。謂色心心所心不相應行。相謂四相。此之諸行必與有爲四相俱起。故前句必俱二字流至於此。應言諸行相必俱。或得者得謂諸行上得也。謂諸行內唯有情法與得俱生。不通非情。是故言或。從此上來兩段不同。總是第一正明俱起竟。（冠註論本第四右三）

【暉鈔】卷上末二十六右　心王心所俱者。此約總相說。若三性類各別說。如下定俱生中。善心與二十二等文辯也。情非情有論。有情有得。就有情中法俱得俱起。前後得即不俱也。

【麟記】論本第四右三　言四品同起者。謂心與心所諸行及相爲四。前章已明色法俱生。此中不應更立色爲一品。但可攝在諸行之中。隨闕一時餘則不起者。謂總說心王若闕心所。心所若闕心王。隨闕一邊則便不起。非謂心王要與一切心所俱方乃起也。以性地界有無不定故。得不通非情。至得中辯。

其次大文第二廣辯差別。於中有二。一明心所有法。二明不相應行。就明心所有文分四段。一明五地。二明定俱生。三明相似殊。四明衆名別。就初明五地中。一總標名數。二別釋名體。且初總標名數者。

論云。向言心所。何者是耶。頌曰。

　心所且有五　大地法等異

釋曰。心所且有五者。標心所位也。大地法等異者。列其數也。一大地法。二大善地法。三大煩惱地法。四大不善地法。五小煩惱地法。略釋大地法名者。論云。地謂行處。若此是彼所行處。即說此爲彼法地。別釋地一字義也。地是心王。是心所所行處故。言地謂行處也。言若此者此心王也。言是彼者彼心所也。所行處者心是心所行處也。卽說此爲彼法地者。由心是行處故。卽說此心爲彼心所法家地也。大法地故名爲大地。釋大地二字也。此言大者目受想等十心所也。以受想等通三性等一切心品故名爲大。若言大地還目心王。心但是地而是非大。今言大地者。大法之地名爲大地。依主釋也。此中若法大地所有。名大地法。謂法恒於一切心有。此釋大地法三字也。此中者此心所中也。此心所中受想等十心所法是大地家所有。名大地法。大地之法名大地法依主釋也。故知唯言大者但目心所。若言大地便目心王。言大地法卽還目心所法也。此上有兩重依主釋。善應思之。（冠註論本第四四右）

【暉鈔】卷上末二十六右　心所且有五者。且者未盡之言。此論文明五地外。更有八不定地。在五地外故

言且。或准婆沙及此論下文。更有忻厭。在五地外。頌言且也。或婆沙一百三十二。更有覆地及無覆地。在五地外。頌文言且。此論。謂二地。四十六心所中。無有一法唯有覆性及無覆性。不說此二地。問。受等通三性。受等名大法。心王通三性。心王名大法。答。以無二心王俱時生互相依。心王自不依心王。心王不得名大法。心所依心王。心所名大法。心所自不依心所。心所不得名地。准此論。唯心王名地也。婆沙十六心王心所俱得名地。以此二法互相依故。及此論下文亦有此義。俱有因中互相依故。已下諸地皆准此釋。

【麟記】論本第四左三、　一明心所者。問。前列法名總有五種。今廣辯中。何以但明心所及不相應。答。心王及色界品已明。今此但論俱生心所不相應。前所未說。故今廣辯。兼明俱生。五地者。婆沙更說大有覆地大無覆地。然此二地無別心所。此論不說。言大地者。此論唯說受想等名大。心王名地。婆沙更有二說。一約心名大。體用勝故。即大是地故名大地。是持業釋。又說心名大。受等十法是心起處名地。大之地故名爲大地。是依主釋。大地即法名大地法。言且有五者。爲顯非遍攝盡故置且言。以有不定等在五地外故。

此下第二別釋名體。正明五地文分五段。且初大地法者。論云。彼法是何。頌曰。

受想思觸欲　慧念與作意　勝解三摩地　遍於一切心

釋曰。前三句標列。第四句釋得大地法名。受謂領納。此有三種。苦樂倶非。有差別故。倶非是捨受也。想者取像。謂於前境取差別相。思者造作。謂能令心有所造作。觸謂觸對。根境識三和合而生能有觸對。欲謂希求所作事業。慧謂於法能有簡擇。念謂於緣明記不忘。作意者動作於意。謂能令心警覺爲性。勝解者謂能於境印可。此事如此非不如是。起殊勝解。三摩地者此云等持。平等持心於一境轉。亦持心所。從强說心。遍於一切心者。釋得地名也。此十心所遍三性等一切心品。諸餘心所卽不能遍故。於此獨名大地法。（冠註論本第四右五）

【暉鈔】卷上末二十七右　問。疑有無二轉。未決斷時卽無勝解。勝解應非大地法。答。疑有印有。第二念疑無印無。前後二念不同。皆得有勝解也。經部本宗全不立心所。卽心王差別。領納名受等。末宗破。以五蘊中應無受想行三蘊難。卽立受想行三爲五蘊故。故唯識云。或執離心無別心所。是定能令心當念中心心所不散。非令前後念不散也。

【麟記】論本卷四四右　受者。謂能領納。或受性名受。如圓滿性立圓滿名。想取像者。謂男女怨親等像。正理云。安立執取男女境差別相。別相因說名爲想。解云。謂爲因令心心所安立男女等相

而執取故。思能造作者。正理云。令心造作善不善無記。成妙劣中性說名爲思。由有思故。令心於境有動作用。猶如磁石有力能令鐵有動用。觸謂根境識三和合而生者。擧因以辯。能有觸對者。擧業以明。謂有作用觸對前境故。又入阿毘達磨云。令心觸境。能養活心所故名爲觸。欲者。正理云。希求取境說名爲欲。又入阿毘達磨云。隨順精進謂我當作如是事業故名爲欲。慧謂簡擇者。正理云。簡擇所緣邪正等相說名爲慧。約用辯也。問。慧既簡擇。寧得與疑俱。答。簡擇未決。亦得與疑俱。念謂於緣明記者。正理云。於境明記不忘失因。非謂但據緣過去境而不忘也。作意者。正理云。引心心所令於所緣有所警覺說名作意。此則世間說以留意。解云。諸心心所沈沒不行。由作意力警令發覺。策之令造。能屬於境。即世間言留心於此。雜心名憶。勝解者。正理云。於境印可說名勝解。有餘師說。勝謂增勝。解謂解脫。此能令心於境無礙自在而轉。如勝戒等。解云。於境明記印可。審定如此如彼殊勝之解。勝戒等等取定慧。問。若有疑俱。云何有勝解。答謂。疑此爲有爲無。於二心中一一皆能印可取相。故有勝解。又入阿毘達磨云。即是令心於所緣境無怯弱義。三摩地者。正理云。令心無亂取所緣境不流散因名三摩地。解云。由定力故。當剎那中令心心所同屬一境。至此非餘故名爲定。此諸心所。准有宗。一剎那中同時而起。若經部等不許同時。論云。諸心心所異相微細。一一相續分別尚難。況一剎那俱時而有。有色諸藥色根所取。其味差別尚難了知。況無色法唯覺慧取。此論主意謂同時難明也。釋得地名者。舊云。自古諸德皆以兩義立大地法等。各爲指南。今依此論。唯約遍一切心一義以立。餘心所法非遍一切故。不立大地法故。新解亦同。下四地亦皆一義。彼不復說。

從此第二明大善地法者。論云。大善法地名大善地。此釋大善地三字。信等十心所法徧一切善心。得大善名。心王名大善地。者。是大善法所行處故。大善之地依主釋也。故大善地言唯目心王。此中若法大善地所有。名大善地法。謂法恒於諸善心有。此釋大善地法四字。此中者此心所中。謂信等十是大善地家所有法故。名大善地法。大善地之法依主釋也。

彼法是何。頌曰。

信及不放逸　輕安捨慚愧　二根及不害　勤唯徧善心

釋曰。信者澄淨也。如水淸珠能淸濁水。心有信珠令心澄淨。有說。於四諦三寶善惡業果忍許。名信。及不放逸者修諸善法。論云。離諸善法復何名修。此難意。善法卽修。離善之外何者名修。名不放逸也。謂此於善專注爲性。答前難也。專注是修。名不放逸也。餘部經中有如是釋。能守護心名不放逸。輕安者輕謂輕利。安謂安適。於善法中有所堪任。名心堪任性。捨者捨離沈掉。令心平等。無警覺性。慚愧二種如後當釋。頌言二根者。謂無貪無瞋二善根也。不說無癡者。無癡善根以慧爲體。前大地法中

慧已攝竟。故大善地法中不重說也。言不害者謂無損惱。勤者精進。謂能令心勇悍爲性。頌言唯徧善心者。釋得地名也。謂唯徧善心也。由前信等具此兩義。一則唯是善性。二則徧一切善心。如大地法雖能徧善心不是唯善。唯信等具二義。得大善地法名也。（冠註論本第四六右）

【暉鈔】卷上末二十七右　問。下二定中言忻厭二心所。此四十六中是何類攝。答。正理論云。忻即緣功德。厭即令心緣煩惱過患。一心不得倶起。論不正說。說二及言傍顯忻厭。謂二不倶生。性相違故。又是善性故。論主於大善地不正說。及字中收也。婆沙一百四十三及正理亦說此二。婆沙三十五又說怖心所。是染及無記性。此論略而不論。不定地中攝也。問。善體現行即是修。如何乃言修諸善法。應離修外別有善法體。答。謂此不放逸於因聚善法專注性也。心堪任性者。與身心作適悅之因。身即五識相應輕安。不是色身。如五受中身受也。經部許身輕安者。即是輕安風觸身。輕利也。問。既是五識相應。如何立爲輕安覺支。答。輕安意識相應者已非覺支。況五識相應得是覺支。問。行捨無警覺性。作意有警覺性。此二相違。如何同念起。答。一有警覺。一無警覺。二體既殊。同起有何乖反。作意有用。行捨無用。行捨有用作意即無用。二體同時何不順也。四句分別者。有唯善不是遍善。即忻厭。二有遍善不是唯善。即大地十。有通二。即大善十。有非唯善及非遍善。即尋伺睡眠惡作。通三性不是唯善。不遍諸地不是遍善也。大煩惱六不善二小惑十不定

餘四。善言已簡。不入此四句也。身無堪任性。即五識名身。非色身。如身受也。

【麟記】論本第四左五　信淨者。入阿毘云。是能除遣心濁穢法。如水清珠著於水內令濁穢水皆即澄淨。如是信珠在心池內。諸濁穢法皆悉除遣。水清珠者。泛明其珠乃至多種。若言類珠。青珠等皆水清珠。若珠中能出水者名月愛珠。若能出火者名物燧珠。若能清濁水者名水清珠。忍許名信者。由信彼希求彼境。信許有境方能印可。故正理云。爲欲所依能資勝解故名爲信。不放逸者。正理云。專於己利防身語意。放逸相違名不放逸。解云。己利即三乘涅槃及世間愛果。是己所專也。輕安者。正理云。正作意轉身心輕利安適之因。心堪忍性說名輕安。解云。謂如理作意正起之時。能爲身心輕利安適之因名輕安也。又入阿毘云。心堪忍性說名輕安。違害惛沈隨順善法故。捨謂無警覺性者。警誡愼也。廣雅云。警警不安。又入阿毘云。捨背非理及向理故。由此勢力令心於理及於非理無向無背平等而住。如秤持物。問。大地中作意是有警覺。大善中行捨是無警覺。二相既殊。如何俱起。答。作意是有警覺。捨即無警覺。二體既殊。各有自用。故得同起。若論主答。豈不前說相難了知。又云。有雖難了由審推度而復可知。此最難知。謂相違背而不乖反。慚愧二種如下明之。二根者。正理云。謂於已得未得境界耽著希求相違。無愛染心名爲無貪。於情非情無損害意哀愍種子說名無瞋。不害者。正理云。與樂損惱有情相違。心賢善性說名不害。勤者。正理云。於諸已生功德過失守護棄捨。於諸未生功德過失令生不生。解云。功德令生。過失不令生。即是勤斷二惡勤修二善無退失義。懈怠相違也。准正理論。於善法中更立欣厭。故論云。說二及言兼攝欣厭。謂頌中二及字也。厭謂審觀無量過患法性。欣謂希求過

恚出離對治。今此論及者。但是十內自相及也。婆沙亦別立欣厭。然諸論多不說者。以非恒起不遍善心故。不立爲大善法也。

從此第三明大煩惱地法。論云。如是已說大善地法。大煩惱法地名大煩惱地。釋大煩惱地四字唯目心王。心是大煩惱之地名大煩惱地依主釋也。此中若法大煩惱地所有名大煩惱地法。此釋大煩惱地法五字。此心所中謂癡等六是大煩惱地家所有法故名大煩惱地法。大煩惱地之法依主釋也。故知大煩惱三字唯目癡等。大煩惱地四字即目心王。大煩惱地法五字還目癡等。應善思之。謂法恒於染汚心有。釋上大義也。彼法是何。頌曰。

癡逸怠不信　惛掉恒唯染

釋曰。癡者愚癡。亦名無明迷境起故。亦名無智無決斷故。亦名無顯無彰了故。逸者放逸。不修諸善。是修諸善所對治法。怠謂懈怠。心不勇悍。是前所說勤所對治。不信者令心不澄淨。是前所說信所對治。惛者惛沈。謂身心重性。於善法中無所堪任。亦名身心之無堪任性。掉者掉擧。令心不靜。恒唯染者。釋得地名也。遍者是恒義。此

上六種、一則唯染。二則遍染。具此兩義、獨得大煩惱地法名。且如受等、雖是遍染、不是唯染。忿等十惑、雖是唯染、不是徧染。故皆不得大煩惱地名也。（冠註論本第四左七）

【暉鈔】卷上末二十八右 染言通有覆及不善。四句分別者。第一句、有遍染非唯染。卽大地十。第二句、有唯染非遍染。卽小惑十大不善二不定中貪瞋慢疑。第三句、卽大煩惱六。第四句、不定尋伺睡眠惡作大善十及忻厭。不入此四句。染言已簡也。

【麟記】論本第四右七 癡亦無明等者。謂照了名明。審決名智。彰了名顯。此三皆是慧之別名。今無此三相、故名無明等。正理云。癡謂愚癡。於所對境障如理解。無辨了相卽是無明。無智無顯、故說爲愚。逸者。謂於境專注己利。棄捨有情名爲放逸。怠者。於善事業闕減勝能。於惡事業助成勇悍。無明等流名爲懈怠。由此說爲鄙劣勤性。勤習鄙穢故名懈怠。不信者。正理云。心不澄淨。邪見等流。於諸諦寶靜慮等至現前輕毀。於施等因及於彼果、心不現許名爲不信。昏沈者。昏謂昏昧。沈謂沈重。故正理云。瞢瞢不樂等所生。心重性說名昏沈。由斯覆蔽心使昏昧。無所堪忍、瞢憒性故。由是說爲輕安所治。掉擧者。正理云。親里尋等所生。令心不寂靜性說名掉擧。心與此合越路而行故。且如受等者。謂受等十及煩惱六尋伺二總十八法。

從此第四、明大不善地法者。論云。如是已說大煩惱地法。大不善法地

名大不善地。此釋大不善地四字目心王也。心王是大不善法之地名大不善地也。依主釋也。此中若法大不善地所有名大不善地法。謂法恒於不善心有。此意釋大不善地法五字目無慚等。謂無慚等是大不善地家所有法故名大不善地法。大不善地之法依主釋也。彼法是何。頌曰

唯遍不善心　無慚及無愧

釋曰。唯遍不善心者。釋無慚無愧得大不善名也。謂無慚無愧。一即唯不善性。二則遍一切不善心。具此兩義獨得大不善名。且如受等雖是遍不善心不是唯不善性。忿等七惑除諂誑憍此七及瞋雖唯不善性不是遍不善心。故皆不得大不善名。此二行相如後當釋。（冠註論本第四左八）

【暉鈔】卷上末二十八左　大不善地四句者。第一句有唯不善性不是遍不善。即忿等七及瞋。第二句者有遍不善不是唯不善。即受等十及癡等六尋伺二。第三句即此不善地二。第四句小惑餘三不定餘七是。大善地十同前簡法也。

【麟記】論本第四右八　除諂誑憍者。以諂誑等非唯不善故。舊云。大善地及諂誑憍兼地外睡眠惡作

貪、慢、疑。此十八法、非唯不善。亦非遍不善故。皆不名大不善地法。今詳大善地法、本不通染。豈用非唯非遍以簡之。若言非遍者、應顯有分通義。忿等煩惱、如隨眠品中自當辯。

從此第五釋小煩惱地法。論云。如是已說大不善地法。小煩惱法地名小煩惱地。釋小煩惱三字。忿等是也。小煩惱地、即目心王。心王是小煩惱法之地、名小煩惱地。依主釋也。此中若法、小煩惱地所有、名小煩惱地法。此釋小煩惱地法五字。目忿等十。謂忿等、是小煩惱地家所有法、故名小煩惱地法。小煩惱地之法、依主釋也。謂法少分染汚心俱。釋小煩惱名也。不偏一切故言少分。彼法是何。頌曰。

忿覆慳嫉惱　害恨諂誑憍　如是類名爲　小煩惱地法

釋曰。此忿等十名小煩惱。謂有三義。一唯修所斷。二意識地起與無明相應。三各別現行。具此三義故獨得名小煩惱地也。且如受等十大地法。癡等六大煩惱地法。及無慚愧二。不定中貪瞋尋伺睡眠。此等諸法。三義倶闕。慢疑二種、雖與意癡相應倶闕唯修斷。慢通見修斷。疑唯見斷故。惡作雖唯修斷闕意癡相應。通善性故。皆不名小煩惱地

法也。已上五段不同。總是別釋五地名體竟。（冠註論本第四九右）

【暉鈔】卷上末二十八左　於他盛事令心憤發名忿。隱所造過名覆。執財法名慳。妬他得勝名嫉。堅執不捨名惱。於他有損曰害。結怨不解曰恨。詐現親附名諂。心口相違名誑。染著自法名憍也。慢疑闕初及第三二義也。惡作闕第一第三二義也。此處言睡眠闕三義。准下文見所斷慢睡眠自在隨煩惱。皆唯意地起。准此文睡眠唯意地起。雖唯意地有不與無明俱。如善睡眠。故闕第二義也。意地起准此文。上來明五地。大地法即遍一切心。大善即遍一切善心。大煩惱即遍一切染汙。大不善即遍一切不善心。此十闕上四義。名小煩惱地。不定地約不入此五地等名不定也。如是類名爲者。此論類。即此小惑起名別不同是流類。正理十一云。即此十外更有不忍不樂憤發等心所。是小煩惱地流類也。不忍不樂即此嫉中攝。憤發忿中收也。心王心所相應起非自力起。有二十九。大地十除慧。大善十大煩惱六除無明大不善二尋伺睡眠。第二句有自力起非相應。有十五。小煩惱十不定餘五。有通二。慧中五見即自力。餘即相應。無明共即相應起。不共即自力。第四句即心王是也。

【麟記】論本第四八右　言二義俱闕者。問。且如受等即是三義全闕。何言闕二義耶。詳此二義是依舊解。彼但以二義簡餘心所。無各別現行一義。是故今疏主誤亦云闕二。而不知自加各別現行成闕三義。仍依舊說。蓋疏誤矣。或是傳寫者誤。若依新解。分意識地起無明相應爲一。總四義簡法。故彼云。大善地法不與一切染心相應。煩惱之名以簡此法。尋伺雖通染心。闕四義故

不名爲小。四義者。一非唯修斷。二非遍六識。三非唯無明相應。四非各別現行故也。受等十法亦同此釋。大煩惱地及無慚愧。雖復唯與無明相應。闕三義故不得名小。慢疑雖唯意地起。唯無明相應。各別頭起。非唯修斷。闕一義故不名爲小。惡作唯修所斷。唯意地起。各別現行。以非唯與無明相應。故不名小。睡眠雖唯意地。闕三義故。貪瞋二種雖復唯與無明相應。各別頭起。闕二義故皆不名小。今詳新解。四義爲勝。且如無慚愧等二及煩惱六。雖唯與無明相應。非唯意地起。不可合爲一義。睡眠唯意地起。不可言唯與無明相應。通三性故。故和合意地起與無明相應爲一者。不盡理故也。已上 已上五地總有三十八心所。兼不定中惡作睡眠尋伺貪瞋慢疑。總成四十六心所也。言不定者。謂不定入前五地故。及不定所依故。所以可知。頌中言類者。准此但是十種不同名類。依正理論。類言爲攝不忍不樂憤發等義。此論不說者。以是中忿等攝故。又正理云。如前所說一切心所。應知其性皆是實有。由相續變異而起。現見清油垢水風等勢力制持。燈相續變中便有明晦聲動等故。解云。燈因油而明。因水而聲。因垢而昧。因風而動。雖同一時用各有別也。心所亦爾。雖同時難知約別可了也。

從此第二明定俱生。於中有二。一明欲界。二明上界。且欲界俱生者。論問云。此中應說於何心品有幾心所決定俱生。頌曰。

欲有尋伺故　於善心品中　二十二心所　有時增惡作
於不善不共　見俱唯二十　四煩惱忿等　惡作二十一

有覆有十八　無覆許十二　睡眠遍不違　若有皆增一

釋曰。欲曉此頌。且要先知於欲界中心品有五。謂善唯一。不善有二。一與不共無明相應。二與餘貪瞋等相應。無記有二。一有覆無記。二無覆無記。今此頌文約此五品以明俱生。欲有尋伺故於善心品中二十二心所者。夫欲界中必有尋伺故。於善心品中二十二俱生。謂大地十。大善地十。及與尋伺。有時增惡作者。然此惡作通善惡性。於善心中有無不定。故言有時。善心若有於前心品更增惡作成二十三。言惡作者論有三解。論云。惡作者何。問也。惡所作體名爲惡作。答也。於惡所作事起心厭惡。若惡若善若作若不作俱在其境也。應知此中緣惡作法說名惡作。謂緣惡作心追悔性。注曰。於惡作事既不稱心遂生追悔即此追悔。緣惡作起名爲惡作。惡作是境非追悔也。今名追悔爲惡作者。從境爲名也。此下論文如緣空解脫門說名爲空。緣不淨無貪說爲不淨。注曰。此文擧例釋成也。空解脫門以定

爲體。今名空者。以緣空故。從境爲名。不淨觀無貪爲體。今名不淨者。緣不淨故。從境爲名。惡作亦爾也。又見世間。約所依處說能依事。如言一切村邑國土皆來集會。惡作卽是追悔所依故。約所依說爲惡作。注曰。此第二釋。意者先因惡作方起追悔。故知惡作是追悔所依。今喚追悔爲惡作者。於所依處顯能依事。如人依村。村是所依。若人集會卽言村來。是擧所依村顯能依人也。又於果體假立因名。如言此六觸處應知名宿作業。注曰。此第三釋。因是惡作。果是追悔。今喚追悔爲惡作者。此於果上立因名故。如言者如經言也。此六觸處眼等六根也。此六觸處是果。宿作業是因。經言六觸處是業者。亦是果上立因名也。問。何等惡作說名爲善。答。謂於善惡作不作中心中追悔性。謂於先時於善不作於惡而作。後生追悔名善惡作也。與此相違名爲不善。謂先作善而不作惡。後生追悔名不善惡作也。故此二惡作各依善惡二處而起。於不善不共見俱唯二十者。此明

不善心品二十心所俱生也。不善不共者不共無明也。見者不善見也。俱者謂不善心一與不共無明俱。二與不善見俱也。且於不善不共無明心品必有二十心所俱生。謂大地十。大煩惱地六。大不善地二。及與尋伺。第二不善見相應心品者。謂此心中或有邪見。或有見取。或有戒禁取。亦有二十心所俱生。名卽如前不共品說。於五見中除身邊見者。此二見是有覆無記見也。問。此不善見相應心品合有二十一。二十如前。應加不善見。何故俱言二十耶。答。非見增故無有二十一。以卽於十大地法中慧用差別說爲見故。見以慧爲體。十大地法中慧已攝竟。故不重說也。四煩惱忿等惡作二十一者。此有三類。一四煩惱者貪瞋疑慢也。二忿等者十小隨煩惱也。三惡作者不善中惡作也。此三類心各有二十一心所俱生。且四煩惱相應心品二十一者。謂大地十。大煩惱地六。大不善地二。及與尋伺。此二十上加貪等隨一。名二十一也。忿等二十一者。二十如前。加忿等一。不善惡作二十一者。二十

如前。加惡作一。有覆有十八者。此取欲界有覆無記心也。謂與身邊二見相應。此二種見能覆聖道。或有癡覆名爲有覆。不能招果故名無記。此有覆心必有十八心所俱生。謂大地十。大煩惱地六。及與尋伺。此中見不增應知如前釋也。無覆許十二者。欲無覆心異熟生等也。此有十二心所俱生。謂大地十。及與尋伺。言許者依薩婆多宗惡作不通無記故。於無覆無記心唯許有十二。不同經部意惡作通無記心。無記心中更加惡作故得有十三。非所許也。睡眠遍不違若有皆增一者。睡眠通三性故。於前心品遍有不違也。隨何品有皆說此增。謂前善中二十二上加至二十三。若前二十三增至二十四。不善無記准例應知。（冠註論本第四十左）

【暉鈔】卷上末二十九左　有時增惡作者。惡作是追悔。不追悔作惡。於善心即無故言有時也。惡作者。如昨日惡作善惡二事名作。望今日不稱情邊名惡。惡之與作皆屬昨日境。今日心追悔。緣惡作境生。全取境名。有財釋也。第二釋。惡作所依。追悔能依。今喚追悔名惡作者。擧所依惡作顯能依追悔名。如人依村喚所依村。即人來擧所依村顯人也。第三釋。追悔果。取惡作因名也。謂於善惡

不作作中者。善惡卽是一所作事。不作作中者。於善不作。於惡而作。心追悔名善惡作。翻釋於惡不作。於善而作。後心生追悔。名不善惡作也。謂於先時下。是釋上三句也。問。於已作善惡二事心追悔。可名善惡二惡作。於未作善惡二事追悔。如何名善惡二惡作。答。謂。於未作事心追悔。悔不作善。名善惡作。悔不造惡卽不善惡作也。婆沙三十七云。四句分別。一有善惡作於善處起。如悔不多作善等。二有善惡作於惡處起。如悔先作惡等。三有惡惡作於惡處起。如悔不多作惡等。四有惡惡作於善處起。如悔作善等也。不共者。婆沙四十八有二釋。一云。不共無明唯見所斷。不與根本十惑相應名不共。若與忿等七自力惑相應起。以修斷故非是不共也。二云。不共無明通見修斷。不與根本十惑相應名不共。與忿等相應無明亦名不共。以是隨煩惱故。今此論同後說。許不共無明與昏沈悼擧隨惑相應起故也。問。不共無明於何位起。答。謂起邪正見。或邪見等緣四諦理。心勞倦時不忍不了。卽是不共無明也。經部憂根與惡作相應故。憂與惡作二種皆通無記。有部說惡作與憂相應。皆不通無記。如前二十二根中釋。睡眠無夢卽一向無記性。若有夢卽隨所夢事以判三性也。問。惡作與根本十惑中無明相應不與餘九惑相應。惡作卽二十一心所俱生者。前不共無明應亦二十一。兼惡作何故論言二十耶。答。正理論釋頌云。於不善不共見俱唯二十者。不善見卽二十心所俱生。不共無明卽二十一心所俱生。既許無明與惡作相應。惡作二十一。何妨惡作與無明相應。無明有二十一。前婆沙二說中不共無明通修斷。以許與二十一心所相應有癡等六故。此論據有惡作處卽有無明。有無明處未必有惡作也。

【麟記】論本第四左九　不共無明者。婆沙有二說。一云。不與貪等忿等相應。自力而起名爲不共。二云。

不與貪等本惑相應名不共。亦名獨頭無明。惡作體者。謂不稱情所作事業名為惡作。非不如理事名為惡作。如不善悔。緣善所作事生悔心故。如緣空解脫門者。下有三種解脫門。即空無相無願等。今舉空解脫門為例也。空解脫者。謂以觀空得解脫故名空解脫門也。六觸處者。謂眼等六根能生其觸。名為觸處。宿作業是因者。謂前生造業為因。方感今生眼等六果。於善惡不作作中者。釋善惡作。謂不作配上善事。作配上惡事。即悔先不作善而作惡。此追悔是善事。問。於已作事可說名惡作。緣未作事云何名惡作。答。於未作事亦得名惡作。如是追悔言。我先不作如是事業。是我惡作。如有言我今日不布施物是惡作也。故此惡作依善惡二處而起者。且善惡作通於善惡二處而起。惡惡作亦爾。今約追悔體性但有善惡二種。若約境分總成四句。故婆沙云。一有惡作是善於不善處起。謂悔先作惡事。二有惡作是不善於善處起。謂悔先作善。三有惡作是善於善處起。謂悔先不作善。四有惡作是不善於不善處起。謂悔先不作惡。慧用差別說為見者。但是一體。約用差別故立異名。謂簡擇名慧。推度名見等。已如上辯。不能招果者。謂身邊二見唯約內門轉。不親發業。故不招果。但有十八者。謂於前不善中除無慚愧二也。見不增如前釋者。如前不善見中言慧用差別名見故。經部惡作通無記者。謂經部師。惡作與憂相應故通無記。即有言。如我今云何不消而食。我何為不畫此壁等之惡作也。有部惡作不通無記者。謂惡作與憂根相應。憂唯善惡。惡作亦爾。又離欲者不成就故非無記。設有如是事。不畫壁等但是省察非惡作也。睡眠通三性者。約夢時說。若不夢但無記性。婆沙云。若夢見禮佛等事即善性。若夢見殺生等即不善性。若夢見青黃等即無記性。以業羸弱不能感報。

從此第二明上界俱生者。論云。已說欲界心品俱生。當說上界。頌曰。

　初定除不善　及惡作睡眠　中定又除尋　上兼除伺等

釋曰。初定除不善及惡作睡眠者。謂初靜慮如前欲界諸心所法。唯除不善。不善有十。謂瞋一。小煩惱中忿等七。除諂誑憍。及無慚愧。此十煩惱唯不善性色界無有。除惡作者。惡作與憂根相應。色界離憂故無惡作。除睡眠者。色界無段食故無睡眠也。中定又除尋者。謂中間定除前所除。又更除尋。餘皆具有。上兼除伺等者。上者二禪已上乃至非想也。此二禪已上除前所除。兼除伺等。等取諂誑。餘皆具有。經說諂誑極至梵天。故唯初禪得有諂誑。以初禪地臣主相依必行諂誑。如經中說。大梵天王處自梵衆。忽被馬勝苾芻問言。此四大種當於何位盡滅無餘。梵王不知無餘滅位。便矯亂答。我於此梵衆自在作者化者生者養者是一切衆生父。作此語已。引出衆外。諂言愧謝令還問佛。解云。大梵天王不知依未至中間四禪此六地中起無漏道斷第

四禪染。及依空處近分。起有漏道斷第四禪染。是四大種無餘滅位。故矯亂答也。矯亂答辭是誑語攝也。諂言愧謝顯有諂也。作者我能造作世間也。化者我能化世間也。生者我能生一切衆生也。養者我能養一切衆生也。（冠註論本第四左十四）

【暉鈔】卷上末三十左　初定心所四十六中有三十四。中定有三十三。二定已上至有頂有三十心所也。於欲界五品心中。上界無不善心品一。有餘四品心。此四品心與心所俱生多少准欲界說也。相傳云。馬勝比丘於逝多林入定思惟。擬令諸天等知佛在人中。上問四天王乃至梵天。梵天令還問佛。已四大是色。何界位滅盡。但斷第四定染盡即生無色。即是四大滅盡處。

【麟記】論本第四右十一　初定除不善者。准彼善心有二十二。有覆十八。無覆十二。與欲界同。但無不善一位心也。中定又除尋者。於善心位有二十一。有覆有十七。無覆十一。二定已上更除伺一。諂者。悕其意適其意。謂之諂。諂亦佞也。誑者。惑也。欺也。經說大梵等者。佛昔在室羅筏城。住逝多林時。有苾芻名曰馬勝。是阿羅漢。作是思惟。諸四大種當於何位盡滅無餘。爲欲知故入勝等持。即以定心。於逝多林沒。於四大王衆天出。從定起問彼。答不知。如是欲天展轉相推。乃至他化自在天所。彼復仰推梵衆。欲往梵世入勝等持。復以定心。自在宮沒梵衆天出。從定而起還作上問。梵衆咸曰。我等不知。彼推大梵。馬勝尋問大梵王。云云如章。矯亂者。謂假作誑惑也。說文擅稱上命

曰矯。六地中起無漏道者。謂無漏能斷自上地染故。依六地皆得斷第四禪染。以未離下染不得上根本故。所以不依無色起無漏也。空處近分起有漏道者。以有漏道依近分地離次下染故。唯空處近分離第四禪染也。是四大種無餘滅位者。舊云。謂於此等地起道。斷第四禪地煩惱盡時。諸四大種究竟離繫。無餘滅位。解云。准此但約離繫名滅。又解。色既離縛生於無色不受色身。名無餘滅。二說並非要入無餘涅槃方名滅也。

從此第三明相似殊。此有兩段。一明無慚等。二明尋伺等。且初明無慚等者。論云。今次當說於前所辯諸心所中少分差別。無慚無愧。愛之與敬差別云何。頌曰。

無慚愧不重　於罪不見怖　愛敬謂信慚　唯於欲色有

釋曰。無慚愧者。標也。不重者。釋無慚也。不重賢善名爲無慚也。謂於諸功德及有德人。無敬無崇無所忌難無所隨屬說名無慚。即是恭敬所敵對法。言功德者戒定慧功德也。有德人者具戒定慧人也。無忌難者無畏懼也。不隨屬者不作弟子禮也。於罪不見怖者。釋無愧也。謂諸善士所呵厭法說名爲罪。於此罪中不見能招可怖畏果說

名無愧。此中怖言顯非愛果能生怖故。有餘師說。於所造罪自觀無恥說名無慚。觀他無恥說名無愧。慚愧差別翻此應知。謂翻初釋。有敬有崇有所忌難有所隨屬說名爲慚。於罪見怖說名爲愧。翻第二釋。於所造罪自觀有恥說名爲慚。觀他有恥說名爲愧。愛敬謂信慚者。釋愛敬差別也。愛卽是信。敬卽是慚。愛謂愛樂。體卽是信。然愛有二。一有染汚。二無染汚。有染謂貪。如愛妻子等。無染謂信。如愛師長等。此頌言愛者取第二愛也。有信非愛。謂緣苦集信。忍許故有信。可厭故非愛。有愛非信。謂諸染汚愛。由起貪是愛。染汚非信也。有通信愛。謂緣滅道信。忍許故生信。可欣故有愛。有非信愛。謂除前相。敬謂敬重。體卽是慚。如前解慚謂有敬等。有慚非敬。謂緣苦集慚。生恥有慚。可厭非敬。有通慚敬。謂緣滅道慚。恭敬有慚。可欣有敬。唯於欲色有者。三界分別。如是愛敬欲色界有。無色界無。問。豈不信慚大善地法。無色亦有。答。愛敬有二。一謂緣於法補特伽羅。緣

法愛敬通三界有。此中意說緣補特伽羅者故。欲色有無色界無。補特伽羅此云數取趣。謂數取諸趣也。（冠註論本第四十六）

【暉鈔卷上末二十左】疏云於功德。以無敬等四共釋於有德人。亦以四共釋於功德。或於功德無敬。於有德人無崇。於功德無所忌難。於有德人無所隨屬。或可於功德無敬無崇。於有德人無所忌難無所隨屬。功德及有德人是無慚境也。現當二世惡果是怖境。能生心所怖故。今喚罪名怖。因罪受怖果名也。問。若見因果不怖即是惡慧。慧有見故。若不見因果不怖是無明。何關無愧。不怖因果。答。無愧行相別有體性。與惡慧及與無明為因生無明惡慧。推功歸本。故言無愧不怖因果也。問。自觀不觀他。如何無慚愧俱時起。答。就勝說。觀他時非不觀自。觀自時非不觀他。故得俱起也。

【麟記論本第四十二右】無敬無崇者。或別別配各約其一。謂於德不敬。於人不崇。於諸功德無所忌難。於有德人無所隨屬。此中怖言顯非愛果者。謂因受果名。以不善果能生怖故。故名為怖。惡果有二。一是現果。謂譏謗打罵等。二異熟果。謂三惡道等。今此無愧與無明邪見為因。今雖見而不怖。或不見彼怖。自觀無恥者。謂自觀身先世善業感得人類。而不慚此上造過惡。觀他可知。若爾不可一時俱觀二境。此二如何俱起。解云。不說此二一時俱起。然有無恥。觀自時勝說名無慚。復有無恥。觀他時增說為無愧。謂約勝說故不相違。愛即信者。且是總相。如下亦有愛非信也。謂與欣相應信名之為愛。即是愛樂可欣上法。貪染前境亦名為愛。由此愛妻

子是染著愛。愛師長是信樂愛也。染汙故非信者。信是淨。此既染汙故非信也。非信愛除前相者。如緣苦集不忍許時。有說。信者忍許有德。由此爲先方生愛樂。故信非愛。有說。敬者有所崇重。由此爲先。方生恥。故敬非慚。論中愛敬有無復爲四句。有愛無敬。謂於妻子共住門人等。有敬無愛。謂於他師有德貴人等。有通愛敬。謂於自師父母伯叔等。有非敬愛。謂除前相。言意說補特伽羅者。此中約人。不約法明。以欲色界有色身故。有尊卑故。相貌顯故。可得相望有愛有敬。無色不爾。故在彼無。

從此第二明尋伺等。論云。如是已說愛敬差別。尋伺慢憍差別云何。

頌曰。

尋伺心麤細　慢對他心擧　憍由染自法　心高無所顧

釋曰。尋伺心麤細者。尋謂尋求。伺謂伺察。心之麤性名之爲尋。心之細性名之爲伺。復有別釋。尋伺二法是諸語言行。故契經言。要有尋伺方有語言。非無尋伺此語言行。麤者名尋。細者名伺。語言行者是語言因也。慢對他心擧者。慢謂對他心自擧性。稱量自他德類差別心自擧恃陵蔑於他故名爲慢。憍由染自法者。自法謂自身色力等

法也。謂憍染著自法爲先令心傲逸無所顧性。論云。有餘師說。如因酒生欣擧差別說名爲醉。如是貪生欣擧差別說名爲憍。是謂憍慢差別之相。已上兩段不同總。是第三明相似殊竟。（冠註論本第四左十七）

【暉鈔】卷上末三十二右　辯二別意者。尋伺同分別。慢憍同高擧。行相既同。體應不別也。問。尋伺行相麤細互相違。如何一心俱起。答。如蘇在水上。由下水。上日照。有凝釋二色。凝釋二色互相違二色得俱時生。尋伺麤細互相違何妨俱時起。若然者蘇體非凝釋。由水日有凝釋。亦應尋伺體非麤細。尋伺別有麤細因。正理釋云。如水與醋等分相和。但覺醋味不覺水味。非無水體。由醋用增。尋增伺用損。伺增尋用損。二中增者卽喩醋。又如貪癡同時有體。許俱時生而得說爲有貪不名有癡也。諸語言麤者因中尋用强。細者因中伺用强。二體同時有也。慢唯方他。憍唯自傲擧也。

【麟記】論本第四十三右　尋伺心麤細者。問。尋伺是心所。何言心麤細耶。答。與心相應。非體卽心。言心麤細者依主釋也。問。麤細相違。如何一心二相應起。有作是釋。如冷水上浮以熟蘇。上烈日光之所照觸。蘇因水日非釋非凝。如是一心有尋有伺。心由尋伺不過細麤。故於一心俱有作用。若爾麤細相待而立。上下相形乃至有頂應有尋伺。此經部難。尋伺是假故有此難。有頂望滅定尚名爲麤。故有別釋。是語言行。若准經部及論主。不許一刹那同起。故論主云。由是應知。尋伺二法定不可執一心。

相應。婆沙又云。有執。從欲界乃至有頂皆有尋伺。如譬喩者。慢者。稱量自他。德類差別者。謂稱量勝劣。若實不實並名爲慢。舊云。此中亦應稱量種姓。略而不論。陵者。蒼頡篇侵他也。蔑者。杜預。注左傳云。蔑無。說文云。相輕易。憍者。正理云。於自勇健財戒慧施等法中先起染著。心生傲逸。於諸善本無所顧眄。故名爲憍。傲廣雅云。傲慢也。不敬也。逸縱也。

從此第四明衆名別者。論云。然心心所於契經中隨義建立種種名相。今當辯此名義差別。頌曰。

心意識體一　心心所有依　有緣有行相　相應義有五

釋曰。心意識體一者。集記名心。謂能集起三業事也。思量名意。了別名識。復有釋言。淨不淨界種種差別故名爲心。淨者善也。不淨者惡也。界者體也。即此爲他作所依止故名爲意。即此者即此心也。將所依義釋意也。作能依止故名爲識。識能依意也。據上兩解。是心意識三名義雖異。其體一也。心心所有依有緣有行相相應義有五者。此釋心心所法更有四名。義雖有殊體還一也。一名有所依。謂心心所皆名有所依。託所依根故。所依根者眼等六根也。二名有所緣。取所緣境故。所緣境

者色等六境也。三名有行相。謂同有一行相也。如緣青境心及心所。皆帶青上影像。此識上相名爲行相。行謂行解。卽能緣心也。相謂影像。卽行上相也。行解之相名爲行相。依主釋也。心與心所皆有青相。青相雖多同一青故名同有一行相也。或名有行相。論云。卽於所緣品類差別等起行相故。解云。品類差別者境非一也。等起者心心所齊等起也。四名相應。等和合故。等和合者謂心心所五義平等故說相應。一所依。二所緣。三行相。四時。五事。皆平等故。時等者謂心心所同生住異滅時故。事等者事者體也。一相應中如心體一。諸心所法各各亦爾。無兩受等共相應故。上來不同總是第一明心所竟。(冠註論本第四十九右)

【暉鈔】卷上末三十二左　梵云質多。此云心。是集起三業及心所義。梵云末那。此云意。是思量義。前心所思卽造作義與此別也。梵云毘若南。此云識也。有所依者。心心所同有六根爲所依。諸言同一所依者。古人云。意識依意根。五識依五色根及意。卽五識有二所依。如何言同一所依。理實有二。且據六識各依自根說同一所依也。寶云。不然。同一者。心王心所兩法。同一刹那共依眼根名同一。據心王心所同一刹那不相離名同一。不取一箇所依名同一也。同一所緣者。雖心心所許緣多

境生。且據緣一色境名同一所緣。實云。亦是心王心所。同一念不相離名同一。設緣多境亦不相離名同一。不據一色名同一也。同一行相者。雖心心所緣多境生起多行相。且據緣一色一行相說。寶云。設心王作十種行相。心所亦然。今據心王心所所依所緣行相不相離名同一。不據依一根緣一境起一行相名同一也。

【麟記】論本第四十三　衆名別中。初釋心王衆名。後通釋心心所衆名。集起名心者。梵云質多。此云心也。是集起義。謂由心力引諸心所及諸一切所作事業。如樹之心集起皮膚及枝葉等。梵云末那。此云意。是思量義。以心能思量故。梵云毘必二反若南。此云識。是了別義。謂心於境能了別故。淨不淨界種種差別者。界是性義。因義。淨不淨界品。緣境差別。作種種因差別不同。故名爲心。如一樹心與大小枝葉種種不同而爲界性。上釋心王。有三義故。立三種名。其實體一。次心心所總有四品相。謂影像者。謂行緣心上起品類相。如鏡照物。如其物類於鏡面上有種種像差別之相。此與心法不即不離。非如像色與鏡不同。青相雖多同一青者。謂受想等諸心所。各各帶青相。故言雖多。然皆同是一青相故。或名有行相者。問。前既言有行相竟。今復何言或名有行相。釋此應是引論證成前義。然少不便。四名相應者。此第四名。總攬前所依等三及後時事二種。五義共爲此名也。

從此大文第二明不相應行。於中有三。一總標名數。二別牒解釋。三諸門分別。且初總標名數者。論云。已說心心所廣分別義。心不相應

行何者是耶。頌曰。

心不相應行　得非得同分　無想二定命　相名身等類

釋曰。頌言二定者。無定滅盡定也。相者四相也。名身等者等取句文身也。總有十四。一得。二非得。三同分。四無想果。五無想定。六滅盡定。七命根。八生。九住。十異。十一滅。十二名身。十三句身。十四文身。此十四種體非心所。不與心相應名心不相應。五蘊門中是行蘊攝。故名心不相應行。（冠註論本第四二十右）

【暉鈔】卷上末三十三左　心不相應行者。心不相應簡心相應法。行即簡色及無爲法。不在行蘊攝。此疏釋云。不與心相應名心不相應。即有色法及無爲難也。相名身等類者。此論釋十四不相應皆是流類。正理論中。更有和合性。在十四外。是此十四之流類也。

【麟記】論本第四十四左　頌言類者。舊云。類即謂流類。即十四種類不同。案此論中但有十四。若依正理加和合性。故彼云。及和合性。即十四外加也。問。此論不說和合性。何攝耶。答。衆同分攝。謂受戒時得和合同分。破僧時捨。問。破僧不和合即是非得。何妨僧和合以得爲體。答。夫論其得。必有所得。和合無所得故體非得。新云。此但是略而不說。非謂所明之外更無。如心所

中不說怖等攝在類中。故依正理加和合性。非是兩論意有相違。心不相應行者。廣應云非色非心不相應行。今但略言心不相應行。亦得簡諸法盡。言不相應簡一切心心所法。言行簡色及無爲法。以彼非行蘊故。由是諸論多存略名。

從此第二別牒解釋。於中有七。一明得非得。二明同分。三明無想。四明二定。五明命根。六明四相。七明名身等。就初第一明得非得中復分兩段。一明自性。二明差別。且初明自性者。論云。於中且辯得非得相。頌曰。

得謂獲成就　非得此相違　得非得唯於　自相續二滅

釋曰。上兩句明自性。下兩句明所依。得謂獲成就者。釋得自性。得有二種。一獲。二成就也。獲中有二。一未得今獲。二已失今獲。故論云。未得已失今獲。解云。未得今獲者。如未得戒今受得戒。創至生相將成就。故名爲今獲。已失今獲者。如先坐定遇緣便捨。定名爲已失。後重修得。創至生相將成就。故名爲今獲。言成就者先未得法今時

已得。先已得者今復不失。此所得法流至現在名爲成就。故論云。得已不失名爲成就。故知獲時不名成就。成就時不名獲也。非得此相違者。釋非得自性也。應知非得與此相違。謂若有法先未曾失。及重得已但今初失。此法非得創至生相名爲不獲。流入現在名爲不成就。故知不獲時不名不成就。不成就時不名不獲。（冠註論本第四二十左）

【暉鈔】卷上末三十三左　釋疏分二。一釋頌文。二引婆沙釋得非得。疏云此所得法至現在世名爲成就者。此古人釋。取所得法體入現在名成就。又釋。得未來有三類能得及兩類非得各別住。寶云。未來得即一。三世起不定分法前等。所以下論文。以法俱得三世起不定非俱有因。取本法上能得得名得及成就。若古人取所得法名得成就者。即得應隨所得法是色心等法。不應是不相應行法。又非得及不成就法不生不入現在。如何立非得不成就也。正理論釋云。有法。無始來未曾得。今初得名得。先無始來曾得已捨。今再得名成就。不名得也。非得不成就准此應知。獲時不名成就者。問。獲時即名成就何妨。答。即有一身亦凡亦聖過。如世第一法。現在身即成就凡位。未來苦法忍上法前得在身成就聖法。若成就之時即是得者。即應成就凡法亦成就無漏法。凡聖不辯也。

【麟記】論本第四十五右　得成就者。泛明得義有總別不同。總者獲及成就皆名爲得。別者獲時不名

成就。成就時不名獲。故知得名是總。獲及成就是別。又得至生相名得。至現在名成就。此卽得名亦是別也。故正理云。得獲成就義雖是一。而依異門說有差別。又抄云。成通新舊。得唯據新。成就而攝得。得不攝成就。依上所說。或總或別。非得翻得准說可知。若望同類卽唯初刹那生相名得。最後刹那滅相名捨。爾時非得至生相故。於其中間。雖復念念至其生相。然此類法恒名成就。非今獲故不名爲得。若別望刹那三相前後論者。生相定獲。此時名得。至住異相名爲成就。至滅相位方名爲捨。落謝過去名不成就。問。所以最初至生相不名成就者。答。以彼身中猶成就非得故。非得准說。

得非得唯於自相續二滅者。釋得非得所依也。自相續者自卽簡他也。相續是身簡非相續。非相續者非情是也。唯於自身有得非得故。論云。非他相續。無有成就他身法故。非非相續。無有成就非情法故。言二滅者擇滅非擇滅也。無爲法中唯於二滅有得非得。謂若修道證擇滅時擇滅上有得也。不證時擇滅上有非得也。緣闕位中得非擇滅。故非擇滅上有得也。緣會時不得非擇滅。卽非擇滅上有非得也。故於二滅有得非得。論云。一切有情無不成就非擇滅者。皆有緣闕。除初刹那

具縛聖者。及餘一切具縛異生。諸餘有情皆成擇滅。初刹那聖者苦法忍是也。煩惱未斷名具縛聖。此聖者無擇滅也。諸餘有情者一切聖人也。決定無有成就虛空。故於虛空不言有得。以得無故非得亦無。宗明得非得相翻而立故。已上論文。（冠註論本第四二十左）

【暉鈔】卷上末三十四左　若成就他身法即有五趣雜亂過。若成非情即有壞法性雜亂過。不爲情非情收也。問。如輪王成就七寶。豈即成就他身及非情耶。答。輪王約過去造相繫屬業感得七寶。七寶假設爲得成就。非是得成就也。除初刹那具縛聖者。即是先凡位未斷惑。入見道至苦法忍未成擇滅。此除不取。若先六行斷惑。入見道至苦法忍初心即成擇滅也。諸餘有情者。一即苦法智已去聖人。二即先凡位斷惑入聖至苦法忍。三凡夫六行斷惑者皆成擇滅。虛空不同擇滅道證。不同非擇滅闕緣。顯得非得皆無也。由無漏法上有得故。聖者起世俗心不名凡夫。以有聖法上法前後得在身也。問。虛空無得應立非得。答。以得無故。非得亦無也。宗明得非得相翻立者。此釋無得處非得亦無也。既翻大得立大非得。何不翻小得立小非得。答。若就別義。相翻即得有小非得。若大非得上即不得有小非得。若有小非得即過如後述。

【麟記】論本第四十五左　次依章釋。不成他身者。若成他身便五趣雜亂過。謂或人成鬼畜等法。應名鬼畜故。若成就非情。即共成有爲過及無情不定過。壞法性故。解云。有爲法不許共成。今若成者。一切人

皆成就。即共成之過。無情不過者。謂若成就非情。即此有情爲是有情爲是無情。已上。若爾何故經說。茲錫當知。有轉輪王。成就七寶。乃至廣說。解云。此有部意。於寶得自在名成就。非有得也。准經部宗。唯立種子。不許實得。非如色等現可得故。論有相破。解云。七寶中輪珠等是非情。臣女等是他身。既成七寶。明知亦成他身及非情。此經部難也。論答云。謂轉輪王於彼七寶有自在力。隨王轉故。已上。唯於二滅有得非得者。簡虛空也。皆有緣闕者。謂一切有情無始時來。必有無邊緣闕不生法故。故對法中云。誰成就無漏法。謂一切有情。即是非擇滅也。除初剎那具縛聖者。初剎那言簡第二念。具縛之言簡先離染。或此一句直標當位。通簡餘類。及餘一切具縛異生者。以具縛異生未斷惑故。未成擇滅故須除也。諸餘有情者。即前所除之外苦法智位已去。及先離染苦忍聖人。兼餘一切斷惑異生。此等諸類皆成擇滅。名爲餘也。章中言餘有情謂一切聖人者誤矣。論文既除具縛異生。明知不具縛者即是所取。無有成就虛空者。以虛空非礙法不生。故不同非擇滅。非道力引。故不同擇滅。故無得也。正理抄云。虛空非心所引故。不相違內起故。

又依大毘婆沙一百五十八云。得有四種。一與彼法俱。此是法俱得。亦名如影隨形得。二在彼法前。此是法前得。亦名牛王引前得也。三在彼法後。此是法後得。亦名犢子隨後得。四非彼法前後俱。謂無爲上得也。其所得法則有六種。一有所得法唯有俱得。如異熟生等。二有所得法唯有前得。如三類智邊世俗智等。有說。此等亦有俱得。應在第四類攝。解云第四類者是第四所得法通俱得前得也。

三有所得法唯有俱得後得。如別解脫戒等。四有所得法唯有俱得前得。如道類智忍等。五有所得法具有前後俱得。如所餘善染等。六有所得法不可說有前後及俱。而有諸得。謂擇滅非擇滅法。解云。第一異熟生等等取威儀工巧。非數習者。及有覆無記色等。此等諸法勢力劣故唯法俱得。第二三類智邊世俗智等等取相應心心所也。謂入見道至苦集滅三類智邊能修未來俗智。起法前得得之。此言修者是得修也。謂見道是無漏。俗智是有漏。故於見道俗智不起。勝緣闕故得非擇滅。解云。勝緣者是俗智所依身也。在見道中唯有見道所依身無俗智所依身故勝緣闕耳。俗智既畢竟不生故無法俱法後得也。問。何故三類智邊能修俗智非道類智耶。答。二義故修。一有事現觀故。謂世俗智於無始來曾知苦斷集證滅。今三類智亦知苦斷集證滅。與世俗智同爲一事故能修俗智。第二當諦事周故。謂於三諦可遍知苦可遍斷集可遍證滅。當諦事周兼修俗智。於道類智不修俗智者。一俗智於道中曾無事現觀故。

二無遍事現觀故。謂必無於道可能遍知可能徧修。種性多故。問。何故於三諦有遍聲非道諦耶。答。以其能知一切苦斷一切集證一切滅而無能修一切道。佛亦於道得修習修俱不盡故。故無遍聲。第三別解脫戒等等取惡律儀等也。別解脫戒是有記。故通法後得。即是戒在過去現在起得成就不失也。此別解脫戒不隨心色。勢微劣。故無法前得。第四道類忍等等取相應心心所也。謂道類忍是向道攝。至道類智是果道攝。得果道中捨向道故。故道類忍無法後得。第五所餘善染等等取通果等無記也。除前四類外名所餘也。勢力强。故通三種得。第六擇滅非擇滅法。非三世攝故不可說前後及俱。而有諸得謂證擇滅時擇滅上有得也。於緣闕位非擇滅上有得也。問。現在道類忍如何得有法前得耶。答。現在道類忍雖復唯有法俱得。未來道類忍即有法前得在現在世。今言現在忍有法前得者約忍種類說。以所得法據種類說故。又解。此現在忍雖唯法俱。脫不現前即有法前。約容有說言

現在忍有法前得。又解。此現在忍雖唯法俱而無法前。由此現在忍有法前得在未來世。此未來得約世橫望實在現忍後。而名法前不名法後者。謂由此得不起即已。起必在彼現在忍前。約容起用說有前得。（冠註論本第四二十四左）

【暉鈔】卷上末三十五左　下第二引婆沙分二。一引婆沙釋得。二引婆沙釋非得。前文分二。一釋能得之得。二釋所得法。中分二。一引文。二疏釋。釋非得引婆沙文。准此科也。異熟生等者。等取威儀工巧非數習者及自性無記有覆及無覆無記色。有覆色者。即初定梵王起貪等煩惱引身語二業。二定以上即無。無發業心故。欲界身邊見有覆性。不能發業。如下釋。勝緣闕故者。謂世俗智無始來曾作六行斷惑。今三類智亦斷惑。在未來合有一類俗智所依五蘊與三類智所依五蘊。同刹那生入現在。由世第一法強等無間緣引三類智所依身先入現在。俗智所依身不得生。所依身既闕。現在世體不生。俗智闕所依身亦不生也。又解。未來俗智與三類智合同刹那起依現在五蘊身。彼三類智先生依現身。俗智即闕現在身為所依。名勝緣闕也。有事現觀故者。俗智雖與三類智漏無漏不同。同作斷惑事故。二當諦事周者。謂三類智知三諦事周也。無事現觀故者。即漏無漏別故也。二無遍事現觀故者。道類智知道不遍。種性多故者。釋上修道不遍所以也。一三乘種性互不相修。二就聲聞種性中有六種性。亦互不相修。三就六種中退法種性中有九品種性。不俱時修。名種性

多也。問。俗智既不生。如何與三類智同時有法前得。答。如萬人軍同收郡邑。半人已死。勅命齊賜官品。雖萬軍死生有別官品卽齊。俗智與三類智同斷惑。生與不生卽別。有能得得卽齊也。別解脫戒等。卽八衆無表。等取惡無表兼處中無表及善惡表色。對二定也。道類忍等等取第二果第六無間第三果第九無間金剛喩定及與此等同時得四相道共戒大地十大善十尋伺心王也。第五取一切定。餘除道類忍一念及第二果第六無間道及第三第四果第九無間道餘一切散善一切染法及通果無記全威儀工巧少分取數習者。現忍如何有法前得。此問現在一念道類忍上如何有法前法俱二得。答初將二世道類忍上得答。約現在未來所得法體同。未來道類忍上法前得與現道類忍上法俱得同現世。名現忍有二得也。破云。豈有問現忍上得將未來忍上得答。破第二解云。豈有入現在已有法俱得了。却不入現在。有法前耶。第三解。取未來衆多未起法前得卽是現在道類忍法前得流類。破云。設三類得。未來法前得起未盡。亦不可將配現在一念道類忍上法前得也。寶法師釋云。現忍未起已前有法前得。此忍現行卽有法俱得。未來未起衆多道類忍亦容有二得。今約現在世一念忍能引二得生。名現忍有二得。非是二得同念起也。

【麟記】論本第四左十六　上依此論已辯體相。下依婆沙明得差別。就中初明得。次明非得。言非彼法前後俱者。以無爲無生故。不可說得在前後及俱時起也。上約法辯得。但有四種。下就得辯法。但得不同。卽有六種差別。有說此等亦有俱得者。此意說。智雖畢竟不起。而與其得同在未來故有俱得。等取威儀工巧非數習者。謂慣習者。如馬勝之威儀。妙業天子之工巧。卽有三得故須除也。及有覆無記色者。謂有覆心通三種得。意簡心等故言色也。此色如初禪身語表是。修是得修者

者。下文明修總有四種。一得修。二習修。三防護修。四除遣修。善有爲法有初二修。今此智體不起。非是習修。但起得得是得修也。餘如下明。問。所以智體不起者。答。見道無漏。俗智是有漏。漏無漏二心不可俱故不起也。唯有見道所依身者。謂無漏依身細。有漏依身麤。今既在見道故。唯有無漏所依身。無有漏依身。依身既無勝緣乃闕。故此俗智永不得生。有事現觀者。謂此俗智與三類智。知苦斷集等事是同名有事現觀。第二當諦事周者。謂三類觀。其當諦事周。兼得修俗智也。問。非想地修惑未斷。卽是未遍斷集。未遍證滅。云何名周。答。今雖未遍。後當遍故。不同於道至無遍義。由此言當諦事周也。至下廣明。起法前得得之者。卽三類智邊世俗智起法前得得彼智也。於道諦中曾無事現觀者。謂無始來未曾得無漏故。一無遍事現觀者。謂三乘及利鈍等差別不同。不可遍修故。於三諦有遍聲者。謂於三諦可有遍之言聲也。佛亦於道得修習修俱不盡者。謂佛則不修二乘之道。既不修亦不起得。故得習二修俱不盡也。佛得尚不盡。況餘人哉。不隨心色勢微劣者。謂定道是隨心轉戒。勢力强故有三種得。今別解脫不隨心轉。勢力微劣故無前得。現在道類忍如何有法前得者。謂此類忍無始未曾習故。又此類忍若有前得。應道法智時已成彼忍故無前得。既無前得。今何言有。故興此問。理實現前諸忍智皆無前得。良以道類忍無法後得。自爲一類。因標此忍有前得故。乘而起問。餘諸忍智雖無前得。文不標擧故不問也。約種類說者。謂未來現在世雖不同。而忍是同。故約現忍雖無前得。通未來說卽有前得。問。未來何故卽有前得。答。已有初念忍起竟。後念卽有前得也。但遮初念實有法前得。不遮後念也。第一解言脫不現前卽有前得者。謂此諸忍在未來時。起用無定前後。今由初念前起卽無前得。脫然不起住在未來卽有

前得。約容不起有前得故。故言脫不等。第三解言有法前得在未來世者。此意謂未來諸法雖復雜居。前後得種性恒定。由忽遇緣。卽起至現。其法前得仍在未來也。據世横望實是現後者。謂約三世横望。未來實在現在之後。合名法後。良由此得性是法前故。今雖在後亦名法前也。（竪上下名縦。傍前後名横也。）然此三解並是舊解。若依新解。但約容有。同第二說。破初三釋。繁而不具述。

又婆沙一百五十八云。一切非得總有三種。一在彼法前。二在彼法後。三非彼前後。所不得法亦唯三種。一有所不得法唯有法前非得。謂未來情數畢竟不生法。及入無餘涅槃最後刹那心等。（等取相應心所及無生智也。）二有所不得法通彼法前法後非得。謂餘隨應有情數法。三有所不得法無法前後而有非得。謂擇滅非擇滅法必無非得可與法俱。以法現前是所得者必有得故。非所得者無得非得。亦無唯有法後非得。非無始來恒成就彼未捨必起彼類盡故。解云。第一未來情數畢竟不生法者。謂是三類智邊所修俗智也。此世俗智不通過現故言未來不是非情名爲情數。得非擇滅名畢竟不生。見道已前此世俗智常有非得名法前非得。三類智後常有得起更無非得也。及入無餘最後心者。謂

未來有一類異熟威儀心作入涅槃心。此心未起常有非得。非得此心名法前非得。此心起已必入涅槃。便同非情故無法後非得。無所依故。又無生智未起已前常有非得名法前非得。此智起已必定不退故無法後非得也。非無始來恒成就彼未捨。必起彼類盡故。者此十六字爲遮非想見惑難故。謂唐三藏譯婆沙了。有人以非想見惑難三藏言。合唯有法後非得。其難意者。非想見惑無始來成無法前非得。見道斷已畢竟不退。於過去見惑理應合有唯法後非得。何故無耶。故三藏於婆沙加一十六字。爲通此難。其十六字意者。謂非想見惑未斷已前名爲未捨。於未捨位必無有人起未來非想見惑入過去盡。以未來見惑種類無邊起不盡故。及入見道斷見惑時。於未來非想見惑即有法前非得故。過去非想見惑約種類說。不可唯有法後非得也。（冠註論本第四二十七左）

【暉鈔】卷上末三十七左　必無非得可與法俱下。破古論。此總破。以法現前下。立理。非所得者。即外非情他身虛空無爲得非得俱無。非無始來下。實法師難唐三藏也。未來俗智合與見道同時生。未至闕緣

不生時常有法前非得也。無所依故者。入涅槃無所依身故無非得也。前五無學未得無生智常有非得。練根後得無生智。有得替非得也。寶法師云。初以過去非想見惑難三藏。前引婆沙文所不得法有三句。今更有第四句唯法後非得。非想見惑已入過去者。是唐三藏依難便立第四句。第二遍以未來未起見惑難。如非想見惑無始來成就。未以見道斷名未捨。必起必無起得未來見惑入過去盡者。所以遮言非。意云。無此道理。若起得入過去盡。即可言唯法後非得。既無此理。即是見道現前。攝過未二世見惑斷。望過去即法後非得。望未來即法前非得。即是前婆沙三句中第二句收也。問。本法大小二得及非得安立如何。答。如大得得本法。小得即得大得屬身。若失本法時。即非得不得本法。有大得得非得。有小得得大得屬身。大非得上若有小非得。即失却大非得。應失無表戒時。非得不屬身應不失戒等。四句分別者。一得上有得。即大得上有小得。二得上有非得。即捨大小二得有非得生。三非得上有得。如以大小二得得非得。四非得上有非得。即捨非得時有非得生也。

【麟記】論本第四十八左　　次明非得亦有二相。初約法辯非得。次約非得辯法。非所得者無得無非得者。即如虛空及非情等非是所得之法。無得亦無非得。三類智邊俗智者。問。前言俗智唯有前得。今此復言唯有非得。豈不相違。答。前約在現觀邊故有前得。今約類智之前故有非得。以時異故各不相違。異熟威儀心作入涅槃心者。謂此二心性微劣故。順入涅槃故。若通果工巧二心以性強故不順入涅槃也。無所依者。謂入無餘後。身智俱滅無復所依也。無生智常有非得者。問。何故不言盡智耶。答。盡智有退。容有法後非得。無生智無退故。更無法後非得。故不言盡智。有人以非想見惑難

三藏者。即寶法師難也。其難意者。謂向在非得但有三句。無第四唯有法後非得一句。今難令應有之。難詞如章。十六字言非無始來等者。此非字句下連續即可解也。謂但非其未捨必起種類盡等。不非無始來成。良由難詞言無始來等故。今具牒彼難詞總非其難。故置非字在上釋。言約種類說者。謂過去見惑雖唯有法後非得。今辯未來者。合說即通法前非得也。以未來過去同是彼見惑故名種類也。若准新解與此不同。彼唯約一念以論。不約種類說故。彼云。應言以不定故容有二種非得。以非想地過去見惑於煩惱未起之前皆容入聖。若此煩惱前便入見道。即此煩惱便有法前非得。若作此釋。即同自餘通二非得。由不得此意。彼將過去見惑難應成四句。通難不得。遂改婆沙以為四句。今長安兩本流行猶作四句。於後數年重改論文云。唯有三句。遂加文遮難。非無始來等一十六字。尚不得婆沙本意。由未盡理。問。所以唯將非想惑難者。答。以餘地煩惱曾數斷故。中間斷時。在未來者即有法前非得也。若爾非想修惑無始來成。何不為難。解云。非想修惑斷容有退。既復更起。明知當時種類不盡。其未來者即有法前非得故。皆不約彼為難也。

從此第二明差別。於中有二。一明得差別。二明非得差別。就初明得差別中文復分二。一正辯差別。二隨難別解。且初明正辯差別者。論云。已辯自性。差別云何。總問。且應辯得。別問。頌曰。

三世法各三　善等唯善等　有繫自界得　無繫得通四

非學無學三　非所斷二種

釋曰。三世法各三者。三世門也。三世法得各有三種。謂過去法有過去得。有未來得。有現在得。如是未來及現在法各有三種得。且過去法有過去得者。或是法前。或是法俱。或是法後。此約能得與所得法。今時同在過去世也。然過去法唯有一得。如過去世異熟生等也。或有二得。如過去世別解脫戒等。有通三得。如過去世道共戒等也。若一得若二得若三得。皆名過去法中過去得也。故過去得通三種得。宜善思之。過去法家現在得者。如別解脫戒。落謝過去現在不失起得得之。此即法在過去。得居現在。得居法後故。過去法家現在得者。唯法後得也。過去法家未來得者。謂法過去。得在未來。此未來得名法後得。據世橫望。雖皆法後。若約起用先後。未來亦有過去法家法前得也。如過去世道共戒等。有法前得已謝過去。其法前得種類衆多起。未盡

者仍在未來得。此未來得不起卽已。起必在彼過去法前得。故過去法未來得者亦有法前得也。宜善思之。現在法家過去得者。唯法前得。現在法中現在得者。唯法俱得。現在法家未來得者。名法後得。據世橫望雖皆法後。若論起用前後。未來亦有現在法家法前得也。准過去說。宜善思之。未來法家過去現在得者。唯法前得。未來法家未來得者。或法前。或法俱。或法後。未來雖無前後次第。約得種類別。約容起用說前後也。（冠註論本第四右三十）

【暉鈔】卷上末九右三十　約得種類者。卽是未來世有三聚得。不雜故有前後及俱得也。

【麟記】論本第四右二十　三世法各三者。此有二義。一三世得各三種。不據有法前後。雖是法前仍名未來。雖是法後仍名過去。二者法前後俱三得。不據世別。雖是過去仍名法後。雖是未來仍名法前。今此中言三世各三者。是據三世分得爲三。不據法前後也。過去得或法前後者。且如過去世有一念心。橫望今日。已前所有得起。若在法前法俱法後皆名過去也。如過去異熟生等者。等取威儀工巧。非數習者。言現在得者。卽望今日現起剎那名現在得。此剎那後所有法得名未來也。據世橫望。如上所釋。此是舊義。自下同然。若依新解未來無過去法家法前得。以得本性無定。以

但隨現起說前後故。不得約性定未來許有過去法家法前得也。約得類別者。約前後性類別言前後也。約容起用說者。謂今時雖同世未有前後。約起用時有前起者說爲前得。後起者爲後得。

善等唯善等者。三性門也。善等者所得善法也。等等取不善無記法也。唯善等能得得也。等取不善無記得也。謂善不善及無記法如其次第有善不善無記三得。（冠註論本第四三十左）

【暉鈔】　闕之

【麟記】論本第四二十右　如其次第有善不善無記三得者。此謂善法有善得。不善法有不善得。無記法有無記得。其三性法得與所得法雖是同性。然得起時所由卽異。故婆沙云。得有三種。一有爲法得。二擇滅法得。三非擇滅得。有爲法得隨所得法性類差別。以有爲法能有作用引自得故。若擇滅得隨能證道。以諸擇滅自無作用。由道力求證彼時引得故。若非擇滅自無作用。非道所求。彼得但依命根衆同分起。由此三性之法名自性得。雖得擇滅不由所得。得非擇滅依衆同分等。以道與擇滅同性。同分與非擇滅同性。由此二種雖不由所得。而得必同性故。此三性法必與得同性。此已總明。至下諸門不復重述。

有繫自界得無繫得通四者。繫不繫門也。有繫者三界有漏法也。其有繫法得唯自界。謂欲界法得唯欲界。若色界法得亦色界。若無色界法得

亦無色界。以有漏得隨所得判故。有繫法隨在何界。其能得得與所得同。無繫者無漏法也。無漏法有二種。一有爲無漏。謂道諦也。二無爲無漏。擇滅非擇滅也。得通四者。無繫法上能得得通四種也。謂三界得及無漏得名爲四種。且非擇滅得通三界繫。謂非擇滅得隨命根衆同分判。以命根衆同分通三界繫故。故得通三界繫也。如欲界緣闕得非擇滅。得即欲界繫。若色界緣闕得非擇滅得。即色界繫。若無色界緣闕得非擇滅得。即無色界繫。故論云。非擇滅得通三界繫。若擇滅得色無色界及與無漏。解云。謂擇滅得隨能證道判。若有漏道證擇滅者。其所引得色無色界繫。以色無色有有漏道爲能證故。故擇滅得通彼二界。然於欲界無能斷道。故擇滅得不通欲界。若無漏道所證擇滅。其擇滅得亦唯無漏。隨能證道是無漏故。若道諦得唯是無漏。以道諦得隨所得判。道諦是無漏。得亦無漏也。故無繫法總而言之。得通三界及與無漏四種也。（冠註論本第四三十左）

【暉鈔】卷上末三十八左　一切有漏隨所得判性。以所得法引生故。二滅自無用。擇滅隨道論性。非擇滅又不由道證。隨命根衆同分判性也。若有漏道證擇滅者。若凡夫斷下八地見修合斷。即有八九七十二品惑。斷此惑得七十二品擇滅上得。若初二三果人。以有漏道厭下欣上進斷修惑。亦有七十二品無爲上得。此二類得中。半色界攝。半即無色界攝。若無漏道下者。明無漏道。斷三界見修八十九品惑有八十九品無爲上得。此得即無漏不繫也。若道諦得者。無間解脫各有八十九能得得。亦無漏不繫也。

【麟記】論本第四二十一左　非擇滅隨命根等判者。如前三性門。既與命根同性。今界繫門亦隨命根等判也。道諦得隨所得判者。以道諦是有爲。有爲有餘作用故。得隨所得判也。故無繫法總而言之者。謂二種無爲及道諦得。總說通三界及不繫四種也。

非學無學三者。三學門也。頌言非字流至無學。謂非學非無學也。三者能得得也。謂非學非無學法得通三種。一者是學。二者無學。三者非學非無學。又頌文窄故唯標非學非無學。若依論文三學具明。故論云。若有學法得唯有學。注曰。有學法者有學身中有爲無漏是也。以有學法是有爲故。得隨所得判。故得亦是有學也。若無學法得唯無學。注曰。無學法者無學身中有爲無漏也。以無學法是有爲故。得隨所得判。故得

亦無學也。非學非無學得有差別。謂此法得總說有三。注曰。此文正釋頌也。非學非無學法雖是一。其法上得即通三學。故言得有差別也。非學非無學法者謂一切有漏及三無爲也。已上論文。注曰。以有漏法不可修故。故非有學無學身中法名非學非無學也。若無爲法不可修習令其增長故。亦是非學無學法。且有漏法唯有非學非無學得。以有漏法隨所得判故。能得得亦是非學非無學也。非擇滅得及非聖道所引擇滅根亦如是。注曰。非擇滅得隨命根衆同分判。非聖道得隨能證道判故。此二得亦是非學非無學也。亦如是者。意明得同前是非學非無學也。若有學道所證擇滅得亦有學。隨能證道是有學故。若無學道所證擇滅得亦無學。隨能證道是無學故。故知有漏及無爲法雖是非學非無學法。其能得得通三學也。宜善思之。（冠註論本第四二十左）

【暉鈔】卷上末三十八左　有學及無學法即以有學無學身有爲無漏五蘊爲體。上能得得亦然也。三乘有學身中有爲無漏五蘊法上能得得亦是有學。若三乘無學身中有爲無漏五蘊法上能得得亦無學。隨應

所得判也。有漏及無爲不是前三果四向修名非學法。不是第四果人修名非無學法也。非擇滅上得及非聖道若凡若聖所證七十二品無爲上能得得是。有漏與修惑爲境名修斷也。若有學道所證擇滅者。即三果四向共證八十八品無爲。其能得得隨能證是有學收。若無學道所證擇滅者。即第四果人第九解脫道。一時再得八十九品無爲有八十九箇能得得。亦是無學攝也。

【麟記】論本第四二十左　非學無學三者。此唯標非學法上得通三學也。問。何故但標非學法以明得。答。頌文窄故。又解。以非學法得通三學故別標也。又解。此一頌總擧三學。非者是非學非無學法學者是學法。無學者即無學法也。非學得有差別者。謂前二法得所得更無差別。今此之中。法是非學。得通三學。與法不同名爲差別。有漏法不可修者。謂有漏法有諸過患。但是可斷。寧可修耶。無爲不可令增長者。無爲體常無作用故。不可令長。以有漏法隨所得判者。理實有爲無漏亦隨所得判。今且指此法爲言。以有漏必有作用故。故隨法判。非聖道所引擇滅得者。即世道所證擇滅也。若有學道乃至得亦如是者。問。學人通用二道能斷無所有處已下地修惑。隨用何道各能引起二離繫得既爾。如何說隨道判耶。答。無漏道斷惑雖亦能引有漏得。有漏道雖亦能引無漏得。而非正引。但是兼引。故不互隨二道判。但隨自道。彼能證道雖復不起。然互相修。而由彼力擇滅起得故。各隨自能證道判。若無學道證擇滅得亦無學者。問。無學惑已盡。何有證擇滅而言隨無學耶。解云。無學盡智之時。此道能持離繫得。故隨此道得是無學也。或無學練根唯引勝得。亦名無學道得也。

非所斷二種者。三斷門也。非所斷者謂無漏法也。二種者非所斷法上能得得通二種也。一修所斷。二非所斷。頌文窄故唯標非所斷得。若依論文三斷具明。故論云。又見修所斷法如其次第有見修所斷得。非所斷法得有差別。謂此法得總說有二。此正釋頌文也。有二者修非二斷也。別分別者諸無漏法名非所斷。無漏者道諦二滅也。無漏非見修所斷名非所斷。非擇滅得唯修所斷。及非聖道所證擇滅得亦如是。注曰。此是釋非所斷法得通修所斷也。非擇滅得隨所依判唯修所斷。若非聖道所引得者隨能證判亦唯修斷。故言亦如是也。聖道所證擇滅之得及道諦得唯非所斷。此文釋非所斷法得通非斷也。謂聖道所引得隨能證判。若道諦得隨所得判故皆非斷也。(冠註論本第四二十四右)

【暉鈔】卷上末三十九左　見修煩惱名見修所斷法。此上能得卽隨二惑是二所斷也。非擇滅上能得及有漏道斷惑有七十二品無爲上得。此上二類得與修惑爲境。是修斷。所得法卽非斷也。聖道所證擇滅卽無漏道斷八十九品惑有八十九品無爲上能得得及八十九無間解脫道上得。此得皆是無漏。並非斷也。此上所擧諸法。取上能得得辨二學三斷等。不取法體也。

【麟記】論本第四二十二左　唯標非斷者。又解。非斷通二得故。所以別標也。又解。頌文中具標三斷。非者即非斷。二種見修即二斷也。如其次第有見修所斷得者。以此二法是有爲故。得隨所得法判。亦是見修斷也。總說有二者。謂約二無爲及道諦二法總標說也。別分別者。即非擇滅擇滅等分別也。非擇滅得唯修斷者。以命根同分是修斷故。得亦然也。道諦得同道諦是無漏。故亦非斷。

從此第二隨難別解者。論云。前雖總說三世法各三。今應簡別其中差別相。頌曰。

無記得俱起　除二通變化　有覆色亦俱　欲色無前起

釋曰。無記得俱起者。無記者無覆無記也。謂異熟生全威儀工巧少分。取非數習者。此無記法勢力劣故唯法俱得。法若過去得亦過去。法若未來得亦未來。法若現在得亦現在。除二通變化者。此二通變化是通果無記。有三種得。前言無記得唯俱起故須除也。二通者天眼耳通相應慧也。能變化心者謂十四能變化心也。論云。天眼耳通慧及能變化心勢力强故。加行差別所成辦故。雖是無覆無記性收而有前後及俱起得。有覆色亦俱者。此明有覆無記色亦如無覆無記唯法俱得也。有覆

色者謂初禪有覆煩惱所發身語二色是也。能發煩惱通三種得。所發身語唯法俱得。謂此身語雖有上品。而亦不能發無表故。勢力劣故。由此定無法前後得。欲色無前起者。謂欲界繫善不善色無法前得。唯法俱得及法後得。以欲界色是不隨心勢微劣故無法前得。是有記故通法後得。（冠註論本第四三十五右）

【暉鈔】卷上末四十右　雖有上品而亦不能發無表故者。由有覆心卑劣。從有覆心發身語更劣。此身語不能發無表也。是不隨心勢微劣故者。善惡無表及身語二表色是不隨心色。

【麟記】論本第四二十三右　威儀工巧非數習者。此説心不説色。有覆無記色上無前後得名。況無覆無記。故舊云。若威儀工巧四蘊極數習者亦有前後俱得。自餘一切異熟五蘊威儀工巧通果色蘊及威儀工巧四蘊小分幷自性無記色行一分唯有俱得。數習威儀如佛馬勝苾芻及餘數習者。工巧如毘濕縛羯磨天神及餘善習者。婆沙云。工巧串習如佛妙業天寫等。解云。此並約能發四蘊有三世得。非所發色等。能變化心者。謂神境通。依四靜慮於欲界等處有十四化心。如下當辯。眼耳通及能化心有二義故通三種得。一得勢力強。二加行成。由此具三得也。初禪有覆煩惱所發身語業者。即如梵王行諂誑等。欲界雖有身邊二見。是有覆惑。內門轉故不能發業。二定已上非尋伺。亦不俱發業。故唯初禪。欲界不隨心色者。簡定道隨心轉色。如上已明。除上所辯餘一切不善四蘊及餘一切善五蘊皆

有三得也。

從此第二明非得差別。論云。非得如得亦有如上品類別耶。不爾。云何。頌曰。

非得淨無記　去來世各三　三界不繫三　許聖道非得

說名異生性　得法易地捨

釋曰。非得淨無記者。三性門也。謂非得性無覆無記。淨謂無覆也。（冠註論本第四三十六右）

【暉鈔】卷上末四十右　問。翻得立非得。得隨所得判三性。非得如何不隨所不得法判三性。頌言非得淨無記耶。答。若非得隨所不得法判性者。凡夫聖道應亦不現起。以有聖道上非得在身非得卽是無漏。凡夫成非得。卽是成聖道。應成聖人。又如初果人。有過未二世見惑上非得在身。非得隨惑判性。初果人成見惑。應初果人卽是凡夫。又捨向應成向。退果應成果。斷善應成善。由有如此等衆多過故。不隨所不得法判三性也。問。非得隨命根衆同分判性。此通異熟等流二類中何類攝。答。異熟不遍。隨等流立。卽自性無記收。

【麟記】論本卷四二十左　非得門者。舊云。若准得門。亦應合有三學三斷分別。以初句言非得淨無記故。明知唯是非學非無學唯修所斷故不別說。淨無記者。婆沙問云。非得隨何性類差別。答。彼定

不隨所不得法。以相違故。又不隨道。非道所求故。依命根衆同分轉故。故隨所依性類差別。唯隨等流不隨異熟。以非遍故。問。何故非得不隨所不得法。答。若隨所不得法者。斷善根者應成就善。已離欲染者應成就不善法。無學者應成就染。異生應成三乘無漏法。退果應成果。捨向應成向。由此等過非得不可隨所不得法判。

去來世各三者。三世門也。謂過去未來各有三世非得。若現在法唯有過去未來非得無現在非得。以法現在是所得者必成就故。定無非得。舊云。現在法有非得者此翻謬矣。且過去法有過去非得者。或是法前。或是法後。此據非得與所不得法今時同在過去也。若過去法現在非得者唯法後非得。若過去法未來非得者。據世橫望雖皆法後。若論起用先後。未來亦有過去法家法前非得也。准得說之。未來法家未來非得者。或法前。或法後。未來雖無前後次第。約性類別。約容起用說前後也。未來法家過去現在非得者。唯法前非得也。現在法中過去非得者。唯法前非得也。現在法中未來非得。據世橫望雖皆法後。若約起用先後。未來亦有現在法家法前非得也。（冠註論本第四三十六左）

【暉鈔】卷上末(四十左)　據世橫望者。未來在過去現在後名法後。未來有一聚法前非得起不盡。此法前非得，即是過去法家法前非得流類也。約性類別者。是未來兩聚非得。法前法後非得各別起。處不同故有二非得也。

【麟記】論本第四(二十四右)　現在法過去非得者。謂隨未得法時有非得。今在過去也。未來非得者。此有二類。一法後非得未起。二法前非得在未來者。無現在非得者。正理以現在法與不成就不俱行故。有說。性相違故。

三界不繫三者。界繫門也。三界不繫者是所不得法。三者能得非得也。謂三界及不繫法各有三界非得也。且如彼欲界法有三界非得者。謂欲界有情不得欲界法非得欲界繫。色界有情不得欲界法非得色界繫。無色界有情不得欲界法非得無色界繫。良由非得隨所依判故。隨所依通在三界。如欲界法有三界非得。色無色界法有三界非得。准欲界說之。若不繫法三界非得者。欲界不得不繫法非得欲界繫。色界不得不繫法非得色界繫。無色不得不繫法非得無色界繫。（冠註論本第四(三十七右)）

【暉鈔】卷上末四十一右　欲界有情不得欲界法卽如六欲天不得別解脫戒。於上有非得。卽隨身欲界繫。色無色界有情不得欲界法。卽無表非得隨自界繫也。良由非得下。是釋非得隨自界繫所以也。色界法卽四禪定共無表。無色界法四空定也。不繫法卽擇非擇滅及道諦。約三界有情不得此三類無漏法。非得各隨自界繫也。

【麟記】論本第四二十四左　色無色法有三界非得者。且欲界有情不得色界法。非得欲界繫。色界有情不得色界法。非得色界繫。無色有情不得色界法。非得無色界法。亦約三界有情。不繫非得隨彼有情三界繫也。

許聖道非得說名異生性者。釋非得不通無漏也。謂發智本論許聖道非得說名異生性故。論引本論云。云何異生性。謂不獲聖法。不獲卽是非得異名。非說異生性是無漏應理。注曰。已上論文。不獲卽是非得異名已下者是論主釋。上兩句本論文也。既知不獲聖道名異生性。明知異生性必非無漏。此異生性卽是非得。故知非得不通無漏也。又婆沙四十五云。尊者世友作如是說。能令有情起異類見異類煩惱。造異類業受異類生。故名異生。得法易地捨者。捨非得門。謂捨非得不過

二門。一得法捨。二易地捨。得法捨者。如聖道非得說名異生性。得聖道時捨異生性。此卽（光作據字）以得替非得處也。易地捨者。謂從下地生上地時。若從上地生下地時。以易地故必捨非得。如從欲界生上界時捨欲非得。以欲非得隨所依身。所依捨故非得亦捨也。如欲界既然。餘界亦爾。故易地捨但由易地捨於非得。未必有得替非得處。然異生性通前兩捨。謂易地捨中雖不遍捨異生性盡。亦有少分捨異生性。如從下地生上地時。亦捨下地異生性也。（冠註論本第四二十七右）

【暉鈔】卷上末四十一右　經部許此身未得聖來。色心上假立異生性。得聖卽捨。犢子部說苦下十煩惱名異生性。瑜伽取三界見道煩惱種子上假立。今時相傳取二障種子上立。卽佛一人名聖。餘二乘斷不盡。應亦凡亦聖也。易地捨者。非得隨所依身。俱是有漏皆繫地定。若易地時非得卽捨也。問。至第十六心卽捨前十五心。有法後非得應同未得。苦法智忍上非得應名異生性。答。彼初得苦法智忍已害異生性了。今時非得非是異生性也。

【麟記】論本第四二十四左　論引本論者。卽此論引發智本論也。非說異生性是無漏應理者。謂不說異生性是無漏應道理也。不獲聖法名異生性者。爲不獲何聖法。答。謂不獲一切。若不爾者諸佛世尊亦不成就聲聞獨覺種性。應名異生。故知不獲一切也。若爾應言純不獲。答。不要言純。如說此類

食水蚊子也。食風。蟬也。卽顯純食風水等。問。非得於聖法說名異生性。非得於凡法應名爲聖性。解云。凡不成聖法。可說非得異生性。聖必成凡法故。彼非得非聖性。起異類見者。謂五見等種種見也。異類煩惱造異類業等者。卽貪嗔等種種煩惱造五趣等種種之業。受五趣等異類之生也。未必有得替非得處者。上言宗明得非得相翻而立。約當地說。今約異地。卽得無替非得處故言未必也。雖不遍捨異生性盡者。謂此易地但捨所離地中異生。其所生地等異生性猶在。不同得聖法盡捨也。問。非得無記性無前後得。是卽剎那剎那皆捨非得。如何乃言得法易地方捨非得。解云。實有斯理。今言捨者。據一類盡說。非據少分也。然非得未捨之時亦有得。得捨卽無得。故論云。非得之得斷。非得之非得生。如是名爲捨於非得。解云。既言非得斷。明知未斷之時卽有得也。問。法得得此亦應更有得得。答。得更有得。若爾得復有得。應成無窮。答。無無窮過。許得展轉更相成故。以法生時併其自體三法俱起。第一本法。第二法得。第三得得。謂相續中。法得起故。成就本法及與得得。得得起故。成就法得。是故此中無無窮過。如是若善若染。一一自體初生起時三法俱起。第二剎那六法俱起。謂三法得及三得得。第三剎那十八俱起。謂卽第二念中六法及初念中三法。總成九法。有九法得。有九得得。合成十八。此但約初一念法。若更論第二念等所起心等。則更成多。如是諸得後後轉增。且一有情相續集會。無對礙故互相容受。若不爾者。一有情得虛空不容。況第二等。

俱舍論頌疏　論本第四終

倶舍論頌疏　論本第五

中大雲寺沙門圓暉述

分別根品第二之三

從此大文第二明衆同分者。論云。如是已辯得非得相。同分者何。頌曰。

同分有情等

釋曰。同分者標章。有情等者正釋。同謂身形等同。謂諸有情身形業用樂欲展轉互相似故。分者因義。謂由此分能令有情身形等同。同之分故名爲同分。依主釋也。言有情者同分所依。簡非情也。等者簡不等。正顯能依同分也。論云。有別實物名爲同分。謂諸有情展轉類等。本論說此名衆同分。解云。衆同分者衆多同分也。此復二種。一無差別。二有差別。無差別者。謂諸有情有情同分。一切有情各等有故。同是有情故名無差別也。有情同分謂簡非情。此宗非情無同分也。有差

別者。謂諸有情界地趣生種性男女近事苾蒭學無學等各別同分。一類有情各等有故。界謂三界。地謂九地。趣謂五趣。生謂四生。種性謂刹帝利等。各別有故名差別也。復有法同分者。謂隨蘊處界。五蘊十二處十八界自類相似。此三科法是法同分所依也。由有實物名法同分能令諸法互相似故。頌文同分攝二同分。言有情者謂簡非情。故有情言亦攝法同分也。論云。若無實物無差別相名同分者。展轉差別諸有情中有情有情等無差別覺及施設不應得有。如是蘊等等無差別覺及施設如理應知。覺者能緣同分智覺也。施設者施設同分名也。由實有同分。方有緣同分智覺及施設同分名。各以此智名證。實立有同分也。依經部宗同分假立故。此標宗意明實也。（冠註論本第五初右）

【暉鈔】卷上末四十二右　論本第五　業用樂欲者。此簡木素畫人。雖相似無業用樂欲。非同分依也。外難云。身形同由引滿二業同者。樂欲由何物。即由同分。無情無樂欲。不立同分也。身形等同即果。分即不相應法。與身形同作因。同之分故依主釋。有別實物名同分者。顯不相應法為實體破經部情非情相似邊假立同分。本論說此名衆同分。即會本論名。多人不一。名衆同分也。論云若無實物無

差別相名同分者。已下並返難經部。汝經部說。若無實不相應法爲因者。但約情非情無差別相似邊假立衆同分者。諸有情中有情有情等無差別者。即五趣相望應無差別。五趣不一。重言有情也。問。身形樂欲同即說由同分者。同分相似由誰。應更有同分。即有無窮過。答。同分如四大自性即色不假餘物方名色。同分自性即同也。

【麟記】論本第五右初　倶舍頌疏記　論本第五

富春沙門遁麟述

衆同分者。同法非一名爲衆同。與彼爲因名之爲分。章云衆多同分。義亦同也。一無差別者。總是有情平等皆有。唯簡非情。名無差別。非情無同分者。正理云。如是同分世尊唯依有情說。非草木等。故經云。此人同分。此天同分等。故不言非情也。一類有情各等有者。謂當類自同。簡餘類故名有差別。言界趣等同分所依各別有者。顯能依同分也。自類相似者。如色聲等自類相似也。由有實物至互相似者。此顯同分是實。由有實同分故。所以色聲等法各互相似。故有情言亦攝法者。謂法不離有情頌但言有情。亦攝於法。問。有情同分與法同分爲體各別。爲一體義分。解云。舊云。體性各別。令有情相似名有情同分。能令諸法相似名法同分。雖復離法無別有情。約義有殊。同分亦別。又解。有情離法既無別體。准知同分體亦無殊。約義有殊。立名有異。非體各別。今詳疏中故同前說。若無實物名同分者。此下反徵經部。證實有同分體。此中有二。一約有情立。二約法立。初言有情有情者。有情非一名有情有情。同分是有情名等無差別。覺及施設不應得有者。此意若無實物名同分者。不應有能緣同分之覺解。及詮同分之名言。既言有能緣之覺解。及詮同分之名言。故知

同分是實。非無所緣法可生覺慧故。非無所詮法可起言說故。次得法中例同有情說。故言如理應知。覺能緣同分智覺者。此釋緣同分生覺解。或如於人天同起有情之覺解。於法中同生色之覺解也。名准覺說。又此且約無差別同分爲難。以遍故偏擧。經部宗同分是假者。且彼云。非異生性別有異生同分。如非異人性別有人同分。又非現見故。又難云。如何不許有非情同分。諸穀麥金銀等亦有自類互相似。故正理通云。乃至不應如是責。有太過失故。汝亦許有人天等趣。胎卵等生。何不亦許菴羅等趣。豆麥等生。且我於中作如是解。由彼草等無有展轉業用樂欲互相似故。又因有情草等方生故。唯於有情說有同分。卽由此事證有實物。經部師云。說人同分等但是假立。如麥豆等。論主意同。

從此第三明無想果。論云。已辯同分。無想者何。頌曰。

無想無想中　心心所法滅　異熟居廣果

釋曰。無想無想中心心所法滅者。正釋無想也。上言無想無想異熟也。下言無想無想天也。謂無想天中有無想異熟。故論云。若生無想有情天中。有法能令心心所滅名爲無想。是實有物能遮未來心心所法令暫不起。如堰江河。解云。旣能滅心明有實物。依經部宗無想是假故。此標宗言實物也。異熟居廣果者。二門分別也。異熟者五類分別門。謂修無想定爲

異熟因。感五百大劫無想異熟爲果也。居廣果者。第一明所居處。無想有情居住廣果。非別有地。謂廣果天中有高勝處名無想天。如初禪中有高臺閣大梵王居名中間禪。問。彼爲恒無想。爲亦有想耶。答。生死位中多時有想。言無想者由彼中間五百大劫想不起故。生死有想者。無想天中初生有心。死時有心也。故契經言。彼諸有情由想起故從彼處沒。然彼有情如久睡覺還起於想。論云。從彼處沒必生欲界非餘處所。先修定行勢力盡故。於彼不能更修定故。如箭射空力盡便墮。若諸有情應生彼處。必有欲界順後受業。如應生彼北俱盧洲必定應有生天之業。解云。此明無想天必退墮也。餘義可知。問。生欲界何趣耶。答。婆沙一百五十四云。有說。生地獄。有說。生惡趣。如是說者定生欲界。處所不定。或生天趣。或生人趣。或生惡趣。問。何故生欲五趣不定。解云。謂諸外道修無想定。於加行時或起邪見謗釋種涅槃。或起見取計無想天爲眞解脫。或起戒取計無想定以爲眞

道。如是等惑爲惡趣因。既修此定。次復離欲。或起生得或聞或思。如是等善爲善趣因。由善惡雜起故生五趣不定也。（冠註論本第五左二）

【暉鈔】卷上末二十左　若生無想有情天中。此明依處。有法能令心心所滅。明用顯體。名爲無想。是實有物。明假實。能遮未來心心所等。明世及所滅法。如堰江河。喩釋也。婆沙一百一十八云。是何異熟。答。有多說。評曰。無想果是無想定感。一切命根衆同分眼等色根。是無想定前有心定相應思感。餘蘊有心無心定皆能感也。問。無想果中無觸思識三食。如何持身。答。准正理論。有過去業同時觸思識三。爲能引。同分命及色根等。由過去業相應思等三。及引無想果心。兼續生心同時思等爲食也。下二定中無三食者。由入二定前有心有相應思等爲食作能引。無心位中唯有有心位觸食等現在無食。有心位中二種倶有也。或起邪見謗釋種涅槃等者。初加行即起邪見。爲惡趣因。次欲得定即離染起上定等。爲善趣因也。依經部。二定及無想果。即無心位所依色身假立二定。不同有宗別有不相應爲體也。

【麟記】論本第五左二　修無想定爲異熟因者。准婆沙有多說。評家云。無想異熟唯無想感。一切命根及衆同分眼等色皆是業感。餘蘊倶感。除命根等外餘受等是無想定幷業等感故也。由此下引滿因中云二定不能引者。約不引命根衆同分等說。言多時有想者。謂遮少時名爲多時。非謂於中間無想時也。其中間五百大劫長時無想故。婆沙或前多後少。或前少後多。隨彼意樂有差別故。必有欲界順後受業者。婆沙云。有說。若造無想順次生受業等者。法爾亦造欲界順後受業。如彼無我觀生北洲。必造欲天之業。

以修觀時必具十業因故。或起邪見謗釋種涅槃者。謂撥無眞涅槃也。問。准婆沙。無漏緣惑此時不起。如何今說謗涅槃耶。答。此約修定如行時說。或與婆沙不同。或起見取計無想天爲眞解脫者。夫言見取。謂執劣爲勝。既非涅槃執爲涅槃故是見取。或起戒禁取者。謂非道計道名爲戒取。今無想定實非眞道。妄計爲道故是戒取。次復離欲者。謂先起惡因。後方修定。及離染等故名次復。問。無想位中三食既滅。如何得住。答。食有二種。一先時能引。二現在任持。彼位雖無現在任持。而有先時能引食故。故得住也。

從此大文第四明二定。於中有三。一明無想定。二明滅盡定。三明所依身。且初明無想定者。論云。已辯無想。二定者何。總問。謂無想定及滅盡定。總答。初無想定其相云何。別問。頌曰。

如是無想定　後靜慮求脫　善唯順生受　非聖得一世

釋曰。如是無想定者。前明無想滅心心所有實體性。如是復有別物心不相應滅心心所名無想定。約滅心同名爲如是。無想者定名無想定。或定無想名無想定。言無想者者是假者。假者修無想人也。修無想人成此定故名無想定。無想之定是依主釋也。言或定無想者。無

想卽定持業釋也。後靜慮者。明所依地。修無想定依第四禪。於靜慮中最居後故。求脫者。明作意也。謂諸外道計無想果爲眞解脫。爲求證彼故修無想定。善唯順生受者。善謂三性門也。此無想定唯是善性。此是善故能招無想天中五蘊異熟。唯順生受者明報時也。謂無想定於第二生必受其果。唯言爲簡無順現順後及不定受故。論云。若起此定後雖退失。傳說現身必還能起當生無想有情天中。故得此定必不能入正性離生。此文意明唯順生受也。非聖得一世者。非聖者明修人也。謂唯外道修無想定。必非聖者。論云。以諸聖者於無想定如見深坑不樂入故。要執無想爲眞解脫。起出離想而修此定。一切聖者不執有漏爲眞解脫及眞出離。故於此定必不修行。解云。計無想天爲眞解脫。計無想定爲眞出離。無出離生死也。得一世者明成就也。謂無想定初念起時唯得現世名爲一世。如初受得別解脫戒。此無想定從第二念已去乃至未捨是有記故亦成過去有法後得也。故知初念唯成一世。第二念等若未出

觀通成過現。以無心故無未來修無法前得也。若出觀已唯成過去。

論云。若諸聖者修得第四靜慮地時。若爲如靜慮亦得去來無想定不。

解云。此問意者如聖人初修得第四禪。過去已失靜慮及未來未起靜

慮。以曾習故今時總得。以有心靜慮通三世成就也此聖人爲如靜慮

亦得曾習過去無想定及未來未起無想定不。以無想定屬第四禪。聖人

修得第四禪時。既得過未有心靜慮。過未無想應亦有得。故爲此問也。

餘亦不得。答也。餘凡夫人得第四禪亦不得去來無想定。何況聖人乎。所以者何徵也。彼雖

曾習。以無心故。要待加行方便修得故。初得時唯得一世。答前徵也。彼無

想定於過去生雖能曾習。以無心故。今時要須更修加行方可得也。故知凡夫修得第四禪而未修

無想定不可得之也。

【暉鈔】卷上末四十三左　　問曰。定是心所。二定無心。如何名定。答。此二定體在身令四大均平。名定。

無妨。或此二定有心定引生。所引隨能引名定。此取等至。唯定不通散。通有心無心也。無想者定

或無想即定。是標二論文釋名。言無想者下。釋上二文也。傳說現身必還能起者。問。一度入定即感

五百劫。何要再入。答。將感餘蘊異熟。或將招入晚出早。或入早出晚也。婆沙一百五十四

云。或前多後少。或前少後多。隨彼意樂有差別故。出無想果心通生得善及有覆無記無覆無記心。入心唯是異熟無記心。順異熟果故。入二定心皆是自地善心引生。出二定心不定。滅定自地淨心及下地無漏心。出無想即自地善心出也。計定爲出離即戒取。計果爲解脫即見取也。聖人修得第四定時。未來合得第四定攝有心定。即有法前得得之。過去無始曾得已失第四定。今有法後得得之。無想定亦屬第四定攝亦有法前後得。得過未無想定否。答中餘亦不得者。凡夫是修無想定人。尚過未無心定總不得。況聖人不是修人。豈得也。

【麟記】論本第五左三　約滅心同名爲如是者。此約無心是同。非謂與無想果性體類等數同也。問。出入無想何心耶。答。婆沙云。出入無想俱是第四靜慮有漏善心。廣如後述。無想唯依第四禪者。不依下地。如彼所明。而不依無色者。以諸異生怖畏斷滅。彼界無色。若更滅心便爲斷滅。是彼所怖。故無色界無無想定。又無色無無想異熟可計故。故定亦無。傳說現身必還能起者。謂退定時。起下煩惱。若不重起。即第二生不得受果。由現生中必還得故。故第二生即得受果。問。此定唯順生受。既先得定已能招果。更重入定。復何所感。新云。或可餘蘊異熟。或重入定者。感彼報時。或入晚出早。或入早出晚。聖人於無想如見深坑者。謂感五百大劫生死大果。空無所獲。聖者厭離。如見深坑。

從此第二明滅盡定。論云。次滅盡定其相云何。頌曰。

滅盡定亦然　爲靜住有頂　善二受不定　聖由加行得

成佛得非前　三十四念故

釋曰。初句出體。次三句辯差別。第五第六句明佛得也。滅盡定亦然者。此滅盡定有實體性滅心心所。同前無想滅心心所。故言亦然。爲靜住者明作意也。前無想定爲求解脫以出離想作意爲先。此滅盡定爲求靜住以止息想作意爲先。有頂者。明所依也。前無想定依第四禪。此滅盡定唯依有頂。謂下諸地皆名有想。行相麤動難可止息。此有頂地名爲非想。行相微細易可止息。故唯有頂有滅盡定。善二受不定者。善者三性門也。謂滅盡定性唯是善。非無記染。謂是善心所等起故。二受不定者明報時分也。二受謂順生順後二受也。此滅盡定通順生順後及不定受。謂約異熟有順生受或順後受。頌言不定含二不定。一報定時不定。二時報俱不定。故論云。或有不定受。此報定時不定。或全不受。謂若於下得般涅槃。此時報俱不定。如阿羅漢得滅盡定入般涅槃不受果耳。此滅盡定唯招有頂四蘊異熟。聖由加行得者。聖者

明修人也。此滅盡定唯聖者得。論云。非異生能起。怖畏斷滅故。唯聖道力所能起故。現法涅槃勝解入故。解云。謂滅盡定依有頂起。彼已無色。若更滅心便成斷滅。故怖畏也。聖入滅定。作勝解心如入涅槃。故異生不起也。加行得者此滅盡定唯加行得。非離染得。以心無故要大加行方可得也。又初得時唯得現在世。從第二念乃至未捨通成過現。若出觀已唯成過去。成佛得非前者。明佛得滅盡定也。成佛得者。明成佛時得滅盡定也。非前者非前加行得也。成佛得言顯離染得。謂佛世尊盡智生時成佛位也。此時離染得滅盡定。不由加行而修得也。故論云。佛無一德由加行得。暫起欲樂現在前時。一切圓德隨樂而起。故佛衆德皆離染得。解云。但離染時得諸功德。故諸功德名離染得。隨樂而起非加行也。又論云。世尊曾未起滅盡定。得盡智時云何得成俱分解脫。解云。菩薩學位未起滅定。於成佛時應有定障。云何得成俱分解脫。俱分解脫者謂離定慧障也。於起滅定得自在故。

如已起者。名倶解脫。解云。答也。此滅盡定於成佛時雖復未起。得自在故。如已起者。名倶解脫。或得滅定入出心故名倶解脫。即由此理名離染得。後時不由加行起故。非得定體。以滅盡定無法前得故不得也。西方師說。菩薩學位先起此定後得菩提。云何此中不許彼說。解云。是經部宗此許菩薩從見道出便入滅盡定。從滅盡定出方斷有頂。故於盡智起成倶解脫。論主問。薩婆多宗云何此中不許彼說也。若許彼說便順尊者鄔波毱多理目足論。如彼論說。當言如來先起滅定後生盡智。解云。論主朋西方師。故爲此釋。三十四念故者。遮西方師說也。謂迦濕彌羅國毘婆沙師說。非前起滅定後方生盡智。所以者何。傳說菩薩三十四念成菩提故。諦現觀中有十六念。離有頂貪有十八念。謂斷有頂九無間道九解脫道。如是十八足前十六成三十四。一切菩薩決定先於無所有處已得離貪。方入見道。不復須斷下地煩惱。於此中間無容得起不同類心。解云。菩薩先斷無所有處貪。

後依第四禪起三十四念。此三十四念唯無漏心故。不可說從見道出起滅盡定。以入滅盡定心是有漏故。此有漏心望三十四念名不同類。故不可起。（冠註論本第五左六）

【暉鈔】卷上末四十四右　住有頂者。一以非想心細。二以滅定厭背一切心心所法。若依下地未能厭背一切心心所也。前無想果在色界。故無想定亦色界也。報定時不定者。卽上流那含得滅盡定。退失生色界已更受多生。方生有頂。故時不定也。或全不受。如第四果人得定。卽全不受。如下樂慧那含及住欲界那含得滅定卽不受果也。唯招有頂四蘊異熟者。准前無想果命根同分卽滅定前有心定感。餘蘊異熟卽通滅定及有心定感也。怖畏斷滅者。異生恐畏當生有頂天。彼已無色。更滅心心所卽成斷滅也。菩薩三十三心前名學位。三十三心中未起滅定。第三十四心卽成佛。有滅定障。如何成俱解脫也。答中。一約起得自在。第二約得入出滅定心。如前文辯也。經部說十六心後起滅定了。方起有頂九無間道九解脫道也。鄔波毱多者。此云近護。卽是第五師。理者。道理。此論所詮道理爲世爲眼目及出世足也。三十四心皆是無漏。不可中間起滅定有漏心。卽顯菩薩意樂不純也。

【麟記】論本第五右四　以止息想作意爲先者。謂聖人受想麤動疲勞。爲求靜住暫止息。故入滅定。問。過去已滅。未來未至。現在不住。爲滅何心。答。住於現在。遮於未來心心所法。令不相續故名爲滅。如斷城路。閉門竪幢。不令人入故名除寇。唯依有頂者。正理又云。前無想定是色界邊。今

滅盡定在無色邊。所受生身是最上業所牽引故說名有頂。或有邊際說名有頂。如說樹邊名爲樹頂。唯招有頂四蘊異熟者。婆沙云。受非想處四蘊異熟果。除命根衆同分。彼唯是業果故。非異生能起也。此總有三因。一怖畏故。二唯聖道力所引故。三勝解入故。聖入滅定作勝解心者。謂遠加行作入涅槃想。非眞涅槃也。近加行作止息想也。初得時唯得一世者。謂無心故無法前得。故但得一世也。世尊曾未得滅定至俱解脫者。此難意以滅定唯聖人得。菩薩見道之前既是凡夫。故未得此定。既未得定。豈得名俱分解脫人。答有二。初約起自在名俱解脫。後約得出入心。出入心有前得故盡智時得。定體無心無法前得故不得也。西方者。謂健馱羅國。是迦濕彌羅西也。鄔波毱多此云近護。或云近藏。如上所明。佛涅槃後一百年出。是阿育王門師。諦現觀中有十六念者。謂觀上下八諦各有二心故成十六。如章廣辯。言於無所有處已得離貪者。謂菩薩法爾先有漏道離於下染。如菩薩同鬱頭藍等修非想定。明知此時已離下染。無容得起不同類心者。西方師云。謂我未得漏盡終不解結跏趺坐。決定不起。如是期心非謂不起無漏心也。正理云。豈不由斯已成違越。如何菩薩爲盡諸漏。修未曾得見修二道。欲拔有頂見斷惑根。及除有頂修惑怨敵。立誓要期。結跏趺坐。事未究竟。而於其中捨所要期無漏治道。貴重無始能爲誑惑世間定類。爲獲共有易得滅定而致稽留。如是善成三十四念得菩提故。准論主意同西方師。不同有部。

從此第三明一定所依。論云。已說一定有多同異。而於其中復有同

異。頌曰。

二定依欲色　滅定初人中

釋曰。二定依欲色者。釋依身也。二定者謂無想定滅盡定。此二俱依欲色身起。問。先無想定不依無色理在不疑。何故滅定不依無色。答。命根依二法轉。一色。二心。若於欲色起滅盡定時。雖復無心。命根依色轉。生於無色已無色身。若起滅盡定便無色心。命依何轉。是則斷滅。非謂入定。故無色界不起滅定也。論云。若有人不許亦依色界起無想定便違此文。謂本論言。或有是色有此有非五行。謂色廛有情或生有想天住不同類心。或入無想定。或入滅盡定。或生無想天已得入無想。是謂是色有此有非五行。解云。依婆沙有說不許色界起無想定。故引本論顯彼非也。或有是色有者。是色界有情也。此有非五行者雖色有情不具五蘊也。過去迦葉佛說五蘊爲五行。此有四類。一生有想天住不同類心。生有想天者。色界天中除無想天餘天名有想也。於

有想天起無色界心及無漏心。與色界心類不同故名不同類也。此唯有色行二蘊無餘三蘊。非色繫故。二生有想天已入無想定。三生有想天已入滅盡定。四生無想天已得入無想異熟。此後三類受想識滅唯有色行二蘊。故此四類不具五行。此本論文既言生有想天或入無想定或入滅盡定。故知二定色界起也。滅定初人中者。此明滅定初起人中也。謂無想定無始曾習。起時即易。故於二界皆得初起。此滅盡定未曾修習。起時即難。故要人中方起滅定。以人中有說力故。慧解利故。論云。此在人中。初修起已。由退爲先方生色界。依有色界身後復修起。解云。滅定有退故生色界。如不退者直生有頂。生色界已由先習力得起滅定也。然此二定滅心心所。但言無想滅受想者。謂加行中偏厭此故。故別標也。且如外道計。有苦樂以爲生死。欲修無想先作是念。欲界有苦。初二三禪有喜樂受。不了第四有捨及餘心心所法。而作是言。第四禪中雖出苦樂。仍有想念未得涅槃。我今須

滅故加行中偏厭想也。若諸聖者以欲色界有疲勞受。於第四靜慮無色有麤動想。爲求靜住。暫欲息心故。加行中偏厭受想故。此二定依加行中立名也。故論云。此二定加行中有厭逆此故。如亦知受等唯名他心智。解云。他心智雖知心所。然修加行。但欲知心。故從加行名他心智也。然此二定以二十二物爲體。爲修定前有二十一心所及心王一。心所二十一者。謂大地十大善地十欣厭隨一。爲滅此故。有二十二物不相應行替處名無想等。故隨滅爾許心心所法爲定體也。（冠註論本第五十右）

【暉鈔】卷上末四十五右　已說二定有多同異者。先明六同者。一滅心心所同。二性同。三初得一世同。四有漏同。五依二界身起同。六同是入心作等無間緣引生出心爲果也。異者。一無想定欣相應心入。滅定厭相應心入。二作意異。無想定出離想入。滅定靜住想入。三依地別也。無想依廣果。滅定即有頂。四招果異。無想招五蘊無心果。滅定招四蘊有心果。五凡聖別。六無想即唯加行得。滅定通二得。七初起別。無想欲色二界皆得初起。滅定人中初起。八無想唯順生受。滅定通二受及不定也。若有不許色界起無想定者。難云。滅定依於無色界。無色界身不得起。無想定依於色界。色

界有情不得起。答中四節文。取第二已得入無想定。證色界人許入無想定也。此在人中初修起者。者。此通難云。滅定初起人中。如何言通依二界者。若第四果人得滅定。退作前三果即失滅定。此現世取得果及滅定。若第三果人斷無所有處下八地惑盡得滅定。後起色界煩惱退失此定。生色界再起。故依色界身也。初二三定有喜樂受者。雖修下三定以爲加行。非本所求。故下三定不能招果。由無想定力生第四定也。疏云。以欲色界有疲勞受者。欲界即五受。色界即喜樂捨名疲勞受也。於四靜慮有麤動想者。合言四無色有想。以前文言欲色界以論色界也。

【麟記】論本第五五左　無想不依無色理在不疑者。謂無想定在第四禪。非無色法。故不依彼理不疑。滅定既是有頂地法。何故亦不依無色身耶。若有不許色界起無想定者。彼云。唯欲起無想定。以欲界心猛利故。有說力故。有說。通三靜慮起。由念曾修加行勢力亦能起故。有說。第四靜慮亦能現起。除無想天勿果與因極相逼故。三說之中後二無違。前說非理。此唯色行二蘊者。色蘊可知。行蘊即四相命根得同分等。無餘三蘊者。以受想識不囑色界繫也。說五蘊爲五行者。無常名行。故婆沙云。諸蘊即行聲說。過去如來應正等覺說行名蘊。今釋迦如來應正等覺說蘊名行。此阿毘達磨中說五行者。欲顯今佛所說五蘊。即是先佛所說五行故。唯人中能起滅定者。婆沙問云。何故生色界中能初起靜慮。不能起滅定耶。答。靜慮由三緣故初起。一因力。二業力。三法爾力。滅定但由一緣故初起。謂說力。唯欲界有佛說故能初起。不由因力。以餘生中未曾起滅定故。又不由業力。以此定非業力故。不由法爾力。以無色中無世界壞故。此滅定未曾修習者。謂是聖人方能修此。先既非聖。故未曾修。由退爲先者。論云。此滅盡亦有退耶。應言亦有。如鄔陀夷經。此云出現

經。有諸苾芻。先於此處具淨尸羅。能數入出滅受想定。彼於現法或臨終位。不能勤修令解滿足。從此身壞超段食天。光云。段食天謂六欲天。資段食故。意成天身謂色界天。不由精血等隨意受生天。隨受一處意成天身。於彼生已。復數入出滅受想定。若得此定必無退者。如何得往色界受生。依大衆部。第四禪亦有滅定。然彼所執滅定無退。與此不同。如亦知受等者。謂受是心所。雖亦知心所。不名他心所智。但名他心智也。論云。今二定中心久時斷。如何於後心得生。毘婆沙師許過去有前心爲後等無間緣。云云多說。論問云。若都無心如何名定。答。此令大種平等行故說名爲定。或由心力平等至此故名爲定。解云。由此定在身。令諸大種湛然平等而住。水火風等所不能損故名等至。或由定前心離沈掉平等至此定故名等至。婆沙云。等至有二義。一令心平等。二令大種平等。又正理云。此中定言應名等至。由言便故名之爲定。解云。等謂正義。極義。如理平等行。至謂成辨義也。言二定有二十二物爲體者。准婆沙有多說。一云。此定一物爲體。謂一滅現前即名無心故。有說。十一物爲體。以大地有十及心王滅故。有說。二十一物爲體。謂大地十大善地十及心王滅故。評家云。如是說者。隨滅爾許心心所法。即有爾所物現前爲體。今章云。加欣厭一。與第三師不同。新云。准義無想定加欣。欣彼果故。滅盡定加厭。厭受想入滅定故。今詳此但一相未爲盡理。以無想定亦厭想故。滅定亦欣入定故。又婆沙解。滅定欣厭隨一。若唯厭者何名隨一。依經部宗。滅定是假者與此不同。

從此大文第五明命根。論云。已辯二定。命根者何。頌曰。

命根體即壽　能持煖及識

釋曰。上句會名。下句用證。論云。命體即壽。故對法言。云何命根。謂三界壽。解云。既將壽釋命。故知命即壽。此復未了何法名壽。謂有別法能持煖與識說名爲壽。（冠註論本第五十三）

【暉鈔】卷上末四十六右　命煖識三更互相持。此三由業持。業盡三法同時滅。

【麟記】論本第五八右　會名者。謂會壽命之名也。用證者。約能持識等用。證知實有命也。能持煖識說名爲壽者。問。此壽何法能持。答。煖及識持。　若爾三法更互相持。猶如鼎之三足。何法先滅。答。唯一滅故餘二隨滅。若依經部。壽體非實。彼云。由三界業所引同分住時勢分相續決定隨應住時。爾時住故此勢分說爲壽體。如穀等種所引乃至熟時勢分。又如放箭所引乃至住時勢分。論主意同有部。故論云。有別實物能持煖識名壽體。是說爲善。

從此第六明四相。於中有二。一正明四相。二釋難。就第一明四相中。一明本相。二明隨相。且初明本相者。論云。已辯命根。四相者何。頌曰。

相謂諸有爲　生住異滅性

釋曰。上句標章。下句出體。相者能相也。謂諸有爲者所相法也。諸有爲者。謂五蘊法。因緣造作故名之爲。色心等法從因緣生有彼爲故名爲有爲。相是標相。謂相法體令是有爲。故論云。由此四種是有爲相。法若有此應是有爲。與此相違是無爲法。解云。正釋相義。生住異滅性者。出體也。此中於法能起名生。能安名住。能衰名異。能壞名滅。性者體義。謂薩婆多宗四相有實故也。論云。豈不經說有三有爲之有爲相。解云。此引經爲難也。經說三相。論今說四。豈不相違。有三者能相也。有爲者所相法也。之者顯依主釋。重言有爲者。令知此相表示法體成有爲。故此三相者有爲之相。於此經中應說有四。解云。於此經中理應說四也。不說者何。徵也。所謂住相。然經說住異。是此異別名。如生名起滅名爲盡。如是應知異名住異。解云。有三師釋經。此一師釋也。經不說住說三相。一起。二住異。三盡。然經說住異相是此論說異相別名。謂依住辨異故所以異名住異。

也。如起者生之別名。如盡相滅之別名。故知異相是住異之別名也。若法令行三世遷流。此經說爲有爲之相。令諸有情生厭畏故。謂彼諸行生力所遷。令從未來流入現在。異及滅相力所還迫。令從現在流入過去。令其衰異及壞滅故。住於彼行攝受安樂。常樂與彼不相捨離。故不立在有爲相中。解云。是第一師釋經意也。三相遷行。故經說之。住樂安立。故經不說也。又無爲法有自相住。住相濫彼。故經不說也。注曰。此第二師釋經也。無爲湛然是自相住也。有謂。此經說住與異總合爲一名住異相。注曰。此第三師說也。經說住異。兩相合說。不同初師唯是異相。何用如是總合說爲。問也。住是有情所愛着處。爲令厭捨與異合說。如示黑耳與吉祥俱。是故定有四有爲相。答也。吉祥黑耳姉妹二人。恒相隨逐。姉名吉祥。所至之處爲吉祥事。妹名黑耳。由耳黑故。故以名焉。所至之處能爲衰損。愚人貪愛吉祥。智者爲令厭捨。先示黑耳。住喻吉祥。異喻黑耳。欲令厭住與異合說也。

【暉鈔】卷上末四十六右　婆沙四十八云。何故作此四相論耶。答。分別論者執。四相是無爲。所相法即有爲。法密部說。三相有爲相。滅相無爲。經部師執。一期四相。相似相續沙門執。所相是色能相亦色。所相是心能相亦是心。爲遮諸計顯有爲法一一刹那皆有四相也。標相者。但相法體是有爲。不相是色心善等法也。此中於法能起名生者。此四相中相有爲法能起名生等也。問。生住異滅四相作用各別。如何同刹那起。答。婆沙三十九有二說。一云。四相作用有別。體即是一。二云。生住異滅四體各別。以用別故。此上二說。體即同時名一刹那。四相用時即異。如生在未來用。餘三現在用也。問。住異滅三作用互相違。如何同現在有用。答。准仁王經。一念有九十五刹那。一刹那九百生滅。小乘念即刹那。刹那即麤容有九百生滅。何妨現在容三相有用也。問。有宗未來無用。如何生相言有作用。答。四相生本法名功能。各生自後念果名作用。如眼根望識名功能。引自後念根名作用。彼同分眼不發識但名作用。生相未來名有功能也。三釋中第一釋。經依住辯異。住異相即是此論異相別名。第三釋住異各別合立名住異相。令有情同厭捨也。

【麟記】論本第五右八　言相是標相者。謂表法令知是有爲也。法若有此應是有爲者。謂由四相遷流令行三世。故成有爲。若無遷流義即是無爲。應言者濫於難詞。然非難也。婆沙問云。何故作此論耶。有執。諸有爲相皆是無爲。如分別論者。有執。三相是有爲。滅相無爲。如法蜜部。乃至或執。色等五蘊出胎之時名生。相續時名住。衰變時名異。命終時名滅。如經部。爲遮彼計故。此所說

諸有爲法。一一刹那皆具四相。能起名生者。謂能起彼用令入現在。說名爲生。若無生相。諸有爲法如虛空等應本不生。能安名住者。謂至現在住。令彼用暫時安住各引自果。故名爲住。若無住相。諸法不能各取自果。又由異相能衰彼引果用。令其不能重引自果。故名爲異。異於現用既衰已。滅復能壞彼現法用。滅入過去。故名爲滅。若無滅相。用應不滅。諸法應常。知此宗生相居未來起用。住異滅三於現在世同時起用。所望不同作用差別。問。時之極促名一刹那。用既別世。何名刹那。答。婆沙有二說。一云。體雖同時。用有前後。一法生滅作用究竟名一刹那。二云。或生滅位非一刹那。然一刹那具有三體。故說三相同一刹那。前約用說。後約體說。各據一義。無評家。舊云。又足一解。生用起時名一刹那。現在三相用時復名一刹那。薩婆多宗四相實有者。以此四相既有力用。明知其體實有也。依經部宗。約一期生滅以立四相。然假非實。故論云。何緣如是分析虛空。非生等相有實法體。如前分別。所以者何。謂此諸相非如色等有定現比或至教量證實有故。又非一刹那具有三相故。論有相破。繁不具述。詳論主意。同其經部。故論云。依相續說有爲相者。不違正理。善順契經。令諸有情生厭畏者。論說喩云。猶如有人處於稠林。有三怨敵欲爲損害。一從稠林牽之令出。喩生相也。一衰其力。喩異相也。一壞命根。喩滅相也。三相於行應知亦爾。住則攝受安樂等故不立也。註言是第一師釋經意者。謂是前師釋經不說住相之意。故再言第一師也。然此章中分爲三解。若寶法師但爲二說。以初二釋同云不說住故。合之爲一。吉祥黑耳者。即涅槃經功德天黑闇女是也。

從此第二明隨相。論云。此生等相既是有爲。應更別有生等四相。問也。若更別有應致無窮。彼復有餘生等相故也。難也。相是有爲。別有四相。相上有相成無窮失耳。應言更有。然非無窮。雙答也。所以者何。徵也頌曰。

此有生生等　於八一有能

釋曰。上句答問。下句答難。此者此前四本相也。生生等者四小相也。謂前四相有生生等四種隨相。故成有爲。論云。諸行有爲由四本相。本相有爲由四隨相。解云。諸行成有爲由四本相相。本相成有爲由四隨相相。生生等者等取住住異異滅滅。此有三名。一名生生等。上生字是小生。下生字是大生。從小生生大生故名生生。小相中住住本相住名爲住住。小相中異異本相異名爲異異。小相中滅滅本相滅名爲滅滅。如生生釋之。二名隨相。隨本相故。三名小相。相一法故。本相亦有三名。一名本相。相本法故。二名大相。相八法故。三名生等。生八法故。不同小生唯生於生。故但名生。住等亦爾。於

八一有能者。通無窮難也。豈不本相如所相法。一一應有四種隨相。此復各四。展轉無窮。爲通此難故有斯頌。四種本相於八有能。四種隨相於一有能。功能別故無無窮失。且如生相生色法時。九法俱起。一是本法。謂色自體。此上必有四本四隨。故成九法。於九法內生不能自生。生除自體能生餘八。本相中住不能自住。住餘八法。本相中異不能自異。異餘八法。本相中滅不能自滅。滅餘八法。故四本相於八法中有功能也。於九法中。生不自生。是生生生。住不自住。住住來住。異不自異。由異異異。滅不自滅。由滅滅滅。故四隨相於一法中有功能也。由此道理無無窮失。故論云。是故生等相復有相。隨相唯四無無窮失。又經云有三有爲之有爲相。論云。然經重說有爲言者。令知此相表是有爲。勿謂此相表有爲有如居白鷺表水非無。亦勿謂表有爲善惡如童女相表善非善。解云。遙見白鷺表知有水。如童女有好相表生善子。有惡相表生惡子。今此四

相唯表有爲是有爲法。不表有爲是有義。故不同白鷺表有義也。又此四相不表有爲善惡性。故不同童女表善非善。（冠註論本第五左十五）

【暉鈔】卷上末四十七右　應更別有生等四相者。四大相有爲。一一各有小四相。卽十六小相。十六小相又是有爲。各又有四小相。卽有六十四相。展轉卽有無窮過也。於八一有能者。如一弱人負一石物。須一箇杖人方能行。人能負物得杖方行。杖卽扶人。人能擎杖更不要杖。物喩本法。人卽大相。杖卽小相。況法可知也。

【麟記】論本第五十右　上句答問等者。謂上句答更得之問。下句答無窮之難。小生名生生者。謂小生不生住等。但生大生。故名生生。大生兼生住等。不唯生生。故非生生。住等亦爾。准生生說。此釋上生是小生。下生是大生。正理又云。生之生乃至滅之滅。准此卽上生是大生。下生是小生。謂大生之生也。住等亦爾。舊存二解。言功能者。論云。謂法作用。或謂士用。名爲功能。由此道理無無窮失者。謂由於八一有能之道理故。無無窮之過也。以小生但能生大生。卽此小生復從大生。更不須別立餘生等相生此小生。以大生能生八法。生本法竟兼生小生。言八法有能者。且如生生不自生。但除自體能生大住大異大滅並本法成四。又生四小相成八法。以此八法皆由生力而得起故。住除自體其餘八法。一刹那中並由住力令彼住也。餘二准說。故論喩云。猶如雌鷄有生多子有唯生一。生與生生生八生一。其力亦爾。正理問云。生性旣無異。功能何有別。如受領納。性雖無異而有差別。損益功能。又本相隨相境有多少。如五識意識境有多少。五識唯一境。意

識了六境。

【麟記】論本第五右十一　令知此相表是有爲者。舊云。令知此能相表所相法體是有爲。若但言有爲之相。卽不知此相定表所相之法體是有爲。章意上同。新云。有爲之有爲相者。前言三相體。後言表前之相是有爲也。不表有爲是有義者。謂不表有爲是有體之義。謂體先有。不因四相方有體也。又無爲法無四相表體亦有故。童女善相者。謂性貞潔。脚膝纖圓。齒白脣薄。髮細且長。臂垂過膝。是名善相。與此相違名爲惡相。

從此第二釋難。依經部宗四相是假。不許有宗未來有體實有生相。故論云。若生在未來生所生法。未來一切法何不頓生。頌曰。

生能生所生　非離因緣合

釋曰。此兩句答經部宗難也。因者六因。緣者謂四緣。論云。非離所餘因緣和合。唯生相力能生所生。故諸未來非皆頓起。（冠註論本第五右十七）

【暉鈔】　闕之

【麟記】論本第五右十一　非離所餘因緣和合者。此意說。非唯有生相。要假餘因方能生法。但生相力卽不能生。經部難云。若爾有因緣和合卽生。無卽不生。故知唯有因緣。何勞生相。有部答云。豈諸有法皆汝所知。法性幽微甚難知故。雖現有體而不可知。云云。

從此大文第七明名身等。論云。如是已辯諸有爲相。名身等類其義云何。頌曰。

名身等所謂　　想章字總說

釋曰。名身等者標章也。所謂下正釋也。等者等取句身文身也。想章字總說者。釋上也。以想釋名。以章釋句。以字釋文。以總說釋身也。論云。名謂作想。解云。想者取像。或契約義。若取像名想。想是心所。如說色名能生色想。因名生想名爲作想。若契約義。想即是名。謂諸賢聖共爲契約立色等名。名即是想。由此名想能有詮表故名作想。梵云那上聲。磨。唐翻爲名。是隨義歸義赴義。謂隨音聲歸赴於境呼召色等名能詮義。論云。句者謂章。詮義究竟。如說諸行無常等章。或能辨了業用德時相應差別此章稱句。解云。且如一色。有所見業。能發識用。靑黃等德。過未等時。與四相合。名爲相應。不相應者名曰差別。謂能辨色是所見等此章稱句也。梵云鉢陀。義翻爲句。正翻

爲迹。謂如象身有四足迹。且如一頌總四句成。故今就義翻之爲句。梵云縛迦。此翻爲章。章者詮義究竟故。以章釋句。文者謂字。如說惡阿壹伊等字。是不相應行中字。不同此方黑書之字。梵云便膳那。唐云文。是能彰顯義。近顯名句。遠顯於義。西國風俗呼扇鹽酢亦名便膳那。亦是能顯義。扇能顯風。鹽酢能顯食中味也。故舊譯爲味翻之謬矣。身者聚集義。總說者合集義。謂合集總說二三等名爲聚集故。以總說釋身義也。論云。言總說者是合集義。於合集義中說嗢遮界故。解云。西方聲明造字有字界字緣。界是本義。以字緣助成種種義。且嗢遮是字界。本造字家於合集義中立嗢遮字界。後以字緣助嗢遮界。轉成三木訖底。唐言總說。既知總說之義起自嗢遮。嗢遮是合集義。明知總說亦是合集。此文言於合集義說嗢遮界。以證總說是合集義。既以總說釋身。故知多名合集爲名身等也。然一名是名。非名身。二名名身。三名已去名多名身。如說色聲

香等者有三名也。一句是句非句身。兩句是句亦句身。三句已去名多句身也。如說諸行無常。一切法無我。涅槃寂滅。此皆有三句名多句身。如迦佉伽也。一字是文非文身。二字亦文亦文身。三字已去名多文身。如迦佉伽等。有三字得名多文身也。論云。且如古者。於九義中共立一瞿聲。爲能詮定量。故有頌曰。

方獸地光言。　金剛眼天水。
於此九種義。　智者立瞿聲。

一方。二獸。三地。四光。五言。六金剛。七眼。八天。九水。皆一瞿聲。目斯九義。指方言瞿。瞿則目方。指獸言瞿。瞿卽目獸也。餘准可知耳。（冠註論本第五十五右）

【暉鈔】卷上末四十七左　名中有一字名多字名。皆是名收。三字多故名多名身。有說。四字已去名多名身。以身多故。第一字與第二字爲身。第二與第三。第三與第四。後二身以身至三故名多名身也。且如古者下。是經部師。聲爲敎體。聲能詮義。以多人共立契約。呼此九法共作瞿聲。後集會時。九中隨指其一。皆以瞿聲卽目彼物也。

【麟記】論本第五十一左　名句文身。如其次第。以想章字等異目釋之。因名生想名爲作想者。此是因取果名。說名爲想。故亦可知。於想詮法相狀。義與想同。故名爲想。言契約名想至名作想者。謂由賢聖想像契約立名。能詮表發名作。作卽是想。故名作想。歸赴義者。謂赴其自相。內有異相。呼

表專一。卽歸之義。由斯呼召能引自體。梵云僧若。自阿反。此云想。是能取像專執之義。或契約義。諸行無常等者。謂表諸行知是無常。詮表差別故名爲句。業用德時者。一解如章。新云。或如說善能招愛果。刀能割物等。此是業用。寂滅爲樂此是德也。三無數劫此是時也。或詮諸法相隨順名相應。詮義不同名差別。舊又云。時是助句。相應是鈎戀義。謂辨了業用德時。於中所有名義鈎戀不斷名相應。差別者謂隨何法有此業用與時不同名差別。如象有四跡者。謂尋跡得象。今亦尋句得義。故翻爲句也。以章釋句者。舊云。方俗不同。此方句少章多。印度國法章句二種俱是詮義究竟。故得以章釋句。又正理抄云。外典以數字爲句。與章不同。此以詮義爲句。與章相似。字者梵云惡刹那。唐云字。是不流轉義。謂不隨方流轉改易故。又是能顯義。今言文者是字之用。言不相應行中字者。謂聲上屈曲差別。詮表之字是不相應行蘊所攝。不同墨書字者。論難云。豈不此字亦書分名。答云。非爲顯書分製造諸字。但爲顯諸字製造書分。謂云何當令雖不聞說亦得解。故造書分。是故諸字非書分也。又欲依色字記持不相應字。及將色字傳流異方及於後代。故造書字。上雖已明。然且未了。此名句文差別相者。對法云。彼二依文。如綾錦文由起於絲顯異餘處。卽依此顯安布以爲龍鳳。又合龍鳳以作錦窠。根本皆依文絲顯成。絲如其聲。文如其字。龍鳳如名。句如錦窠。壹伊等字顯在聲上。卽將此顯。能因自性別更生名。因差別義別更生句。故此名句皆依於文。問。如一字名與文何別。抄云。西方字本劫初已來。依諸轉聲先有准的。後人取之施於此法。便有名生。未施設時無名但字。如無義字非謂能詮。故知能詮別有名起。極太相近。濫相極難知。如璧與光二色難辨。總說合集者。梵云

三木訖底。此云總說。梵云三摩婆曳。此云合集。字界緣者。且如此方江河等字。皆從其水。水即是界。工可是緣。以工助水成江。以可助水成河也。言總說起自嗢遮者。既字緣助嗢遮轉成總說。明知總說起自嗢遮。如此江河等字起自於水。明知總說亦是合集者。嗢遮字界本是合集。轉成總說。界義猶存。豈非合集。如江河等字猶有水故。一名是名非名身者。謂有詮表故。是名未聚集故非身。且說言名。有其多種。或一字名。或二字三字名。隨其多少。但爲一名皆非身也。言多名身者。謂多名爲一身者。名非謂有種多名身也。句文亦爾。句亦多位。謂處中句。八字。初句。六字已上。後句。二十六字已下。短句。減二十六字。長句。過二十六字。經論文章。多依中句。文亦多種。或多念聲生一文。或一文生一名等。云云。如迦佉伽者。問。先何故擧惡阿等。此何以擧迦佉伽等。舊云。前是字音。此是字體。爲顯字音字體皆是字故。擧初以攝後。於九義立一瞿聲者。經部義。表名等非實定故。毘婆沙宗。別有實物名爲名等。若依經部。名等是假。論主有相破。

從此第三諸門分別。於中有二。一辯名等。二明同分等。且初明名等者。論云。此名身等何界所繫。爲是有情數。爲是非有情數。爲是異熟生。爲是所長養。爲是等流性。爲善爲不善爲無記。此皆應辯。頌曰。

欲色有情攝　等流無記性

釋曰。言欲色者界繫門也。謂此名身等欲色界繫。謂名句文身依聲而

有。無色無聲故無名等。有情攝者。論云。又名身等有情數攝。能說者成非所顯義。解云。能說者成者顯唯有情也。非所顯義明不通非情也。等流者。五類門也。此名身等同類因生。於五類中唯等流性。非業所感故不通異熟。非色法故不通長養。無記者。三性門也。唯是無覆無記性攝。謂名身等依聲而起。非是心力親能發起故唯無記。聲是心力親能發起故通三性也。（冠註論本第五二十一右）

【暉鈔】卷上末四十七左　非所顯義者。若所詮三界皆是所詮義。若就所詮義卽通三界攝也。

【麟記】論本第五十四右　無色無聲故無名等者。有餘師說。名亦通無色。然不可說。以無用故此非正義。非所顯義者。婆沙問云。誰成就名等。爲能說者。爲所說耶。若能說者則阿羅漢應成染法。以羅漢等亦說染汙法故。若所說者則外無爲亦應成就名等。以彼亦是所說法故。答。唯能說者成。若爾後難善通。前難如何。答。羅漢雖成染汙等名。而不成就染汙等法。以染汙等名皆無覆無記性故。非業感故不通異熟者。謂隨欲生起。非酬往業。故非異熟。是有爲故非實。同類因生故非一刹那。故唯等流。

從此第二明同分等。論云。如上所說餘不相應所未說義。今當略辨。頌

曰。

同分亦如是，　幷無色異熟　得相通三類　非得定等流

釋曰。同分亦如是者。爲顯同分如前名等通於欲色有情等流無覆無記。幷無色者。謂顯同分非唯欲色亦通無色。幷異熟者。謂明同分非唯等流並通異熟性。由此同分是界通三。類通二義。界三者三界也。類二者等流異熟也。得相通三類者。得謂能得。相謂四相。此得及相唯通三類。一有刹那。二等流性。三異熟性。苦法忍上得及四相是有刹那。餘二可知。非得定等流者。非得者非得也。定謂二定。無想滅盡也。非得及定於五類門同類因生。唯等流性。非業所感故不通異熟。非色法故不通長養。等流性故非有刹那。是有爲故。故不通有實也。（冠註論本第五二十右）

【暉鈔】卷上末四十八右　同分業感即異熟。若自性威儀工巧邊即等流性也。

俱舍論釋頌疏義鈔卷上末

【麟記】論本第五十四左　同分通等流異熟者。正理論云。云何異熟同分。謂地獄等及卵生等趣生等同分

也。云何等流同分。謂界地處種姓族類沙門梵志學無學等所有同分。有說。先業所引生是異熟同分。現在加行起是等流同分。餘二可知者。即等流異熟二也。法上得及四相是異熟。餘是等流。

倶舍論頌疏　論本第五終

倶舍論頌疏　論本第六

中大雲寺沙門圓暉述

分別根品第二之四

從此大文第三明因緣。於中有二。一明六因。二明四緣。就正明六因中復分爲三。一正明因體。二明因得果。三明法從因生。就初正明因體中文分三段。一總標名。二別顯體。三三世分別。且初總標名者。

論云。如是已說不相應行。前言生相生所生法非離所餘因緣和合。此中何法說爲因緣。此總問也 且因六種。總答 何等爲六。別問 頌曰。

能作及倶有　同類與相應　遍行幷異熟　許因唯六種

釋曰。上三句頌標六因名。第四一句結歸本宗。一能作因。二俱有因。三同類因。四相應因。五遍行因。六異熟因。此如後釋。經部等宗不許六因。無經說故。許有四緣。有經說故。然有部宗中迦多演尼子大阿羅漢靜室思惟言。有六因經。是諸天傳來。非餘部許。故論云。對法諸師許因唯有如是六種。（冠註論本第六右初）

【暉鈔】卷中本右初　倶舍論釋頌疏義鈔卷中本

京兆西明寺沙門慧暉述

論本第六　因緣二法。一體義分。皆通親疏。六因中。能作因即疏。餘五因即親。四緣中。因緣即親。餘三緣即疏。因如根於識。如種於芽。如生母等。緣如養母。如地水於芽。如境於識。就中因名即親。緣名即疏。就名親故先說因也。六因次第者。能作因體通七十五法寬故。先說第一。俱有因即七十二法次寬。說在第二。同類因通七十二法。與俱有因體等。不通未來世狹俱有因。說在第三。相應因雖通三世。即唯心王心所狹同類因。說在第四。遍行因就心心所中唯染者狹相應因。說在第五。異熟因若欲界即通五部。若遍行因即二部一分。據上八地異熟因即唯修部。遍行因即二部。一分狹遍行因。說在第六也。

【麟記】論本第六右初　倶舍頌疏記　論本第六

冨春沙門遁麟述

且因六者。四緣後辯。且辯六因故言且也。問。六因中所以能作最居先者。顯宗論云。能作因體通一切法。是故前說。倶有因體通諸有爲。故居第二。餘同類等於有爲中。如其所應各攝少分。隨言便穩次第而說。迦多演尼子思惟者。正理云。謂諸經中。所化力故。世尊方便作異門說。對法諸師由見少分相。知其定有分明結集。故有言。此六因義說在增一增六經中。時經久遠其文隱沒。尊者迦多演尼子等。於諸法相無間思求。冥感天仙現來授與。如天授與筏弟遮經。其理必然。如四緣義雖具列在此部經中。而餘部中有不誦者。乃至廣說。解云。如來在世有一苾芻。名筏弟遮。中夜誦經文。虧一品。室中天授。忽領異聞。晨白世尊。遂蒙印述。六因准彼理亦應然。如四緣在增四經中。而化地部達磨毱部中不誦。六因亦爾故也。

從此第二別顯體者。六因不同。文即爲六。且初第一能作因者。頌曰。

　除自餘能作

釋曰。除自者。唯有爲法也。謂有爲法生。除其自體。自體非因。故須除也。餘能作者。正明因體。有爲法生時除自體外。餘一切法皆不爲障名能作因。故頌餘字通一切法。謂有爲無爲皆能作因體也。故論云。一切有爲唯除自體。以一切法爲能作因。由彼生時無障住故。解云。以不障義釋能作因。故知能作因寬通一切法。增上果狹唯有爲法也。因

能作果名能作因。能作即因持業釋也。問。若據此義餘五種因亦名能作因。皆能作果故。何故此因獨名能作。答。論云。雖餘因性亦能作因。然能作因更無別稱。如色處等。總即別名。解云。所餘五因皆有別名。唯能作因未有別名。謂餘五因所簡別故。此能作因雖標總稱即受別名也。（冠註論本第六右二）

【暉鈔】卷中本左初　對所生果出體。頌中言除自餘能作。故通一切有爲無爲法也。問。未來闕縁不生法與餘一切法作能作因不。法體不生如何不障。答。能作因以不障義成。但是法體自闕縁不生也。問。自體何故非自體因。頌言除自餘能作。答。以自體恒障自體。如一念眼識現在第二眼識同時如何得生。以相障故。自體不與自體爲能作因也。

【麟記】論本第六左初　言除自體餘有爲法者。簡無爲法。以無爲法無生故。故不望彼爲能作因。所以須除自體者。謂無障義是能作因。自於自體恒爲障礙。又一切法若待自體。應有恒成損減等過。謂若待即此自體。自體恒有應恒成之過。若待第二自體。第二自體恒無。應成損減過。有餘師說。自於自體不見有用。故非因縁。猶如指不自指。刀不自刻。眼不自見。以一切法爲能作因者。問。日光生時星等不現。能緣彼識緣闕不生。如何有爲唯除自體。以一切法爲能作因。答。於彼生時不爲障住。故說能作。非謂不生時說名能作。譬如國人以其國主不爲損害咸作是言。我

因國主而得安樂。若爾涅槃及不生法。普於一切有爲生中本無障用。何得爲因。答。雖無障用而亦爲因。如無力國王亦得如前說。言無障住者。謂此因體住無障性中無障住。因卽能作者。此卽能作在因。准顯宗。總有四說。此是一解。第二解云。或復此因。能作二義。以無障故可名爲因。可名非因不能生故。三云。能作者是餘親因。此能助故名能作因。解云。謂此能助餘五因也。四云。或此令他能有所作。他卽是果。能作名因。名能作因。解云。如華果能爲後種也。如色處者。謂眼等十處皆是色法。以餘九處有別名。唯此色處更無別名。以餘九之所簡別。而此色處雖標總稱卽受別名。今此能作雖是總稱亦成別名。此依四釋中初說。故爲此釋。

從此第二明俱有因。文分兩段。一正明俱有因。二明心隨轉。且初正明俱有因者。論云。如是已說能作因相。第二俱有因相云何。頌曰。

俱有互爲果　　如大相所相　　心於心隨轉

釋曰。俱有者。俱時而有也。互爲果者。釋俱有因也。論云。若法更互爲士用果。彼法更互爲俱有因。解云。俱有作用。俱有卽因名俱有因。持業釋也。若果與因俱名爲俱有。俱有之因依主釋也。如大相所相心於心隨轉者。指體也。此有三類。如大者。謂四大種。第一類也。此四大種造果

之時。互相假籍生所造色故。互相望爲俱有因。相與所相者第二類也。相者四法相也。此四法相與所相法更互爲果。謂此能相相所相故。復因所相能相轉故。故互爲果名俱有因。心於心隨轉者第三類也。謂心王與心隨轉法亦更互爲果。論云。是則俱有因由互爲果遍攝有爲法。如其所應。解云。結上三類也。如其所應者。謂有爲法中有五。一四大互相望。二相所相相望。三四相自互相望。四心與心隨轉相望。五隨轉自互相望。皆俱有因故言如其所應也。又論云。法與隨相非互爲果。然法與隨相爲俱有因。非隨相於法。此中應辯。解云。此文是論主出有宗以互爲果釋俱有因有過也。法者所相法也。隨相者小四相也。法不因小相相。法非小相果。小相因法轉。小相是法果故。言法與隨相非互爲果。然法與隨相爲俱有因者。以隨相因法轉故也。法與隨相爲俱有因。非隨相於法者。以隨相不相所相法故。隨相望法非俱有因。既法與隨相非互爲果而名俱有因。如何今以互爲果

義釋俱有因。此中應辯者勸釋通也。（冠註論本第六右三）

【暉鈔】卷中本右二　釋名者。心王與心所俱有。故名俱有。心王。與心所爲依名因。俱有卽因。持業釋。心所翻上可知。若心王與心所。俱有法爲因。名俱有之因。依主釋也。俱有者俱時而有。標有宗。因果俱時有。名俱有寬。卽如心王與小相爲俱有因也。互爲果者釋卽狹。心王與小相不互爲果。如何心王與小相爲俱有因也。今釋云。但是互爲果者卽是俱有因。卽互爲果因不遍宗狹也。小相故。設不互爲果。心王得與彼爲俱有因也。問。頌中何故不說心隨轉色及心所兼四相自互爲俱有因耶。答。正理論云。如心王與心所決定。卽說。心所自類相望多少不定。隨轉色散心及無色定卽全無不說。生等四相依本法轉。自互不相依。故論不說。或可但說異類法爲俱有因。同類法不說互爲果自成也。問。心王上小相不相心王。心王如何與彼爲俱有因。又心所上大相不相心王。心王緣何與彼心所上大相爲俱有因。答。由隨心王彼小相及心所上大相方得起故。心王與彼爲俱有因也。

【麟記】論本第六左二　互爲果釋俱有因者。論云。猶如三杖互相依住。如是俱有法因果義成。准婆沙評家及正理論。皆言同一果義是俱有因。言一果者。如心心所同共成一果也。此四大種至互相假藉者。婆沙云。謂四大種若有偏增。若無偏增。地爲三因。三爲地因。所以者何。地不觀地生所造色。以一切法不觀自體及同類體爲他因故。餘大例爾。三四相自互相望者。此經中分別三類。爲五類故有四相自相望也。若依正理不說四相及心隨轉自互相望。故彼問云。此中所說因相太少。然自釋云。本論說故。此中應辯造論者意。又於此中爲欲顯示但說異類爲俱有因。同類互

爲因不說自成故。准此論文但說三類。此中應辯者。若准新科。謂此中辯何法名隨轉連爲句也。今章言。是論主勸有宗通互爲果過。其過者。謂小相非互爲果。然法與小相爲因。即是因不遍宗法。因狹宗寬。今詳婆沙評家。既以一果釋俱有因。世親論主自以互爲果釋。何言論主却出有宗過耶。故正理師彈此論互爲果有過。遂以一果釋俱有因也。舊云。入阿毘達磨是此論後造。言互爲果者學我世親阿闍梨也。准此等文不應是論主出有宗過。請重詳之。問。婆沙等言一果者爲是同時。爲是異時。設爾何失。二俱有過。若是同時即自體非自體果。如何俱有同一果耶。又大生小生不同一果故。此即一果之因不遍宗法。與前何異。若謂異時果者。此即小相與其本法同一等流異熟因。何不與本法爲因。此即一果之因通其異品。於異品轉其過更甚。新云。兩論所立皆無有過。如言變礙名色。此因不遍無表。急食急行名之爲馬。而有馬急食行。亦有是馬緩食行。然此立名不違世理。互爲果義及一果因例亦應爾。是入阿毘達磨將不違理。兼擧二因。此論略故但擧其一。解云。二因者即互爲果及同一果爲二因也。

從此第二明隨轉。於中有二。一明隨轉體。二明隨轉義。且初明隨轉體者。論云。何等名爲心隨轉法。頌曰。

心所二律儀　彼及心諸相　是心隨轉法

釋曰。前兩句辯體。第三句結成。言心所者謂四十六心所是也。言二

律儀者。謂靜慮無漏二種律儀。此二律儀入定則有。出定則無。名心隨轉。彼及心諸相者。彼謂彼前心所及二律儀。及心者謂心王也。取彼法上生等四相及心王上生等四相名爲諸相。故諸相字通彼及心王上相也。此等諸法名心隨轉。如上三類。一心所。二定道律儀。三諸相。是隨轉法也。（冠註論本第六右五）

【暉鈔】　闕之

【麟記】論本第六右四　彼及心諸相者。此一句唯取生等四相也。以一彼言攝二種相。一心所上相。二律儀上相。更兼心王上相。總有三類四相也。舊云。既言生等。不言生生等。即顯隨相非心隨轉也。

從此第二釋隨轉義。論云。如何此法名心隨轉。頌曰。

由時果善等

釋曰。由時者。時有四種。一生。二住。三滅。四墮一世。生在未來。住滅現在世。若未來法未至生相。及過去法。三相不攝故。生住滅外別說墮一世。此四相不同。總是時攝。謂前隨轉與此心王同一生。同一住。同

一滅同墮一世。故名隨轉。由果等者。果謂一果。等取一異熟及一等流。謂前隨轉與心同得一果。同感一異熟。同得一等流。名心隨轉。此一果言意取士用及離繫果。故異熟等流外別說一果也。然士用果總有四種。一俱生士用。此復有二。一俱有相應因展轉士用果。二及餘同時造作得者。二無間士用。此復有二。一等無間緣所引起者。二及餘隣次造作得者。三隔越士用果。此復有二。一異熟果。二如農夫春種秋收隔越士用果。四不生士用果。謂是擇滅體不生也。此一果言於俱生士用中唯取同時造作得者。於無間中除同性法無間。以同性無間等流攝故。取餘異性無間果也。於隔越中除異熟果。以三果中異熟攝故。取餘隔越遠士用果。及取第四不生士用。故一果言唯攝士用及離繫果。由善等者。等取不善無記。謂此隨轉與心同善不善及無記性名心隨轉。論云。應知此中前一後一顯俱顯共。其義不同。解云。前時言一顯俱一時也。後果言一顯共一果也。由此十因名心隨轉。謂時四種。果等三種。

善等三種。是十因也。（冠註論本第六左五）

【暉鈔】卷中本左二　問。何故四相中不說異相。別說墮一世。答。生顯未來世。住顯現在世。滅顯過去。一念三相各能顯一世。心心所不相離。異相於三世無能顯用。故不說也。墮一世者。生相已前滅相已後名墮一世。亦同現在心心所不相離也。或墮一世能顯未來不生法。雖不與心王等同至生住等三位。法雖不生亦爲俱有因。故別說墮一世也。問。若爲知心心所不相離者。但說墮一世即得。何須別說生住滅三相耶。答。若未來法未生時。即總同墮一世。若後法生至生住滅三位。即一世中有前後。故墮一世外別說生住滅三也。此一果言者。即取三果中。別釋一果也。俱有相應因展轉士用果者。俱有即前疏中釋五類法。同時互有力用。相應因即同時心心所。同時士用。此一果中不取者。此二因不共取一果。即自互同時爲因果。爲心心所不同力用取後念果。若一果即同時心王心所共取後念果。故不取也。及餘同時造作得者。即是同時心心所造得散無表色。同時心王心所共取無表色果也。等無間緣引起者。即三性心各自引後念三性心爲果也。及隣次造作得者。即善心心所引後念不善無記心等是也。不生士用者。即無間解脫道同時心心所有士用力。共證無爲不生法也。與離繫別者。重即得無爲。但名士用不名離繫。以不斷惑故。若斷惑得無爲即得二名。

【麟記】論本第六右四　若未來法未至生相者。謂未來法至生相位則稍親近。餘則不然。以舉未隣生相故。由此故說在未來之前也。及過去法者。謂已謝之法在過去世。非滅相攝故。但言同生即不攝生相之前未來。但言同滅即不攝滅相之後過去。故三相攝法不盡也。故正理云。豈不但言

一生住滅。卽知亦是墮一世中。雖亦卽知墮於一世。而猶未了此法與心過去未來亦不相離。或爲顯示諸不生法故。問。四相之中不說異者。答。生顯同在未來將入現在。滅顯同在現在入於過去。住顯此法於現取果。卽顯去來現三世同時。異之一相無別顯能故此不說。一果言意取士用及離繫果者。謂等流異熟非俱有因。唯取士用離繫二果。故瑜伽云。夫以果言下攝一切從因緣果。然由此中說俱有因故。不應明餘之二果。由此果言唯攝士用及離繫果。恐有難言。若爾此中解隨轉義。但應說一果不應言餘二種。故今釋言。爲遣疑妨須說彼二。意義云何。夫士用果總有四種。文如章例 如是四種皆依能行之心俱有因力所引起故。依如是義皆名士用。今此隨轉中言一果者。不說展轉士用果。以彼自體非自體果非一果義。但取俱生中餘造作得者及餘無間隔越不生諸士用果。恐諸未解者聞一果言。謂攝俱生展轉士用。及執唯有俱生士用。故於今時更別顯示等流異熟決定與因不俱時果。爲欲遮遣唯執與因俱生和合聚中有士用果。所以須遮此士用者。非一果故。又復何但爲遮唯執非生展轉之果。亦乃兼顯無一果義。由斯意故不說等流異熟。非所要非一果攝。舊解亦同。新云。然此論文遮得同時果。非是欲取無間隔越諸士用果。與上釋異。繁不具述 一俱有相應因展轉士用果者。卽心心所四相等互爲果也。二及餘同時造作得者。謂展轉果之外名之爲餘。正理抄云。如四大種所造有對色等。准此既言有對色等。卽通表無表。林云。謂同聚之中隨相及心同時表無表色也。今詳隨相名造作得。未詳所以。等無間緣所引者。卽前念心心所等有力能引起後念等之果。如下當明。二及餘隣次造作得者。謂此造色是無間緣果之外故名餘。後念望前非其遠隔故曰隣次。此云隣次之言望前念心所等。造作之言望同時大種。又云。唯局定道

二種無表色。以色是隨心轉故。隔越果者。謂第三念已去所得諸果是。如農夫隔越遠果者。正理抄云。如人種田等訖。後於異時芽等方起。此果亦爾。解云。即如初念大種懸造未來衆多無表。望前大種豈非隔越　於俱生士用中唯取同時造作者。以展轉果自體非自體果非果義故不取也。取餘異性無間者。上明無間士用有二。一等無間緣果。二隣次造作得果。然於其中通其同性及以異性。今除同性但取異性。且如等無間緣果中異性者。如前善心等引後不善心等是異性也。同性可知。其造作得果。若唯取無表望大種。但是異性。若兼望心即通同異。然此異性之果總望二類通心及色。故一果言唯攝士用及離繫果者。結上也。然此總取四士用果。一同時造作得果。二異性無間果。三遠士用果。四不生士用果。此同舊解。由此十因名心隨轉者。但是據其大位。非要皆具十因。如三性不可俱故。無漏隨轉無異熟果故。

論云。此中心王極少由與五十八法爲俱有因。謂十大地法。彼四十本相。心八本相隨相名五十八法。五十八中除心四隨相餘五十四爲心俱有因。解云。五十八者。謂受等十大地法。此十法上各有四大相成四十。足前成五十。心王上四本相四隨相爲八。足前成五十八也。心王與此五十八法爲俱有因。五十八法爲士用果。此五十八中除心王上四小相餘五十四法與心王爲俱有因。心王爲士用果。謂心不由隨相相。然

隨相依心而得轉故。隨相望心但爲果不爲因也。有八對法是俱有法非俱有因。故論云。諸由俱有因故成因彼必俱有。或有俱有非由俱有因故成因。此標也 謂諸隨相各於本法。此第一對。謂小相不相本法。雖與本法俱有非俱有因也。此諸隨相各互相對。解云。此第二對。謂隨相唯相本相。非互相生。展轉相望不同一果等。故雖俱有非俱有因也。隨心轉法隨相於心。解云。是第三對。隨心轉法上隨相自上四小相望心王非一果等。非俱有因也。此諸隨相展轉相對。是第四對。隨心轉法上隨相自互相望非互爲果。理非因也。一切俱生有對造色展轉相對。解云。是第五對。如色聲等是有對造色也。雖然俱有非同一果等。非俱有因也。少分俱生無對造色展轉相對。解云。是第六對。無對色者謂別解脫戒無表也。七支無表雖俱時有。由展轉相望非一果等。非俱有因也。簡定道二無對色言少分也。一切俱生造色大種展轉相對。解云。是第七對。造色者所造也。大種者能造也。能造所造展轉相望非一果等。非俱有因也。一切俱生得與所得展轉相對。解云。是第八對。然法俱得與所得法雖俱時有。此得或前或後或俱生故。以不定故非俱有因也。（冠註論本第六左七）

【暉鈔】卷中本四右　極少由與五十八法者。卽約二定已上無覆無記心起有五十八也。若欲界更加尋伺。亦名有四相。若極多卽初定善心有大地十大善地十尋伺欣厭隨一。兼心王成二十四。兼七支無表成三十一。各有四大相。同聚有一百五十九法。心王與一百五十八爲俱有因也。中間多少准此可知。問。云何不取小相爲隨轉法。答。正理論云。不由彼力心得生故。非心與彼互爲果故。聚中多分非彼果故。故小相非隨轉法也。若爾心王如何與小相爲俱有因。答。彼由心王生等諸法小相得轉也。諸由俱有因故成因者。卽互爲果爲因必定俱有。或有俱有非由俱有因故成因。雖然俱有無互爲果爲因不成俱有因也。八對法不互爲果故不成俱有因也。若於十義中簡。前四對闕果三義非俱有因。第五五塵爲所造。雖然俱有闕性三。色聲通三性。餘三塵卽無記。五塵各取後念五塵爲果。又闕果三也。第六闕果三。七支各取當類後果。第七所造五塵無表共通三性。四大卽無記。闕性三果三也。第八闕時四義也。

【麟記】論本第六左六　言極少由與五十八法爲俱有因者。謂唯約受等十心所辯。無減於此故言極少。且如二定已上。於無覆無記心位唯有十一法。併大小四相有九十九法。心王於此九十九內唯與五十八法爲因。解云。二定已上無尋伺故無覆無記。又無信等癡等故唯十心所。幷心王爲十一。唯此位極少。若欲界初禪有尋伺故非極少也。問。此何不望心所上隨相爲因耶。答。以踈遠故。心王望彼非俱有因。謂心王力不及第二也。若論極多。心王卽與一百五十八法爲因。謂初禪中大地十大善地十欣厭隨一及與尋伺定共七支總三十一法。併大小相總二百七十九法。除其心王定共戒等上小相故。但一百五十八法爲因也。言心不由隨相相者。顯宗云。隨相於一有功能故。唯與所相爲俱有因。正理亦云。何緣心隨相非心俱有因。

不由彼力而心得生故。非心與彼互爲果故。聚中爲多分非彼果故。解云。小相但相大相之一法。餘法並非小相果也。卽由如是所說多因。隨相不名心隨轉法。因便明隨相非心隨轉也。若爾云何心能與彼爲因。答。由隨心王生等諸位而得轉故。問。心所上相不相心王。何得互爲因耶。答。彼於心王有力用故。如心所於心王。故顯宗云。本相與法其力等故。同其本法爲俱有因。不同心王隨相以無力故不爲因也。此上明因通取心所上相。有餘師說。唯十大地並心本相一十四法爲心王因。此非正義。論廣有破。諸由俱有因故成因彼必俱有者。上因字是因由。所以之因。下因字是因緣因。謂若由俱有之理得成因者。必是同時故言必是俱有等。或有俱有非由俱有因故成因者。謂或諸法雖是同時。不由同時之理卽成俱有因。卽如下八對之法是也。八對法中初對如前解。第二對注中言展轉相望不同一果者。展轉謂四相。四相互望也。非同一果等者。如小生但生大生。小住但住大住。故不同果。等取非一異熟及一等流。新云。此非一果意極難解。詳此卽是共力同取是一果義。果雖是同力不同取。非是一果。故正理云。聚中多分非彼果故。解云。一共力。二同取。是一果義。如兩人共證擇滅。無爲果雖同非是一果。要相應等俱有力能。方名一果。今四小相雖與本法同得一異熟等流。由力不同故非一果等。此對旣爾。餘類亦爾。第五對色聲等雖復同時。相望無共得一果等。故非俱有因。造色大種者。然四大種有共得造色果義。造色望大種都無果義。故亦非互爲果。論總結云。如是等諸法雖名俱有。而非由俱有因故成因。非一果異熟及一等流故。此卽通前七對無一果義。第八得與所得以不定故。論別明之。又上八對於十因。前之四對及第六對皆具七因。但無果等三也。第五一對有時等四無善等三及果等三。如色聲通三性。香等唯無記故。第七對亦爾。第八得與所得雖有同性。然時不定。由此或前或

後。偶然相値故。有宗所明同時因果。如焰與明。如身與影。若依經部。前因後果如芽與種。論有相破。云云。

從此第三明同類因。論云。如是已說俱有因相。第三同類因相云何。頌曰。

同類因相似　自部地前生　道展轉九地　唯等勝爲果
加行生亦然　聞思所成等

釋曰。同類因相似者。謂善五蘊與善五蘊展轉相望爲同類因。言展轉者。如色蘊與色爲因。與餘四蘊爲因。餘四蘊等望色等皆得名爲因也。染汚與染汚。無記與無記。五蘊相望應知亦爾。言亦爾者。同前善五蘊亦展轉爲因也。自部地前生者。言自部者。於相似中唯取自部爲同類因。非一切相似皆同類因也。部體五部。即見苦所斷乃至修所斷。此中見苦唯與見苦所斷爲同類因。乃至修所斷唯與修所斷爲同類因。言自地者簡自部中他地也。於自部中唯取自地爲同類因。非他地也。地謂九地。謂欲界四禪四

無色也。如欲界見苦。唯與欲界爲同類因。乃至有頂。唯與有頂爲同類因。以有漏法部繫皆定。異地相望皆無因義也。前生者。於自地中唯取前生爲同類因。過去望現未名前生。現在望未來名前生故。前生字唯通過現。若過去世與現未爲同類因。若現在世與未來爲同類因也。（冠註論本第六八左九）

【暉鈔】卷中本四左　同類因者。若同類現在因即持業釋。若與後同類法爲因即同類之因也。染法寬通不善有覆無記五蘊皆互爲因。同類因等流果也。

【麟記】論本第六九右　同類因者。此有二釋。若與相似法爲因名同類因。同類之因。是依主釋。若以相似法爲因名同類因。同類卽因。卽持業釋。新云。後不及前。染汙與染汙者。此染汙言通不善法及有覆無記。以此二法互爲因故。謂身邊二見是有覆無記。或能與不善爲因。及從不善生故。故以染言通攝二類。無記與無記者。此明無覆無記也。言亦爾者。准論善染之因更無異說。論無記五蘊四說不同。今但敍正故言亦爾。然依論文更有三說。一云。淨無記蘊。五是色果。四非色因。此師意以色性劣故。與勝爲因。四蘊勝色故。非色因故也。二云。五是四果。色非四因。此師意以四蘊力勝。能與五蘊爲因。色蘊勢力劣故不爲四因也。三云。色與四蘊展轉相望皆不爲因。此師意以四蘊色蘊。雖同無記。以力劣故。異類相望皆不爲因也。四說之中。舊云。既無評家。且以後解爲正。新云。初說爲善。以善染性中既五蘊展轉總得爲因。

何爲無記即便不爾。違二性例故。自部者。五部對九地五九四十五類各別爲因。然於此中但簡異地異部。不簡異趣異處。故婆沙云。同地異處所起煩惱展轉相縛。隨類展轉爲同類因。然除異部。五部隨眠繫縛分齊有差別故。言前生者。如發智本論說。云何同類因。謂前生善根與後生善根及彼相應倶有法自界。同類因故成因。然言過去望現在等但是麁相。若准義求。過去前生與過去後生法及現在未來不生法等。過去後生與現在未來生法及不生法。方可盡理。現在亦爾。以望後生及不生法彼皆得爲因。未來無同類因者。以未來法雜亂住故未分前後。假至生相亦未越未來。約世定故非前生也。

道展轉九地者。前言自地依有漏說。若無漏道九地相望皆互爲同類因。言九地者。謂未至中間四靜慮三無色也。依此九地起無漏道。一一皆與九地爲因。依未至地起無漏道。能與九地道諦爲因。乃至無所有處起無漏道。亦與九地爲同類因。論云。此於諸地皆如客住不墮界攝。非諸地愛攝爲己有。是故九地道雖不同而展轉爲因。由同類故解云。無漏非界繫。雖起於諸地如客人住也。有漏愛攝故墮界攝。若無漏法非九地愛攝爲己有故。無漏道不墮界攝也。唯等勝爲果者。簡差

別也。然唯得與等勝為因。非為劣因。為無漏道謂加行生故。豈設勤勞劣法為果。故與等勝為同類因。且如已生苦法智忍還與未來苦法智忍為同類因是為等因。若苦法忍與苦法智乃至無生智為同類因是名為勝。智勝忍故。廣說乃至諸無生智唯與等類為同類因。更無有法勝無生智故。又諸已生見道修道及無學道。隨其次第與三二一為同類因。解云。見道與三為因。見修無學也。修道與二為因。除見道也。無學道與一為因。除見修道也。又於此中諸鈍根道與鈍及利為同類因。諸利根道為利道為因。如隨信行及信勝解時解脫道。隨其次第與六四二為同類因。解云。見道二聖。一鈍。二利。鈍謂隨信行。利謂隨法行。修道有二聖。一鈍。二利。鈍謂信勝解。利謂見至。無學道有二聖。一鈍。二利。鈍謂時解脫。利謂不時解脫。此約三道總有六聖。今隨信行與六為因。信勝解與四為因。除見道二聖也。時解脫道與二為因。除見修四聖也。若隨法行及見至不時解脫道。隨其次第與三二一為同類因。

解云。隨法行與三爲因。謂隨法見至不時也。見至與二爲因。除隨法也。不時與一爲因。除隨法及見至也。論云。諸上地道爲下地因。云何名爲或等或勝。解云。此難九地道互爲因也。上地勝下地劣。與下爲因是則與劣爲因。非等勝也。論云。由因增長及由根故。謂見道等下下品等。後後位中因轉增長。解云。答前難也。不由地有上下令道等有勝劣。雖依下地。望上地道有二種因得名爲勝。一由因增長。第二及由根故。由因增長者。謂見道等下釋因增長也。等取修道及無學道。後後位中因轉增勝。謂修無學道在見道後。無學道在修道後。名爲後後。又見道等各有下下品等九品道也。此九品等位。後後位中因亦轉勝。如上地起見道與下地修道等爲因。及上地下下品等道與下地上中品等道爲因。以後後位因增長也。第二由根者。上地鈍根道與下地利根道爲因。論文不釋根者。謂易解故。又論云。雖一相續無容可得隨信隨法（論有行字）一一道現起。而已生者爲未來因。解云。此文釋伏難。伏難

意者。難前及由根故。如一身中已起鈍根隨信行道。不可更起利根隨法行道。如何可說上地鈍根道與下地利根道為因。故言雖一相續身無容二道起。而上地已起隨信行道與下地未來隨法行為因。理無妨矣。加行生亦然者。此明有漏加行生法同前無漏唯與等勝為同類因。故言亦然。（冠註論本第六十右）

【暉鈔】卷中本五右　依此九地起無漏道一一皆與九地為因者。如未至有九地各有九品無漏道。九九即八十一品無漏。乃至無所有處亦有九地各九品道。亦八十一品無漏道也。無生智唯與等類為同類因者。三問。無學無生智與獨覺及佛無生智為同類因。即是與勝為因。如何言唯與等類為同類因。答。三乘果位更不轉易。無互為同類因義。下釋得上忍猶不可轉為佛等。況得無生智。豈可轉也。諸鈍根道與鈍及利為同類因者。以鈍容得轉成利故。鈍與利為同類因。利不還作鈍故。利不與鈍為因也。見道與見道為因者。如一身有九品見道。若起下下品見道。餘八品不得生。即與未來九品作同類因。若起下中品。即與未來八品作同類因。不與下下作因。乃至起上上品。即唯與上上品作因。不與未來前八品為因也。難意。上地起無漏道。上地勝道亦勝。依下地起無漏道。地劣道亦劣也。上地已起現行隨信行道。與下地未來未起自身隨法行道為同類因也。此論三道與後為因。後道不與前道為因。以劣故。此約進說。若正理論約退說。許後道與前道為同類因。如鈍根已

生修道與自相續決定不生利根見道爲因。卽修道與見道爲因。無學道與前見修道爲因。約鈍第四果退作前三果。准前說之。又上地利根見道與下地鈍根修道爲因者。約超越第三果人論也。

【麟記】論本第六十右　道九地者。除欲界有頂。欲界無定故。有頂昧劣故。皆無聖道故。唯此九地。於諸地皆如客住者。釋上九地爲因所以也。一如客人住。二不墮界繫。三非愛所執。具此三義故。異地相望皆得爲因。唯等勝爲果者。總望九地雖得爲因。然於其中非無差別。卽此已下指法明也。於中有二。初指事正明。次論云諸上地道已下釋妨。前支又二。初約三道以辯。次又於已下別約利鈍以明。依此論文。見道與三爲因。修道與二爲因。修道無學道不與見道爲因。若准正理。三道展轉得爲因。如前鈍修道。亦與未來不生利見道爲因。前生鈍無學道。亦與未來不生利見修道爲因。或從無學退至學位轉根。亦與已起利根修道爲因。而言與三二爲因者。且據現起次第而說 准彼與此論不同。或可此論且據現說爲因也。 次約三道分六種聖。此等名義如後賢聖品。釋妨中。初約道勝。後約根勝。於前又二。一約見修無學三道以明勝劣。二於一道中九品以明勝劣。言見道等下釋因增長者。指前論文。擧見道下下品等後後等文也。論文不釋根者。謂上列因根二義。及至釋中但釋因增長不釋根義者。以利鈍之義易解故。故不釋也。不由地有上下令道有勝劣者。謂設依無所有處起。鈍根道望未至地利根道亦非勝也。准此無所有處鈍根道得與依未至地起利根道爲因。與正理論依於自上有。依於下地無少有不同。繁不具述。釋伏難者。但釋見道。以言隨信法行故。所以然者。以修無學道時長相顯不別釋妨。見道時速相隱故別釋妨。如章可解。

聞思所成等者。正明加行善體也。謂聞思所成等者。等取修所成。因聞思修所成功德名彼所成。此之三慧加功用行方得發生。名加行善。聞所成法與聞所成慧爲同類因。是名爲等。聞所成法與思修慧爲同類因。是名爲勝。思與思修爲同類因。除聞所成。以聞劣故。修唯與修爲同類因。除聞思二。以二劣故。欲界無修。是散地故。上二界無思。擧心思時便入定故。無色無聞。無耳根故。論文約三界明因。讀可解也。此加行善束成九品。若下下品爲九品因。下中品與八爲因。乃至上上品唯與上上品爲因。除前劣故。生得善法九品相望展轉爲因。染汚亦然。謂生得善或從下品生中上品。或從上品生中下品。容一一後皆現前故。故得九品展轉爲因。染汚亦爾者。准生得說也。無覆無記總有四種。謂異熟生威儀路工巧處變化心。俱隨其次第與四三二一爲因。解云。後勝前故也。（冠註論本第六十三左）

【暉鈔】卷中本六右　聞思所成等者。此論唯約欲界結頌。不言修慧也。此加行善束成九品者。三法各自

束成九品。前與後爲因。非是三法共束成九品也。因聞思修所成功德者。若言聞等所成慧。即唯大
地慧。若言聞等所成法。散地即通四蘊。定地五蘊也。約三界明因者。欲界聞與聞思。思與思爲因。
無修。色界聞與聞修。修唯與修爲因。無色界修唯與修爲因。異界無因義也。生得善九品。據所感果
有九品。准知因亦有九品。不由加行生。任運而起心。無九品前後。起無次第。不定得互爲因。
若加行善加行生轉勝。不與劣爲因也。染汙即不善有覆。由感果及治道有九品。准生得說也。異熟
生心有九品。亦互爲因。任運起故。威儀等三加行生不與劣爲因也。通果者。如欲界有四定化心
果。化心是定果。欲界四類化心與五地化心爲因。初定有四化心果。不與欲界化心爲因。乃至四定
不與前四定化心爲因。以劣故也。

【麟記】論本第六十一右　思與修爲因者。今謂不然。以欲界有思無修。色界有修無思。異地相望又不
爲因。如何乃言思與修慧爲同類因耶。又言聞與思修爲因者。亦是總言。然於其中理應分別。
如欲界聞不與修爲因故。色界聞與思不爲因故。故論云。如欲界繫聞所成法。能與自界聞思所
成爲同類因。非修所成。欲界無故。思所成法與思所成爲同類因。非聞所成因。以彼劣故。准此不言
與修爲因　若色界繫聞所成法能與自界聞修所成爲因。非思所成因。色界無故。修所成法唯與自界修
所成爲因。非聞所成。以彼劣故。無色修所成唯與自界修爲因。非聞思。以無故劣故。解云。無
故謂無聞思。設有亦劣。准此論文。並約當界自明。理實而言應約自地。今論總相且言異界也。生得善法展轉爲因者。以非加行
力故。任運現前。故得有九品皆互爲因。不同加行善不與劣爲因。如勤功力種稻麥等。莫設
劬勞而無所獲。舊云。生得善與加行善爲因。加行善不與生得善爲因。以彼劣故。今但約生得相

望故通九品。無覆無記四種者。異熟任運而起。最爲微劣。威儀路作意而起力用。少強勝異熟。工巧處強想生。故力用更強勝威儀路。化心是通果。其力最勝。故如其次第相望除前。

從此第四明相應因。論云。如是已說同類因相。第四相應因相云何。頌曰。

相應因決定　心心所同依

釋曰。相應因者。心心所法要須同依方名相應。故言決定。謂同依言即顯必同所依同所緣同行相同時同事五義具足名爲相應。論云。此中同言顯所依一。謂若眼識用此剎那眼根爲依。相應受等亦即用此眼根爲依。乃至意識及相應法同依意根。應知亦爾解云。心與心所所依不異名爲一也。（冠註論本第六左十四）

【暉鈔】卷中本六左　相應因者。若心王名因。心所名相應。相應之因。若心王爲因。即是相應。相應即因持業釋。釋心可知。問。相應因具五義。何故頌文但舉同所依不舉餘四義。答。若心王心所同依。即必同餘四故。舉所依不舉餘四。如兩人觀初月等。同所緣時事行相即同。所依即別故。頌不舉餘四。與俱有因別者。若心王心所同一所依邊即相應因義。若心王心所互相依邊即俱有因義也。

【麟記】論本第六右十二　相應因者。此有二義。謂心心所更相隨順義。用相應法爲因。是持業釋。若與相應法爲因。卽依主釋。謂同依言卽顯必同所緣同行相等者。釋頌中但說同依言。同所緣下所以也。由一所依義最要故。所以偏說。爲遮所緣行相別者及遮異時所緣行相同者。或遮異身所緣行相時同者。如衆共觀初月等事。爲以一言總遮如是衆多妨難故說同依。以言同依名同所緣同行相等故。問。心心所相應因體卽倶有因。二因於何別。答。由互爲果義立倶有因。如商侶相依共遊險道。由五平等共相應義立相應因。如商侶同作食等事業。其中闕一皆不相應故。又正理云。由展轉力同生住等是倶有因。若展轉力同緣一境是相應因。准此倶有因通四相等是寬。相應因唯心心所是狹。故知若是相應因必是倶有因。自有倶有因非相應因也。

從此第五明徧行因。論云。如是已說相應因相。第五徧行因相云何。頌曰。

徧行謂前徧　　爲同地染因

釋曰。徧行者。謂十一徧使及相應倶有法也。十一徧使者。謂苦諦有七。五見疑無明也。集諦有四。邪見見取疑無明也。此等諸法徧與五部染法爲因。名爲徧行。徧行卽因持業釋也。謂前徧者。唯取前生徧行諸法爲

因。此之前生簡未來世。唯通過現。爲同地者。不與異地染法爲因也。論云。此與染法爲通因。故同類因外更別建立。亦爲餘部染法因故。由此勢力餘部染(論作煩惱)法及彼眷屬亦生長故。解云。爲徧行因取五部果名爲通因。若同類因唯自部果。非通因也。言眷屬者。謂與煩惱相應俱有法也。(冠註論本第六左十五)

【暉鈔】卷中本七右　遍行因者。卽遍行卽因。與同類因爲別者。同類與後念自類爲因。遍行與後念不遍隨眠爲因。如前我見生後念我見二因無別也。

【麟記】論本第六十三右　遍行因者。唯是持業釋。不得爲依主。以因是遍行義果非遍行義故。不可言遍行之因也。言遍者。三義遍故。一遍緣五部。二遍隨眠五部。三遍與五部染法爲因。由此三義故名遍行。五部惑中唯此十一有上三義故名遍行。餘惑不然故非遍行。此等癈立如隨眠品。然此遍行因能取他部果。若同類因唯取自部果。是故二因寬狹有異。由是論中四句分別。云云。

從此第六明異熟因。論云。如是已說遍行因相。第六異熟因相云何。

頌曰。

異熟因不善　及善唯有漏

釋曰。唯諸不善及善有漏是異熟因。異熟法故。問。何緣無記不招異熟。答。由力劣故。如朽敗種。問。何緣無漏不招異熟。答。無愛潤故。如貞實種無水潤沃。又非繫地。如何能招繫地異熟。餘法具二。是故能招。如貞實種水所沃潤。言異熟者。依薩婆多宗。因是善惡。果是無記。異類而熟。名爲異熟。倶有等四因唯同類熟。謂因與果倶性同故。能作一因兼同異熟。謂有同性果。有異性果故。今異熟因唯異類熟。故唯此一名異熟因。（冠註論本第六十六右）

【暉鈔】卷中本七右　異熟因者。通二釋。准前。異熟因極速三念方能感果也。

【麟記】論本第六十三右　異熟因唯諸不善至異熟法故者。此辯因體。簡無漏及無記。以不善法及善有漏有異熟果名異熟法。非此善等體即是異熟法也。舊云。法之言持。即目於因。此因能持異熟果故名異熟法。異熟之法依主釋也。若言異熟即法是持業釋。即三性法中不善全是異熟因。無記全非。善有二類。若有漏者是異熟因。無漏善法非彼因也。釋異熟名者。異熟或在因。或在果。持業依主二釋並通。如前已辯。餘法具二者。翻前無漏二義可知。依新更加力用增强成三義也。故唯此一名異熟因者。是婆沙師對餘因竝立。彼意以熟名雖通六因之果然非異熟故。唯一名異熟因。准論主

釋熟名。不通餘果。故論云。由此但應作如是釋。變異而熟是異熟義。不應但異簡別餘因。

此論主正釋也。

從此大文第三明世攝。頌曰。

遍行與同類　二世三三世

釋曰。二世者。遍行同類唯通過現二世也。三世三者。謂異熟相應俱有三因通三世也。頌既不說能作因所居。義准應知通三世非世。非世者無爲也。(冠註論本第六十六左)

【暉鈔】卷中本七右　同類遍行就三世位建立。故通二世。異熟等三因就體建立。故通三世。遍行同類互有寬狹。四句可知。

【麟記】論本第六十四右　明世攝者。謂明六因於三世中立在何世中也。故有此門。遍行同類不通未來者。然此二因皆因前果後。未來既無前後。故無此因。已如上辯。相應俱有既要同時生住等。故通三世。其異熟因雖亦因前果後。而善惡性爲因。無記性爲果。約性定故。故通未來。以異熟約體建立。同類因就位建立。故不同也。頌不說能作因。正理論云。不可說彼定時分故。

從此大文第二明因得果。於中有四。一總標果體。二對因配果。三

別顯果相。四因取與時。且初第一總標果體者。論云。已說六因相別世定。何等爲果對彼成因。頌曰。

　果有爲離繫　無爲無因果

釋曰。上句出體。下句釋妨。果有爲離繫者。釋體也。果有二種。一者有爲。謂士用增上等流異熟。此爲六因所引生故名之爲果。二者離繫。擇滅爲體。由道所證擇滅名果。道爲證因。非爲生因。故此證因非六因攝。無爲無因果者。釋疑也。論云。若爾無爲許是果故則應有因。要對彼因乃可得說此爲果故。又此無爲許是因故則應有果。要對彼果乃可得說此爲因故。解云。無爲是離繫果。應名有因。無爲是能作因。應名有果也。爲遣此疑故有斯頌。無爲無因者。無六因故。謂無爲法體雖是果。是所證果。非是六因所引生果故名無因。無爲無果者。無五果故。謂無爲法於生不障立能作因。非能證故無離繫果。無取與用無有爲果。是故擇滅是因無果。是果無因。餘二無爲是因

非果。故三無爲皆無因果。舊譯無爲非因果者此翻謬矣。無爲是能作因。不可言非因。無爲是離繫果。不可言非果。非卽非其自體。無卽乃是無他。故得言無。不可言非也。論云。何緣不許諸無間道與離繫果爲能作因。難合有因。於生不障立能作因。無爲無生。道何所作。答前難也。若爾誰果。果義如何。解云。此有兩句問。一道既非因未知誰果。二無因是果果義如何也。謂是道果。道力得故。言道果者答誰果也。道力得者答果義也。若爾道果應唯是得。道於得有能非擇滅故。解云。得者離繫得也。由道引故應有功能。不爾。於得於擇滅中。道之功能有差別故。答也。云何於得道有功能。徵也。謂能生故。答也。得是有爲。道能生故。云何於滅道有功能。徵也。謂能證故。答由道證擇滅也。由此理故。道雖非滅因而可得說擇滅爲道果。結成也。

(冠註論本第六十六右)

【暉鈔】卷中本七左　六因五果別者。若據體卽不別。據義卽殊。今據義分也。外非情是業增上果。非異熟果。以共受用故也。若爾無爲許是果故卽應有因者。此擧是果門難有因門。難令有因生方能果也。又此無爲許是因故則應有果者。此擧無爲是因難令有生當果也。非能證故。釋無爲不是

能證智。故無離繫果也。是因無果者。體是能作因無果。不能生當果也。是果無因者。當體是離繫。無因。卽不從五因生故。餘二無爲是能作因。體非所證。非是離繫果。體不生。非餘四果也。若言無者。無因卽無過去五因。無果卽無未來五果。若言非者。卽非體。其自體不是因果也。

【麟記】論本第六十四右　無爲無取與故無有爲果者。謂無爲雖於他生不障立能作因。無取與用不名有果。故無爲法無增上果。言二無爲是因非果者。謂虛空非擇滅二種無爲。但約不障是能作因。不行世故非所引果。無記性故非道證果。三無爲皆無因果者。總論三種無爲。皆得名爲無因無果。道於得有功能等者。此難意。道旣能引得。則唯於得有功能。非於擇滅有功能也。言擇滅爲道果者。謂道望擇滅雖非生因。而是證因故是道果。上依有宗所釋。若依經部。不許無爲是因。無經說故。唯說因是有爲故。如經言。諸因緣能生色者皆是無常。廣說。云云。有部通云。豈不亦說唯能生因是無常。故不據無爲唯不障故爲能作因云云。

從此第二明配因對果。論云。總說已竟。於諸果中應說何果何因所得。頌曰。

後因果異熟　前因增上果　同類遍等流　倶相應士用

釋曰。後因者。謂異熟因。於六因中最後說故。初異熟果此因所得。言前因者。謂能作因。於六因中最初說故。後增上果此因所得。由能作因

有增上力所引得果名爲增上。增上之果依主釋也。謂能作因於法不障得增上名。或能作因亦有勝力。如十處界於五識身。諸有情業於器世間。言十處者五根五境。親生五識也、又耳等根對於眼識生等亦有展轉增上生力。聞已便生欣見欲故。謂因耳聞便欣見色遂發眼識。是則耳根有增上力能生眼識也。同類遍等流者。此二種因得等流果。俱相應士用者。俱有相應得士用果。言士用果者。因有作用。如世士夫營農等用因名士用。果從因生名士用果。士用之果依主釋也。如世間說鴉足藥草。醉象將軍。藥草似鴉足名鴉足也。將軍破賊如醉象名醉象也。從譬爲名。士用亦爾。論云。爲唯此二有士用果。爲餘亦有。問也。有說。餘因亦有此果。唯除異熟。由士用果與因俱生或無間生。異熟不爾。此師立俱生無間二士用果。故除異熟也。有餘師說。此異熟因亦有隔越遠士用果。譬如農夫所收菓實。此師更立隔越士用果。故通異熟。春種秋收隔越士用也。（冠註論本第六十八左）

【暉鈔】卷中本八右　或能作因亦有勝力者。已前有力無力。今偏初。或能作因下。卽別明有力能作因。皆據不障義立也。

【麟記】論本第六十四左　初異熟果此因所得者。且果有五。一異熟果。二等流果。三離繫果。四士用果。五增上果。次第狹者居先。廣者居後。六因次第廣者居先。狹者居後。因此前因對於後果。後因對於前果。其離繫果非六因得故此不論。然與士用少相濫故。及狹士用故。別在士用前。不同四果廣狹次第。所以非次異熟之後。於法不障得增上名者。問。唯無障住有何增上。答。卽由無障方得起。得增上名。諸有情業於器世間者。謂由有情業力感器世間。故業望於彼有增上力。此二種因得等流果者。若同類因唯取自界自地自部自性之等流果。若遍行因唯取自界自地自性染汚之等流果。此二因所得果皆似於因故。因雖二其果唯一。問。如邪見生有身見。雖性不同。同是染故爲等流果。善生無覆。雖性不同。同是淨故應是等流。答。染性易同。故得爲果。淨法難同。故不爲果。因有作用者。爲遮勝論於法體外別有業用。卽此二因有勝用力。非越士用體別有士用。故由此二因得俱生勝士用果。此中偏說。醉象將軍者。一解如章。舊又解云。醉象似將軍能入陣故。餘因亦有此果者。問。既爾何以但言相應俱有二因得士用果。答。二師據通名故餘因亦得。頌中約俱生親所得故簡餘四因唯二因得。

從此第三明果相。論云。異熟等果。其相云何。頌曰。

異熟無記法　有情有記生　等流似自因　離繫由慧盡

若因彼力生　是果名士用　除前有爲法　有爲增上果

釋曰。異熟無記法者。唯於無覆無記有異熟果。言有情者。謂異熟果不通非情也。有記生者。謂異熟果善惡業感名有記生。既異熟果唯有記生。明知不通等流長養。以等流果及所長養通三性生故不通也。此上是異熟果相。等流似自因者。謂等流果皆似自因。謂似同類遍行因故。離繫由慧盡者。盡者滅也。慧者擇也。謂此擇滅離繫所顯。故將擇滅釋離繫果。若因彼力生是果名士用者。若法因彼勢力所生名士用果。如因下地加行心力上地有漏無漏定生。及因清淨靜慮心力生變化無記心。此等名士用果。擇滅名不生士用果。謂因道力證得。亦得士用果名。除前有爲法有爲增上果者。有爲法生餘法不障是增上果。故增上果唯有爲法。除前者謂前已生有爲諸法非增上果。謂果望因或俱或後。必無果前因後故。言除前也。重言有爲者。是除前外諸餘有爲。此餘有爲或與因俱。或在因後名增上果。論云。言增上果者顯依主釋

也。增上之果。問。士用增上二果何殊。答。士用果名唯對作者。增上果稱通對此餘。如匠所成對能成匠。俱得士用增上果名。對餘非匠唯增上果。解云。謂匠造屋。屋對匠人是士用果亦增上果。屋對非匠唯增上果。以非匠不造屋。屋望非匠非士用果也。（冠註論本第六右二十）

【暉鈔】卷中本右八　似自因者。遍行染等流。同類因三性等流果也。除前者。謂過去已生有爲法望現在法不得爲增上果。以在因前故也。

【麟記】論本第六左十五　唯無覆無記有異熟果者。謂無記法總有四種。於中唯一法是異熟法。故言有異等。問。何以異熟果非善染耶。答。若是善惡即所造業無變盡期故。異熟果唯是無覆無記中攝。異熟不通非情者。謂外器等共業所感。異熟不爾故不通也。正理論云。豈不大梵所住非情是別業果。應名異熟。何乃言非。有作是言。大梵住處一切大梵業增上生。有餘師言。大梵住處相續未壞。餘可於中有受用理。故非不共。明知不通等流長養者。此宗五類義體各別不同。互不相攝。今因此理證顯宗義。故言明知。言通三性者。等流可知。其能長養即通三性。所長養唯無記。如上已辯。又此二種果唯同類非異熟也。入阿毘達磨釋五果名云。果不似因故名爲異。熟謂成熟。堪受用故。果即異熟名異熟果。果似因故說名爲等。從因生故復說爲流。果即等流名等流果。擇滅無爲名離繫果。果即離繫。故已上三果並持業釋。士用增上從因得名。並依主釋。今此同舊。又云。或異熟之果。

或因與果類相似名等流。等流之果。或離繫之果名離繫果。謂無漏離繫縛故。乃至增上卽果。謂果衆多體增上故。言清淨靜慮生變化心者。謂簡味定等故言清淨也。擇滅名不生士用果等。問。此果旣不生。如何可說用彼力生名士用果。答。正理云。現見於得亦說生名。如說我財生。是我得財義。問。此與離繫何別。答。若無間道斷諸隨眠所證擇滅。如是擇滅名離繫果及士用果。若無間道不斷隨眠重證本時所得擇滅。如是擇滅非離繫果。唯士用果。已上論文。

從此第四明因取與果。論云。於上所說六種因中。何位何因取果與果。頌曰。

五取果唯現　二與果亦然　過現與二因　一與唯過去

釋曰。五取果唯現者。除能作因五因取果唯於現在。定非過去。彼已取故。亦非未來。彼無用故。二與果亦然者。謂相應俱有二因與果唯於現在。同前五因故云亦然。由此二因得俱生果正取果時亦與果故。過現與二因者。謂同類遍行二因與果通過現世。現在世與果者。謂此二因有等流果無間生故。過去與果者謂有隔念等流果也。一與唯過去者。一謂異熟因。此異熟因唯過去與果。謂異熟果不與因俱及無

問生故。此因與果唯過去世。問。取果與果其義如何。答。能爲彼種故名取果。種者因義。現在爲因能取後果故。取果用唯於現在。正與彼力故名與果。謂果將生因與力用令入現在故名與果。故取與用唯目因也。（冠註論本第六二十右）

【暉鈔】卷十七本八右　五取果唯現者。頌中不說能作因取與者。能作因中未來世及三無爲法不能生得果。無取與。以不定故不說也。據實論之。能作因通七十五法。除三無爲外餘七十二法中。若有力者即現在取果。通過現與果。若兼無力者取與皆通三世也。

【麟記】論本第六十七右　問。但言五因取果不說能作因者。答。以能作因現在取果與五因同。於中無無爲無果。所以不說。准婆沙二說。許能作因過去取果。正理唯許現在取果。與此論同。彼言取果者。是能引義。謂引未來令其生等。於同體類能爲種子。於異體類由同一果。如是能引名爲取果。

論云。善同類因有時取果而非與果。應作四句。第一句者。謂斷善根時最後所捨得。解云。最後善得住現在世已成因義故名取果。無後善得果至生相故。此現在因不名與果也。第二句者謂續善根時最初

所得得。解云。續善根時最初所得得者。謂得過去最後所捨善得。此過去善得名爲與果。謂善得所引得。今時至生相故也。不名取果者。由已取故也。應言爾時續者前果。解云。論主恐人不解前文所得得言。謂將通取過去諸得故。今解云。應說爾時續者前得。前得是前最後所捨善得也。第三句者。謂不斷善根於所餘諸位。解云。於一身中有所餘諸善心位能爲因故名爲取果。有果生故得名與果也。第四句者。謂除前相。解云。除前三句相所餘未來善等皆非取與也。（冠註論本第六二十二左）

【暉鈔】卷中本八左　正取果時亦與果故者。約一因。能引邊即取。與力邊即與。與取皆同時。義說別也。取善法上得隨所得是善性。取此善上得作四句。如斷生得善九品前八品善上得爲第三句。斷第九品善此善上得爲第一句。無善生故不與果也。後續善根時最初念得。即與過去第九品善上所得得相續。得此第九念上所得得。但能與力。已取故不是取果。即第二句也。中間染上得至善得。望彼亦不取不與也。論主改意疏釋。恐人濫通取過去前八品善得。所以改。今第二句即取第九品善上得。據實續善即通續九品。今所取即唯第九品得也。寶法師釋云。擧果顯因。相難知故。改擧續善根最初善果上得。顯取過去第九品善上。所得得。因用相難知故改也。不善及有覆無

記同類因皆四句。准善可知。無覆無記擧取果。問與果。順後句答。亦可知。

【麟記】論本第六右十七　取與四句中第一句言最後所捨得者。謂未斷善根。無始已來生得善得相續無量。今斷善根時。雖捨諸得。唯取最後念得爲此句也。以前諸得亦與果故。未來諸得未取果故。此念取而非與。第二句言最初所得得者。疏解。謂續善根時最初起得。得過去所捨得。名初所得得。若依新解。最初謂刹那所起得名初所得得。爾時此得是所取果。擧所取得顯前能與而不取。前已取故。二說並通。應言爾時續者前得者。此意恐人通謂取過去諸得故。說前言以簡之。卽是前第一句中最後所捨之得也。正理彈云。如何前位多刹那得爲同類因皆取今得。而於今時但說最後一刹那得與今得果。是故應如本文爲善。作俱舍師救。論主意說。若法從來未與果者此中說。是過去諸得。雖於續時皆悉與果。以前諸念皆曾與果俱句攝故。所以不說。其最後唯今與果。故偏說之。又解。前得通前過去所有善得。誰言唯取最後所捨得耶。以所捨得通於三世。非彼一切皆能與果。故。以前言簡取前者。今此章中但同前解。問。所以偏說得爲單句。不說餘善根者。答。將斷善根。善根以不現行。唯有善得現行。故偏說得。

從此第三明法從因生。論云。說因果已。復應思擇。此中何法幾因所生。問也 **法略有四。謂染汚法異熟生法初無漏法三所餘法。**總標諸法也 **餘法者何。**別問三所餘法也 **謂除異熟餘無記法。除初無漏諸餘善法。**餘無記者。謂工巧等三無記也。餘善法者。除苦法忍外諸餘無漏及一切有漏善。此等是前三法外名三所餘也。

如是四法云何。頌曰。

染汚異熟生　餘初聖如次　除異熟遍二　及同類餘生
此謂心心所　餘及除相應

釋曰。染汚異熟生餘初聖者。標四法也。如次者。言此四法除因門中。於下兩句如次除之。除異熟遍二者。此除一字四度言之。除異熟者。初句染汚法除異熟因餘五因生。第二除遍者。謂初句異熟生法除遍行因餘五因生。第三除二者。謂前第二句三所餘法除前異熟遍行二因從餘四因生。第四及同類餘生者。謂第二句初無漏聖非但除異熟遍行二因。及除同類因從餘三因生。故頌除字及餘生兩字四度言也。此謂心心所者。此前所辯四法從因生者。唯是心心所法也。餘及除相應者。此明色及不相應四法也。餘謂色法及不相應。是心心所外故名爲餘。故餘一字含此二法。謂色不相應也。此二法中各有四法。謂餘染汚等。且染除色惡律儀是也。異熟色者眼等五根是也。三所餘色者。除初聖外

所餘無漏戒及定共戒等一切善色。兼工巧威儀通果色也。初無漏色者謂苦法忍上道共戒也。不相應中染汚等四思之可解。及除相應者。謂色不相應四法。如心心所所除因外。兼除相應故言及也。且色及不相應染汚法。除異熟因及除相應因餘四因生。若色及不相應異熟生法。除遍行因及除相應因餘四因生。若色及不相應三所餘法。除異熟遍行二因及除相應餘三因生。若色及不相應初無漏法。除異熟遍行同類三因及除相應餘二因生。一因生法決定無有。所頌甚巧。應善思之。已上不同總是第一明因已竟。（冠註論本第六二十四右）

【暉鈔】卷中本九右　法從因生。即七十二法一一法六因幾因生。分爲兩類明。心王心所爲一類。色不相應作一類辯也。染汙法者。心王大地十不定尋伺睡眠。此上通三性取染汙邊。惡作通二性取不善。大煩惱六大不善二不定貪嗔疑慢小煩惱十。都三十七法一一生時。除異熟因餘五因生。異熟因生無記法不生染汙法也。第二異熟生法者。取心王大地尋伺。此十三取異熟無記性邊。從五因生除遍行因。遍行因生染汙法不生無記法也。第三三所餘法者。除前三類外皆是此中攝。取心王大地十尋伺大善十。此二十三法中取苦法智已去無漏邊有漏定善有漏散善邊威儀工巧通果無記全。加

睡眠惡作善性邊共二十五。從四因生除遍行異熟因。不是染不從遍行因生。不是異熟無記性不從異熟因生也。第四初無漏法者。取心王大地十大善十尋伺二十三法。取苦法忍一念相應者。從三因生除異熟遍行同類。准前釋也。十一色及不相應分四類者。一染汙法者。色聲無表四相得取染汙性邊。從四因生。第二異熟生法者。取眼等五根扶根四塵四相得無想果同分命根取異熟無記性邊。從四因生。第三三所餘法者。五根四塵取長養邊。色聲取善及三無記邊。無表別解脫處中定共全。道共除苦法忍外餘苦法智已去全。得四相取有漏善餘三無記邊。無漏除苦法忍外餘苦法智已去全。二定名身等三全。從三因生也。第四初無漏法。取道共無表得四相。取苦忍已去者。從二因生也。

【麟記】論本第六右十八　言三所餘者。但此二類之法。是前三類之外名三所餘。非謂三法各有其餘。如染汙二類即無餘也。初句染汙法除異熟因者。以異熟果是無覆無記故。非染汙性。從五因生者。是心法故必有相應。相應因中必是俱有。同染性故有同類因。染汙法故復通遍行。能作必有故具五因。餘四准此。更不廣說。異熟法除遍行者。遍行唯為染汙因故所以除之。故上二因互不通。從餘因生。可以思知。問。異熟既善惡為因無記為果。如何可說從同類因生。答。後之異熟從前異熟生。以無始來有異熟果為同類因故得有也。三所餘法除異熟遍行二因者。非異熟故除異熟因。非染汙故除遍行因。從相應俱有同類能作四因所生。初無漏法及除同類者。謂苦法忍體是無漏。世第一法是有漏故。苦忍不從同類因生。從三因者。謂相應俱有能作。可知。此謂心心所者。如上所明。謂是心心所法故有相應因。已下明色及不相應法。如上四類所除因外更除相應因。不相應中染汙等四者。一染不相應。謂染法上四相等。二異熟不相應。五根等相及命根衆同分等。三三所餘法不相應。謂

除上二類及初無漏餘不善有漏（即除上四相。）及善有漏法上四相並得二定等。四初無漏不相應。即苦法忍上四相等。一因生法決定無有者。准上所明。極少猶有二因所生。不同外道計一因生法也。

倶舍論頌疏　論本第六　終

倶舍論頌疏　論本第七

中大雲寺沙門圓暉述

分別根品第二之五

從此大文第二明四緣。於中分二。一明四緣。二別解等無間。初就明四緣中復分三。一明四緣體。二明緣中作用。三明法從緣生。且第一明緣體者。論云。廣說因已。緣復云何。頌曰。

說有四種緣　因緣五因性　等無間非後
心心所已生　所緣一切法　增上即能作

釋曰。說有四種緣者。說謂契經中說有四緣性。謂因緣性。等無間緣性。所緣緣性。增上緣性。言因緣者。因即是緣。持業釋也。等無間者。前

後心心所體各一。故名之爲等。如心心所中受體是一。餘想等亦爾。故論云。謂無少受無間生多。或復從多無間生少。想等亦爾。於自類中無非等義。又解。前心心所齊等與後心心所爲緣。非是前受生後受。前想生後想。自類中等也。又解。後心心所等用前心心所爲緣。故此等字通緣及果。言無間者。前心心所生後心心所中間無有餘心間隔。名爲無間。故此無間通緣及果。或等無間即緣是持業釋也。或等無間之緣是依主釋。所緣緣者。謂所緣境爲緣能牽生心心所法。所緣即緣持業釋也。增上緣者。增上即緣。是持業釋也。（冠註論本第七初右）

【暉鈔】卷中本十一右　論本第七　有四緣性。性是類義。雖所藉緣多。約性類皆四種攝也。此中因緣如種子法。等無間緣如開避法。所緣緣如任杖法。增上緣如不障法。六因互舉相問。及四緣互舉問。皆有四句。約體及世。寛狹思而可知。問。六境中六識不緣過末二世者。如何亦是所緣緣。答。過去曾緣。末來當緣。不生法約流類皆是所緣緣也。第一釋約體等義。前一受生後一受等。若如此者。如前念善心起即有二十三心心所。後念無記心起即十三心心所生。如何名體等。此釋非也。第二說約用等。前念後念體。雖多少不等而力用等。若如此者。即前念受與後念想等爲緣。如何名

等。答。等者。約前念一受後念無二受並生名等。所以以異類得爲等無間緣。色等後念許同體並生也。所緣卽緣者。所緣卽在六境。能爲緣生六識等也。緣有增上力能生果法。名增上卽緣也。

【麟記】論本第七右初　倶舍頌疏記　論本第七

富春沙門　遁麟　述

解四緣義且爲三門。一釋名辨相。二明因緣相攝。三明因緣同異。初門隨疏釋。便今但明餘二門。言相攝者。婆沙問云。爲因攝緣爲緣攝因。答。互相攝。謂前五因是因緣性。能作因是餘三緣性。有說。緣攝因。非因攝緣。謂五因是因緣。能作爲增上。等無間及所緣緣非因所攝。二說無評家。舊云。增上緣似能作因。因緣似五因。等無間所緣緣不似因故。故因不攝。新云。前說爲善。以有力無力俱有能作故。言同異者。顯宗云。六因四緣體雖無別。而義有異。且等無間及所緣緣非因攝。故知餘二義亦有殊。彼總辨云。因謂能生。緣能長養。猶如生養二母差別。又因能生。緣能養。又近名因。遠名緣。如珠如日。如斯等類差別衆多。是故因緣別立名相。此意總顯因親緣踈。故因中親五踈一。緣中踈三親一。若依新云。因之與緣更無親踈。以言因緣五因性。增上卽能作故。又能作因是不障。增上緣亦是不障。一種不障豈有親踈。然顯宗言因親緣踈者。謂因卽親多踈少。緣中踈多親少故也。有通云。因之不障不障果生。緣之不障不障果長。故知因緣義必差別。次依章釋。言說有四種緣者。謂前六因無經說故。所以言許。今之四緣有經說故。所以言說。故卽四阿含經說也。言性者。顯四緣種不同也。因緣者。婆沙云。因緣如種子法。等無間緣者如開避法。所緣緣如任杖法。增上緣者如不障礙法。於自類中無非等義者謂外難言色法少多不定

不名為等。心亦三性及有尋伺等。何名為等。答。於自類中無非等義。非約善惡異性名為等也。

因緣五因性者。出因緣體。於六因中除能作因所餘五因是因緣性。等無間非後心心所已生者。非後者。謂阿羅漢臨入涅槃最後心心所名之為後。此後心心所非等無間緣。除後心外諸餘已生心心所法皆是等無間緣。論云。此緣生法等而無間。依是義立等無間緣。解云。法者果法。此果法與緣等也。

由此色等皆不可立等無間緣。不等生故。謂欲界色或無間生欲界色界二無表色。解云。謂受戒者從第三羯磨便入色界定。即欲界別解脫無表與色界定共無表色俱時生耳。或無間生欲界無漏二無表色。解云。謂第三羯磨便入色界無漏定。即欲界無表與道共無表俱時生耳。由諸色法雜亂現前。等無間緣生無雜亂。故色不立等無間緣。尊者世友作如是說。於一身中一長養色相續不斷。從此後復有第二長養色生。不相違害。故不可立等無間緣。大德復言。以諸色法無間生起或少或多。故謂或有時從多生少

如燒稻稗大聚爲灰。或時復有從少生多。如細種生諸瞿陀樹。根莖枝葉漸次增榮。聳幹垂條多所蔭映。解云。大德謂法救也。諸瞿陀樹子甚少而生大樹。蔭得五百乘車也。所緣一切法者。謂一切法與心心所爲所緣也。心心所法其性羸劣。執境方生。猶如羸人非杖不起。故一切法識所攀附名爲所緣。此所緣境有別體性。是心心所發生緣故名所緣緣。增上卽能作者。謂增上緣性卽能作因。以卽能作因爲增上緣故。此緣體廣名增上緣。一切皆是增上緣故。問。既一切法皆所緣緣。此增上緣何獨體廣。答。論有兩釋。第一解云。俱有諸法未嘗爲所緣。然爲增上故。唯此體廣。解云。如無我觀亦觀一切法。於第一念不見俱有故。俱有諸法未嘗爲所緣。然此俱有法爲增上緣故增上體廣也。第二解云。或所作廣名增上緣。以一切法各除自性與一切有爲爲增上緣故。(冠註論本第七左三)

【暉鈔】卷中本十一左　因緣五因性者。婆沙四大造色等。是有力能作因。入因緣攝。此論後文生等五因卽是因緣攝。此論據全因。因緣卽五因爲性。增上卽能作。不同婆沙有力能作因卽入因緣攝無

力能作因即入増上縁攝也。問。爲因攝縁。爲縁攝因。答。因縁即攝五因。餘三縁攝能作因也。等無間縁具二義。一開前避後。二前念引後念。色不相應雖有開前避後一義。無前念引後念義。故不立等無間縁。等無間非後者。已生心心所法者。已生簡不生。心心所簡色不相應也。問。如前六識轉爲意。六識入過去即名意。後念識生與不生爲意義成。得作同類因義亦准此釋。如何等無間縁即簡後心心所耶。答。等無間縁據與力。無學後心雖取不與。無與果義故不立等無間縁。意者所依義。同類因即取果義。無學後心心所依取果義成。即名意及同類因也。等無間等者。無同類心未開。如二十眼識一箇生餘十九即不生。此識不能束開。雖有二定束開非是心故不名有開也。問。命根前後體一應立等無間縁。答。命根由前生業引相續。自無力相引。不同心心所前能引後。如善惡心不由業引也。無表色二並生。五根四塵二長養並生。外非情從少生多。如大樹也。得四相如二無表色生。即二界得四相並生。二定前後體非一。等無間縁者第二念等已後定從有心定引生。不從第一念定引生。故不立也。有別體性者。此破經部許縁無境生心。如縁過未世及三無爲空華第十三處等生意識。有部即不許縁無生心。縁過未等即是縁過未名等生心。皆縁實法方生心也。増上即能作者。問。何以不言能作即増上。論言増上即能作耶。答。能作因寛。増上縁狹。能作因中取無力能作因爲増上縁。不取有力能作因。所以言増上即能作。不言能作即増上也。増上縁寛所縁者。有二説。一云。據増上縁體廣所縁縁。即倶有法是。二云。或所作廣者。増上縁但據不障義皆名増上縁。若所縁縁即要與能縁識爲境者是所縁縁。若不爲境者即非所縁縁。此不爲境者得爲増上縁。故所縁狹也。

【麟記】論本第七右二　於六因中除能作者。准婆沙能作因中。四大造色法。謂生等五因。亦因緣性故。彼問云。大種與所造色爲幾緣。答。因增上。因謂生等五因。是因緣。增上謂但不障。是增上緣。有說。生等五因是增上緣攝。與此論同。除阿羅漢最後心者。此心雖是已生。以無後生續故非緣也。准五事論。六識展轉皆得爲等無間緣。於眼識後隨皆容起。色法非等無間緣者、婆沙云。心及心所所依所緣行相有礙。由斯故立等無間緣。色不相應無如是事故不立也。解云。心所依所緣行相等者定無二識故名有礙也。又約開避及牽生義立爲此緣。諸極微等雖前避後。而非此緣。闕牽生故。命根亦無間相續而生。由此命根非無間滅。命力所引要是並先位所作行業力所引生。此欲色二界二無表者。問。何不言生欲色無漏三無表耶。答。以定道二戒必不並生故。無欲界之後起三無表。言第二長養色生者。如身中五根。長養各別生。又更入定引得上界長養色也。舊云。此約同時色非等故不立。法救大德約前後爲不等。諾瞿陀樹者。攝云。似此方柳。非正翻柳。古譯云。柳者謬也。應法師言。此云無節樹。一云縱廣樹也。或云尼倶陀。或尼倶律。尼倶類。尼拘盧陀等。皆一也。論云。不相應行亦如諸色雜亂現前故非等無間緣。三界不繫可倶現前故。又何緣未來無此緣耶。答。以未來法雜亂而住無前後故。所緣緣者。正理云。所緣緣性應說是何。謂所緣緣即一切法。離心心所緣境外。決定更無餘法可得。謂一切法是心心所生所攀附。故曰所緣。即此所緣是心所發生緣故名所緣緣。准此除心心所餘生法皆未攀附所緣境生。故無所緣緣。增上緣體廣者。正理云。增上緣性即能作作。此因義細無邊際故。攝一切法。解云。對餘三緣義此緣最多。所作寔繁故名增上。論云。頗有法於法全非四緣不。曰有。謂自性於自性。於他性亦有。謂有爲於無爲無爲

於無爲。解云。此有三類。一自性望自性。二有爲望無爲。三無爲望無爲皆無。

從此第二明緣作用。此言作用。是與果用也。論云。如是諸緣於何位法而興作用。頌曰。

二因於正滅　三因於正生　餘二緣相違　而興於作用

釋曰。前兩句明因緣。第三句明二緣。第四句結用通前三句也。二因於正滅者。謂相應俱有二因於正滅時而興作用。言正滅者。謂現在世。以此滅相居現在故名正滅時。此言作用是與果用也。由此二因令俱生果有作用故。三因於正生者。謂同類徧行異熟三因於正生位而興作用。言正生者。謂未來法居生相位生現前故名正生時。由此三因所引果法至生相位與與果用。此上兩句明因緣竟。餘二緣相違者。謂等無間緣及所緣緣。此之二緣興與果用與上相違。等無間緣於正生位而興作用。與前二因於正滅位是相違也。以等無間果法生時開避路故與其處也。若所緣緣於正滅位而興作用。與前三因於正生

位是相違也。謂所緣緣能緣滅位方與作用。由心心所要現在時方取境故。頌中不言增上緣者。以增上緣於一切法皆無障住。隨無障位。或於正生或於正滅與果用皆不遮也。（冠註論本第七左）

【暉鈔】卷中本十三左　爲因義成。方是取果。此是四緣故不論取果。但言與果用也。問。等無間及因緣中二因。於正生位。所緣及因緣中二因於正滅位。即前後相違。如何言心心所四緣生耶。答。正理論云。於正滅位作用方成。而法生時非無功力。離彼此法必不生故。正生及正滅皆是果法。正生及正滅不取緣。正生及正滅時。增上緣於未來及現在二世。皆與果力令生故。通正生及正滅時與果用也。二定體不能緣境。不從所緣緣生。除所緣緣也。如是二定心等引生等者。二定從有心定引生。二定後出心爲等無間法。不與出心爲等無間緣。是前入心與出心爲等無間緣。二定從有心引生入二定心。能取二定及出心果。後出心即從過去入定心爲等無間緣引生。若無想果出心由過去業引生也。問。何故但說入二定心與二定爲等無間緣。不說無想天有心與無想異熟爲等無間緣。答。二定從有心定爲加行引生故此說之。無想果由過去無想定業引生故。略不說從等無間緣生也。

【麟記】論本第七左　二因於正滅位與作用者。此謂果居現在因與力用也。言作用者。准正理論言與果但是功能。此名作用者。即說功能爲作用。言正滅居現在者。宗計滅相居現。故舊云。住異雖亦同時。滅相義當在後。故偏言滅。由此二因令俱生果有作用故。趣所緣境及一果等。又正理云。如是二因雖俱一時取與果。而今但約與果功能。所緣緣能緣滅位方與作用者。謂心心所至現

在時。其所緣境方與力用。令能緣取境也。增上不說一義如章。或復於中有無果故所以不說。

從此第三明法從緣生。於中有二。一總明諸法。二隨難別解。且初總明諸法者。論云。已說諸緣及與作用。應言何法由幾緣生。頌曰。

心心所由四　二定但由三
餘由二緣生　非天次等故

釋曰。前三句辯緣生法。第四一句遮外道宗。心心所由四者。謂心心所由四緣生。此中因緣謂五因性。等無間緣者謂心心所必須前念等無間緣引發生故。所緣緣者緣境起故。增上緣者除自性外餘一切法皆不障故。二定但由三者。謂無想滅盡二定由三緣生。非能緣故除所緣緣。由因緣者。謂由二因。一俱有因。謂二定上生等四相。二同類因。謂前已生同地善法。若無想定無想天中一切善法是同地也。若滅盡定有頂天中一切善法是同地也。等無間緣者謂入二定前心心所法爲等無間緣引生二定也。增上緣者謂如前說。論云。如是二定心等引

生礙心等起故。與心等但爲等無間非等無間緣。解云。心等等取心所也。餘可知也。餘由二緣生者。餘謂色法及不相應。此二類法由因緣增上二緣所生。非能緣故除所緣緣。非心等引生無等無間緣。（冠註論本第七左五）

【暉鈔】卷中本十四右　餘由二緣生者。問。豈不無表由善心引生。何不說善心與彼爲等無間緣。答。以初念無表容不善心引生。如受戒者。第三羯磨容入不善心引無表生。設第三羯磨是善心。自與後念善心爲等無間緣。不濫無表爲此緣。不同二定善心引生前後皆是善性也。問。二定從善心生。善心與二定爲等無間緣。色聲從善心生。善心與色聲爲等無間緣。答。以色聲二即與善心等俱生。亦非等無間緣。不同二定與善心前後也。及得非得同分四相皆容雜亂現前。並不立等無間緣也。

【麟記】論本第七右四　心心所由四緣生者。問。所緣緣等果至滅時方與作用。如何可說由四緣生。婆沙云。此言生者。起未已滅總名生。故正理云。雖法滅位作用方成。而法生時非無功力。離此彼法必不生故。以心心所必依所緣及託二因方得生故。准正理意。雖能緣至現在境方名作用。於正生時亦有引生之力。婆沙意不同也。又問。從二定生諸心心所。望入定心中間遠隔。如何爲彼等無間耶。答。中間不隔心心所法。不攀附境起故。故名無間。二定非能緣故除所緣緣者。謂二定非心心所法。不攀附境起故除此緣。問。此不說無想果三緣生耶。正理是心心所等無間故。亦應說爲心等無間。但非心等加行引生故。於此中癈而不說。如是二定心等引生礙心等起者。謂從心等引生故。是心之等無間。

能礙心等等不生故。望心不得爲縁也。故正理云。由心等力所引生故。非如心心所生必繫屬前滅心故。非如色法可與心倶時轉故。非如得等可有雜亂倶現前故。非如生等是餘伴故。然心方便加行引生。故可說爲心等無間。與心等起定相違害故。非心等等無間縁。

非天次等故者。正破外道。此有兩意。一正非。二立理。且正非者。非天等也。立理者次等也。如塗灰外道執大自在天能生世間。勝論外道執我生世間。數論外道執勝性。謂薩埵等三能生一切法。我佛法中唯有因縁能生諸法。故言非天。等等取我勝性等也。次等者。次謂次第。等等取無義利及違諸世間。立此三種理破外道也。次第理者。論云。謂諸世間若自在等一因生起則應一切倶時而生。非次第起。現見諸法次第而生。故知定非一因所起。無義利者。論云。又自在等作大功力生諸世間得何義利。又自在等生地獄等無量苦具逼害有情。爲見如斯發生自喜。咄哉何用此自在爲。依彼頌言誠爲善說。由險利能燒。可畏恒逼害。樂食血肉髓。故名魯達羅。解云。塗灰外道說

自在天有三身。法身遍充法界。報身居自在天。三目八臂摩醯首羅也。化身隨形六道。此頌說化身也。有三阿修羅將三國土飛行虛空向自在天上過。自在天見以火箭射之。一時俱盡。此即火箭險利燒三國土也。以龍貫人髑髏繫於頭頸。殺象取皮塗血反被。此是可畏。恒逼害有情也。樂食血肉髓者。顯所食也。魯達羅者。此云暴惡。自在天有一千名。此是一號。第三違世間者。論云。又若信受一切世間唯自在天一因所起。則爲非撥現見世間所餘因緣人功等事。我勝性等如自在天應廣徵遣。故無有一法唯一因生。（冠註論本第七右七）

【暉鈔】卷中本十四左 設彼救云。自在等更待欲覺方能生諸法者。若彼欲覺即是二。同欲覺又復難次等而起也。咄者。字林相謂也。字書云。咄叱也。

【麟記】論本第七右五 咄。都抗反 字林相謂也。依彼頌言誠爲善說者。謂依外道之頌。誠我善說也。此是論主調弄外道。故爲此言。然此頌意。自在天教化衆生種種變現。應以險利等度者。即現此險利等身而度脫之。能爲險惡之事名險。割截衆生名利。燒衆生故名能燒。現可畏身名可畏。自在天一千名。今現行世唯有六十。此但一號。又論云。若執初起自在爲因。餘後續生待餘因者。

則初所起不待餘因。應無始成。猶如自在。我勝性等如自在天應廣徵遣者。類破餘也。故無一法唯一因生者。總結也。又論云。奇哉世間不修勝慧。如愚禽獸。良是可悲。彼彼生中別別造業自受異熟及士用果。而妄計有自在等因耶。

從此第二隨難別解。論云。前言餘法由二緣生。於中云何大種所造自他相望互爲因緣。頌曰。

・大爲大二因　爲所造五種　造爲造三種　爲大唯一因

釋曰。大爲大二因者。大種望大種但爲俱有同類二因。非心所故無相應因。同無記性故無異熟因。非是染故無徧行因。爲所造五種者。初句大字流至此中。應言大爲所造五種也。謂四大種望所造色能爲五因。一生。二依。三立。四持。五養。此之五因於前六因能作因攝。此四大種生所造色名爲生因。造色生已隨逐大種如依師等說爲依因。大種任持所造色故。如壁持畫說爲立因。令所造色相續不斷說爲持因。增長因故說爲養因。如是則顯大與所因爲起變持任長因性

故。爲起者是生因也。爲變者是依因也。爲持者是立因也。爲任者是持因也。爲長者是養因也。造爲造三種者。所造望所造但爲三因。謂俱有同類異熟。俱有因者謂隨心轉身語二業七支無表展轉爲因。同類因者一切前生於後同類皆能爲因。異熟因者謂身語業能招眼等。此卽因果俱所造也爲大唯一因者。前句造字流至此中。應言造爲大唯一因也。謂所造色望四大種但爲一因。謂異熟因由身語二業能招異熟大種果故。（冠註論本第七左八）

【暉鈔】卷中本左十四　自他相望者。自卽四大望四大。所造望所造。他卽四大望所造。所造望四大也。能作因開生等五因。並俱有等五因。卽十因也。正理論釋。五因相者。生因如母生子。依如臣依王。立如地持物。持如食持命。養如樹根水養。四大共爲生因。火爲依因令乾燥不爛壞故。水爲立因能浸潤不散故。地爲持因令不墜破故。風爲養因能令增長故。大與所造無俱有等五因。有生等五因也。爲大唯一因者。此文將所造望能造爲異熟因。卽是因緣。更加增上卽是二緣生法。以此一頌但問因緣不問增上。前文言自他相望互爲因緣。不是能造望所造唯一因也。

【麟記】論本第七右五　大種所造自他相望互爲因緣者。自謂大種等自相望。他謂大種所造互相望。大

爲大二因者。如水望火等。若水自望水但有一因。謂同類。以水望水非倶有因故。餘類亦爾。此之五因能作因攝者。謂能作因分出五名。若合之但是能作少分。所以非餘因者。大種所造非同一果故。非性定同故。容別世造故。容別成就故。所以非倶有因。非心心所故非相應因。非染汚故非遍行因。無記性故。非異熟因。倶時起故非同類因。設後起者。非同類故。言生因者。正理云。從彼起故。如母生子。立因者。正理云。能任持故。如地持物。持因者。由彼力持令不斷故。如食持命。養因者。能增長命故。猶如樹根水所沃潤。欲知五因力用不同應觀五喩。准此生等五及倶有等五。總十因爲因縁。爲大唯一因者。問。前言無一因法。今何復言一因耶。答。此且約所造望大種唯有一因。非謂大種起但因由一因。故不相違。又此一因約因縁中五因爲論。未言能作因。

從此大文第二別明等無間。於中有二。一明諸心相生。二明得心多少。就明諸心相生中有二。一明十二心。二明二十心。復就明十二心中一列十二心。二正辯相生。且初列十二心者。論先問云。前已總說諸心心所前能爲後等無間緣。未決定說何心無間有幾心生。復從幾心有何心起。今當定說。結前問起 謂且略說有十二心。答也 云何十二心。問也 頌曰。

欲界有四心。　善惡覆無覆　色無色除惡　無漏有二心。

釋曰。且於欲界有四種心。謂善不善有覆無記無覆無記。色無色界各有三心。謂除不善。餘如上說。如是十種說有漏心。若無漏心唯有二種。謂學無學。合成十二。（冠註論本第七十右）

從此第二正辯相生。論云。此十二心互相生者。頌曰。

欲界善生九　此復從八生　染從十生四　餘從五生七
色善生十一　此復從九生　有覆從八生　此復生於六
無覆從三生　此復能生六　無色善生九　此復從六生
有覆生從七　無覆如色辯　學從四生五　餘從五生四

釋曰。欲界善生九者。謂從欲界善心無間容生九心。謂自界四心色界二心無色一心無漏二心。故成九也。色界二心者。謂善染汚也。從欲界善心入色界定生彼善心。又從欲界善心中死往生色界生彼染心。續生心中必染汚故。故論云。於入定時及續生位如其次第生善染心。

無色界一心者。謂從欲界善心中死生無色界生彼染心。續生心中必染汚故。欲界不生無色善心者以極遠故。無色於欲界四遠故遠。一所依遠。二行相遠。三所緣遠。四對治遠。所依遠者無色界心不與欲界心爲所依故。行相遠者無色界心唯於第四禪作苦麤障行相。必無緣欲作苦麤等行相故。所緣遠者不緣欲故。對治遠者未離欲界貪。必無能起無色界定能爲欲界惡戒等法厭壞及斷對治故。無漏二心者。謂從欲界加行善心入學無學觀也。此復從八生者。此欲界加行善心復從八心生。謂自界四色界二心無漏二心故。成八心也。色界二心者。一色界善心生欲界善。謂從定出起欲界善心。二色界染心生欲界善。謂入定者作如是願。我寧起下地善心。不起上地染汚。由此願故彼染汚定所逼惱時。從彼染汚定生於下地善。爲防退故是則色染生欲界善也。無漏二心者。從學無學觀出入欲界善心時。染從十生四者。染謂二染。不善有覆。此二染心從十心生能生四心。從十生者。謂十

二中除學無學。謂自界四色界三心無色三心。此十心中皆容命終生欲界染故。論云。於續生位三界諸心皆可無間生欲界染心故。能生四心者。謂自界四。餘無生理。謂欲界染心不生上定及往彼界故無生界理。餘從五生七者餘。謂欲界無覆無記。此無記心善等心外名之爲餘。從五心生能生七心。從五生者。謂自界四及色界善。謂欲界通果無記從色界善定生故。能生七心者。謂自界四及色界二無色界一。故成七也。色界二心者。一生彼善。謂通果無記還生彼定。以通果心唯與定心相出入故。二生彼染。謂異熟威儀無記心中命終生彼染心。續生位也。無色界一心者。謂欲界無記心命終約續生位生無色染心。

(冠註論本第七十左)

【暉鈔】卷中本廿五右　十二心相生總爲五例。一自界望自界心。卽欲界四心色無色各三心前後互相生。欲界變化無記心唯與色界善相生。不與自餘心相生也。二自界心從他界心生。及生他界心。卽欲界善與色界善。及欲界變化心與色善相生。四定心與自地及上下地定心相生。生得善及異熟心不許異地起也。三從觀出入。卽三界善心與學無學心相生。更不與餘心相生也。四防定退。卽色染

心生欲善。無色染生色善也。色界起欲界善約初定說。二定等起初定亦得。五結生位。結生心唯染污。死有心通三性。學無學心及三界加行善。工巧。通果無記皆不死。下界染心死不生上界。唯生自界及下界。善無記心死容生三界。上界染心死許生自下界。善無記心死通生三界。十二心相生及二十心相生。於此五類思之可解。無色善心與第四定隣次。但是依第四定。為所依等也。厭壞者。即是加行道。若未斷欲惑即不得無色定。若得定了即欲惑已斷也。

【麟記】論本第七右六　十二心相生。且於其中略列有五。一自界心。二異界心。三續生心。四防定心。五無漏心。約此五心望三界別以辯相生。尋疏可見。自界四心相生並約前後互相引起。隨其所應。理皆無妨。所依遠者。正理云。謂於此等至入出位中。等無間緣為所依體。無容有故。舊云。若據命終受生。欲界心亦得與無色界為依。今不約此說。惡戒等法者。等取餘有漏法。二對治者。厭壞對治謂加行道。緣惡戒等法深生厭故。斷對治者謂無間道。斷煩惱故。此二對治依未至。不依無色故言遠也。舊云。無色望欲無斷厭對治。得有持對治。謂能持彼得令不失故。亦有遠分對治。遠防彼惑令不起故。入定者作如是願者。謂身在下界入上界定。恐為惑逼起此願也。十二心中除學無學者。謂初出無漏必是善心故。此二心不能生染。言欲界染不往彼界者。謂未離欲染必不往上生也。

色善生十一者。色善謂色界善心無間容生十一心。於十二心中唯除無色無覆無記心。以無色界唯有異熟生無記心。夫異熟心不許異地起

故不生也。能生無色染心者。據命終說。此復從九生者。此色界善心復從九心生。謂於十二心中唯除欲界二染汚心。及除無色無覆無記。所以可知。有覆從八生者。謂色界有覆心從八心生。於十二心中除欲二染及學無學。此復生於六者。此色界有覆心復能生六心。謂自界三欲善不善有覆無記。生欲善者。從染汚定生欲善也。生欲不善有覆者。從色界染心命終於續生位生欲二染也。無覆從三生者。謂色界無覆無記從三心生。謂自界三。餘無生理。此復能生六者。此色無覆心復能生六心。謂自界三欲界二染無色一染。約續生位。思而可知。無色善生九者。謂無色善心能生九心。言九心者。於十二心中除欲界一善及無覆。除色界一。所謂無覆。此復從六生者。此無色善心復從六心生。謂自界三及色界善幷學無學。有覆生從七者。無色有覆能生七心。亦從七心生。生七心者。謂自界三及色界二生彼善染心。竝欲界二不善有覆。即此亦從七無間起。謂除欲色染及學無學心。無覆如色辨

者。無色無覆如色界辯。從三心生能生六心。從三心生者。謂自界三。能生六心者。謂自界三及色界染兼欲界二不善有覆。學從四生五者。謂有學心從四心生能生五心。從四心生者。謂三界善及與學心。能生五者於前四上加無學一。餘從五生四者。餘謂無學心。此無學心從五心生能生四心。從五生者謂三界善學無學心。能生四者於前五上唯除學心。（冠註論本第七右十三）

【暉鈔】卷中末右十六　餘從五生四者。無學從學心生者。即第九無間道生第九解脫道也。

【麟記】論本第七右七　色善生十一者。初從定出生欲善心。命終下生欲界生欲二染。入無色定生無色善。往彼受生生無色染。入無漏定生學無學。餘可思知。從九生者。從欲散心入色界定是從欲善心生。變化事訖。却歸淨定。即無覆生。無色定出。謂無色心生。無漏定出。即學無學生。餘可知。除欲二染及學無學者。下染不能生上染故。初生無漏心。必淨故。故除此二。無色善心除欲界二善及無覆者。謂從彼定出不生欲界善心。以極遠故。許生欲染者。約續生說。又不依無色發通故。不生欲色無覆無記心。餘可知。并學無學者。謂並從無漏定出起彼善也。無色有覆生色界善染二心者。防定生善。受生是染。生欲唯受生故。但生二染不生善也。即此亦從七無間起謂除欲色染者。不離下染不生上故。故除可知。無覆生下染者。約續生說。色無不善。但生一染。欲界有

不善故生二染。謂三界善及與學心者。釋學四也。非三界染。互相違故。非諸無覆。不明利故。但唯四心更加無學者。謂金剛喩定證盡智時。卽是學心生無學也。無學心自相生者。謂從前念引生後念也。無有無學却生學心。故無學心但能生四。設從無學退歸學果。謂有漏心起煩惱退。亦無學心生學心也。

從此第二明二十心相生。論云。說十二心互相生已。云何分此成二十心。頌曰。

十二爲二十　謂三界善心　分加行生得　欲無覆分四
異熟威儀路　工巧處通果　色界除工巧　餘數如前說

釋曰。三界善心各分二種。謂加行得生得別故。欲界無覆分爲四心。一異熟生。二威儀路。三工巧處。四通果心。色界無覆分爲三種。除工巧處。上界都無造作種種工巧事故。於無色界無覆唯一。謂異熟生。故前無覆合成八種。如是十二爲二十心。謂欲界八。二善二染四無記心也。色界六種。前八心上除不善工巧二也。無色界四。於前六上更除威儀通果二心也。兼學無學故成二十。威儀路心者。行住坐臥名爲威儀。路此

用色香味觸爲體。此之威儀心所緣故名之爲路。威儀卽路名威儀路。緣威儀路心名威儀路心。威儀路之心依主釋也。此威儀路心總有三種。一起威儀路心。唯是意識。二緣威儀路心。通眼等四識。除耳識也。及取意識。三似威儀路心。卽通六識。如汎爾緣外色聲等心名似威儀路也。二工巧處心者。工巧處有二。一身工巧。謂刻鏤等。二語工巧。謂歌詠等。若身工巧以四境爲體。以身工巧起時不離四境故。若語工巧以五境爲體。以語起時不離五境故。此二工巧心所緣故名之爲處。工巧卽處名工巧處。工巧處之心名工巧處心。依主釋也。此工巧心略有三種。一起工巧心唯在意識。二緣工巧心通五識及意識。三似工巧心亦通六識。通果心者。謂能變化心及天眼耳通果。此能變化心緣色等四境。謂化四境故。亦緣於聲。有發語通果心故。論云。威儀路等三無覆心色香味觸爲所緣境。工巧處等亦緣於聲。如是三心唯是意識。威儀路工巧處加行亦通四識五識。解云。此言加行者。是緣威儀

等心也。**有餘師説。有威儀路及工巧處所引意識。能具足緣十二處境。解云。此師據似威儀路心説也。**（冠註論本第七左十四）

【暉鈔】卷中本右十六　上界無身工巧有語工巧。此約身工巧説無也。威儀路工巧處此是境。心緣此而生名路及處也。異熟生心如前釋。通果即解脱道中慧。從通果發此能變化心名通果。通果之心也。

【麟記】論本第七右八　二十心門。無色唯一者。正理云。無色界無行等事故無威儀路。無攝受支三摩地故亦無通果。故唯一異熟心也。威儀路者。謂威儀事爲心所緣名之爲路。新云。威儀多依行路而起名威儀路。一起威儀心唯意識者。謂正起此心不在五識故。二緣威儀路心通四識者。以緣色香等四境爲威儀事故。故通四識。聲非威儀事故除耳識。三似威儀心者。謂從緣外六境也。既非四心故通六識。以語起時不離五境者。謂語是聲。必具色香味觸。故具五境也。此謂言音屈曲差別是工巧性。心所緣故名之爲處者。新云。工巧多依壁等處起故名爲處。今詳此釋。不應通語工巧。二緣工巧心通五識者。此語工巧故通五識。與威儀不同。變化心化四境者。但可以作四塵。籍五根上不可變五根。故唯四境。工巧處等者。等取通果也。謂化人發語故通緣聲。如是三心唯是意識者。謂威儀工巧正起之時。唯是意識非五識也。若道果化心相生亦唯意識。舊云。夫通果心有二。一五識通果。天眼耳通。二意識通果。即變化心。及發業通果心。此中且據第二通果心。故言唯是意識。若據二通亦在五識。故婆沙云。若通果心加行唯是定心。意識不通五識。故論不説。餘師云緣十二處境者。即六根六境爲十二也。准論廣辯二十心相生。此略不論。

從此大文第二明得心多少。論云。於前所說十二心中。何心現前幾心可得。頌曰。

三界染心中　得六六二種　色善三學四　餘皆自可得

釋曰。三界染心中得六六二種者。此明染心得心多少。欲界染心得六心。色界染心亦得六心。無色界染心唯得二心。且欲界染心得六心者。謂欲染心正現前位容得六心。謂欲界三善惡有覆也。色無色界各一心。有覆無記也。兼學心成六也。且第一得欲善心者。論云。由疑續善及界退還。欲界善心爾時名得。解云。由疑續善。謂疑心發生正見能續善根也。疑是染心。此即染心生欲界善也。界退還者。謂從上界退還來生欲界染心也。於欲界續生必是染心正起染時。欲界善心此時亦得。起法前得得之也。得欲不善有覆及色有覆心者。論云。由起惑退及界退還得欲二心不善有覆。及得色界一有覆心。解云。由起惑退者。此據離色界煩惱後時起欲染退也。正起欲惑退染心時。欲界不善及有覆心。兼色界有覆心此時總得也。界退還者。從無色界退還來生欲界。受生心中得欲界二染兼色界染心也。得無色有覆及學心者。論云。由起惑退得無色界一有覆心及得學心。故

名得六。解云。由起惑退者。阿羅漢果起欲界惑退。正起欲染時。得無色有覆及學心也。色界染心正現前位得六心者。謂自界三欲界無覆無色有覆及得學心故成六也。且初得自界三欲界無覆者。論云。由界退還得欲界一無覆無記心及色界三。色界染心亦由退得。解云。由界退還者。此據無色命終來生色界。正起色界續生染時。自界三心欲界一通果心此時總得也。色界染心亦由退得者。此明色染非但由前界退還得。亦由起色界惑退得也。得無色有覆及學心者。論云。由起惑退得無色界一有覆心及得學心。故名得六。解云。由起惑退者。此據阿羅漢起色界惑退故。得無色有覆及與學心也。無色界染心得二心者。論云。無色染心正現前位十二心中唯得二心。由起惑退得彼染心及得學心。故名得二。解云。由起惑退者。此據阿羅漢起無色惑退。正起染時。得自界染及學心也。色善三學四者。謂色界善心現在前位十二心內容得三心。一謂得自界善及欲色界通果無記成三心也。所以然者。由昇進故得彼三心。謂從欲界入未至定得色善心。此則從欲入色界名昇進也。斷欲惑盡第九解脫道。

入根本地得欲色界二通果心。此即從加行入根本地名昇進也。學四者。謂有學心正現前位容得四心。一得有學心。及得欲色界二通果心竝無色善。故成四也。一得有學心者。由初證入正性離生。於苦法忍位得有學心也。第二得欲色界二通果心者。謂由聖道離欲界染心入根本地。得二界通果也。得無色善者。亦由聖道離色界染得無色善也。故論云。由初證入正性離生及由聖道離欲色善。尋前文即可解也。餘皆自可得者。餘謂前說染等心餘。即欲界善二界無記及無色善竝無學心。故頌餘字含此六心。然此六心正現前位唯可自得。不成他也。（冠註論本第七左十六）

【暉鈔】卷中本左十六　得心多少者。此門意如前成就諸根定量門。成欲界染心俱時及前後位。此染心容俱時得幾心也。容得者。容者約前後諸位許得。不俱時得六。所以言容也。正起疑心時。及上界死生欲界一刹那結生心。唯染汚。此兩位染時。未來善上法前得與此二染俱時得也。得欲不善有覆及色有覆心者。由起惑退。即約先凡夫斷欲色界煩惱盡。後起欲惑退成二界染心也。界退還即無色死第二念受欲中有初心成二界染心也。無學正起欲界染時。即退果得學心及無色有覆

心也。色界染心界退還。卽據受色中有初心是染。便自界三欲界一法前得。與染心倶時得也。第九解脫道卽入色根本善。二界化心有法前得與善心倶時得也。

【麟記】論本第七九右　得心多少者。此意明十二心內於何心中得幾心也。此言得者。謂先不成今時創得名得。非謂先相續有名得。又言得六等者。亦是始終容得此六。非謂一時頓得也。先明染心得六者。然此染心總有三類。一疑續善。二從上界退生下界。三起惑退。此三皆是染汚心也。先受生心中兼色一染者。謂先在無色。下染總離。今下生欲界。亦成色染也。欲界染心不得上二界善者。以欲染心無得上界善理故。阿羅漢退得學心者。謂先證無學學心已失。令起惑退故更得也。然此學心雖不現起有法前得。自染心中故名爲得。無色染心但有惑退無界退還者。以彼更無上界可退還也。初證入正性離生者。卽初入見道苦法忍位得學心也。由聖道離欲界染者。以明學心故。言聖道簡世道也。入根本得二通果者。謂通果非近分地。故要離染得根本時方能得也。上來所明十二心內總有六心得。謂染心中欲界不善及有覆。上二界各一染成四。並色界善及與學心故成六也。有六心唯自得。謂三界無覆 欲無色二善及無學心。此之六心唯皆自得。頌言餘皆自可得者。卽此六心也。

論云。有餘於此總說。頌曰

慧者說染心　現起時得九　善心中得六　無記唯無記

釋曰。此是論主引雜心師頌明得心多少也。彼說染心現起得九。此

論說得染有十四心。謂欲界六色界得六無色界得二也。此論據染心重得說十四心。彼論約單得唯說九心。此論十四心中有五心重得。謂色界染心且兩度得。一欲界染時得。二色界染時得。雜心除一心也。無色界染心及與學心各三度得。謂三界染時皆得也。雜心各除二。兼前一心總除五也。故說得九。各據一義亦不相違。善心中得六者。謂欲界無覆色界善及無覆無色界善及學無學故成六心也。雜心據單得唯說此六心。此論約重得言得七心。謂色善三學四名七心也。於此七中除二心重。言二心者。謂欲色界無覆各兩度得。一色善時得。二學心時得。各除一心取餘五心。兼無學一故成六也。論云。爲攝前義。復說頌言。由託生入定。一由託生者。是前界退還也。第二入定者是前色善及學心也。及離染退時。第三及離染者。是前離欲界染心也。第四退時者。是前由起惑退也。續善位得心。第五續善位者。是前疑心續善也。非前所成故。明得義也。此言得者今時成就名爲得也。此是論主爲攝前義。總爲五門。勒顯一頌。請細細尋焉。（冠註

論本第七（七十九左）

【暉鈔】　闕之。

【麟記】論本第七（七十右）　雜心各除二者。且無色染心總三度得。除却二心。及學心亦三度得。又除二心。總除四心。兼前除一故總除五。但有九心。一欲善心。二欲不善心。三欲有覆。四色界有覆。五無色有覆。六學心。七欲無覆。八色善心。九色無覆心。雜心據單得唯得六心者。論主斥云。於善心中應言得七。謂由正見續生善根時。欲界善心起位名得。六心同前加此名也。正理通云。如經主難應定得七。然學無學同無漏故總說一心。言六無失。准正理救。六心與此章中所列六心不同。彼合無學心。以無欲善心也。

倶舍論頌疏　論本第七終

倶舍論頌疏　論本第八

中大雲寺沙門圓暉述

分別世間品第三之一

從此第三明世間品。於中有二。一者明有情世間。二者明器世間。就初明有情世間中有二。一總辯有情。二判聚差別。就總辯有情復分三段。一明有情生。二明有情住。三明有情沒。就初明有情生中復分九種。一明三界。二明五趣。三明七識住。四明九有情居。五明四識住。六明四生。七明中有。八明緣起。九明四有。此下第一明三界者。論云。已依三界分別心等。今次應說三界是何。各於其中處別有幾。頌曰。

地獄傍生鬼　人及六欲天　名欲界二十　由地獄洲異
此上十七處　名色界於中　三靜慮各三　第四靜慮八
無色界無處　由生有四種　依同分及命　令心等相續

釋曰。初一行明欲界。次一行明色界。後一行明無色界。初兩句者列五趣名。梵云那落迦。此云苦具。義翻爲地獄。以地下有獄故。非正翻也。言傍生者以傍行故。言鬼者謂餘生中憙盜他物。又復是多他所祀祖宗。又多希求以自存濟。又多性怯劣身心輕躁故。名爲鬼。言人者多思慮故名之爲人。言天者有光明故。或復尊高神用自在。衆所祈告故名爲天。六欲天者。一四大王衆天。二三十三天。三夜摩天。此云時分。謂彼天中時時多分唱快樂哉。四覩史多天。此云喜足。於五欲樂生喜足心。五樂變化天。於五欲境自變化故。六他化自在天。於他化中得自在故。第三句名欲界者。結上也。此上五趣器及有情總名欲界。言二十者。明欲界中處有二十。由地獄洲異者。明二十所由也。於上五趣由地獄異及由洲異故成二十。地獄有八名地獄異。一等活地獄。謂彼有情雖遭種種斫刺磨擣。而彼暫遇涼風所吹尋蘇如本。等前活故立等活名。二黑繩地獄。先以黑繩秤量支體後方斬鋸

故名黑繩。三衆合地獄。衆多苦具俱來逼身。合黨相殘。故名衆合。四號叫地獄。衆苦所逼。異類悲號。發怨叫聲。名爲號叫。五大號叫地獄。劇苦所逼。發大哭聲。悲叫稱怨。故名爲大號叫。六炎熱地獄。火隨身轉。炎熾周圍。熱苦難任。故名炎熱。七極熱地獄。若內若外自身他身俱出猛火。互相燒害。熱中極故名爲極熱。八無間地獄者。受苦無間。或無樂間。苦故名無間。言洲異者有四大洲。一南贍部洲。此洲南邊有贍部樹。今此洲名或從林立名。或從菓爲名名贍部洲。二東勝身洲。身形勝故。或身勝贍部名東勝身洲。三西牛貨洲。以牛爲貨易故名牛貨洲。四北俱盧洲。此云勝處或云勝生。於四洲中處最勝故名爲勝處。生最勝故名爲勝生。地獄及洲合成十二。并六欲天傍生餓鬼處成二十。若有情界從自在天至無間獄。若器世間乃至風輪皆欲界攝。（冠註論本第八初右）

【暉鈔】卷中本十八右　俱舍論釋頌疏義鈔

京兆西明寺沙門　慧暉　述

論本第八。世間品分二。初釋名。二分文。解釋略無來意。如前辯也。可破壞故名曰世間者。可破壞故釋世字。墮在世中故名間。正理論名緣起品。以此品中廣明緣起義故。先明有情後明器者。外果必由內生。故先明有情。後器也。傍生者。彼身多分傍住故。或於中少分有情以傍行故。如傍蟹等也。四大王衆天者。王即四王。衆即類非一故。七金山日月宮四層級住者。君臣合舉。舊名四大王天。不得其衆。四王者。東方持國主。南方增長主。西方廣目主。北方多聞主也。梵云忉利。此云三十三天。亦臣主合立名也。喜足者。舊名知足天。衆多苦具者。即捺名師子頭馬頭逼身。合黨即自朋類相殘害也。受苦無間者。即約自身受苦不休息。或無樂間苦。即約無外樂間內苦。或更有受生及身形無間等也。舊云閻浮提者。提是河名。即無熱池四河中一數。名拔提河。河中有金。名閻浮檀金。河邊有林。菓大如八石瓮。新譯取樹名贍部洲也。

【麟記】論本第八右初　倶舍頌疏記　論本第八

富春沙門　遁麟　述

三界有漏。可破壞故。有對治故。名爲世間。此品廣明故名分別。正理論名緣起品。以明緣起義故。所以品來者。前之二品總明漏無漏法。後之六品別明漏無漏。就六品中。前三品明有漏法。後三品明無漏法。先厭後欣。故先明世等三品。就中世品明果。業品明因。隨眠品明緣。果麤易厭故先說。所以根品之後世間品來。又此品中所以先明有情後明器者。外由內感故。所以先明能依。後明所依。先明內果後明外果也。言已依三界分別心等者。結前問起。謂於前品末。已依三界分別心等。何謂三界也。此明三界。從下及上。故先明地獄。言捺落迦此云苦具。亦云

不可樂。亦云非行處。故婆沙問云。何故彼趣名捺落迦。答。是那落迦所趣處故。是中有那落迦。
故名捺落迦。言那落迦者。正理云。那落名人。迦名爲惡。人多造惡顚墜其中。由如是故名
那落迦趣。或近人故名那落迦。造重罪人速墮彼故。（准上兩名捺落是短聲。總談彼趣。那是長聲別顯所有。然今章
中但一名耳。）言傍生以傍行者。正理云。彼趣多分身橫住故。或彼趣中容有少分非傍行者。又類多故。
多愚癡故。新云。如傍蟹等橫行名傍。又云。亦有不傍行者。且從此說。准婆沙問云。何故名傍生。
答。由形傍故行亦傍。由行傍故形亦傍。准此即應牛馬等類亦是傍行。非如人等是居上故。
昔云畜生者。從生爲名。畜（丑救反。六畜也。又許救反。養也。又許都反。有也。養也。又蓄六反也。）鬼謂餘生中喜盜他
物者。即前世爲餘生也。婆沙問云。何故彼趣名閉戾多。答。施設論說。如今時鬼世界主名琰魔。
如是劫初時有鬼世界名粃多。是往彼生類皆名閉戾多。即是粃多界中所有義。從是已後皆立彼
名。有說。被駈役故名鬼。恒爲諸天子處處駈使常駈走故。雜心從他希求名餓鬼。有云。鬼者
者歸也。謂捨此身多歸於後際。言人者思慮者。婆沙問云。何故此趣名末奴沙。答。昔有轉輪王
名曼駄多。告諸人曰。汝等若有所作應思惟稱量觀察。爾時諸人即隨王教欲有所作。皆先思惟稱
量觀察。便於種種工巧業處而得善巧。以能用意思惟所作事。故名末奴沙。從是已來傳立斯號。
先來未立此號之時。人或相呼以爲雲頸。或云多衆頸。或名底落迦。或名河沙茶。有說。多憍慢故。
名之爲人。以五趣中憍慢多故。涅槃云。人者身口柔煗。莊子云。北海君曰。穿牛鼻駱馬首。謂之
曰人。解云。（人之生也。可不服牛乘馬乎。服牛乘馬可不穿駱之乎。）言天者。婆沙問云。何故名天。答曰。於諸趣
中。彼趣最勝。最樂。最善。最妙。最高故名爲天。有說。光明增故名天。以彼自然身光恒照晝夜等

故。復次戲樂故名天。正理論云。天者謂光明威德熾盛遊戲談論。勇悍凌餘。涅槃經云。天者名曰燈明。能破黑闇故。又天者名爲吉祥。又復天者名曰日。有光明故。初言四大王衆者。謂東方持國。南方增長。西方廣目。北方多聞。如是四王住妙高山半。若直言四王唯目四主。兼言衆者卽通所部。所部謂七金山日月宮中四級天子支派。通標故復言衆。言三十三天者。妙高山頂四面各有八部天衆。謂金剛手等。帝釋居中。總有三十三處故名三十三天也。梵云釋迦提婆因達羅。釋迦姓也。此云能提婆天也。因達羅帝。正云能天帝。昔云釋提桓因。云天帝釋者俱訛倒也。過去字憍尸迦。此云繭兒名阿摩揭陀。此云無毒害卽過去修因之處。因以爲名。往昔與三十三夫人以爲伴侶。有善法夫人。圓生夫人。歡喜夫人。赦支夫人。同修勝業故生天上。有善法堂。圓生樹。赦支夫人等。言時時唱快樂者。謂晝夜八時唱樂也。四都史多天者。昔云兜率陀天是也。此名知足。一切後身菩薩咸皆生彼天中名一生。五樂變化者。謂此天隨心樂欲受用境。卽自能化種種樂具。言於他化中得自在者。謂此天欲得受用境。卽使餘劣天子等變化種種樂具受用也。言等活者。正理云。衆苦逼身數悶如死。尋蘇如本。故名等活。新云。如謂似死也。又牛頭唱活故活也。二黑繩者。一釋如章。又云。謂彼有情業感鐵鑠。狀若黑繩鋸斬故曰也。又彼有情所有筋脈悉皆化。作黑繩鋸斬故曰也。合黨上或音閤釋義如章。又彼有情將受罪時。周遶有山。一時合逼故曰衆合。言受苦無間者。謂彼苦具最極增上逼害有情。相續不斷故名無間。言無樂間苦者。謂等活等七。暫遇涼風。時時有等流樂以間其苦。今此中無故曰也。贍部洲者。此土無相當故不翻名。言南方有樹者。准下器世間中云。無熱池邊有此樹。昔云閻浮提。或云剡浮者並訛也。勝身洲者。梵云毘提訶洲也。昔云弗婆提及弗于逮並訛也。

西洲梵名瞿陀尼。此云牛貨。因高樹下有一寶牛爲貨易處故以名焉。昔云瞿耶尼。或云劬伽尼。並訛也。北洲昔云鬱單越。又云鳩樓皆訛也。彼洲壽命衣服飲食等。皆勝餘方故曰勝處。乃至風輪皆欲界攝者。准此至風輪。卽過有情界也。又對趣辯者。趣唯有情。界通非情。卽界寬趣狹也。

此上十七處者。標色界也。此欲界上有十七處。名爲色界。三靜慮各三第四靜慮八者。列十七名也。謂三靜慮處各有三。第四靜慮處獨有八。合成十七處。器及有情總名色界。第一靜慮處有三者。一名梵衆天。大梵天王所領衆故。二名梵輔天。衛侍梵王爲臣輔翼故。三名大梵天。廣善所生故名爲梵。此梵卽大故名大梵。由彼獲得中間定故。最初生故。最後沒故。威德等勝故名大梵。第二靜慮有三天者。一少光天。於二禪內光明最少故名少光天。二無量光天。光明轉增量難限故名無量光天。三極光淨天。光明勝前徧照自地故名極光。第三靜慮有三天者。一少淨天。意地樂受故名爲淨。於第三禪中此淨最少名爲少淨。二無量淨天。此淨轉勝量難限故名無量淨天。三徧淨天。此淨周

普故名徧淨。第四靜慮有八天者。一無雲天。此不空中無所居地。如雲密合故說名雲。此上諸天更無雲地。在無雲首故名無雲。二福生天者。更有異生勝福方可往生故說名福生。三廣果天。於色界中異生生中此最殊勝故名廣果天。四無煩天。煩謂煩雜。於無煩中此最初故得無煩名。五無熱天。已得雜修上中品定能善伏除上中品障。意樂調柔離諸熱惱故名無熱。六善現天。已得上品雜修靜慮果位易彰故名善現。七善見天。已得上勝雜修靜慮離修定障。餘品至微見極清徹故名善見天。八色究竟天。有色天中更無有處能過於此故名色究竟。此五天名淨居天。唯聖人居無異生雜故名淨居。於色界中立十七天依經部宗也。若薩婆多宗唯立十六天除大梵天。謂梵輔天中有高臺閣名大梵天。一主所居更無別地。如世尊處座四衆圍遶。故別不立大梵天也。除無想天者。謂廣果天中有高勝處名無想天。非別有地故不立也。經部師立大梵天者。謂大梵王與梵輔等處雖不別。

身形壽量皆不等故。故須別立。此經部宗除無想天者。以無想天與廣果天身壽等。所以無想攝入廣果更不別立。若上座部亦立大梵天。由身壽不同故亦立無想天。謂與廣果因果別故。由此色界即有十八天。（冠註論本第八左四）

【暉鈔】卷中本左十八　此上者。約處所在欲界上。亦有諸處約處勝名上。後釋勝也。廣善所生即是無尋有伺定業。又准下文。修四梵福量得生也。無煩者。上五天皆名無煩。唯聖居故。以在無煩首故。正理論作此繁字。或名無求。不求入無色定故。亦名淨居。下地煩惱已斷名淨。淨身所居名淨居也。已得雜修上中品定者。准下文。雜修有五品。謂下品中品上品上勝品上極品。得上中品定除上中品障。約此立名也。餘品至微者。有上極一品定障名餘品也。有部要依同分方立天處。大梵居獨一。又無別處故。不立大梵及無想天也。

【麟記】論本第八左四　言梵衆者。正理云。大梵所有所化所領故名梵衆。梵輔者。於大梵前行列侍衞故名梵輔。言獲得中間定者。謂中間禪梵王所得。以無尋故勝下界。以有伺故未及上。故名中間。言最初生最後沒者。謂劫初時梵王最前生。劫壞時最後而沒也。意地樂受故名爲淨者。無五識故名意地。離下喜貪說名爲淨。更有異生勝福方可者。謂此方所中有勝福者彼往生故。言異生生中此最殊勝者。謂上五天唯聖者居。此廣果天於異生中最勝。非於聖天中勝也。已上三天凡聖雜

居。此下明五淨居天。謂由雜修靜慮五品差別故感五淨居天。言淨居者。謂離欲諸聖以聖道水濯煩惱垢故名爲淨。淨身所止故名淨居。或住於此窮生死邊如還債盡故名爲淨。淨者所住故名淨居。或此天中無異生雜。純聖所止故名淨居。初無繁者。繁謂繁雜。或謂繁廣。無繁雜此中最初故。繁廣天中此最初故説名無繁。解云。前言繁雜即見修二性煩惱雜故。後言繁廣即雜修靜慮五品不同名繁廣也。或名無求。不求趣入無色界故。言無熱者。或令生下煩惱名熱。此初遠離得無熱名。或復熱者熾盛爲義。謂上品雜修靜慮及果。此猶未證故名無熱。言離修定障餘品至微者。謂五品定障也。除四品唯最下品在名爲餘品至微也。言有色天中至過此者。謂簡無色故。言於有色天中最勝。又云。或此已對治衆苦所依身最勝邊是名色究竟。言除無想天者。正理云。無想天即廣果繋業果。故不應別立爲一天處。然梵王是一。要依同分立天處名。非一梵王可名同分故。與梵輔合立爲一天處。高下雖殊然地無別。故婆沙云。迦濕彌羅諸論師説。初靜慮地唯有二處。言無想天與廣果因果別者。即無想無心定爲因無心爲果。廣果有心定爲因果故不同也。

無色界無處者。明無色界都無處所。以非色法無方所故。由生有四種者。此明無色雖無處所。由異熟生差別有四。一空無邊處天。修此定前於加行位厭有色身。思無邊空作空無邊解名空無邊處。二識無邊處。厭前外空復思內識。作識無邊解名識無邊處。三無所有處。次厭

無邊識思無所有。作無所有解名無所有處。四非想非非想天。謂此定體非前七地麤想名爲非想。若想全無便同癡暗。有細想故名非非想。前三無色從加行立名。第四無色當體受稱。又論云。復如何知彼無方處。問也。謂於是處得彼定者。命終卽於是處生故。復從彼沒生欲色時。卽於是處中有起故。解云。答前問也。謂於是處得彼定者。謂隨何等洲修得無色定處也。卽於修定處命終受無色界生。後時從無色沒生欲色時。還卽於過去修得定處中有起故。明知無色無方所也。依同分及命令心等相續者。明無色界所依也。欲色有身。心依身而轉。無色無身。心依同分及命根轉。（冠註論本第八左六）

【暉鈔】卷中本十九右　謂於是處得彼定者。卽欲色二界得無色定處受生。又受無色界畢。卽於是處中有起故。准疏釋。卽於過去得定處中有起。此釋恐非。應是無色界死處中有起名卽於是處。若取得定處。豈無色界生經二萬劫等無行動等也。由生勝劣有殊分四。以無色故名無處。不是都無處所。卽以欲色界爲處所也。無色心依自地四蘊同分及命。問。若爾欲色界心等何故不依同分及命耶。答。無色同分命強。從勝定生能伏色想。若欲色界身勝心依身轉也。又欲色界同

分及命。此二依色轉。無色同分及命自相依。欲色同分及命自不相依者。以二劣不如無色也。

【麟記】論本第八右六　言於是處得定卽於是生者。證無色天處所也。謂得四定欲界九處色界十六處差別不同。若生無色皆於欲色命終處生。故知離二界中更無別處。言卽於是處中有起者。謂從四天處沒生下界時。卽於前生處而中有現前傳識。故知不從別處來也。言無色界至依同分轉者。若爾有色界心依何不依命根等轉。答。有色界中命等劣故。無色命等從勝定生强故從之而轉。經部師說。無色界心等相續無別有依。

問。何故名欲界等。答。界是總名。欲等是別。以別依總名欲界等。具足應言欲所屬界名爲欲界。色所屬界名爲色界。無色所屬界名爲無色界。略去所屬字但名欲界等。如言胡椒飲及金剛環。飲與環俱是總名。胡椒金剛並爲別稱。以別依總名胡椒飲及金剛環。具足應言胡椒所屬飲。金剛所屬環。略去所屬字但名胡椒飲等。況法可知。問。此中欲言爲說何法。答。略說段食婬所引貪。解云。婬貪食貪名之爲欲耳也。如經頌云。世諸妙境非眞欲。眞欲謂人分別貪。妙境如本住世間。智者於中已除欲。此頌是佛說。舍利子爲人誦。意取貪心名欲非境也。邪命外道便詰舍

利子言。若世妙境非眞欲。眞欲謂人分別貪。苾芻應名受欲人。起惡分別尋思故。解云。此外道意取外境爲眞欲體。不遠而住難舍利子也。若世妙境是眞欲。眞欲非人分別貪。汝師應名受欲人。恒觀可意妙色故。解云。此外道師實觀可意色。舍利子報言。汝師實觀可意色。而不名受欲人。明知眞欲是貪非關外境。外道於是默然而去也。（冠註論本第八左七）

【暉鈔】卷中本十九左　欲界貪心名欲。境非是欲。能生欲故名欲。色界色勝。不能生欲。不得名欲。五蘊名界。欲屬此五蘊。或界能生欲名欲界。色無色界准此釋。無色即四蘊。無色界即屬四蘊法。第六轉聲。若欲之界即第七轉聲也。邪命外道。即是舍利弗舅。舍利弗於馬勝比丘言下得初果。後見佛得第四果。梵云舍利弗咀羅。今言舍利弗訛也。舍利弗此云鶖。即百舌鳥。是母名。咀羅云子。以母辯才如鶖鳥。此是彼子故以名焉。初行頌初句非外境名欲。第二句辯自宗。後二句釋外境非欲所以。後二句皆是前兩句牒。後兩句破也。問。三界爲一爲多。答。三界無邊如虛空。問。世界爲橫爲竪。答。有二說。一云。世界橫。一說竪。所以有欲色上下二界竪也。問。若離此欲界貪。諸欲界貪皆得永離否。答。皆得永離。以同修欲界故也。問。若初定發五通。能遍至一切欲界不。答。不能至餘欲界。即至自欲界也。

【麟記】論本第八左六　言界是總名者。謂界名通欲色等三故是總。欲色等名互不相通故是別號。以別標總名欲界等。界義如前解。言色者。變礙義。無色者。論云。彼體無色立無色名。非彼但用色

無爲體。解云。謂有四蘊爲無色界體。故用無色爲體。卽無色界總無體故耳。頌言妙境者。婆沙云。諸欲下賤而耽欲者。分別增益取爲淨妙故說名妙。問。何故但言五妙欲境不言法境耶。答。婆沙云。皆是愛所緣者立妙欲。意所識法有非愛所緣。故不立妙欲。准正理立三界云。若界有色有欲境名欲界。或有色無欲境名色界。或二俱無名無色界。問。三界者爲一爲多。答。論云。三界無邊。如虛空量。故雖無有始起有情。無量無邊佛出於世。一一化度無數有情。令證無餘般涅槃界。而不窮盡猶若虛空。又論云。世界當言云何安住。當言傍生。經言。譬如天雨滴如車軸。無間無斷從空下澍。如是東方無間無斷。無量世界或壞或成。南西北方亦復如是。不說上下。有說。亦有上下二方。餘部經中說有十方故。色究竟上復有欲界。於欲界下有色究竟。若有離一欲界貪時。諸欲界貪皆得擇滅。色無色界應知亦爾。若發神通但往自界不往他界。

從此第二明五趣。論云。已說三界。五趣云何。頌曰。

於中地獄等　　自名說五趣

唯無覆無記　　有情非中有

釋曰。前兩句列五趣名。下兩句諸門分別。於中地獄等自名說五趣者。於三界中有地獄等說名五趣。謂前所說地獄傍生鬼及人天是名五趣。唯無覆無記者。三性分別。此五趣體不通善染唯無覆無記。過去業

所招是異熟生無記。若通善染五趣便相雜。謂一趣中具有五趣業煩惱故。亦不通外器。以外器中通於五趣共受用故。有情非中有者。五趣唯是有情數攝。體非中有。趣是所往。中有是能往。故中有非趣也。施設足論作如是說。四生攝五趣。非五趣攝四生。不攝者何。所謂中有。解云。中有是化生故四生攝。是能往故不是趣攝也。上來所明五趣不通善染外器中有。明知。界寬趣狹。以彼善染外器中有三界攝故。由此理故。若是趣體必是界攝。自有是界而非是趣。謂善染等。（冠註論本第八八左）

【暉鈔】卷中本二十左　於中地獄等者。前明三界通外器善染中有。今五趣狹。唯取異熟無記五蘊有情爲體。故言於中。又不通長養。若通者。欲界修得天眼。應卽是天趣攝非人趣收也。問。既立五趣。修羅五趣中何趣中可攝。答。瑜伽論天趣攝。雜心論鬼趣攝。正法念經鬼畜二趣攝。伽陀經天鬼畜三趣攝。又云羅睺阿修羅師子兒。毘摩質多羅阿修羅王天女生。准此經論諸趣不定。天趣攝爲正。以身形同天。如世羅非人生身。形同人卽人趣攝。梵云阿索落。此云非天。多行諂誑。非天行也。大衆等四部說五趣體通善染。若通善染過如疏述。

【麟記】論本第八右七　五趣非善染者。總有四類體非趣攝。謂善染外器中有。然此四類但是三界。

故正理云。善染無記有情無情及中有等皆是界性。言趣體唯無覆無記性者。唯異熟生爲趣體故。由此已釋趣唯有情。無情中無異熟生故。問。何故趣體不通長養。正理云。若通長養身在欲界修得天眼是長養性。趣應雜亂。言中有非趣攝者。以中有趣方便故非趣攝。故論云。契經亦簡中有異趣。謂經言。有七種有。謂地獄有傍生有餓鬼有天有人有業有中有。既於五趣外說中有。故知不是趣攝。有說。諸趣或體相雜。異趣相因而生於子。如魚身者鹿子仙人。自昔傳聞。其類無量。一身兩趣故有相雜。正理破云。彼說不然。自業趣定。而彼生緣有種種故。如菴羅女自樹而生。喬答摩種因日光起。故相因有。非證雜因。鹿子仙人魚身等者。滿業異形相不同。其實是人故趣無雜。問。阿素落何趣攝。且釋名者。素落是天之異名。阿之言無。以多諂誑無天行故名曰非天。如人不仁亦名非人。瑜伽佛地論說爲天趣。雜心鬼趣攝。正法念經是鬼畜趣。伽陀經鬼畜天三趣。有云。羅睺阿修羅是師子兒。畜生趣攝。慈恩師依瑜伽佛地爲正。婆沙評爲鬼趣攝。雜心解亦同。又云。亦不同立爲第六趣。無經說故。問。五趣形狀言語如何。答。天形上立皆作聖言。人形現見。劫初時人皆作聖言。後隨處別作種種語。鬼劫初時亦作聖言。後隨處別言語不定。傍生身形現見。劫初皆作聖言。後隨處別。地獄有情其形如人。初生皆作聖言。後受苦已出種種苦聲。此毘婆沙意解。

從此第三明七識住。論云。即於三界及五趣中如其次第識住有七。其七者何。頌曰。

身異及想異　身異同一想　翻此身想一
並無色下三　故識住有七　餘非有損壞

釋曰。身異及想異者。是第一識住。謂人趣全。天趣一分。故論云。契經中說。有色有情身異想異。如人一分天。是第一識住。一分天者。謂欲界天及初靜慮。除劫初起。解云。如劫初起是第二識住。故今除也。次即辯之。言身異者狀貌異故。彼由身異。或有異身故名身異。言由身異者約體以明。言有異身者據成就說。言想異者苦樂捨想有差別故。彼由想異。或有異想故名想異。言由想異約體以明。言有異想者據成就說。第二句者是第二識住。於初靜慮取劫初起。故論云。有色有情身異想一如梵衆天。謂劫初起。是第二識住。解云。理實亦取梵王梵輔。唯言梵衆天者舉初攝後。所以者何。以劫初起彼諸梵衆起如是想。我等皆是大梵王生。大梵爾時亦起此想。是諸梵衆皆我所生。同想一因故名想一。大梵王身。其量高廣。容貌威德。言語光明。一一皆與梵衆不同。故名身異。已上論文。

問。何故梵王梵衆起一因想。答。謂大梵王於劫初時獨一而住。更無侍衞。遂發願言。云何當令諸餘有情生我同分。時極光淨天見已悲愍。從彼處沒生爲梵衆。梵王纔發願。見有天生。故大梵王起如是想。我表能生也。彼諸梵衆初見大梵威德特尊天。又憶念知先因梵王發誓願故我來生此。是故梵衆起如是念。我等皆是大梵王生。翻此身想一者。此一句中有兩重識住。言翻此者。謂翻上身異想一。應言身一想異。是第三識住。故論云。有色有情身一想異。如極光淨天。是第三識住。解云。理實亦攝少光天無量光天。唯言極光淨者擧後攝初也。彼天顯形狀貌不異故名身一。樂非苦樂二想交參故名想異。傳說彼天厭根本地喜根已。起近分地捨根現前。厭近分地捨根已。起根本地喜根現前。如富貴人厭欲樂已便受法樂。厭法樂已復受欲樂。身想一者是第四識住。論云。有色有情身一想一。如遍淨天。是第四識住。解云。理實亦攝少淨天無量淨天。唯言遍淨天者擧後攝初也。言身一者狀貌不異。言想一者唯樂受想。又論

云。初靜慮中由染汚想故言想一。第二靜慮由二善想故言想異。第三靜慮由異熟想故言想一。解云。此文結上簡差別也。由染汚想者。謂同想一因。是戒禁取也。由異熟想者。謂樂受想。業所招故。並無色下三者。除有頂也。謂空處是第五識住。識處是第六識住。無所有處是第七識住。故識住有七者。總結也。言識住者識所樂住。若欲色界五蘊爲體。若無色界四蘊爲體。餘非有損壞者簡非也。餘謂三惡趣。第四靜慮及有頂天。此等諸處皆非識住。言有損者簡三惡趣也。謂三惡趣有重苦受能損於識。言有壞者簡第四禪及有頂天也。謂第四禪有無想定及無想事。有頂天中有滅盡定能壞於識。令相續斷故非識住。又論云。復說。餘處有情心樂來止。若至於此不更求出。故說名識住。於諸惡處二義俱無。第四靜慮心恒求出。謂諸異生求入無想。若諸聖者樂入淨居或無色處。若淨居天樂證寂滅。有頂味劣故非識住。解云。於第四禪無雲福生廣果三天通凡聖居。若是凡夫求入無想。若是聖者樂慧者求入淨居。樂定者求入無色。餘可知也。（冠註論本第八左九）

【暉鈔】卷中本二十一右　卽於三界及五趣中者。七識住更狹。於五趣中取人天二趣少分爲七識住。故云卽於三界及五趣中也。彼由身異者。約衆多有情各各體類異故。或有異身者。約各各成就一身異說。想異准釋。又憶念知者。謂能憶知過去梵王發願方生初定。以定力劣自不能知二定沒生初定也。初見梵王者何處見。卽初生時見梵王。有釋。在中有見梵王。此釋非也。第三識住中言彼天顯形狀貌不異者。問。初定有三天。如何卽言身異。答。以梵輔與大梵同一地攝。臣主相依勝劣有殊。故言身異。二定三天各別地無有臣主。自他論之卽各不別也。又此三天顯色光明不相妨礙卽一。身形三天大小卽別也。經部問云。第二定厭根本喜起近分捨。卽言想異。第三定厭根本地樂起近分捨。如何乃言想一。答。二定喜麤動有厭時卽起近分捨。言想異。第三定樂寂靜凝然故無厭時不起近分捨言想一也。經部釋。火災壞初定。二定中有新生天子。未了火災成壞。謂燒二定。有火來想及怖想。舊生天子已了火災成壞。有不來想及不怖想。二定言想異也。破云。水壞二定。三定天子應同前有來不來怖不怖想。應言想異。問。外色法爲色蘊。及上得四相爲行蘊。此外二蘊得爲識住不。答。不得爲識住。識愛自身。如人見賊且救身不救舍宅。故外二蘊非識住也。

【麟記】論本第八左八　言狀貌異者。或青黃等種種顯色狀貌異故。或長短等種種形色狀貌不同故。言身異約體以明者。謂約彼此長短等色體以明也。言有異身據成就說者。謂長短之人各自成就長短之色也。此同舊解。新云。言身異者卽是別指色身。言或有異身卽是總標假者。正理師云。彼由身異者就依主釋。身之異故。或有異身者是所有義。就有財釋。彼解想異亦同。言想異者。欲界人天三受互起名爲想異。初靜慮中除其苦受。彼由想異者。疏釋同前身異。新云。彼由想異別指想心。

或有異想。總據假者。正理師加一釋云。久習異想今成性故。亦顯有情異想爲體。言語光明及衣冠等事一一皆與梵衆不同。言梵王梵衆起一因想者。正理云。何緣梵衆同生此想。由見梵王處所形色及神通等皆殊勝故。又觀大梵先時已有。己及餘天後方生故。彼不能見從上地沒。依初靜慮發宿命通。不能了知上地境故。何緣大梵亦生此想。彼纔發心衆便生故。謂己所化。非速沒故。或愚業果感趣理故。或見己身形狀勢力壽量威德等過餘衆故。由是梵王梵衆雖身有殊而生一想。又憶念知先因梵王發願者。論主釋云。謂梵衆即住自天。憶念此生前所更事。謂先見彼長壽久住後重見時起如是念。解云。謂先住極光淨天等。曾見梵王長壽久住。後生此地重獲見之故。憶念知前所更事也。舊云。此中且以梵王對梵衆。明其身異。梵輔梵衆當處相望亦有身異。故顯宗云。身異者初靜慮中有表無表尋伺。多識爲因感身有差別故。准此約初禪當處相望亦爲異身耳。言極光淨天者。理實三天總攝。今言極光淨者。擧後攝初也。第三識住即第二靜慮三天也。若望三天上下身有異。而言一者當處相望不約上下。故正理云。彼天中無有表業等爲因所感差別身形故言身一。即顯形等同處諸天相無差別。言想異者。解釋如章。問。二天喜受如何名樂。答。三受明義喜亦名樂。問。樂等是受如何名想。答。受想相應説名樂想等。第四識住言想一者。問。豈不此天亦有近分中捨何言想一。答。彼樂寂靜恒無厭時。不入近分捨故。不同二禪喜受擾動有厭入捨也。言由二善想者。謂是善定心相應受故。言異熟想者。謂第三禪樂業所招得。恒無厭捨故。即是無記想也。言識住者。此中説。識於處所想樂住故兼取識也。非如四識住唯取四蘊。問。既取五蘊何獨言識。答。以強故從強立目。言三惡趣有重苦受者。謂畜生餓鬼地獄各受種種苦也。言及無想事者。即無想果也。

言淨居天樂證寂滅者。謂先在廣果雖復樂入淨居。至彼天已復求寂滅故非識住。

從此第四明九有情居。論云。如是分別七識住已。因茲復說九有情居。其九者何。頌曰。

應知兼有頂　及無想有情　是九有情居　餘非不樂住

釋曰。前七識住兼有頂天及無想處是名為九。諸有情類唯於此九欣樂住故立有情居。餘處皆非。不樂住故。言餘處者謂諸惡處。非有情類自樂居中。惡業羅刹逼之令住故。彼如牢獄。不立有情居。第四靜慮除無想天。所餘八天非有情居。如識住釋。（冠註論本第八左十二）

【暉鈔】卷中本二十右　識住與有情居別者。正理論云。由識愛樂住著名識住。有情居即於自依止身愛樂安住。是二別矣。問。中有得為識住及有情居不。答。不得。以樂求生處故也。

【麟記】論本第八左十　言有情居者。有情是假。居謂所居。五蘊實法。假居於實。有情之居名有情居。此中意明所居之法。總而言之取自有情法。非取他身非情中有。故正理云。以有情類於自依身愛住增强。非於處所。又於處所立有情居。則有情居應成雜亂。言生已名有情居。故有情居不攝中有。又諸中有非久所居。故諸有情不樂安住。言兼有頂者。問。此既非識住。何得為有情居。答。

彼以壞識故。識以昧劣不名識住。欣樂居止立有情居。言惡業羅刹者。具足應云羅刹娑。此云守護。
所餘八天者。即無雲福生廣果五淨居天等。此之八天不樂安止。非有情居。

從此第五明四識住。論云。前所引經說七識住。復有餘經說四識住。其四者何。頌曰。

四識住當知　四蘊唯自地　說獨識非住　有漏四句攝

釋曰。言四識住者。標名也。當知兩字流入下句。如經說言。識隨色住。識隨受住。識隨想住。識隨行住。四是所住。識是能住。識所住故名四識住。當知四蘊者。辯體也。色受想行名爲四蘊。有漏四蘊爲識住體。自地者。唯取自地四蘊爲體。以自地蘊受所攝受。識隨愛力依著於彼得名識住。若於他地無愛攝受故非識住。故論云。非於異地色等蘊中識隨愛力依著於彼。說獨識非住者。此明識蘊非是識住。謂此識蘊是能住識。不可能住立爲所住故。識非識住。論云。非能住識可名所住。如非即王可名王座。或若有法識所乘御。如人

船理説名識住。非識即能乘御自體。是故不説識名識住。毘婆沙師所説如是。解云。王喩能住識也。王座喩所住四蘊也。如人船理者。人喩識蘊。船喩受等四蘊。義可知也。又佛意説。此四識住猶如良田。總説一切有取諸識猶如種子。不可種子立爲良田。仰測世尊教意如是。已上論文。有漏四句攝者。明同異也。同者此四識住與七識住倶有漏攝。異者謂四句分別。謂四識住位寬體狹。通惡趣等故位寬也。非識蘊故體狹也。若七識住體寬位狹。通識蘊爲體故體寬也。非惡趣等故位狹也。互有寬狹得成四句。有七識住非四識住。謂七中識。以七中攝是七識住。以識蘊故非四識住。有四識住非七識住。謂三惡趣。第四靜慮及有頂天中有受等四蘊。以四蘊故是四識住。惡趣等故非七識住。第三倶句者謂七中四蘊。第四倶非句者謂除前相。即前惡趣等中識蘊是也。惡趣等故非七識住。以識蘊故非四識住。（冠註論本第八右十三）

【暉鈔】巻中本二十二右　問。同一刹那之心五蘊縁境時五蘊互相依。識依四蘊四蘊得名識住。四蘊依識

識名識住不。答。正理論云。除我見心故不說。馳流生死唯識非餘。外道執此爲我。佛爲破彼顯識依他體不自在。破彼我見故。識住內世尊不說也。說色蘊與續有識現在爲依過去未來爲境。受等三蘊現在與識同緣一境過未爲境三時有助伴義故。四蘊立識住。識之住故也。七識住通識者。七即說識及四蘊於天等處樂住。四即識於四蘊住也。

【麟記】論本第八十一右　自地四蘊爲識住者。謂此四蘊是識所依。是識所住。若所依謂識俱生依。同時助伴令識起故。最極親近故名爲依。即是顯親由籍義。所著謂識所著境。通俱不俱。引識起故。諸有漏識隨著於彼。具斯二義故名識住。於地獄中亦愛自身或貪樂等。故於地獄亦有識住。若於非情他身四蘊。雖是所緣可名所著。而非是依。非親俱故。若依異地及無漏法。二義俱闕故非識住。如非即王可名王座者。引喩釋也。如不可即說王爲王座。識住亦爾。不可自說爲識住也。如人船理者。如人與船。能乘所乘之道理也。總說一切有取諸識者。謂有漏識能取三有名爲有取。以簡無漏識背三有故。四蘊如良田等者。喩能所不同也。又論云。又法與識可俱時生爲識良田可立識住。識蘊不爾。故非識住。解云。田種必俱時。識與識蘊無俱時理。故非識住也。

從此第六明四生。論云。於前所說諸界趣中。應知其生略有四種。何等爲四。何處有何。此有兩問。頌曰。

於中有四生　有情謂卵等　人傍生具四　地獄及諸天

中有唯化生　鬼通胎化二。

釋曰。前兩句答第一問。下四句答第二問。於中有四生者。標數。於三界中生有四生也。有情謂卵等者。列名。謂諸有情類有四種生。卵生胎生濕生化生。如孔雀等生從卵㲉。是名卵生。如牛馬等生從胎藏。是名胎生。如飛蛾等生從濕氣。是名濕生。如諸天等諸根頓具無而欻有是名化生。人傍生具四者。人傍生趣各具四生。人卵生者。謂如世羅鄔婆世羅生從鶴卵。鹿母所生三十二子。槃遮羅王五百子等。解云。世羅此云大山。鄔婆世羅此云小山。近山生故以山爲名。婆沙論云。昔於此洲有商人。入海得一雌鶴。形色偉麗。奇而悅之。遂生二卵。於後卵開生二童子。端正聰明。年長出家得阿羅漢果。大者名世羅。小者名鄔婆世羅。鹿母是毘舍佉夫人。毘舍佉是二月星名。從星爲名。此云長養。即功德生長也。是彌伽羅長者兒婦。有子名鹿。故名鹿母。從子爲名。生三十二卵。卵各生一兒。槃遮羅王有妃生五百卵。生已羞

恥恐爲災變。以小函盛棄殑伽河。隨流而去。下有隣國王。因觀河水有函。遣人接取見卵。將歸城內。經數日間各出一子。養大驍勇。所往皆伏無敢敵者。時彼隣國王與彼父王久來怨讎。欲遣征伐。先作書告。今欲決戰。尋後兵至。圍遶其城卽欲摧破。槃遮羅王極大忙怖。王妃問委慰喩王言。王不須愁。此五百子皆是我兒。具陳前事。夫子見母惡心必息。妃自登城。告五百子說上因緣。如何今者欲造逆罪。若不信者各應張口。妃按兩乳。有五百道乳各注一口。應時信伏。因卽和好。兩國交通各無征伐。人胎生者如今世人。人濕生者。如曼馱多遮盧鄔波遮盧鴿鬘菴羅衛女。解云。曼馱多此云我養。是布殺陀王頂皰而生。顏貌端正。王抱入宮。諸宮皆言我能養也。故以標名。舊云頂生。此是義翻。然非正目。此王長大爲金輪王。遮盧此云髀生。鄔波遮盧此云小髀。於我養王兩髀之上各生一皰。皰生一子。從所生處爲名。以小標別。亦爲輪王。鴿鬘者昔有一王名爲靜授。於

王腋下有一皰生。生一女子名爲鴿鬘。如鴿飛出。王重如鬘故以爲名焉。菴羅衞女從菴羅樹濕氣而生。從樹爲名。人化生者唯劫初起。傍生三種人所共見。化生如龍揭路茶等。解云。此云頂癭。亦名蘇剌尼。此云妙翅。舊云金翅鳥。地獄及諸天中有唯化生者。一切地獄及諸天中有皆唯化生。鬼趣唯通胎化二種。鬼胎生者如餓鬼母。白目連言。我夜生五子。隨生皆自食。晝生五亦然。雖食盡而無飽。解云。意表有胎生。論云。一切生中何生最勝。應言最勝唯是化生。若爾何緣後身菩薩得生自在而受胎生。見受胎生有大利益故。謂爲引導諸大釋種親屬。相因令入正法。又引餘類令知菩薩是輪王種。生敬慕心。因得捨邪歸於正法。又令所化生增上心。彼既是人能成大事。我曹亦爾。何不能爲因發正勤專修正法。又若不爾族姓難知。恐疑幻化。爲天爲鬼。如外道論矯設謗言過百劫後當有大幻出現世間。故受胎生息諸疑謗。有餘師說。爲留身界故受胎生。令無量人及諸異類一興

供養千返生天及證解脫。若受化生無外種故。身纔殞逝亦無遺形。如滅燈光即無所見。已上論文。梵云馱都。此云身界。即佛身界也。亦名室利羅。此云體。佛身體。舊云舍利訛。餘可知也。(冠註論本第八右十五)

【暉鈔】卷中本二十二左　前界攝外器善染中有。四生五趣攝不盡。於三界五趣中說四生言於中也。四生者。四即數。生謂生類。諸生不同。不過四類。或多生類故名衆生。先列卵生者具四緣。一卵殼。二胎藏。三濕氣。四染處。胎生三緣。除前一緣。濕生二緣除前二。化生一緣。除前三緣也。毘舍佉。二月星名。此云長養。二月星能長養萬物。毘舍佉長養善法。故取星名。西方十二月皆取星名也。此四生人皆得入聖得金輪王等。得聖後不受卵濕二生。布殺陀。此云淨住。即長養功德也。瞻部洲北有銕叉樹。妙翅鳥欲食龍時。先坐此樹投身於海。以翅撥水而取食之。化生鳥食四生龍。胎生鳥食三生龍。濕生鳥食二生龍。卵生鳥即食一生龍。不能食前三生龍。以已劣故也。問。化生龍死無遺形。如何鳥食。答。有二說。一云。以不知故食。不說充飢亦有何失。一云。呑龍龍未死。亦除飢也。問。四生中何生最多。答。若兼中有化生多。地獄諸天二趣全三趣少分。兼中有皆化生故。若除中有四中即濕生多也。外道論懸記過百劫後有大幻出世。受胎生止此謗也。爲留身界者。論主破云。佛有勝神通。能化別身界留住。何要胎生。答。正理破論主云。別化身者非是十力等功德所依熏身。設別留者無大饒益也。

【麟記】論本第八左十一　應知其生略有四種者。謂其衆生數雖無量。今但四類攝之總盡。故言略也。此

有兩問者。一問四生名體。二約處問生。有情謂卵生等者。正理云。前所說界通情非情。趣唯有情。然不遍攝。生唯遍攝故說有情。無有非情名衆生。若爾界趣應亦名生。不爾。界通情非情。趣雖有情而非遍故。此有情遍。獨立生名。問。所以卵生在初者。此等具緣多者在先明之。卵假四緣。一依處。二濕氣。三卵㲉。四胎藏。胎生具三。除卵㲉濕生具二。除胎卵二。化生但一緣。唯假依處。如諸天等者。等餘化生。謂那落迦中有等。從星爲名者。謂春二月萬物生長。今此夫人生長功德故取爲名。般遮羅者。是地名。此云執土報也。殑伽河者。亙升反 昔云恒河是也。頂生者。後爲金輪王。能破修羅及侵帝釋。緣廣不述。言頂生者約所生處爲名。非本名也。鴿鬘者。或生已鴿恒隨逐。王重如鬘。菴羅衛女。或從子生。或從花枝生也。正理云。此四生人皆可得聖。得聖無受卵濕二生。以聖皆欣殊勝知見。卵濕生類性多愚癡。此約多分說。如人卵生等不愚癡也。或諸卵生生皆再度故。飛禽等世號再生。聖怖多生故無受義。濕生多分衆聚同生。聖怖雜居故亦不受。解云。濕生人聖不受之。從多分說。卵生可爾。揭路荼。此云妙翅。色殊妙具衆色故。昔云迦樓羅。翻爲金翅者訛謬也。此鳥有四生具大威德。身量廣大兩翅相去三百六萬里。菩薩得生自在者。於受四生得自在也。又引餘類者。謂非釋種也。我曹者。曹之言輩。若受化生無外種者。死後不留大種身也。以離根識故名爲外。論云。若人信佛有持願通能久留身。此不成釋。此是論主破餘師釋。爲留身界義。問。化生何故死無遺形。婆沙云。由彼頓生故應頓滅。如戲水者出沒亦然。又論云。因論生論。若化生身如滅燈光死無遺者。何故契經說。化生揭路荼取化生龍爲充所食。以不知故爲食。取龍不說充飢。斯有何失。或龍未死暫得充飢。死已還飢。暫食何咎。於四生內化生衆多。謂三趣少分及二趣全故。

從此第七明中有。於中有二。一正明中有。二正破外道。就明中有中分三段。一正明中有。二證有中有。三諸門分別。且初正明中有者。論云。此中何法說名中有。何緣中有非即名生。此有兩問 頌曰。

死生二有中　五蘊名中有　未至應至處　故中有非生

釋曰。上兩句答初問。下兩句答第二問。死生二有中五蘊名中有者。謂死有後在生有前。二有中間有五蘊起。爲至生處故起此身。二趣中間說名中有。未至應至處故中有非生者。答第二問。中有已起不名生者。謂未至彼當來所應至處。是故中有不名爲生。論云。何謂當來所應至處。問也。謂引異熟究竟分明。是謂當來所應至處。答也。解云。中有唯天眼見故昧劣不明也。（冠註論本第八右十八）

【暉鈔】卷中本二十三左　死有後生有前。二有中間故名爲中。三有攝故名中有也。問。生之與起名異體同。中有已起。何不名生。答。體雖無別。約位有殊。生即結生。故中有名起不名生有也。

【麟記】論本第八右十三　二趣中間者。謂前趣死後後趣生前。二趣中間故名爲中。四有之內一有攝故名之爲有。中即是有名爲中有。中有名起不名生者。雖生是起異名。而約別義故但名起。

中有唯天眼見者。准此生有分明。肉眼天眼俱能見故。故得名生。

從此第二證有中有。依大衆部不立中有。故論云。有餘部說。從死至生處容間絕。故無中有。述大衆部宗也。此不應許。論主總非。所以者何。大衆部徵也。依理教故。總答。何謂理教。頌曰。

如穀等相續　處無間續生　像實有不成　不等故非譬
一處無二並　非相續二生　說有健達縛　及五七經故

釋曰。前六句依理證。第七第八句依教證。前兩句立比量破大衆部。如穀等相續者。謂如穀等種春種秋收中間必有芽等相續。處無間續生者。如穀種果既是相續。要處無間剎那續生。言無間者。謂無間絕種果中間芽莖等也。如穀等相續處無間絕。有情相續理亦應然。有情死生是相續法。如何間絕。言無中有。此有比量。如穀等者是同喩也。處無間者是宗法也。續生者是因也。量云。死生是有法。要處無間是宗法。因云。以續生故。同喩云。猶如種果。種果是續生。種果無間絕。

死生是續生。死生無間絕。像實有不成不等故非譬者。破大衆部救也。論云。豈不現見有法續生而於其中處亦有間。如依鏡等從質像現。如是有情死有生有處雖有間何妨續生。解云。此大衆部救也。言續生爲因。因中有不定過。死有生有。爲如種果以續生故必無間絕耶。爲如質像以續生故亦有間絕耶。並曰。質像是續生。質像許間絕。死生是續生。死生亦間絕。爲破此救故有斯頌。此有二理破之。一所立像實有不成。二像喩不等於法。由此二理故非譬也。故論云。謂別色生說名爲像。其體實有理所不成設成非等故不成喩。一處無二并者。釋上像實有不成句也。論有四義釋一處無二并也。一云。謂於一處鏡色及像並見現前。二色不應同處並有。依異大種故。解云。於一鏡處。不可實有像與鏡色二並生也。既二並生故像不實也。第二云。又陿水上兩岸色形。同處一時俱現二像。居兩岸者互見分明。曾無一處並見二色。不應謂此二色並生。解云。於一水處兩岸像生。二像既是同生。故知像非實有也。

第三云。又影與光未曾同處。然曾見鏡懸置影中。光像顯然現於鏡面。不應於此謂二幷生。解云。障光明生。名之爲影。故知影處不合有光。既見影中鏡之光像。像非實也。第四云。或言一處無二並者。鏡面月像謂之爲二。近遠別見。如觀井水。若有並生。如何別見。故知諸像於理實無。解云。於一鏡處有面月二像。看面像則近。觀月像則遠。二像若實。豈容一處近遠別見也。又論云。然諸因緣和合勢力令如是見。以諸法性功能差別難可思議。解云。令如是見者。謂鏡質等勢力返見本面。實無像。非相續二生者。釋上不等故非譬也。非相續者汝所立像非一相續。不等於法。夫言相續。此滅彼生。唯從鏡中有像現故。明知質像非一相續。又像與本質俱時而有。故知質像非是相續。若死生法是一相續。要從此死後彼方生。汝將質像非一相續法。而喩死生一相續法者不實等也。言二生者。汝所立像託二緣生。不等於法。謂本質及鏡爲二緣也。生有唯從死有爲緣故。生有起唯一緣生法也。汝以二緣生法。以喩一緣生法。是則不可

等於法故非譬也。已依正理對破彼宗。故知死生必有中有。（冠註論本第八十九右）

【暉鈔】卷中本二十四右　種果者。種望果。豈中間有間耶。必有芽等相續也。同喩如種果。異喩如質像也。因中有不定過者。十四中是共不定。以續生有間無間共有彼救。質像者。質望像。續生即有間也。別色生者。像色離本質外名別色。此色是假。若非假色者。如何一鏡實色處更有一實像色生。鏡面色與像色各依四大。故知像色假有也。二於一水處兩岸色形於水中現名二也。三影中之鏡。鏡中光色。既與影同處生故光像色假有也。四見人面及月二像於鏡中現。亦有釋。面即鏡面即近。像即月像此即遠。一處者。初鏡次水。次影後鏡爲一處也。然諸因緣和合者。由鏡面等分明照人鏡光爍人。眼光入鏡故反自見面也。夫言相續此滅彼生者。此釋相續道理。唯從鏡中有像現故者。若質已滅唯鏡中有像現。即是得相續。既質在唯鏡中便有像現。質像體類各別。故知不是相續也。

【麟記】論本第八十三左　處無間是宗者。夫論立義要具三支。因謂因由。是能成立之義。宗謂所崇所立之義。喩謂比況曉喩等義。三支具足立義方成。尋疏可知。像實有不成者此總破。一處無二並已下別破。破中有四。初鏡像同處破。二二像並生破。三約影光同處破。四約近遠別見破。依異大者。謂像與鏡色各自有大種故不合並生也。陿水兩岸互見分明者。謂陿水處但可容一岸之影。今既二影重現。故知是假。以無一人能見二影故言互見。即東岸人見西岸影。西岸人見東岸影。然曾見

鏡懸置影中者。如將鏡置屋簷下。即有外之光像現於鏡面。屋下即影也。第四類言鏡面月像者。准此取鏡面。非人面。新舊意同故。舊云。見鏡則近。見像則遠。新云。若謂像色鏡面同處。故知並取鏡面也。詳此疏取人面及月像為二。以言於一鏡處有月面二像也。此言像假是經部義。非有部義。言令如是見者。謂顯經部所見鏡水中實無像色。然諸本質因鏡水等緣。因緣勢力而有像現。令如是見。非有似有。實見之時還見本質。爾時視像。如何能見本質。以諸法性功能差別難可思議。所以能見。非相續者。謂非一體相續往彼生也。受生即以此身相續往彼生故。此顯像質體類差別。非一相續也。又像與質俱時而有者。此約俱生。非相續也。

說有健達縛及五七經故者。引教證也。如契經言。入母胎者要由三事。一者母身是時調適。二者父母交愛和合。三者健達縛正現在前。此經既言健達縛。明知有中有。健達縛者此云尋香。中有食香。名尋香也。及五七經故者。如契經言。有五不還。一者中般。二者生般。三者有行般。四者無行般。五者上流般。此經既說有中般。明知有中有。在中有中般涅槃。故名中般也。及七經者。又經說有七善士趣。大衆部中有餘師釋云。中般者非是中有。在中天名中。住中天中得般涅槃名中般也。

故引七善士經。破彼所說顯成中有。故論云。又經說有七善士趣。謂於前五中般分三。由處及時近中遠故。譬如札火小星迸時纔起至近而則滅。初善士亦爾。譬如鐵火小星迸時起至中而滅。二善士亦爾。譬如鐵火大星迸時遠未墮土而滅。三善士亦爾。非彼所執別有中天。有此時處三品差別。故彼所執定非應理。解云。初善士者。纔受色界中有未出欲界得般涅槃。處時俱近也。第二善士。受中有已到二界中間得般涅槃。處時俱中也。第三善士。臨到色界未及受生便般涅槃。處時俱遠也。又大衆部更有釋云。壽量中間得般涅槃故名爲中般。非中有也。論主破云。又無色界亦應說有中般涅槃。彼亦有壽量中間般涅槃故。然無色界無中般者。以嗢陀南伽陀中說。總集衆聖賢。四靜慮各十。注曰。初禪有十人。得初禪定業爲第一人。又得初禪已種解脫分善爲第二人。又得初禪已現般爲第三人。並前七善士爲十人。二三四禪准斯數說也。三無色各七。於十中除中般三也。唯六謂非想。於前七中又除上流。無上生故。准此頌文。無色界中必無

中般。故彼所執皆成虚妄。又大衆部引一經頌證無中有。頌曰。再生汝今過盛位。注曰。有外道婆羅門名再生。年老來見世尊。世尊呵嘖。汝今年老已過盛位。胎外有五位。一嬰孩。二童子。三少年。四盛年。五老年也。至衰將近琰魔王。至衰老位。欲往前路無資糧。無戒定慧資糧也。求住中間無所止。大衆部云。此頌云中間無所止。明知無中有。若有中有即有所止。論主釋通云。此頌意顯於彼人中速歸磨滅無暫停義名無所止。或可中有名無所止。爲至所生亦無暫停。行無礙故。

（冠註論本第八二十五左）

【暉鈔】卷中本二十四左　五那含中中般。卽言中天得般涅槃。五那含中生般及有行般。應有生天及有行天得般涅槃。既不許然。故知彼釋非也。初善士亦爾者。如初定去欲界有二百五十六萬瑜繕那。分爲三分處。色中有行卽八十萬瑜繕那方入涅槃。時處皆近。二三善士皆准此釋。問。如調達生身入地獄。有中有不。答。有中有。由極惡業順現受果。不待命終。非是生身便入地獄。生身至餘處死。方受中有。入地獄受生。若將生身便入地獄者。五趣之身卽有雜亂失。既極惡許將此身便受地獄身。亦應極善便將此身受淨土生。既極善不許。極惡亦同善有中有也。琰魔王者。亦云閻魔羅。亦云閻魔。亦云閻羅杜。皆是梵語輕重不同。此云雙王。謂兄妹二人爲鬼王。亦云靜息。息罪人。初受父母胎名一生。受法時名再生也。

【麟記】論本第八左十四　言母身調適者。謂身心悅豫無乾濕等疾。二交愛和合者。謂俱起婬愛。此中意取第三為證。有天名中者。餘師救也。破云。五不還中說有中般。即是中天。五不還中說有生般。亦應許別有生等天也。札火。爭黠反。江南謂破削木片為柹。晡音。關中謂之札。迸者。班孟反。謂散走。壽量中間得般涅槃者。謂生色界未盡彼壽量中間斷除煩惱成羅漢果。是名中般。言再生者。父母為一生。出家為再生。今婆羅門受法亦謂出家也。琰魔王者。以冉反。或云閻羅王等。皆是梵音楚夏。聲之訛轉也。此言諍息。謂犯罪人不自知過。於苦不忍違拒獄卒。由王示語便知己罪意分而受。息諍息罪皆由王故名諍息。又云。閻魔此云雙。杜羅此云王。此王兄妹皆作地獄王。兄治男事。妹治女事。故言雙王云云。

俱舍論頌疏　論本第八　終

俱舍論頌疏　論本第九

中大雲寺沙門圓暉述

分別世間品第三之二

從此第三諸門分別。總有十一門。就中有三。一明中有形狀。二明眼等九門。三明入胎門。且第一明中有形狀者。論云。當往何趣所起中有。中有形狀如何。頌曰。

此一業引故　如當本有形　本有謂死前　居生刹那後

釋曰。上兩句明形狀。下兩句釋本有。此一業引故如當本有形者。此謂中有與當本有同一業引。由業同故。中有形狀如當本有。謂本有是人形。中有亦人形。餘趣亦然。問。於一狗等腹中容有五趣中有頓起。既有地獄中有現前。如何不能焚燒母腹。答。彼居本有亦不恒燒。如暫遊增。況居中有。言遊增者遊十六增。彼無火也。又解。諸趣中有雖居一腹非互觸燒。業所遮故。又論云。欲中有量。雖如小兒年五六歳。而根明利。菩薩中有如盛年時。形量周圓具諸相好。故住中有將入胎時。照百俱胝四大洲等。此明菩薩中有。若爾何故。菩薩母夢見白象子來入己右脇。難也。此吉瑞相。非關中有。菩薩久捨傍生趣故。答也。如訖栗枳王夢所見十事。訖栗枳王者此云作事王也。謂大象井麨。梅檀妙園林。小象二獼猴。廣堅衣鬪諍。白象相端嚴。具六牙四足。正知入母胎。寢如仙隱林。如是所夢。但表當來餘事先兆。非如所見。已上論文。解云。

訖栗枳王迦葉佛父。作此十夢來白世尊。佛言。此表當來釋迦如來遺法弟子之先兆也。王夢見有一大象。被閉室中。更無門戶。唯有小窓。其象方便投身得出。尾猶礙窓不能出者。此表釋迦遺法弟子。能捨父母妻子出家。而於其中尚懷名利。如尾礙窓。又窓見一渴人求覓水飮。便有一井具八功德。井隨逐渴人。人不欲飮。此表釋迦遺法弟子諸道俗等。不肯學法。有知法者。爲名利故隨彼爲說。而猶不學。又夢見一人將一升眞珠博一升麨。此表釋迦遺法弟子。爲求利故。將佛正法爲他人說。又夢見有人將栴檀木博以凡木。此表遺法弟子。以內正法博外書典。又夢見有妙園林。花菓茂盛。狂賊壞盡。此表遺法弟子。廣滅如來正法園也。又夢見有諸小象驅一大象令之出群。此表遺法弟子諸惡朋黨破戒衆僧。擯斥有德人也。又夢有一獼猴。身塗糞穢搪突己衆。衆皆避也。此表遺法弟子。以諸惡事誣謗良善見皆遠避。又夢見一獼猴實無有德。衆共扶捧。海水灌頂立以爲王。此

表遺法弟子諸惡朋黨。擧破戒僧猶以爲衆首。又夢見一衣堅而且廣。有十八人。各執少分四面爭挽。衣猶不破。此表遺法弟子分佛正法成十八部。雖有少異執而眞法尚存依之修行皆得解脫。又夢見多人共集互相征伐死亡略盡。此表遺法弟子十八部內。各有門人部執不同互興鬪諍也。此之十夢但表先兆。非如所見。菩薩母夢見白象者。是吉瑞先應。非白象也。色界中有量如本有。與衣倶生。慚愧增故。欲界中有不與衣倶。由皆宿習無慚愧故。唯有鮮白苾蒭尼。由本願力世世有自然衣恒不離身。隨時改變。乃至最後般涅槃時。亦以此衣纏屍焚葬也。本有謂死前居生刹那後者。本過去業所感之有名爲本有。此之本有。在死有前居生有後。中間諸蘊爲本有體。言生有者。初受生時一刹那蘊也。言死有者。最後命終一刹那死蘊也。欲色二界具足四有。若無色界唯闕中有有餘三有。（冠註論本第九初右）

【暉鈔】卷中本二十右　論本第九　中有與生有同引業故。形狀相似。滿業別故。所食飛行具根等則別也。

假設難云。中有如本有形者。如一母狗腹懷五子。一時死各墮一趣。各有中有當處起。於中有地獄中有。即火車等應燒母腹也。初釋舉重況輕。居本有尚不燒。況居中有被燒。後釋約五趣業隔礙不互燒也。母腹不說業遮者。中有細。母腹麤。設不遮亦不燒。故不說業遮也。如當本有形者。問。五趣業定可爾。五趣業未定。如何言如本有形。答。業無不定者。設、不定即受鬼中有也。照百俱胝者。一俱胝百億。百俱胝有百百億。即大千界。照所化大千界。菩薩雖在欲界。如盛年。不同餘人五六歲也。大象被閉室中等者。大象況一切衆生。室況三界。無門戶況無出路。小窓況佛法爲出路也。海水灌頂者。轉輪聖王欲受位時。取白牛右角。置五穀種子。以四大海水盛滿中。表王四天下。諸粟散王等將上殿灌頂受王位也。入胎雙生者。中有先入小。後入大。出即先出大。後出小。餘人生門出亦生門入。菩薩右脇生。來受胎亦右脇受。獨覺輪王亦爾。婆沙更有一說。出胎入胎皆同生門。正理論云。入胎無定。以中有身無障礙故。然由業力胎藏所持也。無色無中有者。無色定業不能引中有。已斷起結故。正理論云。一謂往生處。得傳識故。二謂表所趣形故。欲色二界有。無色即於欲色二界得定處受生。無所往來。故無中有。問。無色界死即欲色界受生無往來。何要有中有。答。無色命終生欲色界所處不定。又以造起業故起中有。婆沙六十八云。若人死自身面上。作蟲亦有中有。蟲即傍生趣。下文往三惡趣識滅於足。識從足至面亦有往來。故有中有也。中有決定者。未斷下二界貪生有決定中有後起。與生有同業引。不能入二無心定。不能證俱分解脫。有慧解脫不起世俗不同分心。女男決定無能轉義。不能斷三界見惑。及不能斷欲界修惑也。

冨春沙門遁麟述

【麟記】論本第九右初　俱舍頌疏記　論本第九

如當本有形者。簡前本有。謂中有形相但同當來生。不同前生也。以與當生引業同故。此中有形如本有形。如印所印。文像不殊。於一狗等腹中容有五趣中有者。謂狗等腹中容有五子。一時命終各各生一趣。然今此中意取地獄中有為難。如暫遊增者。謂遊十六增時。未至彼處亦不受苦。猶如等活有息時。諸趣中有非互觸燒者。如眼不見亦不可觸。以中有身極微細故。火亦應爾。准此母腹亦不被燒。業所遮故。言欲中有量者。因明中有形相。便明二界形量大小也。而根明利者。恐疑小故不能起惑。故有此言。夢見白象者。瑞應經云。菩薩初下。化為白象。觀日之精。因母晝寢。而示夢象從右脇入。訖栗枳王。居枳反。海水灌頂立為王者。謂刹利種姓立為王時。或月八日自受其齋戒。登於高樓。先以白牛角盛五穀種子及四大海水。灌於頂上。獼猴傚此而亦灌頂為王也。鮮白苾蒭尼者。賢愚經云。先世為一貧女。唯有一白氎。以殷重心布施賢聖。由此勝因。生便白氎裹身而出生。論云。又諸中有從生門入。非破母腹而得入胎故。雙生者。前小後大。此約入胎位論大小。若約生以論則前大後小。婆沙七十問云。菩薩中有何處入胎。答。從右脇入。正知入胎。於母母想無婬愛故。有說。從生門入。諸胎卵生法應爾故。輪王獨覺亦有兩說。正理云。理實中有隨門入胎。非要生門。無障礙故。然由業力胎藏所拘。若無色界闕中有者。正理云。何緣無色無中有耶。彼業不能引中有故。何緣彼業於此無能。起結斷已方生彼故。有餘師說。為往生處表所趣形。故立中有。非無色界有處有形。故無中有。若爾即於自死屍肉身根滅處命終受生。

不往餘方。何用中有。婆沙答云。有情死已或生惡趣等。生惡趣者識在脚滅。若於自身爲蟲等者。彼未死時多愛自面。故彼死已生自面上。既從脚來生自面上。若無中有誰能往連續。無此死已還生此處。捨身受身必移轉故。問。無色界沒生欲色者。既隨當處中有現前。彼無往來。何用中有。答。彼先已造感中有業。雖無往來亦受中有。業力所引必應起故。

從此第二明眼等九門。論云。已辯形狀。餘義當辯。頌曰。

同淨天眼見　業通疾具根　無對不可轉　食香非久住
倒心趣欲境　濕化染香處　天首上三橫　地獄頭歸下

釋曰。此有九門。同淨天眼見者。第一眼境門。謂中有身唯兩眼境。一同類眼見。五趣中有各見自類也。二淨天眼見。言淨天眼者修得天眼。極清淨故能見中有。生得天眼則不能觀。以中有身極微細故。有餘師說。天中有眼能見五趣。人中有眼能見四趣。除天中有也。鬼中有眼能見三趣。除人天也。傍生中有眼能見二趣。除人天鬼也。地獄中有眼唯見自類也。業通疾者。第二行速門。淩空自在是謂通義。通由業得名爲業通。此通勢用速故名疾。中有獲得最疾業通。上至世尊無

能遮抑。以業勢力最强盛故。具根者。第三具根門。一切中有皆具五根。無對者。第四無礙門。對謂對礙。中有凌空。金剛山等所不能遮。故名無對。曾聞。柝破炎赤鐵團。見有生蟲故。不可轉者。第五不可轉門。謂五趣中有不可轉也。人中有起但往人趣。必不可令人中有沒餘中有起。天等亦然。食香者。第六所食門。中有以香爲食。由食香故名健達縛。若少福者唯食惡香。若多福者妙香爲食。非久住者。第七住時門。婆沙師說。此住少時。一切中有樂求生故。速往受生。必不久住。更有餘師說。極多七七日。尊者世友說。極至七日。法救大德說。時無定限。生緣未合。中有恒存。故輪王中有。要至人壽八萬歲時方頓與果。以世尊說業力不思議故。倒心趣欲境濕化染香處者。第八結生門。倒心者。此明中有先起倒心馳趣欲境。彼由業力所起眼根雖住遠方。能見生處父母交會。而起倒心。若男中有緣母起愛生於欲心。若女中有緣父起愛生於欲想。翻此二緣俱起瞋心。故施設論

云。時健達縛。於二心中隨一現行。謂愛或恚。彼由起此二種倒心。便謂己身與所愛合。所泄不淨流至胎時。謂是己有便生歡喜。此心生已。中有便沒受生有身。若男處胎。依母右脇向背蹲坐。若女處胎。依母左脇向腹而住。若非男非女。住於母胎。隨所起貪如應而住。必無中有非女非男。以中有身必具根故。然中有身或男或女。後胎增長方作不男女。如上所明是胎卵生。餘濕化生今次當說。濕化染香處者。夫論受生皆須起染。濕化無胎。依何起染。故說濕生染香故生。謂遠臭知生處香氣。便生愛染。往彼受生。業有勝劣。香有淨穢。若化生者染處故生。謂遠觀知當所生處。便生愛染往彼受生。業隨善惡處有淨穢。於地獄趣起倒心故亦生愛染。謂彼中有或見自身冷雨寒風之所逼切。見熱地獄。情欣煖觸投身於彼。或見自身熱風盛火之所逼害。見寒地獄。心欲清涼投身於彼。先舊諸師作如是說。由見先造彼惡業時己身伴類。馳往赴彼。天首上三横地獄頭歸

下者。第九行狀門。謂天中有首正上昇。如從坐起。人鬼傍生中有行相還如人等。地獄中有頭下足上。故有頌曰。顚墜於地獄。足上頭歸下。由毀謗諸仙樂寂修苦行。此上所論據人中死還生諸趣。若通餘趣行相不定。故婆沙云。若地獄死還生地獄。不必頭下足上。若天中死還生天中。不必首上足下。若地獄死生於人趣。應首上昇。若天中死生於人趣。應頭歸下。（冠註論本第九右四）

【暉鈔】卷中本二十七左　天中有眼能見五趣者。天趣本有眼能見五趣本有形。受天中有眼亦見五趣。人本有眼不見天本有。人中有眼亦不見天中有。能見餘四。乃至地獄本有眼不見餘四趣。中有眼亦不見餘四趣中有也。上至世尊無能遮抑者。婆沙六十八云。神境通與中有業通何速。答。神境通速。若爾何故言業通上至世尊無能遮抑。答。依不障義及業力說世尊不遮抑。若速即神境通也。若中有具五根者。如何前文言如當本有形。本有不具五根者有。答。以中有初業異熟勝妙故具五根也。見有蟲故者。表中有入赤鐵受生不障義。或是先入諸金剛山不能遮。以鐵虛疎具得出入也。不可轉者。餘處許中有可轉者。即約未受彼身。見有惡相便生謗等即轉。若受了即決定不可轉也。非久住者。婆沙七十說。七日外生緣未合即數死生。不久生緣即合。餘師說。即寄餘同類生。如狗即寄野狐生等也。翻此二緣倶起嗔心者。即翻前男於母起愛於父起恚。翻女於

父起愛於母起恚也。問。後言中有入胎如入茆室等。如何此言於母起婦想等。答。後言入茆室等據入胎門說。此言起染據在中有說也。論有二說。一云。卽精血等成五根身等。如種與芽滅生道理。一說。別大種成根身等。如依棄糞別有蟲生。諸仙者。卽五通仙。樂寂者。卽獨覺。修苦行者。卽菩薩也。

【麟記】論本第九左　言同類眼見者。自是別義。唯以細故。以天中有眼不劣。下趣何爲不見。天見五趣者。約勝能見劣也。業通疾者。此有二義。一最速疾義。二無遮抑義。婆沙六十八。問。神境通力與中有位諸有所行何者爲疾。如是說者。神境通力行勢迅速非諸中有。具根者。正理論云。隨地諸根中有皆具。雖言中有如本有形。如初異熟最勝妙故。又求有故無不具根。健達縛者。是短聲呼。若長聲呼應言健達頞縛。其健達名香是字緣。頞縛是字界。或目尋義。或目食義。尋謂尋求。食謂食香。以健達助頞縛。卽名健達縛。謂短聲呼略去頞字。若長聲呼卽亦達攝頞。短聲卽不攝也。世友說極七日者。謂身羸劣不久住故。婆沙說一切中有不久住者。謂速求生。若有生緣未卽和合。若定此處此類應生業力。卽令此緣和合。若非定託此和合緣。便卽寄生餘處餘類。新云。中有亦不多時。必遇生緣。不可在中有過年等。正理云。一切中有唯除中般自餘中有。無不至生有而命終者。受生有身者。論云。復應思擇。爲由業力精血大種卽成根依。爲業別生根依大種依精血住。有言。精血卽成根依。謂前無根中有俱滅。後有根者無間續生。如種與芽生滅道理。又經云。父母不淨生羯刺藍。有餘師言。別生大種。如依棄糞別有蟲生。不淨聚中生羯刺藍。故與彼經無相違失。男依母右脇女依左者。右勝左劣故。又正理云。女男串習左右事。宿因分別力使

之然。言據人中死還生人趣者。此釋不然。以此頌文通約生五趣故。應言且約人中死者說。卽無過失故。婆沙但云。且約人趣中命終者說。又此卽婆沙正義。應知人鬼傍生各自趣中有行狀還如人等。傍行馳趣如鳥飛空。如晝夜無住。

從此第三明入胎門。論云。前說倒心入母胎藏。一切中有皆定爾耶。不爾。經言入胎有四。其四者何。頌曰。

一於入正知　二三兼住出　四於一切位
及卵恒無知　前三種入胎　謂輪王二佛
業智俱勝故　如次四餘生

釋曰。此兩行頌。是第十一入胎門。一切入胎不過四位。一於入正知者。一入胎位也。唯知入胎不知住出。二三兼住出者。二兼住者二入胎位也。謂知住胎亦知入胎。三兼出者三入胎位也。謂知出胎兼知住入。兼言爲顯後帶前故。四於一切位者。第四入胎位也。入住出位一切不知。及卵恒無知者。此前四位唯說胎生。若卵生者。入胎等位三時不

知。名恒無知。恒無知同前胎生第四位。故頌言及也。問。如何卵生言入胎藏。答。謂卵生者先必入胎。從初名說。或可卵言據當名說。謂先入胎後從卵生。說胎名卵據當名說。如煮米時即言煮飯。據當名也。前三種入胎謂輪王二佛者。約人以配也。第一入胎。謂轉輪王。於入胎時無倒想解。正知入胎不知住出。第二入胎。謂獨勝覺。於入胎位正知入住不知出位。第三入胎。謂無上覺。入住出位皆能正知。言二佛者獨覺大覺也。業智俱勝故者。釋前所以也。第一業勝。正知入胎。謂轉輪王。宿世曾修廣大福故。第二智勝。正知入住。謂獨勝覺。久習多聞勝思擇故。第三福智俱勝。謂無上覺。曠劫修行勝福智故。如次四餘生者。如次兩字配上業智俱勝。是輪王二佛也。四餘生者。四謂第四入胎。即入住出位皆不正知。除前三種餘胎卵生福智俱劣。皆是第四入胎位攝。（冠註論本第九右八）

【暉鈔】卷中本二十八左　正知者。是不起倒心名正知。非是善心名正知。若菩薩於父母起親附愛結生。

不同凡夫顚倒愛也。勝福智故者。六度中前三福後一智。中間二順前即福攝。順後即智收也。三時不正知者。若福薄者中有見自身大風雨寒熱或軍逐入草座墟下。住出亦爾。若福勝中有見自身昇華臺堂殿居勝牀座。住出亦爾。是不正知也。

【麟記】論本第九右四　言正知者。但無倒想名爲正知。非是定起善心正知正念。後必帶前者。正理云。將入胎位。支體諸根具足無損。雖勝明利。尚不正知。況住出時。支根損缺羸劣暗昧。而能正知。理無容故。婆沙七十云。諸有情類。多起如是顚倒想已入於母胎。唯除菩薩。將入胎時。於父父想。於母母想。雖能正知。而於其母起親附愛。乘斯愛力便入母胎。又說。於其父母等生親附之愛。若不正知者有其二類。其福微薄。入母胎位起倒想解。見大風雨毒熱嚴寒。或大軍衆聲威亂逼。遂見自入密草稠林葉窟茅蘆投樹牆下。住時見己住在此中。出位見身從此處出。若增福者。多入母胎起倒想解。自見己身入妙園林。昇華臺殿。居勝牀座等。住出如前。又若依經四位次第從劣向勝。三時不知應第一說。餘三次第如此論明。順結頌法恐有犯聲。故逆說第一前爲第四。故婆沙說三時不知爲第一也。

從此大文第二遮外道難。是數論勝論外道難也。論云。此中外道執我者言。若許有情轉趣餘世。即我所執有我義成。今爲遮彼。頌曰。

無我唯諸蘊　煩惱業所爲　由中有相續

入胎如燈焰　如引次第增　相續由惑業
更趣於餘世　故有輪無初

釋曰。前一行明無我。但有由惑業相續入胎也。後一行明生死輪轉。無我唯諸蘊者。無我者正遮外道。謂外道執我。臨命終時能捨此蘊。於受生時能續餘蘊。若無有我誰能蘊續。故有我也。爲破此執故言無我。故論云。內用士夫。此定非有。如色眼等。不可得故。注曰。解云。外道執我名爲士夫。如士夫用也。故論主破言。此定非有。如色等五境是現量知。眼等五根是比量知。汝今執我。非如色眼等現比量知。故不可得也。世尊亦言。有業有異熟。作者不可得。謂能捨此蘊。及能續餘蘊。唯除法假。注曰。解云。作者我之異名。衆生生死由業異熟。非由作者實我也。法假謂何。問也。依此有故彼有。依此生故彼生。廣說緣起。注曰。已上論文。解云。依此無明等有故。彼行等得有。彼無明等生故。彼行等得生。十二緣起假立於我。名爲法假也。唯諸蘊者正立義

也。唯有五蘊更無實我。於此蘊上假立爲我。是正道理。非所遮遣。煩惱業所爲由中有相續者。釋難也。既無實我。應許諸蘊卽能從此轉趣餘世中有入胎。爲遮此難故有斯頌。蘊刹那滅。不可從此轉趣餘世。但由數習煩惱業力。令中有蘊相續入胎。入胎如燈焰如引次第增者。正明相續也。譬如燈焰雖刹那滅而能相續轉趣餘世。諸蘊亦然名轉無失。故雖無我。但由惑業以爲因故。諸蘊相續入胎義成。如業所引。令胎中蘊次第轉增。次第增者。謂從羯羅藍乃至鉢羅奢佉。名次第轉增也。相續由惑業更趣於餘世者。明三有輪轉也。謂次第增乃至命終現蘊相續。於現在世復起惑業以此爲因更趣於餘世。故有輪無初者。明無始也。如是惑業爲因故生。生復爲因起於惑業。從此惑業更復有生。故知有輪旋環無始。又論文明次第增義。引經頌曰。最初羯刺藍。此云凝滑。亦云和合。次生頞部曇。此云皰。從此生閉尸。此云血肉也。閉尸生健南。此云堅肉。次鉢羅奢佉。此云支節。後髮毛爪等。及色根形相漸次而轉

增。髮毛等總是第五位。此上是胎內五位也。（冠註論本第九左九）

【暉鈔】卷中本二十九右　此有故彼有等者。有釋。因有故果有。因生故果生。或過去有故現在有。現在有故未來有。過去生故現在生。現在生故未來生也。

【麟記】論本第九四左　應許諸蘊卽能從此轉趣餘世者。此是難意。既無我卽其應諸蘊不經生滅轉趣後世也。旋環無始者。破外道及餘部計。初念法無因生許有始也。羯刺藍者。或云雜穢。胎中五位四十九日已成。五分律名似人也。前之四位如次卽四七日。次三七日共爲鉢羅奢佉。第五七日有形相。第六七日生眼等。第七七日生髮毛等。

從此大文第八明十二緣起。第一廣明十二緣起。第二略攝喩顯。就第一廣明十二緣起中。一總辯。二別明。就總辯中又分二段。一總判支位。二別顯體性。三明本說意。四以略攝廣。五遣通疑難。六會釋經文。且初第一總判支位者。論云。如是蘊相續說三生爲位。頌曰。

如是諸緣起　十二支三際
前後際各二　中八據圓滿

釋曰。前兩句標名列數。下兩句依世立支。十二支者。一無明。二行。

三識。四名色。五六處。六觸。七受。八愛。九取。十有。十一生。十二老死。言三際者。一前際。卽是過去。二後際。卽是未來也。三中際。謂現在世。前後際各二者。謂前後際各立二支。無明行在前際。生老死在後際。中八據圓滿者。此明中際立八支也。除前後際所餘八支在現在世。據圓滿者。中際八支非諸有情皆悉具有。今言八者據圓滿說。歷八支位名爲圓滿。若中夭者不具八支。有歷二支等。謂胎內死等也。又此八支據欲界說。非色無色。謂色界中無名色支。以彼化生諸根頓具故。若無色界無名色及六處支。以無色故。故大緣起經說具有。故彼說佛告阿難。識若不入胎。名色得廣大增長不。不也。世尊。乃至廣說解云。此經既云入胎方有名色等增長。明知。八支據欲界說。以色界不入胎故。有時但說二分緣起。一前際攝。二後際攝。謂無明乃至受支。此七支前際攝。若愛乃至老死。此五支後際攝。前後因果二分攝故。前因果者。謂無明行爲因。識等五爲果也。後因果者。謂愛取有爲因。

生老死爲果。此約因果分爲二際。（冠註論本第九左十一）

【暉鈔】卷中本二十九右 又此八支據欲界說者。婆沙二十三云。名色緣六處。但說欲界三生。又有說。此經通三界四生。謂化生初受生時雖具諸根。而未猛利是名色。初結生名識。第二念名名色。第三念等猛利位卽六處位也。又婆沙二十四。問。十二支三界各具幾支。答。一說。欲界十二支。色界十一支除名色支。無色十除名色六處支。又評曰。三界皆具十二支。初結生爲識。未猛利位爲名色。後六根猛利位爲六處。無色無無色蘊。有名色。名卽四蘊。無五根。有意根。名緣意。此論正理同前說。次下文過去無明行爲因。現在識等五爲果者。此據順生受業說。亦有現在五支非是次前世無明行果。未來生老死非是現在愛取有果。謂有順後受果及不定果。如婆沙。一生造九地愛取有果也。

【麟記】論本第九右五 所以但言中八據圓滿不言前後者。以前後名二支定有故。中際八支不定有故。但言中八據圓滿。有歷二支等者。有從名色支而命終。或六處支等。或有起愛未至取位卽命終。故無有至識不至名色。色界中無名色支者。謂六處生前立爲名色。既彼化生諸根頓具故無名色。有說。彼雖具根初未極猛利。亦爲名色。若無色界無名色及六處者。彼雖有名而無色故。雖有意處無眼等五色故不立支。有餘師說。彼界亦有八支。應言識緣名名緣意處。婆沙評家云。是故三界皆具十二支。識等五者。等取名色六處觸受。此五是前際家果也。

從此第二別顯體性。論云。無明等支何法爲體。頌曰。

宿惑位無明　宿諸業名行　識正結生蘊　六處前名色
從生眼等根　三和前六處　於三受因異　未了知名觸
在婬愛前受　貪資具婬愛　爲得諸境界　遍馳求名取
有謂正能造　牽當有果業　結當有名生　至當受老死

釋曰。宿惑位無明者。謂過去生起煩惱時名宿惑位。此位五蘊至今果熟總名無明。既是五蘊獨標無明者。論云。彼與無明俱時行故。由無明力彼現行故。如說王行非無導從。王但勝故總謂王行。解云。彼者彼宿惑位五蘊也。宿諸業名行者。謂宿生中起諸業位。此位五蘊總名爲業。業名爲行。行造作義故。此十二支皆有位字。故初句位言流至老死。識正結生蘊者。於母胎等正結生時。一刹那位五蘊名識。受生識强故別標識。六處前名色者。從結生後六處生前。中間諸位所有五蘊總稱名色。中間諸位者。即是胎中從羯羅藍至鉢羅奢佉五位也。論云。此中應說四處生前。而言六者。據滿立故。四處除身意也。從生眼等根三和前六

處者。此是鉢羅奢佉。此位通多念也。從名色後。三和已前。生眼等根。此位五蘊說名六處。六處創圓。根相顯故。但標六處。於三受因異未了知名觸者。三受因者謂三受境。境名爲因。能生受也。謂出胎後三兩歲來。根境識三能有對觸。此位五蘊總名爲觸。觸相顯故。故標觸名。於三受境未能了知。故未名受。在婬愛前受者。謂五六歲已去十四十五已來。已了三受因差別之相。未起婬貪。此位五蘊總名爲受。受用勝故。故別標受名。貪資具婬愛者。十五已去。貪妙資具婬愛現行未廣追求。此位五蘊總名爲愛。愛用勝故。別標愛名。爲得諸境界遍馳求名取者。取謂貪也。年既長大。貪五欲境。四方馳求不憚勞倦。此位五蘊總名爲取。以取勝故。標以取名。愛取別者。初起名愛。相續轉盛別立取名。相續取境轉堅猛故。有謂正能造牽當有果業者。因馳求故。積集能牽當有果業。此位五蘊總名爲有。業名爲有。有當果故。以業勝故標以有名。結當有名生者。從此捨命正結當有。此位五

蘊總立生名。當來生支卽如今識。當來生顯。立以生名。當體受稱。至當受老死者。於當來世。受生已後有名色支。次生六處支。次生觸支。次生受支。此之四位所有五蘊總名老死。如是老死。卽如今世名色六處觸受四支。從生支後。老死相顯。標老死名。（冠註論本第九右十三）

【暉鈔】卷中本二十九左　正理問。何故無明聲說諸煩惱。答。過去諸煩惱未得果時皆明利。既得果已非明。卽虧以無明故。過去煩惱總名無明。現在無明設未得果相亦不明。若現在餘惑卽明利也。彼與無明俱時行故等者。正理破云。貪等煩惱隨無明行在。不然。貪等生時勝無明故。勝貪等隨劣無明行在。理必不然。若無明隨貪等。卽應無明隨貪等在。必若貪等無明互相隨。偏在無明必卽不然。若無明隨貪等。卽喻中應王隨從臣。若貪等勝無明劣。卽導從勝王劣也。正理云。何緣宿生諸業名行。答。名隨義立。其義云何。造作義名行。造作令果生。宿生感現在業名行。過去已得果業果已生了不得名行。現在業果未熟。皆不隨義立行名。順後及不定受業至感果時皆得行名也。有部因是善惡。果是無記。如識及同時蘊。結生唯染。得如何與善惡業爲果耶。答。結生一刹那識及同時五蘊非是引業果故。命根同分是引業果。是異熟無記。識等既非引業果。染汙何妨也。從名色後者。六處亦在名色位攝。名住色根也。名色卽從第五位中已前四位皆是名色收。第五位有三十四七日。前四位各七日。五位共三十八七日也。問。胎內名色位。已有身

根發身識覺苦樂。卽有三和。如何至六處位言未有三和。答。名色位三和非恒勝。故未立三和。唯六處勝也。婆沙說。無明處取生識唯染汚。餘位通善染。於受支位起愛取有三支。及五蘊卽非愛支攝。若不起此三支卽受支攝。受位最長故。前文說受後生愛取有者。據造一生愛取有。有說。若造多生及五趣愛取有卽更起也。初念名愛增盛名取者。若爾愛同生識二支各一刹那耶。答。不爾。生識卽一刹那。定無再結生故。愛取緣多境各一刹那卽多念也。當來生顯至現在識强者。現在了別故識强。生相在未來故未來生顯也。當來老死中名色至受位四支。前滅後生名老死支也。行有二支爲生因。無明愛取爲緣。若起惑卽無明勝。若結生卽愛勝。又正理論云。一切煩惱初緣境時名愛。後增盛位說名取。愛過患重故。現在諸煩惱中偏說愛名也。

【麟記】論本第九左五　言此位五蘊總名無明者。謂取煩惱起時五蘊爲體。非唯取煩惱性。由無明力彼現行者。卽是偏說染心心所。此是染心心所總名無明。自餘二蘊相從爲名。問。何故唯宿惑名無明。現在不名耶。解云。唯前惑似無明故。謂貪等煩惱未得果時。勢用無虧說爲明利。若得果已取與用虧不名明利。無明勢力設未損亦非明利。彼現行時亦難知故。前生諸惑至於今生已得果故。勢力虧損其相不明。似無明品故。唯前世惑可說無明聲。王但勝者。謂王倶時行中王最爲勝也。宿諸業名行者。正理云。何緣宿生如是類業獨得行名。名隨義故。謂宿生中業果今熟者。行相圓滿獨立行名。由此已遮當生業果。以彼業果仍未熟故。相未圓滿不立行名。又現在有支有當果故名有。過去已與果故總名行也。識支者。正理云。此一刹那識最勝故。此唯意識。於此位中五識生緣猶未具故。於母胎等者。舊云。等取濕化二生。彼不入胎故。此中應說四處生前

者。以身意二處識支已具故不可言前。今言六者。謂名色位中雖有身意未具六處故言六處生前。但標六處者。謂不說五蘊但名六處也。婆沙云。云何六處。謂已起四色根六處已滿。即鉢羅奢佉位。眼等諸根未能與觸作所依止。是六處位。言三受境者。謂違順中庸三境。即火毒等違境生苦受。衣食等順境生樂受。中境生捨受。故三境是三受因也。此是出胎已後隨性聽味至未了已前名之爲觸。不可定其年歲。即是婆沙云。觸火食毒位也。大分五六歲已去。了三受因差別相者。簡前。未起婬貪簡後。此位以初能簡受因故。從勝爲名受支。貪妙資具婬愛現行。簡前。未廣追求。簡後。以此位初能愛於資財及婬境故。又此非唯一法。總取五蘊故言此位。正理云。何緣現在諸煩惱位偏說於愛非餘煩惱。謂於愛易了。愛味過患餘煩惱中此極難了。愛是能感後有勝因。世尊偏說令知過患。云何當令勤求治道。故偏說愛。取支者。婆沙引施設論云。云何名取。謂由三受四方追求。雖涉多危險而不辭勞倦。然未爲後有起善惡業。是名取位。問。愛取何別。答。准婆沙。除初念愛談聲。即此相續增廣熾盛立以取名。相續取境轉堅猛故。有支者。正理云。取增盛時種種馳求善不善境。爲得彼故積集衆多能招後有淨不淨業。此業生位總名有支。生支與識支唯現未別。自餘義類皆同識說。謂一剎那唯染心故。當來生顯者。謂造業已定感當來生。生相顯故。已造業者皆云未來當生何處故。准此生之與識無別。舊又解云。或生與識寬狹有異。生名通五蘊。識名但顯識故云云。多釋也。四位所有五蘊總名老死者。謂愛取有三支是業惑性。非老死義。故但四支也。

論云。又緣起支差別有四。一者刹那。二者連縛。三者分位。四者遠續。云何刹那。謂刹那頃由貪行殺。具十二支。癡謂無明。思卽是行。通大地思貪必有也。於諸境事了別名識。貪起有識了境者也。識俱三蘊總稱名色。注曰。言三蘊者。色想行三。此之三蘊與識俱起。想蘊取全。色蘊少分。除五根及表無表色。以別立支故。取餘色蘊。卽扶根四境是也。行蘊亦取少分。除無明思觸受貪及無慚無愧惛沈掉擧並生異滅。以別立支故。取餘行蘊。卽作意等是也。住名色根說爲六處。眼等五根住名色故。說此五根以爲六處。雖然是五。六處攝故。說名六處也。六處對餘和合有爲觸。六處卽是根對餘境識三和有觸。領觸名受。貪相應受。貪卽是愛。卽行殺時本貪心也。與此相應諸纏名取。謂無慚無愧惛沈掉擧名爲諸纏。與貪相應也。所起身語二業名有。謂行殺時起身語二業名爲有支也。如是諸法起位名生。熟變名老。滅壞名死。此是三相。熟變是異相。復有說者。刹那連縛如品類足。俱遍有爲。十二支位所有五蘊皆分位攝。卽此懸遠相續無始說名遠續。已上論文。解云。言刹那者一刹那也。連縛者因果無間相連起也。若情非情皆有生滅。念念相續故。

刹那連縛遍一切有爲也。前解刹那唯是有情。此師解刹那亦通非情也。分位緣起約順生受業及不定受業。三世十二支五蘊分位也。遠續者即前分位約順後受業及不定受業。隔越多生。無始遠續之因果也。

（冠註論本第九十六右）

【暉鈔】卷中本三十一左　刹那者。一刹那貪心行殺。有身語表無表及意大地十大煩惱六大不善二尋伺四相得同時起。約此衆多法配爲十二支。如疏云。擧無慚等四纏者。以是隨從纏故。餘六是不隨從纏也。俱遍有爲者。於非情不説有無明等。約十二支有者。即論生老等也。

【麟記】論本第九七左　識俱三蘊者。謂除識受二蘊。以識蘊自爲識支受自爲受支故但三蘊。想行二蘊與識俱行。色蘊爲識所依故並倶也。言除五根者。以五根立六處支故。無表色別爲有支也。以無表是業性。行殺之時。起身語業有無表也。扶根四境是色故得爲名色支。行蘊亦取少分除無明等者。以無明自立無明支故。思已立爲行支。觸受並各自立爲支。貪爲愛支。無慚等立爲取支故。故皆別立支也。並生異滅者。生爲生支。餘爲老死支。言作意等者。慧念等未立支者。並在此中所攝。言住名色根者。謂名色是總。根是其別。以別依總故。言住名色根。又解。意住名。眼根等住色根。故言住名色根。詳此解不及前。雖然是五者。謂意處已立爲識支故。今但有眼等五根故有此釋。起位名生至滅壞名死者。問。生在未來。老死現在。如何可説一刹那中具十二支。答。

此據作用究竟名一剎那。故言具十二支。又解。生相不據作用。但據體說。故得同時。言連縛者。無間名連。相接名縛。或隣次名連。相屬名縛。故正理云。連縛緣起。謂同異因果無間相屬而起。前解剎那唯是有情。謂一剎那具十二支。故唯有情。後師剎那約生滅之理。不約一剎那具十二支。故通非情。分位者。即無明行等十二支之分位。如上所明。宿惑位無明等。分位緣起。唯順生受業及不定受業者。以通前後二際論。故除順現業。以現在果前業感故。非遠續故。除順後業。遠續與分位有差別者。即三世隣近取果與果名爲分位。隔越多生取果與果名爲遠續。新云。遠續唯隔越。連縛唯無間。

從此第三明本說意。此中有兩。一正明說意。二遣他愚惑。且初說意者。論云。世尊於此說意者何。頌曰。

傳許約位說　　從勝立支名

釋曰。傳許約位說者。傳許世尊唯約分位說十二支。不據剎那等也。分位緣起。經部有破。論主意朋。故言傳許。從勝立支名者。此通外難。分位緣起皆具五蘊。何緣但立無明等名。爲通此難。以諸位中無明等勝。雖有五蘊。從勝立名標無明等。廣如前釋。經說分位唯是有情。

論説刹那連縛通情非情。分位遠續亦同。經説唯是有情。經爲斷惑唯説有情。論依法相通情非情。爲明此義次下問起。即當第二遣惑門也。

（冠註論本第九十八右）

【暉鈔】卷中本三十左　經部破有部十二支不取同時五蘊。無明取癡。行即取思等也。

【麟記】論本第九左八　從勝立支名者。且無明爲勝者。經主破無明勝等。餘如前。論依法相通情非情者。約法相之理。非情是有爲故亦刹那生滅也。准此所説通漏無漏。若前師解刹那唯是有漏。

論云。契經何故唯説有情。頌曰。

於前後中際　爲遣他愚惑

釋曰。世尊爲遣三際愚惑。故説縁起。唯約有情。問。如何有情前際愚惑。答。謂於前際生如是疑。我於過去世爲曾有非有。何等我曾有。云何我曾有。解云。曾有非有者疑我有無也。何等我者疑我自性。爲即蘊我。爲離蘊我也。云何曾有者疑我差別。爲當常我無常我耶。問。如何有情後際愚惑。答。謂於後際生如是疑。我於未來爲當有非有。

何等我當有。云何我當有。解云。當有非有者疑我有無也。何等我者疑我自性也。云何我者疑我差別也。問。如何有情中際愚惑。答。謂於中際生如是疑。何等是我。此我云何。我誰所有。我當有誰。解云。何等是我者疑我自性也。此我云何者疑我差別也。我誰所有者疑我因也。謂此現在我過去誰因所有也。我當有誰者疑我果也。謂我當有誰果也。爲除如是三際愚惑故。經唯說有情緣起。以契經說。苾芻諦聽。若有苾芻。於諸緣起緣已生法。能以如實正慧觀見彼。必不於三際愚惑。謂我於過去世爲曾有非有等。（冠註論本第九十八左）

【暉鈔】 闕之

【麟記】論本第九九右 中際之中不疑我有無者。以中際現見故。但疑我自性差別及因果等。又前際不疑因體是因故。亦不疑果知是現故。未來不疑因知是現故。亦不疑果體是果故。是中際有因果二疑。前後二際唯有有無二疑也。又此等疑惑唯在有情。故就有情說緣起。謂唯見緣起。知過去是無明行。未來是生老死。現在八支。即無疑惑及計我等。

從此第四以略攝廣。論云。又應知此緣起支。雖有十二支而二三爲

性。三謂惑業事。二謂果與因。其義云何。頌曰。

三煩惱二業　七事亦名果　略果及略因　由中可比二

釋曰。前兩句正明相攝。下兩句釋妨也。三煩惱者。無明愛取煩惱爲性。二業者。行有二支以業爲體。七事亦名果者。除前五支餘識等七名之爲事。是煩惱業所依事故。如是七事亦名爲果。義准餘法卽亦名因。謂無明行爲因。識等五爲果。愛取有爲因。生老死爲果。略果及略因者。此擧略門。由以爲妨。後際略果。說二果故。謂識等五合爲二果。是略果也。前際略因。惑唯一故。謂愛取二惑爲無明一因。是略因也。而於中際廣說果因。開事爲五。謂識等五果也。惑爲二故。謂開無明爲愛取二也。何緣中際廣說果因。前後二際略因略果。由中可比二者。釋前妨也。由中際廣可以比度前後二際。廣義已成。故不別說。說便無用。（冠註論本第九左十九）

【麟記】論本第九左九　識等七名爲事者。謂識名色六處觸受及生老死七支是事性及果。事者所依義也。

義准餘法亦即名因者。既七事名果。准知餘業惑等五亦名爲因也。無明爲因者。謂業惑之性皆是其因緣。業爲生因。惑爲緣因。故過去無明行並是現識等家因也。現在愛取有三爲因。未來生老死爲果也。識等五合爲二果者。謂合現在識等五支爲未來生老死二果也。愛取二惑爲無明一因者。謂惑居現在分愛取二支。在過去但爲無明一因故略也。

從此第五釋通疑難。論云。若緣起支唯十二者。不說老死果。生死應有終。不說無明因。生死應有始。或應更立餘緣起支。餘復有餘成無窮失。問也。不應更立。然無前過。此中世尊由義已顯。云何已顯。徵也。頌曰。

從惑生惑業　從業生於事
從事事惑生　有支理唯此

釋曰。從惑生惑業者。一從惑生惑。謂愛生取也。二從惑生業。謂取生有。無明生行也。從業生於事者。謂行生識。從有生生也。從事事惑生者。一從事事生。二從事惑生。從事事生者。即是事能生事也。謂識生名色。乃至觸生於受也。從事惑生者。即是事能生惑也。謂受生愛也。有

支理唯此者。正釋難也。由立有支其理如此。謂說名色生於六處。受生於愛。已顯老死爲事惑因。謂名色與受是老死。既受生愛。愛生於取。已表無明爲事惑果。謂愛與取是無明也。無明有因生死無始。老死有果生死無終。故不須立餘緣起支。故經言如是純大苦蘊集。解云。如是者如是十二因緣起也。無我我所故名爲純。爲果義邊名爲苦蘊。爲因義邊名爲集也。此苦蘊集無始無終故名爲大。既十二支皆名苦集。故知無明有因。老死有果。若不爾者此經言何用。(冠註論本第九二十左)

【暉鈔】卷中本三十左　老死無果。不修道生死有終。無明無因。同彌沙塞部有始起有情。正理更加聖敎缺減過也。由義以顯者。受既生愛也。顯老死爲無明因也。未來老死即名色六處觸受四支爲體。現既受生愛。即以顯未來老死中生無明。即取第三句從事事惑生釋無明因。餘同文故來也。

【麟記】論本第九左九　不說老死果生死應有終者。此難意。謂老死最後位。不說更有後果者。離修對治道生死應有終也。不說無明因生死應有始者。但言無明最初。不說更有前因。應同彌沙塞部。生死應有始終也。理實生死無始無終。故來此難。或應更立餘緣起支者。既許生死無始無終則應十

二支外更立餘支。故成無窮之過。准正理更加一過。謂佛聖教應成缺減。然不應許。愛生取者。愛取俱是煩惱故並名惑。取是惑性。有是業性。無明亦是惑。行是業性。故皆是惑生業也。行生識。識是事故。有亦是業。生亦是事也。餘准此知。不更煩述。謂識生名色乃至觸生於受者。此等五支並是事自生事也。言已顯老死為事惑因者。前難老死無果。今既老死為事惑因故。顯老死成有果也。言已表無明為事惑果者。無明既為他果。故知有因。則無無因之過也。言如是苦集等者。引此經證者。果名為苦。因名為集。既十二支總名苦集。明知皆具因果之性。無明既得名果。明知有因。老死既得名因。明知有果也。又正理云。經云。如是純大苦蘊集。是前後二際更相顯發義。是故無有老死無明無果無因有終始過。於是定攝因果義圓。無更立支成無窮失。又論云。有餘師說。非理作意與無明為因。無明復生非理作意。非理作意亦取支攝。故不別立無明因支。此非正義。

從此第六會釋經文。論云。如世尊說。吾今為汝說緣起法緣已生法。此二何異。問也。且本論文。此二無差別。以俱言攝一切法故。解云。本論說緣起攝一切有為。緣已生法亦攝一切有為。既言此二俱攝一切有為。明知無別也。從此論主正釋經意。頌曰。

此中意正說　因起果已生

釋曰。此兩句正釋經意。言此中者。此契經中也。因起果已生者。此經

中意。諸支因分說名緣起。由因有緣能起果故。故知因分名爲緣起。諸支果分說名緣已生。由果皆從緣所生故。故知果分名緣已生。由此理故。論云。如是一切二義俱成。諸支皆有因果性故。解云。一切者十二因緣也。二義者緣起緣已生也。又論云。若爾安立應不俱成。解云。難也。諸支因果體既無別。如何安立緣起緣已生法。故云應不俱成。論云。不爾所觀有差別故。謂若能觀此名緣已生。非卽觀斯復名緣起。猶如因果父子等名。解云。答前難也。所望不同。二義常別。如行望無明常名緣已生不名緣起也。若行望識常名緣起不名緣已生也。故體雖一得成二義。如世間子望父邊常名子不名父。父望子邊常名父不名子。雖是一得有二名。況法可知。（冠註論本第九二十右）

【暉鈔】卷中本二十右　因果體既不別。爲因亦爲果。如何安立二義也。如父從他生名子。生他名父。如行生識名因。行從無明生名果也。問。過現法已生。可名緣已生。未來法未生。如何名緣已生。答。是過現已生類。故名緣已生也。

倶舍論頌疏　論本第十

中大雲寺沙門圓暉述

分別世間品第三之三

從此大文第二別明。於中有二。一別明四法。二別指餘文。且別明四法者。一明無明。二明名色。三明觸。四明受。就第一明無明復分爲二。一明釋義。二引證。初釋義者。論云。無明何義。謂體非明。答非智明。若爾無明應是眼等。難也。眼等五根亦非智明。以應是無明也。既爾此義應謂明無。此更別釋明無之處名無明也。若爾無明體應非有。難也。若明無之處名無明者。既是他無。體應非有也。爲顯有體義不濫餘。頌曰。爲顯有體者。不同第二釋義不濫餘者不同初釋也。

明所治無明　如非親實等

釋曰。明所治無明者。明有實體。謂此無明不了四諦。明所對治名曰

無明。與明相違。方名無明。非是離明之外皆是無明。亦非明無之處名無明也。如非親實等者。擧喩釋成。論云。如諸親友所對怨敵。親友相違。名非親友。非異親友。非親友無。解云。非異親友者。謂說怨家名非親友。非異親友之外皆名非親友。此喩無明不濫眼等也。非親友無者。謂不是親友無處名非親友。此喩無明有體也。非實者。諦語名實。此所對治虛誑言語名爲非實。非異於實皆名非實。亦非實無名爲非實。等者等取非法非義非事也。如不善法名爲非法。不善義名非義。不善事名非事。此與善法等相違名非法等也。論云。如是無明別有實體。是明所治。非異非無。解云。非異者。非是異明之外總是無明也。非無者。非是明無處名無明也。又契經說。無明緣行。故知有體。此則略證。（冠註論本第十初右）

【暉鈔】卷中本三十右 … 論本第十

無明迷暗爲性。言不了不知。約用辯體也。應是眼等者。七十五法中唯慧是明。餘七十四法體皆非

智明。應皆是無明。若後釋明無者。若智慧無處即是無明。無明即無體也。非是離明之外皆名無明等者。即是簡前二釋非也。非異親友外皆名非親友者。如人與彼爲怨。怨即名非親友。不可自親友外怨敵及餘人皆名非親友。餘人不妨不是親友及非親友。又不可親友無處即名非親友。即是無法。何得名怨敵也。不可異實語外皆名非實者。餘離間等三語不妨不是實語及非實語。又不可實無處名非實。即誑語無體。又無記法義事不是善法等所對。不妨不是法義事及非法義及非事也。

無明緣行者。無明爲緣行得生。行爲緣識得生等也。

【麟記】論本第十右初　倶舍頌疏記　論本第十　冨春沙門　遁麟述

言謂體非明及應謂明無者。此二是不正答。爲顯有體等。方是正答。言應是眼等者。若體非明即是無明者。眼等六根色等六境。除無漏明並體非明。應名無明。非是離明之外皆是無明者。謂有別煩惱不了諦實等是無明性。非是離智明之外一切皆無明也。亦非明無之處等者。亦非但以明無之處即名無明也。以無明自有體故。非異親友等者。謂泛爾之家雖非親友。非怨敵故不得名非親友也。謂唯怨敵方名非親友故。非親友無者。謂若但以親友無處便名非親友者。即此無處。都無有人。將何以爲非親友體。無明亦爾。若但明無之處即名無明。即此無處總無有物。將何以爲無明之體。餘皆類此。

從此第二廣證。頌曰。

說爲結等故。非惡慧見故。與見相應故。說能染慧故。

釋曰。初句引證。下三句破異說。說爲結等故者。說謂經說。結是九結。等取三縛十隨眠三漏四瀑流。經說結等。皆有無明。豈無實體說爲結等。非惡慧見故者。破有餘師說。有餘師說。無明以惡慧爲體。故彼云。如惡妻子名無妻子。如是惡慧名無明。論主破此故言非惡慧見故。謂染汚慧名爲惡慧。於中有見故非無明。如身見等是惡見慧。慧既有見。寧是無明。與見相應故者。破彼轉救。謂餘師言。若爾非見惡慧應許是無明。如貪等相應慧是非見惡慧也。既非是見應是無明。爲破此救故言與見相應故。謂此無明與見相應。故知無明不可是慧。無明若慧豈有二慧共相應耶。既許無明與見相應。故知無明不是慧也。說能染慧故者。引教證也。如契經言。貪欲染心令不解脫。無明染慧令不淸淨。此經既說無明染慧。故知慧體不是無明。無明若慧。豈可慧體還能染慧。然無明體。謂不了知四諦三寶

善惡業果。卽是了知所治別法。大德法救說。無明體是諸有情恃我類性。解云。無明恃我而起。卽我慢之類也。(冠註論本第十左三)

【暉鈔】卷中本三十三左　如是惡慧應名無明者。慧有簡擇用。惡慧既無此能。與無慧不殊。應是無明。破云。非惡慧等。又云。貪等相應慧既染汙。又無見。與無善慧不別。應是無明也。恃我類性者。我慢卽七慢中我慢。恃我陵人。故類性卽是無明。無明不了相。亦相似恃我陵物。卽是我慢之類也。

【麟記】論本第十左初　經說結等皆有無明者。謂無明是九結中一結。三縛中一縛。十隨眠中一隨眠等。餘准此。言如惡妻子者。謂無妻子之德名無妻子。如是惡慧無有明德。應名無明。言於中有見者。謂惡慧之中有一分慧。是五見故。既九結等有見結無明結等別。故知是見不是無明。言慧既有見寧是無明者。謂見性推度猛利決斷。故非無明。言無明染慧至不是無明者。貪能染心。貪既非心。故知無明染慧。非是慧也。然無明體謂不了知等者。正出無明體也。大德說。無明卽是餘經所說恃我類性。論主不許。謂此但是九慢類。卽我慢之差別也。論有相破。煩而不敍。

從此第二明名色。論云。名色何義。色如先辯。今唯辯名。頌曰。

名無色四蘊

釋曰。名謂非色四蘊。卽受想行識。問。名於四蘊是行蘊攝也。如何四蘊總說爲名。答。論有四釋。一云。隨所立名根境勢力於義轉變。故說

爲名。問。云何隨名勢力轉變。答。謂隨種種世共立名。於彼彼義轉變詮表。卽如牛馬色味等名。問。此復何緣標以名稱。答。於彼彼境轉變而緣。解云。已上論文。此師意者。如今時名隨於古昔名之勢力。方得於義轉變詮表。或詮此境。或詮彼境。詮彼彼境名爲轉變。名旣如此。四蘊亦然。謂受等蘊隨根境勢力。於境轉變而緣。轉變如名。故標名稱。言轉變緣者。謂緣此緣彼名轉變緣也。第二釋云。又類似名。此解意者。謂一切法不過二類。一者色類。二非色類。四蘊與名同非色類。類似名故。四蘊名名。第三解云。隨名顯故。此解意者。謂色法麤著有不須名顯。如眼見也。四蘊微細要須名顯。必藉名故。故標名稱也。第四釋云。有餘師說。四無色蘊捨此身已轉趣餘生。轉變如名。故標名稱。解云。此師約捨身名轉變。初師據緣境名轉變。轉變雖同二釋別也　（冠註論本第十左三）

【暉鈔】卷中本三十左　名是不相應行名。於四蘊中是行蘊攝。餘四蘊不能詮法。如何名名。答。名

詮多法。四蘊隨六根亦緣多法上。轉似彼名詮多法。故四蘊總名名也。問。四蘊中不相應不能緣境。如何名能緣。答。若名在無色中。如變礙名色無表去來極微無變礙。不妨名色名在無色四蘊中四蘊總名名也。色法有形質眼能見等。四蘊無形假要須名顯說方知。故四蘊總立爲名。捨身者。身卽色身。四蘊捨前趣色身取後趣色身。如名詮多法。四蘊名名也。問。無漏四蘊不能取來趣身。如何無漏四蘊總說爲名。答。是彼類故。雖不取來趣。有捨此蘊義也。

【麟記】論本第十右　色如前辯者。如前界品已廣明竟。名於四蘊是行蘊攝者。謂名是不相應故唯行蘊攝。言如今時名隨於古昔者。謂劫初時隨種種法世共立名。勢力轉故。後名方得於彼彼義轉變詮表。如牛馬等。問。心心所等轉變緣故可名爲名。餘不相應如何是名。答。不相應雖無轉變。同無色中有轉變故。如變礙名色。無表無變礙亦名爲色。言彼彼者。顯境非一也。第二釋云類似名者。婆沙十五云。所以四蘊名名者。答。佛於有爲總分二分。謂色非色。色是色蘊。非色卽受等四蘊。非色聚中有能顯了一切法名。故非色聚總說爲名。第三解隨名顯者。婆沙云。色法麤顯。卽說名色。非色微隱。由名顯故。說之爲名。言有不須名顯者。謂唯色處不須名顯。餘處須名故言有也。言四無色蘊者。謂受想等體非色。故名四無色蘊。非無色界也。轉趣餘生者。正理云。又一切界地趣生能遍趣求故立名稱。非無漏無色不得名名。雖非此所明而似此故。又於無色隨說者情總說爲名。不勞徵詰。

從此第三明觸。於中有三。一明六觸。二明二觸。三明八觸。且初明六

觸者。論云。觸何爲義。頌曰。

觸六三和生

釋曰。觸六者。是眼等六識相應觸也。謂眼識相應觸乃至意識相應觸。觸體雖一。據識分六。三和生者。釋觸義也。謂根境識三和所生。能有觸對故名爲觸。論云。且如五觸生可三和合。許根境識俱時起故。意根過去。法或未來。意識現在。如何和合。解云。此文難也。法或未來者緣未來法也。言或者不定也。且據緣未來。亦通緣餘世故言或也。此難意者。謂意法識三各居一世。豈名和合。論云。此即名和合。謂因果義成。或同一果故名和合。謂根境識三同順生觸故。解云。答前問也。此有兩釋。初釋者意法爲因。意識爲果。因果義成。即名和合。第二解者。根境識三同一觸果。同一果故。故名和合。此上兩釋不約同世名和合也。依薩婆多。離三和外別有觸體。是心所法。若是經部三和即觸。更無別體。論有相破。煩而不叙。（冠註論本第十四左）

【暉鈔】卷中本三十四右　三和生觸者。三和生同時觸。四和生同時受。言順樂受觸者。觸因名順。順之樂受。順樂受之觸。若樂受名順。順即樂受也。問。未來法生現意識。即是因在果後。即因果道理相違。答。果有三種。一有取果與果。此與因俱或後。前有爲四果是。二所證果即擇滅是。三相隨順要籍果。通與俱時及前後也。論有相破者。經部兩說。本宗不立心所。三和同時假立觸。末師立受想行三也。

【麟記】論本第十二左　且如五觸生可三和合者。謂眼等色根現在恒有故得與識同時。可成和合。若其意根定居過去者。以無間滅方名意故。識居現在者。以了別名識故。即此名和合者。婆沙云。此有二種。一俱起不相離名和合。二不相違義同辯一事名和合。五識相應觸由二和合故名和合。唯此意識相應觸但有第二義名和合。言依薩婆多三和合外別有觸體者。彼引六六經。根境識外別說六觸。故觸別有。經部說三和合即觸者。引契經言。如是三法聚集和合說名爲觸故。既言三法聚集名觸。故知無別體也。

從此第二明二觸。論云。即前六觸復合爲二。所以者何。頌曰。

五相應有對　第六俱增語

釋曰。五相應有對者。眼等五觸名有對觸。觸雖無對。謂依眼等是有對故。從所依爲名。名有對觸。有對之觸依主釋也。第六俱增語者第

六意觸名增語觸。所以然者。增語是名。名能詮表。增勝於語故名增語。名是意觸所緣長境。故偏就此名名增語觸。問。何故名是意識長境。答。謂如眼識但能了青不了青名。意識了青亦了青名。故青上名稱之爲長。長者餘長也。增語是境。觸是能緣。緣增語故名增語觸。增語之觸依主釋也。故論云。增語觸名就所緣立。有說。意識名爲增語。以此意識語爲增上方於境轉。五識不然。是故意識觸名增語。觸與增語意識相應。名增語觸。故論云。增語觸名就相應立。（冠註論本第十五左）

【暉鈔】卷中本三十四左　有對觸者。正理云。或約緣有對境名有對觸也。增勝於語者。是名能詮表勝於所增。呼名爲語約所依說也。如青色有能詮名青色體即通眼觸及意觸。了能詮名唯是意觸。了意觸就此境立名名增語觸也。第二意識因語得生。意識從因立名名增語觸。觸與此緣增語識相應名增語觸。增語之觸。亦有意識不緣名生。就相應立。是隣近釋也。

【麟記】論本第十右三　言第六俱者。謂與第六識相應俱起觸也。言名能詮表增勝於語者。舊云。語是音聲而無詮表。名有詮表。增勝於語故名增語。又解。此名以語爲增上。方能詮表故名增語。又解。增謂增長。由緣名故增長語言。名爲增語。意識亦了青名者。謂意識與五識同緣五境更緣其

名。故名爲長。言以此意識語爲增上方於境轉者。謂意識要因差別語言爲增上故方能緣境。此且從多分說。亦有意識非由語故而能緣境。是故意識獨名增語。以語爲增上故是有財釋。又正理解云。意識於發語中增上故。此解爲語增上故名增語。依主釋也。

從此第三明八觸。論云。即前六觸隨別相應復成八種。頌曰。

明無明非二　無漏染汚餘　愛恚二相應　樂等順三受

釋曰。明無明非二者。此有三觸。一明觸。二無明觸。三非明非無明觸。頌言非二者是第三觸也。無漏染汚餘者。釋上三觸也。餘者謂無漏染汚外餘有漏善無記也。無漏相應觸名爲明觸。染汚相應觸名無明觸。與有漏善無記相應觸名非明非無明觸。愛恚二相應者。此有二觸。一愛觸。與貪相應也。二恚觸。謂與瞋相應也。謂煩惱中此二數起故。無明觸外別立此二也。樂等順三受者。爲約三受攝一切觸。總爲三觸。一與樂受相應名順樂受觸。二與苦受相應名順苦受觸。三與捨受相應名順不苦不樂受觸。問。何故此觸名爲順受。答。論有三釋。一云。此

三能引樂等三受故。解云。此則能引順所引也。二云。或是樂等受所領故。解云。受領於觸。觸名順受。此約所領順能領也。三云。或能爲受行相依故。解云。受之行相依觸而生名爲順受。此據所依順能依也。又論云。如何觸爲受所領行相依。問第二第三釋也。行相極似觸。依觸而生故。答也。解云。行相極似觸者。答觸是受所領也。如世子孫媚好似父名能領父。受似觸相說領觸也。依觸而生故者。明觸受所依也。如是合成十六種觸也。初明六觸。次明二觸。又說明等三觸。其次愛恚二觸。後說順樂等三觸。故成十六。（冠註論本第十左六）

【麟記】論本第十左三　言能引樂受者。謂因於觸能引生受也。觸能引受名爲能引。受爲所引。問第二第三釋者。初解易知。不別問。後二稍隱。故別問之。初明六觸者。謂六識相應觸。次明二觸者。即前有對及增語爲二也。餘在此章。

從此大文第四明受支。一總。二別。第一總者。論云。受何爲義。頌曰。

從此生六受　五屬身餘心

釋曰。從此生六受者。從此六觸能生六受。謂眼觸爲緣所生諸受。乃至意觸爲緣所生諸受。五屬身餘心者。六中前五爲身受。依色根故。色根名身。聚集義也。受依身起名爲身受。身之受故是依主釋也。意觸所生受說名心受。但依心故名爲心受。心之受故亦依主釋。此上二受俱從所依爲名。思之可解。薩婆多宗。受之與觸俱時而起。觸生於受。同時因果。若經部宗。觸既爲因能生於受。故觸與受必不同時。彼宗不許同時因果。論有相破。煩而不叙。（冠註論本第十七左）

【暉鈔】卷中本（三十五右）　經部前念觸爲因後念受爲果者。破云。如二念緣境。第一念緣順境。第二念緣違境。第一念緣順境受。豈得與第二念緣違境三和俱時生。前後違順性相違故。前後念無漏心緣境准此破。

【麟記】論本第十（四右）　色根名身者。此但以聚集義釋身。故眼耳等亦名爲身。由此五識相應受皆名身受。有宗許同時因果者。論云。如影與身豈非俱有。又云。如四大種俱有所造色等。經部不許同時因果者。彼二法同時而生。如何互爲因果。因卽是果。果卽是因。不應道理。便自立云。如先種後芽。先乳後酪。先擊後聲等。

從此第二別明。於中有二。一開定數。二義分別。且初開定數者。頌曰。

此復成十八　由意近行異

釋曰。此復成十八由意近行異者。此前心受由意近行異。復分成十八。應知此復聲顯乘前起後。意近行異有十八者。謂心受中有喜憂捨。緣六境起。各六近行。故成十八。且喜緣六境有六喜近行。憂緣六境有六憂近行。捨緣六境有六捨近行。問。若由自性應但有三。喜憂捨三自性異故。若由相應應唯有一。一切皆與意相應故。若由所緣應但有六。色等六境爲所緣故。答。此成十八。具足由三。由自性相應所緣三義乃成十八也。於中十五名不雜緣。謂色等五。十五近行。境各別故名不雜緣。三法近行皆通二種。法且有二。一者別法。謂五境外所餘法也。二者通法。所謂五境。或二二合緣乃至五五合緣。以雜緣故。此之五境亦名爲法。喜憂捨三。若緣別法名不雜緣。緣別法時兼緣色等。或唯合緣色等五境名爲雜緣。故法近行通二種也。問。此意近行

名爲因何義。答。傳說。喜等意爲近緣。於諸境中數遊行故。有說。喜等能爲近緣。令意於境數遊行故。身受不名意近行者。良謂身受有二種依。一依五根。二依意根。非唯依意故不名近。由無分別故亦非行。第三禪樂唯依意根。亦有分別。非近行者。謂欲界意識無樂根故。緣初欲界無樂近行故。上界樂亦不立也。又於意地有喜有憂。以相對故各立近行。第三靜慮雖有意樂。而無意苦。無所對故不立近行。（冠註論本第十八左）

【暉鈔】卷中本三十五右　第六意識唯緣法名不雜緣。若兼前五緣即名雜緣。六境一一別緣爲六句。二二合緣爲五句。乃至六境合緣爲一句也。釋近行名者。意即意識。喜等依同時識名近。於境分別名行。第二說喜等爲緣意於境遊行。正理說。喜等有力。與意爲緣令意遊行。破此論前說云。若說喜等意爲近緣於境遊行者。即應想等亦得此名。與意相應由意行故也。初二定喜雖無憂對。以欲界有對。准下界立上也。欲界無意樂。第三定亦不立也。又樂凝滯。近行不滯也。

【麟記】論本第十右　言此復聲顯乘前起後者。謂乘前六處受等此復得成十八也。言若由自性應但有三等者。此等難也。不合成十八近行故。答言具足由三因者。由自性故分爲三受。又由唯意相應

故唯取喜憂捨。不取苦樂。又由所緣境有六故各分六種。故成十八。不增減也。言十五近行境各別者。謂色聲等境既不同。緣色聲心亦有異。故名不雜。五境各三故成十五。言五境外所餘法者。謂第六法境。心所及不相應等四類法也。言通法所謂五境者。五境若爲意識所緣亦名法境故。以通五識及意識緣故名通法。第六法境唯意識緣故名別法。或二三合緣。如緣色聲二境或色香等合隨應可知。緣別法時兼緣色等者。謂將第六法境與色等合緣也。言意爲近緣至數遊行者。卽是意與喜憂捨爲近緣。喜等於境數遊行故。故喜等名意近行也。釋此名者。喜等與意互能相依爲近緣故名之爲近。於境遊行故名之行。婆沙二釋同此。更有一解。又依意故近境而行名意近行。又云。於境捷利樂數分別故名爲行。欲界意識無樂根者。以欲心悅名喜不名樂也。言初欲界者。以對三禪故言初欲界也。正理又云。第三禪樂凝滯於境。近行於境數有推移不滯一緣方名行故。

從此第二義分別。一繫緣分別。二有漏無漏分別。初繫緣分別者。論云。諸意近行幾欲界繫。欲界意近行幾何所緣。色無色界爲問亦爾。頌曰。

欲緣欲十八　色十二上三　二緣欲十二　八自二無色
後二緣欲六　四自一上緣　初無色近分　緣色四自一
四本及三邊　唯一緣自境

釋曰。初兩句明欲界。次四句明色界。後四句明無色界。欲緣欲十八者。上欲明繫十八。下欲明緣境十八。謂欲界繫具足十八。緣欲界境其數亦然。色十二上三者。此明欲界近行緣上界境界數也。欲緣色界境唯十二。謂喜憂捨各緣色四三四十二。彼無香味。除香味六也。上三者。上謂無色。欲緣無色唯得有三。謂喜憂捨各緣彼法。彼無色等五所緣境故有三法。二緣欲十二者。二謂初禪二禪。此初二禪唯繫十二。謂六喜六捨。但除六憂。彼無憂故。緣欲界境共亦有十二。除六憂境也。八自二無色者。謂初二禪緣自界八。謂彼喜捨各緣四境。除香味四。二二無色者。緣無色二。謂喜與捨各緣彼法。後二緣欲六者。第三四禪名爲後二。三四靜慮唯繫六種。彼無六喜。但有六捨。緣欲界境亦得有六。色等六也。四自一上緣者。三四靜慮緣自境四。謂捨緣四境。除香味二也。一上緣者。一緣無色。謂法近行。初無色近分緣色四自一者。謂空處近分唯繫四種。緣色界境亦有四種。謂空處近分起有漏道能

縁色界第四靜慮色等四境。既縁有四。繫亦四也。縁自界一。謂唯法境。四本及三邊唯一縁自境者。謂空處等四根本地及識處等三近分地名爲三邊。此七地中唯一。謂法。無色根本不縁色界。彼上三邊亦不縁色故。唯有法一近行也。不縁色義定品當辯。（冠註論本第十十右）

【暉鈔】卷中本三十五左　自界見順境生六喜。見違境生六憂。見倶境生六捨。欲縁色界梵王等勝生四喜。縁無想果無心生四憂。縁通果即生四捨。縁無色無處等生一憂受。縁命長等勝生一喜。縁無造作等即生一捨也。二縁欲十二者。八解脱中初二解脱前四勝處。依初二定縁欲界不生貪生六喜。縁欲通果即六捨。八自者。初定縁二定勝即生四喜。縁變化即四捨。色界縁無色。准欲界縁無色說也。後二縁欲六者。縁欲界變化事生六捨。四自者。縁自地變化生四捨。空處近分縁色四者。准婆沙。約別縁說。若總縁即一也。無色者欲四遠。不縁欲界。無色根本無遍縁智。不縁色界也。

【麟記】論本第十五右　諸意近行幾欲界繫者。問界繫也。欲界意近行幾何所縁者別問欲界所縁境也。色無色界亦有兩問。准說。言除香味六者。彼唯無香味二境。以喜等三各除二境故言六也。言但有三法者。實唯一法。今約能縁分成三也。縁欲界境亦有十二者。謂彼唯有喜捨。各能縁下六境故成十二。言但有六捨者。上無喜故。又三禪樂不立爲近行故。前已說竟。故但云六捨。所以初二禪爲一對明。三四禪爲一對明者。以初二禪同有喜故。三四禪同無喜故。名數是同故爲兩對。

空處近分至能緣色者。謂離第四禪染時依空處近分。觀第四禪爲苦麤等行故緣色也。上三近分並不緣色。故言空處唯論有二說。一許別緣下色聲等四。二不許別緣但總雜緣下。今言有四者。約許別緣者說。若不別緣者但唯一雜法捨近行也。不緣色義定品當辯者。彼頌云。並上三近分。總名除色相。謂彼諸地無遍緣智。及厭色故並不緣色。

從此第二有漏無漏分別者。論云。此意近行通無漏耶。頌曰。

十八唯有漏

釋曰。此意近行三界所繫故唯有漏。不通無漏。論云。誰成就幾意近行耶。謂生欲界。若未獲得色界善心。成欲一切。初二定八。三四定四。無色界一。所成上界皆不緣下。唯染汚故。解云。欲界有情成三界染故。雖未得上界善心。而成彼地染汚近行也。論云。若已獲得色界善心未離欲貪。成欲一切初靜慮十。唯成四喜。染不緣下香味境故。捨具成六。未至定中善心得緣香味境故。餘隨此理如應當知。解云。未離欲貪顯未得根本也。言獲得彼善唯近分也。然近分地唯捨無喜。既得善捨故捨有六。善緣下也。未得根本成彼染喜故唯有四。染不緣下也。又論云。

若生色界唯成欲界一捨法意近行。謂通果心俱。解云。以通果心唯捨相應也。此上所論十八近行皆通有漏。是婆沙宗。然依經部於有漏中唯取雜染名爲近行。於愛門立喜近行。或於憎門立憂近行。或於不擇捨門立捨近行。以雜染故。所以近行名耽嗜依。是染喜憂捨也。爲治染故立出離依。卽善喜憂捨也。故論云。卽喜等爲三十六師句。謂爲耽嗜依出離依別。此句差別大師說故。耽嗜依者謂諸染受。出離依者謂諸善受。解云。染善相對各有十八。成三十六句。（冠註論本第十左十二）

【暉鈔】卷中本三十六右　正理論云。十八近行長養有故唯是有漏。無漏與此相違。取有漏善染無記皆名近行也。若未獲得色界善心者。未得未至等定名未獲色界善心。成自界通染善無記。上界唯染汚。以是彼惑相應受等故不緣下界也。不擇者。擇是慧。不擇卽癡。三毒門中立近行也。名耽嗜依者。與耽嗜煩惱爲所依故。經部取染喜憂捨爲近行是所治。取善喜憂捨與善法爲依名能治。而非近行。餘無記喜憂捨順染耽嗜依攝。順善出離依攝。不順善染皆非近行。但佛意說遮止染近行。故大師說染及善。名大師說。此三十六三世各有三十六。卽成一百八受也。

【麟記】論本第十右六　言近行唯有漏者。正理釋云。所以者何。長養有故。無漏諸法與此相違。有說

近行有情皆有。無漏不然。故非近行。初二定八者。四喜四捨各縁自地四境故成八也。以不下縁故。故無餘也。三四定四者。但有四捨。無色界一者。唯一法捨。皆不縁下唯染汚者。謂未離下染所成上地唯是染汚。不成彼善。言欲界有情成三界染者。謂在欲界成就欲染。必成上染。若生色界必不成欲染也。雖有欲界有情而離染者。今此約未離者說。成此心總縁色等爲境。言通果心唯捨相應者。謂捨受中庸。順通果故。憂離欲捨。喜非中庸。故不說成。此心總縁色等爲境起。故唯名法。此上但說生欲色界不言生無色等者。以生無色定不成下故略不說也。又生色界但說成欲不說成色多少者。准前可知。故不重述。又上所明唯說縁有漏。若准正理。欲界等中皆明縁不繫也。言通有漏者。謂善染總取。名之爲通。非對無漏置通言也。不擇捨者。卽無簡擇是捨受也。爲對治彼立出離依者。謂對治前雜染喜憂捨等故。立出離依說六恒住。謂見色已不喜不憂。心恒住捨具念正智。既六恒住對彼喜憂等。故知此三唯是染汚。與意相牽數行境故。又論云。非阿羅漢無有世間縁善法喜。但爲遮止雜染近行故。此意羅漢實有縁善法喜。但爲遮雜染故不立近行。躭嗜依者。謂爲煩惱之所依止故。婆沙云。受與彼爲安足處名躭嗜依受。出離依者。謂與出離法爲依也。此句差別大師說故者。謂是大師所說。非餘能說。故言大師句也。此引經爲證。善受既非躭嗜依。明非與意相牽數行境也。故唯是雜染。婆沙問云。何故不說無覆無記。答。彼亦說在此二中故。謂四無記受有順染品有順善品。隨應皆是躭嗜依出離依攝。

從此第二餘指別文。論云。何縁不說所餘有支。頌曰。

餘已說當說

釋曰。上來所明無明等四。所餘六支已說當說。故此不論。且識與六處界品已說。前言識謂各了別是識支也。名眼等五根六處支也。行有二支業品當說。愛取二支隨眠品當說。生老死二是識等攝。故無指陳。（冠註論本第十左十三）

【暉鈔】　闕之

【麟記】論本第十七左　言無明等四者。等取名色觸受也。行有二支業品當說者。以行有是業性故。愛取二支者。同煩惱性故在隨眠品中。生老死二支無指陳者。若爾愛取即是無明應不別指。解云。無明異說不同。或說惡慧或說非明等。由此無明不指。愛取別指下說。

從此大文第二略攝喩顯。論云。此諸緣起略立爲三。謂煩惱業異熟果事也。應寄外喩顯別功能。頌曰。

此中說煩惱　如種復如龍　如草根樹莖　及如糠裹米
業如有糠米　如草藥如華　諸異熟果事　如成熟飮食

釋曰。前四句喩顯煩惱。次兩句喩顯業因。後兩句喩顯果事。煩惱如種

者。如從種子芽莖等生。從煩惱生煩惱業等事。煩惱如龍者。如龍鎭池水恒不竭。煩惱鎭業感果無窮。煩惱如草根者。如草根未拔。苗剪剪還生。未拔煩惱根。趣滅滅還起。如樹莖者。如樹莖頻生枝葉華菓。從諸煩惱數起惑業事。及如糠裹米者。如糠裹米能生芽等。煩惱裹業能感餘生。業如有糠米者。如米有糠能生芽等。業有煩惱能招異熟。業如草藥者。如諸草藥異熟爲後邊。業果熟已更不招異熟。業如華者。如華於菓爲生近因。業爲近因能生異熟。果如成熟飲食者。如熟飲食但應受用。不可復轉成餘飲食。異熟果事既成熟已不能更招餘生異熟。（冠註論本第十右十四）

【暉鈔】卷中本三十六左　生煩惱等事者。從煩惱生業生識等果事。如種生芽葉後生果也。煩惱鎭業。如六無學故業無煩惱鎭無果。煩惱根者。有頂地見道煩惱名煩惱根。無漏道能拔。如諸草藥果熟爲後邊者。如草親能生果卽枯更不能生果。業感現在果了。更不能生未來世果也。食熟者。更不可轉成餘食。人異熟不可轉天等中受也。

【麟記】論本第十七左　言生煩惱等事者。事謂果事。此中煩惱總有五喩。一如種子。二如龍王。三如

草根。四樹莖。五糠米。業有三喩。一如糠米。二草藥莖。三華。果有一喩。謂如熟食。應知煩惱潤業。如糠裹米。業爲惑潤如米有糠。故二喩別。言果熟爲後邊者。諸業等果是最後邊也。以果熟更不生餘果故。業亦然也。

從此大文第九明四有者。論云。如是緣起煩惱業事生生相續不過四有。中生本死。如前已釋。染不染義。三界有無。今當略辯。頌曰。

於四種有中　生有唯染汚　由自地煩惱　餘三三無色

釋曰。前三句及第四句餘三字三性分別門。最後三字三界分別。於四有中生有唯染汚。謂受生時自地煩惱皆能潤生。故對法者咸作是言。諸煩惱中無一煩惱於結生位無潤功能。然諸結生唯煩惱力。非由自力現起纒垢。解云。自力纒者嫉慳忿覆悔眠也。垢謂六垢。此纒及垢起不藉他故名自力。以自力故要因思擇方始現前。初受生時身心昧劣故不起也。無慚無愧昏沈掉擧是隨從纒。煩惱起時必相應故。於受生位亦得起也。又論云。雖此位中身心昧劣。而由數起或近現行引發

力故煩惱現起。解云。無始名數起。前生稱近行。初受中有亦唯染汚。猶如生有。餘三無色三者除生有外所餘三有皆通三性。名爲餘三。善染無記也。無色三者。於無色界唯有三有但無中有。頌中不言欲色界者。故知於中具足四有。已上總是第一明有情生竟。（冠註論本第十五左）

【暉鈔】卷中本三十七右　問。初受生時身心味劣。不能起自力纏垢。既身心味劣。如何能起諸根本煩惱及隨從纏耶。此位中身心味劣下是答。

【麟記】論本第十八右　中生本死如前已釋者。卽此前明死生二有中卽中有義。及言本有謂死前卽本有義。餘並如前。自地煩惱皆能潤生者。謂欲界有三十六煩惱。色無色界各三十一。皆能結生。不簡上緣無漏緣等。所餘三有皆通三性者。謂善惡無記皆容命終。卽死有通三性。中有本有皆有善惡無記可知。

從此大文第二明有情住。論云。有情緣起已廣分別。是諸有情由何而住。頌曰。

有情由食住　段欲體唯三　非色不能益
自根解脫故　觸思識三食　有漏通三界

意成及求生　食香中有起　前二益此世
所依及能依　後二於當有　引及起如次

釋曰。有情由食住者。標也。經說。世尊自悟一切法正覺正說。謂諸有情一切無非由食而住。食有四種。一段。二觸。三思。四識。段有二種。謂細及麤。細謂中有食。香爲食故。諸天中食及人劫初食亦名爲細。無便穢故。如油沃沙。散入支體故。或細汗蟲嬰兒等食亦名爲細。謂身有細蟲。因汗而生。名細汗蟲也。段欲體唯三者。明段食體。如是段食唯欲界繫。體唯三塵。謂香味觸。言段食者。可成段別而飮噉故。謂以口鼻分分受之。光影炎涼及塗洗等。雖無分段。有資益故亦名爲食。故段食言從多分說。光影炎涼名爲食者。寒遇日光。及値炎火。熱逢樹影。幷得風涼。有益於人皆名食也。非色不能益自根解脫故者。明色非段食也。論云。色亦可成段別飮噉。何緣非食。以不能益自所對根解脫者故。解云。且色不益自根者。自根是眼。眼見色時而無益也。

自根ノ大種尚無有益。況能益餘ノ諸根大種。故色非食。不益解脫者。謂不還果及阿羅漢無段食貪。名爲解脫。此不還等色香味觸俱得離貪。雖見美食而不能益。飲噉香味等便卽有益。一種離貪。見色無益。以此故知色非段食。觸思識三食者。觸謂三和生觸。思謂意業。識謂識蘊。皆能持身。幷稱爲食。有漏通三界者。觸思等三雖通無漏。而今食體唯取有漏。資益有故。若無漏法破壞諸有。故非食也。觸等三食通三界攝。（冠註論本第十右十六）

【暉鈔】卷中本三十七右　四食者。世尊初成道了。往鹿苑度五人。過恒河逢富樓那外道。見太子威儀端正問曰。瞿曇似得勝法。佛言。一切無非由食而住。因此說四食。意破自餓外道遠離邪覺邪說。名正覺正說也。段食者。段爲分段。食資養爲義。入腹已資益諸根大種。二時有益。一解除飢渴。二食了資益諸根大種。不資益諸根大種是段非食。說名食者據當名說也。疏云體唯三塵者。三塵但是欲界攝。皆爲段食體。正理論云。段食體有十三。開觸塵爲十一。問。爲除飢渴二種雖食。如何此二觸得名食體。答。此二爲食最勝。若無此二卽不須食。由有此二能食資益諸根。故得爲食體。六根取六境。鼻取香卽益鼻。眼見色卽損自根。況益諸根。故色非食體。不說聲爲

食者。以無形段不相續故。又見色時生出喜樂者。卽是三和緣色生觸。觸卽觸食收。何故經中讚色香美味。以色是香味觸助緣故。又擧色勝表香等。亦如何不經中讚觸塵。答。非是惡觸具妙香等。又觸是食體不說自成也。正理論云。色界有色聲。不能生貪心不名妙色等。雖有能攝益諸根大種而非段食。雖不是段食攝。非無食義。如第二定喜非四食攝而得爲食。若爾欲界應唯口鼻呑噉方名段食。無相例失。欲界有少呑噉爲門。餘相從皆名段食。如日光等。上界都無少分呑噉爲門。相從立色聲喜等爲食。北洲食者。或觸可愛風。非是呑噉。相從名段食也。無漏觸等及一切有漏法。又不引後有。雖有現在暫時資益根身不名食也。

【麟記】論本第十八右　人劫初食者。謂劫初時人食地味地皮林藤名細食。香稻已來方名爲麤。此以無穢名細。有穢名麤。言細汗蟲者。卽蟣蝨等其體細故。因汗而生。或人身中有蟲食汗名細汗蟲。此以少軟名細。多硬名麤。段食唯欲界繫者。上界無段食及香味等。離段食貪方生彼故。正理云。非上界身依外緣住。色界雖有能益大種。以畢竟無分段飲噉故非段食。釋段食名者。昔名摶食。可摶握故。今以飲等非可摶握。由是譯名段食。舊云。謂口飲噉舌根卽分分受味。由鼻飲故鼻根卽分分受香。口鼻中卽觸。身根分分受觸。光影炎涼名段食者。准論有二釋。一從多分說。二云。有資身義故。論云。雖非飲噉而能持身亦段食攝。如塗洗等。解云。如藥塗身。及洗浴等。准此引塗洗等爲喩。疏中便釋塗洗爲食所以也。段食但三塵者。正理云。然段食體事別十三。謂觸有十一。及香味二也。以處總取唯有三種。謂香味觸。一切皆爲段食自體。可成段別而呑噉故。又諸飲等亦名段食。皆可段別而受用故。問。豈不求食爲除飢渴。如何飢渴亦名爲食。謂十一觸中有飢渴也。答。由此二種亦於根

大能增益故。如按摩等。又解。於飲食無希欲以心身便疲損故亦名食。又有飢渴方名無病故爲食事。此二勝餘色。不益自根者。見色不益眼根。聞香等時便益鼻等。故色非食。香等爲食。以能先益自根後及餘身故。正理云。色處何緣不名爲食。是不至取根所行故。以契經說。段食非在手中器中可成食事。要入鼻口牙齒咀嚼。津液浸潤進度喉咽。墮生臟中漸漸消化。味勢熟得流諸脈中。攝益諸蟲。乃名食也。爾時方得成食事故。若在手器當名爲食。雖彼分段總得食名。而成食時唯香味觸。若總分段皆名食者。聲不相應亦應是食。問。何故唯簡色非食耶。答。聲非相續。意法無有分段食。眼等五根雖含二義食中無故。體淨妙故非飲噉故。此之八種非食義顯。故不別顯。唯色一種相續分段。段食中有可飲噉故。恐濫段食。是故別簡。食唯有漏者。論云。毘婆沙師作如是釋。能資諸有是其食義。無漏修生爲滅諸有故非食義。又正理云。思食唯與意識相應。唯於三食說有漏言。顯香味等三不濫無漏。

意成及求生食香中有起者。此通經說中有名也。謂契經說食有四種。能令部多有情安住。及能資益諸求生者。解云。言部多者此云已生。五趣生已皆名已生。故部多言攝五趣也。言求生者即是中有。以佛世尊以五種名說中有故。一名意成。從意所生。非精血等外緣成故。二名求生。常喜尋察當生處故。三名食香。香爲食故。四名中有。二

趣中間所有蘊故。五名爲起。對向當生暫時起故。又契經言有壞自體起。有壞世間生。解云。起謂中有。生謂生有。此二無常。可破壞故名爲有壞。中有非無。標以自體。生有多過。稱曰世間。又契經言。有補特伽羅。已斷起結未斷生結。於此經中廣說四句。謂上流者爲第一句。謂無色上流也。於無色界不受中有。已斷起結。更有受生。未斷生結也。中般涅槃爲第二句。正居中有。未斷起結。更不受生。已斷生結。諸阿羅漢爲第三句。更無生故。除前諸相爲第四句。上來引經意證中有名爲起也。又部多者是無生義。謂阿羅漢不受生也。諸有愛者說名求生。更受生故。（冠註論本第十八右）

【暉鈔】卷中本二十八右　有壞自體起有壞世間生者。有釋云。死有壞中有自體起。中有壞即生有世間生。中有言自體起。破大衆部無中有。世間生破常因外道。五蘊無常。從因生也。潤生有惑名生結。斷者。正理論云。斷有二種。一得永對治斷。得擇滅。二得永不行斷。得非擇滅也。四句中斷言。於前二斷思而可知。

【麟記】論本第十十右　契經說食有四等者。准論此文證食是有漏義。後文言部多者已下。方是會名。論

文具有二義。今疏中沒初義。故但合爲一釋名也。中有標自體者。以中有相隱故標自體。生有相顯故標世間。或影略互擧。言起結生結等者。謂受生有及中有身皆由惑潤故言結。若斷能潤之惑便不受生。阿羅漢爲第三句者。生起二結倶斷也。除前相爲第四句者。除現中般諸餘未永離色界貪者。受中有故起結未斷。受生有故生結未斷。

後四句頌者明食廢立。問。諸有漏法皆資長有。如何世尊說食唯四。答。雖爾就勝說四無失。問。其勝者何。答。頌言前二益此世所依及能依者。此明二食勝也。言此世者現在世也。言所依者謂有根身。段食於彼能爲資益。言能依者謂心心所。觸食於彼能爲資益。如是二食。於已生身有資益功能最爲殊勝。後二於當有引及起如此者。明後二食勝也。言當有者謂未來生。思食是業。能引當有。思食引已識種子力能起當有。由業所熏識種子力當有方起。故此二食能益當生。最爲殊勝。故雖有漏皆資長有。而就勝說唯有四食。前二如養母。養已生故。後二如生母。生未生故。又論文明段食四句分別。第一句者是段非

食。謂所飲噉爲縁。損壞諸根大種。第二句者是食非段。謂觸等三食
第三句者亦段亦食。謂所飲噉爲縁。資益諸根大種。第四句者謂除前
相。觸等三食皆有四句。於中是觸等而非食者。謂無漏觸及有漏觸爲
縁。損壞諸根大種。餘思可解。論云。五趣四生皆具四食。問。如何地獄
有段食耶。答。飲鐵丸等。雖於食已能爲損壞。而能暫時解除飢渴。
得食相故亦名爲食。又孤地獄飲食如人。故五趣中皆具四食。（冠註論
本第十 十九右）

【暉鈔】卷中本 三十八左　前二益此世等者。此是論主依經部義。以言識種子等故。古人二説。一説同此。
一説是有部義。種子即因義。頌言前二益此世等。約勝説。此二説中前説依經部勝。以有部説
四食皆資現在諸根大種及招後有。段觸二食引當來者。內身香等三資觸等三食。共
益現在者。由觸覺對前勝境。段食由外香等發身中香等令成食事。是益現世也。思識二食引
當有如疏。思食益現在者。昔有一父。時歳飢饉。欲逝他國。以囊盛灰。掛於壁上云。是麨囊。二子
希望多時不死。後有人至。取開見灰望絕而死。又集異門論説。海中大衆生登岸生卵。埋置沙中。
還入海中。母思子時卵即不壞。母若失念卵即便壞。此應是子思母時子即不壞。彼論應倒也。設
子思母至觸位方有思。約別業力不壞。識即見現在妙色等也。所以有四食者。依瑜伽論。謂治

身受心法故。何緣治身受心法。一切衆生無始執身爲淨。佛語彼言。此身三十六物。以段食資故是不淨。所以說段食也。爲執受爲樂。謂說觸食。爲受隨因有苦樂故。謂。執心爲常。爲說思食。所任持故。所作運爲皆是意思。爲執法爲我。以意識了彼法皆無我說識食也。四句中之第四句取無漏觸等三食。後觸等三互有寬狹者。觸等通漏無漏寬。不通段食狹。食通四寬。不通無漏狹。四句思而可知。三科攝四食。思惟可知也。

【麟記】論本第十右十　前二益此者。就勝爲言。然段食亦能引當有。故論云。諸有愛者亦由段食爲緣資益令招後食。以世尊說四食皆爲病癰箭根老死緣故。此以由段食爲緣資益現世惑業令招後有果也。思食正牽當有亦兼資現有。故論云。亦見思食安住現身。世傳有言。昔有一父。時遭飢饉。欲造他方自既飢羸。二子嬰稚。意欲携去力所不任。以囊盛灰。掛於壁上。慰喩二子言。是麨囊。二子希望多時延命。後有人至取囊爲開。子見是灰望絶便死。故知思食亦資現在也。第四句者。即無漏思觸等並得爲此俱非句也。觸等三食皆有四句者。且觸食四句初如章。及有漏觸爲緣損壞諸根者。即違境等生觸也。第二句是食非段者。餘段等三食。第三句可知。第四句即餘無漏法及有漏中除觸外餘損諸根者並入此句。思識二食亦各四句。並准上說之。但名目異耳。而能暫時解除飢渴者。婆沙說。食於二時能爲食事俱得名食。一初食時能除飢渴。二消化已資益根及大。今地獄有初一義故亦名食。孤地獄飲食如人者。如僧護經說撿看。

從此大文第三明有情沒。論云。今應正辯。何識現前。何受相應有死

生等。頌曰。

斷善根與續　離染退死生　許唯意識中　死生唯捨受

非定無心二　二無記涅槃　漸死足臍心　最後意識滅

下人天不生　斷末摩水等

釋曰。初兩句標六法也。一斷善根。二續善根。三離染位。四退惑時。五死。六生。許唯意識中者。於此六位唯許第六意識相應也。死生唯捨受者。死生唯許捨受相應。苦樂明利不順死生。捨受中庸故順死生。非定無心二者。二謂死生。定及無心無死生義。故言非也。言非定者。謂由三義。一身在下界起上界定。必無死生。界地別故。二加行生故。然死生心任運而起。三能攝益故生死有損。定既有益。故無死生。非無心者。在無心位命必無損。若所依身將欲變壞。心必定還起屬所依心。然後命終。更無餘理。於無心位亦無受生。以受生時煩惱爲因。於無心位無煩惱因故無生也。二無記涅槃者。入涅槃心唯二無記。謂異熟生

及威儀路。唯無記心入涅槃者。無記勢力微。順心斷滅故。工巧稍强。
通果定發。雖是無記不入涅槃。漸死足臍心最後意識滅下人天不生者。
明死時識也。言下者三惡趣也。不生謂阿羅漢也。若頓命終。意識身根
忽然總滅。若漸死者。墮於惡趣識滅於足。若往人中識滅於臍。若得
生天識滅於心。若得羅漢識滅亦於心。有言。於頂滅。上來所明皆據
最後意識滅也。斷末摩水等者。正明死義。末摩此云死節。然於身中
有百處異死節。其量甚小。觸便致死。是謂末摩。水等者等取風火。
於此三大隨一增盛。如利刀及。觸彼末摩。因此命終。故名爲斷。此
言斷者。非如斬薪令成兩段。但由三大觸彼末摩。令身無覺說名
爲斷。地界不名斷末摩者。謂無第四內災患故。內三災患謂風熱痰。
痰是水增。熱緣火起。風病風增。無第四災故。無地界斷末摩也。有說。
此似外器三災。外有水火風。內還有水火風。既外無地界災故。內無
地界患也。此斷末摩唯人間有。非於天上。然諸天子將欲死時有五

衰相。一衣染塵垢。二花鬘萎悴。三兩腋汗出。四臭氣入身。五不樂本座。此五相現必定當死。（冠註論本第十二十左）

【暉鈔】卷中本三十九左　有死生等者。生言兼攝中有。中有准前文名起不名生。正理論云。既無色沒受欲色中有。初心即成欲色界煩惱。故知亦得名生也。一身在下界起上界定者。設許身在上界起自界定亦無死生。以定攝益故也。又受生要須染心。定心非染。起上界染。定心以加行生。亦不受生死。問。死有通三性。如何唯二無記入涅槃。答。無學無染心死。善加行生故不入涅槃。正理論云。生得劣善何故不入涅槃。答。有異熟故不起善心。若爾住現在異熟應不入涅槃。不爾。以無學智依現身證果。有恩不厭現果。但厭未來果也。識無相貌。但隨壽燼。一時滅故。如以小水置炎石上。漸微漸消欻然都盡也。此斷末摩唯人間有者。地獄無。以恒斷故。唯人三洲及傍生鬼通二乘小聖有也。更無別物。但身支節。正理云。由發言譏刺前人隨實不實傷切人心。由此當來招末摩苦也。正理云。此五相現不過五日即死。若有相現世尊亦不能轉。亦非一切天子皆有。亦非一一天子皆具五相方死。今言五者總擧大數。更有小五相現。不定當死如論中說也。

【麟記】論本第十十一右　何受相應有死生等者。此一門合有六句。此論略故但擧二門等取後門。正理具列。彼云。今應思擇。於前所說四有之中。死生二有唯一剎那。於此時中何識現起。此識復與何受相應。定心無心得死生不。住何性識得入涅槃。於命終時識何處滅。斷末摩等者。其體是何。言此六位唯許意識者。中有亦唯意識。以攝在生有中故不別說。故正理云。本論亦有以生聲說結。

中有位。謂上界沒欲界生時。此等生言說中有始。由此頌說生言兼攝中有。死生唯捨受者。正理云。以死生時心昧劣故。由此故說下三靜慮唯近分心有死生理。以根本地無捨受故。又婆沙云。梵補梵衆依未至地心命終結生。大梵依靜慮中間心命終結生也。身在下界起上界定無死生者。且約此說縱令同界地亦無死生。以加行生及攝益等故。正理云。非在定心有死生理。設界地同極明利故。必由損害方得命終。諸在定心非染汚故。必由染汚方得受生。異地染心亦攝益故。加行起故無命終理。異地染心必勝地攝。何容樂往劣地受生。故彼亦無能受生理。一切異地淨無記心加行起故無命終理。非染汚故無受生理。非無心位命終者。正理云。義相違故。死有二種。或他所害。或任運終。無心位中他不能害。有殊勝法任持身故。處無心位不任運終。入無心定能引出心。必無有法礙令不生也。又契經言。無想有情由想起已從彼處沒。非無心位可得受生。准此無心並不生死也。通果定發者。謂從淨定發通果也。又正理云。劣善何故不入涅槃。以彼善心有異熟故。諸阿羅漢厭背未來諸異熟入涅槃故。若得羅漢識滅於心者。謂無學人無所往後有故於心滅。有言於頂滅者。謂述餘師說。彼以涅槃最勝故於頂滅。言皆據最後意識滅者。謂命終時身根漸滅。至足等處欻然都滅。如以少水置炎石上漸減漸消一處都盡。又正理云。眼等諸識依止色根尚無方所。況復意識。故約身根辯意識滅。斷末摩者。正理云。好發語言譏刺於人。隨實不實傷害人心。由此當招斷末摩苦。令身無覺名斷者。舊云。猶如有人被斷頭已無覺知故。故得斷名。內三災者。醫方中說。身有三分。心已上痰分。心下臍上熱分。臍已下風分。此斷末摩唯人間有者。婆沙云。唯在欲界非色無色。於欲界中唯在三洲非北洲及欲天。彼無惱亂業果故。非在地獄。以恒斷

故。傍生餓鬼有斷末摩。然於人中通凡及聖。但除於佛。五衰相者。此是大衰相。然諸天子將命終時復先有五小衰相現。一者衣服嚴具出非愛聲。二者自身光明忽然昧劣。三者於沐浴位水滴着身。四者本性囂馳滯一境。五者眼本凝寂今數瞬動。此五相現非定當死。遇勝善緣猶可轉故也。

從此大文第二明三聚。論云。世尊於此有情世間生住沒中建立三聚。何謂三聚。頌曰。

正邪不定聚　聖造無間餘

釋曰。上句標。下句釋。謂諸聖人名正性定聚。造五無間者名邪性定聚。自餘凡夫名不定性聚。頌言餘者。正邪定餘。即無間外餘凡夫也。言正性者所謂涅槃。定者是聖有無漏道。遠一切惡故名爲聖。獲得畢竟離繫得故。定盡煩惱故名爲定。聖於正性得決定故名正性定也。言邪性者謂三惡趣。定謂造無間人也。造五無間必墮惡趣。故名爲定。造無間人於邪性中得決定故。名邪性定也。不定性者。除正邪外所餘有情。遇聖入聖。遇邪入邪。名不定性聚。（冠註論本第十三右）

【暉鈔】卷中本四十左 正性定者。苦法忍後決定得涅槃故。問。順解脫分定得涅槃。如何不得此名。答。一此容却作邪性故。二未捨邪性故。三未決定時故。至苦忍初心。卽七生定得涅槃。問。得上忍及世第一法位亦得時定緣何名邪性。答。一以時少故。二以未捨邪性也。

【麟記】論本第十十三右 言正性者。謂涅槃經云。貪無餘斷。嗔癡及一切煩惱無餘斷。故是名正性。准此無餘斷。故知自涅槃也。正定聚中要得無漏離繫得方名爲定。若但獲得順解脫分者。雖亦定得涅槃而不名定。以彼後時或墮邪定聚故。准此等文。設住上忍及世第一不說爲正定聚者。以時少故。未捨邪見性故。言邪性者。正理云。何名邪性。謂有三種。一趣邪性。二業邪性。三見邪性。卽是惡趣五無間業。五不正見如次爲體應知。解正邪中性與定義各別釋也。又三惡趣總名爲邪。及得定名。唯五無間業。若造餘業雖墮惡趣。非決定故不名定也。

俱舍論頌疏 論本第十 終

俱舍論頌疏 論本第十一

中大雲寺沙門圓暉述

分別世間品第三之四

從此大文第二明器世間。一明所居器。二明能居量。三明三分齊。就

明所居器中有二。一別明小器。二總明大千。就明小器中有八。一明三輪。二明九山。三明八海。四明四洲。五明黑山等。六明地獄。七明日月。八明天器。且初第一明三輪者。論云。如是已說有情世間。器世間今當說。頌曰。

安立器世間　風輪最居下　其量廣無數　厚十六洛叉
次上水輪深　十一億二萬　下八洛叉水　餘凝結成金
此水金輪廣　徑十二洛叉　三千四百半　周圍此三倍

釋曰。初句總標。餘句別釋。洛叉此云億。論云。許此三千大千世界如是安立形量不同。謂諸有情業增上力。先於最下依止虛空有風輪生。其量廣無數。厚十六億踰繕那。如是風輪其體堅密。假使有一大諾健那。此云露形神。以金剛輪奮威懸擊。金剛有碎。風輪無損。又諸有情業增上力。起大雲雨澍風輪上。滴如車軸。積水成輪。於未凝結位。深十一億二萬踰繕那。問。如何水輪不傍流散。答。有餘師說。一切有情業

力所持令不流散。如所飲食未熟變時終不流移墮於熟藏。有餘師說。由風力持令不流散。如篅持穀。有情業力感別風起。搏擊此水上結成金。如熟乳停上凝成膜。故水輪減唯厚八洛叉。餘轉成金輪。厚三億二萬二。輪廣量其數是同。謂徑十二億三千四百半。周圍其邊數成三倍。謂周圍量成三十六億一萬三百五十踰繕那。（冠註論本第十一左三）

【暉鈔】卷中本（四十二右）　論本第十一　小器者。即一四天下。如水金輪徑十二洛叉三千四百五十喩繕那。即是一四天下所依。風輪量無數。即爲大千世界所依。准婆沙。風輪與百倶胝水輪爲所依。一倶胝有百億。百倶胝有百百億。大千界有百百億。故知風輪與大千界爲依。若火災即二定下風雨起成。若水災即三定下風雨起成。若風災即四定下風雨起成也。許者。諸部共許。奮者。擧也。如篅持穀者。劫章云。四面猶如盤椽形。

【麟記】論本第十一（右初）　倶舍頌疏記　論本第十一

富春沙門遁麟述

器世間義。言許此三千大千世界如是安立者。謂三輪量諸論同許。有言五輪者義加空及地輪。謂風下依空。金輪上有地故。今此但明三輪。即風水金也。准論三輪大小不等。風輪量廣無數者。謂合大千同爲一輪。金水各言徑十二億等。即是唯一四天下輪。新云。略計八山七海。已有六十萬

餘踰繕那。更加外海輪圍亦十二億。下文云。十萬爲洛叉。故知是億也。婆沙有說。金水輪廣量與風輪等。有說。狹少。各百俱胝。一一廣量皆等。准此所說。金水等風輪者。即同約三千界輪。若言金水狹者。即約四天下說。此論無初說也。滴如車軸者。劫章云。是光音金藏雲布及三千界雨滴如車軸。

從此第二明九山。頌曰。

蘇迷盧處中 此云妙高。次踰健達羅 此云持雙。山頂有二雙跡。山能持故。故以名焉。伊沙馱羅山 此云持軸。山峯上聳猶如車軸。此山能持故也。竭地洛迦山 竭地洛迦西國樹名。此國南方今有此樹。名檐木山。山上寶樹其形似彼。故以爲名也。蘇達黎舍那 此云善見。見者稱善。頞濕縛羯拏 此云馬耳。山形似彼也。毘那怛迦山 此云象鼻。山形似彼。尼民達羅山 此是魚名。其魚觜尖。山形似彼。

於大洲等外　有鐵輪圍山　前七金所成　蘇迷盧四寶
入水皆八萬　妙高出亦然　餘八半半下　廣皆等高量

釋曰。前兩行半明九山。次兩句明山體。後一行明山量。論云。於金輪上有九大山。妙高山王處中而住。餘八周匝遶妙高山。於八山中前

七名內。第七山外有大洲等。此外復有鐵輪圍山。周匝如輪圍一世界。持雙等七唯金所成。妙高山王四寶爲體。謂如次四面北東南西。金銀吠瑠璃頗胝迦寶。隨寶威德色顯於空。故贍部洲空似吠瑠璃色。問。如是寶等從何而生。答。亦諸有情業增上力。復大雲起雨金輪上。滴如車軸。積水濤奔其水卽爲衆寶種藏。由具種種威德猛風鑽擊變生衆寶類等。如是變生金寶等已。復由業力引起別風。簡別寶等攝令聚集。成山成洲。分水甘鹹。令別成立內海外海。如是九山住金輪上。入水量皆等八萬踰繕那。蘇迷盧山出水亦爾。餘八出水半半漸卑。謂初持雙山出水四萬。乃至最後鐵輪圍山出水三百一十二半。如是九山一一廣量各各自與出水量同。（冠註論本第十一右五）

【暉鈔】卷中本四十二右　妙高者。四寶爲體名妙。出群峰之上爲高也。前八山頂方。以論言四邊各三倍。又下言四角有四峰。第九山卽圓。以論言周匝如輪圍一世界。前七名內者。卽金山以在四洲內。第八山在四洲外名外也。象鼻恐非正義。此云有障礙神。有一鬼神。人形象頭。凡見他勝事皆爲障礙。山峰似彼神頭也。隨寶威德色顯於空者。蒼蒼之色經部呼爲空一顯色。卽是寶色也。衆寶

種藏者。水能生爲種。能出爲藏也。先金輪上水本是一大海。後業風鼓擊一時湧出九大山。一山間一海。即水變成寶也。分水甘鹹者。言第八海外邊是鐵山。久停水故鹹者。此釋非理。此即由風力分甘鹹。第八海却闊。

【麟記】論本第十一左初　蘇迷廬。翻妙高如章。或云妙光山。昔云須彌山。或云須彌樓。皆訛。踰健達羅者。昔云乾陀羅山。謂此山峰有二隴道。因名持雙。伊沙馱羅山者。昔云陀羅。此云自在持。亦云持軸。謂此山多有諸峰。形如車軸。故以名焉。蘇達梨舍那此云善見者。謂此山端嚴秀麗。見者皆稱善故。毘那怛迦者。此云有障礙神也謂此鬼神。人形象頭。凡見他事皆爲障礙。此山峰似彼神頭。故以名焉。尼民達羅者。昔云尼民陀羅。言魚名者。謂海中有此魚也。隨寶威德色顯於空者。四洲空色各隨寶色。南如瑠璃。言吠瑠璃扶癈反昔云毘瑠璃。亦云鞞瑠璃。皆訛也。從山爲名。謂遠山出此寶青色。非焰熌等所能鎔鑄。唯鬼神有通力者能破之爲物。此寶鬼神破之與人。或云。是金翅卵觳。此寶東如白銀。西如頗胝迦。北黃金色。

從此第三明八海。頌曰。

山間有八海　前七名爲內　最初廣八萬　四邊各三倍
餘六半半狹　第八名爲外　三洛叉二萬　二千踰繕那

釋曰。妙高爲初。輪圍爲後。中間有八海。前七名爲內。七中皆具八功

德水。一甘。二冷。三輭。四輕。五清淨。六不臭。七飲時不損喉。八飲已不傷腹。如是七海初廣八萬。約持雙山內邊周圍量。於其四面數各三倍。謂各成二億四萬踰繕那。其餘六海量半半狹。謂第二海量廣四萬。乃至第七量廣一千二百五十。此等不說周圍量者。以煩多故。第八名外。鹹水盈滿。量廣三億二萬二千。（冠註論本第十一七右）

【暉鈔】卷中本四十三右　總計九山八海。有一百二十萬八百七十五踰繕那。與前金水二輪徑十二億三千四百五十踰繕那少不相當。大數同也。

【麟記】論本第十一右二　約持雙山內邊周量至各三倍者。言山內邊卽海外際。准此論文。妙高山方。以言四面數各三倍故。總計有二億四萬也。略計九山八海一四天下徑總有一百二十萬八百七十五踰繕那。所論其量皆約邊道云徑也。

從此第四明四大洲。頌曰。

於中大洲相　南贍部如車　三邊各二千　南邊有三半
東毘提訶洲　其相如半月　三邊如贍部　東邊三百半
西瞿陀尼洲　其相圓無缺　徑二千五百　周圍此三倍

北倶盧畟方　面各二千等　中洲復有八　四洲邊各二

釋曰。前三行半明大洲。後兩句明中洲。論云。於外海中大洲有四。謂於四面對妙高山。南贍部洲北廣南狹。三邊量等。其相如車。南邊唯廣三踰繕那半。三邊各有二千踰繕那。解云。此言車者是西國車。彼國車形前狹後闊。如人面也。又論云。唯此洲中有金剛座。上窮地際下據金輪。一切菩薩將登正覺。皆坐此座上起金剛喩定。以無餘依及餘處所有堅固力能持此故。解云。無餘依者。除菩薩身外更無餘依身起此定也。無餘處者。除金剛座外無餘處所也。此定力大。餘依餘處無堅固力可能持故。　東勝身洲東狹西廣。三邊量等。形如半月。東三百五十三。邊各二千。西牛貨洲圓如滿月。徑二千五百。周圍七千半。北倶盧洲形如方座。四邊量等。面各二千。等言爲明無少增減。隨其洲相人面亦然。復有八中洲。是大洲眷屬。謂四大洲側各有二中洲。贍部洲邊二中洲者。一遮末羅洲。此云猫牛。二筏羅遮末羅洲。此云勝猫牛。東勝身洲邊二中洲者。一提訶洲。此云身。二毘提訶洲。此

云勝身。西牛貨洲邊二中洲者。一舍拕洲。此云諂。二嗢怛羅漫怛里拏洲。此云上儀。北倶盧洲邊二中洲者。一矩拉婆洲。此云勝邊。二憍拉婆洲。此云有勝邊。此八中洲皆人所住。人形短小如此方侏儒。有說。唯一洲羅刹婆居。即是此方遮末羅洲也。（冠註論本第十一右八）

【暉鈔】卷中本四十三右　以無餘依及餘處所者。無餘人與此定為所依。無餘處與此定為所依。古人云。以正理論說鬼國近南下有地獄。證金剛座近北也。寶法師云。此洲三邊各二千。南邊有三千半。下安無間。已有二萬踰繕那。更有衆多地獄遍滿地下。不可云近南。今釋云。如人與鬼宅舍不相妨礙。金剛座在中天境。與地獄及鬼趣不相妨礙也。羅刹婆者。音義云羅刹婆。或云阿索羅婆。是惡鬼神之通名。又云羅叉婆。此云護者。若女即名羅叉私。舊云羅刹。訛略也。婆沙一百七十二有三說。二說如疏。第三云。八中洲是四大洲異名。四洲各有二異名。評家取初說。皆人住也。

【麟記】論本第十一二右　矩拉婆洲者。上倶禹反下盧答反。羅刹婆者。音義云阿羅刹婆。是惡鬼之通名也。又云羅叉婆。此云護者。若女則名羅叉私。昔云羅刹訛略也。婆沙云。八洲皆人住。有說。七洲人住。一洲羅刹居焉。有說。是四大洲異名。以一一洲皆有二異名故。如是說者應如初說。准彼此論二說中前說為正。

從此第五明黑山等。頌曰。

此北九黑山　雪香醉山內　無熱池縱廣　五十踰繕那

釋曰。此贍部洲從中向北三處各有三重黑山。有大雪山在黑山北。大雪山北有香醉山。此山有香人齅便醉。雪北香南有大池水。名無熱惱。出四大河。一殑伽河。從池東面出遶池一匝方入東海。二信度河。從池南面出遶池一匝方入南海。三徙多河。從池北面出遶池一匝方入北海。此云孟津河是也。四縛芻河。從池西面出遶池一匝方入西海。無熱惱池縱廣正等。五十踰繕那量。八功德水盈滿其中。非得通人無由能至。於此池側有贍部林。樹形高大。其菓甘美。依此林故名贍部洲。或依此菓以立洲號。（冠註論本第十一左九）

【暉鈔】卷中本四十三左　縱廣者。俗釋南北曰縱。東西曰廣。廣雅云。長也。今釋應是竪曰縱。橫曰廣。池四河口皆闊四十里。東面河口以銀成。似牛頭。南面金成。似象頭。西面頗胝迦成。似師子頭。北吠瑠璃成。似馬頭也。

【麟記】論本第十一左二　言無熱池者。梵云阿那婆答多池也。昔云阿耨達池訛也。謂此池龍離三熱惱。

一非熱沙所燥。二無風吹衣露形。三無金翅鳥所食。無三種所生熱惱名無熱惱。卽法華云阿那婆達多龍王是也。出四大河者。華嚴經云。十地菩薩以顯力故化爲龍王。於中潛宅。鱗甲之中出清冷水。洽贍部洲諸有情類。西域記云。金銀瑠璃頗胝迦寶飾其岸焉。金沙彌漫清波皎鏡。是以池東面銀牛口流出殑伽河。巨升反。昔云恒河。又云恒伽訛。此云天堂來。見從高處而來故。入東南海。池南面金象口流出信度河。昔云辛頭河訛也。此云驗河。流入西南海也。西面瑠璃馬口流出縛芻河。昔云博叉訛也。此云青河。流入西北海也。池北面頗胝迦師子口流出徙多河。昔云私陀訛也。此云冷河入東北海。已上四河皆繞池一迊方入於海也。又云。潛流地下出積石山。卽徙多河之流爲中國之河源矣。然今章中第三第四前後不次。

從此第六明地獄。論云。復於何處置捺落迦大捺落迦。何量有幾。頌曰。

此下過二萬　無間深廣同　上七捺落迦　八增皆十六
謂煻煨尿糞　鋒及烈河增　各住彼四方　餘八寒地獄

釋曰。此贍部洲下過二萬有阿鼻旨大捺落迦。深廣同前。謂各二萬。故彼底去此四萬踰繕那。以於其中受苦無間。非如餘七捺落迦受苦非恒。故名無間。且如等活捺落迦中。諸有情身雖被種種斫刺磨擣。

而彼暫遇涼風所吹。還活如本。由此理故立等活名。阿鼻旨中無如是事。有餘師說。阿鼻旨中無樂間。苦故名無間。餘地獄中雖無異熟樂。而有等流。七捺落迦在無間上。重累而住。其七者何。一極熱。二炎熱。三大號叫。四號叫。五衆合。六黑繩。七等活。有說。此七在無間傍。八捺落迦增各十六。故薄伽梵說此頌曰。此八捺落迦。我說甚難越。以熱鐵爲地。周匝有鐵墻。四面有四門。開閉以鐵扉。巧安布分量。各有十六增。多百踰繕那。滿中造惡者。周徧焰交徹。猛火恒洞燃。釋曰。十六增者。八捺落迦四面門外各有四所。一塘煨增。謂此增內塘煨沒膝。有情遊彼纔下足時。皮肉與血俱燋爛墜。擧足還生平復如本。二尿糞增。謂此增內尿糞泥滿於其中。多有娘矩吒蟲。觜利如針。身白頭黑。有情遊彼皆爲此蟲鑽皮破骨唼食其髓。三鋒刃增。謂此增內復有三種。一刀刃路。謂於此中仰布刀刃以爲大道。有情遊彼纔下足時。皮肉與血俱斷碎墜。擧足還生。平復如本。二劍葉林。謂此林上純

以銛利劍及爲葉。有情遊彼風吹葉墜。斬刺支體骨肉零落。有烏駮狗摣掣食之。三鐵刺林。謂此林上有利鐵刺。長十六指。有情被逼上下樹時。其刺銛鋒上下鑱刺。有鐵觜烏探啄有情眼睛心肝爭競而食。刀及路等三種雖殊。而鐵仗同故一增攝。四烈河增。謂此增內滿熱鹹水。有情遊中或浮或沒。或逆或順。被蒸被煮骨肉糜爛。設欲逃亡。於兩岸上有諸獄卒。手執刀鎗禦捍令迴。無由得出。此河如塹。前三似園。四面各四增故言皆十六。此是增上被刑害所故說爲增。本地獄中適被害已重遭苦故。有說。有情從地獄出重遭此苦故說爲增。問。諸地獄獄卒是有情不。答。有說。非情。問。既是非情如何動作。答。有情業力。如成劫風。風雖非情亦能成劫。問。若爾云何通彼大德法救善現說。如彼頌曰。心常懷忿毒。好集諸惡業。見他苦欣悅。死作琰魔卒。據此頌文豈是非情。答。琰魔王使諸羅刹婆擲諸有情置地獄中者名琰魔卒。是實有情。非地獄中害有情者。故地獄獄卒非實有

情。有說。有情。問。若爾何緣火不能燒彼。答。此定由業力所隔礙故。或感異大種故不被燒。復有餘八寒捺落迦。一頞部陀。此云皰。寒風逼身故生皰也。二尼剌部陀。此云皰裂。三頞哳吒。四臛臛婆。五虎虎婆。此三忍寒聲也。六嗢鉢羅。此云青蓮華。寒逼身青故也。七鉢特摩。此云紅蓮華。身寒赤色似紅蓮華故也。八摩訶鉢特摩。此云大紅蓮華。寒之更甚身色彌紅也。論云。此中有情嚴寒所逼。隨身聲色變以立其名。解云。初二地獄隨身變立名。次三隨聲立名。後三隨色變立名也。此八並居贍部洲下。如前所說大地獄傍。問。此贍部洲其量無幾。下寧容受無間等耶。答。洲如穀聚。上尖下闊。是故大海漸狹漸深也。如上所論十六地獄。一切有情業增上力感。餘孤地獄各別業招。或多或少或二或一。所止差別多種。處處不定。或近江河山邊曠野。或在地下空及餘處。諸地獄器安布如是。本處在下。支派不定。傍生住處謂水陸空。本處大海。後漸流入餘處。諸鬼本處琰魔王國。於此贍部洲下過五百踰繕那有琰魔王國。縱廣量亦然。從此展轉散居餘處。或

有端嚴具大威德。受諸富樂自在如天。或有飢羸顏貌醜陋。如是等類廣說如經。（冠註論本第十一左十一）

【暉鈔】卷中本四十三左　梵云捺落迦。此云苦處也。娘矩吒蟲。音義云。此云糞屎蟲。亦云針口蟲也。有等流者。以數數死生前後有涼風來間名等流。又如食鷄法。先與用食命終生地獄。得鐵丸食。得食想解除飢渴。名等流樂也。婆沙一百七十二云。餘七在無間上重累而布。一一廣萬踰繕那。計五箇半出地上。一說過四萬踰繕那有無間。上七重累一一廣五千踰繕那。一說此七在無間傍。此論同不正義也。烏駮狗駈令上下樹。一指二寸。十六指有三尺二寸也　問。刀刃路等三種不同。如何立一不立三。答。而鐵器仗同故合一也。此河如塹者。即如河一直。前三似園者。即前三團圓也。光法師釋云。此是增上被刑害所故說爲增。此約處所名增。本地獄中適被害已下。約苦重本地獄名增。有說有情從地獄出下。約再受苦名增。寶法師合爲二釋。前二釋合立一也。問。有情獄卒諸惡業果何處受耶。答。即地獄中受。正理說。無間極熱炎熱無獄卒。大叫號叫衆合少有獄卒。琰魔王使時時往來巡檢。餘者皆有有情無情二種獄卒也。漸狹漸深者。海深即狹故。地下漸廣也。問。何故此洲下有無間等。答。正理論云。唯於此洲起極重惡業。又此洲人極猛利故也。

【麟記】論本十一右三　言無間者。梵云阿鼻旨或阿毘至。或云阿鼻地獄義一也。婆沙評家云。謂諸有情造大惡業生彼地獄。得廣大身遍滿多處。中無隙故名爲無間。又一師。雖亦有間假說無間。有說。彼處恒受苦無喜樂間名無間。同此論後釋。有說在無間傍者。婆沙問云。地獄在何處。

答。多分在贍部洲下云何安立。有說。從此洲下四萬踰繕那至無間底。無間縱高下各二萬。次上一萬
九千踰繕那中安立餘七地獄。此七地獄縱廣萬踰繕那。有說。從此洲下四萬踰繕那至無間。無間縱廣
高下各二萬。次有三萬五千踰繕那安立餘七。餘七一一縱廣高下各五千踰繕那。有說。無間有於中
央。餘七周迊圍繞。如今聚落圍遶大城。煻煨。上徒郎反下烏廻反。通俗云。熱灰謂之煻煨。娘矩。下俱禹反
此云糞屎蟲。有觜如針。亦名針口蟲。穿骨食髓者也。觜。子累反廣雅云。觜口也。言鳥啄。咂食或作
唼。子盍反通俗云入口曰咂。又蟲食曰唼。銛利。私廉反廣雅云銛纖利也。謂刀鋭曰銘。探啄。上他含反說文
云。遠取曰探。探摸也。銕仗。治亮反執持曰仗。謂兵器之總名也。烈河增者。論云。如大鑊中滿盛灰
汁置麻米等猛火下燃。麻等於中上下廻轉擧體靡爛。有情亦然。刀鎗千羊反。蒼頡云。木兩頭著
銕曰鎗。禦捍。爾雅云。禦禁也。謂未有而預修也。捍胡旦反說文捍止也。衞也。釋十六增各二說
者。前以增上被害故。後以增加再受苦故名增也。正理云。此十六中受苦增劇。過本地獄故
說爲增。或於此中受種種苦。苦具多類故說爲增。又云。無間大熱炎熱此三於中皆無獄卒防守。
大叫號叫及衆合此三少有獄卒。琰魔王使時時往來巡檢彼故。其餘皆有獄卒防守。有情無情異類
獄卒防守治罰罪有情故。一頞哳吒者。烏曷反涉黠反。謂寒增口不得開。但得動舌作頞哳吒聲。臛
臛婆者。呼各反 寒轉增故舌不得動。但得口作臛臛聲。虎虎婆者。寒更增故不得開口。但得虎
虎聲。支派。普嫁反說文云。水之邪流別也。正理云。此寒地獄在繞四洲輪圍山外極冥暗所。鬼處
者。正理云。此贍部洲南邊直下深過五百踰繕那量有琰魔王都。縱廣量亦爾。舊云。准此文金剛
座近北。諸地獄等在王都下。稍近南邊不相妨也。新云。此無間傍有寒熱等地獄。縱使少近南

不侵金剛座。今現人趣居處與鬼舍不相妨礙。故知亦爾。若不爾者鬼都豈無土等。

從此第七明日月等。論云。日月所居量等義者。頌曰。

日月迷盧半　五十一五十　夜半日沒中　日出四洲等
雨際第二月　後九夜漸增　寒第四亦然　夜減晝翻此
晝夜增臘縛　行南北路時　近日自影覆　故見月輪缺

釋曰。初句明日月近遠。第二句明日月體量。次兩句明四時。後兩行明晝夜增減。論云。日月衆星依何而住。依風而住。謂諸有情業增上力共引風起。遶妙高山空中旋環。運持日等令不停墜。彼所住去此四萬踰繕那。持雙山頂齊妙高山半。日五十一。月唯五十。星最小者唯一俱盧舍。其最大者十六踰繕那。日輪下面頗胝迦寶火珠所成。能熱能照。月輪下面頗胝迦寶水珠所成。能冷能照。唯一日月普於四洲作所作事。北洲夜半東洲日沒。南洲日中西洲日出。此四時等。餘例應知。日行此洲路有差別。故令晝夜有減有增。從雨際第二月後半第九日夜

漸增。從寒際第四月後半第九日夜漸減也。晝時翻此。夜若漸增晝便漸減。夜若漸減晝則漸增。晝夜增時增一臘縛。晝夜減時減一臘縛。日行此洲向南向北。如其次第夜增晝增。釋曰。西國之法。分十二月以爲三際。謂寒熱雨。各有四月。略述兩釋。泰法師云。從二月十六日至六月十五日爲熱際四月。從六月十六日至十月十五日爲雨際四月。從十月十六日至二月十五日爲寒際四月。雨際第二月後半第九日當此間八月九日。從秋分已去夜增晝減也。寒際第四月後半第九日當此間二月九日。從春分已去夜減晝增也。此約晝夜停等後說增減也。光法師云。西方諸國時節不定。還隨方俗以立三際。從十一月十六日至三月十五日爲熱際。從三月十六日至七月十五日爲雨際。從七月十六日至十一月十五日爲寒際。雨際第二月後半第九日當此間五月九日。此與夏至稍得相當。此時日極長夜極短。從此已後夜則漸增。若寒際第四月後半第九日當此間十一月九日。此與冬至稍得相當。此時晝

極短夜極長。從此已後夜則漸減晝則漸增。故婆沙一百三十六云。摩訶陀月當此間十一月也。白半之日夜有十八。晝有十二。從此已後晝增夜減。室羅筏拏月當此間五月也。白半之日晝有十八。夜有十二。從此已後夜增晝減。解云。言十八十二者。謂十八十二牟呼栗多也。據此文證明知夜極長後方說晝增。晝極長後方說夜增也。又此論云。日行此洲向南向北。如其次第夜增晝增。故知五月夏至已後日則向南說夜增也。十一月冬至已後日既向北說晝增也。此上兩釋。泰法師意約晝夜停等後說有增減。光法師意約晝夜極長後說有增減。各據一義。任情取捨。更有多解。不能具敘。依此論文。一百二十刹那爲一怛刹那。六十怛刹那爲一臘縛。三十臘縛爲一牟呼栗多。若至極長有十八牟呼栗多。若至極短有十二牟呼栗多。故知中間延促總有六牟呼栗多。從夏至日已去至冬至日已來有一百八十日。夜增一臘縛。計一百八十臘縛足成六牟呼栗多。故冬至日夜有十八晝有十二也。若從冬至日已去至

夏至日已來成六年呼栗多。義准前說。故夏至日夜有十二晝有十八。問。何故月輪於黑半末白半初位見有缺。答。世施設論中作如是釋。以月宮殿行近日輪。月輪被日輪光所侵照。餘邊發影自覆月輪。令於爾時見不圓滿。又經部宗先舊師釋。由日月輪行度不同現有圓缺。問。日等宮殿何有情居。答。是四王天下天衆所居。若空居天唯住如是日月等宮殿。若地居天住妙高山諸層級等。（冠註論本第十一 十五左）

【暉鈔】卷中本四十四左　頗胝迦。此云水精。水玉白珠。智度論說。石室中過千年氷爲之此寶。今詳西方河者。暑熱土地無氷。但是石之類。此論月輪下以水精。不可頗胝迦亦是水精。既言能照。多是紅色寶也。運持日等令不停墜者。日等由運不停。由持不墜也。日出四洲等者。南洲日出東方。東洲北方。北洲西方。西洲南方。有言。四洲皆日出東方非也。以此論前文出東洲相言東邊三百半。是明東洲日出北方。餘二洲准此釋也。作所作事者。即作光明生成萬物。正二月即益。七八月即損。如日初見即益。久看即損眼。以有火故也。日行此洲路有差別者。擧此洲餘三洲准此。有云。准此洲非也。晝夜增減有二釋。一云。從春分已去夏至已來名晝增於夜。從夏至日至秋分名夜增於晝。從秋分至冬至日來名夜增於晝。從冬至日至春分已來名晝增於夜。是太法師釋。二云。晝增於夜即從冬至日至夏至日。從夏至日至冬至日名夜增於晝。是光法師釋。問。此二釋

中論依何者。答。依後釋。以論言日行此洲向南向北。如其次第夜增晝增。故知依後說。若疏家引婆沙一百三十六云。白半之日夜有十八等文不當。以彼論言從此已去晝增夜減。兩處有文。從春分已後亦言晝增夜減。五月已去言夜增晝減。八月秋分已去亦有夜增晝減。言疏家引二文不引餘二文。故證不成也。五天先數黑月後數白月。西牛貨洲節氣先於此洲九十日。節氣從西來五天先此間七日。以五天取此方七月十六日爲八月初。西方八月廿三日晝夜停等。當此方八月八日晝夜。此方大分八月十五日晝夜方停等是西方八月末。故知五天先此方七日也。世施設論者。西方俗人共施設。不是六足論中施設足論。日輪少高。月輪少下。故月被日侵照也。行度不同者。即日月行度多少不同。故初末相及。故月輪有缺也。

【麟記】論本第十一 五右 日月輪各言下面者以上面者諸天所居。但言下面也。論云。隨有情業增上所生。能於眼身果花稼穡藥草等物如其所應爲益爲損。還隨方俗以立三際者。舊云。隨世親造論處立三際也。然光泰二師各說增減不同者。並不異婆沙。婆沙從秋分亦云從此已後夜漸增。乃至夏至亦云從此已後夜漸增。春分及冬至已後並云晝增。然於四時皆說增減。故此二說各不相違。若以夜短其晝已去名晝增。晝短其夜已去名夜增者。即當泰法師義。若以齊此時已去夜漸進長。即第二夜長第一夜等名夜增者。即同光法師說。舊引此論證云。日行此洲向南向北。如其次第晝增夜增。故知約夏至冬至說增減。新釋亦同。今詳此文。未爲誠證。論文言向南向北者。爲從正中向北名爲向北。爲從正中向南名向南。爲從極北漸次歸南名爲向南耶。若極北向南即同光釋。若正中向南便同泰解。既通二釋爲證豈成。論文但言夜增晝增。即

通二釋。向南向北豈局一途。故不成證。新又云。此言第九日者是節氣日月。非是月生月盡之日月。以月生月盡之月不定故。言更多解者。卽眞諦法師等更有二說。煩不述之。問。所以日向南北令晝夜增減者。立世經云。復次以何因緣冬天時夜長晝短。其日宮過六月已次向南行。日行六俱盧舍亦不差移。但於此時其日在此洲最南際。地形狹少日過速疾。由此因緣。秋冬晝短夜長。復次日宮過六月已向北而行。一日六俱盧舍亦無差移。但於彼時正在閻浮提內。而行地寬行久。由此因緣春夏晝長夜短。問曰。旣非地上行。豈由地闊狹令日有長短。答。由地狹故照亦不廣。故擧地狹以顯行速。若爾南洲地有闊狹。日有長短。北洲地方。應無長短。由是應爲別釋。云云。新云。節氣從西向東。南方夏。西方秋。北方冬。東方春。南方夜極短。北夜極長。東西晝夜停等。言白半初黑半末者。黑月十五日中近後名末。近前名初。故黑半中十六日已去漸缺。白半中至十四日已來亦有缺。以末及初缺相顯故。然西方月與此方不同。彼以十六日爲月一日。以十五日爲月滿日。由是前十五日爲黑半。後十五日爲白半。言世施設論者。有云。謂彼自古英賢共爲此論。非六足中施設論也。言餘邊發影自覆月輪者。且如日從東照。西邊發影。故曰餘邊。由日體淨妙月體稍麤故。月輪被照發影自覆。於覆暗處遠見不圓。如樹發影。照旣多少不同。覆亦多少有異。所以缺減不定。言行度不同者。先舊師釋。由日月行道路不同。於此路行應見其圓。於此路行應見其缺。舊又云。日輪速疾。月輪遲緩。行度不同。日光赫奕。月明昧劣。日漸近月照於月輪。映奪不見。若漸相去方得漸現。後不照時故體全現。映奪不現。非由影覆。今詳。若月近日映奪不現。何爲非向日邊缺而背日邊缺耶。故知不爾。

從此第八明天器。一明天所居器。二明天器近遠。就明天所居器文復分二。初正明天器。二便顯餘義。初文分三。一明四天王天器。二明三十三天器。三明空居天器。且初第一明四天王天器者。論云。有幾層級。其量云何。何等諸天住何層級。頌曰。

妙高層有四　相去各十千　傍出十六千　八四二千量
堅手及持鬘　恒憍大王衆　如次居四級　亦住餘七山

釋曰。蘇迷盧山有四層級。始從水際盡第一層。相去十千踰繕那量。如是乃至從第三層級盡第四層。亦十千量。此四層級從妙高山傍出圍遶盡其下半。妙高山下四萬名下半耳。最初層級出十六千。第二第三第四層級如其次第八四二千。有藥叉神名爲堅手。住初層級。有名持鬘住第二級。有名恒憍住第三級。此三皆是四大天王所部天衆。第四層級四大天王及諸眷屬共所居止。故經依此說四大王衆天。除層級外七金山上亦有天居。是四大天王所部村邑。是名依地住四大王衆天。於

欲天中此天最廣。（冠註論本第十一二十左）

【暉鈔】闕之

【麟記】論本第十一右七　傍出十六千者。舊云。若妙高山如鼓即侵山有十六。若如方座體外別出十六。體廣八萬。論層更多。餘三層級皆作兩釋。言初層級者。即下海際第一層級也。

從此第二明三十三天器。論云。三十三天住在何處。頌曰

妙高頂八萬　三十三天居　四角有四峯　金剛手所住
中宮名善見　周萬踰繕那　高一半金城　雜飾地柔軟
中有殊勝殿　周千踰繕那　外四苑莊嚴　衆車麤雜喜
妙地居四方　相去各二千　東北圓生樹　西南善法堂

釋曰。三十三天住蘇迷盧頂。其頂四面各八十千。與下四邊其量無別。山頂四角各有一峯。其量縱廣各有五百。有藥叉神名金剛手。於中止住守護諸天。於山頂中有宮名善見。見者稱善也。四面二千半。周萬踰繕那。金城量高一踰繕那半。其地平坦。亦眞金所成。倶用百一雜寶

嚴飾。地觸柔軟。如妬羅綿。於踐蹋時隨足高下。是天帝釋所都大城。於其城中有殊勝殿。種種妙寶具足莊嚴。蔽餘天宮。故名殊勝。面二百五十。周千踰繕那。是謂城中諸可愛事。城外四面四苑莊嚴。是彼諸天共遊戲處。一衆車苑。隨天福力種種車現。二麤惡苑。天欲戰時甲仗等現。三雜林苑。諸天入中所翫皆同。俱生勝喜。四喜林苑。極妙境界並集此苑。觀此無厭。名喜林也。此爲外飾。莊嚴大城。四苑四邊有四妙地。中間各去苑二十踰繕那。是彼諸天勝遊戲處。諸天於彼捔指爭勝歡娛。城外東北有圓生樹。是三十三天受欲樂勝所也。其圓生樹盤根深廣五十踰繕那。聳幹上昇枝條傍布。高廣量等百踰繕那。挺葉開華妙香芬馥。順風熏滿百踰繕那。若逆風時猶遍五十。問。順風可爾。云何逆風熏。答。有餘師言。香無逆熏義。依不越樹界故說逆風熏。解云。言不越樹界者。謂圓生樹身去外枝條四面各五十踰繕那。如在樹下近東邊立去彼樹身五十踰繕那。若有東風名爲逆熏。此人由在樹界內而得頭上枝條等香。故言不越樹界也。論主正解云。理實

圓生有如是德。所流香氣能逆風熏。雖天和風力所壅遏。然能相續流趣餘方。漸劣漸微近處便歇。非能遠至如順風熏。（五十踰繕那名近處百踰繕那名遠處也。）又論云。如是華香爲依自地隨風相續轉趣餘方。爲但熏風別生香氣。（問也。自地者華也。香依華發。說華爲自地也。）此義無定。諸軌範師於此二問俱許無失。（答也。依華依風名二問也。）若爾者何故薄伽梵（此云功德聚也。）言。華香不能逆風熏。根莖等香亦復爾。善士功德香芬馥。逆風流美遍諸方。（解云。引此頌意。難論主許華香能逆風熏也。修善之士名滿四方能逆風熏。華香不爾也。）論主通云。據人間香故作是說。以世共了無如是能。若據天香能逆熏也。化地部經說。此香氣順風熏滿百踰繕那。若無風時唯遍五十。城西南角有善法堂。三十三天於彼評論如法不如法事。（冠註論本第十一二十ノ二左）

【暉鈔】卷中之本（四十六右）　妙高頂八萬者。有餘師說。山頂圍四邊共有八萬。以下四層級一面共有六萬。四面共二十四萬。故餘圍共有八萬。此師前言傍出十六千等。約頂向下望言出也。若疏取一面八萬

師義。即層級出山體外也。倶用百一雜寶嚴飾者。一寶一色名百一也。隨天福力種種車現者。若天子遊戲時隨福勝劣車現。於此苑中有四輪寶。若有人行上品十善合作輪王。隨彼是四輪王中何者苑中四輪即應之。挺葉開華者。挺即出葉。故法華經云如天樹王等。諸天於彼所須皆得正義。百與五十踰繕那皆是出樹枝外取也。自地者。自地所依爲義。香依四大中地大。或即華是所依名地也。梵云釋迦提婆因達羅。釋迦此云能。提婆此云天。因達羅此云帝。正言能天帝。諸處釋提桓因。或天帝釋皆訛略。過去名憍尸迦。此云蠒兒。本是下人孝養即主。彼後從郎常修道路。時有傍人白王。此人修路引外國兵馬。王令放象欲踏死。象却踏傍人死。王知善人。與一縣合共三十二人同修善事。死後同生三十三天。三十三天名如正法念經二十五說。有三夫人。一圓生二善法。此二與帝釋同修善同得生天。三設支夫人。不修善業。死墮畜生趣。帝釋觀見與受八戒。後破戒死。生爲修羅女。修羅嫁聚法。集諸修羅行立。帝釋先說夢。與此女我最在下。作老修羅女。老修羅女執一莖華巡行至下。便與此老修羅女便爲夫妻。因此常與鬪戰也。

【麟記】論本第十一左七　其頂四面各八十千者。此上下量等中腰細也。論云。有師說。周八十千。別說四邊各唯二萬。新云。此師意下廣上狹。頌中但言八萬。即通兩釋。或徑或周。以山徑八萬爲正。准此言徑八萬即形如方座。若言周八萬則形如穀聚。藥叉者。是暴惡義。或云勇健。或云有福神。通天鬼傍生類。金剛手者。以手執金剛杖名金剛手。百一雜寶者。舊云。一百箇一名爲百一。如言百味飲食。有餘云。百者凡義。謂凡是諸物皆一故言百一。妬羅綿者。昔云兜羅綿也。此是樹名。綿從樹出。因以爲名。如言柳絮。又正理云。城有千門。嚴飾莊麗。有五百青衣藥叉勇健

端嚴。各着鎧執仗防守城門。三雜林苑者。諸天入中所翫。皆同倶生勝喜。又婆沙云。如是四苑形皆正方。一一周千踰繕那量。八功德水盈其中。隨欲妙華寶舟好鳥一一奇麗種種莊嚴。芬馥。方言。芬和也。謂香和調也。馥。字林云。香氣也。

從此第三明空居天。論云。如是已辯三十三天所居外器。餘有色天衆所住器云何。頌曰。

此上有色天　住依空宮殿

釋曰。此前所說三十三天上有色諸天住依空宮殿。謂夜摩天。都史多天。樂變化天。他化自在天。及梵衆天等十六處。並前天合成二十二天。名有色天。二十住空居也。(冠註論本第十一 二十六左)

【暉鈔】卷中之本 四十七左　及梵衆等十六天此上疏引論文。即是合成二十二。下即疏家遺失論文。有人相傳言。論錯非理。本論言梵等十六天已前結空居天。次下即言並前合成二十二天。皆依外器。即明欲色界天。有外器爲所依也。

【麟記】論本第十一 右八　言有色天者。謂簡無色故言有色。此通欲界四天。非唯色界也。言十六處者。依有宗說。合二十二天至住空居者。此言有失。以初二天非住空故。准此論但言二十二天皆依

外器。義乃無違。以四無色天無外器故。通簡之故。正理云。有說。空中密雲彌布如地爲彼宮殿所依。外器世間至色究竟天。上無色故不可施設。

從此大文第二便顯餘義。一明六天行婬。二明諸天初生。三明欲生樂生也。此即第一明六天行婬。論云。如是所說諸天衆中六天行婬云何。頌曰。

六受欲交抱　執手笑視婬

釋曰。唯六欲天受妙欲境。於中初二依地居天。形交成婬與人無別。然風氣泄熱惱便除。非如人間有餘不淨。夜摩天衆纔抱成婬。都史多天但由執手。樂變化天唯相向笑。他化自在天相視成婬。隨彼諸天男女膝上有童男童女欻然化生。即說爲彼天所生男女也。（冠註論本第十一 二十六左）

【暉鈔】　闕之。

【麟記】論本十一 八左 執手笑視婬者。論云。毘婆沙師作如是釋。六天皆形相交成婬。世施設中說。相

抱等者但爲顯彼時量差別。以上諸天欲境轉妙貪心轉重故使之然。

從此第二明諸天初生。論云。初生天衆身量云何。頌曰。

初如五至十　色圓滿有衣

釋曰。且六欲天初生如次。如五六七八九十歲人。生已身形速得圓滿。色界天衆於初生時身量周圓具妙衣服。一切天衆皆作聖言。謂彼言詞同中印度。（冠註論本第十一二十七右）

【暉鈔】卷中之本四十七左　同中印度者。印度是月名。月有千名。此是一號。婆沙一百七十三前四天與人合立者。以四天與人同煩惱分麤合立。後二細別立。

【麟記】論本第十一八右　言印度者。唐言月。月有多名。斯爲一號。如前已說。又正理釋西天語云。然不由學自解典語。色圓滿者。如梵衆天初生半踰繕那。乃至色究竟天初生萬六千踰繕那。

從此第三明欲生樂生。論云。欲生樂生差別。云何應知。頌曰。

欲生三人天　樂生三九處

釋曰。欲生三者。第一依受如生現前欲境故。謂諸有情樂受現前諸

妙欲境。彼於如是現前欲境中自在而轉。謂全人趣及下四天。第二依受如樂自化妙欲境故。有諸有情樂受自化諸妙欲境。彼於自化妙欲境中自在而轉。謂唯第五樂變化天。第三依受如樂他化妙欲境故。謂諸有情樂受他化諸妙欲境。彼於他化妙欲境中自在而轉。謂唯第六他化自在天。此上人天受欲界生是謂欲生差別三種。樂生三者。三靜慮中於九處生受三種樂。於初靜慮三處生中受一種樂。謂離生喜樂。離欲界惡生喜樂故。第二靜慮三處生中受一種樂。名定生喜樂。從初禪定生二禪喜樂故。第三靜慮三處生中受一種樂。名離喜妙樂。離第二禪喜生第三禪樂。離喜之樂名離喜妙樂。初靜慮中長時安住離生喜樂。第二靜慮長時離苦。第三靜慮長時受樂。故名樂生。（冠註論本第十一 二十七左）

【暉鈔】卷中之本 四十七左 有說。四天及人受宿業所感隨本所生現前欲境。第五用自化境。第六用第五天所化境。故別立也。第六天化資具不化男女。化男女須起染心。化心無染。又不化有情也。長時

離苦者。一以近欲界有苦地。二以自地有三識為苦依。初定不言離苦。第二定樂准此論。或喜名樂。或輕安名樂。或樂受名樂也。第四定已上無喜樂。故不立也。問。中間禪無喜樂。如何亦號樂生天。答。正理云。大梵王身既喜樂現行。亦號樂生天無失也。

【麟記】論本第十一左八　言依受如生等者。謂稱生等境自在而受也。樂受現前諸妙欲境者。謂樂受用宿業所感隨本所生現前欲境非別化作也。彼於如是至自在而轉者。謂隨現欲境中有勢力故自在而轉也。樂受他化諸妙欲境者。有諸有情造異類業受用境時。令劣天子化種種色聲香味觸境。於中受用自在而轉。言欲生者。章云。受欲界生故同集異門足釋。又解。受用五欲境生故名欲生。婆沙問云。何故人及前四天衆合立欲生。後二天衆各別建立。答。人及前四天煩惱麤。後二天煩惱細。又說。人及四天同受自然生境故合為一。後二獨樂受用自他化境故各立一。樂生九處者。謂下三靜慮各有三天故成九處。言第二靜慮長時離苦者。謂至彼無三識為苦依故。初靜慮雖現無苦。仍有苦依三識故未得此名。又第四禪已上無樂受故不名樂生。論主難云。靜慮中間都無喜樂。應思何故亦號樂生天。正理通云。大梵既有喜樂現行名樂生天。亦無有失。

從此第二明天器近遠。於中有二。一明天器近遠。二明下天見上。且初明天器近遠者。論云。所說諸天二十二處上下相去。其量云何。頌曰。

如彼去下量　去上數亦然

釋曰。隨從何天去下海量。彼上所至與去下同。謂妙高山從第四層級去下大海四萬踰繕那。是四天王天。從彼上去三十三天。亦如彼天去下海量。如三十三天去下大海。上去夜摩天其量亦復爾。如是乃至如善見天去下大海踰繕那量。從彼上至色究竟天。亦與彼天去下大海量等。從此向上復無所居。此處最高名色究竟天。（冠註論本第十一 二十九右）

【暉鈔】 闕之。

【麟記】論本第十一 九左 言最高名色究竟者。有餘師說。彼名礙究竟天。彼謂礙名目積集色。至彼礙盡得究竟名。

從此第二明下見上天。論云。於下天處生昇見上不。頌曰。

離通力依他　下無昇見上

釋曰。三十三天由自通力能從本處昇夜摩天。或復依他。謂得通者及上天者接往夜摩天。所餘諸天昇上例爾。若來若至下見上天。然下眼不能覩上界地。非境界故。如不覺彼觸。因此義便復明天量。有餘

師説。夜摩等四依處量同妙高山頂。有餘師説。上倍倍增。有餘師説。初靜慮量等一四大洲。第二靜慮等小千界。第三靜慮等中千界。第四靜慮等大千界。（冠註論本第十一二十九左）

【暉鈔】卷中之本四十八右　論言三十三天由自通力能昇上天。義准四天王天亦由通力能見三十三天也。若來。即上天向下來。若至。即下天往上。以同地故。皆自天眼即能見也。然下眼不能覩上界地者。下界地身往上界。界地別故。欲界眼根不見上地色。身根不覺彼上觸境。疏釋云。非境界故。須發天眼方見上地色。上地身若下地來。下地麤色即不能礙。以色細故。要別作欲界化四塵爲依地籠此身。下眼方得見。如梵王請佛衆人見也。等一四列者。如金輪徑十二洛叉等也。

【麟記】論本第十一九左　下天昇上總由三緣。一自得神通力。二依他通。三上天接往。言下見上天者。以同一地一繫縛故。言若來若至者。來謂上來下。至謂下往上。言下眼不見上界地者。此約異地説。以別地繫麤細異故。若從上來下地時非自身來。要作下地化方得見下。若自身來下眼不見。大衆部説。彼下地天隨樂亦能見上地色。如生此界下見上天應知。言得通者。謂修得通。非生得也。明天量中。論文具有四説。今章但有三説。准此初二説是欲界天。後一是色界天。更一説云。下三靜慮如次量等小中大千。第四靜慮量無邊際。准頌文中。初説梵世等四列爲正。

從此大文第二總辯大千。論云。齊何量説小中大千。頌曰。

四大洲日月　蘇迷盧欲天　梵世各一千　名一小千界
此小千千倍　說名一中千　此千倍大千　皆同一成壞

釋曰。千四大洲乃至千梵世。如是總說爲一小千。千倍小千名一中千界。千中千界總名大千界。如是大千同成同壞。（冠註論本第十一左三十）

【暉鈔】卷中之本四十八左　中千卽有十億日月四大洲等。大千卽萬億日月四大洲等。諸經言百億日月等者。以百名同言百億。令有一百百億卽是萬億。法華經云又諸萬億國轉輪聖王至。一四天下一箇輪王。旣言萬億國轉輪聖王至。又前文言中有放光照百俱胝。卽一俱胝有百億。百俱胝卽有萬億日月等。以同依風輪故同成壞也。

【麟記】論本第十一右十　如是總說爲一小千者。正理云。此中小千唯擧梵世。故少光等非小千攝。積小千等爲中大千。故中大千亦不攝彼。又言。小者是卑下義。以除上故。如截角牛。

從此大文第二明能居量。一明身量。二明壽量。且初明身量者。論云。如外器量別。身量亦別耶。亦別。云何。頌曰。

贍部洲人量　三肘半四肘　東西北洲人　倍倍增如次
欲天俱盧舍　四分一一增　色天踰繕那　初四增半半

此上增倍倍　唯無雲減三

釋曰。贍部洲人身多分長三肘半。於中少分有長四肘。東勝身洲人身長八肘。西牛貨洲人身長十六肘。北俱盧洲人身長三十二肘。欲界六天最下身量一俱盧舍四分之一。如是後後一一分增。至第六天一俱盧舍半。色天身量。初梵衆天半踰繕那。梵輔全一。大梵一半。少光二全。此上諸天皆增倍倍。唯無雲天減三踰繕那。謂徧淨天六十四踰繕那。至無雲天於一倍中減三踰繕那。計成一百二十五踰繕那也。所以無雲減三者。從第三禪變易受生入第四禪不變易受難故減三劫也。捨受名不變易受也。又解。謂順色究竟天一萬六千劫故減三劫。謂無雲天減三劫。已上倍倍增乃至色究竟增滿一萬六千踰繕那也。(冠註論本第十一二十右)

【暉鈔】卷中之本二十六右　疏云。從變易入不變易受難故者。不然。不變易定難得。身壽應更轉長。如何減三。今釋云。從變易定入不變易定。心不欣慕。心同時思即業。思業劣故。身壽皆減三也。

【麟記】論本第十一十右　南洲人長三肘半四肘。肘長一尺八寸。總計成六尺三寸或七尺二寸。一俱盧舍四分之一者。准此論明俱盧舍二里四分之一即半里也。言變易受者。三禪樂捨相參名變易受。四禪

唯捨名不變易受。言從第三禪變易受生入第四禪不變易受難故滅三劫者。新云。此言似倒也。既得難定。身壽應加。應言下變易受以樂欲心勝。由此造業引壽等勝。不變易受引欣心劣。由此造業引壽等減。

從此第二明壽量。一明善趣壽量。二明惡趣壽量。三明中夭不中夭。且善趣壽量者。論云。身量既殊。壽量亦別不。亦別。云何。頌曰。

北洲定千年　西東半半減　此洲壽不定　後十初難量
人間五十年　下天一晝夜　乘斯壽五百　上五倍倍增
色無晝夜殊　劫數等身量　無色初二萬　後後二二增
少光上下天　大全半爲劫

釋曰。北俱盧洲人定壽千歲。西牛貨洲人壽五百歲。東勝身洲人壽二百五十歲。南贍部洲人壽無定限。謂劫減位極壽十年。於劫初時人壽無量百千等數不能計量。已說人間壽量長短。要先建立天上晝夜方可計算天壽短長。天上云何建立晝夜。且人間五十年爲四天王天一晝一

夜。乘此晝夜三十日爲月。十二月爲年。彼壽五百歲。上五欲天漸倶增倍。謂人間百歲爲第二天一晝一夜。乘此晝夜成月及年。彼壽千歲夜摩等四隨如次人二四八百千六百歲爲一晝一夜。乘此晝夜成月及年。如次彼壽二四八千一萬六千歲。問。持雙已上日月幷無。諸天云何建立晝夜及光明事。答。依華開合建立晝夜。又依諸鳥鳴靜差別。或依天衆寤寐不同。依己自身光明成外光明事。色界諸天中無晝夜別。但約劫數知壽短長。彼壽短長與身量等。謂若身量半踰繕那壽量半劫。若彼身量一踰繕那壽量一劫。乃至身量長萬六千踰繕那壽量亦同萬六千劫。無色壽量從下如次二四六八萬大劫。謂空處二萬劫。識處四萬劫。無所有處六萬劫。非想非非想八萬大劫。應知。如上所說劫量少光已上大全爲劫。八十中劫爲一劫也。自此下諸天大半爲劫。四十中劫爲一劫也。由此理故。經說。大梵過梵輔天壽一劫半。謂以成住壞各二十中劫此六十中劫爲一劫半。故以大半四十中劫爲下三天所壽劫量。

言二三天一者梵衆梵輔大梵天也。（冠註論本第十一三十二右）

【暉鈔】卷中之本四十九右　於劫初時人壽無量百千等數者。准瑜伽論。八萬四千爲最上。此論但言無量也。謂以成住壞各共者。成劫初劫無梵王。壞劫最後無梵王。據實言卽合有五十八劫。今言六十者。據大數說也。

【麟記】論本第十一十左　依華開合者。彼有拘物陀華鉢特摩華。少光已上大全爲劫者。問。梵王望少光身量但狹半踰繕那。如何壽量懸隔爾許。舊云。身壽二量不可倶齊。爲順水風災故。少光已上大全爲劫。倍倍增也。新云。詳其壽量增減及身量等不同者。皆是生死法爾因果。此不可細求所以。如兩眼一眼及無足多足。

從此第二明惡趣壽量。論云。已說善趣壽量短長。惡趣壽云何。頌曰。

等活等上六　如次以欲天　壽爲一晝夜　壽量亦同彼

極熱半中劫　無間中劫全　傍生極一中　鬼月日五百

頞部陀壽量　如一婆訶麻　百年除一盡　後後倍二十

釋曰。四天王等六欲天壽。如其次第爲等活等六捺落迦一晝一夜。壽量如次亦同彼天。謂四天王天壽量五百歲。於等活地獄爲一晝一夜。

乘此晝夜成月及年。以如是年彼等活地獄壽五百歲。乃至他化天壽萬六千歲。於第六炎熱地獄爲一晝一夜。乘此晝夜成月及年。彼炎熱地獄壽一萬六千歲。第七極熱地獄壽半中劫。無間地獄壽一中劫。二十增減爲一中劫也。傍生壽量多無定限。若壽量極長亦一中劫。故世尊言。大龍有八。謂難陀等。皆住一劫。而能持大地。鬼以人間一月爲一日。乘此成月歲。彼壽五百年。問。寒捺落迦壽量云何。答。世尊寄喩顯彼壽言。如此人間佉黎二十成摩揭陀一麻婆訶量。佉黎此云斛。婆訶此云篅。麻者巨勝也。一麻婆訶量者意取婆訶量。不欲取麻。如言一穀篅。頌言婆訶麻者。意欲取麻。如言一篅穀。有置巨勝平滿其中。設復有人百年除一。如是巨勝易有盡期。生頞部陀壽量難盡。此二十倍爲第二寒地獄壽。如是後後二十倍增。是謂八寒地獄等壽量。

（冠註論本第十一 十四右）

【暉鈔】卷中之本 九右　倍二十者。第二二十一量。第三四十一量。有釋。取二十石非理。爲論言

指前一婆訶後後言倍二十也。無間中劫全者。取一增一減爲中劫。此疏言二十增減。不知有何憑。准立世經。如調達第九減劫人壽百歲時入地獄。至第十減劫人壽四萬歲時生人中。得獨覺果。由不滿一增減也。摩揭陀者。此云無毒害。中天國名也。

【麟記】論本第十一（十一右）　言二十增減爲一中者。有說。但一增減也。彼以論文言八十中劫爲大劫故。言故言一增減爲一中也。大龍有八謂難陀等者。難陀。此云喜。餘七謂跋難陀沙伽羅等。如法華經列。言摩揭陀國一麻婆訶者。謂彼國盛麻。篅多受二十斛。篅。音船。或云篅。徒損反。佉梨。此云斛十斗也。新云。受斛器名。如此間計斗斛等名。准此說非正名斛也。言互勝者。謂烏麻也。

從此第三明中夭不中夭。論云。此諸壽量有中夭耶。頌曰。

諸處有中夭　除北俱盧洲

釋曰。諸處壽量皆有中夭。除北俱盧洲。彼定千歲。此言諸處有中夭者約處所說。非別有情。以諸處中有別有情不中夭故。謂住覩史多天一生所繫菩薩。及最後有菩薩。謂王宮身也。佛記。樹提伽也。佛使。耆婆也。隨信隨法行。見道聖人。菩薩輪王母懷彼二胎時。此等亦無中夭。（冠註論本第十一（二十五右））

【暉鈔】卷中之本（九左）　諸處者。三界五趣皆有中夭。北洲全無中夭。諸處有別有情不中夭者。如慈氏及釋迦菩薩。佛記西國長者婦。外道記女。佛記爲男。外道菓中着藥與母。食死火葬。佛令祇婆

入火抱取樹提伽。長者問佛。何不記母。佛言。汝不問母也。樹提伽此言火珠。又菩薩不中夭。據未成佛。成佛容中夭也。正在見道中二聖人亦不中夭也。

【麟記】論本第十一左十一 一生所繫菩薩者。謂無始來爲多生死之所繫縛。今唯一生所繫未得成佛。故云一生所繫菩薩。此定壽量四千歲。必無中夭。最後有菩薩者。謂於此身定得無學名最後有。若未證果必無中夭。成無學亦有中夭。樹提伽者。昔梵音訛也。今云彈底憍迦。此云有明。耆婆者。亦是昔名。或云耆域等皆訛也。今云時縛迦。此云活命。涅槃經說。外道記人所生爲女。佛記爲男。母死火焚。佛令活命入火抱取有明。俱不爲害。故無中夭。信法行者。即見道鈍利二種聖人。以時速疾故無中夭。懷彼二胎時者。即菩薩母懷菩薩時。輪王母懷輪王時。以所懷子勝故母亦無中夭。准前論文輪王亦無中夭。此略不言。

俱舍論頌疏　論本第十一　終

俱舍論頌疏　論本第十二

中大雲寺沙門圓暉述

分別世間品第三之五

從此大文第三明三分齊。就中一明三極少。二明三量。且初明三極少。

者。論云。如是已約踰繕那等。辯器世間身量差別。約年等辯壽量有殊。二量不同未說。今說此二建立無不依名。前二及名未詳極少。今應先辯三極少量。頌曰。

極微字刹那　色名時極少

釋曰。上句標。下句釋也。極微者是色極少也。刹那者是時極少也。一字者是名極少也。謂分析諸色至一極微爲色極少。分析諸名至於一字爲名極少。分析於時至一刹那爲時極少。一字名者如說瞿名。問。何名刹那。答。衆緣和合法得自體頃。又解。或有動法行度一極微。又解。對法諸師作如是說。由如壯士一度疾彈指頃六十五刹那。如是名爲一刹那量。（冠註論本第十二初右）

【暉鈔】卷中本五十一右　論本第十二。大乘麤色實有。以頓變故。析至不可析假立極微。經部細色實有。麤色是假。以聚細色成麤色故也。有部麤細二色皆實有。勝論外道麤細色皆實有是常。世界壞即散作極微不減。世界成即二二合生子即不增也。謂分析諸色者。有部雖無獨住極微。以慧分析。即是大乘析色明空觀。從三十二字析至一字名字極少。一須臾至一刹那名時極少。雖一字有

多極微。今取不相應中字。不取黑書字。以是色故不取也。衆緣和合法得自體頃者。是經部。過未無體。現在有體。現在因緣合有爲法生。得自體即滅。即是有部取果異名也。又有動法度一極微名一刹那者。據實即當處生即當處滅。相續位中假說動也。若度一極微名一刹那。即刹那有前後。若度一極微名一刹那。即極微有分量。此論念與刹那無別。世間行速疾無過日月。四天下徑有十二億。計日月一日夜行略有三百萬踰繕那。一日夜共有六百四十八萬刹那。日月行一步名一刹那。尙一日月行三百萬踰繕那不盡。何況度一極微名一刹那。一度彈指有六十五刹那。一指面豈即有六十五極微。更有多釋。皆不殊前意。亦皆不免前難。又准仁王經。一念有九十刹那。一刹那有九百生滅。如何此論言刹那細耶。答。有二說。一云。日夜刹那是算數法。如尺寸等常定。生滅刹那佛出世方有。此論刹那即是算數法。不可將生滅難也。二云。日夜刹那數量時之通名。既時極少名一刹那。時多名一刧。刧既有大小。刹那亦更有細分故。一刹那有九百生滅也。

倶舍頌疏記　論本第十二

富春沙門遁麟述

【麟記】論本第十二右初

析色至極微者。若准大乘無實。但是覺慧分析以爲極微。此是識心所變化。非積小成。若小乘中說有實極微以成大色。析其大色至不可析名一極微。分析名至一字者。如從三十二字名析至一字名。是名極少。釋刹那中有三說。初二經部。後一有部。初言法得自體頃者。謂法先無體。是未來得成體。已滅是過去得體。未滅之頃名現在。即此得體未滅之頃名一刹那。謂是一念之頃。即便落謝更不經停名一刹那。言動法度一極微者。極微是處量促。刹那是時量促。若度一極微已上名

刹那。刹那量即有前後。非時極少。若度一極微經二刹那。即極微量有分析。非色極小。由此故說度一極微名一刹那。此以諸法實無行動。相續道中假說動故。新破此解。煩而不述也。婆沙有多喩。有云。實刹那量世尊不說。新有二釋。初云。日夜刹那與此刹那不同。日夜刹那唯是算數之法。如此秤尺寸等量極少之名。無佛法時此數常定。此生滅刹那即是諸法生滅之量。云云。

從此第二明二量。就中一明踰繕那等。二明年等。且初辯踰繕那等者。論云。已知三極少。前二量云何。總問。今且辯前踰繕那等。別答。頌曰。

極微微金水　兎羊牛隙塵
蟣虱麥指節　後後增七倍
二十四指肘　四肘爲弓量
五百俱盧舍　此八踰繕那

釋曰。極微爲初指節爲後。應知後後皆七倍增。謂七極微爲一微量。積微至七爲一金塵。一解云。塵向金上住。又解。塵透金過至下。水塵皆有兩釋也。積七金塵爲一水塵。積七水塵爲一兎毛塵。一解兎毛上住。一解量如兎毛端。乃至牛毛皆有兩釋。積七兎毛塵爲一羊毛塵。積七羊毛塵爲一牛毛塵。積七牛毛塵爲一隙遊塵。積七隙遊塵爲一蟣。積七蟣爲一虱。積七虱爲一

麨麥。積七麨麥爲一指節。三節爲一指。二十四指橫布爲一肘。竪積四肘爲一弓。謂尋。竪積五百弓爲一倶盧舍。一倶盧舍者。計是從村至阿練若。此云無喧雜。中間道量。說八倶盧舍爲一踰繕那。解云。計一肘有一尺八寸。一弓有七尺二寸。乃至一倶盧舍計有二里。一踰繕那有十六里。（冠註論本第十二左二）

【暉鈔】卷中本五下二右　梵云阿兎。此云微。天眼輪王眼見也。兎毛細滑塵小。羊毛潤膩塵即大。極微相積皆言七者。四面上下六方兼心成七也。雜心名銅塵。古論名鐵塵。應知銅鐵金銀皆名金也。一肘一尺八寸。計五百弓有三千六百尺。五尺爲步。三百六十步爲里。成一倶盧舍。一倶盧舍二里也。踰繕那。舊云由旬。此云合也。應也。謂法合應爾。四十八里也。亦取十六里。從極微積成。若四十或八十里。元本積成也。

【麟記】論本第十二左初　言極微者。正理云。極謂色中析至究竟。微謂唯是慧眼所見。故極微言顯微極義。言爲一微量者。微顯細聚。眼見色中最微細也。應知但天眼輪王後身菩薩眼所見耳。金塵者。金銀銅鍱總名爲金。由此雜心名銅塵。舊倶舍云鍱塵。皆局一邊也。兎毛。細滑故塵小。羊牛潤膩故塵大。此等諸位皆七所成者。以對向六方及中故須七也。三節爲指者。是竪三節。如今人指。所以頌中不說者。論云。三節爲指。世所極成。故於頌中不別分別。一弓有七尺二寸者。新云。古時一弓有八尺者。即是古尋。今時有六尺已下。即六尺步法。今時多用五尺步法也。倶盧舍。昔云拘盧舍等。皆梵音不同也。此云鳴喚。謂牛鳴聲聞也。無喧雜者。謂是人牛聲不及處。疏

註二里者。五尺爲步。三百六十步爲里。故成二里。或曰。一鼓聲聞。計爲五里。與此論不同。踰繕那十六里者。西域記云。由繕那。昔云由旬。又云踰闍那。又云由延。皆訛也。自古聖王一日軍行。舊傳四十里。今印度國俗。乃三十里。聖教所載。唯十六里矣。

從此第二明年等。就中一明剎那至年。二明諸劫數。且初明剎那至年者。論云。如是已說踰繕那等。今當辯彼年等量別。頌曰。

百二十剎那　爲怛剎那量　臘縛此六十　此三十須臾
此三十晝夜　三十晝夜月　十二月爲年　於中半減夜

釋曰。剎那百二十爲一怛剎那。六十怛剎那爲一臘縛。三十臘縛爲一牟呼栗多。三十牟呼栗多爲一晝夜。三十晝夜爲一月。十二月爲一年。於一年中分爲三際。謂寒熱雨。各有四月。十二月中六月減夜。以一年內夜總減六。云何如是。故有頌曰。寒熱雨際中。一月半已度。於所餘半月。智者知夜減。（冠註論本第十二右四）

【暉鈔】卷中本（五十二左）　一臘縛有七千二百剎那。一須臾有二十一萬六千剎那。一晝夜有六百四十八萬剎

那。

【麟記】論本第十二左　六十怛剎那爲一臘縛者。此計有七千二百剎那。三十臘縛爲一牟呼栗多者。即有二十一萬六千剎那也。三十牟呼栗多爲一晝夜者。總有六百四十八萬剎那。牟呼栗多。此云須臾。言六月減夜者。但言夜減兼亦攝晝。十二月中六月減夜。即同此方六月小也。言一月半已度者。謂三際中各前一月及第二月前半已度也。所餘半月。即是第二月後半也。各於此時缺一日也。然此方亦有併小併大及閏月等。舊云。所以不廣明諸曆數者。恐廣躭著邪命自活故。

從此第二明劫量。就中一明劫數。二明劫中人。三明劫中災。且初明劫數者。論云。如是已辨剎那至年。劫量不同。今次當辯。頌曰。

　應知有四劫　謂壞成中大　壞從獄不生　至外器都盡
　成劫從風起　至地獄初生　中劫從無量　減至壽唯十
　次增減十八　後增至八萬　如是成已住　名中二十劫
　成壞壞已空　時皆等住劫　八十中大劫　大劫三無數

釋曰。劫有四種。一壞。二成。三中。四大。言壞劫者。謂從地獄有情不復更生至外器都盡。壞有二種。一趣壞。二界壞。復有二種。一有情

壞。二外器壞。謂此世間過於二十中劫住已。從此復有等住二十壞劫便至。若時地獄有情命終無復新生。爲壞劫始。乃至地獄無一有情爾時名爲地獄已壞。諸有地獄定受業者。業力引置他方獄中。由此准知傍生鬼趣。然各先壞本處住者。人天雜居者與人天同壞。若時人趣此洲一人無師法然得初靜慮。從靜慮起唱如是言。離生喜樂甚樂甚靜。餘人聞已皆入靜慮。命終幷得生梵世中。乃至此洲有情都盡是名已壞贍部洲人。東西二洲例此應說。北洲命盡生欲界天。由彼無能入定離欲（北洲不入定顯不生色界也）。乃至人趣無一有情。爾時名爲人趣已壞。若時天趣四大王天隨一法然得初靜慮。乃至並得生梵世中。爾時四天有情都盡是名已壞四大王天。餘五欲天例此應說。乃至欲界無一有情名欲界中有情已壞。若時梵世隨一有情無師法然得二靜慮。從定起已唱如是言。定生喜樂甚樂甚靜。餘天聞已皆入彼靜慮。命終並得生極光淨天。乃至梵世有情都盡是名已壞有

情世間。唯器世間空曠而住。餘十方界一切有情感此三千大千世界業盡。於此漸有七日輪現。諸海乾竭衆山洞然。洲渚三輪並從焚燎。風吹猛焰燒上天宮。乃至梵宮無遺灰燼。自地火焰燒自地宮。非他地災能壞他地。由相引起故作是言。下火風飄焚燒上地。謂欲界火猛炎上昇爲緣引生色界火炎。餘災亦爾。如是始有地獄漸壞。乃至器盡總名壞劫（已上釋初行頌）。所言成劫。謂從風起乃至地獄始有情生。謂此世間災所壞已二十中劫唯有虛空。過此長時。次應復有等住二十成劫便至。一切有情業增上力空中漸有微細風生。是器世間將成前相。風漸增盛成立如前所說風輪水金輪等。然初成立大梵王宮乃至夜摩天宮。後起風輪等。是謂成立外器世間。初一有情極光淨沒生大梵處爲大梵王。後諸有情亦從彼沒有生梵輔。有生梵衆。有生他化自在天宮。漸漸下生乃至人趣北倶盧西牛貨東勝身南贍部。後生餓鬼傍生地獄。法爾後壞必最先成。若初一有情生無間獄。二十中成劫

應知已滿。已上釋第五第六句。此後復有二十中劫名成已住。次第而起。謂從風起造器世間。乃至後時有情漸住。此洲人壽經無量歲至住劫初。壽方漸減。從無量劫減至極十年。卽名爲初一住中劫。已上釋第七第八句。此後十八皆有增減。謂從十歲增至八萬。從八萬歲減至十年。第二十劫唯增無減。謂從十歲增至八萬名第二十劫。一切劫增無過八萬。一切劫減唯極十年。十八劫中一增一減時量方等初減後增。故二十劫時量皆等。此總名爲成已住劫。已上釋第九乃至第十二句也。所餘成壞及壞已空。雖無增減二十差別。然由時量與住劫同。准住各成二十中劫。已上釋第十三第十四句也。成中初劫起器世間。後十九中有情漸住。壞中後劫壞器世間。前十九劫有情漸捨。如是所說成住壞空各二十中劫。積成八十。總此八十成大劫量。問。劫性是何。答。謂唯五蘊。時無別體依法而立也。（冠註論本第十二左四）

【暉鈔】卷中本五十二左　地獄不定受業者。容順後受或不受也。頌言謂壞成中大。舉壞攝空。舉成攝住

也。七日輪現者。准劫章頌云。日加四倍於常熱。溝池乾涸草木燋。二三日出江河竭。四五日出海泉盡。六七與時。山石融。爾時大地並燄輝。三千世界猛燄聚。更有多釋。下引婆沙自知。與人天同壞者。鬼傍生及人天身中麤與傍生同先壞。有說。鬼傍生在人中與人同壞也。問。欲界色麤。色界色細。如何言風吹猛燄燒上天宮。答。自地火燄燒自地宮下答也。問。色界無日。誰爲緣引生火。答。由衆生業力隨處引生火也。乃至梵宮無遺灰燼者。破外道世界壞極微散居虛空不滅。成即二二合生子等。若壞時無極微者。成時積何物成。有部積風成。風爲種子。准智度論。劫火無灰。隨火起即盡。若有灰者灰是何物能壞。若有灰者。即壞劫義不成也。等住者。成壞劫無有情。設有未增減。空劫全無。此三劫時歲等住劫有二十中劫。或約中辯住。麤量名中劫。空劫無體不論也。成世界從上成下。至夜摩天即下成風輪九山四洲。方成四天王天三十三天。中心合成。若有情世間即從上成至下。地獄有有情名住劫初。大乘成有情同外器故。文言。先一有情生忉利。成劫終滿住劫初也。成劫時人壽無量。住劫初即有八萬歲。已後增亦即至八萬。大乘即至八萬四千歲。時量方等初減後增者。二十中劫初劫衆生業勝難減。第二十劫衆生業劣難增。時量即敵中間十八劫一增一減也。此論不論幾歲減一年及增。相傳百年減一至十歲。增亦百年增一年。大乘減同此。增即云。從是子年倍父壽。還登八萬四千歲也。成中初劫起器世間等者。此論說十九劫壞有情。一劫壞外器。成即十九劫成有情。一劫成外器。立世經云。十劫成有情。十劫成外器。壞劫准此。此論約第二成劫即有大梵王。言十九成有情。一劫成外器。壞准此釋。立世經即約大梵王獨住更經九劫。後方有梵輔等天。大梵獨一攝入器世間故。言十劫成有情也。成外器有情別者。外器

共業易故一劫成。有情別業難故十九劫成。壞准此說也。梵云劫波。此云時分。欲色界即五蘊。
無色界即四蘊爲體。空劫即以二蘊。以晝夜不離五蘊生滅故。五蘊爲體也。
【麟記】論本第十二右三　壞有二壞者。此有兩重二種。一壞有情中分二。即界與趣。二有情與器分
二。故總爲四也。言等住二十壞劫者。謂壞劫中無刀兵等別。但與住劫時等名等住劫。成空等劫
皆准此說。業力引置他方獄中者。謂此界中若不定業者容後時受。或全不受。若定業者他方受
也。新云。壞他獄時不越中劫。應知釋趣壞中先釋地獄次釋畜鬼次釋人趣後釋天趣。言各先
壞本處住者。鬼本住處即此洲下五百踰繕那。傍生在大海底。新云。先壞畜生後壞鬼趣。正理又云。
由此准知。壞傍生鬼趣時。人身內無諸蟲。與佛身同。傍生先壞故。正理云。評此說爲善。與此
論不同。北洲命盡生欲界天者。正理云。北洲命盡生欲界天。由彼鈍根無離欲故。生欲界天已。
靜慮現前轉得勝依方能離欲。餘災亦爾者。謂水風災壞次第與火災同。言初成梵宮乃至後起風輪者
謂夜摩等已上是空居故從上來下。忉利天等是地居故從風輪先成。初一有情極光淨沒者。謂是第二
禪第三天沒來。彼天火災不壞故。理實少光無量光天下生梵世。蓋亦無差。從十歲增至八萬者。若
准劫章。子年倍父增。即父十歲子便二十。今此不言增量。或不同彼。言二十劫時量皆等者。問。
旣初唯減無增。後唯增無減。如何得皆等中間劫耶。舊解云。住中初劫福最勝故。應合受用上
妙境界。故減時遲。從第二劫已去其福微薄。上稍遲下時疾。以上時境勝由福薄故不合受用故
上時遲。下時境劣由薄福應合受用。故下時疾。如是乃至第十九劫福漸漸薄。上時極遲下時極
疾。至第二十劫福最薄故。上時極遲。故初後劫等中十八。又解。壽未減時是成劫攝。從無量歲

初減已去方名住劫。第二十劫上至八萬。多時經停故。初後等中十八。言後十九劫有情漸住者。謂由有情業不同故。不得一時成。故用十九劫。器是共業故。但一劫也。壞劫翻此可知。然准此文。梵王唯壽五十八劫。謂成壞劫各除一故。而言六十者約大數說。或成劫圓梵王即住。壞劫臨至上界梵王方去。故滿六十。非要具受。時無別體者。不同外道餘宗別有方時也。故婆沙云。劫體是何。有說。是色。如是說者。晝夜等位無不皆是五蘊生滅。以此成劫。劫體亦然。劫既通三界時分。故用四蘊五蘊爲體。若空劫即以二蘊爲性。問。空劫既言乃至極微亦無。餘在何爲色蘊。解云。前言無極微。約壞外器。不約虛空。故無相違也。婆沙又云。劫是何義。答。分別時分故名爲劫。謂分別刹那臘縛乃至年等。以成於劫。以劫是時分中極故。得總名。

問。經說三劫阿僧祇耶。此云無數。積何劫成三劫無數。答。累前大劫爲十百千。乃至積成三劫無數。問。既稱無數。何復言三劫。答。非無數言顯不可數。解脫經說六十數中。阿僧祇耶是第五十二數。問。云何六十。答。如彼經言。有一無餘數始爲一。十一爲十。十十爲百。十百爲千。十千爲萬。十萬爲洛叉。十洛叉爲度洛叉。十度洛叉爲倶胝。十倶胝爲末陀。十末陀爲阿庾多。十阿庾多爲大阿庾多。十大阿庾多爲那庾多。十那庾多爲大那庾多。十大那庾多爲鉢羅那庾多。十鉢羅那庾

多爲大鉢羅那庾多。十大鉢羅那庾多爲矜羯羅。十矜羯羅爲大矜羯羅。十大矜羯羅爲頻跛羅。十頻跛羅爲大頻跛羅。十大頻跛羅爲阿芻婆。十阿芻婆爲大阿芻婆。十大阿芻婆爲毘婆訶。十毘婆訶爲大毘婆訶。十大毘婆訶爲嗢蹭伽。十嗢蹭伽爲大嗢蹭伽。十大嗢蹭伽爲婆喝那。十婆喝那爲大婆喝那。十大婆喝那爲地致婆。十地致婆爲大地致婆。十大地致婆爲醯都。十醯都爲大醯都。十大醯都爲羯臘婆。十羯臘婆爲大羯臘婆。十大羯臘婆爲印達羅。十印達羅爲大印達羅。十大印達羅爲三磨鉢躭。十三磨鉢躭爲大三磨鉢躭。十大三磨鉢躭爲揭底。十揭底爲大揭底。十大揭底爲拈筏羅闍。十拈筏羅闍爲大拈筏羅闍。十大拈筏羅闍爲姥達羅。十姥達羅爲大姥達羅。十大姥達羅爲跋藍。十跋藍爲大跋藍。十大跋藍爲珊若。十珊若爲大珊若。十大珊若爲毘步多。十毘步多爲大毘步多。十大毘步多爲跋邏攙。十跋邏攙爲大跋邏攙。十大跋邏攙爲阿僧祇耶。於此數中忘失餘八。若數大劫至此數中阿僧祇

耶名劫無數。此劫無數復積至三。經中說爲三劫無數。非諸算計不能數知。故得說爲三劫無數。問。何緣菩薩發願長時。精進修行方期佛果。答。無上菩提甚難可得。非多願行無容得成菩提。菩薩要經三劫無數。修大福德智慧資糧。六波羅蜜多。多百千苦行。方證無上正等菩提。是故定應發長時願。問。若餘方便亦得涅槃。何用菩薩久修苦行。答。爲欲利樂一切有情故。求菩提。發長時願。云何令我具大堪能。於苦海瀑流濟諸含識。故捨涅槃道求無上菩提。問。濟他有情於己何益。答。菩薩濟物遂己悲心。故以濟他即爲己益。問。誰信菩薩有如是事。答。有懷潤己無大慈悲。於如是有情此事實難信。無心潤己有大慈悲。於如是有情此事非難信。如有久習無哀愍者雖無益己而樂損他。世所同志。如是菩薩久習慈悲。雖無利己而樂益他。如何不信。又此菩薩由種性異有此志願起。於他苦爲己苦。用他樂爲己樂。不以自苦樂爲己苦樂事。不見異他益而別有

自益。依如是義故。有頌曰。下士勤方便恒求自身樂。中士求滅苦。非樂苦依故。上士恒勤求自苦他安樂。及他苦永滅。以他爲己故。此言上士。謂菩薩也。意說。菩薩觀他如己。故見他樂即爲己樂。（冠註論本第十二右九）

【暉鈔】卷中本五十四左　此論八十中劫爲一積至三無數。大乘即積風災劫六十四箇八十劫爲一積至三無數。若餘方便者。即二乘行爲涅槃方便。三生六十劫四生百劫即得二乘涅槃也。菩薩有同體大悲。他身即己身。他益即是己益也。

【麟記】論本第十二右五　阿僧企耶。祛致反。舊云阿僧祇訛也。累前大劫爲十百千者。即前八十中劫是一大劫。累此爲十爲千等非無數。言顯不可數者。謂阿僧祇耶唐言無數。非不可數名無數也。嗢蹭。上烏没反下七鄧反。婆喝。呼喝反。醯都。虛兮反。拈。乃兼反。姥達。莫古反。珊。音山。邏欃。叉鑒反。忘失餘八者。舊云。論主出世現有五十二。諸傳誦者忘失後八也。非諸算數至三劫無數者。總結答也。問。所以但言三劫無數者何。答。謂釋迦菩薩唯爾許時修行即滿。故但言三不言二四等。言修大福德資糧等者。謂修六波羅蜜多百千苦行等。若餘方便亦得涅槃者。謂有六十劫或三生方便亦得涅槃出離生死。何用爲菩薩經三無數劫修多苦行耶。言下士者。謂異生。勤求自身人天等樂也。非樂苦依者。謂樂是當苦依故。或樂壞苦生。所以求寂滅。即二乘也。下一頌明菩薩。上士勤求自荷衆苦令他有情近得人天

之樂。遠令他苦永滅得涅槃之樂也。

從此第二明劫中人。就中一明佛獨覺。二明輪王出現。三明劫初有王。且初明佛獨覺者。論云。如是已辯劫量差別。諸佛獨覺出現世間。爲劫增時。爲劫減時。頌曰。

減八萬至百　諸佛現世間
獨覺增減時　麟角喩百劫

釋曰。從此洲人壽八萬歲漸減乃至壽極百年。於此中間諸佛出現。問。何緣增位無佛出耶。答。有情樂增難教厭故。問。何緣減百年無佛出耶。答。五濁極增難可化故。言五濁者。一壽濁。二劫濁。三煩惱濁。四見濁。五有情濁。劫減將末。壽等鄙下如滓穢故。說名爲濁。謂壽濁損命也。劫濁損資具。煩惱與見衰損善品也。由煩惱濁耽欲樂故。由其見濁自苦行故。或煩惱濁損在家善。或由見濁損出家善。若有情濁衰損自身身量色力念智勤勇及無病故。多病損無病也。獨覺出現通劫增減。然諸獨覺有二種殊。一者部行。謂有部黨。二者麟角。唯一

出世。如麟一角。部行獨覺。先是聲聞前三果人。後得無學。不由他悟。轉名獨勝。有餘師說。先是異生。曾修聲聞順決擇分。今自悟道。得獨勝名。由本事中說。一山中有五百苦行外仙。有一獼猴。曾與獨覺相近而住。見彼威儀。後時獼猴至外仙所。現先所見獨覺威儀。諸仙觀之。咸生敬慕。須臾皆證獨覺菩提。若先是聖人。不應修苦行。麟角喩者。要百大劫修菩提資糧。然後方成麟角果也。（冠註論本第十二左十二）

【暉鈔】卷中本五十四左　減八萬至百。約釋迦佛說。一切佛皆是滅劫出。若增劫即不出故。劫章頌云。復次第九減劫中。六四二萬時三佛。俱留那含迦葉興。百歲釋迦牟尼出。西域記第六亦同此說。此五濁次第者。先有壽命短。次劫惡名濁。由劫濁起煩惱與見濁。由煩惱等有情身量色力等被損也。後說是凡夫。破前說言。如本事說。既修苦行。修苦行是戒禁取。故知是凡夫。又准下文。聲聞至上忍世第一法。皆不許轉。如何至第三果許轉作獨覺也。麟角者。通增減劫出。謂現身中不稟聖教。唯自悟道。不能調他。唯能自調。名獨覺。正證果時不假聖教。非是因位不假聖教。亦能說法等。以有無礙辯也。

【麟記】論本第十二左五　於此中間諸佛出世者。但從八萬歲。亦不刻定時節。即容減半年等佛出世。下至百年。百年已下無容佛出。准賢劫經第十云。拘留孫佛人壽四萬歲時出世。拘那含佛人壽三萬歲時

出世。迦葉佛二萬歳時出。釋迦佛百歳時出。准西域記。拘留孫佛六萬歳時出。拘那含四萬歳出。餘與經同。又立世經云。二十小刧世界成已。住者八小刧已過。十一小刧未至。第九刧現在未盡。准此今正當第九刧。即賢刧中四佛出世。以俱在此第九刧漸減位中。又前八刧無佛出世。彌勒佛第九刧出。又准彌勒經。今刧是刀兵刧。契經云。於刀兵刧中乃至今出此也。又准此文。後十一刧更有九百九十六佛出世。時恐大促新云。詳其賢刧似是風災刧。於六十四刧中此爲第一刧。總六十四刧爲一賢刧。於中千佛理亦可然。應更詳撿。有情樂增難教厭故者。謂佛本出世。令生厭苦教修出離。既是樂增難可令厭。故不出也。刧濁損資具者。謂刧末時資具衰損也。有情濁者。婆沙云。謂刧初時此贍部洲廣博嚴淨。多諸淳善福德有情。城邑次比人民充滿。至刧末時唯餘萬人。准婆沙衰損有二。一令劣惡。二令數少。劣惡是濁義。數少非濁義。今此明濁。略不論數少。言獨覺者。論云。謂現身中離稟聖教唯自悟道。以能自調不調他故。此有二義得名。一至取果時不稟聖教。二已得果不覺於他。具此二義名爲獨覺。非唯因位不稟聖教也。問。獨覺亦能演說正法得無礙辯。及憶過去所聞諸佛法教等具慈悲等。何緣不樂調他。答。由彼宿習少欣樂勝解無說法希望故。又避攝衆故不爲他宣說正法。怖諠雜故。言本事者。即本事經也。若先是聖人不應修苦行者。謂聖人不爲外仙修苦行故。明是異生轉成獨覺也。麟角喩至資糧者。以麟角獨一出世勝於部行。要長時修方乃證果。

從此第二明輪王出現。論云。輪王出現爲在何時。一問。**幾種。**二問。**幾**

倶三問。何威四問。何相五問。頌曰。

輪王八萬上　金銀銅鐵輪　一二三四洲　逆次獨如佛

他迎自往伏　諍陣勝無害　相不正明圓　故與佛非等

釋曰。初句答初問。次兩句答第二問。次一句答第三問。次兩句答第四問。後兩句答第五問。從此洲人壽無量歲至八萬歲有輪王出。此王由輪旋轉應道。威伏一切名轉輪王。金銀銅鐵輪應別故。謂鐵輪王王一洲界。銅輪王王二洲界。銀輪王王三洲界。金輪王王四洲界。輪王如佛無二倶生。唯一出現。依薩婆多。十方世界唯有一佛。依經部宗。十方世界許十方佛。論有相破。煩而不叙。此四輪王威定諸方亦有差別。謂金輪王。諸小國王各自來迎作如是請。我等國土安穩富樂多諸人衆。唯願天尊親垂教勅。我等皆是天尊翼從。若銀輪王。自往彼土彼方臣伏。若銀輪王至彼國已宣威競德彼方推勝。若鐵輪王亦至彼國現威列陣尅勝便止。一切輪王皆無傷害。令伏得勝已。各安其所居。勸

化令修十善業道。故輪王死定得生天。經說輪王有七種寶。一者輪寶。二者象寶。三者馬寶。四者珠寶。五者女寶。六者主藏臣寶。七者主兵臣寶。如諸輪王非唯七寶與餘王別。亦有三十二大士相與餘王別。問。若爾輪王與佛何別。答。佛大士相處正明圓。王相不然。故有差別。

（冠註論本第十二左十四）

【暉鈔】卷中本五十五右　輪王八萬上者。人壽八萬歲即是劫中之上。以一切劫增不過八萬也。此王由輪旋轉應道者。四輪應王在前引王行。金輪徑四俱盧舍。行千輪具足。若銀輪徑三俱盧舍。七百五十輪。若銅輪徑二俱盧舍。五百輪。若鐵輪徑一俱盧舍。二百五十輪。四種輪王唯生刹帝利家。輪名勝自在蓋。女名淨妙證。藏臣名大典財。兵名離垢眼。象名青山精。馬名行疾風。珠名光藏雲。輪王如佛者。一大千界有一佛出。一四天下一輪王出故。言如佛也。四輪王四輪及威定諸方即別。若行上品十善不傷害即同。問。象等五寶即是有情。彼自業感。如何言輪王能感。答。不是輪王業生他五寶。雖各自業生。以先造互相繫屬業故。俱時生也。銀等三輪王銀輪等既劣。義准七寶及相亦小劣也。婆沙云。施設論說。此洲北邊大海中有輪王道路。廣一由旬。王若未出水所覆蔽。王出時水減路出。底有金砂布地。旃檀香水自然灑潤。優曇鉢華以爲嚴飾。轉輪王四軍巡四洲時共遊此路也。

【麟記】論本第十二右七　言八萬歲時有轉輪王出者。論云。減八萬時有情富樂壽量減損衆惡漸盛。非

大人器故無輪王。施設論中說有四種。契經就勝但說金輪。故契經云。若王生在刹帝利種紹灌頂位。於十五日受齋戒時。沐浴其身受勝齋戒。昇高臺殿臣僚輔翼。東方忽有金輪寶現。其輪千輻具足轂輞。衆相圓滿如巧匠成。舒妙光明來應王所。此王定是金輪王也。餘轉輪王應知亦爾。言鐵輪王王一洲者。即南贍部。餘王如次兼王東西等。有部言十方世界唯有一佛者。彼宗計云。勿薄伽梵功能有礙。唯一世尊普於十方能敎化故。若有一處一佛。於中無敎化能。餘亦應爾。經部計有十方佛者。謂多界中諸佛俱現。便能饒益無量有情。令得增上生及決定勝道故。有部問云。若爾何故一界無二如來俱時出現。答。以無用故。又令如是知一切智尊甚爲難遇。彼所立敎應速修行忽般涅槃。或往餘處便言。我等無救無依。故一界中無二佛現。言安穩富樂多諸人衆者。言無三災也。安穩無疾病。富樂無飢饉。多人無刀兵。輪王七寶者。輪名勝自在蓋。象名靑山精。馬名勇疾風。珠名光藏雲。玉女名淨妙德。藏臣名大典財。兵名離垢眼。並爲王所重故名爲寶。於中象等五寶有情數攝。輪珠等二寶非情數攝。就有情中象馬是畜生。藏神。准知論是夜叉者謂非人也。女及典兵並是人類。佛大士相處正圓明者。處正當處。如千輻輪相正當足下。明者分明。如千輻輪相明顯。圓謂圓滿。如千福等具足。然餘三王相劣金輪。婆沙云。施設論說。贍部洲北邊於大海際。有輪王路廣一由繕那。諸輪王若不出世。水所覆沒無能遊履。若出世時海水周減一由繕那。此路乃現。底布金砂。旃檀香水自然灑潤。輪王每巡此洲時。導從四兵而遊此路。

從此第三明劫初有王。論云。劫初人衆爲有王爲無。頌曰。

劫初如色天　後漸增貪味　由惰貯賊起　爲防雇守田

釋曰。劫初時人皆如色界。諸根無缺。形色端嚴。身帶光明。騰空自在。飲食喜樂。長壽久住。有如是類地味漸生。其味甘美。其香鬱馥。時有一人稟性耽味。齅香取食。餘人隨學競取食之。爾時方名初受段食。資段食故身漸堅重。光明隱沒黑闇便生。日月衆星從茲出現。由漸耽味地味便隱。從斯復有地皮餠生。競耽食之。地餠復隱。爾時復有林藤出現。競耽食故林藤復隱。爾時有非耕種香稻自生。衆共取之以充所食。此食麤故殘穢在身。爲欲蠲除便生二道。因斯遂有男女根生。由二根殊形相亦異。宿習力故便相瞻視。因此遂生非理作意。欲貪鬼魅惑亂身心。失意猖狂行非梵行。人中欲鬼初發此時。爾時諸人隨取香稻無所貯積。後時有人稟性懶惰。長取香稻貯擬後食。餘人隨學漸多停時。由此於稻生我所心。多收無厭。故隨收處無復再生。遂共分田慮防遠盡。於己分田生悋護心。於他分田有懷

侵奪。劫偸過起始於此時。爲欲遮防。共聚評議。僉量衆內一有德人。各以所取六分之一雇令防護。封爲田主。因斯故立刹帝利名。大衆欽承恩流率土故。復名大三末多王。此云共許王也。自後諸王此王爲首。時人或有情厭居家。樂在空閑精修戒行。因斯故得婆羅門名。此云淨志。後時有王。貪恡財物不能均給國土人民。故貧匱人者多行賊盜。王爲禁止行輕重罰。爲殺害業始於此時。時有罪人心怖刑罰。覆藏其罪異想發言。虛誑語生此時爲首。（冠註論本第十二左十六）

【暉鈔】卷中本五十六右　刼初同色界以喜樂爲食也。地味。如希密。希密蜜。卽地皮卷如餅。餢飳卽盛貌。林藤。藤如林。如蒲桃蔓。果如蒲桃也。

【麟記】論本第十二右八　言地味者。謂地中出。猶如融錫。地皮餅生者。地味漸乾成餅名地皮餅。林藤者。謂以藤出成林故名林藤。食林藤已前身無便穢。香稻已去方有便穢。言刹帝利者　此云國主及婆羅門。此時但有二姓也。

從此第三明劫中災。就中一明小三災。二明大三災。且小三災者。論云。於劫減位有小三災。其相云何。頌曰。

業道增壽減、　至十三災現。　刀疾飢如次、　七日月年止。

釋曰。從諸有情起虛誑語。諸惡業道後後轉增。由惡業增故。此洲人壽量漸減、乃至極十。小三災現。故諸災患二法爲本。一耽美食。二性懶惰。此小三災中劫末起。言三災者。一刀兵。二疾疫。三飢饉。十歲時人爲非法貪相續增盛。不平等愛映弊其心。瞋毒增上相見便起猛利害心。隨手所執皆成利刀。互相殺害。又中劫末十歲時人。由具如前諸過失故。非人吐毒疾疫流行。遇輒命終。難可救療。又中劫末十歲時人。亦具如前諸過失故。天龍忿責不降甘雨。由是世間多遇飢饉。既無支濟。多分命終。由飢饉故便有聚集白骨運籌。有二聚集。一人聚集。謂彼時人由極飢羸聚集而死。二種聚集。爲益後人輒其所食置於小篋擬爲種子。白骨亦二。一彼時人命終未久。白骨便現。二彼時人飢饉所逼聚集白骨煎汁飲之。運籌亦二。一由粮少行籌食之。謂一家中從長至幼隨籌至日得少麤食。二謂以籌挑故場蘊得少穀粒。多

用水煎。分共飲之以濟餘命。然有聖教說治彼方。謂若人有能一晝一夜持不殺戒。決定不逢刀兵劫起。若能以一訶黎怛鷄起慇淨心奉施衆僧。決定不逢疾疫劫起。若有能以一摶之食起慇淨心奉施衆僧。決定不逢飢饉災起。刀兵劫起極唯七日。疾疫災起七月七日。飢饉災起七年七月七日。過此便止。人壽漸增。東西二洲有似災起。謂瞋增盛身力羸劣數加飢渴。北洲總無。（冠註論本第十二右十八）

【暉鈔】卷中本五十六右　大乘一中劫末三災與。三十歲時飢饉。害有情殘萬人。至二十歲疾疫。十歲時分刀兵起。一災害有情。皆殘萬人。此論一中劫末即有一災。准婆沙一百一十三說。一災害殘一萬人。住劫初中劫飢饉。次疾疫。後刀兵。以彌勒經言我於此刀兵劫出世。即第九劫也。立世阿毘曇第九說。小三災別劫起也。初火災與。

【麟記】論本第十二左八　小三災皆言十歲時人者。言相續起。有言。一中劫末但有一災。餘災是餘劫中劫起也。然劫章疏說。至三十歲有飢饉災。二十歲有疾疫災。十歲有刀兵災。與此不同。相見起猛利害心者。論云。如今獵師見野禽獸。隨其所執皆成利刀。各逞兇狂互相殘害。由具如前諸過失者。即前耽美食及性嬾惰非法貪等不平等愛諸過失也。訶利怛鷄。昔云呵梨勒訛也。慇淨心者。慇謂慇重。淨謂無染。爲供養也。刀兵極七日者。以害人速故也。飢饉害人遲故。故最長。此三災皆言

七日者。謂起時法爾也。

從此第二明大三災。論云。前說火災焚燒世界。餘災亦爾。如應當知。何者爲餘。今當具辯。頌曰。

三災火水風　上三定爲頂　如次內災等　四無不動故
然彼器非常　情俱生滅故　要七火一水　七水火後風

釋曰。三災火水風者。此大三災。逼有情類。令捨下地。集上天宮。初火災興由七日現。次水災起由雨霖霪。後風災生由風相擊。此三災力。壞器世間。乃至極微亦無餘在。上三定爲頂者。第二靜慮爲火災頂。此下爲火所焚燒故。第三靜慮爲水災頂。此下爲水所浸潤故。第四靜慮爲風災頂。此下爲風所飄散故。如次內災等者。謂初靜慮尋伺爲內災。能燒煩惱心。等外火災故。第二靜慮喜受爲內災。與輕安俱潤身如水。等外水災故。第三靜慮動息爲內災。息卽是風。等外風災故。下三靜慮有如是內災。遭是外災壞。問。何緣不立地亦以爲災耶。

答。以器世間即是地故。但可火等與地相違。不可說言地還違地。問。第四靜慮何爲外災耶。答。頌言四無不動故。彼無外災。離內災故。由佛說彼名不動地故。內外三災所不及故。問。若爾彼地器應是常。答。頌言然彼器非常情俱生滅故。謂彼天處無總地形。但如衆星居處各別。彼天生時天宮隨起。彼天死時天宮隨滅。問。所說三災云何次第。答。頌言要七火一水七水火後風。要先無間起七火災。其次定應一水災起。此後無間復七火災。還有一水災。如是乃至滿七水災。復七火災後風災起。如是總有八七火災。一七水災。一風災起。應知八七火風中間有七水災。次第八七火災後有一風災。計數總有六十四災。問。何緣七火災後有一水災。答。謂順極光淨天壽八大劫故。謂緣水災壞第二禪。既極光天壽八大劫。故第八災方有水災壞第二禪也。問。何緣八七火災後方有一風災。答。謂順遍淨天壽六十四大劫故。謂風災起壞第三禪。既遍淨天壽六十四劫故。第六十四災方是風災

壞第三禪也。故論云。由彼有情所修定因於上漸勝故感身災。其量漸長。由是所居亦漸久住。由此善釋施設足文遍淨天壽六十四劫。

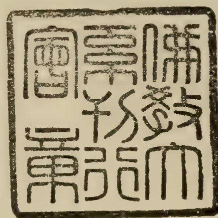
（冠註論本第十二右二十）

【暉鈔】卷中本五十六左　由七日現者。婆沙一百三十三說。先有七日在持雙山下。唯一日出。後世界壞時餘六漸出。有說。一日成七倍熱。有說。七日先藏地下。評家云。由衆生業隨於近處有火災起焚燒世界。水災者三定邊雨熱灰水。有說。水輪湧出。如是說者。由業力盡隨於近處有水災生也。風災有說。四定邊風生。有說。下風輪有猛風生。如是說者。衆生業力盡隨於近處有風災生。此論非婆沙正義也。有餘師說。以第四定有淨居天無外災壞。不可令生無色界故。正理以此文證餘世界無淨居。若有者。應如地獄移就他方。既不言移淨居天。故知餘世界無也。婆沙一百三十四有二說。一說同此論。一說許剎那無常不許隨情生滅。破前說云。應無有情共器業故。初師通云。器未滅時。餘天可有共受用義。故言共感也。第二定極光淨天壽八大劫。初成劫一中劫無有情。以成器故。第八劫空。二十中劫及壞一中劫無有情。言八大劫據大數說。第三定第六十四劫有成住壞空。各二十中劫。於中二十空劫無有情。又壞劫二十中後中劫亦無有情。壞外器故。又就初二十成劫中。初一中劫無有情。以成外器。今言遍淨天壽六十四劫據全說。若定受業不滿六十四劫移就他界中受。若不定業容順後受不定受也。

【麟記】論本第十二右九　由七日現者。婆沙云。有說。七日先隱持雙山下。先有一日出。世界壞時。後六日出便壞世界。有說。一日爲七日。一日成七倍熱。有說。七日藏地下。後漸出現。如是說者。謂諸有情類業增上力令世界成。至劫末時業力盡故。隨於近處有災火生。乃至梵宮皆被焚燒。又劫章云。一日四倍熱。二日現時草木燋。三日現時溝河竭。四五日出阿耨池沽。六日出海水減半。七日可知。次水災者。有說。三定邊雨熱灰水能壞世間。有說。從下水輪涌出。如是說者。至劫末時有情業力盡故。隨於近處有災水生。由彼因緣世界便壞。風災起時。有說。從四定邊風起能壞世界。有說。從下風輪有猛風起。如是說者。諸有情類業力盡故。隨於近處有災風起。生至遍淨天皆悉被壞。此論三災皆非婆沙正義。以不取婆沙爲量故。隨樂而說。第二靜慮喜受爲內災者。正理云。乃至潤身如水故遍身麤重。由此皆除。第四靜慮無災者。一義如疏。准論文云。有說。彼地有淨居天故。彼不遭諸災所壞。由彼不可生無色天。亦復不應更往餘處。正理云。由此證知餘界無淨居天。若餘世界有淨居天者。應如地獄移往他方。寧說不應更往餘處。下三由淨居天威力攝持故無災壞。無容一地處中少不同復有壞不壞別。言宮殿隨滅者。准婆沙有二說。一云。刹那無常故。二說同此論。評家取前說。壽六十四劫者。謂七火一水。總七七火一七水。後七火。方起一風災。故成六十四也。第六十四雖缺二十二劫。謂空劫二十及成壞劫初後二中劫故缺二十二也。據全數說故言六十四。然此天若劫初成時即生。容有具六十四劫。若後生者皆不具也。若有定業應移他界。

俱舍論頌疏　論本第十二終

大正七年九月廿九日印刷
大正七年十月五日發行



【非賣品】

編纂者　佛教大系刊行會

右代表者　佛教大系刊行會　原子廣宣
東京市外巣鴨宮仲二七一一

發行兼印刷者　佛教大系刊行會　原子廣宣
東京市外巣鴨宮仲二七一一

印刷所　佛教大系印刷工場
東京市外巣鴨宮仲二七一一

發行所　佛教大系刊行會
東京市外巣鴨宮仲二七一一
振替東京三六三六一番
電話小石川三〇五三番